Vol.VII. JANUARY. 15TH, 1903. No.1.

THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE.
EDITED BY Y. NAWA.
GIFU, JAPAN.

昆蟲世界

第六拾五號　（第七卷第壹册）

（明治三十六年一月十五日發行）

目次　（禁轉載）

PUBLISHED BY THE NAWA'S ENTOMOLOGICAL LABORATORY IN GIFU, JAPAN.

◎寄贈物件受領公告

一金壹圓也　徳島縣　本生亘三君
一金壹圓也　三重縣　市川新松君
一金壹圓也　岐阜縣　村岡利一君
一鵙の刺餌　イナゴ其他數頭
一野蠶の繭　數個
一大形刺椿象　二頭
一昆蟲に關する新聞切拔等數種
（以上）在宮津　田中芳男君
一淡田燒醬油さし（蝶摸樣付）一個　岐阜縣　宮田孝次郎君
一蟬鳴子（玩具）一個　岐阜縣　永澤甲子君
一打出蝶摸樣紙　一枚　靜岡縣　神村直三郎君
一打出蝶摸樣紙　一帖　岐阜縣　高橋喜之助君
一英國女生徒之理科應用畫（蝶蛾十頭）（印刷物）
一池邊之生物（蝶、蜻蛉）（印刷物）
（以上）石川縣　西川豊次郎君
一輕便硯箱（群蝶摸樣）一個　靜岡縣　太田正耕君
一蝶形帽子掛（金屬製）一個　大坂府　由比昌太郎君
一結鳳蝶　二個　東京市　波江寛君
一肖像（寫眞）　一枚　千葉縣　林壽祐君
一醫事新聞　二册　新潟縣　鵜飼二郎君
一農事試驗場特別報告　第一號
螟蟲及浮塵子に關する調査　一册　愛媛縣　矢野延能君
一島根縣農事試驗場臨時報告　第六號
（二化生螟蟲の圖解）　島根縣　田中房太郎君
一中國民報（昆蟲記事）一葉　岡山縣　松坂佳一郎君

右寄贈相成候に付茲に芳名を掲げて其厚意を謝す

明治三十六年壹月

名和昆蟲研究所

雜誌昆蟲世界愛讀者諸君中、御移動相成候場合には、新舊住處兩樣に御明記の上、必ず御一報奉煩度候、從來御報無之か、若くは舊地御認め無之ため、非常に煩雜を來したる事往々有之に付、爲念御注意申上置候

名和昆蟲研究所會計部

第十五回全國害蟲驅除特別講習會開始

開期｛自今年三月十日 至同月三十日｝三週間以内　定員約四十名

第十五回全國害蟲驅除講習會は今年春後より開催の筈の處、前號雜報に詳記の事情を生じ、來る三月開設の內國勸業博覽會の紀念として特別に開講せんとす。然れ起れるを以て、之が開始を難ずるもの多々之あり隨つて其必成を期し難し。是を以て試みに之を世の同志より問ひしより、幸にして約半數の賛同を得たるを以て斷然茲に三月十日を期して開講式を擧け左の諸項を熟覽の上、二月廿八日限り、入會希望者は其手續を終了せられよ。

一、會期は三月十日より同月三十日に至る三週日以內とす。
二、會費は通常の講習會費と同額を收む。
三、講習學科の終了次第、修學旅行として、一同大坂市へ出張し內國勸業大博覽會に陳列の昆蟲標本、驅除器械、驅除藥劑等苟しくも應用昆蟲學に關係あるものに就きて、親しく現物の說明品評を爲さしめ、各講師は公平の審査眼を以て、更に其優劣得失を示敎す。
四、大阪へ往返の際、天候の如何によりては、比叡山若くは伊吹山に於て、各種の採蟲法を行ふ。
五、本會は長期講習會の豫備を以て准ず。
六、修學旅行費は、各會員の自辨とす。
七、其他は普通講習會の規則に同じ。
八、規則書入用の向は返信用郵劵を添へ至急照會せらるべし。

（附記）本會開會中に、當名和昆蟲研究所創立滿七年の紀念として昆蟲百五十萬供養塔の開眼式を擧行し、又大坂市に於ては、全國害蟲驅除講習修業生の同窓會を開くの計畫あり。

一月十日

名和昆蟲研究所

岐阜市京町　活印

A parasitic moth and the hosts (with parasitic larvae)

セミヤドリガ並に寄生を受けたるヒグラシとベツコウハゴロモ

◎セミノヤドリガ（蟬寄生蛾）の實驗（第一版圖參看及び歐文參照）

名和昆蟲研究所調査主任　名和梅吉

蟬は各地に普通の種なるが、其雄蟲の發聲は、特に斯昆蟲をして名を得せしめたるに似たり。此蟲に關する研究は、十數年前發行の動物學雜誌に、吾が名和先生及び其他二三の記載あり、又動物學彙報等には、松村松年外數氏の記述に係るものあり、余また本誌第一號以下に種別等を連載せし事あれば、大體に於ては最早遺憾なかるべし。唯其體内に寄生する昆蟲に就て記述せしものに至りては、未だ之あるを見ず、是れ茲に實驗せし梗概を讀者に報道する所以なり。

原來寄生蟲と概言すれば、直ちに膜翅目若くは双翅目に屬する蟲類の如くに思惟せらるれども、蟬躰に寄生するものは、全たくそれと異なり、鱗翅目蛾類に屬する一種とす。但膜翅目若くは雙翅目のものは大概他蟲の躰内に棲息し乍ら、養分を取り以て自體の生育を計るを常とすれども、蟬躰に寄生するものは、體外に寄居して養分を取るの差ひあり。此蛾を採集せしは、去る明治二十五年の十月にて、採集地は岐阜市の金華山なりしが、當時は其特性常態を知らざりしより、輕々等閑に附せしも、其後六年を經て明治三十一年の八月上旬に至り、名和先生の養老山下に採蟲せられし時、ヒグラシゼミの躰外に白

粉を出して棲息せる幼蟲の附着するものを獲て、余に之が飼育と調査とを命ぜられしかば、直ちに式の如く之を飼育場に收めて、日夜其擧動に注視せしに、日ならずして造繭するものありて、終に同月下旬一種の蛾に羽化しぬ。爾來、夏季に昆蟲を採集する毎に注意せしに、漸やく被害蟬の不少なる事を知り得たり、而して目下其産地として目すべき地方は滋賀縣、富山縣、鳥取縣及び岐阜縣等とす、恐らくは猶ほ多くの分布地あらんと思はる。

被害の蟬類　是より先、蟬躰に寄生蛾のある事を發見するや、其宿主たる蟬種の異同によりて、托生蟲にも異同ありや否やを調査せしが、從來の經驗上、三蟬種に限り寄生するものなる事を知得せり。即はちヒグラシ　ゼミ(Pomponia japoneusis, Distant.) ミンミン　ゼミ(Pomponia maculaticollis Motch.) 及びアブラ　ゼミ(Graptopsaltria cclorata, Stal.)なり。就中、被害の最多なりしはヒグラシ種にして、ミンミン種之に亞ぎ、アブラ種に到りては、蓋し極めて稀少かりき。而して此類にして、横蟲類ウスバ　ヨコバヒムシ科(Fulgoridae)のベツカフ　ハゴロモ　ヨコバヒ(Ricania japonica, Metich)に寄居するものありと雖ども、未だ同種なるや否やを確認せざるを以て、茲に斷言するに憚かる。

寄生の狀態　幼蟲の蟬躰に寄生するや、胸部の腹面或ひは腹部の背腹面に、分泌せる白色の綿樣物を粘纏して、其自體を被包するものあるが、分泌の量多きより、著るしく白色を呈するに至るを見る、故に寄生を受たる蟬躰は、遠くより認知し得べし。而して宿主は其躰の養分を吸取せらるゝが爲め、漸次衰弱して不活潑を極め、徒手能く捕獲せらるゝに至り、終に全たく絶命す。

幼蟲　脚部は非常に短かく、假足の如きは纔かに吸盤狀をなせる痕跡を留むるのみ。其狀恰かも蛆の如く、十分生育を遂ぐれば、身長二分乃至三分許あり。頭部は最とも小さく、淡黃色にして、他は薄き

赤褐色にて彩とふるゝも、恒に白粉に被はるゝが故に、異色なるやの觀あり。特に老熟に近づくに隨ひ綿樣物を分泌すると益々甚だしきが如し。蓋し自體防御の具にして、假令雨水の滴下する事あるも、毫も浸透するの患ひ無きなり。

繭　老熟せし幼蟲は、蟬躰を去りて蟬の棲息せる樹幹、或ひは其近傍の草葉上に於て營繭す。其色白く、其形楕圓にして多少緊縮しあるも、多量の綿樣物を被覆するを以て、一見膨軟なるやの感あり。其大さ三分乃至三分五厘ありて、羽化の際には、先端の口を破りて出づ。

蛹　大さ二分五厘内外ありて、圓筒狀、淡褐色を呈し、羽化に近づく時には、漸やく黑色に變ず。

成蟲(蛾)　小形にして黑色を呈し、ミノムシノガ(Eumeta minuscula, But.)又はホシハマキムシノガ(Procris nigra, Leech.)等に類似す。未だ邦稱無きを以て、これにセミノヤドリガの新稱を命せり。其大さ(頭部より腹端まで)は二分乃至二分五厘、翅張は、六分乃至七分五厘あり。頭部は小さくして黑色を呈し、腹は比較的大にして暗黑色なり。觸角は短かく八厘内外を算し、總て拾六節より成り、兩出櫛齒狀を爲せり。胸腹兩部は、共に黑色にして肥大に、前後翅また全たく黑色を呈すれども、前翅は少しく濃く、上面には光澤ある瑠璃色の小波紋を印せり。其翅脈は明かに中央脈を有し、且つ前中央脈とも稱すべき一線は、半徑脈の中央より發して第一中央脈の基部に達し、斯くて各半徑枝脈は、基部に於て全たく分離せり。臀脈の第一二は明かなれども、第三は之を缺く。後翅の亞緣脈と半徑脈とは相分離して、中央脈を有せり、而して臀脈は三個を算す。

終りに此種が如何なる科に屬すべきやは、參考書の少なき爲め、判明せざるも、當研究所所藏書に就き調査せし結果に依れば Megaropygidae 科のものゝ如し、尙は後考に俟たんとす。

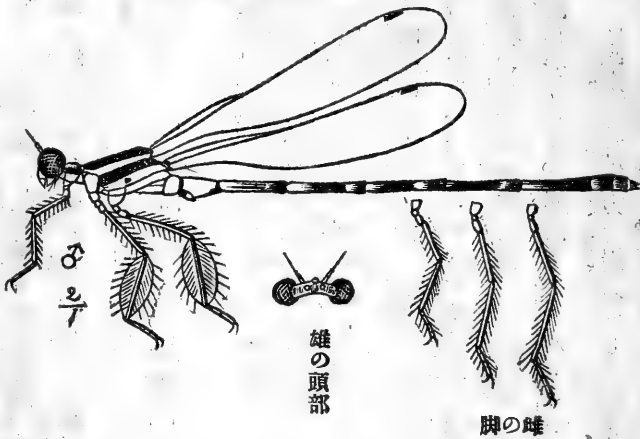
●●●●第一版圖解　(1)はヒグラシゼミの躰に、白色の綿樣物を出して、幼蟲の寄生する狀　(2)は寄居の幼蟲(放大)　(3)は其繭(自然大)　(4)は其蛹(放大)　(5)は成蟲即ちセミノヤドリガ(放大)　(6)は觸角(放大)　(7)前翅の翅脈　(8)は後翅の翅脈　(9)はベッカフハゴロモヨコバヒの躰に蟬と同樣に幼蟲の寄居する狀。

◎グンバイトンバウを記す

理學博士　佐々木忠次郎

軍扇蜻蛉はイト　トンバウの一種ならんと信ず。此は余が明治十五年の頃、始めて東京井ノ頭に於て採集せし種にて、其後絕て之を獲ざりしが、昨年昆蟲採集のため、同地に抵りし時、不圖往時を追想して搜索を加へしに、還た之を獲ることを得き』。其雌雄は躰形畧ぼ同一にして、雌は雄に比して少しく大に躰長一寸二分五厘、翅張七分三厘あり。頭部は短濶にして約一分三厘を算し、其背面は黑きも、後緣は黃色を呈し、頭裏には淡黃を帶べり。複眼は球狀をなして、左右に凸出し、背面は綠褐に、其裏面は淡黃綠色なり。觸鬚は二節より成りて一粗毛を生じ、其色は黑し。胸部は淺黃綠に、背面は黑く、側面には、一條の黑帶を縱走せり。脚は細長くして、其一面は淡黃綠色を呈はすも、他の一面は黑色を以て彩どられ、大腿節と脛節とには、長き黑粗毛の並列す。翅は前後兩翅ともに瑩徹透明に、根基狹くして脈條黑く、緣點は灰褐を帶びて、その形は略ぼ長方となす。腹部は淡黃綠色なるも、背腹の兩線は黑く腹節の接線には淡綠を呈はし、其第九節の裏面には、陰具を存せり』。雄は、頭胸兩部に於ける着色より斑紋に至るまで、略ぼ雌に似たるも、其腹部は前者よりも稍肥大に、且つ黑くして、第一第二及び第三の腹節の側面と、各腹節の接線とには淡黃綠色を帶ぶ、第二腹節の裏面は少しく膨起して、此に一孔を開き、以て精液を貯藏する囊に通ぜり。而して雄の特有に屬するは、其中後の兩脚の構造にあり、即はち中脚と後脚は前脚よりも長く、後脚は亦中脚よりも長きを常とし、特に中後兩脚に於ける脛節の皮膚の

著るしく左右に開張して、自づから軍扇形を成し、其周縁に黒粗毛を並列するは、實に一奇にして、斯種にグンバイトンバウと命名せしも、蓋しこれに本づけるなり。

グンバイ　イトトンバウの圖(雄の二倍)

そも此蜻蛉は、常に池水河邊に飛翔するものにて、遠ざかる時は其形影を知ること難し。性好みて草叢灌木等の間に徘徊し、擧動不活潑に、飛翔極めて緩慢なるも、其翅の透明に、體軀の細長に、且つ着色の綠黑なるは、輙はち他眼に觸るゝこと難ければ、自づから鳥類其他の食蟲動物の侵襲を脱がるゝこと多からん。意ふに、斯種は同族間に於ても、相互認識の不便あるべく、隨ひて雌雄兩性の會合に際し、多少機會を缺く事もやあらん。但その雄の飛翔するや、躰軀の處在判明せざるに關はらず中後兩脚に存する白色軍扇の、周圍の綠色と反映して、一見判別し得べきものあるが故に、雄の飛翔するに際り、雌は能く其白色軍扇を望見みてこれに近づき、以て或作用を完ふするものゝ如し。此に至りて、雄に特有の白軍扇は、好配偶を昵近せしむべき、唯一の目標たるを知るなり。

凡そ昆蟲には、雄の雌を近づくるの器官を具備せるもの、他にも多く其例あり、即はち蟋蟀の長く月前に吟ずるが如き、又蟬蜩の高く樹蔭に鳴くが如きは、ともに常に觸目聽耳する所、假し軍扇蜻蛉の軍扇

記事を艸して、年頭の祝詞に替へ、併せて平素の希望を一言す。國號に緣故ある蜻蛉の生活等に於ける雌雄間の狀態等を研究せば、實に興味ある解說を與ふること多からん。然れば斯學に從事する者にして、尙ほ深く進んで昆蟲界其理を一にし、而して其方法を異にするのみ。其能く美音妙聲を弄して、巧みに自然の作用を行ふに至りては、彼此蓋しを具ふるに同じからざるも、

（注：縦書きのため以下、右から左への順で記す）

◎東北地方の果樹の害蟲たる綿蟲驅防の一策

福岡縣　桑名伊之吉

葡萄の有害蟲なるフィルロキシラ(Phylloxera)が嘗て佛國の葡萄園を蹂躙せし事實は、何人も能く知る所なるが、昆蟲學者は如何なる種類の葡萄が、最とも能くフィルロキシラの害に堪へ得べきかを研究の末遂に米國野生葡萄を發見して、其根部を佛國に輸入し、これに培養せんとする種類を接木するに及びて茲に回復の途を求め得、對岸の米國に於て水を用ゐる場合に、佛國にては舊に依りて葡萄酒を用ゐる事を得しのみか、又シャパン酒釀造の招牌をも繼續して店頭に掲くることを得たりき。蓋しフィルロキシラは葡萄の葉をも害すと雖ども、根部を害すること殘酷なるを以て、從來佛國產葡萄の根部は其被害特に太甚しかりしき。乃はちフィルロキシラは、原と米國產の害蟲にして、佛國に移殖せる新種なるを以て斯くは劇烈の加害力を逞ふせしものと知らる。而して後年米國に於て發見したる野生の葡萄は、永くフィルロキシラの害に遇ひ來りしも、之に堪得るの性を有するが故に、遂に其被害を見ざるに至りしなり佛國にして若し此の野生葡萄を發見せざらんか、恐くは今日の佛國產シャパン酒をば、世界の市場より驅逐せしなるべし。

又ニュジーランドに於ても、去る一千八百七十年に至る間は、綿蟲加害の爲めに、林檎の栽培に好果を得難く、枝朶に根部に皆瘤癭を生じ、或ひは畸形に變じ、啻に樹勢の發育不十分なるのみか、全く枯死するものすら、頻々多かりしを以て、當業者は林檎栽培を全廢し、之をタスマニア産の補給に仰ぐの外なしとまで唱道するに至りぬ。然るにヴヰクトリアの人トーマス、ラング氏は、綿蟲の加害に堪へ得るの樹種あるを發見し、其種類をウィンタメゼテン及びノーサンスパイの二種なりと斷定し、遂に此をニュジーランドに移殖せしに、頗る良効を收めき。蓋し此發見は綿蟲の性質を熟知せしに因けるものにて、綿蟲の冬期間は多く根部に棲息し、枝葉に於けるよりは寧ろ大害を加ふるに反し、此ウィンタメゼテン(Winter majetin)及びノーサンスパイ(Northern spy)種の根部に限り、其寄生無りしより此理を擴げてニュジーランドをして、此健全の砧木に接枝するに各自好む所の種類を以てせしめたるに外ならず。

飜つて我が東北地方に於ける綿蟲蕃殖の狀を視るに、其加害力の猖獗なる、決して前者に讓らぞ、朝野共に多年驅防に努むるも、未だ寸毫の効果を得ざるが如し、是豈に佛國、ニュージーランドの被害と同視すべきものならんや。

依て余は茲に二三の條項を擧げ、以て該蟲驅除豫防上の試驗案に備へんとす、幸ひに卑見を容るゝとを得ば、啻り記者の榮たるに止めず、また斯道研究上の一利たらん歟。

一、新ジーランドに栽培して綿蟲の根部を害せずと云へるウインタメゼテン種及びノーサンスパイ(美麗)種と、他の種類とに於ける綿蟲被害の比較研究をなすべし。

因に記す、ウインタメゼテン種は、未だ本邦の果樹書に見る所無きが如し、果して本邦に此種の栽培なくんば、急に之を他國に求むる可なり。

一、美麗種の根部を撿視して、綿蟲加害の有無を確證すべし、それと同時に他の多くの種類の根部をも撿視すべし。

一、若し本邦に移植の美麗種及びサインタメゼテン種の根部にも、綿蟲の加害無くんば、將來此二種を多植するか、若しくば之れを砧木に供用すべし。

一、接木の際は少しく地表より離れしむべし、然らざれば、接枝より根を下ろすことあり。

（參考）林檎は亦他の樹木の如く、其土地及び氣候によりて、適否の別あるものなることを記臆するを要す。

佛國の葡萄園とニュージーランドの林檎園とは、種類の選擇法によりて、害蟲の被害より獨立せしめたり豈に獨り東北に於てのみ之を綿蟲より獨立せしめ能はさるの理あらんや。要は唯栽培家の熱心にして學理を應用し、兼て精密の研究をなすと否やとにあるのみ、物産開發上當業者の省慮を煩はさん。

◎蠶蛆以外の寄生蛆に就て

農商務省京都蠶業講習所　荒木武雄

明治三十五年十一月五日發行の農業雜誌中、蠶蛆に關して、在米國理學博士河内忠二郎氏の書信を載せてりしが、其文中に左の一節ありき。

荒木氏の述へられたる如く、若し此蠶蛆にして、彼の野蠶並に尺蠖等に寄生するものとせば、小生は何處迄も、寄生蠅の室内に入り來りて、蠶兒の躰皮上に産卵するものと確信致居申候。云々

尙ほ河内氏は蠶蛆に關しては、一度も研究したることなき由をも附記せられたれば、斯かる疑問ありしとて、敢て深く尤むるに足らずと雖ども、世人の或ひは之れを誤解して、河内氏の説に重きを置かずとも限らざる可ければ、下に多少研究したる要點を概説すべし。

佛國印度及び支那等の諸國に於て蠶兒に寄生する蛆は、何れも蠶兒の皮膚上に産卵するものにして、本邦に於ける蠶蛆卽はち(Ugimiya sericariae Rondami)とは別種に屬す。勿論、本邦に於ても、野蠶に寄生するもの丶みは、概むね皮膚上に産卵するを以て、支那の蛆(Tachina ruslica)と殆んど同一種類なるべし。今蠶蛆と野蠶に寄生する蛆との間に於ける著明の相異點を對比すれば、次の如きものあり。

蠶蛆
一、桑葉に産卵す。
二、卵色は黒くして光澤あり。
三、卵は蠶兒の胃中に於て孵化す。
四、神莖球に入る。

野蠶寄生蛆
一、蠶兒の皮膚上に産卵す。
二、卵毛は白くして少しく灰色を帶ぶ。
三、卵は皮膚上に於て孵化す。
四、直に内部に穿入して神莖球に入らず。

余輩の實驗したる所によれば、野蠶は蠶蛆の寄生を受くることあるも、其は極めて稀にして、之れと同時若くば其前後に於て皮膚上に産卵する蛆の寄生を受くること甚だ多し。又た家蠶と雖ども野外に於て放飼するときは、往々皮膚上に産卵したる蛆の寄生を被くることあり。然れども現時本邦に於ては室内に於て飼育する蠶兒即はち家蠶の蛆害と云へば、殆んど全たく蠶蛆の寄生を被けたるものゝみなれば、皮膚上に産卵する蛆に就きては、未だ深く顧慮するに及ばざるが如し。

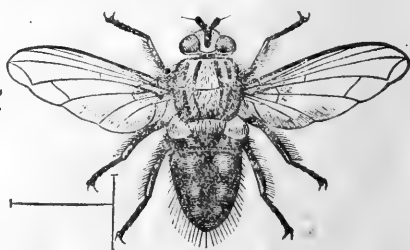
●●●●●●●●

蠶蛆驅除豫防法補遺　なほ筆の序に記すべきは、曩に發表せし蠶蛆驅除豫防法の補遺なり。凡そ此方法は、最とも簡易にして、毎に經費を要すること少なければ、微かに養蠶を營む人と雖も、其實行に苦まざるべしと信ず。

一、土間に於て上簇せしむる時は、上簇後八日目までに採繭を了するを可とす。然れども或る事情の爲めに之を行ふこと能はざるとき、又は土間に於て生繭を保存せざるべからざる場合には、左の方法を行ふに利あり。
(い)土間は常時牢硬にして罅隙なきを要す、斯る處は蛆蟲の潜伏に適せざれば、唯其周圍に小溝を堀置き、後日溝の部分のみを地面下四寸以上發掘して、土壤と共に蠶蛆を燒却すべし。(ろ)右の溝を木若くは漆喰にて造り、其四隅には蛆蟲を陷落せしむべき小孔を設け置かば、後日土を堀出だすに及ばざる可し。

二、第一の法に據らずとも、土間の周圍に蠶蛆の逃逸し能はざる防止の方法、例へば壁土にて堤防樣の築土を施す可し。

三、生繭は二寸の深みある木箱に入るゝを可とすれども、之を製すること能はざる時は、左の方法の一つを擇むべし。
(い)板の周圍に、厚紙を以て高さ二寸の邊緣を造り、此内に生繭を置くべきこと。(ろ)雨戸の内面に生繭を置くべきこと。但罅隙あらば目張をなすべく、又周圍の緣低くして蛆蟲逸散の虞あらば、其部分には紙を上部より地平線に張り置くべきこと。(は)障子の内面に生繭を置くべきこと。但紙は破損せざる樣十分に目張をなすべし、又周圍の緣低きときは、前記雨戸の項と同一の方法に據るべし。

四、桶、盥、箪笥の抽出、長持及び麴蓋等に入置くも可なり。

カヒコノウツバヘの圖

◎蚤の發生と驅防方法

名和昆蟲研究所長　名和靖

蚤は害蟲の一ッには違ひ無いが、農作害蟲の區域を離れて、衛生の害蟲と云ふ處から、原病學で多少論ドてある位ゐで、普通には餘り記載されて無い。斯樣に醫學上から精研されて無いに就ても、昆蟲學上から計りも、細密に調査する必要がある。其上衛生と云ふ點から、各自が注意すべきもので、就中家政の整理には、不少の關係を有し、蚤の多少は、直ちに其人の品格に關はる事もあるから、輕蔑が出來ンのである。それで若し、誰か力を此方面に傾注する研究者があッて、從來、不明の事を說き明す事があらうものなら、斯學上の利益は言れぞもかな、醫學界に將た敎育界に、貢獻する事が極めて多いのである。畢竟、玆に時節不相應の話をするのも、豫防的驅除の必要があるのと、斯學研究者が、田舍八百屋の眞似を廢めて、研究の餘地がある此蚤などの事を、專攻して欲いからの希望に外ならんので、吾々同志の徒が、銘々其長處に從ッて、狹く深く研究した日には、頗ふる拭目すべき事もあらうと思ふ。

偖ノミの事は粗ぼ世人の知らるゝ通り、其生涯の半ばは、動物の體軀に寄生するによッて生活し得る爲めに、半寄生蟲と呼ばれるのであるが、唯その經過を知らん人が多い處から、夏の初めになッて、始めて發生するものと誤解して居るが、世間一般の有樣であるらしい。處が、此蟲は成蟲で年を越し、春の暖氣に伴れて產卵蕃殖するもので、夏になッて俄かに發生するものでは無い。則はち其卵子は、微小乍らも肉眼で見ることが出來る程で、塵芥の中に產附けられる（イ圖）、すると四五日經ッて（ロ）圖の樣な幼蟲となり、此幼蟲は前後二週間計り、種々の不潔物を食ふて生育を遂ぐるのであるが、世人が蚤を誤解するのは、多く此幼蟲を知らん爲めである。幼蟲が十分成長すると、不潔物を纏めて（ハ）圖の如き繭を造り、其內で（ニ）圖のやうな蛹に化する、蛹期は普通二週間位ゐであるから、都合三十四五日目で、始めて成蟲となる譯である。それで假りに春の彼岸頃に、產下された卵子で見ると、四月末か五月初め

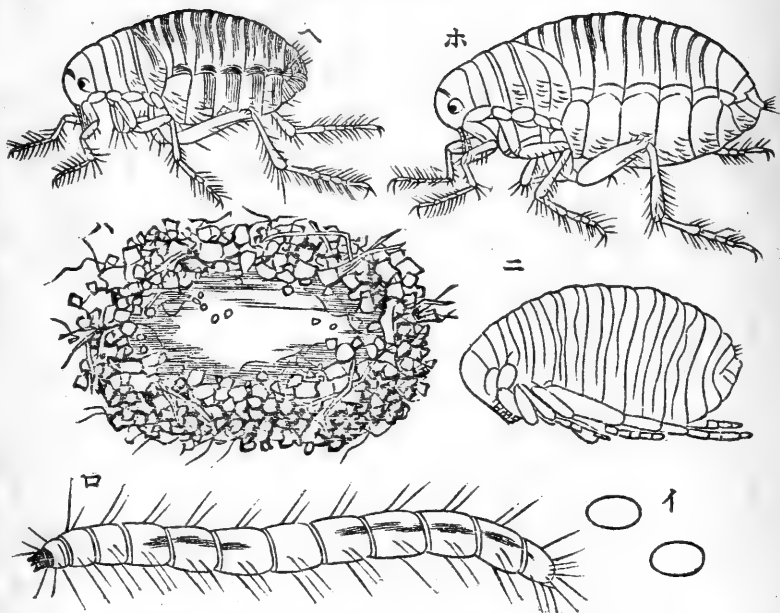
に至らんでは、成蟲即はち蚤とは成れん事が明白で、其化育期間は則はち世人が未發生時期として、一向に注意を加へん大切の蕃殖期である。更に之を適切に言ふと、唯幼老の相違があると云ふまでの事で成蟲となッて跳出すと、幼蟲で潜んで居る違ひはあるが、其蚤たるに於ては何も違ふ所が無い、故に夏に蚤害を欲せざる限りは、早く寒い間に、其巣窟を勦滅して、豫防するが宜いのである。

蛹期を經過して（へ）（ホ）兩圖の樣な姿に變ずるのであるが、其中（へ）は雄蟲で（ホ）は雌蟲である。扨此雌雄間に於ける形の大小の差は實に甚しいもので、古來、蚤の夫婦との譬喩さへある程である、啻り大小の差がある計りのみか、又其色澤も、構造も多少は違ッて居る。但し其動物を刺して生血を吸ることだけは、雌雄兩性ともに同樣で、此點から申せば、彼の蚊子や虻などゝは、餘程違ふて居る。……假令同じ衛生の害蟲とは言ひ乍ら……今更に之を學術的に申せば、ノミとは微翅目の蚤科に屬する昆蟲で、其種の多い中にも、人體に寄生するものは Pulex irritaus L. の學名を有し、卵子は楕圓形で、幼蟲は淡灰白がゝッた地色で、頭が有ッても足が無く、成蟲は口と脚が發達して居る代りに、翅が殆んど退化し盡して、背上微かに鱗狀の片板を殘すのみで、觸角も極めて小さく、全身の構造が唯跳躍と吸收刺螫に適合するやうに出來て居るのであるから、血を吸ふては其體の幾十倍の遠距離に跳ぶ役目を果すのも無理が無い。支那人は古くから蚤を解釋して、人を嚙み跳ぶ蟲であると云ふてあるが、誠に能く其特徵を言顯はしてあると思ふ。そして此昆蟲は、舊式分類法では、双翅類に入れられてあッたが、近年之を特立せしめて、然かも微翅目てふ一目全部を占領せしめたのである。

以上は重に人體に寄生する種類の事であるが、外になほ犬の蚤、鳥の蚤、栗鼠の蚤、蝙蝠の蚤などもあッて、其宿主の違ふに伴れて、形質も多少變ッて居る。昨年、我國へ來遊の英國の名士ロスチャイルド氏の談に依れば、氏が英國で集めた蚤の種類は、都合四十三種で、其中禽鳥のものが六種であるさうな氏はまた我が九州産のものをも集めて持歸ッたが、其種類は未詳である。兎に角に、蚤の種類が意外に多いと云ふ事は、左の新聞所報によるも明確であるが、邦産のものも、恐らくは幾十種を算するであらう。

富豪ロスチャルド氏の子息は、一種の蚤道樂を有して居ッて、多くの蚤を集め、其種類を分けて見た處が、殆んど一萬種に及んださうで、中には隨分奇妙な蚤もあッたが、其の中で最も珍らしいものは、北極地方の白熊の身體から獲た蚤、及び亞弗利加内地の或獸の身體から得た蚤などで、南米の某地に棲む土龍の身體から獲た蚤は、身長二分五厘もあッたさうで、この大きな蚤が、小さい土龍に寄生して居たのは餘程可笑しい。◎蚤を捕へるのは隨分困難であるが、座敷又は蒲團の上で捕るのとは違ッて、野獸の身體から蚤

蚤の發育圖（放大）

ヘ　ホ　ハ　ニ　ロ　イ

を捕ろといふことは、餘程難かしい、若し或る動物を撃ち殺すと、蚤は直ぐに其の身體から逃げ去るから、動物の斃れるや否や、逸早く駈けて行かないと、目的物の蚤は得られぬ、これには非常の熟練と、敏捷の技倆とが要るさうだ。ロ氏の集めた蚤の中で、最も恐ろしいのは、南米地方に居るサーコピラペチウランスといふ蚤で、是は動物の皮膚の底に喰ひ入つて卵を産み落し、遂に其動物を殺すことがある、若しこの蚤が、人間の身體について皮膚に喰ひ入ッた時は、早速其の部分を切斷しなければならぬといふ事だ。○蚤の跳飛する力は、非常なもので、其身長の四十倍を飛ぶさうだ、人間が蚤の割合に飛べば、二百四十尺の高さに飛び上ることが出來る譯だ。○昔し蚤に藝を仕込んで、玩弄品にすることが流行したさうで、何ういふ藝を仕込むかといふに、小さな箱を造ッて蚤に曳かせたり、又身體の大きな雌蚤を馬に見立てゝ、小さな雄蚤を其の上に載せて、騎兵の眞似をさせるなどは、餘程滑稽で面白いさうだ。○全体蚤は怜悧なものだから、根氣よく之に藝を仕込むと、隨分巧なことを演るやうになる。嘗つて紐育の公園で、蚤に箱を曳かせる藝を演じさせて、公衆の觀覽に供したことがあッたが、同市の動物保護會は、蚤に馬具を付けるのを殘酷だと言ッて、大に運動した結果、この興行は遂に差し止められたとは、滑稽な話では無いか。

此から少しく蚤に關する雜說を述べやうなら寺島杏林氏は、蚤は赤色で、肥身小首、六足能く跳ぶ、夏月人家に濕熱の氣より生じて、自から牝牡ありと云ふてあるが、是は確かに、古說を代表した當時の眞理である。又其ノミと云ふ名稱に就き、貝原益軒翁が、蚤は血を飲む蟲であるからノミと稱するのである、と言はれたに引變へ、彼の大石千引大人は

ノミとはトミ(速蟲)から起きたのだと書いてある、是は多分、六書正譌などを本としたのであらう。其他よノミはトビ(飛び)の轉語だとの説と、ノミ(退蟲)との説と二ツあるが、何れにしてもノミムシと云ふて無いのを見ると、血を飲むとの説は如何であらうか。又和名鈔や、新撰字鏡よも、矢張ノミと訓ましてあるのを以て考ふれば、餘程古くから知られて居ッた、衛生害蟲である事が明白だが、惜ひ事よは紀記の神話の條りには見當らん、併し支那の古い史書にはあるから、東洋に分布せられたのは、恐らく上古時代であらう。西洋でも四千年以前から、其特性を知ッて居ッたらしく、舊約全書の中よ「汝ノ杖ヲ伸べ地ノ塵ヲ打テえじぷと全國ニ蚤トナラシメヨト、彼等斯ナセリ、即チあろん杖ヲトリテ手ヲ伸べ地ノ塵ヲ擊ケルニ、蚤トナリテ人ト畜ニツケリ、埃及全國ニ於テ地ノ塵皆蚤トナリヌ、法術士等其秘術ヲモテ、斯行ヒテ蚤ヲ出サントシタリシガ能ハザリキ、蚤ハ人ト畜ニ着ク」とあるのも面白い。尙は佛國でルイ第十四世の時に、皇后陛下の思召で、御前に於て蚤の藝を演じさせた奇談も、右のロ氏の奇談と同じ紙上にあッた、斯る事は我國では未だ聞たことは無いが、山東京傳翁の本の中よは、猫の蚤取と云ふ題があッて、猫一疋三文づゝで蚤取をした者があると云ふ事を、西鶴の遺書から轉載してある、元祿正德の頃には、隨分奇妙な營業者もあッたらしい。又蚤が顯微鏡の檢査をうけたのは、餘程後の事であるが、恐くは司馬江漢氏の寫生が最初で、次が森島中良氏で、次が栗本丹洲、高玄龍の二氏の放大圖であらうと思ふ、是は何れも、衛生の害蟲として研究せられたのである。

終りに蚤の驅防法に就て言ひ度いが、今は細説するの必要が無いと思ふ、何故なれば、除蟲菊の栽培が盛んなる今日であるから。併しそれは驅除法に就て言ふので、豫防法としては矢張昨今の中から、室內を淸潔にすべきである。若し年に三回も四回も、床下から疊の間を掃除し、又屢々衣物などを洗濯しやうものなら、決して害を受くる事が無い、即はち蚤の多い家は不潔を意味するもので、潔癖家の處よは常に發生が極めて少ないのである。人よよると鼠が多いければ蚤が多いと申すが、是い誤りで、然樣に人畜のものが混ぞる氣遣ひは無いから取るに足らぬ。然らば豫防には、何時頃着手するが宜いかと云ふと、先づ各家の煤拂の時を以て第一着とするが宜い、即はち其同族の少ない間に掃滅さして、春の發生を促かさんやうにするが肝要である。其後、春暖開花の頃に一度、土用頃よ一度大掃除をしやうものなら、殆んど苦痛無しに安眠する事が出來て、一家の幸福は此上も無いのだが、何分不潔を不潔と思はん家が多いので、段々と蕃殖をさするのである。此際殊に注意すべきは、掃除をした時の塵芥を、必らず燒捨つるやうよ心懸くる事である。外に種々な驅除法もあるが、餘り煩はしいから、此邊で止めて置かうと思ふが、時機があッたら、復た此續きを申さう。

◎六足蟲彙纂（子の巻）

在岐阜市　長野菊次郎

（一）カイチン質　昆蟲の躰軀の外部を被ふ所のカイチン質（Chitin）は、眞皮細胞の分泌よりて生じたるものにして、蟲躰の脱皮といふことは、此部分を脱ぎ棄つることを謂ふなり。カイチンの名は、オーヂール（Odier）氏よりて名づけられたるが、ラッセーニュ（Lassaigne）氏は之をエントモリン（Entomoline）と呼べり。其化學分子式につきては、種々の説ありて $C_6H_{15}NO_6$ 或ひは $C_{18}H_{15}NO_{12}$ とする人もあれど最近の研究よれば、$C_{15}H_{26}N_2O_{10}$ なりとあり。

（二）仔蟲の食量　ツラウベロット（Trouvelot）氏は、亞米利加天蠶（Telea polyphemus）が、五十六日間に消化する所の食量は、幼蟲の最初の重さの八万六千倍に相當すと言はれぬ。

（三）蛹の色　鳳蝶の蛹は綠色を呈することと通常なれども、稀には褐色のものを見ることあり。箇は周圍の色彩に調和せん爲めの保護色にして、猶は彼の雨蛙が、棲息せる境遇の如何よりて、種々の色を表はすと同一理なり。嘗て或る有名ある英國の博物學者は、某蝶の幼蟲若干を採集して、之を一々異れる色紙にて裏張りしたる數個の箱内よ分ち入れしに、軈て蛹化するに及び、皆其箱の内部の色と、同色を呈したりきとあり。獨り色のみならず、蛹の外部の狀態も、亦已が靜止する周圍の狀態に適應せることと、多くの昆蟲學者の既に認識せる所なり。

（四）螟蛉の筋　ライヲネット（Lyonnet）氏は、或る螟蛉よは、三千九百九十三の筋あることを驗出したり。而して其大部分は内部の機關に屬し、移動を助くる爲には千以上の筋ありとなり。昆蟲の移動力の非常なることと、蓋し其理由あるを知るべし。

（五）蚊の耳　蚊の類は、觸角に生せる無數の細毛によりて、音を聽くことを得べし、故に之を聽毛とは謂ふなり。今雄蚊の觸角を驗すれば、數百の細毛の叢生せるを見るべく、叉調音叉を以て音を發する

時は、此等の毛の烈しく動することをも觀察し得べし。扨又各觸角の基部には、細きカイチン質棒より組成せられたる、最とも精巧の器官ありて、此器には聽毛によりて得たる刺戟を、聽神經によりて腦に報すべき、神經纖維及び神經細胞を分布するも驚くべし。

◎蟲界の漫語（第壹則）

千葉縣印旛郡　齋藤啓二

○花布紋蛾の發音　昆蟲類には發音するもの甚だ多し、其方法に就ては、先に長野氏の記されし如くなるが、此等の種類は直翅類に最も多く、鱗翅類には之なし。勿論鱗翅類にても、其發音を知られたるもの、決して一二にして止まらずと雖ども、多くは皆口吻の摩擦、若くは翅片の振動作用等に因づくものなるべく、未だ悉ごとく此を以て特別の器官即はち發音器を具有するに依れりと謂ふこと能はざるが如し、而して眞に之あるは、唯々一のサラサモン　ガの雄蟲に於て見るのみ。そも、サラサ　モン蛾は燈蛾科に屬する黄色の小蛾にして、雄にありては翅の開張凡そ一寸内外を算し（雌は稍大なり）、前翅上には數條の黑線及び紅色を交へ、恰も花文布の摸樣のそれに似て、外見甚はだ美麗に、其腹部には發音器を具ふ。余は去年七月十三日の夕、昆蟲採集を行へし際、桑樹を巡り乍ら發音する小蛾の飛翔を認めしかば、輙はち之を掬捕せしに、それぞ即はち此蛾にてありき。其音は恰かも天牛の發する音に髣髴として、十間餘の距離に於て猶は聽取するを得るより、余は其音によりて追跡を試み、尙は多くを捕へり蓋し雄に限りて發音器を具へ、雌に之を闕如するを以て考ふれば、他の蟲類のものと同しく、雌雄陶汰の結果たるや亦疑ひなし。其發音器の搆造に就ては、他日更に精報するの期あるべきも、今は唯之を豫報し置くのみ。

○ビロウド　コガネ　ビロウド　コガネは甲翅類金龜子科に屬す、黑剪絨樣の軟毛を以て被はれたる卵形の小甲蟲にして、數多の果樹類又は十字科植物を食害す。此蟲は金龜子科の他のものと同じく、物に驚けば忽ち地上に墜落して、倉惶遁處を求め、土塊塵埃等の間に潜伏するも、之を發き出せば、復た周章狼狽の狀をなすの性を有し、彼の象鼻蟲科のもの丶、飽まで死狀を裝ふとは稍其趣を異にせり。余昨春四月十六日、昆蟲採集の際に、高燥なる臺地の畑中に於て、大麥の葉部の甚だしく食害せられたるを目擊し、就て之を檢するに、何ぞ圖らん此のビロウド　コガネの加害せしものならんとは。從來此蟲の十字科植物を食損することは、常に見聞せし所なりしも、斯くまで大麥に加害せんとは、露思はざりき。

◎食蟲動物の餌食研究に就て

在東都　林　壽祐

食蟲動物の此地珠上に分布して、其自衛の爲めに蟲類を餌食とせることの、直接に間接に、如何ばかり有益なるものなるかは、今爰にいふの要なけん。但同じく食蟲動物といふが中にも、終生蟲類を專食するものと、有脊動物の筋肉、或ひは穀類、草木の葉莖などを混食するものとあり。而して其價値の如何は、歸する所、餌食の如何によるものなれば、食蟲動物は恒に如何なる物を食するかを研究するは、必要の事にして、且つ早晩究めざる可らざる事業とす。古來、農を以て立國の大本なりと固信する我邦に於ては、果して是等の餌食に就きて研究する所ありしか、未だ研究する程に到らずとも、世人は常に動物の餌食に就て留意の傾向ありしか、と借問せば、食蟲動物は言はずもがな、一般の動物に就ても、また留意する所甚だ微々たりきと答へざるを得ざる可し。而して今日に於てすら、唯食蟲鳥類の顯著なるものに保護鳥の名を附して、之が狩獵を禁じ得たるが如しと雖ども、未だ研究足らざるの故を以て、保護の恩惠に漏れたるもの、他に必ずや猶は多からんとは、識者の恒に愁ふる所ならずや。然れども、一般の動物につき研究するは、範圍廣きに過ぎ、且つ其餌食の何たるを穿鑿したればとて、煩勞に値ひする利益の無きものも尠なからざれば、余は特に農業、山林、園藝等に密接の關係ある、食蟲動物のみに就き、其餌食を研究するを以て、目下の緊要務なりと信ず。

邦産食蟲動物中、通常吾人の耳目に觸るゝものは、獸類に蝙蝠、狐、狸、猫、貂、家鼠、地鼠、田鼠、鼹鼠等あり。鳥類には鳴禽、揆撥、猛禽、攀木、渉水、遊水の諸類、何れも是れ食蟲性たらざるは莫く就中、鳴禽類を以て、頗る饒多とすべし。爬蟲類には、石龍子、守居、水龜及び蛇の類あり。兩棲類は種類少けれども、蠑螈、雨蛙、金線蛙、山蛙、土蛙、蟾蜍等、全類を擧げて蟲類を食とす。魚類には蟲類を食するもの尠なく、淡水産の鰻、鯰、鯉、鮒などの、僅かに水蟲及び水中に墜落せる陸蟲を食とするにあるのみ。降ッて無脊椎動物にいたれば、蜘蛛類に絡新婦、嚢蜘蛛、蠨蛸、喜蛛、壁錢、蠅虎あり多足類に蜈蚣、蚰蜒ありて、專ら蟲類を以て餌食とす。昆蟲類は種類多きを以て、食蟲性のものも尠なからず、蟷螂、蜻蜓、蜻蛉、豆娘、シホヤアブ、ムシヒキアブ、ヒラタアブ、斑猫、瓢蟲、ハチカクシサシガメ、アリモドキ、胡蜂、黄蜂、足長蜂の如きを其主なるものとす。而して姫蜂、馬尾蜂、蠮螉、蜾蠃、カモドキバチ、寄生蠅の如きは、幼時に於ては、尺蠖、蠐螬、螟蛉、毛蟲、烏蠋、夜盜蟲、螟蟲

蠅、葉捲蟲、蝗、甲蟲類及び他の蝶蛾類の幼蟲に寄生し、宿主の体肉を食盡するなり。均しく是れ蟲類を食滅すとはいへ、其餌食の種類によりては、却て吾人に有害なることあり、例へば龍蝨は水中の諸蟲を驅除すると共に、池沼等に養ふ幼魚をも食害し、寄生蠅は鳥蠋、毛蟲、夜盗蟲などに寄生するを以て農作物に利益あれども、蠶兒には大害を加ふるが如き是なり。乃はち有益種といひ、有害種と云ひ、皆其益害を比較して命名せしに過ぎざるを知るに足らん。而して其區別を明確ならしめんには、主として其餌食を研究せざるべからず。抑も邦産の食蟲動物は、其類多しといへども、百種左右に止まるべく、之に反して昆蟲類に至りては、既に數萬種の多きものありと云はずや。特に動物の食を索むるや、或は樹間叢裡に於てし、或は竅隙石陰に於てし、或は薄暮深更に於てし、且つその人影を見、跫音を聽くの一刹那、巧みに隱遁潜伏を事とするを以て、之を究明するには多くの時間を費さゞるべからず。而して容易に之を成就せんと欲せば、勢ひ多くの人に頼らざるべからず。本邦もと科學思想に乏し、然はいへ今や幸に頼るべきの人に乏しからぞ、其頼るべきの人とは抑も誰ぞ、曰く本誌の讀者諸氏是なり。思ふに讀者諸氏は常に昆蟲の研究に從事し、又蟲類と植物とは如何なる關係を有するか、食蟲動物は如何に裨益を與ふるかは、業に既に熟知せらるゝ所ならん。是故に余は讀者諸氏と共に、平素食蟲動物の餌食を研究調査し、其調査の結果としては、有益種と有害種とを推斷し、斯くて明かに食蟲動物の價値標準を立てなば、農業山林園藝上の効益實に尠少ならざる可きを信ず、蓋し斯の如きは亦昆蟲類を學ぶ者の、當に進んで自任すべきの責務なる可ければなり。希くは熱誠に富める諸氏の微衷を諒として、此擧に贊同せられんことを切に望む。

◎昆蟲學發展の一方案

岩手縣氣仙郡　鳥羽源藏

近年、本邦に於て、昆蟲學に關する著述、報告、圖書等の公刊せらるゝもの、漸やく其數を加へ、また昆蟲を研究する者の競ふて各地に起れるは、誠に賀すべく慶すべき事ならずや。然はいへ、是等圖書類は、斯學を研鑽せんとする初學者に幾何の利便を與ふるか、或ひは反つて、錯誤を傳ふるものに非ざる無きやを想ふ毎に、萬感の交々胸臆に往來するものなきにあらず。試みに、各著書の昆蟲名稱を比較せよ、其記載の事實を對照せよ、甲書の蟲名は乙書と異なり、丙書の記事は甲乙とまた異なるものあらん

是等のこと獨り著書間に止らず、口舌を以て説明する各講演者の言辭に徴するも、往々同一の感想を抱かしむるものあるは、斯學の發展上、無上の一恨事にあらずとせんや。故にそが異同を辨へ、そが是非を確めんとせば、自から實驗を經るにあらざるよりは、得て昆蟲學の初歩だも正確に悟了する能はざるものあり。斯學の研究も亦難い哉。

凡そ、一昆蟲の生涯を記述するに當り、其形態の大小、色澤の如何、食餌の種類、發生及び發育の狀態生命の長短、動植物との關係、驅防、保護の方案等の如きに至りては、特に、各地諸般の狀況に應對して多少異同を來すは、理數の免る能はざる所なれども、然かも顯著の事實に於て、時に、甲者の誤謬たるを顧慮せずして、世に吹聽せしを、乙者更に之が誤謬を丙に傳へ、丙者誤謬を重ねて之を丁者に傳ふるに至りては、豈に歎ずべきの事ならずや。特に其分布即ち産地等を擧ぐるに當りても、頗る不備の者あるが爲めに、屢次、本邦昆蟲學者は、斯くまでも邦産の昆蟲には暗きかと疑はしむる事無きもあらず則はち他の正確なる記述に於ても、また反つて疑惑心を起すことなきにしもあらざるなり。頃日、某々書を繙きしに、某蟲種は九州にのみ產し、某蟲種は國産にあらず、某蟲種は某地に限りて發生すと、焉んぞ知らん此は既に早く、我が東北地方に於て、屢次採獲せしものならんとは、嗚呼これ本邦昆蟲學の猶は幼稚たることを証するの適例にあらずや。去れば過去の事歷に省み、前途の遼遠を豫想すれば、本邦昆蟲學の爲め、其發達を計るの方法を講究する亦無用にあらざるを知るなり。

凡そ事業の成否の、衆人協力の多少に密着の關係あるは、著明なる事實にして、昆蟲調査に於ても、亦甚はだ然るを見る。今本邦の昆蟲學上、調査を要すること多々あれども、先づ斯學の基礎たるべき、所產の蟲名、分布の狀況は、今猶ほ暗黑の裡にあるにあらずや。假し明白のものありとも、歲時を經るに從ひて異動を生ぜしや論なきなり、而して是等の調査は、實に難事には違はざるも、各地に於ける有志の協心戮力に求めなば、其成効蓋し極めて速かなるものあらん。試みに之が調査方法を概説すれば、斯學の先輩を推して調査主任となし、今年は天牛科、明年は金龜子科、次年には蜻蛉類に移ると云ふが如き順序を以て、毎年一科若くは二、三科を限り、各地有志（調査團體を作るも可ならん）より其採集種の普通品たると、將た珍異たるに論なく、悉ごとくこれを調査本部に寄贈することを實行するにあるのみ。名和昆蟲研究所員何ぞ奮勵一番、各地有志に激して、其欲する所の蟲屬を聚まざる、又何ぞ各科得意の專門家の爲めに、其勞を取らざる。否各專門家は何ぞ自から進んで調査の任に當り、又その要望の研究

材料を求めざる。意ふに本誌の讀者は、全國に洽ねく、常に多くは昆蟲の採集を實行するの士人たらん。而して此等の同志が種々の辛苦に依りて收蒐せる標品を寄贈するは、一時、空しく掌裡の璧を失ふの感あらん、然れど是等の標品集合して、遂に斯學に光明を發射するの要素たることを思はば、聊さか斯學に熱誠ある諸氏の心を慰むるに足るものあらん。況んや一旦失ひしと想定せる標品の他日妍美精彩の圖版となるものあらば、後學の啓發誘掖に資すべきの便多々之あるべきをや。余は常に、講學の材料を蒐集寄贈するは、眞に學界の美事善行と思惟するを以て、愚案固より妙趣なきも、全國同好の一致協力に於て、始めて本邦昆蟲學に一段の進歩を來すべしと信じ、敢て所思を陳辯すること爾り。

編者云ふ。鳥羽氏の意見は時事に的切なるを以て、當昆蟲研究所また一臂の勞を取るを辭せざる可し。但氏は第一回全國昆蟲展覽會開設の旨趣書を讀み、又昨年三月發行の昆蟲世界「昆蟲分布の調査に就て」てふ雜報を閲覽せられたらんには、よも斯く當所を責むるに急なること能はざるべし。又鳥羽氏にして眞に分布調査材料の集成に意あらば、何ぞ奮つて自から其摸範を世人に示さゞる、是れ編者が氏に對つて、特に辯じ且つ望まざる可からざる所以なり。

◎蟻垤の搆成に就て

千葉縣長生郡　高橋徵一

蟻は膜翅目に屬する昆蟲にして、其軀體微小なりと雖ども、其性や敏慧に、能く智力と勇氣とを兼備し忍耐勉強の力飽まで强く、如何なる困難に遇ふとも決して屈撓することなし。而して此蟲の最とも奇とすべきは、團隊の爲には、身を犧牲に供するまでの公義心に富み、一巢の中に社會生活を營むに當りてや、規律嚴正にして能く女王の統御に服從し、又時としては他の蟻群との間に戰鬪を開始し、敵壘を屠りては其糧食を奪掠し、且つ敵兵の降るものをば收め捕へて、永く俘虜として之を使役し、或ひは牧畜を營み、時には一種植物の栽培收納を爲す等、其靈智眞に驚くべきものあり。而して其棲居即はち蟻巢には、微小なるものと、巨大なるものとの別ありて、之を地中若くは朽木の空隙等、常に外敵を避け雪雨の浸透せざる好適地を擇びて建設し、容易に其内部を窺ひ知ることを得ざらしむ。而して其巨大なるものは高さ數尺に達す、世に之れを蟻垤といふ稀に見る所のものたり。凡そ蟻群の之を造るや、先づ建築の材料として朽木小枝木葉等を拾集し、微細に嚙み砕き後層々累積せしむるものにて、其色多くは暗黑、外觀如何にも粗雜なるが如きも、其内部の構造に至りては頗ぶる精巧を極め、王室あり、育兒室あ

り、貯藏室あり、區劃整然、配置亦能く各々其の處を得るに似たり、豈に感ずべく又驚かざる可からずや。然れば其種類習性より生殖變態等を子細に觀察したらんには、進歩勤勉の度、或ひは反つて人類の鑑戒に供すべきもの無きにしもあらざる可し。往時、天保年中、我が上總國東金町喜多村氏の倉庫内に稀世の大蟻垤あることを發見せしに、四方喧傳、來觀するもの多かりしが、爾來數十年の星霜を經過し處々漸やく缺損を生じたるも、原形今猶ほ依然として、同家に保存せらるゝといふ。余頃日篋底を探りて偶々該圖説一葉を獲たり、蓋し弘化中の梓行にかゝるもの、頗る珍異に屬するを以て左にこれを轉寫し、汎く江湖同好の劉覽に供せんとす。

上總國山邊郡東金町喜多村甚左衛門倉中蟻垤堂眞圖
（高サ五尺餘寸圍三尺ヨリ尺八九寸ニ至ル）

怪力亂神を語らずとは聖門の敎、世の諺に蟻の堂といふ事あやしきとのみ思ひつるに、今したしく是を見る、至微のものといへども性識の靈なる、人こゝろを感動せしむる者あり、遂に圖し其事實をしるし、世の誠となすに至る。此喜多村氏の家は、東金町を邊田方村といひしむかしより、近き頃まで火災をまぬがるゝ事數度、人こゝをもつて奇異とす、天の祐る所積善の餘慶なるものか、幾とせ數蟻の倉中に集り、かゝる圖のごとき莫大の業を仕出せるも、ともに珍らしく、世にも又稀なるべし、是奇妙の事にあらずして、至微の昆蟲といへども、火難の愁なき性識の靈、自然感通するなるべし、數萬の蟻こゝろを一致に和し、日夜勉勵し怠らず、志を達するに至る者は、思ひの天へ通ずるともいふべし、古誌曰、鶴鳴二子垤一（注曰蟻塲謂二之抵一亦謂二之垤一以レ至者以二蟻之微一而能爲レ垤用二其至一也云々）予も今つくづく見て感愴にたへず。夫人は萬物の靈として三才の一にありて、五尺の体を具し五常の理をうけながら、己が私情に迷ひ天の靈をくらまし、怠惰に流れ行て、歸らぬ年月を空數送り、木石とゝもに枯果るは、此蟻のために笑るゝ人の、人にして豈蟻にはづべけんや、見よ古人の文字を制するに、一字一點意をつくさゞるなし、虫篇に義の字を用ゆるもむべなり、百歩の遠きにはしり、一往一返行列を亂さず、一食を得て衆蟻力を合せて是をともにす、已が居る河を察して居るものは智なり、衆と力を合せて爭はず、ともに勉て怠らざるものは義なり、年を經て守りうしなはず、正きをもつて道をゆづり爭はぬものは仁なり、人々此

を深く思ひ、一此蟻垤にならひ、一致一和道を守り、怠らず功を積まば、いかなる大業も亦なし得べし。古記曰、蛾子時術之（蛾子者蟲之微者時銜土而成大垤以喩學者由積學而成大道也）此にみづからも興起して圖し、世に傳ふ事とはなりぬ。

東峯舍直諒圖併記　喜多村氏　梓行

編者云ふ。蟻垤の大なるものの本邦に少なきは、本文にあるが如し。聞く、山梨縣甲斐國舊巨摩郡内には、其高さ四尺若くは其以上のもの數處にありて、中にも某寺に現存するものは特に大なりと記して以て讀者の參考とす。

◎蜻蛉の保護を如何にすべきか

靜岡縣磐田郡　神村直三郎

蜻蛉は昆蟲類中、普通の種類にして、最とも人目に觸れ易く、且つ常に兒童の玩弄となること多きものなり、これ一には其体格大きく、種類多く、且つ發生の夥多なるにもよるべけれど、又一には其發現期の春初より秋末まで殆んど絕えず現はれて晝間飛翔することの多きにより、斯くは人目に觸るゝならんと思はる。「蜻蛉釣り今日はどこまで行たやら」とは、加賀の千代女が其愛子を失へる時の吟なりと聞けるが、此吟を咏出せしめしを以て見るも、兒童が蜻蛉を釣りて弄ぶことの古今相同じきを知るあり。隨ひて此種に關しては俗說、歌謠、俳句、繪畫等も多く、扨は國號をさへ蜻蛉洲と誇稱するなど、極めて淺からぬ關係を有するなりけり。

然らば蜻蛉は如何ばかり効益を與ふるものなるか、是れ應用昆蟲學上注意すべき問題なるべし、然は云へ、常に農作物の害蟲を除くこと夥しきを認むるを以て、直ちに益蟲と稱することを憚らざるなり。今其一二を云へば、晝間に多く飛揚するイチモジ　ハナセヽリ　テフ及びモン　シロテフを捕食すると數を知らぬ程にて、蜻蛉の憩ふ竹木の枝の下に注目すれば、鱗翅類の翅片鱗粉の散亂せるを見ることを得ん「蜻蛉やとまり直して元の枝」とは、古くより人口に膾炙したる名句なれども、此とまり直す蜻蛉の蟲を捕りては復た舊の枝にとまることは、此句を味ふ者は勿論、恐くは作者自身にも悟り得ざりしか。然れは「蜻蛉や蟲を捕へて元の枝」と改作せば實際に適へりと思ふなり。又カトリ　トンボなる一種あり、これに就き數年前或人の蜻蛉はなべて蚊を捕ふるものあるに、此種に限りてカトリの名を冠らせたるは訝かしからずやといへるに、余は殊によく蚊を捕食するが故に、此名を負はせたるなるべしと答へしてとありしが、其後伊吹山採集の際、其山麓の上野村に宿りて夕景に小徑を散歩せしに、此村には殊に蚊

の多かるに、亦これを食ふ此蜻蛉の發生も非常に多くて、四隣の景物の判明せざる薄暮に至るも、猶は屋後、樹下さては溪流のほとり抔に往來して、頻りに蚊族を捕食ふ勇壯の光景を目擊して、始めて其名稱の至當なることを確めぬ。斯かる形跡より推せば、蜻蛉は亦一の衛生上の益蟲とも云ふを得べきか。世にギンヤンマを指して蚊の鷹と云へるも、蓋し蚊を捕食するに輕捷敏速なるの狀を形容するなる可し。

扨邦產の種類はと問はゞ、七拾餘種ありとの事なるが、其中吾が遠江には、三拾種以上もあるべけれど今名稱の明かなるもののみを擧ぐれば。

○ギンヤンマ ○コヤマトンボ ○アチトンボ ○ウチハトンボ ○コシホツトンボ ○カトリトンボ ○シホヤトンボ ○シホカラトンボ ○オホシホカラトンボ ○ヤブトンボ ○ハラビロトンボ ○トラフトンボ ○サナヘトンボ ○オホサナヘモドキ ○ヒメヤマトンボ ○ミヤマトンボ ○シヤウヾトンボ ○ウスバキトンボ ○ノシメトンボ ○ナツアカチ ○コシアキトンボ ○テフトンボ ○カハトンボ ○ハグロトンボ ○アチイトトンボ ○キイトトンボ ○モノサシトンボ

この外尙數種は確かに產することを知る、其種類亦少なしと謂ふ可からず、啻に其種類の少なからざるのみならず、其發生の數頗ぶる夥多にして、幼蟲の河川、池溝、水田等に棲めるもの、到る處に多し。斯く多種多生の蜻蛉の田圃に、庭上に、樹陰に、叢間に、其閃めける露眼と、其鋭どき堅翅を開きて、春花の綻ぶるに先ちて出で、秋霜の紅を染むるに後れて尙其同族の飛翔するを見ても、其腹を肥さんが爲めには夥多の害蟲の斃さるゝものあるを悟るに難からず。而して次に起るべきは、これが保護の法に關する問題にあらん。

蜻蛉の保護法としては、先づ小兒殊に學校生徒の之を捕殺し及び玩弄することを禁じなば可ならむと說くものあり、又稻田の處々に竹を立てゝ、これに憩ひしむるを良策とすと說けるもあり、然かも今日は同じく竹を立てんとならば、枝の多き竹を撰ぶべしと迄に進めり、是れ祝すべきの現象とやいはまし。然し乍ら、蜻蛉の保護はこれにて盡くせりと謂ふ可からず、蓋しその捕殺を禁ずるは、根本的保護の一方なれども、奏効の如何は之を知るに由なきを以て、單に有効法とすべきのみ、又竹を立つるは、蜻蛉を呼集め及び憩はしむるの法としては良好なるべけれど、去りとて發生を多からしむるにもあらず、又斃死を少なからしむるにもあらざる可ければなり。依て次に其發生を增し、及び死滅を防止するの手段として、一二の卑見を言はんとす。

余が居に瀕せる用水路は、涸水の際には魚族箱中に捕はる、此時蜻蛉の幼蟲は、或は畦畔に濁水と共に放出せられ、或は泥土と共に田上に擲棄せられて、空しく鮒轍を學ぶもの數を知らず。因て余は常に兒童を役使してこれを拾集せしめ、或は水器に養ひ、或は池水に放ちて其生を全ふせしめたるに、後には兒童ならざるも、此幼蟲を見れば余が許に持來る者すらあるに至れり、これ死滅の幾分を防ぐの一例となすべし。蜻蛉の產卵は、必ず水面に於てするものにて、其水に乏しき時には、能く庭上の雨潦にも產卵す、故に雨潦の盡くると共に、其卵子は孵化力を失ふか、又は壓殺せられて、生殖の目的を遂ぐること能はざるの虞あり、而して此難より救出して、可成多く產卵せしめ、且可成多く發生せしめんとせば、稻田の各處に可成多數の小池を設け、年中少許の水を貯る時は、蜻蛉は喜んでこれに產卵すべきを以て、幼蟲は水の下に越年し、軈て翌年には羽化すべし。人あり、これ云ふべくして行ふべからざるの論なり、譬へば一段步か一町步毎に一坪の池としても、稻作に莫大の減損を見んと。これ一理なきにあらざるも、池底には、慈姑若くは蓮を植ゑ置くべく、又一年一二回これを浚ふ際には鰻鯰等を捕ふるの利あれば、稻の利益に增さるとも劣ることはあらざるべし、現に各地方にて宅邊の田中に數坪の水溜りを設け、これに杜若、川骨等を植ゑ、又鯉を養ふ事は、常に田舍に見る所にあらずや、畢竟これを一步進めて益蟲を保護せんとの希望に出づるのみ。而して其得喪に至りては、余は一に之を大方識者の垂教に斷定せんとす。

◎島根縣下の兩害蟲調査報告

島根縣農事試驗場　田中房太郎

此調査書は第八回島根縣郡農事試驗場技手並びに農事巡廻教師協議會の決議に因づきて、試驗場及び吉田、八田の兩分場の調査に、各郡農會に於て調査せる所を加へたるものに係り、事は明治三十四年に屬す。斯學研究資料の一助に供せらるゝことを得ば幸甚なり。(編者云ふ、原書は三十餘枚にわたる精細の報告なるも、先に一たび之を全載せし事あれば、今はたゞ其要處の一部を抄出するに止めり)。

○螟蟲の部　螟蟲と地形、田畑、乾濕、肥瘠、寒暖並に稻種、栽培との關係は左の如し。

本場　山谷谿間よりは平原に多く、殊に家屋の近傍、道路の兩側、籔陰等に多し。肥地に多く、瘠地に少なし。寒地に少く、暖地に多きが如し。稈の大さ大なるものに多く、稈の大さ小なるものに少なし即ち龜治種の如きものに多く、小腹種の如き種類に少なし。有機質肥料を多量に施し、所謂大出來のものに多く、密植と疎植とは關係なきが如し。されど苗代に於ては厚播よりは、薄播に産卵多きが如し。

入東　肥沃地に稍や多き傾向あるが如し。稻莖柔軟肥大なるものに多く、强剛細小なる種類に少く、早植多肥のものに多きが如し。

大原　道路高地畑に接近したる場所は、牛馬の糞、其他肥料分の雨水の爲めに流れ來り、稻莖の軟弱肥太に生育するを以て、螟蛾好んで産卵す。田畑兩者中には田に多しとす。乾濕に就てハ濕田殊に多き傾きあり。又肥瘠寒暖に就ては、肥沃にして暖地に多し。稻の種類に就ては確實なる調査を得ずと雖も軟弱肥大性の稻種に寄生多きと疑ひなし。

仁多　地形は概して平坦地又は向陽の傾斜地、風の透通惡しき温暖地に發生多し。田畑共に同様に蝕害す。濕地は乾地に比して多少多きが如し。一般に肥地は瘠地に比して寄生多し。土地の寒暖に就ては一般に向陽平地の温暖なる部分は、谿谷山間の寒冷なる部分に比し發生被害共に多し。稻種との關係は明ならず。栽培との關係は概して窒素肥料の多かりしところ、及早植のものは被害多きを見る。

飯石　地形に就ては家屋堤防道路其他山麓等を以て遮られ、空氣の流通惡しき所謂風籠の地に多かりしを見る。土地の乾濕に關係少なきやの感あり。肥沃なる地に多くして瘠地並に寒地に少なし、現に本郡の如き奥飯石には殆んど其隻影だもなかりしも、口飯石即ち掛合吉田以北には多かりき。稻種に就て云へば極小筋なるもの即ち大關種の如きは被害少なかりしも、彼の害蟲に抵抗する力强勢なりと唱ふる龜治種の如き亦被害少なからず。栽培上の關係よりすれば、第一化生にありては、早植に最も多くして晩植に少く、第二化期にありては、全く之に反して、晩植せしものに多く、早植せしものに少なし。施肥との關係上に就ては、人糞尿又は草肥等、速効肥料を多量に施せしもの所謂柔出果をなせしものに多し。

簸川　土地の乾濕肥瘠乾地に少なく、濕地に多し。肥地に多く瘠地に少なし。陰地等の寒地に多く、暖地に少なし。糯、小天狗、彦四郎種に少なし。　粗植に多くして密植に少なく、大苗に多くして小苗に少なし。

安濃　道路、堤防等の傍ふに割合に被害多し。　陸稻の栽培少なきを以て明言する能はざるも、田畑に

差なきが如し。乾地よりも濕地に多きが如し。肥瘠に至りては未だ調査十分ならず。暖地は寒地より發生加害總て早し。中稻に最も多きが如し。稿稈の軟弱なるものは多き傾あり、福山稻の如きは螟蟲に罹り易し。苗代に於て苗の軟弱なるもの、葉色の濃厚なるもの、薄蒔なるもの等は螟蟲多し。又他の田區より獨り早く移植せるものには被害多し。

邇摩　空氣の流通惡く、殊に南北に山を扣ひたる溪間に多かりし。土地の乾濕の關係は別に異なるを認めず。土地肥沃にして窒素質多量に、稻の濃綠なるには被害多く、瘠薄にして稻の生育不十分なるに其害少なかりし。海岸部と山間部は、氣候異なるを以て、海岸部は發生早く、山間部は遲るゝも、第二化期に至りては大差なし。莖稈軟弱なる種類は、强硬なるものより被害多し。當試驗場に於ては福山種最も害多し。

邑智　總て人家の附近又は空氣不流通の土地に多く、乾田より濕田に多し。稻栽培法との關係は、軟弱なる稻に發生多し。早稻よりも晚稻に多し。

那賀　窒素肥料を多量に施したる稻、及稻莖の太き種類に被害多きが如し。

去田分塲　土地肥沃にして且莖の大なる稻を栽培せしものは、其被害多きが如し。殊に綠苗を植ゑたるものに甚だし。

八田分塲　畑に接續する田に多き傾向あり、特に濕田に多し。肥沃の田地殊に人家の屋汁の流入する處には、其然らざる處よりも常に多し。土地の寒暖に對しては差異なきが如し。稻種により被害の多少左の如し。

（被害少なき稻種）宗五郎、竹成撰、大國、五石代、奈良、關取。

（被害多き稻種）皇國、豐前種、五ケ防主、知己、龜治、彌重、室撰、晚源藏。

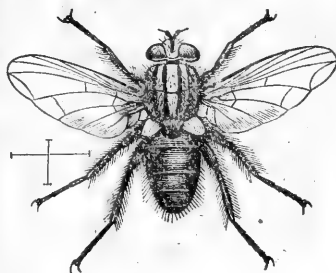
（未完）

◎土佐産の蟲報（第八）

高知縣土佐郡　武内護文

此目中蝱蠅及び牛蠅の二科は、他日縣下畜産の興る時を待て實驗を期す、又微小種にして所屬の不明なるものは、疑ひの儘近似の科中に出す。

○双翅類、家蠅科　（一）ダイコンバヘ。（二）ムギノハムクリバヘ。（三）ナノハムクリバヘ。（四）イヘバヘ。（五）コウシバヘ。（六）カマキリバヘ。（七）クロバヘ。（八）キンバヘ。（九）マダラ

バヘ。（十）シマヒバヘ。（十一）クツワバヘ。（十二）カヒコノウシバヘ。（十三）地蠶の寄生蠅　二種（十四）天蛾蠋の寄生蠅。（十五）稻螽の寄生蠅。（十六）稻の苞蟲の寄生蠅。（十七）大螟蟲の寄生蠅。（十八）金毛蟲の寄生蠅。（十九）蔬菜螟蛉の寄生蠅。（二十）薑螟蟲の寄生蠅。（二十一）稻の螟蛉の寄生蠅。（二十二）稜黒横蚑蟲の寄生蠅。右の中、（一）は十數年前、大根に蛆害の狀ある事を檢出して、成蟲ニ羽化せしめたるヿあり、蓋し此種たるヿを疑はず。（二）は往々麥類に加害するを見る、又自然生の禾本科植物にも發生す。（三）は菜葉を蝕害す、到處に多少之を見る。（四）は最とも多く發生す。（五）は（四）に似て少しく短小に、色稍黄味を帶び、牛馬の血液を吸ふものならん。（六）は夏秋の頃多く稻田に飛來す、即ち褐色横蚑蟲類の蕃殖を極むる時ニして、よく横蚑蟲の幼蟲を捕食す。（七）（八）は肉臭の在る處には常に之を產す。（九）は往々樹間に於て之を獲べし。（十）（十一）は圃場に於て多く之を見る。（十二）は全縣下の養蠶家に、必ず多少の害を加ふ、一年二化するもの少なからず。（十三）以下は皆主蟲の飼育中に獲たるもの。（十三）の一種は体長約そ五分、短大にして腹部に赤褐の二大斑を有す、他の一種は体長約そ三分、形態は普通寄生蠅に見る所ニ同じ、共に各種の夜盜蟲より出づ。（十四）は蕷薯の害蠋を剖解の時に獲。（十五）は短翅稻螽の成蟲を切割して偶然之を獲たるもの、共に躰長三分許、普通蠅蛆の形態あるも、未だ其成蟲を得ず。（十六）はイチモジ　ハナセヽリテフの加害地には、必ず多少これニ伴ふ。（十七）（十八）（十九）は共に其色灰黑、躰長二分五厘許、寄生蠅ニ普通見る所の形態を具ふ、而して此三者は、殆んど種別を明にすることを得ず。（二十）は形狀、彩色、亦大差あるを見ずと雖ども、躰長一分七八厘あり。（二十一）は躰長（二十）と大差なきも、色帶褐淡灰黄なり。（二十二）ニ至りては、其形態大ニ上出諸種と異なり、体長一分二厘許、腹部は七節上方細長、頭幅は胸部より大ニ、翅下に鱗片を缺く、形僞蜂蠅ニ似たり。而して複眼は頭上に於て極めて相近接し、頭頂の後方には三個の單眼ありて、觸角は三節、刺毛側より出づ、秋期ツマグロ　ヨコバヒの成蟲を切割して、偶然其寄生を見たり、幼蟲は紡錐狀を呈す。其後夥多の主躰を剖開したるに、十中六七は、之が寄居することを實驗せり。

（ハマクリムシの寄生蠅）

○喰蚜虻科

（一）ハナ　アブ。（二）モモブト　ハナアブ。（三）クロ　ハナアブ。（四）ヒラタ　アブ。（五）

クロ　ヒラタアブ。(六)ヒメ　ヒラタアブ。此六種は、最とも普通とす。就中、(四)の幼蟲は圃場に多し。
○長吻虻科　(一)ビロウド　ツリアブ。(二)ツリ　アブの一種。此中(一)は早春花上に多く。(二)は秋季稀に之を見る、躰形(一)に似て形稍大ニ、翅は透明、躰毛は淡灰黃にして、全身に他の色彩を飾らず。
○長脚蠅科　アシナガ　バヘの一種。是は躰長二分許、躰色金綠にして、春季ニ紫雲英田に多し。
○黃蠅科　此科またシギ　バヘ科とも云ふ。然れども未だ之を斷言するニ憚かるものあるを以て、代ふるに左の寄生種を以てせんとす。
ナヽホシ　テンタウムシ蛹の寄生蠅　躰長七厘許、胸部大に膨脹し、腹部小さく頭部更に小なり。翅は長く透明に、脚は頗ぶる長くして腿節は太く、後脛節端に長針毛あり。全躰黃褐にして腹部ニは黑斑を印し、雌(未だ雄を認めず)の尾端は長く突出す。複眼は半球形にして靑黑色を呈し。三個の小單眼褐あり、而して頭胸脚等に生ずる夥多の剛毛は黑色を呈す。去三十四年十月七日生瓢蟲の蛹に寄生せるを目擊し、採り來りて再び成蟲を得たるものにして、現時はアルコールに浸藏せり。

◎岐阜縣郡上郡の蝶報

岐阜縣郡上郡上保村　增田健藏

昨年本務の餘暇を以て、本郡內ニて採集し得たる蝶類を左ニ報道す。此他なほ蝶蛾より甲蟲等二三百種あるも、何分名稱不明のため詳記すること難し。又玆ニ報ずる所の名稱は、宮島氏の命名を多く採用せしが故に、多少普通名と相違の點もあるなる可し、讀者これを諒とせよ。

○鳳蝶科　●アゲハ　ノ　テフ　●キ　アゲハ　テフ　●ミヤマ　カラス　アゲハテフ　●クロ　アゲハノテフ　●ヤマ　ジョラウ　●ウスバ　シロテフ

○粉蝶科　●スヂグロ　テフ　●モン　キテフ　●ヤマ　キテフ　●キ　テフ　●ツマグロ　キテフ　●モン　シロテフ

○蛺蝶科　●サカサ　ハチモンジ　テフ　●キ　タテハ　テフ　●ヒヲドシ　テフ　●ルリ　タテハ　テフ　●アカ　タテハテフ　●ヒメ　アカタテハテフ　●ウラギン　ヘウモン　テフ　●オホ　ウラギン　ヘウモンテフ　●リヨクシヨク　ヘウモンテフ　●クモガタ　ヘウモンテフ　●メスグロ　ヘウモンテフ　●コ　ミスヂテフ　●ミスヂ　テフ　●オホ　ミスヂテフ　●イチモンジ　テフ　●コ　ムラサキ　テフ　●ムラサキ　テフ

○環紋蝶科　●ヒメ　ジヤノメテフ　●ヒカゲ　テフ　●ヒメ　キマダラテフ　●キマダラテフ　モドキ　●ジヤノメ　テフ　●キマダラ　テフ　●ヒメ　ウラナミ　ジヤノメテフ

○天狗蝶科　●テング テフ
○小灰蝶科　●ヤマト シヅミ テフ　●ベニ シヅミテフ　●クロ シヅミテフ　●ウラギン シヅミテフ　●ウラナミ シヅミテフ　●ツバメ シヅミテフ　●トラフ シヅミテフ
○弄花蝶科　●ダイミヤウ ハナセヽリ テフ　●ギン イチモンジ セヽリテフ　●ホソバ子 セヽリテフ　●コ チヤバ子 セヽリテフ　●オホ チヤバ子 セヽリテフ　●イチモジ セヽリテフ

◎昆蟲月報（第七信）

第八回全國害蟲驅除講習修業生　埼玉縣　櫻井倚畊

九月　此月は氣候稍順に近かりしも、なほ曇雨にて冷凉に過ぎ、蟲類の現はるゝもの至つて尠なかりき。一日始めてクサヒバリ、ウマオヒムシの鳴聲を聽く、且つ之を捕ふ。二日農學校室内にてスヾメガを獲たり。此日第二化のカノコガを見る。三日ミスヂテフ、ヒメアカタテハ、シヾミテフの二種を捕ふ。四日第二化ヒメジヤノメテフを獲。五日ケウジヨラウ及びヒメゴマダラテフを獲。八日スヂキリムシ卵塊の寄生蜂出づ。九日ハンノキケムシ卵の寄生蜂出づ。十日クハノエダシヤクトリガを厨房の白壁上にて捕ふ、此日亦キンケムシ蛾を獲たり。此上旬に多かりしはクサヒバリ、ウマオヒムシ、カノコガ、セスヂスヾメ、エビガラスヾメ、キマダラテフ、ヒカゲテフ、獨角仙、コムラサキテフ、クハシヤクトリ蛾等なりしが、ウスイロコジヤノメテフは殊に多かりき。十一日クハケムシ孵化す。十六日始めてカマキリの成蟲を見る。十八日第二化のイチモジセヽリテフ及びハナセヽリテフ甚だ多く羽化せるを見る。十九日アキアカトンバウ（方言）盛んに出つ。二十日スヂグロテフを獲たり。此中旬にはヤママユノガ、ハナセヽリの二種アキアカチ、クサヒバリ多く、ウスイロコジヤノメ、エンマコホロギ、コホロギ、クツハムシまた甚だ多く、ナラノタマバチの蟲癭、エゴノハナブシ裂開して成蟲出で、楢のイガヤドリバチの毬膨れ出でたりき。二十一日ホタルガを獲。二十三日ヒメクツハムシ（？）盛んに啼きはじむ。此下旬は雨又は暴風來り、冷氣頓に加はりし等にて、眼に映ずる蟲類も少なく、多きものとてはコホロギ、アキアカチ、ハナセヽリの二種とキテフ等にて、其他は全く鳴聲を止むると共に形體をも隱しき。

◎昆蟲に關する葉書通信（第二十九報）

（一五七）誘蛾燈の俗曲（宮城縣仙臺市、採蟲陳八）　螟蟲を點火誘殺するは、害蟲驅防の一方たるに違

はざるも、其の月夜に効なく、將た風雨の夜に効無きを思はず、強ゐて之を執行せしめんとするは、そも何の心ぞや。陳人屢次之を實地に試みて、其困難の尋常にあらざることを感じ、乃はち誘蛾燈は俗曲を作れり。古人は春宵一刻の價ひを、千金と評定せしかども、點火法一夜の痛苦は、殆んど勘算し得べからぞ。此俗曲は、彼の有名なる「秋の夜」の替歌なれば、本調子、二上りの節にて謠ふも可あるべし但未定稿なれば、一二穩かならぬ廉はあるなる可し、讀者の雌黄を加へられんことを望むになん。

春の夜は、可愛ものさは、さんざんな、さま見ぬ人の言葉かも。つけて(點火)待てども、來ぬ蟲の、音するものは、風ばかり。降くる雨の、來つ、往きつ。わしや濕らされて、居るわいな。

(一五八)切蛆蚊姥の發生(三重縣多氣郡、阪口幸之助)　今年は蕓薹田にキリウジ　カガンボの幼蟲の越冬せしもの多く、根部を損傷して枯死せしめたるも尠なからず。然るに餌に飢へたる鴉群の、此幼蟲を喙食するものあるが爲めに、幸ひにして天然の驅除行はるゝを見るも、農家は今より注意して、被害を防ぐこそ宜けれ、又田間の鴉群は、漫りに之を追はざることそ宜けれ。(一月四日附)

(一五九)全國の講習修業生同窓會に就て(兵庫縣有馬郡、堂本俊治郎)　來る三月を以て特別講習會を開設し、大阪市への修學旅行を機として、全國害蟲驅除講習修業生の同窓會を開かんとは、機關雜誌「昆蟲世界」の報ずる所なるが、その發起者の何れにあるを問はず、之が開催を決行せられんことを切望す吾が同志も亦大に之を望むなる可し。幸ひに余は阪地の近隣に居住するを以て、微力の續かん限り之が奔走の勞に服せんとす、吾が同志の千難万障を排して、續々來會あらんことを冀ふ。

(一六〇)昆蟲の解體標本製作を望む(新潟縣岩船郡、佐藤榮)　醫學教授に用ゐる人體標本より、植物學用の標本に至るまで、各々解體標本のあるに引換へ、昆蟲には未だ其製作無きが如し、固より躰軀の構造簡易に、また實物を剖解するの便あるが爲め、之を製作するの要無きが如しと雖とも、研究上の瑕瑾たるを失はざる可し。故に余は之を紙製又は塑製として、翅脈、口器、腹節、脚節等の常に容易に見得べからざる諸部は勿論、また腹尾、聽器、音器等の特殊の器官をも詳知せしめ、なほ進んでは複眼の集成組織などをも、蟲種別として世人に示さば、斯學普及上、有力の一方法たるべしと信ぜり。畢竟、今日の圖書のみにては、多く利する所なければ、先づ斯かる種類のものを、確實に製作して低價に販賣しなば、諸學校各農會の利益は一方ならざるべし。就ては名和昆蟲研究所の率先之を製作して、取敢へ

ず昆蟲學講習會説明用に充てられんことを望みて已まず。

●●●（一六一）元旦祝賀會餘興の福引（岐阜縣海津郡、大橋慧逸）　本年一月一日に祝賀會を郡下海西村に催ふしたるに、來集者は村内の有力者及び敎職一同ありしが、其餘興の福引中には「岐阜縣の昆蟲學者」との題もありて、當選者には繩八筋を與へたり。餘りの事なれば、葉書集の材料にもと報道す。

●●●（一六二）昆蟲唱歌編作の必要（京都市丸太橋詰、坊城子平生）　京都市蛸薬師通堺町角の龜屋某方にては、錦雞間祗候田中芳男翁自作の菓子唱歌を印行して、之を四方に配布せしに嘖々好評を博しぬ。昆蟲學の普及せざる今日、何すれぞ昆蟲唱歌を編述して、斯學思想を涵養せざる。余は名和昆蟲研究所が「昆蟲イロハ骨牌」制定の後は、厚賞を懸けて讀者より「昆蟲唱歌」をも募集せられんことを祈る。

●●●（一六三）害蟲驅除の効果（栃木縣鹽谷郡、高柳源多郎）　余は本年苗代田を短册形となし、前後七回驅防法を行へたるに、其効果は地方稀有の豐作を來せり、即ち今年は當地方一般に凶作にて、三分乃至五分作の間なるが、余が自作のものは、幸ひに六分八厘の收穫を得たり。これを見るも害蟲驅防の忽にすべからざる事は明白なり、而して其詳細は、別紙十二年間收穫米平均一覽表によりて之を証し得べし。（表は省畧に附す）

●●●（一六四）地蜂の動作（山口縣吉敷郡、池田健熊）　昨秋當地龜山公園に遊びし時、一頭の地蜂の地上二尺許の低處に往返するものあるを見しかば、之に注視せしに、目前約一間の小孔ある處に止まれり、余は興味を感じ乍ら、尚は其動作を注視せしに、頻りに孔土を搔拂ふに努むるもの、如かりしが、其際特に驚きしは、蜂が前肢の尖端を巧みに内側に曲げて、工事を繼續する一事なりき。

問答

◎草蜻蛉に就て質問（甲號）

秋田縣平鹿郡横手町　福岡安之助

余やクサカゲロフの習性經過を知らんと欲すること久し、願くは優曇華より成蟲に至る間の變化を詳

記して、之を誌上に示されたし、世にまた同感の者多からんと信ず。

◎猫頭横蟲等に就て質問　（乙號）

愛知縣知多郡八幡村　伊藤孫太郎

本書封入の柑橘に寄生せる五種の昆蟲に就き、別記の件々を垂教ありたし、又驅除劑、有効器具の價額及び其販賣所等をも併せて明示せよ。

◉栗毛蟲の蛹繭に就て質問　（丙號）

島根縣八束郡　齋藤儀一郎

舊臘の昆蟲世界問答欄に、天蠶の蛹繭に關する質疑應答ありしが、栗毛蟲の繭即はちスカシダハラの外皮は、全たく用途の無きものか、當縣下には多く之を産するを以て、敢て利用の途を問ふ。

右二問に對する答

名和昆蟲研究所内　永澤小兵衛

（甲號）　有益蟲クサカゲロフの習性經過に就ては、既に「薔薇之一株、昆蟲世界」に其大體を説明し雜誌「昆蟲世界」紙上また屢次之を記載したるのみならず、一昨年發行の「大日本農會報」にも收錄せしものあれば、特に之を事新らしく詳述するの要無かる可し。故にたゞ補遺の事項のみを答へんに。（壹）此蟲は卵即はち優曇華より、成蟲に至る一生涯には、約一ケ月の日子を要す。（二）岐阜縣冬季昆蟲展覽會出品物採集の結果に依れば、此は全く成蟲の狀態を以て、越年するものなるが如し。（三）本邦に於て、始めて優曇華の蟲卵たる事を確認せしは、顯微鏡舶來の後にて、其新説の公けにせられしは今より百年以前に在り。（四）優曇華に寄居する一種微少の寄生蜂あれば、優曇華の黒變を以て、直ちに孵化期に近づけりとのみ思惟する時は、迷誤を來たすことあらん。（五）卵數は一定せざるも、常に多數を占むるものは、三四十粒の間にあるが如し。成蟲の體形また多少の相違無きにあらず。（六）成蟲時代にも食を求むとの説は、稍信を措くに足れるが如きも、未た確實ならず。（七）成蟲は生殖作用を終ふる時は、直ちに絶命す、夏夕蚊帳外に死屍あることあるは、多く此類とす。

（乙號）　質問の（第一）は、有吻目横蟲類、横蚑蟲科に屬するミミヅク　ヨコバヒムシの一種にて、常にミミヅク　モドキと稱するもの丶幼蟲なり。此は植物の葉液を吸取し、又其卵を樹皮下に產下するものなるを以て、有害蟲種たるや論なし。但し未だ確實簡易の驅防法あることを耳にせざるに反して、また著大の加害あることをも聞かざれば、恐らくは蕃殖力に缺くる所あり、且つ恒に天敵の制裁を受くる事多きものならんか、常に暖地には比較上多く棲息する種にて、幼蟲の狀態を以て越冬し、春暖老熟の

後は、羽化生殖を行ふものとす。』（第二）より（第四）に至るまでは、何れも柑橘に普通なる貝殼蟲の寄生を被けし葉莖にて、其中（第二）は雌蟲の貝殼、（第四）は雄蟲の結繭とす。（第五）は貝殼蟲發生の餘響として、其分泌液に黴菌の蕃殖せしものに係る、俗にこれを煤病と云ふ、當昆蟲研究所にて發行の「貝殼蟲圖説」には、其驅防方法より此等の關係をも記述し置けり、就て一讀の勞を取られなば、疑問盡ごとく氷釋するの日あらんか。扨之が驅除法としては、冬季間に灰汁等にて被害樹を洗掃し、及び石油乳劑等を塗抹するを適當とすれども、若し患部微小なる時には、刷子又は棕櫚製の束子にて之を潰殺するも可なり。併し乍ら、如何に驅除に勉むるとも、枝條の選定を行なひ、又之が敵蟲を蕃殖せしむるに非れば奏効極めて少なかる可し、而して煤病に至りては、先づ貝殼蟲即はち其根元を絶たば、自づから減滅に歸すべきを以て、敢て深く憂ふるに足らず。其驅除用品販賣に關する事項は、未聞に屬し、茲に明答することを能はず。

（丙號）　前號の本誌紙上に掲載の天蠶の質問は、其旨意漠然として捕捉し能はざりしが爲めに、單だそれに對する要領を應答せしに過ぎざりしが、聞く所に依れば、スカシダハラの外皮は、近年之を紡績絲の原料に供用すと云へり。頃者、物産家田中芳男氏、また此事の確實なる旨を物語られき。就て考ふるに、弘く此を蒐收したらんには、害物利用の途無きにあらずと雖ども、その幼蟲時代に天蠶絲を製するの利益に比して、更に多くの利得ありや否やは、宜しく調査すべき問題ならん。問者も稍ぼ知らるゝならんが、本邦に於て毎歳淸國より輸入の天蠶絲原價は、實に十萬圓以上の巨額なるを以て、邦内に於て天蠶を良好の釣縮に製し得る限りは、之を利用するを以て專要とすべきなり。

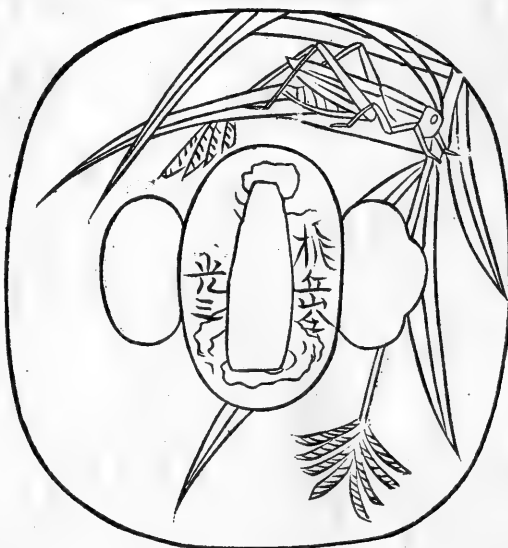
因に云ふ。質問書中には、往々其要點を示さずして、理解するに苦しましむるものと、言文一致躰に書綴りて、原稿整理上、意外の煩ひを感ぜしむるものとあり、是等は止むことを得ず、一時掲載を見合し置けり。又必らず實物を添附せざる可からざる質問にも、更に其事無かりしを以て、今なほ應答し難きものも少なからざれば、今後は成るべく一件毎に實物を添へられたし。但し從來落手の物は、途中既に毀損を生じ、鑒別の用に供し難かりしもの其過半に居れば、包裝を堅固にし、之を第四種郵便物「博物標本」として、托郵然るべし、毎三十目二錢の郵稅に過ぎざれば、自他の利便此上なけん。若し其添附の實物の返還を望まるゝ時は、其旨を記入し、且つ相當郵劵をも封入ありたし。

雜報

◉明治三十六年の昆蟲學界

昨年は昆蟲學にとりて、忘却し得可からざる事項尠少ならざりしも、何分俗塵の擾々たるに妨げられて、其發展の度も低かりしが、今年は內國大博覽會の刺戟によりて、多少礪砥の功を擧ぐるに至らんか。然は云へ功名利祿に趨せて、培根固柢の念に薄く、其技術を誇稱するに專らにして、其究明を懈怠するに破るゝ者、今や滔々その風をなすが故に、斯學研究者にして、絕大の抱負と、確乎たる自信を保持するに非ざるよりは、或ひは濁流に陷いり、或ひは岐路に迷ふの厄災無きにあらざる可し。吾儕は必ずしも、同志者に對つて、其祖業を固守すべきの利を勸奬せず、又其多藝に通ずるに切なる情をも妨げず、然かも、各その本領を把持して特色を發揮するに力め、研究の多岐に涉らんよりは、寧ろ一能に優秀ならんことを禱る。更にまた私交の上には、假し吳越の思ひある者ありとも、斯學促進の爲めには、滿胸の城府を撤し、光風霽月の心を以て、彼我の便益を圖られんことを希へり。看よ蟲稱の區々として、其辨別に苦しむものの多きは何のためぞ、華言巧說に欺瞞せられて、中途斯學を拋棄する者あるは、何のためぞ、斯學者間に、未だ卓絕の研究を遂げし者なきは、何のためぞ、邦產普通蟲種の概數すら、今なほ判明せざるは、何のため

工業應用昆蟲畫報の壹（鍔）

（宮城縣永澤小兵衛氏寄贈）

ず、既刊の蟲書に錯誤の充滿するは、何のためぞ、剩さへ國力を左右する農產物の損害を、速に救濟し能はざるは、何のためぞ、要は斯學研究者の意思の牢强ならざるに在らんのみ。由來、本邦は人心の一致和協を以て他に誇る、而して其意氣の投合せざること此くの如く、其寬懷宏量に乏しきこと亦彼が如し、斯學の振興せざる、蓋し以なきに非ざるなり。惟ふに悃意戮力、此弊を洗掃するの重任に當る者はたゞ吾が愛讀者の外に求むべからず、冀くば益々其心膽を健剛にし、其胸襟を濶大にし、居常斯學の忠奴良僕を以て自任し、長く邦家のために其本分を致されんことを、謹んで告ぐ。

◉去年の昆蟲學界

去年吾が蟲學界に發現せし事實の最も多かる中に、一月に岐阜縣昆蟲會が、全縣下に於て冬季に採集せる昆蟲の展覽會を開設し、及び中川久知氏が、岐阜に來りて鋸蜂を專攻したる、三月より各府縣に於て、競ふて小學兒童に採蟲せしめたる、四月に英國人ロスチャイルド氏が、昆蟲採集の爲めに來遊したる、五月に農商務省所屬の吏員を、全國の害蟲發生地に分派し、及び此前後に前年の蟲害地地租を特免しゝる、六月に渡瀨庄三郎氏が、通俗躰の「螢の話」を公行し、桑名伊之吉氏が、米國を辭して歸國し及び高千穗宣麿氏が、九州昆蟲學研究所を開きたる、七月に名和昆蟲研究所が「全國昆蟲展覽會出品目錄」を公行し、及び農商務省農事試驗場昆蟲部處務規程を改正したる、八月に佐々木忠次郎氏が、カムストック氏の「昆蟲分類法」を譯述したる、十月に農商務總務長官が、各府縣に害蟲驅防上の注意を與へ及び名和梅吉氏が、斯學實況視察のために渡米したる、十一月に松村松年氏が、留學滿期を以て獨逸より歸國したる等は、主要の事件なるべく、又各府縣に於て斯學の講習會を開き及び岐阜、靜岡、兵庫、岩手諸縣の郡部に於て、昆蟲展覽會を開設せしは、蟲學思想涵養の一助たるを失はざるべし。唯、出版圖書の比較的良著に乏しかりしは、誰しも遺憾とせし所にて、往々拙惡觀るに堪へざる圖版及び謬脫甚だしき通俗書をさへ、公行せし者ありき。

◉工業應用昆蟲畫報（第一報）

本號より逐次三四點づゝ連載せんとするは、工業に應用せられたる昆蟲の畫報なり。是は敢て摸範を示すとにはあらねど、古來邦產の工業品には如何に廣く昆蟲を應用せしか、又如何に描出せられしかを了知し、而後舊式の短處は之を補足し、古製の長處は之を採擇しなば、將來發達せしめざる可からざる產業の上に、必ずや多くの稗益あらんかと信ぜしによれり。去れば、其收むる所の品物も多方面に涉り、決して局部に止むることをせざるべし、即はち今回の二千年來一國の元氣、國民の魂魄と見做されたる刀劍の鍔類を示すに始まり、漸次他の工藝品、美術品に推及ば

んとするなり。唯遺憾なるは、其所藏主名及び由來を知り難きものあると、今や往々原品寄贈者の芳名を明記し難きものあるの一事とす。讀者にして世に示すべき昆蟲應用品の寫生圖、若くは其縮寫圖を寄せらるゝことを得ば、斯學の啓發に一層補益するものあらんなり。

◉千蟲萬豸錄（第一）

最近發行の諸報告より、昆蟲界の事項を抄出すること下の如し。

工業應用昆蟲畫報の二　（鍔）

（宮城縣永澤小兵衞氏寄贈）

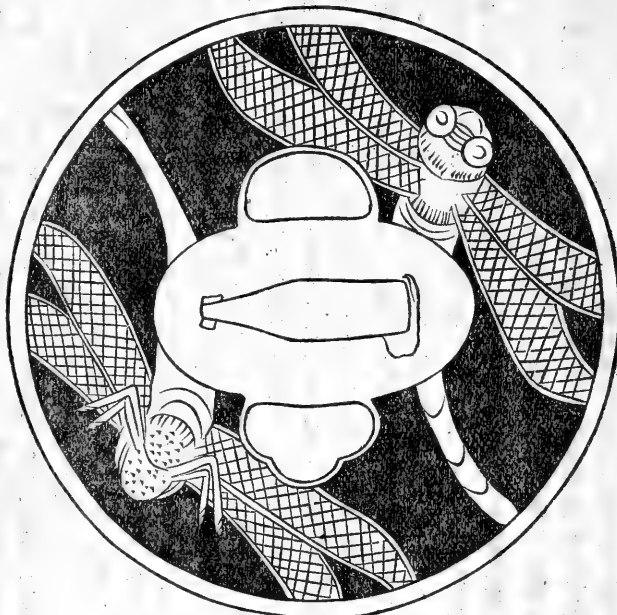
（說明　此品は全部鐵製にて、毫も他の裝飾無し）

○新年早々、世界各國に於ける蟲料理、即はち食用昆蟲の事を記載せしは、日本新聞なるが、甲州の稻蝗の昆布卷、巴里の玉蟲のオムレツ、南米土人の强壯劑たる蟻の調理法をも、收錄して漏す所無し。

○徳島縣にては、縣内に發生の害蟲の性狀及び其驅防方法を、郡市の勸業主任、町村吏員、警察官吏に知らしめんとて、來二月上旬には一週間の昆蟲講話會を、各郡市に開く豫定なるを以て目下調査中。

○山口縣豊浦郡にては、舊冬（十月下旬）に至るも、横蚊蟲の發生夥多なりしより、郡令を發して之が驅除に從事せしむ。其後何等聞く所無きも、冬季に至るまで、斯く蕃殖するは有繫暖地の名に負かず。

○山梨縣中巨摩郡内に、キリウジガガンボ發生して麥苗を慘害す、爲めに驅除法として、一反歩に食鹽四十斤乃至百六十斤の溶液撒布を唱ふ。無海國に鹽水の驅除法を行はんよりは、先づ其禍根を絕て。

○富山縣新川郡下には、昨年蟲害にて收獲皆無の部落あり、特別免租案を國會に提出せんとせしに、解散に遭ふて。失望の極に達せりと。不確實の希望を抱くを捨て、永世救護を受けざる方法を講ぜよ。

○靜岡縣下にて「土地乃黑いのに白穗が見ゐろ、あれは氣の毒被害稻」のカツポレ唄を作りし者あり。葢し二十年前、練木喜三氏が「沖

の青いのに、白穗が見ゆる、あれは髓蟲被害稻」と謳ひしと同趣向。

○奈良縣の既往五年間の蟲害驅防費縣負擔額は、卅年に僅々五六六圓弱、次年に六九五圓弱、次年に七四五圓強、次年に一二九九圓弱卅四年には增して、千五百九十圓八拾錢。何れの府縣も同樣ならん。

○栃木縣は麻作を以て有名の地なるが、上下都賀、河內三郡は、夜盜蟲の害多きを以て、種々驅防策を講じ、昨秋の暴風雨後には天然驅除の効果を驗せしに、氣候の激變には何等關係する所なかりきと。

○兵庫縣淡路國に、三化生螟驅防の嚴令を發布せしに、津名郡全躰反抗の態度を取り、頑として應ぜず、爲めに客冬に至り縣令を改正す。斯る事に苦情を鳴らす郡民は曲、苦情を言はしむる當局者は非。

○大阪府中河內郡東六鄕村の某、先に害蟲驅除豫防委員を命ぜられ、其職に從事中、多量の驅除油を買入れたる如く裝ふて、金額の大半を懷にしたる舊惡露現す。誘蛾燈は人をも罪惡に誘ふ害物と見ゆ。

○新潟縣立農事試驗場は、昆蟲試驗成績書を、第五回內國勸業博覽會の參考品として出陳せんため、今や草案編纂に忙はしと。一昨年來、此縣が頻々昆蟲思想の進步を表白するに至りしこそ賴母しけれ。

○德島縣農會は、舊臘開きたる総會に於て、螟蟲驅防に小學校兒童利用の件を縣廳に建議す。其文中には、那賀勝浦の兩郡の一部は、本年既に之を實行して、其効果著るしきものあり云々の一節も見ゆ。

○山形縣飽海郡昆蟲研究會より、內國勸業博覽會に出品の昆蟲標本は、害蟲標本十一函百二十三種、益蟲標本五函八十五種、計二百八種にして、其頭數約二千を超ゆ。定めて寒地特產の蟲種も多からん。

○福井縣廳は、縣內の害蟲驅防功勞者十三名を撰拔して、之に功勞褒狀を與ふ。此は是、衆人に率先精勵し及び他を勸奬して、大に其効驗を顯はしめたるの篤志者のみなりと。縣治上また緊要の好方便。

◉**特別講習會の開會期**　來る三月內國勸業大博覽會の開設を機とし、且つ當昆蟲研究所創立滿七年の紀念として、全國害蟲驅除特別講習會開會の計畫ある由は、前號にも既記を經たるが如し。其後開會賛同の旨を報じ越せる者、殆んど募集員の半數に達したるを以て、快よく其希望を納れ、來る三月十日より之を當昆蟲研究所內にて開くことゝなせり。但し修業式執行日は未定なるも、三週間內に結了の豫定なれば、遲くも三月廿九日頃には閉會を告ぐる事ならん。又修學旅行として、大坂市へ往返の際には百事儉約を守り、彼地淹留中と雖ども、喧騷華奢を避けたる認定旅舍に宿らしめて、日に四拾錢以內を消費するに止めしめん內規を設けたれば、他の冗費を愼しむ時は、極めて少額を以て足れりとすべし。其入會申込期限は、來二月廿八日にて、當日まで確定名簿に登錄せられざる者は、固く入會を謝絕する

も、前回までの修業生にて、此一行に加はらんとする有志には、特に便宜を與ふる都合になし置けり。

（前號の雜報及び本號卷頭の廣告參看）

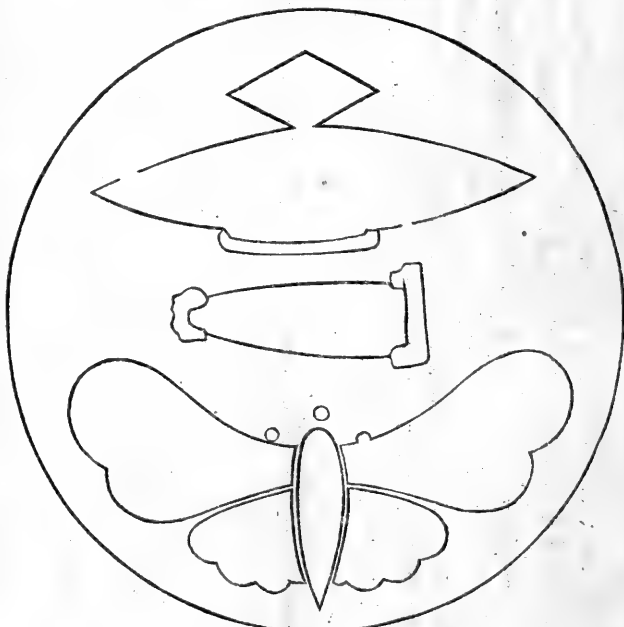
●今後の昆蟲世界　豫記の如く、雜誌「昆蟲世界」は、成るべく讀者の希望に副はんとて、從來各地より寄せ來れる意見の一端を實行せりと雖ども、なほ表紙、題籤、圖畫等に至りては稍彫刻の遲れたる爲め、多少豫告を變更せし廉事も之あり、然れば此等は時機を見て追て改むる所あらんとす。

●長短期の兩講習會　岐阜縣に於ては、縣の繼續事業として、去る三十一年以來昨年まで五回、害蟲驅除講習會を開き、今年また例の如く開設の趣むきなるが、更に長期講習會をも開きて、來ん四月より一年間數名の撰拔生に、講習を受けしむる事に内決せりと、委しくは次號にて報せん。

●三重縣阿山郡の蟲報　三重縣阿山郡にては、農事講習生、小學教員等協定の上昆蟲研究會を組織し、會員相互間の標本交換斯業の調査、斯學思想の喚起等に資せんとて已に橋本逸次郎、廣瀨安吉の二氏は之が準備に着手せる趣むき、同地の西岡嘉十郎氏よりの通信に見ゆ。

●晴天に甘露の雨　本月十二日は晴天なりしに、岐阜縣大垣城附近の一柳樹下に、雨滴點々降下するより、人皆之を訝かり居りしに、偶々同行の宮地氏の早くも認めて、是は蚜蟲の群居せるなりとて

工業應用昆蟲畫報の三（鍔）

（宮城縣永澤小兵衛氏寄贈）

其一枝を折採りたるを見れば、此寒氣の候に關はらず、滿枝の蚜蟲の胎生をなすなりけり。勿論、冬季とは云へ、多少の蚜蟲の棲息は驚くに足らねど、然かも甘露の雨を降下するまでに、群居且つ胎生すとは稀有と謂はざるを得ざるべし。（ナ、ヤ、記す）

◉**昆蟲標本の展觀**　近々岐阜縣下各郡より、第五回內國勸業博覽會へ出品の各種昆蟲標本は、大概完成せしを以て、去る十日より日々、當昆蟲研究所の標本陳列館內に陳列して、一般の內覽に供せしに、何れも熱誠をこめて製作せしものゝみなればにや、意外に多數の觀覽者あり。

◉**博覽會出品の昆蟲標本と批評**　內國勸業博覽會に、全國各地より出品の昆蟲標本は、極めて多からんと思はるゝが、同會を參觀し能はざる讀者の爲めに、特に一々之を紹介し且つ公正の批評をも加へんとす、讀者暫らく同會の開くるを待て、其眞相を知られよ。

●・・・・・●

◉**食草蟲の發見**　昨年十一月十日の發行に係る「サンフランシスコ、クロニクル」新聞に、布哇ホノルルの通信を載せ、中にランタナと稱する有害草に關する一節あり、是は從來知られたる食草昆蟲とは、其趣むきを異にするを以て、左に之を轉載す。

布哇群島を通じて、痛く農作上の妨害をなすは、Lantana（馬鞭草科に屬する雜草？）と稱する雜草なり、之を根絶せしめんとの目的より、或昆蟲をば、遠くメキシコ國より移殖せしめマウイ(Maui)島に於て專ら之が効果の如何を試驗中なるが、該昆蟲は廣濶の土地に蔓延せるランタナ草を侵襲して、痛く之れを蝕害し居れりとなり。原來布哇には、此雜草の蔓害甚はだしく、海岸の一局部を除き、他の數千エークルの地は、皆其被害を免がれざりしを以て、殆ど芟除に苦惱の結果、政廳よりは特に昆蟲學者ケーベル(Koebele)氏をメキシコに派遣し、此雜草の蝕害者と目さるゝ昆蟲の採集に從事せしめたるにて、今や既に其多數を送り來りぬ。

◉**名和梅吉氏の來翰**　在米國名和梅吉氏が、舊冬十一月廿八日附を以て、當昆蟲研究所に宛て送り越せる書簡中には、往々斯學者の參考に資すべき節もあれば、下に其要領のみを收載して、讀者の覽に供せん。

謹みて將に來らんとする新年を賀し、併せて益々斯學研究の進歩せんことを望み申候。扨私儀、上陸後桑港に止まり居り候處、去十一月二十二日、岡田虎次郎氏と共にスタンフォルド大學を訪ひ、尋で引續き同校教授ケロッグ氏の示導を蒙り、大に利する所有之候氏は非常に懇篤に待遇せられ候ため、同校所藏の昆蟲標本は、大躰一通りは、自身に抽出して展觀することの便宜を得たる次第にて其自由にして且開放主義なるには驚入申候。若し本邦なりせば、新外來の一書生が、思ふ儘に見學の出來ざるは勿論、過半は秘密の

二字に封藏せられて、之を瞥見だもなし能はざる事と存じ候。但同大學の標本は多數には有之候も、整理の點より云へば、十分とは難申哉に存居候。特に製作に鉄点の多きは、分科的專攻上の常弊とは申し乍ら、多少物足らぬ心地も致され候。其一例として容器の事を申述ぶれば、保存函の如きは、構造其當を得たりとも見受けられず、剩へ硝子面は塵芥を以て覆はれ、明かに内部の蟲體を見ること能はざる爲め、其蓋を取らざれば、研究上の不便有之樣に御座候。製作法は總て針にて留め、宛がら簡單製作標本のそれに類似致居候、中には雲母の小片に貼附したるもあれど、其には脚部の整理を缺き居候。兎に角、標本製作上の技術は意外に感ぜられ申候

工業應用昆蟲畫報 四の(鍔)

(岐阜縣石田増次郎氏寄贈)

展翅板は幾條となく横線を劃して、双翅の平直を定むるに便し、翅は雲母にて被ひ、針もて一頭づゝ留め置くの仕方に有之候。

同大學にては、婦人と雖ども男子と共に、學生として研學する者多くケロッグ氏の講義を聽き、又鏡檢的に實物を研究する順序に有之候。私も一日一時間だけ其講義を聞き申候處日本に於て爲す事と別に差なく、只多くの放大圖を示しつゝ廣きに渉りて講義さるゝ事は(日本に於てもなせども)稍少しく異なる點にて、主ばら簡單を旨とせられ候其時の講義は、幼蟲の三大區別のことにてパッカード氏の記述と同一の事に有之候。而して貝殼蟲に就てはケロッグ氏は世界に於ける種類の記述を擔當せられ居候やにて、頻りに研究を積居らるゝことに候。且又同氏はアーロヂデーも研究し居られ申候、去れば貝殼蟲の研究には餘程好都合にて、特に桑名伊之吉氏か、一昨年邦產を採集調査せられし數多の標本を、面のあたり見ることを得て、大いに利する點有之加之今後研究すべき有樣の大躰をも悟り申候。右につき大學近傍に於て、採集致したる二十餘種は、直ちにケロッグ氏に命名を乞ひ、將來當地に於て採集せしものにも、命名を願ふ事の約諾有之候へば、判明次第御送付可致候。

昨二十七日サンノゼイ市に抵り、所謂サンノゼイ貝殼蟲の產地を種々相尋れ候へ共、その原產地不明に有之、然るに新世界支社の新野氏に面談の結果、遠藤音吉氏なる者、早くより果樹の害蟲調査に熱心なりし由を承り、サンノゼイ市を距る六哩程の處を尋れ行き種々究問する處有之候、何分當地は梨樹の類は少なく、プルーム、ピーチ、アプリコット等の盛なる處にて、未だサンノゼー、スケールを見當り申さず、只一種の大害蟲たるペーア、スケールのプルームに發生し居るものを採集仕候。

其他當地にて一般に困却し居る害蟲は、ポーラーと稱するものゝ由にて、昨今其驅除中に有之候、是れは透翅蛾の幼蟲にて、植物の根部を害し候ものに御座候。カンカー、ウォームの話も聞き利する處有之候。尙御承知の如く當地は大農主義の事とて、果園の區畫の如きも、其面積頗る大に、眼眸の達する所、際限なき一面の果樹林にて、隨ひて害蟲驅除の事業も容易ならぬ義と察し得られ申候其驅除法なるものは格別進步の徵は無之候も、何れ此より東進せば、或は種々なる事も有之べくと存せられ候。却說サンノセー貝殼蟲の爲にや、當地には梨樹とては非常に少なく、他の果樹に比して千分の一位ゐに過ぎ不申候も、以前は相應に有之しやに承り申候當地人にイヤーホンと云ふ人有之候處、從來非常の熱心を以て貝殼蟲を集め居られ候由なれば、豫てケロッグ氏の添書を請ひ置候に付今明日の內には同氏を訪問する考へに御座候。唯閉口なるは言葉の十分意思を通じ難き事にて、先方の話の理解し能はぬ事の多きは、一層困難に御座候、然しながらケロッグ氏にも道を尋ねる言葉を發し、或は必要なる場合には、文法に適はぬ言語ながらも辛ふじて口唇に上せ居り申候、彼の邦人に取れば極めて可笑事ならんも、亦止を得ざる次第と存じ、承知の上の耻をさらし居申候。スタンフォールド大學にては、敎授も生徒も、早朝より夕景までは、其々研究に從事せられ、時としては、夜間に演說討論會なども開かれ互に知識の交換をなす等、愉快の中に新知識を得るの組織に有之、就中婦人の活潑にして男子同樣に勉强するの一事は、豫想外に有之候。（以下省略）

◉岐阜縣の害蟲驅防勵行

岐阜縣に於ては、今年は農作上の害蟲驅防を勵行するの決心にて、先づ各郡の町村長及び警察吏一同を要部々々に招集して打合會を開き、万端の準備整ふるを待ちて、一齊縣內に施行する手筈にて、旣に過日來二三郡に於ては其協議を遂げ了れり、而して之が實施の曉には監督として數名の縣屬若くは技手を各處に派遣し、又監督員としては縣害蟲驅除講習修業生より撰拔の者を、絕えず各受持方面に巡視せしむる都合なるが、目下は桑樹の姬鼻蟲驅除に其端緒を開き居れり。因に云ふ、本月十二日に安八郡大垣町に催ふせる同協議會には、郡長縣官を始め警察吏三十餘名、町村長十餘名に、なほ十數名の關係者盡とく集合せしを以て、諸事滿足の協定をなし得たりきと。

◉除名會員の件に就て

假し、當昆蟲研究所證明の講習修業證書所持者たりとも、他日或ひは惡德の行爲をなし、或ひは法律の違犯者となり、又或ひは最初其受罰を僞りて入會したる者等ある時は事實判明次第、之を修業生名簿より削除するの內規なるに、近來會員の增加に伴れ、當所の面目に關する非行に出でし者、又は刑後の身にあり乍ら、堂々と當所の名を騙る者もありしとかにて、當所の迷惑一方にあらず。此輩は彼の假修業証書所持者と共に、固より他と同視すべき者に非ざるは勿論、表面上

自然除名に屬する者なるが故に、正當の會員は恒に監視を加へられたし。若し斯る儕輩の徘徊するに際し、證を擧げて一報を寄せらる丶ことあらば、他の多數の會員を保護するの手段として、其不正行爲者の氏名を全國に通報し、兼て機關雜誌紙上に公告するに躊躇せざる可し。

●名和昆蟲研究所に對する建議　客臘開會の岐阜縣通常縣會は、殆んど滿場一致を以て左記の建議案を可決せしが、是は早晚、當昆蟲研究所が事業の擴張を行はんとするを傳聞し、激勵を加へて其必成を期せしめんとの意に出で、從來敢て補助をなさゞりしにつけ、今回は相當の援助を與へて、根基を强固ならしめんとの發議に因づるものなりと云ふ。而して此建議に對する內容に至りては、提出者の說明に、粗ぼ之を悉くし置きたれは、今「濃飛日報」紙上收むる所の、當日の縣會傍聽筆記全文をも、併せて參照の用に充てん。

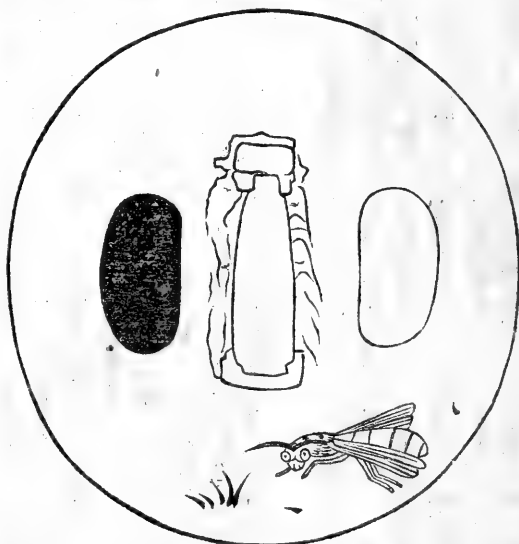
建議案

昆蟲學者名和靖の設立せる、昆蟲研究所は、創立以來、十數年の久しきを經て、漸く健全なる斯道の樞府となれり、茲を以て、各府縣及縣下各町村選抜生の贄を此に執る者、年々三百五十有餘名の多きに達し、從來の建物にては全く狹隘を感ずるに依り、今回壹万五千餘圓の豫算を以て、新築を計畫するに至れり、是れ斯道の爲め大に喜ぶべきの擧たるのみならず、彼れ研究所が、今日まで益蟲保護に、將た害蟲驅除に、社會に貢獻したる効績を考査すれば、此擧を一私人の經營に放任せず、縣費を以て相當の補助をなすを適當なりと認む、依りて縣當局者は、該建築に向て十分なる調査を遂げ、相當の補助をなさんことを希望す、右及建議候也。

明治三十五年十二月十六日

岐阜縣會議長　野呂駿三

工業應用昆蟲畫報の五　(鍔)

(宮城縣永澤小兵衞氏寄贈)

岐阜縣知事　川路利恭殿

提出者　春日善一　外四名

贊成者　澤田菊次郎　外二十四名

（參照）　明治卅五年十二月十六日午後二時廿五分開會、出席議員全員○議長（野呂）開會を報じ、建議案の提出ある旨を報告して、書記をして朗讀せしむ（前掲の建議案を目す）○議長（野呂）これより開議する旨を宣告す（中畧）廿七番（中川）只今提出したる建議案に就て意見を述べたきを以て、少しの時間を與へられんことを望む○議長（野呂）議事日程を變更すべしとて、日程を變更す○廿七番（中川）は名和昆蟲研究所が昆蟲の爲めに社會國家に貢獻して居ることは言ふまでも無く、本日まで蒐集したる標本は、室に溢れる程にて何れも貴重なる標本にて、梅雨或は濕潤の甚だしき時期には、黴を生じて保存上不利なると、又一面には縣下を始め全國害蟲驅除講習會を開催するも、講習生を容るゝ處無く、今日までは短期の講習のみなりしも、漸次長期の講習を爲さんとする事になり居れど之に對しても差支少なからず、又目下九州には昆蟲研究所を既に設置し、又北海道に於ても益々昆蟲の研究を爲さんとすと云ひ、斯く漸やく東西に昆蟲研究所が設立せられんとするに、名和昆蟲研究所は、其の名高きに比し、今日の如き現狀にては、如何にも遺憾なり、既に帝國議會に於て、同研究所補助問題は二度まで通過したるも、不幸にして半途にて消滅したり、斯は全く現今の規摸餘り狹少なる爲めに、補助する價値無きかの如く見認められたる由なれば、我々縣民は之に對し一層擴張したき考へなり、各員に於ても贊同ありて建議を可決し、縣當局者に向つて相當の補助あらんことを希望に堪へざるなり○六番（岡井）贊成○議長（野呂）異議無きを認め、建議することに決す。云々

◉今年の天候に注意せよ

今春に入らば、必ずや寒氣酷烈ならんとは、客冬の豫測談なりしが今に至るも猶ほ九冬の嚴寒とは思はれぬ程にて、特に東北地方の如きは、人々違例と感ぜざるまで高温なる趣きなるが、若し此儘高温を保續する時は、直ちに昆蟲の發育を促進すべければ、順調に回復せん限りは、心を安んずべきにあらず。昨年は三月下旬に至り、俄かに高温を來たしたる爲め、全國の開花期を五七日早め、且つ一時害蟲の化育を促したりしも、幸はひに四月に寒冷を感じたると、早く驅防に着眼せしとにより、概して大被害を免がれ得たりしを以て、今年も豫じめ觀象測候に怠たらず、臨機適宜の處置に出でんには、一般に災異を見るに至らざる可けれど、過去の天候は昨年と違ふ點も少なからず。去れば此際養蠶家の如きは、特に貯藏の蠶種の保護に注意して、氣候の激變のために、後日の不覺をとらざる樣、絕えず油斷せぬこそよけれ。

◉米國製の蠅捕紙

在米國桑港の名和梅吉氏より送り越せる蠅取紙は、本月一日に當所に到着

せしが、之を檢するに、厚紙面に一種强粘性の樹脂を塗抹したるらしき、微かに芳香を放てる即効紙樣のものにて、其粘着力の强さには、誰しも驚き合へり。尙當日は恰かも元旦の事とて、人々自づから喜色あり、負暖の蒼蠅また輕飛を試むるもの多かりしが、忽まち此魔劑の爲に翅足を捉はれて、見る〳〵閻魔の廳に參賀せしもの、二三十頭の多きに及びしも可笑かりき。然るにても此等のものが、千年前に唐土にて發明せられたらんには、憎蠅賦に、左までの骨折は懸けまじきものを。

●物產品評會の昆蟲標本　舊冬十月三日靜岡縣磐田郡に、郡物產品評會を開きたる折、參考品として十餘函の昆蟲標本を陳列せしが、其中五函は中遠農會のものにて、蝶蛾類、甲蟲類、蜻蛉類を蒐集し、二函は三河村農會ものにて、多く種類を集めたるも、排列は錯亂を來たし、二函は神村直三郞氏のものにて、地方普通の害蟲の經過を示し、一函は同縣濱名郡中野町鈴木伊平氏の寄贈せる害蟲標本にて、二十種內外の蟲種を收め、他の一函は見付町某氏の出品に係り、小蛾類十數種を集めしものなりきと、同地より通報ありき。

●年賀狀の披露　今年當昆蟲研究所に宛、贈り來せる二千餘通の年賀狀より、昆蟲に關するものを選擇して、之を昨年のものに較べしに、如何なる故にや、頗ぶる見劣る所ありき。今左に、その中の主なるものゝみを披露せん。

●石川縣鹿島郡西川豐次郞氏の農業の俗歌は、着眼は宜けれど、生硬にして未だ調をなさゞるを缺點とす●岐阜縣山縣郡篠田五郞氏か、私製葉書の郭外に蟲名を記するに蚊眼的の小字を以てしたるは惜むべし、實は其記載の目的の不確實なるより寧ろ無くもがなと思はる●長野縣淸水藏氏の、益蟲害蟲の印刷文は可、但し前年のものに比し頗ぶる及ばざる所あるを認む●岐阜縣加茂郡長瀨白氏か害蟲寫生圖を、手摺としたるは用意周到なり、併し觸角と脚の注意は缺けるものゝ如し●山口縣中井猛之進氏が、蛾と蟬とを畫きて金蛾新蟬とは面白し、併し新蟬とあらば、ニイニイ種に代ふるにチッチッ種を以てするを良とすべし●大阪市木村壽祖治氏が用ゐたる私製葉書は、白虹の附錄なるが、摸樣化の上には確かに新意匠あるを見る●東京市若原氏の私製葉書は、印刷良好にはあられど、馬追蟲あるも珍らし●山口縣玖珂縣小田勢助氏が、ウサギトンボと云ふを一筆がきとしたるは、寧ろ滑稽とやいはまし●攝津池田の高山助太郞氏か、蜻蛉四頭を巴崩しとして、襖紙の摸樣圖案に擬したるは先づ目新しく、濃淡亦能く法に適へりと雖ども、四翅の配置の未だ美の境に入らざるを憾む●愛知縣西加茂郡牧野敏太郞氏が、上に甲蟲日の丸の國旗を樹てゝ蜻蛉結びの飾總を下け、其下に膜翅類祝賀の狀を描きて、背上自づから謹賀新年の文字を成さしめしは、如何にも經營慘憺の痕跡見ゆ、只この手腕あり乍ら、何故

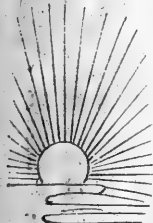
に之を一層有用の方面に向けざりしかを疑ふのみ●山梨縣中巨摩郡和田恒作氏が「幾久しく蜻蛉の御愛顧を御願申候」の追記は妙なるも御愛顧といふては意味通せず、宜しく御交際に改むべし●兵庫縣明石郡井上藤太郎氏の、昆蟲相撲見立に正名と方名とを併記し、且つ其文を蟲盡しとなしたるは佳、練熟を缺かずんば尚更に佳なりしならん●千葉縣長生郡の高橋徽一氏のもの、新潟縣岩船郡の佐藤榮氏のもの、山梨縣南巨摩郡の依田常吉氏のもの、長野縣東筑摩郡の三澤勝重のものは、紙質、摸樣、印刷兩ながら、良好の私製葉書なるも、普通の賣品と聞く時は、何となく貫目不足の思ひあり●島根縣八束郡安達庸一氏が詠める與歐二首は、普通の百姓や小供には解し得ず、今なほ師範校の臭味消散せぬも可笑し●靜岡縣磐田郡神村直三郎氏が、蟲俳句を列記せしは例年の如し●東京市小山彰氏のシジミ蝶影の輪廓は、其配置は適當なるも、斯く長き曲線は馬尾蜂か夕顔別當外にては如何にやと思はる●其他なほ蝶蛾椿象と書したるの類多く、又昆蟲摸樣の繪葉書も數葉あれど、數年前に印刷せる例の裳華房名入等のみなれば、茲に略す。

●岐阜縣昆蟲學會記事　本月三日例刻より、岐阜縣昆蟲學會第四十九回月次會を、當昆蟲研究所内に開きしに、折柄朝來の大雪にて北風さへ烈しかりしが、不破山縣稲葉揖斐諸郡の斯學篤志者十餘名の來會あり、先づ初めに第五回内國大博覽會へ出品すべき各種昆蟲標本二百餘函を周覽し、次に其製作配列意匠等に關する各自の意見を闘はして、長短の在る處を批評もし、注意をも與へ、最後に副會頭名和靖氏が標本出品に關する一場の談話ありて午後六時散會せしが、席上なほ種々の斯學談ありき。

●水曜昆蟲談話會　前號に記載せる水曜昆蟲會を、其後間斷なく當昆蟲研究所に開きしが、舊臘以來、專ら實物に對照して説明を加ふることゝなし、本月七日の夜の例會に於ては、重に有吻目と鞘翅目に關する研究談及び最近刊行四十七雜誌中の昆蟲記事談等ありき。

●昆蟲標本陳列館の觀覽人　昨年十二月中に、名和昆蟲研究所の標本陳列館を觀覽せし人員は、總計二千四百七十八人にして、其中最とも多かりしは、九日に於ける二百五十一人、最とも少なかりしは、大晦日の三十一日に於ける三十八人にて、一日平均九十五人強に當る。又昨年中觀覽の總人員は七万四千〇三十八人にして、其内最とも多かりしは、八月に於ける一萬三十一人、最とも少なかりしは四月に於ける一千〇一人にして、一ヶ月平均六千百七十餘人に當れり。

（右雜報は一月十三日脱稿）

謹賀新年

明治三十六年第一月

再伸　昆蟲學も追々進步の狀を呈し、害蟲驅防の成蹟また多少良好に立到候段、爲國家御同慶の至に御座候。陳者昨今の如き寒中には、昆蟲を採集し得ぬ樣誤解の向有之ため、採集、調查兩ながら之を放棄するの風あるは、甚はだ遺憾に存居候、就ては此際同志間に於てのみなりとも各々之を實踐躬行して、冬季昆蟲採集の洪利を示し、併て古來の迷謬を打破し、斯學思想普及の一助に供し申度候、畢竟今に豫防的驅除の完成せざるは、冬季生存の蟲種及其狀態に暗きの致す所ならんかと被存候間、特に御決行を希望する次第に候。

次に、螟害驅防の一策としては、冬季より積藁、苅株其他に注意するの要は有之候も、現時の農家に對つて多く要望致し難き事情も有之に付、毎度申述候通り、先づ春季の採卵より夏季の莖切、秋季の拔穗を共同施行の目的を以て勗めて確實の器械と、僅少の勞銀(一婦女子又は小學兒童等を指す)を以て、誠實に實行するより外、民情に適切の方法之なかる可く、然すれば今日の如く敢て大害を來たすことあらざる可しと確信罷在候間、是亦同志相結んで實施致申度希望、罷在候、此の義は豫じめ同志の奮勵に期待すべき緊要事と存じ、舊臘發行の機關雜誌「昆蟲世界」へ略說を加へ置き申候。尙本年は大阪に內國大博覽會も開設に相成り、昆蟲標本も多々出品の模樣に付、成るべくは來る三月を以て、全國害蟲驅除特別講習會を開き、會員一同と共に參觀の見込に候間、其節は同地に於て種々斯學上の件を御協議申上度と、今より樂み居候間、御都合御見計の上、御參會相成度候樣致度候、乍末筆、貴下の御健勝を祝し、兼て將來の御勗勵を奉祈上候、匆々不盡

岐阜縣岐阜市京町
名和昆蟲研究所

所長　名和靖
主任　永澤小兵衛
調查主任(在米國)　名和梅吉
養蟲掛　森宗太郎
同補助　長屋六二
標本掛　棚橋昇
同補助　名和愛吉
同補助　木之村一
編輯主任　小森省作
圖書主任　伊藤七郎
同補助　名和貴子
庶務主任　石川和三郎
同補助　高橋喜男
會計主任　名和正也

◎害蟲圖解未刊の分豫告

◎稻の害蟲イナゴ（稻螽）
◎稻の害蟲オホズヰムシ（大螟蟲）
◎稻の害蟲セジロウンカ（背白浮塵子）
◎稻の害蟲ヒゲナガアブ（長角虻）
◎桑樹害蟲クハハマキ（桑葉捲蟲）
◎蠶の害蟲カヒコノウジバヘ（蠁蛆）

◎松樹害蟲マツケムシ（松蛅蟖）
◎藍の害蟲アヰノゾウムシ（藍象鼻蟲）
◎粟の害蟲アハノズヰムシ（粟螟蟲）
◎胡麻害蟲メンガタスズメ（胡麻蠋）
◎赤楊害蟲ハンノキケムシ（赤楊蛅蟖）
◎櫟の害蟲カミキリムシ（天牛）

◎梅樹害蟲ウメシヤクトリ（梅尺蠖）
◎稻の害蟲トビイロウンカ（褐色浮塵子）
◎稻の害蟲クロクサガメ（黑色椿象）
◎桑樹害蟲アヲハマキムシ（青色葉捲蟲）
◎桑樹害蟲クハゴ（野蠶）
◎蔬菜害蟲モンシロテフ（菜の螟蛉）
◎蔬菜害蟲サルハムシ（菜の葉蟲）
◎大豆害蟲ヒメコガ子（姫金龜子）
◎梅樹害蟲ウメケムシ（梅蛅蟖）

◉豫約代價

壹枚拾錢郵稅貳錢
但申込の際前金添附の事

◉圖解の紙幅縱一尺三寸横九寸　◉壹枚の代價拾五錢郵稅貳錢
◉百枚以上一纏壹枚拾錢郵稅百枚に付き貳拾錢
圖解代金　凡て前金にあらざれば回送せず但郵劵代用壹割增の事

◎梨樹害蟲ナシゾウムシ（象鼻蟲）
◎梨樹害蟲ホシハマキ（星葉捲蟲）
◎果樹害蟲イラムシ（刺蟲）
◎藍の害蟲アヰノズヰムシ（藍の螟蟲）
◎粟の害蟲アハノヨトウムシ（粟蠶）
◎里芋害蟲セスヂスズメ（烏蠋）
◎桐樹害蟲シモフリスズメ（桐蠋）
◎果樹害蟲ホシカミキリ（白斑天牛）
◎果樹害蟲ドウガ子ブンブン（金龜子）

發行所　岐阜市京町　名和昆蟲研究所

謹賀新年 静岡縣農事試驗場 岡田忠男

謹賀新正 大分縣大分郡 小野覺太郎

謹賀新年 静岡縣磐田郡 神村直三郎

謹賀新正 岩手縣氣仙郡 鳥羽源藏

恭賀新年 岐阜縣本巣郡草深 坪井伊助

恭賀新正 岐阜縣 林茂

謹賀新年 岐阜縣農會内 桑原貫之助

謹賀新年 千葉縣 林壽祐 齋藤啓二

謹賀新年 福岡縣 嶺要一郎

遙賀新年 在米國桑港 岡田虎二郎

謹賀新正 埼玉縣 田口弘

謹賀新正 栃木縣 高柳源多郎

謹賀新年 在水戸 安資農夫

謹賀新年 藤澤節太郎

恭賀新正 岐阜縣 小阪專堂

謹賀新年 長崎縣北高麗郡農事試驗場 中野末吉

謹賀新年 鳥取縣 蓮佛萬吉

恭賀新年 謝平素之疎音 祈將來之交誼 新潟縣岩船郡神納村 第十二回全國害蟲驅除講習會修業生 佐藤榮

謹賀新正 在水戸 中村馮次

恭賀新年 埼玉縣 風間七郎兵衛

謹賀新年 青森縣上北郡三本木村 新渡戸稻雄

謹賀新年 下総國安食町 後藤新左久

恭賀新年 香川縣大川郡丹生村 勝屋禎三郎

新春閑筆

一點瓢蟲

蟲男

昆蟲世界の記事は、年中四角い事ばかりで、圭角の取れた小説抔の收錄を容さぬが、新年に計りも、無邪氣で且つ三角位ゐな事を載しては如何だ、との讀者の注意があッたから、附錄として、玆に一點瓢蟲談を掲ぐる事にした。

米國の昆蟲學者マァラット博士と云へば、明けて一昨年の春、貝殼蟲の天敵卽はち瓢蟲を調査する爲に、夫妻相携へて本邦に渡來した人であるが、此頃同夫人から、名和昆蟲研究所の瓢蟲女史に宛て

扨此たびは、一しほ御丹精を凝され玉ひ候て、御揮毫遊ばされ候最と麗はしき繪畫をば、遙々御寄贈下され、御厚意のほど誠に辱なく存上候、右は直ちに扁額に製らせ候て吾が居室に掲げ常に展觀の樂みを得候のみか、此に對する毎に、御慈母樣並に御許樣の事何となく、御なつかしく感ぜられ、雲山萬里を隔つる身をも打忘れ候て、親しく御面話の心地さへ致され申候、唯御書加へ遊ばされ候落欵の漢文字は、解し得べくも無之につき、哀れ、其意味を御示し下され候はゞ滿足此上なき次第に御座候、右御禮のしるしにもとクリスマスの贈物を、別包として差献じ候まゝ御受納下され度候。

の書面があッた。是は博士夫妻が、岐阜へ來られた時よ恰りも全國昆蟲展覽會が開かッてあッたので、會場へ案內した處、參考室よ女史が、彼此三月以上も要ッて描いた、百花群蝶圖のあるのを見て是非斯樣なのを一枚欲いとの希望であッたから、去年の夏、玆に載せてあるやうな寫生畫を作ッて、贈ッたのよ對する挨拶狀で、又先方からの贈物とは、繪具廿六種を指すのである。

然るに、瓢蟲女史と云ふ名前が、折々昆蟲世界紙上に現はれるので、其奇異な雅號から、一體テンタウムシ女

史とは誰の事で、何ンな意味で命けたのである、と質問をする物好も多いが、底にも底あり、蓋にも蓋ありで、普通は世の中の害蟲視せられる婦人子科に屬する此女性よ、瓢蟲と云ふ益蟲の名前をはづンだのは、決して偶然の事では無い。現に其譯を聽いてから、それよ肖かり度いと云ふて、秋山華子（優曇華の華を採れり）味勝秋子（秋津の秋を採れり）など〻云ふ名前を自分の子供よ命けた親々さへもあるのだ。斯學普及上、芽出度い話だから、少しく其譯を述べやう。

瓢蟲女史とは名和貴子孃の事で、戸籍を引合よ出すと、名和昆蟲翁の長女で、其實名のタカコと云ふのが、既に瓢蟲を言顯はして居る。女史の誕生は明治十七年の今月の十九日で、其呱々の聲を揚げた場處は、岐阜縣下揖斐郡の沓井村であッたが、當時昆蟲翁は、岐阜農學校に奉職して居られたから、岐阜の西野町に假寓を定めてあッたさうだ。是より先、最早分娩と云ふ場合に、飛脚が來たのであるが、是日は朝から瓢蟲の一種の取調べに餘念が無くて、遂に歸省の事も打忘れて居たのである。郷里では勿論、一同待ち切ッて居ッたが何時迄たッても、翁の姿が見ねんところから、皆不平顏をして、歸宅が出來ンものなれば、責めては赤ン坊の名前計りも言ふて遣はすが宜い、と云ふ嫌味たッぷりの催促をした、すると翁は今更の樣に改まッて、其三日目の夜に、委しく命名理由書を認め、又これに姬龜甲瓢蟲八倍大の彩色寫生圖を添へて、親類宛よ送附した、其書面は次の如くである（但し原文は、假名字會の規定書式に隨ッて全く假名文字のみで書たものであるが讀み易い爲めを思ふて、漢字よ改書した）。尙ほ此文中に注目すべき事は『我國にても、遠からぞ益蟲として之を愛護するの日來る事と信ず』との一節と冬季の採蟲の一條で、當時は害益蟲の區別も知らん世の中であるし、又冬の蟲捕は、昆蟲翁に始まッた事が判然するのである、そして此豫言が果して二十年後の今日よ、的中したのである。

ヒメカメノコテンタウムシの圖

名を附ける條り

凡て物の名は、符號なり、人の名も亦然り、固より符號なれば何にても可なるものなれども、其中人には人の名ありて、なほ細かに分くる時は、男性には男性らしき名、女性にも隨ひて女性の名あれば、また是に據らざる可からざるものなり。私事、一月十九日午前九時より、例の通り農學部へ出勤し、豫て捕ひ置きたる瓢蟲を細かに調べ且つ奇麗に色彩し、全く終業せしは正午なりしが、其日は土曜日の事とて、それより歸寓せり。

扨この瓢蟲は、漢文字にて瓢蟲と書き、英語にてこれをレデーボルドといふ、レデーとは、貴き女（漢字にて貴女と書く）ボルドとは鳥（漢文字にて鳥と書く）といふ義なり、それは英國にて、餘り奇麗の蟲にて、且つ優しくして、何處ともなく貴きを以て、斯くは名づけしなり。此瓢蟲は六脚にて、常に私の調ぶる職分中の蟲なり、此蟲の屬は數多くして、且種々の色を帶べるも、皆至つて奇麗なる種なり、其本領は恒に農家の流汗辛苦して、栽培せる草木を蝕害する所の惡しき蟲を、悉く喰ひ盡すものなれば、誠に國家の爲めに有益なる貴重すべき蟲とす、それ故西洋にては、何人も居常注意して、一頭だも之を殺すこと無しと云ふ、我國にても、遠からず益蟲として之を愛護するの日來る事と信ず。

岡崎氏の報知に、十九日の午前十一時頃、誠に安らかに女子分娩せりとの事。女子と聞く時は、前に記せし如く、女性相應の名を命

けざるを得ず、而して時恰かも、瓢蟲を描き居れる際なれば、紀念として貴女鳥の貴の字を取りて、之を邦訓にてタカと名づけたらんには、私に取りて頗ぶる滿足する所なり。

明治十七年一月二十一日夜岐阜西野町寓居に記す

親族御中

名和靖

此書面を請取ッた親類達は當惑して、寧ろ正氣の沙汰の注文とは思はんであッたらしい、併し乍ら實の父親の好みと來ては、致方が無い、澁々乍ふも、瓢蟲の英名Lady birld 卽はち貴女鳥の貴の字を冠せて貴子と名附け、之をタカコと訓む事にしたのである。

其時はそれで濟ンだが、女史が十五六歳に成ッた頃に雅號が要る段ゝなッた、此時誰かゞ折角優雅な號を選んださうだが、一向に翁の氣に入らないそこで翁は、女史に諭して申すゝは、御前の名のタカと云ふのが、旣に瓢蟲と云ふ意味であるのだから、今更彼此と別號を選ぶの必要が無い、矢張瓢蟲女史と附けるが宜いと云ふた。これが抑そも瓢蟲の雅號の由來で、此時にもまた強制的命名式を行ふたのである。(茲に揭げたのはマァラット氏來岐の時撮影した瓢蟲女史の小照である)

却說、血氣盛りの昆蟲翁が、一家の慶事を餘處にして熱中せられた瓢蟲と云ふのは、上圖の右方にあるヒメカメノコテンタウムシの變種とも云ふべき微小の種類で、常に蚜蟲を食害する擧動の敏速なものであるが、春は薔薇科其他の蚜蟲を驅除し、夏は特ゝ萩の葉などに多く居る。當時翁が*

(前號雜報中昆蟲學上の日本の頁參看)

*携帶せられた昆蟲採集用野帳には、左の記事があッて、尙は觸角の放大圖をも添へて書いてある。

明治十七年一月十九日(早朝微雪)土曜日岐阜華陽學校農學部內ノ赤松ノ皮間ニ潛伏ノ瓢蟲屬一頭ヲ捕フ(近傍ノ黑松ニハ殆ンド居ラズ)大サ一分二厘許ニシテ、形狀ハ稍橢圓ヲナシ、躰下面ハ平直、背面ハ半圓球狀ヲナス、角ハ十一節、趾ハ三節ヨリ成ル、其色ハ總テ光アルモノニテ躰ノ下面、頭部及ビ胸部ノ一部分並ニ甲翅ノ接着スル端即チ翅ヲ張ラザル時、躰上ニ於テ中央ノ一縱線ハ深黑色ナリ、眼マタ然リ、但眼ノ間、角ノ後ニアル二點及胸部ノ左右兩端ハ白色ナリ、其他角ばるばい足部甲翅ハ赤色ヲ帶ビタル黃色ナリ

尤とも是まで、瓢蟲女史の事を質問する者があれば、吾は審かゝ其出處を告げ、且つ是はヒトツボシテンタウムシと云ふべきで、他ゝ類の無い珍種だと答へたのである。何故なれば、眞逆に此寫眞にまでは見えないが、女史の頰の上には、一點の大きな黑子があッて、分類上の特徴とすべき價値があるからである。終りゝ新春の試筆に、斯かる閑話をものするも、畢竟聖代の餘澤であるから茲に謹んで、幾千代掛けて、大君の御代榮へまさんことを奉祝する。

dorsal or ventral abdomen of the host. When the host bears a number of the larvae, it may be recognized from a distance, on account of the above said white substance. When these larvae are full grown they leave their host and move away to the trunks of trees or the leaves of plants, to spin their cocoons.

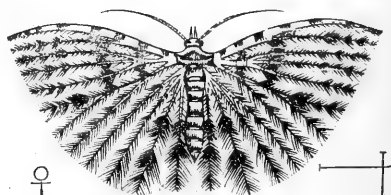
The cocoon is white, ellipsoidal and covered with a white woolen substance. The pupa is pale brown, cylindrical and turns black before it is transformed into the moth. The moth is small and black, and its expanse of wings is more than half an inch. The antennae are bipectinate, with 16 joints, and less than half the length of the forewing. The head, thorax and abdomen are all black. The forewings are black with many undulated lines of shining ultramarine, but the hindwings are dark.

On other occasions I found living on Ricania japonica certain parasitic larvae, which were closely allied to the species mentioned above, but the question as to whether these are the same or not, is still undecided.

Plate 1. Fig. 1, Pomponia japonensis, with parasites; 2, larva; 3, cocoon; 4, pupa; 5, moth; 6, antenna; 7, nervuration of forewing; 8, nervuration of hindwing; 9, Ricania japonica, with parasites.

1, 3, 9, natural size; 2, 4, 5, 6, 7, 8, enlarged.

The Many-Plume Moth of Japan.

Distribution. Prov. Hitachi: Mito (Y. Nawa! March 12. 1898) Prov. Mino: Gifu and Kamagatani; Tokyo; Kobe; etc.

Orneodes hexadactyla.?

Notes on a parasitic moth.

by

U. Nawa.

First assistant in Nawa's entomological laboratory.

Although several species of parasitic insects belonging to the Hymenoptera and Diptera, etc. All well known, it was not until I made the observations recored below that I was aware of such insects belonging to the Repidoptera.

In October 1892 I captured a small moth on Mount. Kinkwa (in the vicinity of Gifu), with which I was absolutely unfamiliar at the time. In the beginning of August 1898, mr. Y. Nawa found on Mount. Yōrō, some curious larvae covered with white substance, and living on the outside of the abdomen of Pomponia japonensis, these he brought back to our laboratory and bade me observe them closely, Where upon I put them into the breeding cage and observed them every day. After a few days they spun small cocoons, from which the moths which issued were found to be same as those of the species mentioned above. Afterwards the same kind of moths were collected in several prefectures of Japan; viz, Shiga, Toyama, Tottori, etc. According to my observations the cicadas on which the larvae most lived were the Pomponia japonensis, in less degree the P. maculaticollis; and least of all the Graptopsaltria calorata.

The larva appears at first sight a maggot, because its legs are very short and the prolegs can barely be traced. The head is very small and in colour pale yellow; the other parts of the body are pale redish-brown; but when full grown the body is covered with fine white hairs, which appear like a mass of cotton wool, which protect from rain. The larvae live on the ventral thorax and

昆蟲世界

(明治三十六年一月十五日發行) 第七卷第六拾五號 (毎月一回十五日發行)

(明治三十年九月十日内務省許可)(明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)

恭賀新年 東京 田中芳男
　　　　 東京 田中節三郎

賀正 農科大學内 佐々木忠次郎

謹賀新正 在札幌 松村松年

謹賀新年 東京 小貫信太郎
　　　　 東京 中川久知

謹賀新年 福岡縣 桑名伊之吉

謹賀新年 岐阜市杉山町 長野菊次郎

謹賀新正 在京都 荒木武雄

謹賀新年 伊勢川北 丹波修治

◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條に依り晴雨に關はらず、毎月第一土曜日午後一時より、岐阜市京町名和昆蟲研究所内に於て開く、本會員は不及申、何人も毎會御出席相成度候也

岐阜縣昆蟲學會本年中の日並は左の如し

第五十回月次會(二月七日)
第五十一回月次會(三月七日)
第五十二回月次會(四月四日)
第五十三回月次會(五月二日)
第五十四回月次會(六月六日)
第五十五回月次會(七月四日)
第五十六回月次會(八月一日)
第五十七回月次會(九月五日)
第五十八回月次會(十月三日)
第五十九回月次會(十一月七日)
第六十回月次會(十二月五日)

名和昆蟲研究所内 岐阜縣昆蟲學會

◉名和昆蟲研究所案内

當昆蟲研究所の位置は上圖の如くにて停車場よりは僅に十餘町養蟲室あり又新築の岐阜縣物産館構内には常設の昆蟲標本陳列館(五間に十八間)ありて標本器具數千点を陳列す有志諸君の來訪を俟つ

岐阜縣岐阜市京町 名和昆蟲研究所

◉本誌定價並廣告料

壹部 郵税共 金拾錢
壹年分拾貳部 郵税共 金壹圓八錢
(見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す)

(注意) 本誌は總て前金に非れば發送せず◉爲替拂渡局は岐阜郵便電信局◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす

廣告料五號活字廿二字詰一行に付金拾貳錢、三十行以上一行に付き金拾錢とす

明治三十六年一月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二
(岐阜縣岐阜市京町)

發行所 名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二 發行者 名和梅吉
同縣揖斐郡黨村大字公郷三番戸 編輯者 小森省作
同縣安八郡大垣町字郭百五十三番戸 印刷者 河田貞城

(大垣西濃印刷株式會社印刷)

Vol.VII. FEBRUARY. 15TH, 1903. No.2.

(二月十五日發行)

(毎月一回十五日發行)

THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE.
EDITED BY Y. NAWA.
GIFU, JAPAN.

昆蟲世界

第六拾六號　（第七卷第貳册）

(明治三十六年二月十五日發行)

(明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)

目次

（禁轉載）

PUBLISHED BY THE NAWA'S ENTOMOLOGICAL LABORATORY IN GIFU, JAPAN.

名和昆蟲研究所廣告

全國害蟲驅除講習修業生諸君に告く

今般第五回内國勸業博覽會の開設を機とし、全國害蟲驅除講習修業生同窓會を、來三月廿八日午後第一時を以て大阪市に開き、一は以て舊交を温め一は以て將來の親和を圖り、聊か斯學の發展應用を助長せしめんとす、吾が同窓會員諸君は、此擧に賛意を表し、奮つて臨場あらんことを。

一、會場は目下交渉中に付三月發行の本誌を以て敬告すべし。

一、全國害蟲驅除講習修業生外の同志と雖ども、之を正會員に准じて列席を諾するが故に、名和昆蟲研究所證明の修業證書所持の諸君は、遠慮なく來臨ありたし。

一、列席參同の會員諸君は、三月二十日までに、名和昆蟲研究所庶務部内、同窓會幹事に宛通告ありたし。

附　當日は名和先生を初め昆蟲學者數名も來臨の都合なり

大博覽會出品標本に對する賞品贈與

第五回内國勸業博覽會に出品の昆蟲標本は、都合數百點の多きを算する趣なれば、隨ひて斯學に稗益を與ふるもの亦少なからざる可し。當昆蟲研究所茲に觀る所あり、此等出品標本中、左の條に該當するもの五點若くは七點を選拔して、各々これに紀念の賞品を贈與し、その斯學界に規範たるの名譽を表彰するとゝもに、其功勞に對して一片の謝意を致さんとす。

一、紀念賞品は、名和昆蟲研究所證明の修業證書所持者の出品に限り之を贈與す。

一、紀念賞品は、博覽會審査の結果、最優等に位せる者のみに之を贈與す。但し、審査規程に入格せざるため、優等賞を受くること能はざるも、現品の優良と認むべきものある時は、特に之を拔擇することある可し。

一、雜誌「昆蟲世界」愛讀者中、卓絕の標本を出品し若くは優等賞を得たる時は、特に此規程を適用することある可し。

一、紀念賞品は、昆蟲學に關係を有する書籍若くは、名和昆蟲研究所の徽章を附したる工藝品たるべし。

第十五回全國害蟲驅除特別講習會開始

開期〔自今年三月十日 至同月三十日〕三週間以内　定員約四十名

第十五回全國害蟲驅除講習會は、今年春後に開催の筈の處、嘗て本誌に詳記の事情を生じ、明三月開設の内國勸業博覽會の紀念として特別に開講せんとす。然れども事もと吶嗟の間に起れるを以て、之が開始を難ずるもの多々之あり隨つて其必成を期し難し。是を以て試みに之を世の同志に問ひしに、幸にして約半數の賛同を得たるを以て、斷然茲に三月十日を期して開講式を擧げんとす、入會希望者は左の諸項を熟覽の上、今二月廿八日限り、其手續を終了せられよ。

一、會期は三月十日より同月三十日に至る三週日以内とす。

二、會費は通常の講習會費と同額を收む。

三、講習學科の終了次第、修學旅行として、一同大坂市へ出張し内國勸業大博覽會に陳列の昆蟲標本、驅除器械、驅除藥劑等苟しくも應用昆蟲學に關係あるものに就きて、親しく現物の說明品評を爲さしめ、各講師は公平の審査眼を以て、更に其優劣得失を示教す。

四、大阪へ往返の際、天候の如何によりては、比叡山、伊吹山若くは月ヶ瀨の一を擇びて、各種の採蟲法を行ふ。

五、本會は長期講習會の豫備を以て准す。

六、修學旅行費は、各會員の自辨とす。

七、其他は普通講習會の規則に同じ。

八、規則書入用の向は返信用郵劵を添へ至急照會せらるべし。

(附記)本會開會中に、當名和昆蟲研究所創立滿七年の紀念として昆蟲百五十萬供養塔の開眼式を擧行し、又大坂市に於ては、全國害蟲驅除講習修業生の同窓會を開くの計畫あり。

二月十日

名和昆蟲研究所

第貳版

Cyrestis thyodamas Boisd. イシガキテフの發育圖

學説

御製　新年海

梓ゆみ八洲の外も波風の靜なる世の年立ちにけり。

◎イシガキテフの發育を記す（第貳版圖參看）

高知縣土佐郡　武内護文

鱗翅目蛺蝶科に屬するイシガキテフは、其體長六分餘、翅張一寸六七分（雄は雌よりも小）を算する中形の種にして、翅の外緣は、同科の他種に見るが如く、脈端稍突出して波狀をなし、後翅には尾樣の突起ありて內緣角は圓く突出す。軀背は銀光を放てる灰白色にして、三條の黑縱線を通ず、翅は白色にして翅脈は細黑に、脈間を橫貫して或は曲折し、或は縱走せる數多の細線を畫き、特に其外緣に近く走るものは、處によりて褐色を帶び、後翅の內緣角に向ふて集る所のものは、末端にまた褐色を呈はすと雖ども、其他は皆黑色なり。翅の中央より少しく外方には、太き一條の黑線ありて、その後翅に在るものは內緣角に近く藍色を帶ぶ（雄の後翅には此線に稍平行して太き一條の黑色あり）。此線と外緣の間は、前後翅共に、雌にありては微かに黃褐を呈し、灰黃色の斑紋數多ありて、其內緣角にあるものは褐色を呈す。前翅の前緣の基部、及び後翅の內緣部は、稍灰褐にして二三の白色部あり。雄にありては、翅の外緣の邊と雖ども、黃褐を帶ぶることなく、雌に於ける灰黃色の斑紋は、濃淡各樣の黑色にして、前翅の前緣角邊に淡黑を彩どる。其他の諸部の彩色は、概して雌に比して濃かなるを覺ふ、但し雌にして雄の如き彩色を有するものもあり』。斯種の翅は薄くして、鱗粉を裝ふことも亦厚からず。其飛翔するや、翩々と

して紙片の風ゝ飛颺するが如く、常ゝ方向を左右上下に屈轉し、偶々蜜を求めて花上に戯るゝことあるも、概ね葉上或は土石の表ゝ靜止す。而して靜止の時には、多く其全翅を水平に開置す。

抑もイシガキ テフ（イシガケ テフと云ふゝ同じ）の名は、其翅彩の宛がら、石壁の襞皺の紋樣ゝ似たるより起れりと云へば、石壁紋蛺蝶の義たるや明白ゝて、其色彩の美、其描畫の妙、更ゝ形容し得られぬ奇品なるに、加へて其飛翔の狀憐愛すべきを以て、從來、當地ゝ於ける採集者の注目を惹く所となり、吾が土佐ゝありては、山中溪畔ゝ珍しからざれども、市街附近の地には殆ど產せざるを以て、標本も亦頗ぶる人目を悞ばしむ。

雌蟲の產卵するや、薜茘樹の新葉に止まりて、翅を開置したる儘、葉表に一顆づゝ之を產附す、故ゝ他種の如く尾端を曲ぐるの勞あることなし。卵は雞卵形ゝして、長さ二厘五毛許、黃色ゝして其面平滑なり其上方の小端ゝ稍大なる十一角をなせる平面部あり、更に之を圍みて隆線あり、各角頂よりは、一條の隆線を卵面の下端に通ず。隆線は皆淡黃色なれども、其凸隆せる部面は、鏡檢の際ゝ殆ど白色の觀をなす蓋し光線の作用によりて然るなり。

幼蟲は充分成長すれば、體長一寸三分許に達す、圓筒形にして兩端少しく小に、腹面は較扁たし。全躰鮮綠色ゝして、腹面は淡綠、氣門下一帶は淡褐を帶び、其色腹面中央に向つて朧ろに消滅す。八對の脚亦淡褐を呈し、第五節の背上及び尾端に各一個、頭部頂上に一對の角狀突起あり、各突起面には無數の鮫膚狀の小突起ありて、第五節上の突起の後面、及び尾突起の全面にある小突起には、稍長くして鋸齒狀をなすものあり。各突起は黑褐なれども、第五節上の突起の下半、及び頭上の突起の中央の大部は綠褐を帶ぶ。頭の前面には二個、兩側ゝは各々一個の黑褐條（兩側のものは大、前面のものは小）ありて

此突起に連合す。第五節上の突起の直後を廻り、第三節後端の兩側に向つて、斜めに淡黑褐の太さ一線あり、兩緣濃色を帶ぶ、又尾突起の前面に接して、第九節背の中央に達する大なる黑褐の線あり。幼蟲の第一二齡の頃は、全躰淡綠褐にして、背部較濃色に、各突起は更に濃色なり。而して幼蟲は終始薜荔の嫩葉を嗜食し、晝間は常に葉の中肋上に棲止して動かず、頭部をば必らず葉と葉柄の接着點に置く。蛻皮に際しては、先づ絹絲を以て尾脚を葉面に固着せしめ、休眠一晝夜の後、始めて其舊衣の脫するを見る。斯くて老熟するときは去て樹上を匍ひ廻はり、適處を求めて、其尾端を樹枝の裏面に附着し、約一晝夜を經て舊皮を脫すれば、玆に蛹化を遂ぐ。蛹は頭尾を通じて長一寸一分を普通とし、大躰は三角形にして側扁なり。頭端には幅五厘、長二分許の扁平にして彎曲せる長突起を有し、胸腹部の腹面には二個の大なる突隆部及び數多の凸凹を存す。體色は帶綠黑褐をなし、背面の中央には大なる黑線ありて頭部の突起端より尾端に達し、此より數多の小黑支線を並發し、更にまた無數の小黑線を分派し、以てその蛹體を網羅す。

幼蟲には適當の保護色を有し、其一二齡の頃は、食樹の嫩芽に似たるも、成長すれば葉色と異ならず。而して其頭部の突起は、頗る食樹の芽鱗の老枯せしものに酷肖し、又其晝間靜止して動かず、頭部を芽鱗に近く向けて接着するが如きは、更に自然の妙を極む。就中、其擬形の最も巧妙なるは、蛹の枯葉を捲縮せる狀に扮するに在るなり。即はち其頭部の長突起は、宛然葉柄の如く、背上を縱貫せる黑線は、中肋の如く、此より支出せる小黑線は、葉脈の如く、網狀の小黑線は、亦樹葉の網狀脈にも髣髴たり其他大小數多の突起部の、枯葉の缺裂に異ならざる、又其襞積に似たる、其色の樹葉半ばは已に萎枯して、猶ほ微かに綠色を留むるに擬へる、特に蛹態の扁側にして、常に躰を一方に彎曲する狀の、枯葉を

懸垂せしが如きに至りては、何人も其造化の妙用に驚歎せざるは無きあり（其蛹躰を彎曲するは、全く其保護の爲にする性質なるべし、之を四面硝子を以て覆へる飼育器内にて試驗せしに、何等空氣の振動をも感ずること無りしに、猶は絶えず彎曲となせり）。

イシガキテフは成蟲にて越年するものにて、其春季四月中旬より下旬の頃に現はるゝものは、翅縁往々破れ、彩色亦頗ぶる衰ふ。次で五月中旬より六月上旬の間に出現し、其數は四月よりも遙に多し。次で七月上旬より下旬の間に出で、終りに九月中旬、十月上旬の間に出づるを見る（七月と九、十月の間、猶は一回の發生あらざるかと思ひ、數年注意するも、未だ之を認むること能はず）。蓋し春季に現はるゝものは卽ち前年最終に出でたるもの、越年せしにて、多くは山間溪畔の薜荔に産卵し、第一回の幼蟲は、此處に生育す。而して夏季を迎ひ、炎熱の加はるに及べば、山中の幽邃にして、日射の劇からざる處に食樹を求めて産卵す、是れ夏生種の幼蟲の發見し難き所以なり。成蟲も亦夏日には、炎熱を避けて清涼靜閑の境に移るもの多し、故に觀瀑納涼の際の如きは、點々緑樹間に往返して、一段の雅趣を添ふるを見る。
余は未だ此蝶に對する寄生蟲其他の天敵を多く發見せずと雖ども、アシナガバチの類には、之を加害するものあるなるべし。現に昨春六頭の幼蟲を捕ひ來りて室内に試育し（食樹の一枝を硝子壜に差し込みる儘にて、飼養箱を用ゐずして飼育せり）少時間外出せしに、僅かに一頭の死骸を留めて、他は悉ことく失踪せしに驚き、是れ或は家禽の爲に啄食せられしあらん、然るにても保護色觀察の無効に歸したるは遺憾なり、と獨語を發し居りしに、折しも一頭のアシナガバチの翔來りて、頻りに何物かを壜上の葉間に捜求し、其獲る所なきに及んで、中空指して飛び去れるを見たることあり。乃ち知る、曩に幼蟲を食盡せしは、卽ち此蜂にして、今や復たび來りて食料を索むるものなることを。於是乎、愈々昆蟲の嗅

覺の鋭利なるを知り、特に仇敵間に於ては、極めて鋭敏なる鳥類の視官を以てして、猶ほ足らざる所を補ひ、所謂害蟲を天然的に驅除するの効少からざることを感じき。

◎邦産二十四鳥羽蛾(Orneodes sp?)に對する疑問

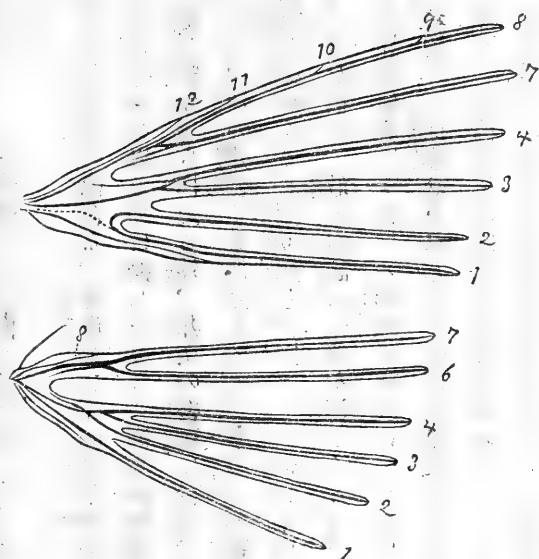
岐阜中學校敎諭　長野菊次郎

前號の英文欄の餘白に、邦産の二十四鳥羽蛾の圖を掲げて、其分布の一部を記し、其學名には Orneodes hexadactyla を以て是に擬したりき。抑も此奇異なる蛾につきては、名和氏によりて昆蟲世界第十號に其發見を紹介せられたる外、邦文の書籍に於て、未だ嘗て之を見たることなし。然るに不幸にも、前號の圖には、翅の分裂せる部分に於て、多少の誤謬あるのみならず、之が記載を缺きしを以て、或は世人の誤解を招がんこと測り難し。因りて、余が今日迄になしたる研究の一二を報ずることの、徒勞にあらざるべきを信じ、敢て本誌の一部を汚さんとす。

名和昆蟲研究所に於ける此蛾の來歴につきては、明治三十一年三月十二日、名和(靖)氏が水戸市常盤公園に於て、採集せられしものを以て嚆矢とす。之に三十四年十二月廿六日、岐阜市金華山麓に於て、吉田悦三、高橋喜男の兩氏が獲たるものと、三十五年一月一日に、岐阜縣揖斐郡霞間ヶ谷に於て、森宗太郎氏が採集したるものとを合して、僅かに四頭を藏するのみ。然れども、名和氏の證言によれば、明治三十二年二月十二日、當時神戸港在留のワイルマン氏が、其神戸附近にて採集せられたる標本中にても此蛾を一見せられたることあり、又農科大學助手土田都止雄氏が、偶々同大學の養蟲箱に、此蛾の數頭發生せしことを認め、多分忍冬より出でしものならんとの由を、名和氏に物語られし事ありと。

扨其名稱につきては、邦書の之を徵證するに足るべきもの無きを以て、更にカービー氏の歐洲蝶蛾譜

ケンブリッヂ博物誌、カムストック氏、パッカード氏等の昆蟲書に參照せしに、普く歐米に產する此蛾の一種に、オルネオデス(或はアルシタ)ヘキサダクチラ Orneodes(Alucita)hexadactyla と云へるものあり。其四翅は黃灰色にして、皆六片に分裂し、上に暗黑線を彩どり、展張は殆んど一吋の四分の三を數ふ。此

第一圖 本邦產二十四鳥羽蛾の翅脈 (原圖)

而して、其幼蟲は黃色にして、頭部は黃褐色を呈し忍冬類の花芽中に生育して繭を營む云々とあり。此の如き簡單なる記事によりて、其種名を確定することと能はざるは勿論なれども、十數種の書冊に載せたるもの、殆んど此の一種(ロイニス氏の動物書には他の一種をも記載せり)にして、且其幼蟲の嗜好植物が、忍冬の類ありとの點は、正に土田氏の談と一致する所あるより、遂に余輩をして本邦產のものも多分之と同種ならずや、との假定を下さしめき。然れども種名の考查の如きは、斯の如く輕擧に附すべきにあらざるを以て、爾來これが調查に從事せしに今日に及びては疑惑百出、轉た歸する所を知らざる境遇に陷りぬ。固より余の研究や、未だ其結末を告げず、而して早計にも、今日之を本誌に公にする所以のもの、一は大方諸君の、此蛾に關して、一層注意せられんことを希望するに存す。

余は本邦産の二十四鳥羽蛾と、歐米種との異同を述ぶるに先だち、Orneodes hexadactylaを整理するの必要を感ず。何となれば歐米普通の此種さへ、書冊によりて其學名を異にし、往々混雜を釀すの虞れあるを以てなり。

抑も此オルネヲデス ヘキサダクチラは、メイリック(Meyrick)氏の分類法に從へば、鱗翅目の螟蟲蛾族(Pyralidina) 多翼蛾科(Orneodidae) に隷するものにして、此屬の種類の世界に知られしものとては僅かに二十種許なり。然して歐米に普通あるは、即ち此ヘキサダクチラにて、英國にては之をTwenty plume mothと稱し、獨逸にてはGeisblatt geistehenと呼べり。元來、この蛾の四翅は、各六片に分裂して、都て二十四片あるに關せず、之を英國にて二十鳥羽蛾と稱すること、甚だ其當を得ざるが如しと雖ども Twentyとは、必ずしも二十と限りたるにあらず、稀には二十前後の不定數を指すことあるを以て、此意義に解しなば、敢て妨げなかるべし。然れども、斯る名稱は、學術上混亂の虞れやることをや慮はかりけん、エンサイクロペーデア、ブリタニカ(Encyclopedia Britanica)中には、確かに二十四鳥羽蛾(24 plumed moth)の名に改め置けり。

扨此蛾の學名につきては、始めリンネアス(Linneus)氏によりてAlucitaといへる屬名の下にHexadactylaてふ種名を命せられし、翼蛾科Pterophoridaeの中に配せられたり。蓋しAlucitaとは、羅甸語の蚊といふ意義にして、此種の蛾が靜かに飛ぶ狀態の、多少蚊に似たるを以て此名起り、Hexadactylaは六指といへる義を有し、其各翅の六裂せるによりて、扨は斯く名づけゝる。然るに學術の進歩するに從ひ、多翼蛾科Orneodidaeを設立するの必要生ずると共に、Alucita屬の意義を縮少することゝなしけん、アルシタ屬は今尚ほ翼蛾科中に存在するに關せず、多翼蛾屬Orneodesの名はラツレール(Latreille)氏によりて創設せ

られぬ。然れば今日にても、尚二十四鳥羽蛾をアルシータ屬に隷せしむる人少からず。去れば一見異屬の觀あるのみならず、其種名にも一二の異同を生じたれば、今普通の書籍を對照して、其異同を整理すること次の如し。

Alucita hexadactylaの稱を用ゐたる書は左の如し。

（一）Kirby. European butterfleis and moths. 1882. P. 415.
（二）Cassell. Natural history. Vol. VI. 1896. P. 69.
（三）Gordon. Our Conutry's butterfleis and moths. P. 86; Pl. 31, fig. 874.
（四）Leunis. Synopsis der Thierkunde. Bd. II, S. 365.
（五）Claus. Lehrbuch der Zoologie. 1897. S. 605.

Alucita polydactyla. Hb.の稱を用ゐたるは。

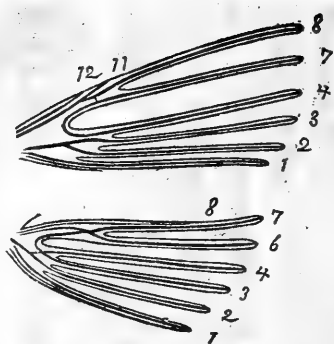
（一）The Cambridge natural history. 1901 Vol. VI, P. 426.
（二）Packard. Guide to the study of insects. 1889. P. 357.

Orneodes hexadactyla.の稱を用ひたるは。

（一）Comstock. Manual for the study of insects. P. 238.
（二）Meyrick. Handbook of British lepidoptera. 1895. P. 442.

又Encyclopedia Britanica にはO.hexadactylus とあり。之を總括すれば、四種の稱呼を生ずれども、畢竟一種の異名に過ぎざるなり。

扨メーリック氏の記述する所によれば、此多翼蛾科の特徴は、明なる單眼と發育したる吻と、三角形の翅とを有し、顎鬚は著しからず、前翅は六裂よして、室甚だ短かく、其第五脈を缺き、第七脈は分離し第八脈と第九脈とは相合せり。後翅も亦六裂にして室甚だ短かく、第五脈を缺き、第七脈は第六脈の基

部より發し、而して第八脈は獨立せり。」又其多翼蛾屬の特徴を擧げんに、顔面は突出せる鱗にて被はれ雄の觸角には微毛を生じ、唇鬚長くして斜に上方に向ひ、其第二關節は下方に突出せる鱗を有して稍總狀を呈し其先端は尖れり」。前翅は第五六の兩脈及び第九十の兩脈を缺けり。 次に廿四鳥羽蛾(O. hexad-actyla)は、翅の展張十三乃至十六ミリメートルにして、唇鬚の最終關節(第三)は第二と其長さ等しく、前翅は灰黃褐色にして、二個の前緣紋を有し、一は前方に、一は中央より後方にあり。中央帶は、其上部內方に向ひ、下部は中央外方に向へり。亞外緣帶は、黑くして白線を有し中央部擴張せり。 微毛ハ、灰色にして黑色を混ド、白色の橫線あり。」後翅は灰色にて、白色及び黑色の橫線を有し、微毛は灰色にして、白橫線を畫し、四橫線を形成せり。』とあり。然るに邦產の種、即ち金華山麓及び霞間谷にて採集したるものは、翅の展張十七八ミリメートルにして、吻は發育し觸角ハ微小なる關節七十餘個より成り、これが微毛及び鱗を生ド、唇鬚は斜に上方に向ひて、長形の鱗にて被はれ、第二關節は第三關節よりも長し前後翅は共に六片に裂けて灰色を呈し、尙微毛を密生したれば、其狀宛がら羽毛の如し。 前翅は、其前緣に數個の黑斑を點じ、黑色を呈せる基部帶中央帶、亞外緣帶、等を有すれども、 翅の分裂するが爲めに、殆んど斑紋なるやの觀あり。蓋し此等の部には、皆鱗を密生するを見る。後翅も亦前翅と同色にして、內後に近く二三の斑狀橫帶を認むべし。今此等の點を擧來りて、之を歐米種に比するに、既に多少の差異あり、而して此より更に一歩を進むべきは、其翅脈を剖撿するにあるなり。然るに名和氏の斯道に忠實なる、僅々四頭の標本を有するに止ま

第二圖 オルチテス、ヘキサダクチラの翅脈(イーリック氏原圖)

るゝ、其二頭を割きて研究の材料に給せらる、是れ余が深く感謝する所なり。余は此材料により、注意して其四翅を解去り、カムストック氏の鱗翅漂白法に從ひて、之を處理したり。即ち最初之をアルコールを以て潤ほし、次に十%の鹽酸水溶液に浸し、次に之を漂白粉液に移し、再び之を鹽酸液に、次に漂白粉液にと再三之を反覆し、最終に復之をアルコールに浸して、後鏡撿を加へしに、何ぞ圖らん、驚くべき差異の、翅脈の上に現れ來らんとは。即ちメーリック氏のオルチヲデス屬の記述には、前翅の第九十兩脈を缺くとあるに、本邦種に於ては、第一圖に示すが如く、明かに第九第十脈を存し、然かも鳳蝶屬に於けるが如く、第一脈と第二脈とを連接せる横脈あり。此脈につきては大に疑惑を生じたれば、四枝の前翅につきて、反覆之を查撿したるが、皆同一の觀を現はしたりき。後翅に至りては、畧相似たれども、一a脈の邊には、長き纖毛を密生して、之を除去すること困難なりしかば、一a脈につきては多少疑ひを存せざるを得ず。假に此點に對つては、多少の誤謬ありとするも、第一圖と第二圖とを比較せば思ひ半ばに過ぐるものあらん。顧ふに、余が此翅脈の研究に從事せしより、日尙ほ淺ければ、余の觀察或は正鵠を失せること無きにしもあらざる可し、唯られ第九脈と第十脈の存在の事に至りては、決して余が觀察の錯誤に出でしに非ざることを信じて疑はず。此の如く邦產の二十四鳥羽蛾が九、十兩脈を存せりとせば、メーリック氏の多翼蛾屬の定義とは符合せず。然らば多翼蛾屬の意義の範圍を、メーリック氏の說く所よりも、少しく擴張せしむるか、或は新に一屬を設くるに非ざれば、到底邦產種を入るべきの餘地なきや必矣。蓋し此科たる、僅に一科一屬を存するに過ぎざればなり。然れども、此大問題につきては、將來專門家の判斷に俟つあるのみ、無識の余輩何をか言はん。唯、余は前に假定せる考查の、全く輕擧に、且誤謬に出てしことを辯明して、本邦產の二十四鳥羽蛾は、歐米普通のOrneodes hexadactyla

に非ざることを断定し、暫くオルチヲデスの一種か(Orneodes sp.?)として疑ひを存し置かんのみ。但し余が所謂本邦産種とは、金華山麓及び霞間谷採集のものを指すに止まり、水戸産のものに至りては是に與からず。若し詳細に研究したらんには、或は本邦亦數種を産するやも測り難し。
余は此蛾につきて一層の研究を積み、若し多數の標本を得ることを得ば、外國の専門家に送りて、其種の撿定を請はんと欲す。然れども材料の豊富ならざる今日に於ては、猶は十分の研鑚を重ぬること能はざるの遺憾あり。大方の諸君、幸ひに此蛾につきて、大に注意せられ、若し之を採集せらるゝか、或は其幼蟲等を發見せられし時、一片報道の勞を給はり、併せて標本の分與を請ふことを得ば、幸甚將た何ぞこれに及かんや。

將に此編を脱稿せんとするに際り、宮崎縣竹井繁濔氏より、次の報を得たり「昆蟲世界第六十五號記載のトリバが昨年四月中旬、宮崎縣南那珂郡細田村大字塚田にて棕櫚の葉裏に居りしもの二頭を捕獲せり」云々、余が希望の一端、直に玆に酬ひ來れるを喜び、敢て望蜀の情を編端に附記す。

◎岡田氏の採集寄贈に係る貝殼蟲種

福岡縣　桑名伊之吉

昆蟲採集及び標本製作法に就ては、幾多の書籍あるを以て、今之を玆に細説を重ぬるは、無益の勞と云ふべし。されど貝殼蟲は、他の昆蟲と同視すべからざるものなれば、少しく其採集法を述べんとす。蓋し普通の採集者にして、能く昆蟲各目に通じ、自由に採集し得べき經驗ありと雖も、貝殼蟲に至りては幼稚拙劣なることあればなり。例へば年々幾多の採集者が、ブラジルの郊野や、南アフリカの山中、メリアキベリゴの河畔に採集を試むると雖も、所産貝殼蟲の未だ殆んど學界に知られざる事實に徴すべし。然かも是等の地方には、貝殼蟲を産せざるにはあらず、少しく經驗を有する者なりせば、一日の採集に

尙は能く既知の種類に增せる多種類を、同地に於て撿索し得べし。原來、熱帶地方には貝殼蟲の發生多く、中には奇異なる種類もありて、植物を害すること特に甚しきを以てなり。而して斯種や、幾多の昆蟲中、最とも採集し易く、且つ之を保存するにも、多くの容層を要せざるものとす。

一、採集の好適地　貝殼蟲は南北兩極に近づくに從ひて、生存するもの少なし、常に四十度以外の兩極に到れば、多く之あるを見ず。故に寒帶地方に於て、之を採集するの、多勞にして且少獲なるに反し、其生存に適する溫帶及び熱帶地方に於ては、頗ぶる蒐收に利便あり。特に本邦の如く地勢南北に延長して、あらゆる氣候を有する國に於ては、其何れの處たるを問はず、之が發生蕃殖を見る。就中、海拔の差甚はだしからざる土地を以て、好適の採集地とすべし。

二、託生の植物類　貝殼蟲は主に樹木に寄生するものなれば、寒帶圈内の如く、冬季に草木の凋落する、隆寒不毛の地には生存すること能はず。但或種にありては、植物の根部に寄生するを以て、假し幹葉は枯落するも、なほ食を地下の根部に求め得るが故に、寒威酷烈の地方にも之を見ることあり。而して溫帶地方にありては、樫、櫟、柳、楡、樟、樺、松、柏、薔薇及び果樹の枝條に多く、熱帶地方に行くに從ひて、草木の葉面に寄生するを見ることあるべし。凡そ熱帶地方なりせば、各種の植物に注意せざる可らざるも、殊に低地に培養せしものに留目すべし。又熱帶地方より移し來る植物を細撿するときは、坐ながらにして幾多の良標本を得べく、園藝用の溫窖は、また貝殼蟲採集の一良地となす。

三、貝殼蟲辨知法　貝殼蟲は著しく退化したる昆蟲にして、雌蟲は全たく翅を缺如し、且つ常に活動せず、之に反して雄蟲は二翅を有す。今野外採集の時に矚目すべき要點を擧ぐれば、左の如し。

（イ）靜止不動の昆蟲にして、多少の分泌物を以て被はれたるもの。

（ロ）外殼堅實にして半球形のもの、扁平楕圓形のもの、腫起せる圓形のもの及び五倍子樣のもの。

(ハ) 硬體又は軟軀にして、針頭大より、短胴服の鈕子の大さを有するもの。
(ニ) 綿質若しくは蠟質の分泌物の、樹木に附着する處。

四、貝殼蟲採集法　貝殼蟲寄居の局部を截取るべし、若し大樹の皮面に於て、之を發見したるときは其部分を利刀にて削取るべし。

(イ) 野外採集の時は、貝殼蟲の寄生せる局部を截取り、之を白紙にて包み置くべし。若しレカニアム種其他の軟軀種、若くは綿質の分泌物を以て被包せられたる種類なりせば、其一半を乾製標本用に充て、他の一半をば、酒精に浸藏して保存すべし。
(ロ) 封筒、紙箱等は、採集の際に必要なる携帶品の一たり。
(ハ) 蟲の體色、卵嚢の形狀等は、採集の際に採集野帳に記載し、尙は寫生圖をも添附し置くべし。
(ニ) 託生植物は、必ず蟲と共に採集し、其種名等を記入し置くべし。

五、標本の貯藏法　貝殼蟲の宿れる枝朶をば、之を二寸許に切斷し、針に貫きて標本保存函に刺し納むべし。又硝子管に入れ置くときは、蟲體の脫落するも、甲乙相混錯するの憂ひなきを以て適良とす。但、肥大なる軟軀の種なるときは、酒精に浸すべし。(未完)

◎邦産瘧媒蚊種上古棲息の説（前）

仙臺宕麓　晴耕雨讀子

客冬發行の「昆蟲世界」に古への慶雲は、今の蚊柱たらん、との臆斷を寄せたりしが、これのみにては猶ほ悉さゞる節もあれば、今茲に彼の説と聯繫の事實をものして、邦産瘧媒蚊種に對する一片の解説を試むるも、强ち無用にあらぬなる可し。蓋し斯種の問題は、未だ發表せらるゝに至らずと信ずるを以て、此際研究の端緒を啓き置かば、將來或ひは、種類調査の事業等に、多少の便宜あるべければなり。

一蚊帳の有無　上古、本邦に防蚊の具無し、中世以還、始めて蚊屋の製あるも、たゞ纔かに、貴族間の使用に供せられしに止まり、一般國民は之を常用とせざりき。萬葉集の「山田守翁置蚊火」云々、藤

原清輔が袋草紙に「忍びで行ひけるに、蚊のくひければ、おをぎして、うちはをつゝ、眠りけるに」云々、及び和泉式部家集の「蚊やり火の煙けふたくあふぐ間に夜は暑さも覺えざりけり」等に徵すべし。然るを谷川士淸氏が、古へに蚊帳ある事を證せんとて「蚊子幮は蚊屋なり、日本紀に見えたり、儀式帳に蚊屋の帷とも見ゆ」と言はれしは如何にや。和名類聚鈔に蚊遣火を加夜利比と訓し置きながら、蚊帳の名目を缺き、古き物語本に、亦其名を載せざるより見るも、日本紀云々の説は疑はし。嬉遊笑覽に

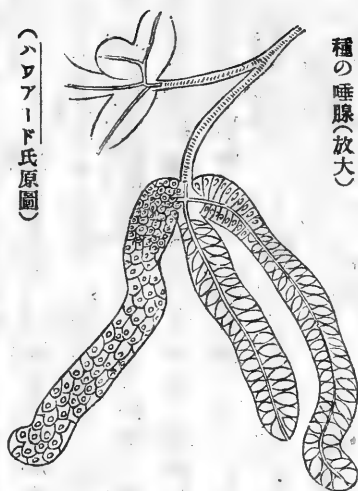
蚊屋の名は、太神宮儀式帳、延喜式などに見えたれど、むかしは下さまの用ひざりしなるべし。春日驗記に、白き蚊帳をかけたるが見えたり。もと蚊やは、今の如くなる物にあらず、竹棹を四角にたて、それにさげるなり。故に蚊帳の耳は、布毎に付たるなり。吉日をゑらびてつりそめ、又吉日に收ろ。晝の間は不用なれば、片端の竹を一方によせて、帳を一處におつめて、裾をとりて片端の竹に打かけ置なり。

とあるは穩當にて、天野信景氏が「夏の間、そのかみ、如何にして蚊を防ぎし。唐土の書にも蚊幮といへり、我國の制と異なり。日本の蚊帳は密家の壁代に似たり」と怪しみしも、一理無きにあらず。按ずるに、草菴和歌集に、紙屋紙の名を存え、近江蚊屋の製造の端緒を慶長に開きて、元和以後に盛んとなりし事など、想ひ合すれば、北條時代にも專はら紙帳を用ゐしなるべし。三省錄に一書を引て、紙帳の六德を述べたる中に「紙もて造れる蚊幮一はりは」とあり、又燈前漫錄の戰國時代困苦の條に「夏は蚊に責られ、幾夜もまぶたを合さぬがちなり（中略）一夜二夜などは、繩棚に、あるひは折釘、鎗抔に細引ひつはり、澁紙覆ひたるばかりなるべし、又は森林萱原などの中に、かゞみ居て、あふき息をもつかれず、藪蚊、蛇、百足などの毒蟲に責ふれ」とあるも、其用多かりしを知るに足りぬべし。今に僻陬寒鄉に於て、粗製の紙帳を用ゐる處あり、夏より秋の間、絕えず蚊帳を垂下せる儘になし置くの風ありと云へるも、蓋し此等の名殘なるべし。併し乍ふ、御產所日記に、永亨六年義勝誕生の時、鶴龜の紋ある蚊

帳を調へざる事見え、老人雜話には「信長の頃、常盤井殿といふ公家は、目見を望む人あり。媒介の人言いれければ、夏の衣裳にて耻かしと宣ふ。何か苦しからずと申ければ、彼人も夏の裝束ならんと思ひしに、蚊帳を身に卷て逢れしとぞ」の實說をさへ載せたれば、早や足利氏の全盛時代には、豪奢の蚊帳をも用ゐしめ、其末路に至れば、落魄貧窮の家と雖ども、上流には必ず之を備へしものか。扨往時は、貧者のこれを用ゐること、何國も少なかりしにや、高士傳には「董昌貧無レ幬、傭債作ニ蚊幬一」とあり。又唐土に古くより紙帳、紙幃の名あるも、是は、或ひは厚き白布を以て、或ひは厚絹を以て製り、主として冬月防寒の用に充てしものなれば、彼我の紙帳は、たゞ其稱を同うして、其製と其用を異にせしなり。但、本邦にても、近古までは、幼孩のためにとて、季節を擇ばず、蚊帳を使用せし事あるも、防寒のためなりしか、將た除蟲の爲めなりしやは詳かならず。

二國書の記載　本邦の大古史及び上古史には、蚊屬の發生加害と瘧疾流行の記事とを缺けり。故に其根據の薄弱なる前說のみを以て、未だ上古に蚊屬棲息の確證となすに足らず。而して之が考徵に資すべきは、實に中古時代の記載にあり。即はち太神宮式諸社裝飾の部に「內蚊屋一條、絹蚊屋二條」云々、醍醐、三條、堀河の諸帝が　至尊の玉體を以て、なほ瘧疾に罹らせ給ひたりし正史の上の事實及び新撰字鏡に蚊字と痎字とを收め、和名鈔の瘧病、桓山丸、離瘧湯、瘧鬼、蚊等に邦訓を施し置けるが如きは、共に動すべからざる左券にて、其他園太園、宇治拾遺物語、大鏡、古今著聞集、源氏物語、濱松中納言物語、東鑑、枕艸紙、堤中納言物語、公事根源、禁祕抄、平家物語等に散見の蚊毒、瘧疾、疫鬼に關する記事、また有力の好例證たるを失はず。今之を綜合一括して、左に要點を掲げ、覽者をして諸書探求の煩勞を避けしめん。

一　書史の記載は、千二百年前より、蚊屬の發生加害を證明し、又約千年前より、瘧疾流行して、數百年間、綿々遺傳したる事實たも知らしむ。
二　中世は防蚊具の不完全なりし爲めか、上は至尊より、縉紳武將の貴族に至るまで、瘧疾を病む者少なからざりき。
三　其病因及び媒介物に對する解説は、全たく唐土の迷謬を襲ひ、或ひは之を瘧鬼の祟りとなし、或ひは之を胡蝶を捕獲せしが爲めなりとも言へり。
四　當時、瘧病の處方無きにあらざりしも、世俗は迷信に驅られて、祈禱厭呪の法術に信賴する者多く、醫藥の如きは、寧ろ之を重視せざりき。
五　普通蚊種並に豹脚種など、衞生の害蟲と認めしも、瘧媒蚊の存在は、更に之を知る者無かりき。（第一圖參看）

第一圖　普通蚊種の唾腺（放大）
（ハワアード氏原圖）

斯く擧げ來れば、上古史には、一も徵證すべき要素を具備せざるが如くなるも、他方面より觀れば、また全たく之を認容すべき餘地無きにしもあらず。則はち、允恭紀二年の條下に蘭を以て山に行き、蠛を撥はんとするとあるは、明らかに蚊族蠓子類の生存を知らしむるものある可く、應神紀、安康紀雄略紀等に、蚊字を冠ふしたる地名人名の散見するは、假ひ假借文字にもあれ、蚊屬棲息の影響とすべく、延喜式に、蚊野、野蚊等の神社名、及びエヤミグサてふ藥料を載せたる、大寶元年より追儺の儀式を行へる等の事實は、孰れも其以前より、蚊屬の發生と、瘧疾の流行を示すものなるべし。例へば北海道舊土人が、今に至るまで蚊帳を用ゐざるに、祖先以來、蚊屬の總稱としてエット タンネ キキリ（長鼻蟲の義なり、福井縣敦賀地方にても、蚊の吻とは云はずして、蚊の鼻と云ふとぞ）の名を存するが如く、未だ邦內に蚊帳の製無かりし當

時より、既に蚊子の形質を知り、又能く瘧疾の怖るべきことをも會得せし結果たらずとせんや。辭書に云ふ、蛺蝶の古名カハビラコは、蝙蝠の子の義にて、蝙蝠の邦訓カハホリは、蚊屠の語より來れりと。斯れば、蚊子の邦人に知られしは、極めて遼遠に屬するを以て、單だ上古に蚊帳無かりしとて、蚊屬の棲息を否認し得べきにはあらず。況して、これを常食とする蜻蛉の、他の衛生害蟲と丶もに、開國草創の際より、其性貌を知られしに於てをや。

三蚊屬の移殖　既記の臆想を以て、幸はひに誤謬に出でざらしめば、更に既往に遡りて、上古に於ける瘧媒蚊の發生加害をも、立證し得べきものあり。史に傳ふ、日本武尊の近江膽吹山の邪神を征し給ふや、その毒氣に觸れて、即はち發病し給ひきと。記事頗ぶる簡約にして、なほ半面を窺ひ知ること能はざるも、或ひはこれ、當時瘧疾に罹らせ給ひたりしには非ざりしか。斯く言はゞ、人のこれを難じて、附會虛妄の說となさんも、瘧媒蚊原種の、邦產と他產とに論無く、苟くも昆蟲の移殖力の强大なることを了解し、併せて諸を神人雜居の時より、隣邦と交通を絕たざるの結果、多々他國產蟲種を船載せし實例に鑒みれば、豈に蚊屬に於てのみ、其事無しと謂ふを得べけんや。米國の昆蟲學者ハワード（L. O. Howard.）氏は蚊子の移轉蕃殖を證せんとて「太平洋心の布哇國は、原と無蚊島たりしに、輓近米國との航路開通の後は、船房より飛散分布せし蚊屬の爲めに、漸やく侵襲を被け、現時蕃殖の狀、實に驚くに堪へたり」と云へり。然かも余は寧ろ邦產鳳蝶科の或種すら、其初め外國より移されしに非ずやと疑ふ程なれば、大船巨舶の出入に伴へる蚊屬の移殖の如きは、敢て奇とするに足らざるべし。且これ、常に翅力の微弱なる蚊屬と雖ども、或時期に適順の風力を藉る時は、なほ能く五六十哩の遠地に飛行せし實例無きにあらねば、甲地より乙地に移殖し、乙地より丙地に分布し、轉々遂に他の各地にも侵入するに

至るべきは、極めて覩易き道理なり。此に至りて余は、昨秋十月初旬、我が亞米利加丸が、米國へ航行の次、稀有の大颶風に遭ふて、陸地を距る杳渺四百餘浬の洋中に、飜颺浮沈の最中、何地よりか吹送られけん、蝗蟲、蜻蛉の狂濤驚瀾の間を超え來りて、船上に避難せしもの夥多なりき、との近信の、確實なることをも認むるに躊躇せず。

四瘧疾の流行　西洋の古國希臘に於て、瘧熱に四性あることを診別し、且截瘧方を究明せしは、西暦紀元前、約四百年の頃にして、羅馬の諸學者が、瘧疾の昆蟲に關係を有するものあることを唱道せしも亦紀元前にありきと云へば、彼の有毒蚊種の歐南を蹂躙せし初めは、實にそれ我が上世期に在りしか。然は云へ、解熱特効劑の南米秘魯に於ける發見の、既往四百年を算ふるに止まり、又その病因(第二圖參看)の審明の、僅々二十年に滿たざる事實を以て之を推すに、當時考定の藥劑なるものは、常山、柴胡の漢醫方と、左のみ軒輊無かりしならん。按ずるに、新舊兩約全書には、蚊と瘧疾の記事を缺けども屢次熱病及び疫癘の語あり。是れ恐らくは、今の瘧疾をも含ましたるものなる可し。蓋し地中海沿岸諸國は、之が發生地域に屬し、古來侵害を被ふりし事幾回なるを知らざれば、小亞細亞地方も、其厄災を免がれ得ざる可ければなり。』飜へつて東洋に於ては、我が神代の頃より、蚤く支那に流行し、書經の金滕篇にも「惟、爾元孫某、遘ニ厲虐疾一(中畧)乃納ニ册于金滕之匱中一、王翼日乃瘳、」とあり。稍降りて春秋の世に至れば、之を患ふる者次第に加はりしが如く、左傳に數次之を擧げし中にも、懿德帝の御宇に當る、定公四年三月の傳には「水潦方降、疾瘧方起、中山不レ服、」と見え、其他禮記、周禮より古本草書に至るまで、鑿々證徵すべき記事なは頗ぶる多く、特に唐代に纂輯の醫方書に、療瘧方數十首を列擧せしも驚くべし。斯る經驗のありしより、能く蚊子と瘧疾の特性をも辨知せしにや、物理小識には「雨

水多、則蚊多、天晴南薰久、則蚊亦少、（中略）江陵古岸李浦無レ蚊、荊州高齋無レ蚊、今楊州三層樓無レ蚊五老峯無レ蚊、以二風涼一也、」と云ひ、東觀漢記には「壯士不レ病レ瘧、」とも云へり。』本邦にては、有史以來、時々流行して上下其厄に罹れりと雖ども、當時醫家の宗とする所は、唐土の新古兩方に則とりて、風氣に侵されて之を內に發するもの、と云ふに過ぎざりしかば、原病學上の議論には、一も視るべきの價値あるもの無く、遂に叢桂亭醫事小言をして「如何の事にや、府下八九年、追レ年て瘧多く、寬政三四年、寒暑の分けもなく四季共に多く、頒白以上、赤子にも瘧あり」の疑問を發さしむるに至りぬ。去れど下總、常陸、近江等の湖沼に富める諸國、若くは尾張、美濃、越前の局部の如き沮洳の地に、其流行の猖獗なるを認めしは明確にて、兼て少壯者に多く、冬春季に少なき事實をも知悉せしに似たり。斯くて文化の末年までは、痢瘧同因論の解釋の下に、主はら漢醫方のみを襲用せしが、文政に至り、宇田川榛齋氏の和蘭藥鏡によりて、始めて機那劑有効の新説行はれ、爾來、洋醫方は舊説を壓倒して、之が病理、經過、治方等次第に分明となりしかど、なほ近く數年前までは、其原因を沼氣の上騰に歸して、泥沼熱の稱を命じ、諸を昆蟲の媒介と思料する者とては、更に世に無かりき。』韓國に瘧疾の流行する事は、嘗て之を耳にせしも、記載の材料に乏しければ、茲に引照するに由無し。恐らくは、和漢のそれと甚はだしき相違なかる可きか。』臺灣島に至りては、氣溫頗ぶる高く周歲蚊屬の發生を絕たず。剩さへ、內地產と其種を異にするを以て、行毒加害亦猛烈を極め、去る卅二

第二圖　瘧媒蚊の唾腺（放大）

（ハワアード氏原圖）

卅三年の兩年度の如きは、平均五千五百三十二名の新患者に對して、其六十一人即はち每千人に十一人を亡せしめぬ。去れば軍隊衛生の點に於ても、彼此其狀を異にし、內地兵士の死亡數に對して、同年までは、七倍半の多きを算し、今や瘧媒蚊の驅防法を講じ、著るしく患者減少の好成蹟を擧げたりと稱し乍ら、卅四年には、千人に六、五弱、卅五年には六、四强の死亡數を示しき。聞く、治療の藥方また加減を要するものありと、或ひは然らんか。』其他、九州より北海道に至る間には、瘧疾患者を見ざるの地方無しと雖ども、槪むね良性に屬するを以て、療法また左まで困難にあらず。唯、沖繩縣八重山島に、臺灣と同種の蚊屬を產すとは、嘗て博士緒方正規氏の證明せし所、萬里絕海の無人島たる南鳥島に、一種有毒性の蚊子を發生すとは、昨年八月、我が特派軍艦便乘者の報告せし所なり。』今此等の諸例を湊合し來りて、更に之を上古の事實に推すに、對岸の發生地とは、僅かに一條の海流を隔て、其氣候の蒸熱盛んにして、植物に饒かなる等は、必らずや開闢の往時より、之が蕃殖を拒まざりしこと、猶は現今の北海道に蚊屬の多きが如き歟。況んや、南隣の諸群島より、延て大陸の南東部一帶の地は、實に瘧媒蚊種發生の中心點を以て目せらるゝをや。是れ諸舊記に、上古の瘧疾流行を缺くに關はらず、なほ其媒介蚊種の棲息を信ぜんとする大要なり。（未完）

新年海
皇后宮御歌
いくさ船いかりたろして仇浪も音せぬ御代の年祝ふらし。

◎第拾四回全國害蟲驅除講習會員の五分時演說

舊冬十一月廿五日より二週間、當昆蟲研究所內に開會の第拾四回全國害蟲驅除講習會に於て、會員の催せる例の五分時演說中、特

に時弊に中れるもの數者を採りて、各地方に於ける狀況を知るの資となす。（編者記す）

（一）　昆蟲學思想未發達の影響に就て　　島根縣　安達庸一

現今本邦に於て最とも主要なる民業の首位を占むる農業界を顧望いたしますと、害蟲と云ふ仇敵の爲めに、年々歳々實に夥たしい損耗を被ふッて居ります。此一事だけは如何なる愚民でも知らぬ者が無からうと信じます。併し乍ら惜い事には、農家は未だ嘗て自發的に了解的に此が驅防策を講じた事が無いのであります。それには種々の原因もありませうが、一言以て括約致しますれば、昆蟲學思想に乏しいからの事であります。そこで當局者は各方面から方策を考案しまして、害蟲の驅防とか、益蟲の保護とかと色々に啓發するやうに導いて居りますけれども、悲哉、その頑迷なる因習は、殆んど膠漆性をなしまして一向に効能が無く、遂に其敎へをも聽かぬ、依然として數百年前の驅除法即はち蟲送りや、御札立てを以て農家の能事了れりと思ふて居るので、瑞穗國の美稱を得ました豐秋津洲も、今や不見穗の國の貧秋津島と云ふやうな、哀れ墓ない有樣を現し來りまして、年々外國米の爲めに幾千萬圓を取らるゝ次第でありますが、是は國家の前途に於て、最とも懸念すべき事柄であらうと存じます。然るに其職を盡さぬ農家の頑迷を打破し難しとすれば、他に一新活路を求むるの必要があるのであります。私の所謂、活路とは、國民敎育と云ふに歸着するのでありますが、彼の米國の如きは、夙に實業敎育を奬勵致しまして小學校時代から應用昆蟲學を敎科の一として敎授するとの事でありますから、我國でも其轍を踏ましたならば、晩くも十年の後には、必らず見るべきの成蹟が現はれて、其時こそは國民一齊に起て國利民福を圖るであらうと存じます。然るに今日の樣な敎目でありますと、容易く斯かる目的を成遂ぐる事が出來んのであります、中には寧ろ妨げとなるべき事もありますから……とは申し乍ら、此樣な希望を懷いて、之を實地に敎授して見やうと云ふには、先づ敎へられんければ成りませンから、私は此度遙々參りまして、名和先生の訓陶を願ふ事にしたのであります。恐らくは滿堂の諸君も同樣の必要を感せらるゝ事と信じますが、感慨の餘り一言茲に述ぶるのであります。

（二）　昆蟲學思想の喚起及び普及の一捷路　　滋賀縣　西川豐次郎

昆蟲の發生經過効害等に就きましては、私は嘗て少しく學ンだ事がありますが、特に今回の講習で、名和硏究所長始め、講師諸君の熱心なる敎授に預かりまして、大に得る所がありました。然るに斯學思想を喚起し、及び普及せしむるの方法に就て、私は平生考へて居りますが、それには歌が一番に宜しから

うと存じます。と申すのは學校で謳ふ唱歌でも、巷間で謳ふ俗歌でも、之を口にして居る間に不知不識その文句を覺へる事は明かな事で、又唱歌が德性の涵養上、莫大な利益ある事も既に一般に認むる所でありまして、彼の鐵道唱歌の如きは、今や海濱山奥までも擴がりまして、到る處の小學兒童は勿論、商家の小僧に將た子守の小女に皆「汽笛一聲新橋を」と歌ふでは有ませぬか。それで私は昆蟲の利益に關する唱歌や、害蟲驅除に關する唱歌や、益蟲保護に關する唱歌を作りまして、學校生徒に謳はしたならば何時と無く農家一般にも行渡りまして、次第に其事が實行さるゝ樣になるだらうと考へます。私は少し以前から此念がありましたので、雜誌などにあるのは見當り次第集めて居りましたが、其中で最とも面白く感じましたのは、益蟲害蟲の數へ歌と、先月かの昆蟲世界にありました子守歌であります、聞く所によれば、長野縣では近頃此事が流行して居るさうであります。之を要するに、人間と云ふものは意地の惡いもので、見る勿れと申せば見たい、聽く勿れと申せば聽きたいと云ふ念を起しますから、假令規則や何やらで、事喧ましく申した所で、其一時は行はれませうが、先づ健忘の仲間入は免がれ得ません甚だしきは反抗の擧動をなす事もありますから、私は昆蟲學思想の喚起及び普及の爲めには、高潔流暢の唱歌を作ッて學校で謳はしめ、更に稍程度の卑くして俗歌に近いものを作ッて一般の子守や、農家の間に行はれしめたならば、從來の卑穢なる俗歌を改良する事も出來、そして斯學の智識を注入して最後の目的を成就する事が早からうかと信じます。就きましては先づ第一に製定の必要があるのは、立派な唱歌でありますが、專門家に材料を與へましたならば、作歌も作曲も、左まで困難な事とは思はれませんから、是非早く之を實施して、斯學開發の用に供したいと願ふのであります。

（三）蠶兒に寄生する蛆蠅の驅防談

長野縣　三澤勝重

私は秋蠶に就て意見を述べやうと思ふて居りましたが、先刻蠶蛆に就ての演説がありましたから、俄にそれと不少の關係を持ッて居る題に就て一言致す事にしました。抑も此害蟲の蠶業界に與へる損害と申すものは、實に莫大なもので、少くも年々五十万圓以上の損失を來たすのであらうとの事でありますが就中吾が長野縣のやうな蠶種製造地では、非常な損害と苦痛とを被ふるのであります。而して其蕃殖の度合は、年一年と增加致すので、此有樣で繼續をした日には、將來大恐慌を起すことが有らうと信じて疑ひを置きません。それと申すのは、昨今の處、北海道と遠隔の島國を除きますれば、全國到處其害がありまして、三十年前までは何れの桑園の桑葉を用ゐましても、能く歩が附て善良な種子を製造する事

の出來た長野縣ですから、蠶業の發達と種子屋の增加に連れて、此害蟲の移殖甚はだしく、今日では普通の桑園のものでは、到底製種用に適さん處から、態々五六里もある遠方に桑園を仕立て種子を製造して居る姿であります。故に桑樹の手入に致せ、摘葉の運搬に致せ、其不便と申すものは多大でありまして今年の如きは被害の少ない地方ですら二三割の損害を來たし、甚はだしい地方になりますと九割以上即はち殆んど全部の被害がありました爲め、蠶種の出來ン土地もあッたのであります。斯う計りでは御解りに成りますまいが、私の縣には六千餘名の製種家がありまして、其手から年々二百万枚内外の蠶種を全國各地に供給するのでありますから、此蛆蠅のためには當業一般の苦心と申すものは中々一方でありませぬ、隨ッて其營業を廢止するやうな者の起るのも、亦實に已むを得ない次第であります。而して之が驅防法の如きも、既にそれ〳〵研究を積れた考案のあるに關はらぞ、未だ其全功を收め得ないのは、畢竟當業者に昆蟲學思想の缺乏して居る爲めであらうと信じます。勿論私の地方には各郡に蠶種同業組合がありますから、驅除規程を設定してそれ〳〵驅防を奬行して居りますが、中々容易に大害を滅盡さする事が出來ンのであります。先づ此くの如き次第で、何時までも默過して居りますれば、一年は一年と蠶蛆加害の度を擴めまして、將來更に今日に倍したる損失を招ぐの日が無いとも限らんのでありますから、それに對しての救濟策としては、私ども御同樣に歸鄕の日は、一般當業者に昆蟲學思想を注入して、大に皷吹の勞を取るより外に手段が無い事と存じます、即はち根源から驅防せんければ、被害を免がれ得ない事と信ずるのであります。然し此一事計りでは中々實施に困難な事もありますから、或嚴重な法令を布て貰ひまして、强制的に施行させるのも、當今の時勢上亦已むを得ないのであります………斯く申した處で、決して發令を好むのでは無いが………彼の枝葉に拘泥して、屑々たる驅防を施すが如きは遠い未來の事で、現在に於ては的切な方法とは思はれませぬ。兎に角、國家の利害問題でありますから、深く諸君の考慮を煩はしたいと存じます。

（四）　害蟲に對する吾が地方の迷信誤解　　香川縣　佐々木傳五郎

私は今朝、永澤先生より御話になりました「迷信」といふ事に就きまして、吾が住村に於て專はら行はれる迷信誤解を、御參考に述ぶる考へであります。偖私の地方に於て行はれる迷信には、四つありまして其中、第一は曾て昆蟲世界誌上にも掲載されてありました「蟲よけの御守り」の一種でありますが、是は最とも盛ンに流行して居ります。即はち諸國の著名なる神社から、例の御札を受けて來まして、之を田

畑に立て置くので有ります。第二は御水と申すものでありますが、是は故らに徳島縣下にある御所神社に行き、若干の初穂料を献納しまして、神主から其御水を貰ひ、之を害蟲の發生する田畑へ、笹を以て撒かけるのであります。そして是は日歸りでなければ、其靈驗が無い抔といひまして、遠隔地の者でも必らず其日に歸宅する事に致して、此水を持ッて居るものは、途中で休憩しやうと思ひましても、養蠶家などは休まさぬといふことであります。彼の三十年のウンカ大發生の時などは、最とも盛ンでありました、然るに如何なる譯か、其年に他村では、不幸にも大害を受けましたに關はらず、私の村は大なる害は無かつたのです。仍て迷信者は益々其度を高くして、全たく御水の御蔭と信じまして、益々尊ぶ様になりました。第三は蟲送りであります、是は古來傳ッて居る方でありまして、處の神主が嚮導となりまして、前に天狗の面を立てゝ大鼓を打ち乍ら「實盛さんの御通りじや、あと見ずに前き行け」と大聲に呼ばり、各小字を廻るのでありますが、方言實盛蟲又はカブト蟲と云ふもの、即はちイチモジセセリの幼蟲を取ッて、之を小字の西端へ持ち行きて、驅殺するのであります。是は驅除の一法としては幾分か其効力がありませうが、今は全たく形式的に流れて、蟲一匹でも其一行に賴めば、それで全作の驅除は出來たものと思ふて居るのであります、實に恥入ッた次第であります。第四は百万遍と云ふて、害蟲發生すれば氏神に集ッて、大なる念珠を以て念佛を百万遍唱へるのであります。是は昔し害蟲が發しました時、行ふて非常な効力有ッたと云ふて、彼の三十年にも行ひました、但し是は多く、疫病流行の際に行ふもののでありまして、私が知ッてから、害蟲の爲めに行ふたのは此年が初めてで有りました。其他迷信誤解のことを申上げますれば、實に多々ありますが、畢竟昆蟲思想に乏しくして、其何者たるを知らざるばかりでなく、之が發生經過と云ふことに付ては、全たく考へが無いから、此の如き迷ひが生ずるのであります。たま〳〵之を排斥する半信の人あるも、大勢の爲めには、遂に其仲間に引き入られてしまうのであります。故に親切なる官の驅除法奬勵が有ッても、之を强制的にやらせますと、只表面的即はち申分の爲めに餘義なく一度位ゐは行らうかと云ふ樣な次第で、又中には之を行はずに僞るものなどが有ます。故に私は此等の迷信を除いて、眞正の驅除方法を行はしめるには、實地的に勵行するの他は無い事と思ひます。仍て名和先生の高名を慕ひ、今回入會致した譯で、今後私の決心は、教授に預りし上は、實地に害蟲驅除を行ふと同時に、斯學思想の普及を奬勵するの考へで有ります。

雜錄

新年海
東宮御歌
船毎にしろしの船手うちなびき浦賑はしく年立ちにけり。

◎米國昆蟲界の所感一二

在米國桑港　名和梅吉

◎家蠅の群集　余の始めて米國領土シャトル市に上陸し、尋で桑港及びサンホゼー市等を巡覧するや其間最も多く目に觸れしものは、唯家蠅の群集にてありき。該蟲は市内到る處に多く飛翔するが中にも特に夥しく密集群飛するは、各馬車會社の近傍及び八百屋の店頭なり。人あり若し其店前を通過する時には、一時に蠅群の飛揚して、宛がら一種名狀すべからざる大黑塊を現出するを見ん。而して斯く多くの蠅の發生するは、本邦と異なり、此國は畜產業盛んにして、馬、牛其他の家畜を飼育する處多きよりその種族の繁殖次第に多きを加へ、且氣候の比較上温暖なるは、益々蕃殖を夥くするに起る。但スタンフオールド大學所在地たる、前者よりは遙かに低温に、且昨今の如きは寒氣酷烈なるに、なほ其發生加害の甚はだしきこと此くの如し、是れ聊か邦人の奇異に感ずる所なり。之が驅除豫防用としては、本邦のそれと同じく蠅叩きあるものありて、或ひは植物を利用して之を製し、或ひは銅線の如きものを束ねて恰かも棕櫚葉製と同形に造れるもあり。去れど未だ此等のものを以て驅殺し盡せることを聽かず。唯一種最とも普通の方法としては、八百屋、菓子店、又は他の店頭に用ゐて、驅除の効を奏すこと多きものを粘液劑の蠅捕紙となす。是は方一尺五寸に一尺位ゐの紙面に、黃色の粘着性樹脂の類を塗抹せしものにて、恰もアラビヤゴム若くはワニスを塗抹したるが如し。若し誤つて蠅のこれに止まることあれば、直ちに翅脚を捉れて復た飛去ることを得せしめざる輕便の驅除用品にて、價ひも亦低し。即はち竹の皮に鳥黐を塗りて驅除すると同一趣向に出でしものなり。

◎大形竹節蟲種　桑港のゴーデンゲート公園内には一大博物館ありて、中に宇内の珍奇數多を蒐收す場の一隅には昆蟲標本三十餘箱の陳列あるが中に就て、最も奇なるは大形ナナフシムシにて、黃綠色なるものと、褐色なるものとの二頭あり、何れも乾製として針に刺し置けり。其軀の長さは五寸五分許前脚を伸したるものは八寸內外もありて、其軀上に刺を生ずること恰もトゲナナフシの如し。

○貝殼蟲の發生多し　桑港スタンフォルド大學近傍及びサンホゼー近傍に就て、調査せし結果に依れば本邦に比して貝殼蟲の發生多きやの觀あり。去ればにや、路傍及び庭園内の植物の將に枯死せんとするものあるさへ少なからず、此國に貝殼蟲の專門家の輩出するも無理ならぬ事と云ふべし。而してサンホゼー近傍に於ける所謂サンホゼー　スケールは、其害固より猛烈なるも、託生植物たる梨樹は非常に少なく、之を見出すこと蓋し容易にあらず。聞くこれ該蟲の加害劇甚の影響に出づと。吁。

◎六足蟲彙纂（丑の卷）

在岐阜市　長野菊次郎

(六)蟻と蚜蟲との關係　蚜蟲の繁殖は、蟻の利益たること明白なり。然れども、蚜蟲は柔軟なる體を有して、他に防禦の機關なき昆蟲なれば、他の貪食なる昆蟲、例へば瓢蟲クサカゲロフ等の食餌となることを免れず。然れば、蟻は往々蚜蟲の小群を保護することあり、又蚜蟲の吸吮する軟枝の萎れ、又は乾く時あれば、蟻は注意して蚜蟲を運び、之れをば新鮮にして綠色を呈せる枝椏に移すといへり。米國ミシシッピーの谿原(Mississippi Valley)には、穀物の根を吸ひて生活する一種の蚜蟲あり。此蚜蟲の卵は、秋期に地中に產下せられ、翌年の春、未だ穀物の栽培せられざる以前に孵化するものなり。然るに又同し田畝に、此穀根蚜蟲より分泌する蜜を、非常に嗜める普通の小褐色蟻棲めり。然れば此蚜蟲が、未だ吮ふべき穀根の無き時期に孵化するときは、此小褐色蟻は非常に心痛して、懇切に蚜蟲を一時蓼の一種(Knotweed)の根に運び、其後再び適當なる食物を供すべき穀物の根に移すとなり。又ニユーメキシコ(New Mexico)及びアリゾナ(Arizona)の乾燥地にては、蟻が蚜蟲を仙人掌の根にて養育すといひ、又某種の蟻は、蚜蟲を已の巢に伴ひて食物を給與し、其報酬として蜜を得ること少なからずと。然れば蚜蟲を蟻の家畜に擬すること大に其理由あり、蓋し昆蟲共棲の好例たり。(ジョルタン氏アニマル、ライフ)

(七)昆蟲の嗅感　昆蟲が食物を尋ぬること、配偶を索むること、或は敵又は同侶の接近を知覺することと等につきては、視覺及び聽覺よりも、嗅覺の力を藉ること多し。然れば、蟻は嗅覺によりて、巢に歸る道を誤らず、又其同侶をも識別すべし。又箱の内に、腐敗に傾ける肉の一片を入れ、之を密封して少しも臭氣を發せざらしむるときは、自ら腐肉を食とするか、又は幼蟲に食物を供せん爲めに、爛肉中に卵を置くべき必要ある蠅、又は或る甲蟲の如きものすら之を發見すること能はず。是れに反し、數年前コーチル大學校(Cornell University)に於てプロメチア蛾(Callosamia promethea)の雌數頭を一の箱の内に

入れ、之を昆蟲室の內側に置きしに、數時間の後に、四十頭の雄蛾が、昆蟲室の硝子屋根の上に飛び來るを見たりき。此際其昆蟲室及び其附近に、決して雄蛾の居らざりしこと丶、又雄蛾が外部より雌蛾を見ることを能はざりしことも事實なれば、全く雄蛾が嗅覺によりて、他方より雌蛾を慕ひ來りしものなること疑なし。蓋し此蛾の觸角は能く發達して、細く支出せる羽毛狀を呈し、無數の嗅點の分布に適當なることを知らば、思ひ半ばに過ぎん。（ジョルダン氏アニマル、ライフ）

編者云ふ。本說中（第六）蟻と蚜蟲との關係の末文にある仙人掌寄生種云々は、恐くは貝殼蟲の一種にて、彼の染料及び顏料に供せらるゝそれに非ざるか。他の記載を疑ふにはあらねど、未だ解せざる節のあれば、敢て爰に蛇足を添へて後考に資す。

◎害蟲驅除講習會の必要

大分縣耶馬　金　色　生

農業として作物を栽培するには、それ〴〵利益のある方法を研究し、之を應用して一定の地處より、少しにても多分に利益を得ることを圖らなければならぬ、肥料は固より肝要で、其肥料の作物に於ける關係は、動物の食物に於けると同じことである、が濫りに何でも食はせさへすれば、宜いと云ふ譯には行かぬ。作物も動物の如く、不適當の肥料、即ち惡き食料を與ふれば、十分に生育をなし得ないのみならず、甚だしきは其健康を害し病氣を惹き起し、遂に枯死することがある。次には選種も無論必要である作物には數多種類がありて、一朝其選用を誤まれば、如何程栽培に注意しても、好結果を得ることが出來ないのである。又勞力を減じて、作物の生育を完全ならしむる等の關係からして、耕耘器具の選用も亦肝要の事である。其他病害蟲災の驅除豫防や、收穫の方法等に至るまで、農業上研究を要する問題は甚だ多いが、其中で今日の處害蟲のことを研究するのが、我が農家に取ッて焦眉の問題であらうと思ふ一生涯薄利に暮す農民の口を糊する農產物が、一朝害蟲の慘食に遇ふて、其收穫量の大半を減却せらるゝに至ッては、獨り農民の爲めにのみでは無く、國家の爲め大に憂ふべきことである。故に各府縣では害蟲驅除豫防規則なるものを設けて、只管其方面に力を盡して居られる。是れ我が國家の爲め實に喜ばしいことであるが、悲しひ哉、實際はその効能が甚だ少ない、是は何れも其厲行させやうとする方法が指命的に出來て、之れを強制的に行うと云ふ組織であるからで、更に語を換へて言へば、昆蟲の智識の足りない者が、理想を以て驅除の日割などを設けて、朴直無邪氣な農民を法律責めにするから、凡百の事が、農民の爲めに不適當たるを免がれ得ない、結局効能の行き渡るのが遲くて、何時も其實が顯はれないのである。去れば一般の農民は、蔭では種々と小言を喃て、甚はだしい者になると、露骨にも「農

業は我々の本職であるから、害蟲が發生さへすれば、他人の指揮を受けずも、注油位ゐ怠らないが、假ひ規定の日割なればとて、蟲の一匹も居らないのに注油するの必要は無からう、此かる規則を嚴格に遵守して居ッては生計が立たない」と云ふて、折角の親切を怨言で報いて居る。其智識の程度が此位のものであるからふ、中々法令を用ゐる所ではない。乃で我が農業の今日の有樣と、一般農民の性質から考へるのに、害蟲驅除豫防法の完全を圖るには、結局農民其ものの智識を開發しなければならぬ。然すれば彼等は自ら進んで驅除豫防を行ふ樣になッて、始めて十分の効果を見る事が出來るのである。抑も害蟲の生ずるのは、偶然其發生するの日に生ずるものではなく、必らずや發生するの原因があるのであるからふ、先づ卵、幼蟲、蛹及び成蟲の四期に於ける經過を知り、其習性を記し、其長處を知り、其短處を察し以て豫め之を攻むべきの日に攻め、驅るべきの時に驅るに於ては、其驅除も容易の事である。斯く論じ來れば、農業の改良も何もかも、害蟲驅除講習會の必要と云ふことに歸着する、これは特に事六ケしく文字を臚列するの必要が無いのである。して見ると講習會の價値の有無を評定するには、其標準を此邊に取るが最とも早解りであらう。隨ッて岐阜の名和先生が、孤獨の身であり乍ら、茲に第拾五回全國害蟲驅除講習會を開かるゝと云ふのは、其稗益を與ふるの多少、自から悟るべきである。

新年海
東宮妃御歌
年浪のたてる旦は海原もあらたまりぬる心地こそすれ。

◎島根縣下の兩害蟲調査報告（續）

島根縣農事試驗場　田中房太郎

○氣候との關係　螟蟲と氣候の關係は左の如し。

本場　溫度高くして雨天少なきときは、螟蟲の發生多きもの、如し。

八束　氣候溫暖にして霖雨多く、晴天と雖ども南風多きときは、其發生多しと云ふ者あり。

大原　本年は挿秧後の氣候溫氣多く、溫度高かりしを以て、螟蟲の繁殖を助長せし者の如し。而て本郡三成地方の經驗によては、六月初旬午前十時に平均溫度華氏七十度前後に至て蛹の羽化すると最盛なり。

飯石　本年の挿秧前、及八月中に於ける氣候は、溫度平穏なりしを以て、繁殖旺盛なりしならん。

簸川　西南風の爲め、蒸熱する時は俄かに發生し、西北風の爲め清涼なるときは、發生を止む。

安濃　本年は螟蟲の害多き方なりき。昨秋以來の氣候は、十月、十一月、十二月は平年ニ異ならず、何れかと云へば、晴天續きたる方なりき。一月上旬常になき溫暖ニして晴天續きたる方なるが、下旬より二月ニ掛け、寒氣強く降雪多かりき。此を以て見るに、雪は二月の寒氣を覆ふて、反つて螟蟲の越年に便なるニあらざりしか。

邑智　高溫にして蒸熱甚だしきときは、最も盛に加害す。

那賀　發蛾期及孵化期ニ際し、晴天にて溫度高ければ、最も蕃殖するの感あり。

吉田分場　氣候溫暖にして、羽化期に雨量少なき時は、發生殊に多きやの感あり。

八田分場　冬季嚴寒の甚だしき年は、其然らざる年より少なく、又稻の生育期中に、曇雨天多くして稻の軟弱なるときは、多く發育するの傾きあり。

○驅防季節　螟蟲を豫防驅除の好時季は左の如し。

本場　捕蛾、採卵法は五月下旬より、六月中は苗代田及び本田ニ於て、採卵捕蛾を行ふ事。心枯驅除は、第一化生の分は六七月の交、第二化生の分は九月中に驅除すべし。刈株の所理は、乾田にては成るべく低刈とすべし。藁の處理は刈取後翌年五月までに、飼料又は褥藁に供し、被害甚しきものは燒却するを良とす。

八束　捕蛾採卵は、五月下旬より六月下旬の間にすべく、被害稻の除去は、七月上旬より中旬、九月上旬より中旬の間にあり。

大原　發蛾及び卵期に驅除するを以て好時期とす。

仁多　第一回化蛾誘殺は六月上中旬(三成地方)ニ、同上の採卵は六月中下旬(同上)ニ、枯莖拔取は七月中下旬(同上)適當とし、第二回の化蛾誘殺は八月上中旬(同上)に、枯莖拔取は八月下旬以降(同上)とす

飯石　苗代時及挿秧後に於て、燈火誘殺を行ひ、尙第一期被害ニ際し枯損せしものを拔取るべし。

簸川　苗代に於て捕蛾を行ひ、本田にてハ枯莖を刈取るべし。

安濃　春季に畦畔、堤防等の雜草を燒くこと。苗代の時季に於て、誘殺並ニ捕蛾及卵塊を取ること。一番除草より二番除草の間に於て、心枯莖を拔取ること。第二化發生の際、誘殺法を行ひ且つ白穗を拔取ること

遞摩　卵期採卵を好時期とす。

邑智　移植後本田に於て、採卵、枯莖拔取法を行ふを好時期とす。

那賀　苗代時期採卵捕蛾をなし、本田出穗の際、枯莖を除去するを好時期とす。

吉田分場　化蛾當時捕殺し、併せて採卵法を行ふべし、其効多きを認む。

八田分場　苗代は六月上旬に本田は六月、七月、九月に行ふべし。

(完)

◎アイヌ人の用ゐる昆蟲の名稱

在札幌農學校　三吉豐崖

緒言などは申上ますまい、直に本題にかゝります。

○てふ(蝶)　ペポラップ
○きりぎりす(蛬)　アマムポ
○はへ(蠅)　モシユ。ムシユ
○はち　ソヤイ
○いなご(蝗)　アマキルシユ
○しらみ　バラキ
○か(蚊)　ヱトタンネ
○ほたる(螢)　ニナキポ
○しやくとり(尺蠖)　イコンバップ
○はさみむし(剪蟲)　オアイヤンチ
○やんま　パンプク、チヤップ

○てふ　カマカタ
○きりぎりす　パタ。パタパタ
○はへ　ヱフムトコイ
○はちのす(蜂巣)　ソヤイ、セット
○いなご　チクバップ
○のみ(蚤)　タイキ
○か　ヱライライ
○うじ(蛆)　モソスペ
○しやくとり　イテメキキリ
○はさみむし　オアウウシユ

○てふ　アペ、ヱトンベ
○きりぎりす　タカタカ
○はち(蜂)　モユック、ソヤイ
○せみ(蟬)　ヤキ
○しらみ(蝨)　ウルキ
○のみ　キ
○あぶ(虻)　シラウ
○あり(蟻)　イトンナップ
○けむし(毛蟲)　キキリ
○やんま(蜻蜓)　ハンク、チョド、チヤップ

編者云ふ。三吉氏は、この通信に對し、通學の餘暇に直接土人に就て研究せしものなり、との書簡をさへ添へられたれば、必ずや正確の調査を經たるものならん。然れども試みに、之を彼のジョン　バチエロル氏の三對辭書に照すに、その蟲稱收載の範圍と云ひ漢字の用方といひ、將また誤譯の符合といひ、彼此盡く同一に出でしは、如何にも不可思議の極みならずや。加之バ氏の不注意か三吉氏の誤記かは知られど、中には夷言の成語を缺けるものすら少なからず。今バ氏のものを標準として、之に對比すれば、三吉氏のには、次の如き缺點あることを認む。(壹)バラキの蝨に非ずして、昆蟲以外の木蝨即ち家畜のタニなることは、Tick の英名あるに徵して明らけし。(二)キは蚤にあらず、解にLouseの英名あるを以て見れば、是ぞ正しく蝨なるべし。(三)蚊をエット　タン

子とばかりにては、言葉足らず、此二語は「鼻長し」との義なれど、下にキキリ即ち蟲と云へる語を添へざる可からず。(四)エライライは、蚊にあらず、蟆子類の稱なり。(五)イコン　バッブは寧ろ青蟲を指す語にて、決して尺蠖の專用語にはあらず。(六)キキリを毛蟲とするは誤なるべし、此語は蟲類の汎稱にて、また蠅の異名なり。故に上にウマ　ウッシ即ち多毛の語を添ふるに非れば、毛蟲の語を成さず。(七)ヘボ　ラップは蝶にあらず、蛾即ちMothなり。又アベエトンベは蝶名に違はざるも、普通種即ちカマカタとは異なりて、特り大形種に用ゐる語なり、混ずべきにあらず。(八)エフイム　コツイは、單に小蠅を云ふ稱にして、モユツク　ソヤイは、土蜂の專用語なり。これ亦誤れり。(九)蜻蜓の別名は、ハンプク　チヤツプに非ず、ハンプク　チヨチヤツプたらざる可からず。(十)其他、剪蟲のオアウウシユと、蛬のアマムポの下にキキリを脫したる、螢のニナキポ、剪蟲のオアイヤンチの發音の正しからざる等、錯謬の一に數ふべきもの猶多し。就中、最とも奇とすべきは、バ氏がチクバツブを、滑蟲即ちA Black beetles of any kind と記載し乍ら、之に誤つて蝗蟲の漢字を適てしに、親しく土人に就て調査を遂げたりと稱する三吉氏までが、同じく蝗名の下に之を收錄せし事なり。吾儕は常に斯種の寄書を歡迎し、又其調査の勞を多とし尙ぶ者なるに、今や三吉氏の寄稿に接して、轉た亡羊の歎なき能はず、氏たる者、それ深く省る所なくして可ならんや。

◎鹿兒島縣下の昆蟲方言

鹿兒島縣農會技手　林　俊房

凡そ昆蟲に對する方言を調査する事の、斯學研究上に必要あるは、今更言ふまでも無けれど、之を讀む者も亦頗ぶる興味の深きを感ずるなり。余會務を以て管內を歷巡する毎よ、多少調査せしところあれば記してこれを雜誌「昆蟲世界」に寄す。但、縣下慣用の方言なるものゝ中よは、●の符號を附したるが如きものもあるより、蟲種性別の說明其他よ不利不便なる事擧て數へがたし、覽者ろれ焉を察せよ。

◎鳳子蝶類‖ヲコレチュチュ。◎環紋蝶類‖ゼンチュチュ。◎其他の蝶類‖チュチュ。◎毛蟲類‖ホジヨ。◎夜盜蟲の幼蟲‖ホジヨ。◎瓢蟲‖イシャサァンムシ。◎天牛類‖ビワムシ。◎金龜子類‖アブラムシ。◎葛上亭長‖テントムシ。◎圓黑蜂‖ミツバチ。◎雀蜂‖クマバチ。◎赤蟬‖クマセツ又はセツ。◎蚜蟲‖ヌイ。◎或種の蛾類‖トンボ。◎長脚蜂‖イラサバチ。◎椿象類‖フムシ又はホウ(黑椿象をクロフ又はクロホウと云ふがごとし)。◎橫蚑蟲類‖ヌカムシ◎寫字蟲‖ギギモ。◎蠅類‖ヘ。◎長尾蛆‖ヲナクシ(其成蟲後架蠅をクソベ)。◎田鼈蟲‖ユヲトイガメ。◎水黽‖アメンチヤン。◎螳螂‖ヲンガメ。◎滑蟲‖アマメ。◎蟋蟀‖ギミ

○蟲螽類＝タカ。○蜻蛉＝ボイ。○齒黑蜻蛉＝カワンボイ。○細蜻蛉＝ウマンコボイ。○麥稈蜻蛉＝(雄)コメンボイ(雌)アワンボイ。○軍扇蜻蛉＝カッナボイ。○赤卒＝ヲシロサァンボイ○蜻蜓＝コンボイ。

◎昆蟲月報（第八信）

第八回全國害蟲驅除講習會修業生　埼玉縣　櫻井倚睎

十月　此月よりは寒露、霜降の季節に入り、身に漸やく寒冷を覺へ、殊に下旬より毎朝霜を見るに至り、日脚は日一日と短かく、晴和の日と雖とも、蟲類の飛行は午前十時頃より午後二時頃までを限りとなしたれば、隨ひて捕獲せしもの眼に映るものも亦大に少かりき。一日、學校實習地栗株中にて、背筋濃黃色なる大形の天蛾を獲たり。二日クサギシンクヒ蟲蛾の一種ヤナギシンクヒ蛾を捕ふ。三日エビガラスヾメを捕ふ。四日ヤママユノガを獲たり。七日實習地にてマヒ／＼カブリを獲。八日晴和温暖蕎麥畑にてハナセヽリテフ、ハナモグリの多數とモンシロテフ、モンキテフ數頭を目擊し、二三のオホハヤバテフの食を花蜜に求むるものを追捕す。九日亦オホハヤバテフ、ヒヲドシテフ、ベニシタバガを獲たり則ち此上旬に多かりしはハナセヽリテフ、ハナモグリ、モンキテフありき。十一日ヘウモンテフ、ヤマトシヾミテフを捕ふ。十五日オホカマキリの始めて產卵するを見る。此中旬は上旬と同じく唯々、カマキリ類の產卵の適所を求むるためか、又は他に餌食を求め難かりしにや、桑圃、篠籔等の向陽地に多く集合するを目擊するのみなりき。下旬は寒氣愈々加はり、蟲類の出つるものとては極めて少なく、廿四五日頃より、水棲昆蟲石蠶科の成蟲現出して、月末には發生甚た多かりしが、其種類に三種あるを認めたるも、名を辨せされば記するに由無し。又温暖なる林中にカマキリ、イナゴ、コホロギ、エンマコホロギ集まるもの多く、中に就きカマキリ、イナゴは交殖を行ひ、稻田にはウスバヨコバヒムシ、ツマグロヨコバヒムシ多く、草叢にはオホツマグロヨコバヒムシ棲息し、桑圃にはクハジラミの發生夥多なりき。扨また甲蟲類には、蕎麥の衰莖殘花にハナモグリ多く、蝶類にありては、唯モンキテフ、キテフ、モンシロテフ、シヾミテフの點々徘徊するを見き。而して桑樹貝殼蟲の雄蟲の羽化すること多かりしが、其他には獨りミヤマアカネトンバウの時を得顏に快遊輕飛を試むるものありしのみ。

十一月　此月は山野荒寥の景を呈し、所謂冬季採集の好季を報じたりしも、事に之に從ふことを得ざりき。此月の上旬も前月下旬と同じく、稻田にウスバヨコバヒムシ多くオホツマグロヨコバヒムシ之に

次ぎ、双翅目の蚋と、毛翅目のツヽミノムシの羽化せしもの多く、有吻目のツノゼミは少なく、又時にオホハヤバテフの越冬するものをも見き。此前後よは菘類、蘿蔔等に蚜蟲多く發生して、驅防其効無く爲よ收納期を早めたる處あり。又サルハムシ、キスヂノミムシ等も、蔬菜類よ集まり、朝鮮白菜の如き優良なるものには、特に加害多かりき。中旬亦略ぼ之に同じかりしも、クリノクロアブラムシ多く發生して栗、樫、櫟の樹皮よ寄生産卵せり、其群棲中に數頭のオホヒラタアブの幼蟲の、盛んよ捕食せるものあるを見、試みよ之を飼育處に移せしに、蚜蟲の減少より食よ窮して皆餓死を遂げき。野薊の花には花蠅群集し、此莖にも亦コクロアブラムシの寄生ありしより、隨ひて之を捕食する益蟲も少なからざりき又茶の花にはヂバチ、ハナアブの數種吸蜜に忙はしく、ルリタテハテフ、アカタテハテフは猶ほ林中に其瘦影を留め茶、枇杷の花よては、往々ヒメアカタテハテフ及びオホハヤバテフを獲たり。下旬も中旬と等しく、クリノクロアブラムシ、ハナバヘ等のみなりしが、晴日には綿蚜蟲の交殖行はれ、キテフの彼方此方に飛迷ふもあり。一夕二頭の尺蠖蛾の火光を慕ひ來れるものを見たりしも、其名を知らず。又桑園枯葉の間よて、同種のもの二種を獲たるも、亦共よ名を知らず。此頃はミノムシの成蟲林中落葉間よ多く發生し、盛よ交殖を遂ぐ、其翅色紋樣は皆枯葉に擬せり。外にクサカゲロフの稍小形にして、躰色黄褐、巧に枯葉に擬するものをも目擊せしかど、捕ふるに至らざりき。此他目よ入りしは、蜉蝣科コカゲロウの河邊よ飛べる、晴和なる日にクロバヘの負暖せる、秋生蜻蛉の欵々として飛遊する等の數者よ過ぎざりき。

問答

新年海

威仁親王

時知らぬ青海原も君が代さゝもにかはらぬ年立ちにけり。

◎苗代の害益蟲に就て質問（甲號）

島根縣八束郡持田村　三代作次郎

苗代田に於ける害蟲驅防實行上の要あれば、左記の諸件に對し、詳細高敎を給はりたし。

一、本邦短册形苗代の起源及び各府縣に於ける之が實行の沿革。

二、本邦に於て短冊形苗代に對し、厲行の法令を頒布したる府縣名及び其年月。
三、苗代田に加害の蟲類は、螟蟲類、螟蛉、葉捲蟲、切蛆蚊姥、苞蟲、横這蟲、髟毛蟲、稻蝨、稻象鼻蟲、負泥蟲、根喰葉蟲、苞蟲蚊類の外に、如何なる種類ありや。
四、苗代田の益蟲と稱するものには、小水蟲、食肉椿象科の各種、螟蟲寄生蜂、螟蛉寄生蜂、苞蟲寄生蜂、苞蟲寄生蠅、蜂類、蜻蛉類、塵芥蟲、負子、水蟷螂、虻類等の外、如何なる蟲種ありや。又螟蛉寄生蜂（米苞繭蜂、麥苞繭蜂を除く）、食肉椿象、蜂類、蜻蛉類、塵芥蟲には如何なる種類ありや。
五、青腰蟲、田鼈蟲等は益蟲にあらざるか。又前記蟲類中に、有益蟲にあらざる種を混ぜざるか。
六、昆蟲以外の動物にして、苗代田に對し驅蟲の效益を與ふるは如何なるものなりや。

◎柑橘の天牛に就て質問（乙號）

福岡縣遠賀郡矢矧村　小西繁藏

昨年、橙樹に天牛發生して、根際より少しく上部より小孔穴を鑿ち、多く鋸屑の如きものを排泄せり。之を驅除せんと、小刀にて内部を剖解し、水鐵砲を以て除蟲油を注射したりしよ、之が爲めにや幸ひに被害を止めたるも、絕えて其害蟲の存在を見ず。仍てその理由と、此蟲の性質經過等に關する說明を仰ぐ。

右二問に對する答

名和昆蟲研究所内　永澤小兵衛

（甲號）　本問の前半は、農政學の範圍に屬するを以て、昆蟲學上より應答することを難んず。然れども、亦全く關係無きにしもあらねば、左に其概要を答へ置かんとす。而して後半は、粗ぼ其要領を得たるが爲實施に際するも、甚はだしき支障を生ぜざる可しと信じ、これまた略答よ止む。蓋し問者の意を滿足せしめんと欲せば、少なくも十數頁に涉る長文を要するが故なり。

一、本邦に於て、短冊形苗代田を考案せし濫觴は詳ならず、諸記錄の證する所に依れば、精農地方に於ては、意外に早くより此方法を採用せしに似たり。而して今日の如く各地に實行せらるゝに至りしは、全く農學振興の賜ものにて、學者間に於て其有利を認めたるは、已に二十年前にあり、爾來益々其說行はれ、官費耕作の水田には、夙に之が試驗と實行とを怠たらざりしも、農家は因習と誤解に拘束せられて、今より十年前までは、殆んど其利便を認識せざりき。然に、明治廿九年三月、法律第十七號を以て、農作害蟲驅除豫防法を公布せらるゝや、之が實行の第一手段として、强て短冊形苗代に改むるの必要起り、尋で勸業當路者の勸奬ありしより、漸次今日の如く弘く之を採用するに至れるなり。則ち既往の形蹟に就て之を觀れば、其初や實驗家の得たる成蹟によりて

學者を動かし、學者の究明を經て一般に擴まりしものと謂ふべし。而して之を採用奬勵せし中に、鹿兒島縣は特に名高く、常に警察吏をして監督の衝に常らしめき。又其普及に就て功勞ありしは、各地の農事試驗場、農學校等の摸範水田にて、之を一見せし者の忽ちに其迷誤を破りし實例少しとせず。要するに、前記法令發布前は、たゞ農談會の演題に供せらるゝに過ぎざりしが、一たび蟲害驅防の緊要を知られしより、始めて世に活用せらるゝに至りしかど、今になほ形式のみを履みて、其眞用途を知らざる者の多きは、畢竟昆蟲の性質を辨へぬ餘響なるべし。

二、短册形苗代に關する法令無し。但違警罪として實行を命じたる府縣は、今や全國の半に居る。又之を最上の行政權を以て、强制的に施行せしめたる地方も之無きにあらず、去る三十三年に宮城縣の縣令を發布して、罰金制を設けたるは其一例にて、一昨年來大阪府に繼續事業としての奬勵は、稍その趣を異にせり。斯れば、大體に於ては、違警罪の科料制を以て厲行を期するものゝ如く其發布は概むね明治三十年の大蟲災の後にあり。

三、苗代田は稻作害蟲類の好交殖處なれば、地方によりては、猶ほこれよりも多かるべしと雖ども、玆に列擧の各種は特に顯著のものゝみなれば、普通これを以て足れりとす可し。但し插秧期に際すれば、椿象科及び水虻科の或種の加害無きにしもあらず。

四、列記の蟲名に行夜、橫蟲寄生蜂、擬塵芥蟲等を加ふるの要あるべし。又第二項の螟蛉寄生蜂には、靑寄生蜂と稱するものと、最とも多く知らるゝ所の米粒狀の繭を結ぶもの等あり。食肉椿象には、種類多しと雖ども、其中主なるもの十餘種は、昆蟲世界紙上及全國昆蟲展覽會出品目錄に載せ置きたれば玆に省く。蜂類の大形種に屬するものにて、現に當昆蟲研究所にあるものは、約六七十種を算す。蜻蛉類また四十餘種あり。塵芥蟲に至りては、實に百餘種ありて、其形質また一にあらざれば、遺憾乍ら之を詳說し難し。

五、靑腰蟲の類は、時に或ひは一二の植物を害することあるも、皆益蟲として保護するに足る。田鼈蟲は、其人の業務によりて、益害を異にするものなれば、輕しく評定し難し。次に前項列記の蟲稱中に就て、益蟲としての如何しきものを擧くれば、小水蟲、負子、水蟷螂等なるべし。そは或地方の如く秧田に魚類を放養する時は、卽はち大害を來たす可ければなり。又虻類とは、何れの種を目すにや不明なるも、水田には、左まで効益ありと思はれざるも多し。

六、昆蟲以外の食蟲動物は、其種類頗ふる多くして枚擧に遑あらず。就中、鳥類にありては、燕、杜鵑、四十雀の類、鶺鴒の類、雲雀、ヒタキ類、鴉、アトリ、其他保護鳥と稱せらるゝもの、兩棲類にありては、蛙の類、爬蟲類にありては、石龍子、守宮の類、哺乳動物にありては蝙蝠及び或種の野獸、幷びに蜘蛛類なるべし。なほ昨年來の昆蟲世界には、多く此種の記事を載せたれば、反覆參照せらるべし。

（乙號）　加害蟲の添附無きを以て、之を知るに困しむも、恐くは普通の天牛種なるべし。此種は槪むね夏秋の候を以て、數顆の卵子を樹皮下に一顆づゝ巧みに產附し、それより孵化の幼蟲は樹幹に蝕入し

て、生育二年の後に化蛹し、次で羽化を遂ぐるものなるが、其性多濕を好まず、又多く早天を以て下卵の期となす。而して問者が其幼蟲を認め得ざりしは、深く棲處まで穿鑿せぬ爲めなる可けれど、絶えて生殘の徵候無くんば、其際竅中にて死したりと認むるも可ならん。たゞ注射器の構造惡しき時は、其用完全ならざるを以て、將來其點に注意し、幼蟲の幹心を縱貫するの性あるに應じて、液勢の直上し得るやうの構造とすべし。又此蟲の天敵としては、卵子に寄生する蜂種と、幼蟲に產卵する馬尾蜂とあれば常に此等を保護するとゝもに、成蟲をば誘殺法その他の方法を以て驅防するに勉め、樹身をして衰枯を來さしめざるを肝要とす。

新年海
威仁親王妃
うら〳〵と朝日匂へり綿の原如何に長閑き年の立つらむ。

◉此好機を逸すること勿れ

來三月一日を以て、大阪に開設せらるべき第五回內國勸業博覽會は、其名稱こそ明治十年以來同じけれ、其組織に至りては決して前回のもの丶比にあらず。卽はち將來東洋の先進帝國に開催せらるべき亞細亞大博覽會若くは萬國大博覽會の準備會の性質を有し、規模の潤大なる、內容の豐博なる、設備の齊整せる、淘汰の嚴正なる、決してこれを從前の規律を以て論すべからざるものあり。然れば學術界、實業家に於ても、理科、農業に關する斬新拭目の出品の多きは、豫期して疑ふべくもあらず。就中、昆蟲標本の出品は、從來一二の點數に止まれりしを、今回は農業館に陳列せらるべきもの丶みにても、猶は能く二百餘點に上り、敎育館また數十點に達し、加之山林館に於ても、多數の標本を陳列すと云へば、一塲の中、座からにして實學研磨の功を積む事を得べし、また地理的分布の調査に、種類異同の比較に便宜を享くる事それ幾何なるやを知らざるべし。なほ聞く所に依れば、東洋の諸隣邦は論無く、歐米大陸よりの出品も多く、各國競ふて來觀者を派出するの內議ありと然れば、其無形と有形を問はず、觀覽者の裨益蓋し極めて大なるものあらん。何はさて、斯學研究者の奮つて此會を利用し、其見聞を弘むるに勗められんことは切望して已まざる所なり。同志の士それ猛然として起ち、敢て空しく此好機を逸去

せしむること勿れ。

◉本號口繪の說明

本誌の卷首に收めたる口繪（第二版圖）は、學說欄の記事イシガキテフに對する發育寫生圖なるが、圖中の（イ）は葉上に產着の卵子（ロ）は其生育を遂げたる幼蟲（ハ）は蛹の懸垂の狀（ニ）は雌蝶靜止の側面（ホ）は雄蝶開翅の平面（ヘ）は卵粒の全部を放大とせしもの（ヘノ一）は卵粒の尖端を放大とせしものにて（ト）はすなはち幼蟲の食樹たるオホイタビ（桑科の植物にて、無花果に近きもの漢名を薜荔といひ、學名をFicus Pumila L.と云ふ）を示せるなり。尙ほ、本號收載せるイシガキテフの發育てふ記事に關し、記者武內氏より、左の如く訂正を要する旨の通告に接したれば、茲にその全文を錄す、覽者其心して讀まれよ。

◎雌にして雄の形色をなすもの無きに非ず」と但書にせしも、顧みれば僅々數頭調査せしに過ぎざれば、此を以て決して確實なるモンキテフのそれと同視すべきに非ず。寧ろ此文字を削除せんことを望む。

◎成蟲の發現期の記載に、不完全の點あれば、更に之を報ぜんに（第一期）早春三月中旬より、四月中旬の頃に及びて出で、其間約三旬は隻影を見ず、斯くて（第二期）に移り、五月中旬頃より、六月上旬中旬の頃に及びて、鮮麗なる新翅を翻して出づ。而して其後また約一ヶ月間は影を收む。但し此第一第二期に屬するものは、幼蟲成蟲兩つながら到處に多し。（第三期）のものは、七月中旬頃より、八月上中旬にかけ、三伏暑盛の候に現はるゝも、光射劇烈の處には、絕て其形影を認めず、多くは山中幽邃の處に在り、蓋し炎熱を避くるものか。其後復た一ヶ月許りを經れば、茲に（第四期）に入り、九月中下旬より、十月中下旬にかけ群飛を試るむ。此期のものは、十一月中旬に至るも猶ほ飛翔し、寒威の增進に連れ、其影を隱して越冬し、衰色弊翅の儘、早春より出でゝ次代の蕃殖を圖るなり。以上記載の中、第三期と第四期間の發現は、從來頗ぶる明瞭ならざりしに、彼の稿送附後、卽ち昨年九月を以て、爾く確認を下せり。

工業應用昆蟲畫報の六（盃洗）

（愛知縣　守隨鐘三郎氏寄贈）

◎靜止の體形に就て、なほ言を添ふべきは、成蟲靜止の時に、翅を後方に折合す事の少なくして、常に平かに展開するの一事なり。

◎此種の斯く多く出現するは、誠に奇異なるが如きも、當地は氣候溫暖なるため、昆蟲の發生も他と同じからず。金條毛蟲、枝尺蠖、

粟螟蟲の如きすら、皆全く三たび化生し、特に甚だしきは、昨年試驗せる稻二化生螟蟲中、四十餘頭は明かに第三化の成蟲を出し其幼蟲また生育して越年をなせる程なれは、石壁紋蝶を以て、四化生と云ふと雖ども、敢て怪しむに足らざる可し。

●●●●●●●●●特別講習會の開閉に就て

來三月十日より開會すべき、第十五回全國害蟲驅除特別講習會は、其開會期間長きため、入會者は如何にやと思ひ居りしに、存外これに加盟の同志多く、現に全國各地の新聞報に據るも、世に歡迎をうけしは明白の事實なるが、九州四國の或官衙の如きは、特に部內に告示を發して之が入會を奬勵せし程なりき。又その閉會は三月三十日以前と規定し置きたるも、大博覽會の開場式は　聖上の臨御を仰ぎ、之を四月初めに擧行の事に內定せしを以て、一兩日の違ひなれば如何樣にか差繰りても、此盛典に與かるやう修學旅行期を變更せん豫定なり。次に修學旅行中は、萬事儉約を守り、往還に紅劵を携へて乘車するは勿論、大阪滯在中は前號所報の如く、一宿四十錢以內の指定旅舍に投ずることゝ內定せしを以て、都合一週間淹留すとも、其消費額は僅々五七圓の間にて十分なれば、左まで苦痛を感せしむるに至らざるべし。なほ甚だしき障害の無からん限りは、往還何れかを關西鐵道の便に取り、伊賀大和の地方に於て、實地採集を試ろまん希望なるが、是は未だ確定せしにあらず兎も角も、今回の特別講習會の開設を、名譽の紀念として、成るべく自他の利便を圖る筈なれば、或ひは意外の好果を收むるに至るべき歟。

●害蟲驅除講習修業生の同窓會

名和昆蟲研究所の主催に係れる、全國害蟲驅除講習會修業生の同窓會を大阪市に開會の趣むきは之を前號に報じ置きしが、右は同地在住の會員諸氏の盡力により三月廿八日（土曜日）午后一時を以て會合することゝなれり。又之が會員たるの資格に當らざる同志即ち各府縣の主催に係る短期講習の修業生等と雖ども、同日參集したる向をは、准會員と稱して列席を許諾せん都合なれば、此等有志の人は豫じめ其旨を當昆蟲研究所庶務部宛に申込まるべし。但し會場其他は目下交涉中なれば、確定を俟ちて之を次號に報せん。

●工業應用昆蟲畫報　（第二報）

本號に收めたる昆蟲畫報の（一）は古式の杯洗にて、黑塗に金粉もて蜻蛉を散し蒔繪となせしもの（二）は金澤地方の新製品にて、扇面に黑鳳蝶の百合花に戲むるの圖を畫き、それに三尺の紫英を添へたる總金高蒔繪の莨筥なるが、その扇面は名和氏の家紋を、蝶花の配合は當昆蟲研究所より贈遺の寫生畫を應用せしものなりと（三）は鼓の胴にて、黑地の全面に、蝶鳥の

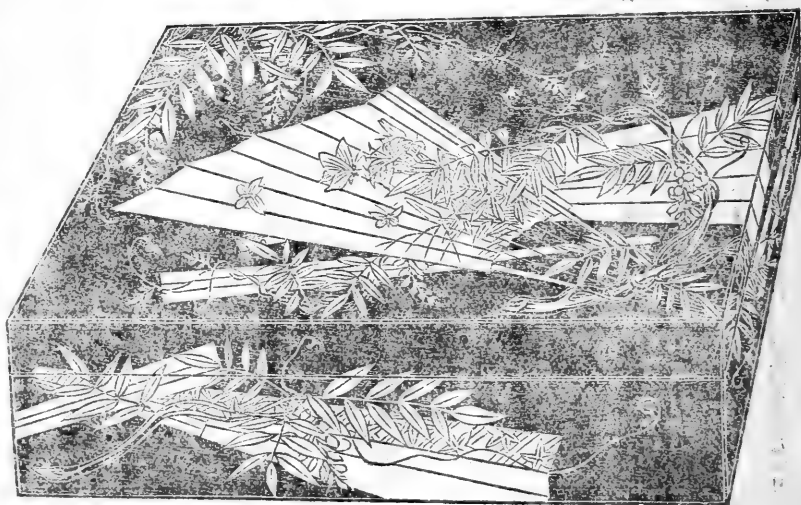
金模樣ある古物なり、恐らくは儀式用に充てしものならん(四)は大垣城下の舊本陣飯沼旅店に於て舊來使用の飯器なるが、是また黑地の金蒔繪なり數羽の蝶は、模樣ならで紋章なるべし。

◉森林害益蟲標本の出品　農商務省山林局より、第五回内國勸業博覽會に出品すべき諸種の標本は、先年來、大日本山林會に於て採集裝成に從事せしが、其中には、森林の有益害動物標本五十七種、有益害昆蟲四百種を含み居れりと云ふ定めて斯學者に益するもの多からん。

◉靜岡縣の昆蟲學講習會　靜岡縣田方郡にては、去一月中旬、同縣農事試驗場技手岡田忠男氏を講師として、昆蟲學講習會を開きしに、六十一名の修業生を出し、又本月二日よりは、縣農會農事講習會の主催にて、一週間同樣の會を開きたりきと云ふ。

◉三十五年の昆蟲學講習會一覽　當昆蟲研究所事業の一として、昨三十五年中に開催せる各種の昆蟲學講習會は、實に次表の如くにて、一月より十二月に至る間に、都合十四回ありしが之を種別とすれば、普通卽ち二週以上のものは五回にして、他は短期卽はち一週以內のものに屬し、此總員は一千二百九十四名ありき。乃ち第一回のものより通算すれば、前後六十四回、五千五百十四名の會員に修業證書を授與したり。

工業應用昆蟲畫報の七（卷煙草入）

（石川縣 由田辰二氏寄贈）

開會月日	會期	會場位置	催主	會名	會員種別等	人員
從一月廿五日 至一月廿九日	五日間	石川縣能美郡小松町	石川縣能美郡教育會	昆蟲學講習會	教育者實業者	一一八
從三月一日 至三月十四日	十四日間	岐阜縣岐阜市京町	名和昆蟲研究所	第十一回全國害蟲驅除講習會	二府二十四縣	六一
從三月二十七日 至三月三十一日	五日間	千葉縣夷隅郡大多喜町	千葉縣夷隅郡農會	害蟲驅除豫防講習會	教育者實業者	一三二
從四月一日 至四月五日	五日間	岐阜縣養老郡高田町	岐阜縣養老郡農會	害蟲驅除講習會	教育者實業者	五四
從四月十日 至四月十九日	廿日間	岐阜縣岐阜市京町	岐阜縣	第五回岐阜縣害蟲驅除講習會	實業者	三二
從五月十五日 至五月廿八日	十四日間	岐阜縣岐阜市京町	名和昆蟲研究所	第十二回全國害蟲驅除講習會	一府十六縣	五七
從七月十九日 至七月廿三日	五日間	愛知縣寶飯郡豐川町	愛知縣寶飯郡教育會	昆蟲學講習會	教育者實業者	一六七
從七月廿一日 至七月廿五日	五日間	岐阜縣益田郡萩原町	岐阜縣益田郡教育會	昆蟲學講習會	教育者實業者	五七
從八月一日 至八月十四日	十四日間	岐阜縣岐阜市京町	名和昆蟲研究所	第十三回全國害蟲驅除講習會	二府二十二縣	七三
從八月二日 至八月八日	七日間	靜岡縣磐田郡中泉町	靜岡縣磐田郡教育會	昆蟲學講習會	教育者實業者	五六
從八月十七日 至八月廿一日	五日間	愛知縣丹羽郡布袋町	愛知縣丹羽郡教育會	昆蟲學講習會	教育者	五四
從八月十九日 至八月廿八日	十日間	鳥取縣鳥取市	鳥取縣私立教育會	夏期講習會昆蟲學科	教育者實業者	二九六
從九月廿日 至九月廿三日	五日間	靜岡縣周智郡森町	靜岡縣周智郡農會	害蟲驅除講習會	教育者實業者	一〇二
從十一月廿五日 至十二月八日	十四日間	岐阜縣岐阜市京町	名和昆蟲研究所	第十四回全國害蟲驅除講習會	二府十九縣	三七

計十四回、千二百九十四名。從三十一年至三十四年、合計五十回、三千二百廿四名。總計六十四回、五千五百十四名

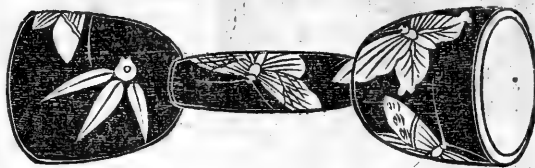
（備考） 石川縣並に鳥取縣の講習に女子の出席多き、未だ前に其例を見ず。又鳥取縣の十日間講習は、授業時間少なかりし故、自づから短期講習の性質に屬せり。

◉岐阜縣の講習事業

岐阜縣に於ては、本年四月より明年三月迄一年間、第一回長期害蟲驅除講習會を開き、又來る四月十日より同廿三日まで二週間、第六回短期講習會を開くにつき、去月廿三日告示第十號を以て其旨を管内に布告したるが、入會手續及び學科、心得の規定は左の如くなり。

工業應用昆蟲畫報の八　（皷の胴）

（宮城縣　永澤小兵衛氏寄贈）

○第一回長期害蟲驅除講習規程　●一　開期　明治三十六年四月五日より明治三十七年三月廿五日迄●二　場所　岐阜市京町名和昆蟲研究所内●三　講習科目左の如し（一）昆蟲學（二）昆蟲分類法（三）害蟲驅除法（四）益蟲保護法（五）實習●四　定員　五名●五　講習生資格左の如し（一）年齢二十年以上（二）二週間以上の害蟲驅除講習修業証書を有するもの（三）縣下の住民たること●六　出願期日　講習生たらんことを希望するものは二月十日までに履歴書を添へ知事に出願すへし●七　入學試験　筆記試験口述試験に別ち筆記試験は明治卅六年二月廿日午前九時より出願者所屬の郡市役所に於て之を行ふ、口述試験は筆記試験に合格したる者に就き同年三月六日午前九時より岐阜縣農會事務所樓上に於て之を行ふ、依て出願者は文具携帶の上郡市役所へ又筆記試験に合格の通知を受けたるものは岐阜市京町縣農會へ當日午前八時三十分までに羽織、袴又は洋服着用出頭すへし○試験科目左の如し（筆記試験）　一、動植物學大意　二、作文　三、數學　分數、比例、四則應用　（口述試験）　一、昆蟲學大意●八　給與　講習生には手當として一ヶ月金八圓支給す●九　講習生心得（一）講習生入學の許可を得たるときは此の心得に服從するの誓約書を保証人連署を以て差出すへし　知事に於て保証人を不相當と認むる時は變更を命することあるへし（二）講習生は講師の指導する所に從ひ干犯の處爲あるへからす（三）講習生は風紀を重んし品行を愼み講習の科業を勉勵すへし（四）私事の爲め科業を休み又は他行せんとするときは講師の許可を受くへし（五）講習修了后二ヶ年以内は本縣より害蟲驅除に關する事務を命令又は囑托したるときは其事務に從事すへし此の命令又は囑託に應せさるときは第八項の給與金の全部又は一部を返還せしむることあるへし（六）講習生科業を怠り講師の指導を遵奉せす風儀品行を亂し或は此の心得に違背するときは退學を命し第八項の給與金の全部若は一部を返還せしむることあるへし（七）講習生は指定の寄宿舍に入るを要す。

○第六回短期岐阜縣害蟲驅除講習規程　●一　開期　明治三十六年四月十日より同二十三日まで●二　場所　岐阜市京町岐阜縣農會事務所樓上●三　講習科目左の如し（一）昆蟲學大意（二）害蟲驅除法（三）益蟲保護法（四）野外實習●四　講習生資格（一）縣下の住民にして自ら農業に從事し若は同籍者に於て農業に從事するもの（二）高等小學校卒業者若は之と同等以上の學力を有するもの●五　講習生の義務　講習中講習生心得を遵奉し講習修了后は郡市内に害蟲發生の場合に盡力し且一ヶ年間附近害蟲狀況を報告する事○講習生

一切の費用は自辨とし一定の寄宿舍に入ることを要す●六 出願期日講習生たらんことを望むものは二月末日までに履歴書を添へ郡市長を經て願出つへし●七 講習生心得(一)講習生は講師の指導する所に從ひ干犯の處爲ある可らす(二)講習生は風紀を重んし品行を愼み講習の科業を勉勵すへし(三)私事の爲め科業を休み又は他行せんとするときは講師の許可を受くへし。

◉米國の蝶類展覽會　水彩畫家大下藤次郎氏は歐米漫遊の次、現時米國新約克府に滯在中なるが、所友長野氏に宛、舊臘中旬同地發の書信には、次の一節ありきと「新約克市には、デントン氏の蒐集せられし蝶類の展覽會有之候、是はアメリカン、アート、ギャラリーと申す大建物の一室に開かれ申候。乃ち一見致候處、其種は皆世界の美しきもの丶みにて、大なるは殆んど一尺に近く、其姸麗さ驚く計りに候。蝶の保存方法は、本國にて屢次見受候と同樣にて、矢張蝶體だけを凹めたる白き型中に入れ其上面を硝子板にて掩ひしもの特に多く、稀には箱の兩側に幅狹き硝子二枚を並べ、其上に翅翼だけ安置せしも有之候へども、其保存の方法とては、格別新しき趣向も無之樣に見受申候」云々。

◉博覽會出品の昆蟲標本　第五回內國博覽會に、全國より出品の昆蟲標本は意外に多く已に第一部のみにても二百餘點に達する趣むきなるが、其中岐阜縣下の各團躰及び私人の名義にて出品するは、第一部第八類へ十八點百拾貳箱、第二部第九類へ四點五箱、第九部第五十類へ八點八十三箱にて都て三十點貳百箱(保存箱の大さは總て縱一尺に橫一尺五寸)なるが、更にこれを各郡市に細別すれば左表の如くあり。

郡市名	部類	名稱	箱數	出品人名
○岐阜市	九・五〇	昆蟲標本	二二	岐阜縣昆蟲學會
○同上	九・五〇	昆蟲標本	一〇	名和昆蟲研究所
○稻葉郡	一・八	害蟲標本	一〇	稻葉郡農會
○同上	一・八	害蟲標本	四	藤田喜市
○同上	一・八	害蟲標本	一	木方友九郎
○同上	二・九	森林害蟲標本	二	木方友九郎
○羽島郡	一・八	害蟲標本	一〇	羽島郡昆蟲研究會
○養老郡	一・八	害蟲標本	四	養老郡昆蟲學會
○同上	二・九	森林害蟲標本	一	養老郡昆蟲學會
○安八郡	一・八	害蟲臘本	七	安八郡農會
○揖斐郡	一・八	害蟲標本	一五	揖斐郡昆蟲學會
○同上	九・五〇	教育用標本	八	揖斐郡昆蟲學會
○本巢郡	一・八	害蟲標本	七	本巢郡昆蟲研究會
○山縣郡	一・八	害蟲標本	七	山縣郡昆蟲研究會
○同上	九・五〇	昆蟲分類標本	一四	山縣郡昆蟲研究會
○武儀郡	一・八	害蟲標本	五	武儀郡昆蟲研究會
○郡上郡	一・八	害蟲標本	二	郡上郡昆蟲學會
○同上	一・八	益蟲標本	一	郡上郡昆蟲學會

○海津郡	一・八	害蟲標本	一三	海津郡昆蟲研究會
○養老郡	九・五〇	教育用昆蟲標本	一	池邊尋常小學校
○同上	九・五〇	昆蟲分類標本	六	一之瀬尋常小學校
○不破郡	一・八	害蟲標本	六	不破郡農會
○同上	二・九	森林害蟲標本	二	
○同上	九・五〇	教育用昆蟲標本	一五日	垂井高等小學校
○加茂郡	一・八	害蟲標本	二	加茂郡昆蟲學會
○可兒郡	一・八	害蟲標本	七	可兒郡農會
○同上	二・九	森林害蟲標本	一	
○惠那郡	九・五〇	昆蟲分類標本	五	第三部教育會
○大野郡	一・八	害蟲標本	一〇	大野郡農會
○吉城郡	一・八	害蟲標本	三	吉城郡農會

◉栃木縣下の蟲塚

栃木縣下野國那賀郡横岡村地內に「豫備」の碑といふがありて、碑面には種々の事柄を記し置ける趣きなるが、是は同郡宿戸村の戸村忠恕と呼べる篤志者が、後世の危難を慮んはかり、自費を投じて、嘉永元年四月に建立し、救荒條目列記の碑とも云ふべきものなりと云ふ。今其中に就て、害蟲に關する事項の大要を擧ぐれば、苗代田の驅蟲方より螟蝗の除害にも言ひ及ぼし、且つ鯨油其の他の驅除劑の事まで丁寧に說明かしたる節ありて、如何にも誠心實意に出でし美擧なることを見るに足れりと。依りて當昆蟲研究所は、該碑石所在地郡役所に照會書を發して其回答を求め、果して此說の如くんば、之を保存蟲塚の一に加へん都合なり。

◉採蟲紀念碑に就て

當昆蟲研究所創立滿七年の紀念として、本派本願寺岐阜別院構內に建設せんとする、採蟲碑の題額の揮毫は、從來種々の緣故あるより、之を大谷尊重師に依賴し置きしに俄然同寺老法主の遷化ありて、喪主代理たる同師は、先頃來服忌謹愼中なれば、爲めに豫定期間に彫刻を終へられまじき光景なれど、成るべく特別講習會中に竣工せしめんと苦心し苦れり。

工業應用昆蟲畫報の九（飯器）

岐阜縣　飯沼武右衛門氏寄贈

◉冬と昆蟲の發生　前號に今年の天候に注意すべき旨を警告せしが、其後數日果して中央氣象臺に於ても、同一の警戒を諸新聞紙に傳へ、叉往々蠶種の被害をさへ報する地方を出せり。去れば當岐阜市の如きも、大寒立春の間に日中蚊影を認め、叉夜間に家雀蛾の火光を慕ひ來れるもありき。たゞ鶯歌は平年よりも稍遲れ、一兩日前に至りて、始めて野黄鳥の囀づるを耳にせり。

◉昆蟲書の出版　所友桑名伊之吉氏は、歸朝以來其の舊里に於て、潜心斯學の研究に從事中なるが、今回昆蟲學研究法と云ふを著し、既に鉛版に附したる由なれば、公行の日を竢ちて批評をも試ろみ之が紹介もせん臆算なり。意ふに斯種の著述は、現時の我國には、最も須要且つ適切のなるべし。

◉越冬螟蟲の調査　新潟縣中頸城郡に於て、昨年收穫の稻藁を剖檢して、莖內棲息の螟蟲を調査せしに、一反歩の藁數は二十九萬四千九百二十六莖にして、棲息の螟蟲は、幼老を合せて六百頭を算し全數中の被害莖は三千三十三本にして、それに二百二十五頭の生存あり。是は三處の平均數を反に精算せしものなれば、多少の違ひは免がれざる可きも、死亡せしものとては、絶ねて無かりきと云ふ。

◉昆蟲學界雜信　女子高等師範學校敎授博物學擔任岩川友太郎氏は、學事視察として本月廿一日頃岐阜縣に來らるゝ豫定。◎岐阜縣大垣町西濃印刷株式會社にては、最も姸麗に印刷せる蝶類及び私製葉書數葉を、內國大博覽會に出品の筈。◎愛知縣名古屋市の金城婦人會にては、來月の通常會の節、講師を招きて室內害蟲談を聽問する由。

◉岐阜縣昆蟲學會記事　岐阜縣昆蟲學會第五十回例會を、去る七日午後に開會せしに、酷寒を厭はず、郡部よりも數名の出席者ありて、初めに同會より博覽會に出品の各種標本及び解說書等を看覽し、後ち小森省作氏の說明、長野菊次郎氏の廿四鳥羽蛾の話、其他種々の昆蟲談ありて同五時過に散會を告げたりき。叉同會よりの出品物は已に整頓を告げ、數日前之を大坂市へ向け發送せしと云ふ。

◉昆蟲標本陳列館の參觀人　去一月中、當昆蟲研究所常設の昆蟲標本陳列館を參觀せし人員は、總計二千六百三十八人にして、其中最とも多かりしは、三十日に於ける二百十七人、最とも少なかりしは、三日に於ける十三人にして、一日平均八十五人強に當り、其の重なる者は各府縣の敎育家、實業家及び學生等にて、中には數百里の遠地より來訪せしも多かりき。（右雜報は二月十四日脫稿）

過般當昆蟲研究所近傍に出火有之候節新聞紙にて御承知の趣を以て、續々御見舞狀御遣相成辱く奉存候、當時小生は郡部出張中に候處、幸に全家其厄難を免れ申候間乍憚御休神願上度此段以紙上及御挨拶候也

明治三十六年二月

名和昆蟲研究所長　名和靖

◎害蟲圖解の刊行に就き

此害蟲圖解は、本邦產有害蟲種の大要を、何人にも理解し易からしめんがため當昆蟲研究所の一事業として、數年續刊し來れるものにて、既に府縣の各級農會より諸學校、警察署、郡衙等に備附られしもの甚だ多く、或地方の如きは之を小學校の教授用に充てしも有之候、然るに近來これと類似のものを出版して當昆蟲研究所の名を騙り、若くは同一の名稱を附して、是は害蟲圖解を更に放大圖に製せしものなりなど言觸らし、其僞版同樣乃ものを販賣する者有之哉にも相聞へ候間、愛讀者は此際十分御注意相成度候。

◎害蟲圖解既刊の分廣告

●第一。桑樹害蟲エダシヤクトリ(枝尺蠖)(三版)
●第二。桑樹害蟲トゲシヤクトリ(刺尺蠖)(再版)
●第三。稻の害蟲イ子ノズヰムシ(二化生螟蟲)
●第四。煙草害蟲タバコノアヲムシ(煙草螟蛉)
●第五。稻の害蟲イチモジセセリ(苞蟲又葉捲蟲)
●第六。桑樹害蟲ヒメザウムシ(姬象鼻蟲)
●第七。桑樹害蟲シンムシ(心蟲)
●第八。稻の害蟲イ子ノアヲムシ(稻螟蛉)
●第九。茶樹及果樹害蟲ミノムシ(避債蟲)
●第十。豌豆害蟲ヱンドウキリムシ(夜盜蟲又地蠶)
●第十一。桑樹害蟲クハカミキリ(桑天牛)
●第十二。稻の害蟲ツマグロヨコバヒ(褄黑橫蚊又浮塵子)
●第十三。桑樹害蟲イトヒキハマキムシ(系引葉捲蟲)
●第十四。茶樹害蟲チヤケムシ(茶蛅蟖)
●第十五。馬鈴薯及茄子の害蟲テントウムシダマシ(擬瓢蟲)
●第十六。稻と麥の害蟲キリウジガガンボ(切蛆蚊姥)
●第十七。桑樹害蟲キンケムシ(金條毛蟲)
●第十八。桑樹害蟲アヲハマキムシ(青色葉捲蟲)

定價壹枚金拾五錢　郵稅貳錢　百枚以上一纏壹枚拾錢の割郵稅百枚に付貳拾錢

●第十九。桑樹の害蟲クハケムシ(桑蛅蟖)(昨年八月新刊)
●第二十。稻の害蟲フタホシズヰムシ(三化生螟蟲)(同十一月新刊)

◎害蟲圖解未刊の分豫告

◎稻の害蟲イナゴ（稻螽）
◎稻の害蟲オホズヰムシ（大螟蟲）
◎稻の害蟲セジロウンカ（背白浮塵子）
◎稻の害蟲ヒゲナガアブ（長角虻）
◎桑樹害蟲クハハマキ（桑葉捲蟲）
◎蠶の害蟲カヒコノウジバヘ（蠁蛆）

◎梅樹害蟲ウメシヤクトリ（梅尺蠖）
◎稻の害蟲トビイロウンカ（褐色浮塵子）
◎稻の害蟲クロクサガメ（黑色椿象）
◎桑樹害蟲アヲハマキムシ（青色葉捲蟲）
◎桑樹害蟲クハゴ（野蠶）
◎蔬菜害蟲モンシロテフ（菜の螟蛉）
◎蔬菜害蟲サルハムシ（菜の葉蟲）
◎大豆害蟲ヒメコガ子（姫金龜子）
◎梅樹害蟲ウメケムシ（梅蛅蟖）

◉豫約代價

◉圖解の紙幅縱一尺三寸横九寸 ◉壹枚の代價拾五錢郵稅貳錢
◉百枚以上一纏壹枚拾錢郵稅百枚に付き貳拾錢
壹枚拾錢郵稅貳錢
但申込の際前金添附の事
圖解代金 凡て前金にあらざれば回送せず但郵券代用壹割增の事

◎松樹害蟲マツケムシ（松蛅蟖）
◎藍の害蟲アヰノザウムシ（藍象鼻蟲）
◎粟の害蟲アハノズヰムシ（粟螟蟲）
◎胡麻害蟲メンガタスズメ（胡麻蠋）
◎赤楊害蟲ハンノキケムシ（赤楊蛅蟖）
◎櫟の害蟲カミキリムシ（天牛）

◎梨樹害蟲ナシゾウムシ（象鼻蟲）
◎梨樹害蟲ホシハマキ（星葉捲蟲）
◎果樹害蟲イラムシ（刺蟲）
◎藍の害蟲アヰノズヰムシ（藍の螟蟲）
◎粟の害蟲アハノヨタウムシ（粟蠶）
◎里芋害蟲セスヂスズメ（烏蠋）
◎桐樹害蟲シモフリスズメ（桐蠋）
◎果樹害蟲ホシカミキリ（白斑天牛）
◎果樹害蟲ドウガ子ブンブン（金龜子）

發行所 岐阜市京町 名和昆蟲研究所

雜誌昆蟲世界合本出來廣告

○第十二號以下完備

本邦唯一の昆蟲雜誌

昆蟲世界合本

第六卷(昨年分)出來

西洋綴 金文字 入美裝

●昆蟲世界第二卷　五部　(自第拾貳號至第拾六號)

右は明治三十一年發行の分(但合本にあらず)

●昆蟲世界第三卷合本壹冊　(自第拾七號至第貳拾八號)

右は明治三十二年發行の分

●昆蟲世界第四卷合本壹冊　(自第貳拾九號至第四拾號)

右は明治三十三年發行の分

●昆蟲世界第五卷合本壹冊　(自第四拾壹號至第五拾貳號)

右は明治三十四年發行の分

●昆蟲世界第六卷合本壹冊　(自第五十三號至第六拾四號)

右は明治三十五年發行の分

(合本は毎冊金壹圓貳拾錢、郵税金貳拾錢
其他は定價の通り)

右昆蟲世界の義は發刊以來、非常の高評を博し斯學研究上の寶典さして又農事改良の先驅さして歡迎せられしも、未た之を合本さするに至らざりしに、今回讀者の勸告により毎一年分を裝釘して閲讀索引に便にせり、請ふ愛讀を玉へ。

岐阜市京町　**名和昆蟲研究所**

專賣特許第四九八六號　**莖切器發賣廣告**

螟蟲の稻作に害を及ぼすや頗る大にして之れが驅除を爲さんとするには早く病稻を刈り取り害蟲を撲殺するに如かざるなきは精農家諸君の汎く認むる所にして近來之れが實行を唱導せらるゝ、頻りなりと雖ども未だ完全の良器なく止むを得ずして在來の鎌を使用し徒に他の良稻を戕ふのみならず全く螟蟲の潜伏せる稻莖を根底より刈去ることを得ざるが爲め害蟲驅除の目的を達する能はず空しく螟蟲をして其害欲を逞ふせしむるに到る實に慨嘆に堪へざるなり發明者多年茲に意を籠め遂に完全なる一良器を案出せり此鎌は上圖に示す如く小形の鎌に彈力性の遮匙を付したるものにして本器を使用するにはまづ把手(ハ)を握り而して切取らんとする稻莖を左手にて握り遮匙の頭部と鎌の尖端との中間(イ)に當て鎌を少し前方に押すべし然るときは遮匙(ロ)は彈力性あるを以て外方に開き稻莖を押入るべし一度押入れたる后は遮匙は彈力の爲め元形に復し鎌の尖端を被覆して他の健全なる稻莖は插入する事なし此に於て鎌を根底迄押入れ後方に引くときは毫も他の稻莖を害せす容易く根元より刈取ることを得る至極輕便の良器にして靜岡縣農事試驗場等の協賛を博せり…定價一挺金拾錢…農會等の共同御用は特別割引

新發明莖切器の圖

ロ　ハ

製造元　靜岡縣小笠郡北木村　山本勘藏

發賣元　同　縣志太郡燒津町　吉野寅之助

縣下一手販賣所　岐阜市京町　高橋喜之助

Chaerocampa japonica Boisd.

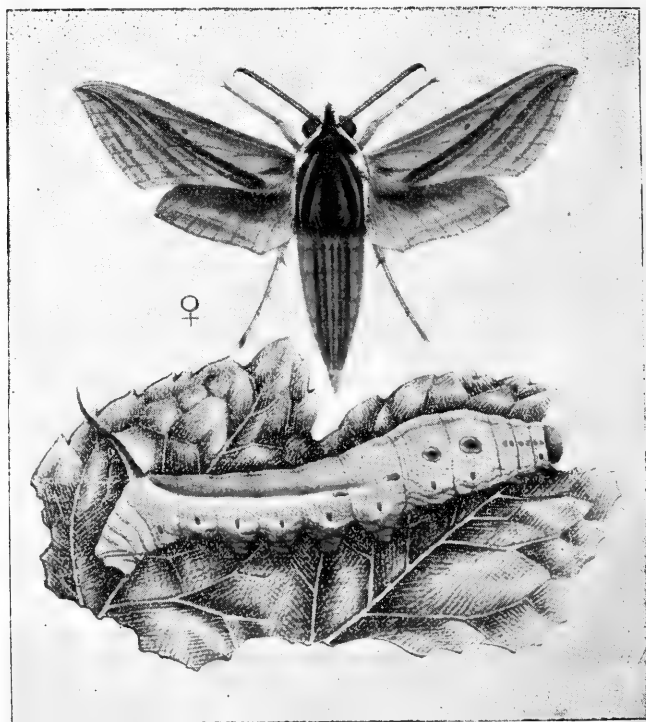
By K. Nagano.

Forewings grey-brown; a black discal dot; a blakish fascia from before middle of dorsum to apex, followed by several greyish and blackish stripes, nearly parallel to outermargin. Hindwings blackish-brown; towards dorsum yellowish-grey; a narrow yellowish-grey subterminal fascia. Wings below ochraceous, speckled and bordered with purplish-brown. Expanse 68-72mm. Head and thorax greenish-brown, suffused ochraceons-brown with whitish border. Abdomen greenish-brown, with four yellowish-grey stripes.

Kiusiu, Shikoku, Honsiu, Yezo; June, July. Larva green or redish-brown; dorsal line deeper; deeper subdorsal line from 6 seg. to horn; on 4,5 seg. with round green spots enclosed in white or yellow; Horn slightly curved, redish-brown; on Vitis vinifera, Cissus japonica, Parthenocissus triauspidata, cte.; July, Sept. Pupate in underground.

昆蟲世界

（毎月一回十五日發行）　第七卷第六拾六號　（明治三十六年二月十五日發行）

（明治三十年九月十日內務省許可　明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

◉昆蟲世界購讀紹介者芳名

秋田縣　細田茂吉君（貳名）
靜岡縣　石井氿平君（壹名）
山梨縣　松井虎治君（壹名）
福井縣　宮本三之丞君（壹名）
鹿兒島　生熊與一郎君（壹名）
茨城縣　中井久藏君（壹名）
靜岡縣　岡田忠男君（壹名）

岐阜市京町　名和昆蟲研究所

◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條に依り晴雨に關はらず、毎月第一土曜日午後一時より、岐阜市京町名和昆蟲研究所内に於て開く、本會員は不及申、何人も毎會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所内　岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會本年中の日並は左の如し

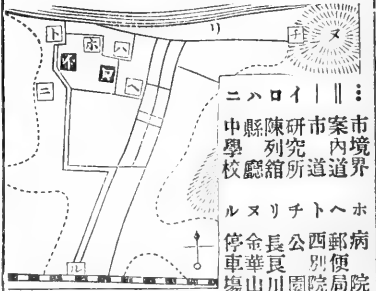
第五十一回月次會（三月七日）
第五十二回月次會（四月四日）
第五十三回月次會（五月二日）
第五十四回月次會（六月六日）
第五十五回月次會（七月四日）
第五十六回月次會（八月一日）
第五十七回月次會（九月五日）
第五十八回月次會（十月三日）
第五十九回月次會（十一月七日）
第六十回月次會（十二月五日）

◉名和昆蟲研究所案内

當昆蟲研究所の位置は上圖の如くにて停車場よりは僅に十餘町養蠶室あり又新築の岐阜縣物產館構內には常設の昆蟲標本陳列館（五間に十六間）ありて標本器具數千点を陳列す有志諸君の來訪を俟つ

岐阜縣岐阜市京町　名和昆蟲研究所

◉本誌定價並廣告料

壹部郵稅共金拾錢（見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す）
壹年分拾貳部郵稅共　金壹圓八錢

（注意）本誌は總て前金に非れば發送せず◉爲替拂渡局は岐阜郵便電信局◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす

廣告料五號活字廿二字詰一行に付金拾貳錢、三十行以上一行に付き金拾錢とす

明治三十六年二月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二（岐阜縣岐阜市京町）
發行所　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二　發行者　名和梅吉
同縣揖斐郡鶯村大字公鄉三番戶　編輯者　小森省作
同縣安八郡大垣町字郭百五十三番戶　印刷者　河田貞城

（大垣西濃印刷株式會社印刷）

Vol. VII. MARCH. 15TH, 1903. No. 3.

（三月十五日發行）

（毎月一回十五日發行）

THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE.

EDITED BY Y. NAWA.

GIFU, JAPAN.

昆蟲世界

第六拾七號

（第七卷第參册）

（明治三十六年三月十五日發行）

（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

目次　（禁轉載）

PUBLISHED BY THE NAWA'S ENTOMOLOGICAL LABORATORY IN GIFU, JAPAN.

名和昆蟲研究所廣告

◎寄贈物件受領公告

一金貳圓也　岐阜縣　武藤百太郎君
一金貳圓也　岐阜縣山縣郡昆蟲學會
一金壹圓也　岐阜縣　室　幾太郎君
一蟬巣　壹個　岐阜縣　吉田寅次郎君
一蜚蠊五頭　卵貳塊　靜岡縣　増井林太郎君
一蜚蠊　貳頭　島根縣　増田齢造君
一昆蟲各稲（三十三種 二百二十三頭）　岐阜縣　塩田健藏君
一台灣民報（昆蟲記事）三葉　台北縣　中村辰治君
一蝶形帽子掛（金屬製）貳個　大阪府　由比昌太郎君
一打出花に蝶摸樣紙貳葉　岐阜縣　永澤甲子君
一昆蟲摸樣葉書（其他十二品）　靜岡縣　神村直三郎君
一昆蟲摸樣挿畫及古錢搨摸　各壹葉　京都市　山口福太郎君
一害蟲驅除寫眞　壹葉　長野縣　藤本　清君
一鹿兒島縣農學校養蟲室寫眞　貳葉　麑島縣　生態與一郎君
一肖像寫眞　貳葉　岡山縣　赤枝小太治君

右寄贈相成候に付茲に芳名を掲げて其厚意を謝す

明治三十六年三月十日　名和昆蟲研究所

◎昆蟲世界購讀紹介者芳名

埼玉縣　風間七郎兵衛君（壹名）
三重縣　杉村卯敬君（壹名）

全國害蟲驅除講習修業生諸君に告く

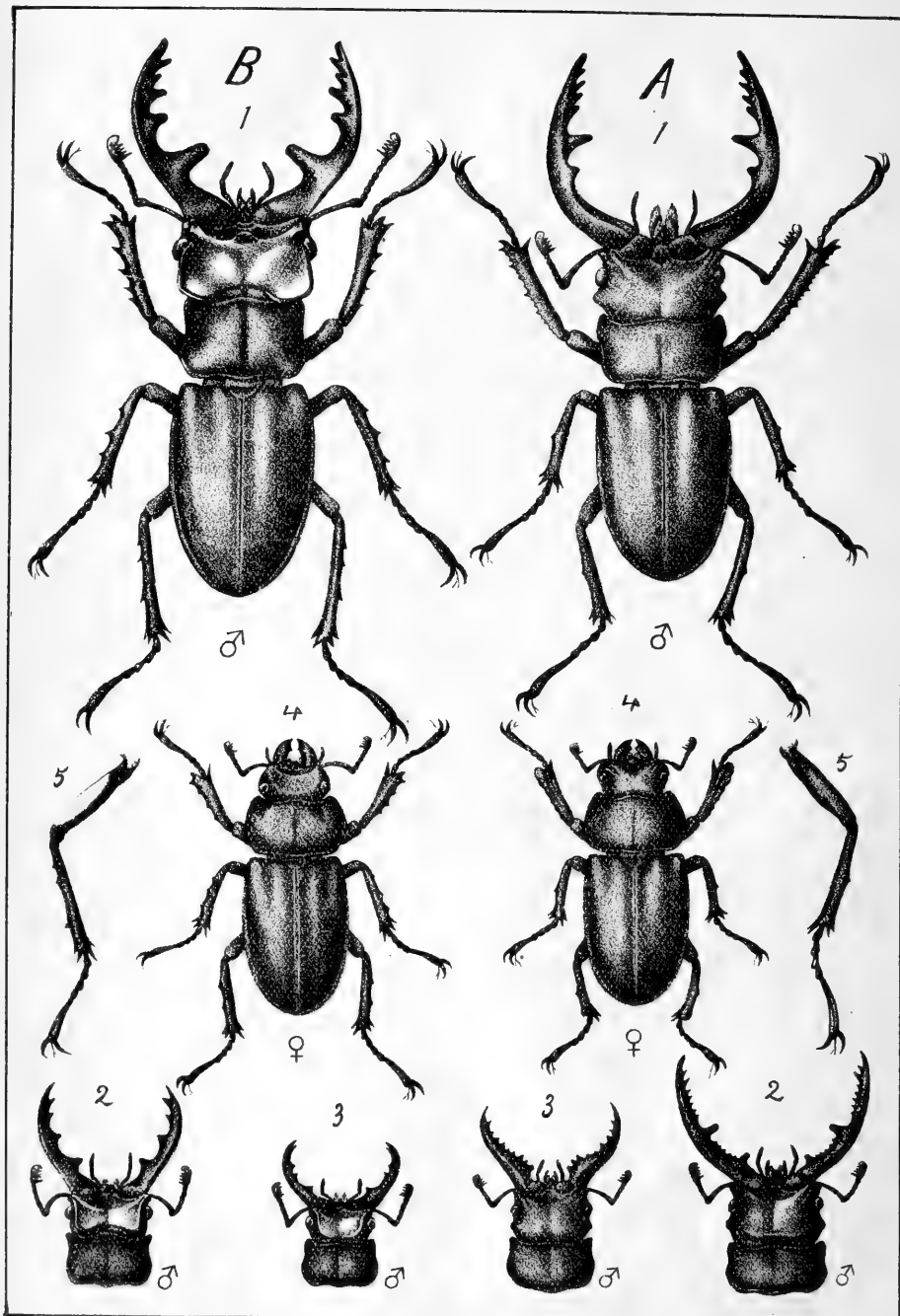
今般第五回内國勸業博覽會の開設を機とし、全國害蟲驅除講習修業生同窓會を、今三月廿八日午後第一時を以て大阪市に開き、一は以て舊交を温め一は以て將來の親和を圖り、聊か斯學の發展應用を助長せしめんとす、吾が同窓會員諸君は、此擧に賛意を表し、奮つて臨場わらんことを。

一、會場は大阪市天王寺清水八百松樓とす。（會費金壹圓）
一、全國害蟲驅除講習修業生外の同志と雖ども、之を正會員に准じて列席を諾するが故に、名和昆蟲研究所證明の修業證書所持の諸君は、遠慮なく來臨ありたし。
一、列席參同の會員諸君は、三月二十日までに、名和昆蟲研究所庶務部内、同窓會幹事に宛通告ありたし。

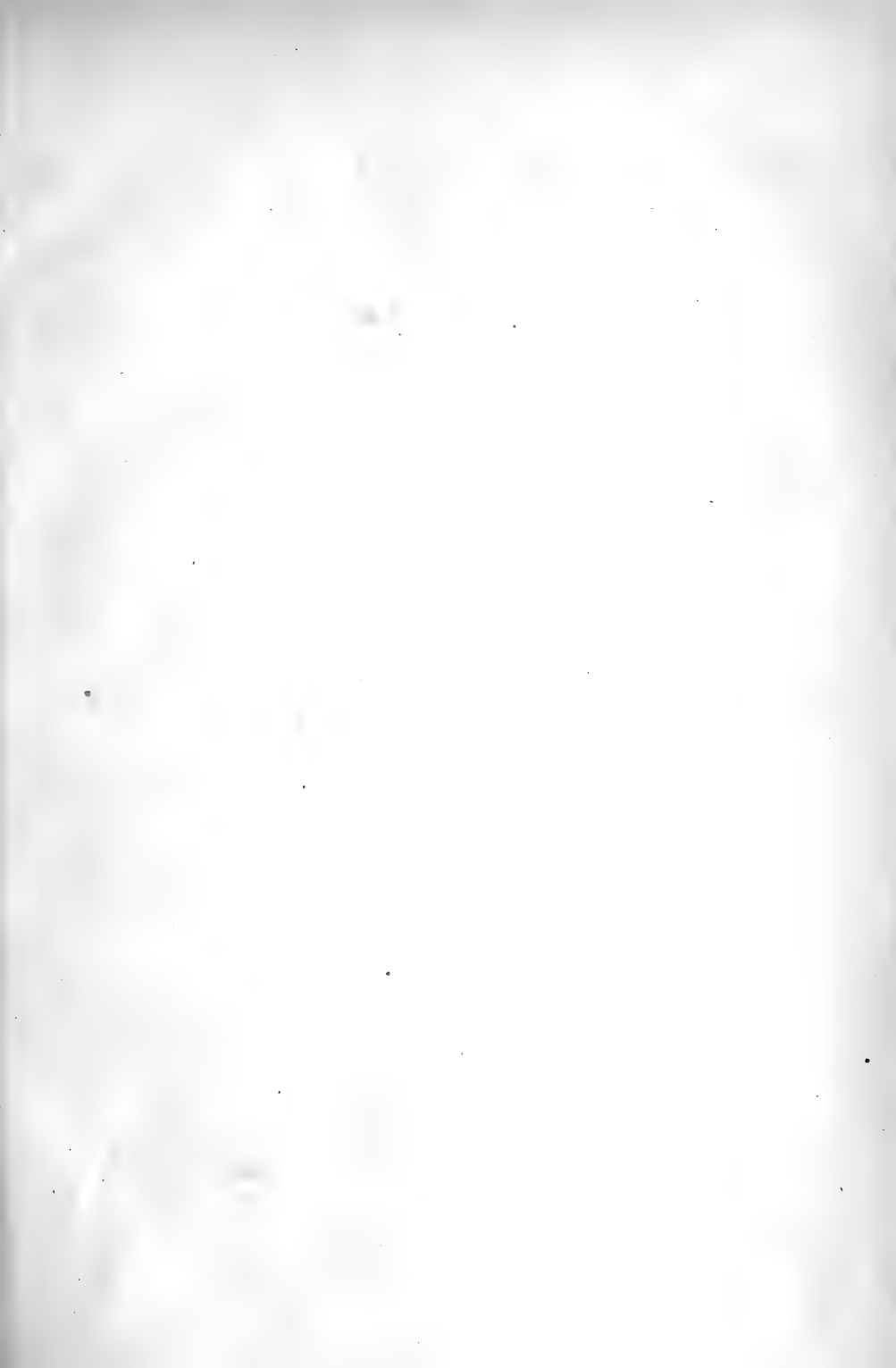
附　當日は名和先生を初め昆蟲學者數名も來臨の都合なり

大博覽會出品標本に對する賞品贈與

第五回内國勸業博覽會に出品の昆蟲標本は、都合數百點の多きを算する趣あれば、隨ひて斯學に稗益を與ふるもの亦少なからざる可し。當昆蟲研究所茲に觀る所あり、此等出品標本中、左の條に該當するもの五點若くは七點を選抜して、各々これに紀念の賞品を贈與し、その斯學界に規範たるの名譽を表彰すると、もに、其功勞に對して一片の謝意を致さんとす。

一、紀念賞品は、名和昆蟲研究所證明の修業證書所持者の出品に限り之を贈與す。
一、紀念賞品は、博覽會審査の結果、最優等に位せる者のみに之を贈與す。但し、審査規程に入格せざるため、優等賞を受くること能はざるも、現品の優良と認むべきものある時は、特に之を抜擇することある可し。
一、雜誌「昆蟲世界」愛讀者中、卓絕の標本を出品し若くは優等賞を得たる時は、特に此規程を適用することある可し。
一、紀念賞品は、昆蟲學に關係を有する書籍若くは、名和昆蟲研究所の徽章を附したる工藝品たるべし。

A. Cladognathus inchinatus, Motsch. ノコギリムシ

B. Lucanus maculifemoratus, Motsch. ミヤマノコギリムシ

論說

（明治三十六年第三月）

◎昆學研究者の學修すべき大教室

從來、內國大博覽會設定の報傳はるや、農商工業者の過半は、驚喜狂奔、たゞ其歡迎の同情を寄するに遲れざらんことを望むものゝ如く、鶴首翹足、偏へに開場を期待するに反して、朝野の學者の、これに對する態度は、毎に冷靜沈滯を事とし、未だ熱誠の以て世人を感動せしむるに足れるもの莫かりき。此を以て、前者は其出品の製作選擇に、勞費歲月を假すを厭はず、後者は微かに其體面を保持するを以て足れりとなし、規摸、點數、兩ながら夐かに他に及ばざるも、敢て介意せざるが如かりき。想ふに、實業家の希望は、利益と名譽とを併得するに存し、學者の欲する所は、愼重著實に在るを以て、この二者は固と同視すべからざるも、蓋し豈、學者が安分退守を事とするの極、後進訓陶の天職を曠ふせる過失なしといはんや。然は云へ、往事は追ふべからず、たゞ其反省に竢つあるのみありしが、時勢の遷移は、舊來の陋弊を攪破せしにや、今回の大博覽會には、此等學者輩の手に成りし出品、殆ど前回に倍蓰せりと」。吾儕は未だ會場觀覽の機會を得ざるを以て、此巷說の眞僞を知らずと雖ども、躬苟くも四民の上班に在る學者の、國家に對する責務として、初より祗應に然らざる可からざる事を信ずるが故に、學界の一慶事として同情を表示するに吝かなるざる可し。

上記の事實は、學術界一般に對する所感なるが、單に昆蟲學の上より見るも、博覽會なるものは、優に一大活學教室たるの資格を有するなるべし。顧みれば、第一回內國大博覽會は、百事整備を缺き、學藝なほ幼稚の時なりしも、猶ほ多少人智拓開の功を收め、第二回には、前回の刺戟によりて、害蟲圖其他を場の一隅に見ることを得、第三回の如きは、數多の標本と、蟲學上の著述とを陳列せしが爲に、始めて觀衆の視線を此方に導き、尋で第四回に至りて、弘く斯學の應用と、効益とを普知せしめたる結果、爰に昆蟲の研究の忽諸に附すべからざる事を悟らしむる事を得き。然れば、此進步の狀態を以て、之を歷史に譬ふれば、明治十年以前は、邈矣たる太古の暗黑時代たりしに、一たび博覽會の開かるゝや、頓に舊套を脫して、上古の未開期に移り、十四年以後は、宛がら中古の半開期に於ける如く、始めて競進の端緒を此間に啓き、廿三年よりは、漸やく斯學に光彩を添へしこと、をさ／＼近古代の開化にも讓らず、而して廿八年以降は、實に今世期の前半の其にも似て、事每に力を試驗に費したるが如き形跡無きにあらず。即ち第五回內國大博覽會は、後期に屬する實行の發程を意味するや論無し、隨ひて其國家に貢献する所、また尠少にあらざるを知るなり。特に、昆蟲標本の出品の如きは、頗る其區域を擴張して農業、林業、教育、水產の各館に分配せられ、點數また前回の比にあらざれば、その器具、藥劑、書籍の、裨益すべき品種に富めることを疑はず。是故に、斯學研究者にして、博覽會場を目するに、神聖なる一大教室を以てし、審らかに眼に視て堅く腦に刻し、明かに心に讀みて嚴に躬に行はゞ、面のあたり自己に利し、また學者苦心の存する所を想察するに足らん。況して品物展觀の利に併せ、內外の名家に就て、實學上、至大の恩惠を被くべきものあるをや。往け、吾が同志の士、この新に開講せる一大教室は、假し爾が有形の財囊を奪ふことありとも、換ふるに形而上の福祿を以て報ゆるもの多からん。

◎貝殼蟲研究の發達史

米國理學士　桑名伊之吉

現今、吾人が、認識したる如き、貝殼蟲研究の應用、及び科學的必要も、第十九世紀の前半期を經過せるまでは、秩序的研鑽をなしたる事蹟を見ざるが如し。就中、一千八百五十年前の研究者は、主にBarensprung, Bouche, Fonscolmb 及び Westwood 等にして、其種屬より云へば僅に三十三種なりき。爾後Burmeister, Fabricius, Curtis 等多くの新種を發見したるも、惜むらくは専ら外殼の形態に重きを置き、敢て深く解剖的特性に注意せざりしを以て、種屬の鑑定を誤まりたるものまた尠なからざりき。

一千八百六十八年に至り、佛國の昆蟲學大家Signoret氏は、彼の貝殼蟲論作(Essai sur les Cochenilles)を起稿し、同七十六年を以て此一大著述を完結し、之を佛國學藝會年報(Annales de la Societes de France)に記載されしが、更に之を合册裝成して廣く斯道研究者に配與せられぬ。其記する所は、六十九屬、二百五十八種に上り、當時世界に於て學名を有するあらゆる種屬を網羅しき。氏は、從來科學者の注意せざりし躰軀の解剖に留目して、「プレ パラート」の製作及び顯微鏡の檢視をも遂げ、其主要局部、若くば全部を、精密巧緻の圖書によりて說明し、以て記事の補足となしき。是れ實に斯學研究の一新法を後進輩に傳へしものと謂ふべきなり。

千八百八十年より同八十二年に渉り、北米合衆國コーネル大學の昆蟲學大家コムストック氏は、彼の有益

なる二報告を公にしき。氏は専はらDiaspinae亞科を攻究し學名を有する種類の雄蟲、及び多くの新種を發見せし中にも、デアスピネー亞科雌蟲臀板の組織を研究の結果、分類上重要なる特點たることを首唱したるは、斯學界に一道の光明を添へしものと謂ふべく、其他ライレー、ホワードの兩氏、亦其論作を「昆蟲の生活」(Insect Life)に記載する所尠なからざりき。方今、貝殼蟲の専攻家として名聲の隆然たるは米國ニユーメキシコ州のテー、デー、エー、コケーレル氏たるべし。氏は已に一百五十餘の新種をデスクライブし、以て貝殼蟲の總目錄を編纂しぬ、其如何に彼の腦漿を多費せしや想見するに餘りあり。尋で中央亞米利加產貝殼蟲をも研究し、乃ち之をBiologia Centrali America (Dec. 1899)に記載し、又別に貝殼蟲の食用植物(Food Plants of the Coccidae)を公行して、一般攻究者の筌蹄たらしめき。

ニユジーランド及びオースタラリアに於てはW. M. Maskell氏によりて、二百餘の新種を發見されしが、一千八百七十八年ニユジーランド學藝會年報(Trans. of New Zealand Inst.)に氏が研究の第一報告を收載せし以來、同九十七年に易簀せらるゝの日まで、絶えず筆を此蟲に執りたるのみか、其七十八年三月には「ニユージーランドの貝殼蟲」(Account of the Scale Insects of New Zealand)てふ有益の一書をも編纂しき。該書には廿三葉の色彩圖を插入して、有害種六十七品を記載し、別に貝殼蟲の特性、及驅除方法に關する事項を細說し、尙濠大洲特產の五倍子貝殼蟲をばW. W. Froggatt の學界に紹介する所ありき。

英國に於ける貝殼蟲の専攻家はF. W. Douglas氏を以て嚆矢とすべし。氏が一千八百八十七年頃より、同九十四年まで、昆蟲學月報(Ent. m. m.)に寄稿せし論說の前後二十七回に達せしを以て見るも、其蘊蓄の如何を察し得べし。一千八百九十一年に至り、Newstead氏はド氏に續きて研究を開始せしが、一千八百八十五年までに知られし英國產貝殼蟲は、僅に二十種(ド氏調査)なりしに、今日は將に一百種に垂

んたり。而して二氏は去る一千九百二年を以て英國貝殼蟲圖說(British Coccidae)てふ大著述編述の功を成就し、書中には貝殼蟲の發生經過、貝殼蟲分泌の有用物、貝殼蟲の移殖、天敵、採集法、人爲的驅防、殺蟲劑、施劑法、貝殼蟲分類等の諸目を列次收載せり。英領印度にてはシーロン貝殼蟲圖說(Coccidae of Ceylon)てふ大著述あり、是はE. E. Green氏の手に成り、其中第一二の兩卷は既に刷行して、斯學者の座右の用に供せらるゝを見る。

歐大陸全般より言ふ時はシグノレー氏以後、斯學研究の發達稍遲緩なるが如し、蓋し專攻家の少なきによれりとすべし。而してボヒミヤにはSulc氏の自國產貝殼蟲を研究せしあり、イタリアにては、Leonadia氏の筆によりて「デアスピネー」亞科の「モノグラフ」成り、獨乙にはReh氏のあるありて、多く此蟲に就て學ぶ所ありき。

アフリカ產貝殼蟲にはA. E. Eatonのアルゲリヤ地方に於て蒐集せし、高價の標本あるが爲め、ニユステード氏之を研究し、其結果をば一千八百九十二年のロンドン昆蟲學會報に記載せらる。キツプコロニーまたLounsbury氏の輩出ありて、既に幾多の有益なる研究を遂げられき。ガラパコス群島の貝殼蟲は記者の手によりて調査を經、一千九百二年紐育昆蟲學會報第十卷に寄稿しき、其種類は僅々四屬六種を算するに止まり、多くは他邦の移殖に係るものゝ如かり。

飜つて本邦の印行書を觀るに、貝殼蟲に關する記事決して尠なしとせず、中に、一千八百九十一年の夏名和昆蟲研究所の編纂にかゝる貝殼蟲圖說てふ一書は、斯學初步の士を益するの大なるを知る。同年の九月、記者は更に日本貝殼蟲(Coccidae of Japan)てふ一論文を公にし、以て邦產貝殼蟲一百餘種の分布と、其寄主植物とを明かにし、又併せて二十餘の新種をデスクライブしき。是より先き、米國理學士高

階於菟次氏は、米國農務省の囑托によりて、本邦産貝殼蟲を採集したることありき。

之を要するに、一千八百七十六年即はちシグノレー氏の時には、學名を有するもの僅に二百五十八種に過ぎざりしに、一千八百九十九年に至りて八百六十一種を増加するに至りしは、如何に種々の原因を存すとは云へ、第十九世紀後半期に於ける斯學の發達を徵知すべきなり。

◎イ子ノズ井ムシの解剖

靜岡縣　岡田忠男

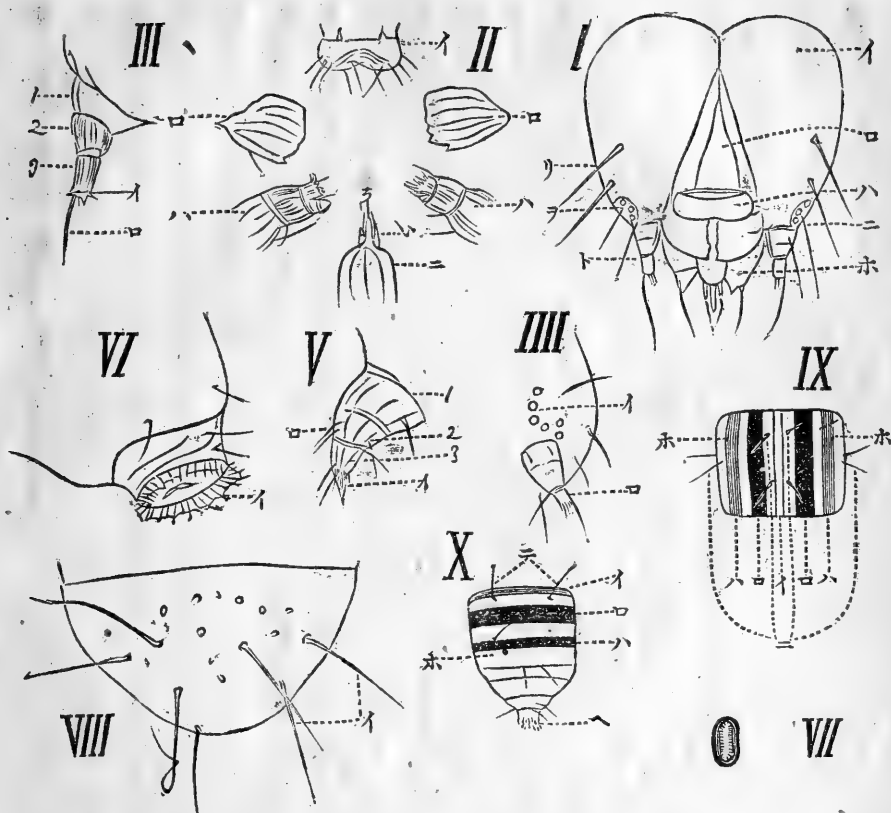
凡そ昆蟲學に志ざす者の、昆蟲外部の構成を知得するを以て足れりとすべからざるは勿論、内部の組織をも會得せるの必要あるは、余の贅議を俟たざる所なり。而して昆蟲中、蠶兒の如きは、夙に諸家の研究によりて、内容外形を審かにし、また毫も遺憾なし、豈深く謝せざるべけんや。余偶々茲に感あり曩にイ子ノズヰムシの解剖を試みぬ。然れども、其蟲躰の微小なると、余が研究の未熟なるとは、未だ要領を得せしめざる點多し、然るを大膽にも今之を本誌に披露する所以のものは、偏へに大方諸君の叱正を請はんとするにあるのみ。そも解剖には初學たる余が、形體の微小にして最も檢査に困難を感ずるイ子ノズヰムシを擇びしは、唯々の農界の一大害蟲にして、利害の關係する所莫大なれば、之を解剖して躰軀の構成を明かにする事の、間接にはズヰムシ驅除の念慮を奮起すべき一材料たるを信じたるに本づけるなり。

余が解剖用に供したる螟蟲は、躰長八分内外、幅九厘のものにて、昨三十五年二月中、稻藁より採集せしを、湯殺の後酒精に侵藏せしものに係り、外部の色澤は多少變色せしやに感ぜしも、内部の諸機官に至りては、著るしき異狀なかるべしと信ぜしものなりき。今内部の構成を述ぶるに先だち、其外部に對

せる自已の實驗を略述する所あらんとす。

一、外部の構成　試みに一頭のイチノズヰムシを取りて、之を外部より觀察するときは、其形圓筒狀にして、頭尾の兩端は少しく尖り、中央部は稍太くして、明かに頭部と胴部とを辨別し得べし。次に胴部の十二環節の背面に鏡檢を加ふれば、第一環節には、恰も硬き皮の如き板〔硬皮板〕ありて、上に硬毛を生じ、其狀半圓球の如く、第二環節より第十一環節に至るまでは、背面の中央に褐色の一線〔背線〕を走らす。これに傍へる兩側に、各々稍太き一線〔亞背線〕を有し、猶ほ其兩側には亞背線よりも細き一對の氣門線を有するを見る、即はちイチノズヰムシは、都て五線を有すとすべし。第十二環節は、三角形をなし、背上に第一環節に同じき硬皮板を具へ、全皮膚上には處々粗毛を生ぜり。』更に之を腹面より觀る時は、其頭部には口器、單眼、觸肢の三者を具有し、第一二三の各環節には、爪を存せる三對の脚〔胸脚〕ありて、第四五の兩環節を除き第六七八九の四環節には、四對の腹脚を備へ、第十十一の兩環節を除き、最終の第十二環節には一對の尾脚を具ふるを見る。』なほ之が側面に就て觀察する時は、背線亞背線、氣門線及び脚部を見るべく、特に第一四五六七八九十十一の九環節には、氣門線に接して各一個の小黑點〔氣門〕をも認め得べし、即はち呼吸作用を營む處にして、其形楕圓をなせり。

頭部　頭部を細檢するに其兩側には、褐色半圓狀のキチン質板あり〔顱頂板〕あり、其中間の前方に位ゐする三角形の部分は、前頭板〔或は顱頂間板〕にて、其色淡黃に、左右兩邊の長さは、各二厘六毛强を算し、底邊は一厘八毛左右あり。

口器　口器は、キチン質より成れる一枚の上唇、一對の上顎、肉質なる一對の下顎、及び一葉の下唇とを以て構成せらる、而して幼蟲が稻莖中に棲息して咬嚙するに、最とも有効なるを上顎とす。上顎は

濃茶褐色にして、不正方形をなし其一邊には鋸齒あり、幅九毛强、長一厘强を算す。上唇は淡茶褐色にして一個の瓣の如く、幅九毛九絲强ありて、處々に粗毛を生せり。下顋は肉質にして三節より成り、末節は二個の突起に分れ、其一方は二節を成して先端尖り、他の一方は前者に比すれば、少しく太くして其先端に六本の肉狀突起あること、恰も人の手の如し。下唇には二本の肉質突起ありて二節をなし、其末端に粗毛を生ず其長さ二節の突起を併せて五毛六絲强あり。此二突起の中央に吐絲口突出す、其長は五毛六絲强なり。

觸肢　口部の兩側に位ゐしたる突起物にして、三節より成り、其長九毛五絲强ありて、一節は膨大し、先

端に至るに從ひて漸次縮小し、末端には三個の肉質突起、及び一本の粗毛生せり、其長七毛九絲あり。

眼　兩觸肢の基部の外側に、黑褐色なる部分ありて、圓形なる單眼六箇宛を有せり。

胸脚　腹面の第一二三環節に附着する所の胸脚を採りて、實形を窺ふ時は、腹面に接する處より、先端次第に細まり、三節をなして、其末端に一個の濃褐色なる爪を有せり、而して三節とも各々粗毛を生せり、其形狀は鏡檢圖に示すが如し。

腹脚　腹脚は第六環節より九環節に至る、躰の腹面の兩側に附着して肉質をなし、其先端は圓筒を截りたるが如く、直徑一厘五毛强ありて、其周圍は褐色の鉤狀物を附着し、尾脚は略ぼ腹脚に類似せり。

氣門　氣門は前已に記するが如く、第一四五六七八九十十一の九環節の兩側、氣門線の下に位し、其の形は橢圓形をなせり。長徑四毛七絲弱、短徑三毛一絲强にして、其周圍は黑色をなし、中央の周圍よりは、辨毛の如きものを生じ、全體濃褐色を呈せり。

右に述べたるはイチノズヰムシの外部の構成を簡單に觀察したる事項にして、或ひは要點を缺き、或ひは蛇足を加へし處も之あらん、讀者幸ひに之を諒せよ。（未完）

（圖解）　I、頭部の放大圖〔（イ）顱頂板（ロ）前頭板（ハ）上唇（ニ）上顋（ホ）下顋（ヘ）下唇（ト）觸肢（チ）單眼（リ）粗毛。〕 II、口器（Reic hert 2×3）〔（イ）上唇（ロ）上顋（ハ）下顋（ニ）下唇（い）粗毛（ろ）吐絲口。〕 III、觸肢（Reic hert 4×3）1 2 3 環節〔（イ）突起物（ロ）粗毛〕。 IV、單眼（Reic hert 2×3）〔（イ）單眼（ロ）觸肢〕。 V、胸脚（Reic hert 2×3）1 2 3 環節〔（イ）爪（ロ）粗毛〕。 VI、腹脚（Reic hert 2×3）〔（イ）鉤〕。 VII、氣門（Reic hert 4×3）。 VIII、十二環節の硬皮板（Reic hert 2×3）〔（イ）粗毛〕。 IX、環節の背部の放大圖〔（イ）背線（ロ）亞背線（ハ）氣門線（ニ）粗毛（ホ）氣門〕。 X、環節の側面の放大圖（Reic hert 2×3）〔（ヘ）腹部〕。

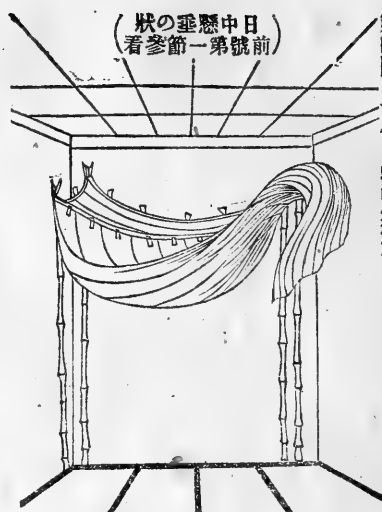
◎邦産瘧媒蚊種上古棲息の説（後）

仙臺岩躓　晴耕雨讀子

五蚊屬の性質　凡そ蚊子には、數十の種屬あるも、概して寒地よりは温地を好み、温地よりは熱地に多し。而して寒暖其處を異にすれば、隨ひて其種屬を異にすること、猶は植物帶に於ける、樹種の異同の表現のごとし。是を以て、東北諸國には、往々蚊帳の用を知らざる無蚊郷あるに反して、西南の暖地に於ては、冬春の候と雖ども、其化育を遂ぐる處多く、南北互ひに其種屬を異にするに伴れ、同一瘧名の下にも、自づから良惡性の差別を生ずるを見る。要するに、本邦は瘧媒蚊の蕃殖圈内に屬し、其四時の氣温の中和を得、且つ大氣の多濕多潤なるは、偶々以て蚊屬の發育を期待するに均しければ、一たびこれに移殖の機會を與へたらんには、忽倏の間に、布哇國と同一の結果を來たすべきは、他の蟲種の分布蕃殖に照して昭らけし。原來、蚊屬の移殖作用は、頗ぶる微弱にして、特に瘧媒蚊の翅力は、遠地の移動に堪へざるものなるも、時ありて意外の遠飛を試むること無きにしもあらず。是れ既に先進諸家の屢次實驗を經たる事實たるのみか、また暖地の原產と聞へたる此種族の、今や世界に瀰蔓して、毒を傳へ害を加ふるに徵すれば、思ひ半に過ぐるものあらん。然ればハワード氏も「英國の軍醫ヤング(F. A. Young.)氏は、其調査を積める瘧媒蚊に就て、數多の例證を提供して、遂に、二百碼飛行説を主張し、クリストファー(Christopher.)ステーフェン(Stephen.)の二氏は、其試驗より得たる實例に據りて、六百碼飛行説を懷き、なは時としては、意外の遠距離に、移動するものなる事を立證せしかども、結局五十步百步の論爭に過ぎざれば、寧ろ退きて、之が驅防を講ずるこそ万全なれ」との意見を述べしなる可し。然は云へ、其種類によりて、能く驅防の全功を收め難き事あるを知らざる可らず。即はち昨年四月、米國ニューゼルシー(New Jersey)州に於て、蚊子の驅防調査に關する州令を布けるや、州立農事試驗場技師

スミス(John. B. Smith.)氏は、爲に報告をふく「墟湖ゐ發生の蚊種ありせば、到底之を驅防すること能はず、假し病因を誘致することありとも、吾が力を以ては、之を救濟するに由なし。〔中畧〕瘧媒種は、普通種の化育を遂げ得ざる處ゐも、常ゐ蕃殖を遂ぐるものなれば、猶ほ精細の研究を積むに非んば、各般の驅防方法を案出すること難し」云々、以て證とすべし。而してハヮード氏は、このニュゼルシー產有毒蚊種の、漸次大陸內地ゐ蕃殖する原因を以て、州海岸ゐ散在の池沼に發生する蚊子の、日夕滊車の輸送力を藉りて、遠近到處に分布せらるゝゐあり、となせり』。以上の事實ゐ依る時は、瘧媒蚊種は本邦の原產ゐあらずとも、其初め、或作用ゐよりて、他より移殖せしものなることを畧ぼ認諾し得べく、併せて、其上古より棲息せしものなることをも、想像するに難からざるべし。

日中懸垂の狀
（前號第一節參看）

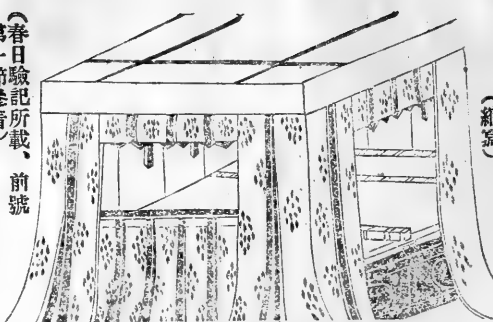
第四圖　古代の蚊帳（想定）

六●●●●●邪神の毒氣　紀記を按ずるに、日本武尊の尾張より美濃を經て、近江國膽吹の山路に分入り給ひしは、景行帝の四十年より四十三年の間にて、御齡正ゐ三十歲左右の頃の事なり。たゞ其季節は詳らかならざるも、濃霧溟濛として深く峰影を鎖し、巨蟒蜿蜒として幽徑に蟠まり、氷雨沛然として來り撲てりきと云へば、時は夏秋炎暑の候ゐて、蚊屬化育の旺盛期たりしや論なかるべし。まして當時は有毒蚊種發生の卑濕地も多かりしならんに、幾夜か此間に露宿を重ね給ひし事とて、其刺螫を被けられしを、然りとは知り給はで、發病の誘因たる登山を試みられしものならんか。然れば大日本史などに、尊雲氣ゐ侵されて、昏迷醉ひ給ひたるが如しとあるは、新婚過勞の御身に、加へて外界の刺戟頗ぶる急劇なりし

より、端無くも、茲に瘧疾の發作を促進して、惡寒戰慄を催ふし給ひたる時の前後を謂ふなる可く、其山麓の醒井に泉水を掬び、始めて醒め給ひたりとあるは、御體に高温灼熱を發して、煩渇引飲を事とし給ひたる第二の發作期間を謂ふなるべく、その醒井にて憩ひ給ひし時より、御身に痛みあることを感じ給ひたりとは、冷熱交發の御苦惱熄みて、病勢は漸やく第三期に移りたるも、なほ瘧疾に有がちの倦怠疼痛を覺えさせ給ひたる事を謂ふなるべし。斯れば御歸りの道すがら、脚力輕爽ならずと宣ひて、節に援りて行歩を續けさせ給ひしも、哀れ當然の御事にて、其尾張路にて、復た少焉御苦しみを感じさせ給ひしは、發作當日の故にもやあらん。固より此頃は、沿道に宿舍の設けも無く、將た安かに攝療し給ふ術とても無さに、御年齡さへ、已に壯歲に達し給ひし事なれば、御惱の經過も、自づから重かるべきを、此行強ゐて數十里の長程を踏破せられしものから、伊勢國三重の里に、たどり着給ひたる頃よりは次第に御氣力も衰退し給ひたらんやう覺ゆ、最と畏こき極みにこそ。按ずるに、膽吹は氣吹の義にして人の此山より吐出す雲氣に觸るゝ者ある時は、忽まち其瘴毒に感じて、疾ひに臥せしより斯く名づく、とは古來の傳説なるも、余は史書を讀む每に、頗ぶる此説を疑がひ、所謂瘴氣、毒氣を以て、疾病誘發の一刺戟に外ならざる可しと信じ、再轉、遂に尊の發瘧を信ぜるに至りしなり。

（註）驛遞志稿に云ふ。遠近諸道一も宿すべきの旅舍なく、就て借るべきの車輿なし、日暮れば則山野に露宿し、殆ど麋鹿の轉ずるが如し、稍其力ある人は、則到處草廬を結て臥し、病發すれば、則其廬中に於て休養す。今更科日記を按ずるに、常陸介菅原朝臣孝標得替して京に上る、治安元年九月三日任地を發し、十五日下野國某地の原野に宿す、終夜大雨、其宿する所の草菴將に漂はんとす、衆皆驚懼して寢ること能はず（中略）十月晦日、參河國二村山に宿し、又草菴を一柿樹の下に結ぶ、終夜柿實其菴上に落つ、衆皆拾て之を食す。尋で尾張、美濃、近江を過ぎ、十二月二日京に入る」。又初瀨寺に詣する記に、歸路奈良坂に至て、日將に沒せんとす、原野に一廬を設けて此に宿す。從者皆蔽膝或は筵席を敷て、廬外の草上に露宿し、冷露滿頭を濕す」。云々、それ僅かに九百年前の官道に於てすら、行旅の難は猶ほ此くの如し。況して韓醫方の入るに先だつこと三百年、治安に先だつこと實に九百

年の上古にありては、生活上の不便、更にこれよりも甚はだしかりし事を想像するに難からじ。

七●●●●記載の要領

余はもと醫學を知らぞ、故に日本武尊の感毒を目して、直ちに痁瘧發作の致す所と斷定するに憚かるものあり。然かも斯く言ふことを得ば、蚊種の研究上に利する所あるを以て、稍奇を衒ふに似たるも、敢て自説の是非を世の博識に質さんとするなり、幸ひに叱正を垂れよ。抑そも、余が斯かる妄想を懷くに至りしは、數年來、毒氣の性質を疑ふの餘り、閑を得れば則はち諸書の檢索に努めしに、偶々普通性三日熱の徵候に、國史の毒氣の記事と暗合する節あることを悟り、なほ季節の暑熱、沿道の卑濕、宿舍の不便、年齒の發達、婚後の冒險、氣候の激變等も、瘧因の一として數ふるに足るべきのみならず、其昏迷渴熱の狀、疼痛疲勞の態、また能く外臺秘要及び原南陽氏、ベルツ氏、抱氏等の瘧論に適合する所多かりしより、扨は採りて以て考證の資料に供せしなり。但蚊屬の固有種、移殖種、兩者何れに屬するやは、今なほ選擇に迷ふも、邦内に分布する十餘種中、特に瘧媒蚊の同一形質を具へ、且つ洽ねく全土に蔓延せし跡に就て、之を稽ふれば、如何に蕃殖の迅速なる種族とは云へ、蓋し上世以後の新種とも思はれず。若しそれ、輕舟を暖流に操りて、遠く龍宮、高砂島の如き、蚊屬の原産地附近に來往し、更に片帆を寒潮に懸けて、常に韓吳の瘧疾流行地に出入せる、我が祖先の事蹟を追懷せば、今にして其固有種たると、將た移殖種たるの別を論ふの要無けん。次に、本篇の綱領を摘載して、之が結尾となす。

第五圖　帳臺の圖（縮寫）

（春日驗記所載、前號第一節參看）

蚊子

一 國史には、上古に蚊屬の棲息を示さず。然れども蜻蛉科、蟆子科の蟲類の存在は、間接に之が發生を示す。

二 上中兩世期の中間に成れる歌集及び國史には、屢次蚊害を書し、また借訓として蚊字を用ゐたるもの多し。是れ早くより其發生加害を認めたる一證とすべし。

三 邦內に蚊屬發生の原始は、之を詳にせざるも、中古に蚊帳の製あるは、其蕃殖力の强弱如何を知らしむるに足れり。而して上古史の蚊屋野の稱は、茅野又は蚊谷野の義にして、蚊帳野ならざる可ければ、此を以て蚊帳あるの證となし難し。(第一圖及び第二圖參看)

四 住民の多少によりて、蚊屬の消長を左右せざる事實は、南鳥島及び北海道の例に於て之を證し得べく、船車によりて其分布區域を擴むるものなる事は、布哇島及び北米ニユーゼルシー州等の例に於て之を證し得べし。

五 蚊子は其翅力强健ならず、特に瘧媒蚊種は、遠地の移動に適せず。然れども、適當の風力を藉るゝ時、若くは或時期に達したる時には、能く意外の遠地にも飛行することあり。

瘧疾

一 旣に上古に蚊屬の棲息せしものあらば、其自然の結果として、また瘧疾の隨伴をも認めざる可からず。去れども、古史に瘧疾の記事無しとて、敢て蚊屬の棲息說を左右するに足らず。

二 中古に至り、頓に瘧疾傳播の跡を存し乍ら、其起源の湮晦にして、探り易からざるは、偶々以て、前世期以來の風土病たる事實を證徵するに足れり。而して上古史に之を載せざりしは其名稱の定かならざると、他の疫疾の如く、致命症にあらざるが爲めなりしならん。

三 中古期の初めより、追儺の儀式行はれ、又瘧鬼、エヤミノカミの稱を存するは、旣に其以前に瘧疾の流行ありし事實を證す。

四 中古代に成れる史書に、多く瘧疾に關する說話、及び療方等を載せ、且つこれにワラハヤミ、エヤミ、オコリ等の病名を命じたるは、古くより該病の性質、經過を知れる結果たるべし。

五 東西の祖國に於て、二千年乃至三千年前より、瘧疾の流行を來たせしは、また本邦にも、早くより其傳播の事實あることを推想せしむるに足れり。

結論

一　現時、邦內に瘧媒蚊を產せざる地方無し。而して其分布區域の濶大なるに關はらず、同一種に止まるは、之が分布期の頗ぶる久遠なることを證するに足る。

二　本邦は蚊屬の發育區域內に屬するに、加へて太古以來、他の蚊屬發生地及び瘧疾流行地との交通を絕たず。是れ、その分布と、瘧疾の傳播とを誘致するに、無二の機會を與へたるものと謂はざるを得ず。

三　邦產瘧媒蚊は、固有種にあらずして、移殖種に屬し、其初めや、分布上の諸要素を具備する西隣の淸韓地方より、我が西北地方に移り來りしならん。蓋し南洋產とは、其種屬を異にし隨ひて其病質をも異にするが故に、未だ其北遷を確認し難きのみならず、我の風土は、彼種の蕃殖行毒に、恰好の利便を與へざればなり。

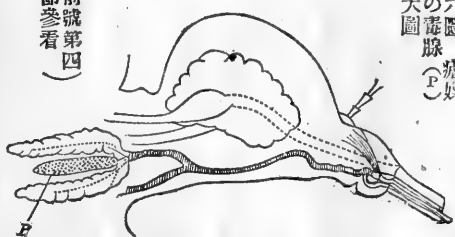
四　瘧疾を媒介する蚊子は、決して一種に止まらざるに、本邦には從來、唯ハマダラ蚊(Anopheles punctipennis. say?)の知られしものあるのみ。故に上古に棲息せしものありとせば、そは現存種と同種なりしなる可く、瘧疾も亦同性たりしならん。

五　前擧の諸例に就て、判斷を下す時は、人烟稀疎の上古にも、なほ蚊屬の發生ありて、今日と同じく瘧因を媒介せしなるべし。

第六圖　瘧媒蚊の毒腺(P)放大圖

(ハワード氏原圖)

八　脚氣病因の媒介物

脚氣病因の細菌なりや否や、又その發病の營養に關係ありや否や、等の觀察は、醫學上の問題に屬するを以て、余が容喙すべき限りにあらず。然かも、其病因の傳播に至りては、昆蟲學の範圍にあるべしと信ずるを以て、爰に片言を附記せんとす。蓋し脚氣病と瘧疾とはもと其病因を異にし、病性また同じからざる可しと雖ども、その發作徵候には、奇くも彼此符合の點多きのみか、脚氣病の年々夏秋季を以て、瘧疾流行地に發生するの事實に想ひ到れば、或ひは一種の昆蟲の其毒舌を弄して、病因を甲者より乙者に移植するに非ずや、との疑ひ無きにあらざれば

(前號第四節參看)

なり。而して其媒介物は、瘧疾と同じく、蚊屬の一種たる鹹水蚊、若くはこれと近似の衛生害蟲に非ざる莫きか〔第三圖參看〕。意ふに雞肋の誹りは免がれ得ざる可きも、次ょ其類似點を掲げて、余がこの疑問を發したる事由を明ょせん。但し、先輩間既ょ此説ありと云はゞ、余また何をか爭そはんや。

一、脚氣病の、其初め海港、若くは海邊の濕地に限局發生し、漸次內部の高地に傳播せし跡に就て之を見るに、猶ほ瘧疾の平地、若くは湖沼所在地に流行して、遂に其以外の地を侵襲せしが如し。

二、脚氣病は、啻り海濱沮洳の地を侵すのみならず、また洪水汎濫の虞ある卑低地に流行すること、猶ほ瘧疾のそれに於けるが如し。

三、脚氣病の、常に樓下の居住者、即はち昆蟲發生地に近き者に多く、高樓層閣に居住する者に少なきは、猶ほ二層樓、若くは三層樓上に、瘧疾患者の少なきが如し。

四、脚氣病の、群集雜居の不潔地に多發して、氣水の淸鮮なる土地に少なき事實は、猶ほ瘧疾のそれに於けるがごとし。

五、脚氣病の、或一定の海拔以上の高地、若くは溫泉涌出地を侵さゞる事實は、猶ほ瘧疾のそれに於けるがごとし。

六、脚氣流行地と、未流行地との間に、丘陵の分界するものある時は、後者は概むね其災厄を免がる。是れ猶ほ瘧疾のそれに於けるがごとし。

七、脚氣病者の、毎年四月に稀に、五月に增加し、七八月に其極度に達するは、昆蟲の盛衰と並行線をなすものにて、則はち猶ほ瘧疾患者の增減のそれのごとし。

八、脚氣病の、概して霖雨の後、頓に炎暑に移る間に續發するは、猶ほ瘧疾の流行のそれに於けるがごとし。

九、脚氣病は、南洋熱帶諸島、及び印度海岸地方より、延て東亞の諸國に流行す。而して其區域は、粗ぼ瘧疾の流行區域と一致す。

十、脚氣病は、或機會を得れば、人によりて傳搬せらるゝも、直接に人より人に感染するものにあらずと云へり。果して然らば、學校、兵營、獄舍に多く之が流行を見るは、或媒介物ありて、一時に其病因を多衆に移植するに依るに非ざるか。

十一、脚氣病は或媒介物の爲に、病因を移植せらるゝものなりせば、其海邊に發病多きと、他の幾多の事實とは、蚊屬若くはこれに近似の昆蟲の刺螫によりて、傳播するものなる事を示すにあらざるか。

〔完〕

◎外國の昆蟲書に就て

岐阜中學敎諭　長野菊次郎

〔一〕ホルランド氏の蝶譜 (Holland's The Butterfly Book) 此書は、ニューヨーク府ダーブルデー、ページ會社出版の自然叢書の一部分ょして、初版は千八百九十八年に、第二版は千九百一年に刊行せらる。著

者はペンシルベニア州の西部大學の校長ホルランド氏（シカゴ大博覧會の節、日本出品の蝶類は、同氏の手によりて調査せられたり）にして、北亞米利加產の蝶類を、通俗的に記述したるものなり。大形の冊子にして、本文の紙數三百六十九頁を算し、第一章（三頁より二十五頁まで）ニは、卵、幼蟲、成蟲の形狀、變化、嗜好植物、軀體の解剖、多形的、二形的、白色的（Albinism）黑色的（Melanism）雌雄半形的（Monstrosities）擬態、分布等の事項を記し、第二章（二十六頁―五十七頁）ニは、採集法、標本製作法、保存法等を述べ、第三章（五十八頁―六十八頁）ニは、分類法の大要を擧げ、第四章（六十九頁―七十四頁）には、北米の蝶類書籍につきて歷史的記述を試み、七十七頁より三百六十九頁までは、都て分類上の記載ニして、科屬種に於ける卵、幼蟲、蛹、成蟲の形狀、及び嗜好植物、時季等を明にせり。本文中の挿畫は百八十三圖ニして、彩色寫眞全面版は四十八葉あり、皆著者の採集したる標本より撮影せるものにして、其中の二葉には、幼蟲の形態都て七十三圖を有し、他の三葉ニは、蛹の形狀百八十一圖を有し、其餘の四十三葉には、蝶五百五十八種（變種をも含む）の雌雄、或ハ裏面又は二形等を表はしたれば圖數は七百五十三を數ふるなり。加之書中往々植物を加へて、自然の狀態、または美術的配置をなしたるもありて、殆んど實物ニ接する思ひあり。著者の言ニ曰く、エドワルド氏の北米蝶譜（Edward's The Butterflies of North America. 全三冊にして、百五十六葉の彩色圖版を有す）は、百五十弗なれども、其の製作技術の價値に比すれば寧ろ廉なりと謂ふべく、スカッダー氏のニュー、エングランド蝶譜（Scudder's The Butterflies of New England. 三卷ニして、圖版八十九葉を有し、其一部分ニは着色あり）は、七十五弗なれども、此價額は唯著者の出費と、勞力と、時間の一部分を償ふに過ぎず、然るに斯書の、此の如き廉價を

以て出版せられたる所以のものは、近來彩色寫眞版の非常に發達したる結果に外ならず」と、以て本書の眞價が、果して那邊にあるかを推測するに難からざるべし。本書は獨り昆蟲學者の指鍼たるのみならず、苟くも生物界に關係と趣味とを有する人の好侶たるを失はず、兼て紳士富豪の客室を飾るに足る。但し、本邦と北米とに共通の蝶類甚だ少なきを以て、此書によりて、邦産の種名を検索すること能はざるを憾むのみ。

〔二〕ハワード氏の昆蟲書(Howard's The Insect Book.) 此書も亦自然叢書の一部分にして、米國農務省昆蟲部の主任たるハワード氏の著述にかゝり、一千九百二年に出版せられたり。此書に記す所は、甲翅類鱗翅類以外の昆蟲にして、各目各族等の記載に伴ふに、族科等の檢索表を以てし、且此等を代表すべき普通の昆蟲を選びて、其の發育、習性等を記述せり。元來通俗を主とせるを以て、前書と同じく挿畫の非常に多きは、初學者に對して最も便益を與ふる點とすべし。今代表昆蟲の重なるものを擧ぐれば、カ、ミツバチ、マルバチ、ヤドリバチ、アリ、ヲナガバチ、キバチ、ノコギリバチ、カガンボ、ヤドリバヘイヘバヘ、アブ、ブユ、ツリアブ、ムシヒキアブ、ウシバヘ、シマバヘ、タマバヘ、ノミ、シリアゲムシ、クサカゲロフ、オホクロスヂカゲロフ、セミ、ウンカ、ミヽヅクヨコバヒ、カヒガラムシ、アブラムシ、マツモムシ、ミヅカマキリ、カハグモ、カメムシ、トコジラミ、ナヽフシ、シラミ、カマキリ、ゴキブリ、イナゴ、バツタ、コホロギ、キリギリス、ハジラミ、シロアリ、トンボ、シミ、トビムシ等の各種にして、終りに採集法、飼養法、標本製作法等を述べ、又附錄として參考書目を擧げたり。本文は四百四頁にして、木版二百六十四圖を挿み、之に加ふるに十六葉の彩色寫眞版と、三十二葉の黑刷寫眞版を以てし、膜翅目に四百二十四、双翅目に二百四十四、脈翅目に六十、半翅目に百六十八、直翅目

に八十八、擬脈翅目（蜻蛉亞目）に百十一圖を添附し、皆學名を記入せり。唯その種につきては、更に何等の記載もなさずと雖ども、著者の採集したる標本によりて撮影したる寫眞版は、簡單なる記事を案じて實物を推測するの困難に勝れること萬々なりとす。然れば一昆蟲を捕へて、之が所屬を知らんと欲する人、其圖版に照して一考せば、假令其種を知ること能はざとも、魯魚の誤謬を招ぐことは更に無かるべし。

發行所、代價等は、都べて前書に同じ。

講話

◎幼孩と篏裝式の昆蟲標本附新式標本

名和昆蟲研究所長　名和靖

私は去る明治三十三年の夏、デントン氏の篏裝式昆蟲標本に則とり、之を折衷しまして、其實用の如何を、翌年の春、岐阜市に開設の全國教育品共進會に尋ねました處が「昆蟲ヲ玻璃板ニテ壓平シ、實物寫生ノ用ニ供セシハ、其注意至レリト云フベシ」との批評を受けました。其時の顚末より製作方法などの事は、委しく昆蟲世界第四十九號に載せました通りでありますから、玆には略しますが、扨この理想的批評ばかりでは、如何にも飽足らぬ心地が致すます處から、一ッ今度は之を實地に應用して見たいとの考を起しました。が何處で誰に試驗をして貰ふたならば、一番正確の研究が出來るであらうかと存じまして、種々苦心の末、一は小學校生徒に、一は幼稚園の生徒を目的として、取敢へず、岐阜縣不破郡垂井の尋常高等小學校……これは昆蟲に熱心な小竹浩君も居られますし、又他に知合の教員も居られますからで、次は愛知縣名古屋市の高等女學校附屬幼稚園……校長は知人の甫守謹吾君で、保姆長は、態々岐阜縣冬季昆蟲展覽會を觀に參られた坪内氏でありますからで。斯う決定しました處で、名古屋の幼稚園に標本數個を贈りましたのは、たしか一昨年の十二月でありましたが、同園では、私の希望を容れて下さ

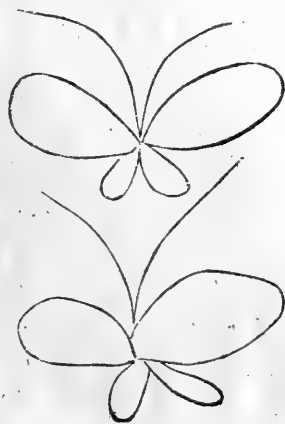
れまして、其利害に就き絶わず注目せられ、垂井の小學校でも、また實地ょ幾多の試驗を積まれたのであります。

然るに其結果は如何かと云ふと、垂井小學校の如きは、之を各學年級の生徒ょ、寫生用標本として試驗を遂げました處が、實ょ意外な好成蹟でありましたさうで、今回同校から第五回内國勸業博覽會に出品の昆蟲標本に添附して、其寫生畫數十葉を出品したのであります、是は博覽會場に陳列さるゝ事でありませうから、別段精しくは申述べますまい。次に名古屋の幼稚園の方は如何かと云ふと、同園では、保育用として時々生徒ょ示し、又これを基本として記臆の試驗も致され、且は蟲の形狀を畫かしむると共に、其結果に就て保姆長の批評をも徵したのであります。そして其批評と云ふのは、表裏から觀察を下したもので、此標本の價値を定むる上には、最とも緊要な點がありますから、他山の石として見ることが出來るあとゝ信じます。則はち毫も假借と潤飾とを加へざる保姆長坪内氏の言によりますれば。

第一、幼兒ノ感情　此ノ標本ニ接シテ、第一ニ美麗ナルコトヲ感ジ、已知ノ者ハ爭フテ指名シ、未知ノ者ハ、熱心ニ其名ヲ知ラントシ、種々ナル好奇心ヲ起シテ質問シ又コノ標本ノ如ク製セント望ム者多シ。

第二、製作方法　製作ニ就テハ、美麗ニシテ堅牢ナレバ、破損ノ憂ナク、害毒ヲ受クルコトモアラザレバ、幼兒ノ玩具トシテハ適當ノ製作方ナリト思ハル。

第三、保育用　保育用トシテハ、天然ノマヽニテ變色セズ、破損危險ノ憂ナキハ、他ノ標本ノ望ム能ハザル所ニシテ、圖畫ニマサルコト數等ナリ、然レドモ之ヲ標本トシテ、幼兒ニ示スニハ、側面、背面、腹部等ヲ一面ノ内ニ現ハシナバ宜シカランカ、唯此ノ製作ノ儘ニテハ、凡テノ部分ニツキ厚サ薄サ等モ明細ニ見能ハザルヲ以テ、十分ナル觀念ヲ與フルコト難ク、實際ニ於テ然ルヤノ疑念ヲ起ス者多キ心地ス。

第四、圖畫用　圖畫手本用トシテ寫サシムル時ハ、非常ニ眼及精神ヲ勞スルガ故ニ幼兒トシテハ適當ナラズ、又唯輪郭ノミヲ寫サシムルモ、其區域ヲ定ムルコトニ於テ亦非常ニ苦心ス、サレバ保姆ガ輪郭ヲトリテ敎示スルモ、之レヲ摸スルコト决シテ容易ナラズ、要スルニ圖畫手本用トシテハ不適當ノモノト思ハル、唯各幼兒ニ數枚宛分チ與ヘ、隨意ニマカシ置カバ、或ハ摸寫スル者アルニ至ラン、或ハ時々其記臆ヲ引起シテ畫カシムルトキハ、幼兒ガコノ標本ニ對スル觀察ノ如何ヲ見ルヲ得ン。

滿五年一ヶ月の幼稚園男生の鉛筆畫（初め標本を示し後記臆によりて畫かしめたるもの）

第五、玩具用　玩具用トシテハ、危險破損ノ憂アラザレバ、適當ナルモノナレドモ、幼兒ノ性トシテ變化アルモノヲ喜ブ、故ニ變化無キモノハ、暫時ニシテ倦厭ヲ來タス、サレバ朝夕弄ブモノトシテハ喜ビザルモノヽ如シ。

と云ふ事である。即ち圖畫用としての結果は、垂井小學校と稍異なる點を示したに相違は無いが、幼兒の翫具としては、更に危險が無く、幼兒も好んでこれに近づく、そして自然の美を知らしむるに足れると云ふ事を證明せられたのである。然るに此評語中には一面の内に、側面、背面、腹部等を現はせとの注意があるが、是は成し得べくして行へ難い事である、何故なれば斯く多くを裝成する時は、其面積が廣くなッて到底、幼稚園の生徒抔には扱ひ難くなることを免がれ得ぬ。又小兒の眼が各方に映射して錯雜をせんかと思ふ、即ち目映りがする爲に、却て宜くあるまいと思ふから、矢張複雜にせんのが宜しからう。假し蟲體の厚さと薄さが明かならざるにもせよ、平面圖を書かするには、何も差支へがあらう道理が無く、普通の畵手本と思ふたならば、其以上の希望の起る筈が無いのであります。特に蝶蛾の最美の部分即はち四翅の翅表を示してあるのでありますから、腹脚兩部が見はれませんでも、先づ小兒の觀察には足りる事と思はれます。それは私の想定では無く、此評語の第一項に所謂、第一に美麗なることを感ぜ云々とは、主はち此點から起るのでありますから。それも玻璃板上に凹窪を穿つならば、亦格別でありますが、然らざる以上は、十分に腹部を見する譯に行かんことは明白であります、もと木片と硝子板とで壓平するのでありますから、外に致方が無いではありませんか。又輪郭云々の欽點は、如何にも然樣かと思はれますけれども、全體これは標本と紙との間に硝子板を立てゝ、輪郭線を書かするのが正式でありますから、如何に上手でも、只見た計りでは巧く出來やう筈が無いのであります。そして終りの變化云々も、或ひは餘議ない次第ではあるやうですが、目的が目的でありますから、走馬燈や、發音玩具のやうな譯には參りません。若し種々な紋樣彩色のあるものを、更代に與へたならば、恐らくは此缺點の幾分を補ふ事が出來る事と信じます。畢竟同園には、標本の數が少ないから、其感じが一層深かッたのであらう、かと思ふのであります。

然樣は申すものゝ、此等の缺點を補足する爲には、別に考へて置た形式があるのであります、則はち其大さも、厚さも、將た挿入の昆蟲も、從來のものとは少しも事變りませんで、其効用を多からしむる樣に考案した積りの新式標本があります。それは玻璃板を以て表裏兩面から、或適宜な四角い木の枠を挿み、其内に昆蟲を裝置するもので、玻璃板へは小さいコロクをアラビヤガムで粘着し、これに蟲針を刺

留めるのであります(尤も留針は一二三分の長さに切去らざる可からず)。さう致せば翅表は勿論、能く翅の裏から脚部までも見えまして、厚さ薄さより、口器、腹部に至るまで明かで、また寄生植物、蛹なども添へて示す事が出來ますが、蟲體の厚いもの、例へば甲蟲とか、蟬とかと申すものになれば、自づから著るしく板の厚さを増さんければ成らぬのと、表裏とも玻璃板でありますから、保存上舊式のものよりは確かに破れ易い、又強ゐて云へば、透視自在でありますから、標本の下に白紙の類を置かんければ判明せないし、輪郭線を取るにも、更に多くの困難があるだらうと思ふのであります。それで私は此新式のものに就て、還た何處かで試驗をして貰ふとの考を持ッて居ります。

乍併、これは私の蜀隴の歎と申すもので、此篏裝式標本は、初めから幼稚園の寫生用に作ッたものでは無く、矢張垂井のやうな昆蟲を知ッて居る敎師のある小學校で、程度の稍高い生徒に用ゐさするのが目的であッたから、小學以前の幼童には不適當だらうとは、豫期の一ッでありました。隨ひて多少の缺點のあるのが當然で、又一方から申せば、幼稚園に居る生徒が、之を眞似て畫かうと云ふが、已に無理なのであります。そこで私は、斯く迄細密に試驗せられた報告に接したのが、寧ろ意外であるとの感想を起したのであります、何故なれば、最初標本を寄贈する時に、全く玩具としての試驗を願ひたいと申して、依賴したのでありますから。

今各地で試驗せられました成蹟に就て、此標本の價値を定めますと、是は確かに尋常科三四年生以上の寫生用に適當であるが、幼稚園生徒の如き智惠の少ない者には、少々程度が高い、其代り玩具として玩弄さするには破損と障害の患ひが無く、又蟲名を敎へるには適當の材料であッて、其美麗なるは自づから小兒をして近づかしめ得ると云ふ事を證明せられたのであります。何故なれば、名古屋の幼稚園で以て、三種の比較試驗を行ふた中、實物を見ながら畫いた小兒は、苦惱を感じ乍らも翅數が四ッあるが、記臆の儘のものには、翅が二枚のものやら、蟲體の無いものやら、其何物たるやを辨知すべからざるものやらが多いからであります。併し奇妙な事には、觸角だけは大概畫いてありました、それも四歲から六歲の間の幼孩のみでありますから、觀察力の乏いのを尤むる譯には參りませんが……但しこれは、また大ひに其家庭と其小兒の性質の如何によッて、非常に相違を來すものであると云ふ事を記臆致さんければ成りませぬ。現に甫守君の愛子……僅かに四年五六ヶ月にしか成らん男子に、緋威鎧蝶の標本を以て試驗を致して見ました處が、何の苦も無く、四翅の缺刻から、黑斑紋までも描き、又記臆によりて其

好む所の蝶を書かしました處が、モンシロ蝶か、若くは黄蝶と認むべきものを描きましたから、誰もかも、右の幼稚園生徒と一様には論ぜられぬのであります。

尙これを中學校で、寫生手本用として、試驗しました結果を聽きますに、此時代になれば、また格別で中には實物其儘とも云ふべき、立派な出來もあッたとの事でありますから、之を垂井小學校の事實に思合して見ますと、愈々高等小學程度以上には、活用せらるゝ事を確信すると共に、單だ視る、悅ぶ、と云ふ點に止れば、何れの幼孩にも適當である事を悟ッた次第であります。之を換言しますと、幼稚園時代は之を視て目に樂む計りであるが、尋常科時代には其名稱と、其形狀を記臆する樣になり、高等科時代に入れば、色の配合から、特徵までを鑒別するやうになり、更に中學時代に進みますと、細緻の諸點にまで注目する事にあるのでありますから、此標本を應用しやうと思ふ敎育者は、豫じめ此點に留目して欲しいのであります。又併せて、新式の標本をも試驗して、其利害を研究して欲しいのであります。

◎女子高等師範學校敎授岩川友太郎氏の談話

ナニ私が昆蟲の研究に從事しました來歷でありますと、夫れは中々舊い話でありまして……大學に居りました頃、即ち明治十一二年頃からの事です。一體私は蟲をイヂル事が好きでありまして、暇があると捕ッては標本に製ッて置たのでありますが、其時の同好者は今の石川(千代松)君などで、同君は其頃頻りと蝶類を集めたものです。佐々木(忠次郎)君なども、動物を研究されましたが、是は何が專門と云ふでは無く、昆蟲に身を入れたのは、蓋し駒場農學校へ行かれてからの後であるやうに思ひます。私は特に甲蟲類を集める事に時を費やしましたが、學校に居る中にも、餘程澤山になりまして、天牛科のもの計りでも二百四五十種位ゐはありましたでせうョ。其時大學の敎師で、語學を敎へて居ッた一英國人は頗ぶる昆蟲好で、石川君などは此敎師に連れられて、靑森縣下十和田湖の邊で、徹夜蚊に食はれた事があるのですが、一方の原子學を敎へて居ッた敎師は、大の蟲嫌ひで私が蟲を集めて居るのを見て、蟲を

捕ッて何うするのだとの忠告まで致されました位ゐでしたから、私は其後と云ふものは、蟲を隱して置いたのです。然るに十三年の頃でしたが、彼の有名なルイス氏が渡來して、九州から段々と北海道まで採收しました、其時大學ヱ參りまして、本邦產の甲蟲を調べて見たいが、誰か採集して居ッた者があるまいかとの問に、教師がナニ生徒の中に一人あると云ふたので、直ちに紹介されました。其時私は採集は致したもの丶、今と變ッて學名が少しも判りませんのヱは、困ッて居る最中でありましたから、名稱を聞かうと思ひました處が、ルイス氏は苦も無く、私の採集品に命名してやらうと言はれまして、即時ヱ番號を記入して呉れたのです、然かも諳記の儘、自分の作りました甲蟲目錄の番號を書いて呉れましてネ、そうして此番號に引合して此の本から學名を採るが宜いと云ふて、目錄を抛り出しました、實にその强記には驚たのでありました。私の採集しました天牛類は前に申述べましたやうな數でありましたが外ヱ博物館にも異種類が澤山……約百四五十種もありましたらうか、旁々斯いふ有樣で研究したのであります。此ルイス氏が來て居る時に、其旅宿を訪ひました處が、夫妻兩人で卓を圍んで居て、九州から北部へ掛けて採集したと云ふ甲蟲を順次並べて置きまして、ナント面白いでは無いかと申されましたから、能く之を見ますと、同一の種類でも北即ち寒地へ參れば參る程、翅鞘ヱ光澤が無くなッたのです。そうして氏は此時多くの採集人を雇入れて捕らせましたが、歸ッて來る、妻君共々瓶からあけては之を選擇する、其手際と申したら實に巧妙なものでありました。

昆蟲標本の製作法ですか…それは今と變りが有ませんでした、處が可笑では有ませんか、今の名和(靖)君までが、私の處へ標本を見に來られた事もあッたのです。其頃は、プライアー氏などは、名を知られなかッたもので、誰一人專門ヱ攻修された人が有ませんでした。日本蝶譜ですか、彼の本の第一卷は私が手傳て飜譯をしてやりました、たしか明治廿一二年の頃と覺へて居ります。それから後に種々な變遷がありまして、今では殆んど昆蟲を研究しませんが、敎育博物館ヱも關係がありましたから、少々標本を殖しましたが、其目的は諸縣へ頒與の爲でありました。又私が少年時代から集めた標本は、其後に一切之を高等師範學校に寄附をして仕舞ひました。私が學校を出ます頃に、今の農科大學から來て呉れイとの事でありましたけれども、其時は既に高嶺君との內約があッた後ですから、私は辭りまして、代りに佐々木君が行かれたのです、それは十四年の事であります。私の標本製作法の抄錄ですト、ハイ承知しました、アレは早や二昔しも前の事でありますから、古物展覽會への出品には、丁度良いのです。

雜録

◎栗毛蟲と天蠶に就て

島根縣松江市　芝原　晧

本誌第六十四號、及び第六十五號に、栗毛蟲に對する質問應答あり、而して其應答は、孰れも天蠶と混同せられたるが如し、今左に此等兩種に就きて、聊か説明を試みん。

栗毛蟲は樟蠶又シラガタラウ、ゲンヂキムシ、スキダハラ蟲等と稱し、山野に自生し、主に栗葉を食す全身灰白色にして、白色の長毛を被り、體細長くして成長其極度に達すれば三寸餘に達す、老熟の後は葉を絡めて、一端開口したる褐色網目の繭を結ぶ。曾て數年前、我が出雲國にては非常に發生し、滿山の栗樹又一葉を剩さず、終には飢餓に迫りて櫻、漆、櫨等に寄生し、（針葉樹類を除く）なほ數種の樹葉をも蝕害せりき。斯くて、其翌年及び翌々年に至るも、亦多少の發生ありしが、今日にては偶々標本を得んとするも容易に發見すること能はず。斯る大發生あるは、大約十數年に一回にして、三四年の後に熄滅するを常とす。其一名を千日蟲と稱するは、蓋し之が爲めなり。（其當時空繭百匁の賣價凡六七錢にして、岡山より出張購買しき）

繭は紡ぎて糸となすを得べし、岡山縣には之れが製造所ありと聞く。又幼蟲より「テグス」を製するには老熟して全身黃褐色となりたるものを捕り、其頭部を引裂き、腹部を壓して二條の絲腺を取出し、少時間稀薄の醋酸又は食酢に浸し、豫じめ装置せる竹釘（先端を割りて糸を挾むべく製したるもの）の間に其一端を挾み、靜かに之を引き延ばし、他の一端を又一方の竹釘に挾み、之を日乾となし、其乾きたるを待ちて收集し、之を馬耳塞石鹼、又は明礬、硼砂、石灰等にて練り上るなり。其方は石鹼あらば水一升に對し十五匁許の割合に溶解し、之を以て煮沸すると二時間の後に取出し、淸水を以て丁寧に洗滌し且つ表面に附着せる滓を除去し、後又緊張して之を陰乾し、更に柔かき打ち藁を以て徐々に摩擦し、殘滓

を剝ぎ落すときは、光澤ある絲を得るなり。是れ則ち出來上りたる「テグス」にして、釣魚に用ゐるものとす。現今、支那より輸入するもの、佐々木博士の說に從へば、本邦產の樟蠶とは別種にして、糸の強伸力は本邦產のものに優れりとなり。（「テグス」は又老熟せる家蠶の蛆害等に罹りて、繭を造る能はず簇中に彷徨するものよりも製し得べし、其長さ凡そ七八寸あり）

天蠶は俗に之をヤママユと稱し、其學名は Antheraea yamamai にして、栗毛蟲とは全く別種のものたり。古來、本邦山野に自生し、櫟、檞、槲、楢等を食とす。全身綠色にして、軀幹短かけれども、肥大にして短毛を生じ、成長其極に至れば、體長二寸四五分あり、老熟すれば葉間に綠色の繭を營む、（露出の部は濃綠なれども、葉に接したる部は淡綠にして、繭層甚だ薄し）。繭は長さ一寸四五分、幅七八分許あり長野縣南安曇郡にては、古へより之を飼育し、繰絲して他縣に輸出す、今尙柞蠶と共に盛に之が飼育に從事す。而して之れより製したる糸は、青白色にして强靭なり、古へは主に岐阜縮緬の經絲として用ゐられきと。元來、此絲は石灰分多く染色容易ならざるも、輓近化學的の方法によりて之を精練し、蠶絲の代用品として各種の織物に使用せらる、繭一粒の價は約五六厘なり。

永澤小兵衞云ふ。芝原氏は、余が本誌第六十四號及第六十五號の應答に、クリ ケムシ の繭に天蠶の漢字を當てたるを以て、恰も野蠶（ヤママユ）と混同せしやうに難ぜられしかど、是は決して錯誤に出でしにはあらず。勿論、芝原氏は、一時斯く誤解せしものなる可ければ、氏を咎むるにはあらねど、諸書を涉獵せられたらんには、其是非を辨知し得たりしならんと思はる。余がクリ ケムシに天蠶の字を用ゐしは、小原桃洞、松井輝星、伊藤圭介等の諸先輩の說に從へるにて、氏が引證せる佐々木氏が譯述の動物書にも、同じく天蠶とあり。即ち物理小識卷十一の樟蠶と同一にて、此蟲は九州地方にては、主ばら樟樹に寄生し、奧羽地方にては、常に胡桃を食害するも、普通には栗樹に多きより、扨はクリ ケムシと云ふなる可し。故にクリ ムシ、クス ムシ 共に、本來毫も違ふ所なしと雖ども、前者は和名にて、後者は漢名たるの差あるのみ。なほヤマ マユ との區別に至りては、鄭氏の昆蟲草木略、源氏の和名鈔を始め、栗本氏の千蟲譜等參看せば、彼此自から分明せん。

◎博覽會出品の昆蟲標本

岐阜縣不破郡垂井尋常高等小學校　小竹浩

當校は明治三十一年五月以來、兒童の好んで注意を惹き、且つ日常生活に必須なる智識の淵源たる博物につき、之が標本採集を奬勵し來りしが、其結果たる一部の植物種子は、之れを分類調整して、明治三

十四年四月、全國教育品展覽會に、昆蟲標本は明治三十五年二月、岐阜縣冬季昆蟲展覽會に出品したりき。今茲に記述せんとするは、本年三月より開設の第五回内國博覽會に出品したる昆蟲標本の内容なり該標本は、もと實用に供するの目的より、高等小學敎授用理科書、農業補習學校敎授用益害蟲事項、及び高等女學校用理科程度等を參酌裝成せしものにして、凡て十五箱より成れり。今其配置の概略を順次記述すべし。

第一函、昆蟲の分類　　約三十万の種屬を有する昆蟲につき、規則正しく之が研究をなさんには、先づ分類法に從ひ、比較辨別の必要あるや言を俟たず、是れ第一に昆蟲の分類を擇びし所以なり。今其内容を記さんに、初學者に解し易からしめん爲めパッカード氏の分類法と、稍詳細に區別せる名和氏の分類法との二種を採れり、即ちパッカード氏分類法にありては羅翅類にミヤマアカネトンバウ、直翅類にイナゴ、半翅類にニイニイゼミ、鱗翅類にアカタテハテフ、双翅類にアブ、甲翅類にホシカミキリムシ、膜翅類にヤマバチを配列し、名和氏の分類法にありては、彈尾目にシミ、擬脈翅目にキイトトンバウ、直翅目にヒメバッタモドキ、總翅目にクロムクゲムシ、有吻目にキンガメムシ、脈翅目にシリアゲムシ毛翅目にコヂムキカゲロフ、鱗翅目にベニシジミテフ、微翅目にノミ、雙翅目にベッカフハナアブ、鞘翅目にタケノベニカミキリムシ、膜翅目にハキリバチを配列せり。而して上部には名和氏分類法に從ひて、彈尾目より順次膜翅目(凡て十二目)に至る各目に、一頭つゝ前記の標本を配し、其下にパッカード氏の分類法によりて、羅翅類より膜翅類(凡て七類)に至る各類の模範蟲即ち前記の蟲類各一頭を列ね、其間隔に朱線を施して、兩氏の分類法を對照し、且つ各目特殊の點につき簡易の説明を加へ置けり。

第二函、昆蟲の生殖及び變態　　蟲類の繁殖は迅速にして且つ其變化に富めるは、昨は目に餘る蟲群と驚かれしも、未だ久しからずして突然姿を隱す等のことあるより、蟲類は天より降りしか、將た地より湧きしか、或は一朝にして死滅せしやの疑ひを抱かしむる等の事實は、屢次耳にする所なり。故に第二函に於ては、生殖の種類を掲けて繁殖の如何を覺らしめ、變態を掲げて發育の順序、及び一期毎に甚しく其形態を變するものなることを知らしめんとせり。即ち生殖の種類に於ては、兩性生殖、單性生殖の二種に區別し、各數頭の標本を配列し、これに簡單なる説明を加へ、變態の種類に於ては、不變態、不完全變態、完全變態の三種に區別し、不變態の標本としてはシミを、不完全變態にはホシヅキガメムシを、

完全變態にはカヒコを以て、各々卵より成蟲に至る生育順序を示し、また各々簡單なる說明を添付せり而して卵期、幼蟲期、蛹期に於て、如何に形狀に異同あるやを示さんがため別に卵十二顆（七類に分ちて各類一頭乃至數頭を列ぬ以下同し）幼蟲十七頭、蛹十六頭を配列せり。

第三函、昆蟲の解體　昆蟲の種族多しと雖ども、其躰軀は皆一樣の樣式を具ふるものにして、即ち頭部、胸部、腹部の三者より成る。更に胸部を分解すれば、前胸、中胸、後胸の三となり、各胸には一對の脚と、中、後胸には各一對の翅翼を有することを見易からしめんため、羅翅類にミヤマ アカチ トンバウを、直翅類にカハラ バッタ、を半翅類にユリノ ハナスヒを、鱗翅類にギンスヂ ヘウモン テフを、双翅類にアブを、甲翅類にミヤマ クハガタ ムシを、膜翅類にクマ バチを採りて頭部、前胸、中胸、後胸腹部の五段に解躰し、更に羅翅類にヤマ トンバウ、直翅類にイナゴ、半翅類にクマゼミ、鱗翅類にフクラ スゞメ、双翅類にシホヤ アブ、甲翅類にクハ ノ カミキリムシ、膜翅類にヤマ バチを採り、其口器を分解して内部の構成を示し、且これに略說を附せり。

第四函第五函、昆蟲の雌雄陶汰　昆蟲類中、雌雄の最も變化したるは雄蟲にあり、是れ雄蟲は雌蟲に比して常に其數多ければ、或は其姿容を姸麗にし、或は聲音を朗美にし、或は特殊の爭鬪具を生じ、以て雌蟲の愛を買ひ、或は他を掠取するの便を圖るに因る、蓋し造化自然の妙理に出づ。此等の必要より雄蟲の軀躰に變化を起し、之れを子孫に遺傳し、數多の生代を經て益々進化發達を來し、遂に著しく雌雄相異なるに至れるなり、之れを雌雄陶汰と云ふ。此等の原理を示さんがため、第四、第五の二函には其模範蟲二十八種を配列せり。今之を列叙すれば、雌の愛を買はん爲め雄蟲の躰より香氣を放つものとしてジャカウ アゲハテフを、雄蟲が特異の斑紋を示すものとしてクロ アゲハテフを、雄蟲の翅色に變化の起れるものとしてコムラサキ テフ及びヤマト シジミテフの類八種を、雄蟲が美聲を發するものとしてマツ ムシ、クツハ ムシ、セミ等八種を、雄蟲の觸角に變化の起りたるものとしてヒゲ コガネムシ等六種を、其他勇壯の狀を扮するものとしてクハガタ ムシ、カブト ムシの類四種を配列せり。（未完）

◎六足蟲彙纂（寅の卷）

在岐阜市　長野菊次郎

（八）天蛾類の一盛一衰　天蛾類の多數は、地下にて蛹化するものなるが、初め其幼蟲の十分成育するや、頭部を下にし、膨軟なる土壤を擇びて、茲に小穴を穿つ、然れども地下幾何ならざるに、大なる障

害物あるときは、此處を避けて地面に匍ひ出て、再び他の場處に其幽棲を求むるものあり。軈て地下數寸の位置に適當なる小房を設けて、此處に閑居を占め、一週間内外を經て、其舊皮を脱すれば、遂に蛹體に化す。最初は綠色にして甚だ軟かなれども、廿四時間を經れば、稍硬くなりて褐色に變じ、翌年の春に至るまでは、安らかに此小土窖に休眠を遂ぐ。抑も此等の昆蟲は、何故に繭を績がさるかと問はゞ強き光線、寒冷、濕氣又は氣候の激變等を防がん爲には、繭中に在らんよりも、外圍の堅固なる地中に蟄居するこそ數等安全なれ、と答へんのみ。然れども、一盛一衰の定理は、地下の昆蟲にも免れ難く若し其嗜好食物の栽種せらるゝ前、蛹の潜める土地の耕鋤せらるゝときは、哀れや、この地中の閑室は忽ち反覆堀起の厄運に罹り、蛹は地面に露出せられて、或は禽鳥の食餌となり、又は他の方法によりて殄滅せらるゝに至るなり。此一節は、トマトー蛾につきての記事なれども、亦以て多少他の天蛾類にも適用し得べし。(デッケルソン氏の蝶蛾書)

(九)幼蟲に對する保護の一二　親蟲が幼蟲の保護に對して、多少の注意を拂ふことは、所謂本能とも謂ふべくして、其方法に種々あり。今其一二を擧げんに、飛蠊の卵は堅き包被を以て掩はれたれば、外部よりの害を受くること少なく、コオヒムシ(負子)の卵は、雄蟲の背に置かれたれば、全く親の保護の下に立つものなり。其他多數の昆蟲は、長く且つ銳利なる產卵管を有して、地中又は孱若なる植物の葉若くは莖中に產卵し、時に或は、樹幹の堅硬なる木質部中にさへ產卵するものあり。例へば、キリギリス、セミ、クダマキダマシ等の如し。且つ貝殼蟲の或種は、軀より蠟質を分泌して、往々美しき卵鞘を作り、以て卵の貯へられたる軀部を被蓋することあり。又種々の蟲癭を生ぜしむる昆蟲は、植物の柔かなる組織中に其卵を產下するが爲に、仔蟲孵化する時は、植物に不規則なる成長を發して、所謂蟲癭を生ずるなり。抑も蟲癭は、獨り其仔蟲を保護するのみならず、亦其汁液の多量を、仔蟲の食物に供用するものにて、仔蟲は自軀の十分發育するまで瘤癭内に寄居し、然る後局部を破りて外に飛び去るなり。(ジョルダン氏アニマル、ライフ)

因みに云ふ、前號の本欄「蟻と蚜蟲の關係」の條に、仙人掌の蚜蟲とあるは、編者の注意の如く、全く貝殼蟲と書すべきの誤りなり。爰に之を正誤す。

編者云ふ。コオヒムシに就て、其卵子を負ふを雄とするの說は、古來また邦人の信ずる所にして、千蟲譜の著者栗本丹洲氏の如きは確かに其一人とす。然れども、中には之を非とするの實驗者もありて、未だ何れとも定まらざるが如し。是れ斯學硏究者の、飼育と

剖検を重れて、其是非を決すべき好問題たらずさせんや。又田中芳男氏は、明治七年六月、親しく之が鑒別を試ろみしに、雌の尾端は、圓みを帶びて濶く、雄は雌よりも微しく細くして、二枝の刺樣物を有し、卵數は百三十乃至百九十顆ありて、長さ一分弱なりしが、褐色となるに至りて、約一分五厘を算しき。記して讀者の參考に資す。

◎蚊に就て

在北海道札幌農學校 三吉朋十

歐米などの肉舖にて、牛羊などの肉の、時々發光することあるはクーピェー氏の書物に詳なり。又池沼墓地などの陰濕の地に、夜間青き火の搖々として飛廻ることあり、無智の人々は之れを人魂なり、靈魂なりなどと云ふて大に恐る、若し之を捕へんと欲すれば、火は漸々と避逃し、彼方に走り、此方に走り一上一下、逃ぐるものは益々逃げ、追ふものは愈々追ひ、遂に知らざる中に池沼などに陷り、命を落すものあり、世この火を馬鹿火と云へり。昔一昆蟲學者ありけるが、一夜網を携へて採集しつゝありける折しも、彼方の地上に三四尺の所を、青き火の玉のゆらゆらと徘徊し居れるを見て、良き獲物なりと思ひ、追かけて網もてうまくふせてけるが、網の目の粗大なりしためにや、隙間より皆逃去りぬ。再び密なる網もて試みけるに、中に數萬の蚊トンボの小なるが在りてけり。之れによりて人魂及び馬鹿の火なるものは、實は蚊などの群の發する燐なることと世に知られたり。

古詩古文などの中に、慶雲、紫雲、赤雲など云へる文字多く見え、殊に我國及び唐の世に、慶雲など云ふ年號もありき。元祿甲申の年、谷川士清氏の書に、慶雲東京に表はれしこと誌されたり。其樣は烟の如く立上り、圍一丈あまり、高さ四五丈もやあらん、雲の如く搖々と徘徊すとあり、これ皆蚊の群にして、勿論雲にはあらざるなり。前の人魂と云ふものと同じ理にして、怪むに足らざるものなり。獨り蚊のみならず、蜉蝣なども、かゝる事をなすことあり。獨り和漢のみならず、西曆一千八百七十九年にコロラドに表はれしも同じく蚊柱なりき。慶雲の說は、昆蟲世界の晴耕雨讀子の記に詳なり。

蚊のために、人の殺さるゝ事往々なるが、爰に魯西亞にて、今より七十年前、三十の馬、七十の牛、及び四百の羊の、蚊に襲はれて死せしことホールダー氏の動物書に見えたり。其の習性及び成育は、双翅目(Diptera)中の亞目蚊類(Nemocera)に屬し、別に蚊科(Culicidae)と呼ぶ一科をなす、雄蟲の觸角は羽狀をなし、凡て靜止のときは水平に疊み、口は良く物を刺すに適し、雄は刺吻を有せず。其幼蟲を、孑孓と云ふ、我國に產するもの又多し。文學として歌はれたるものは、蚊遣火としては和歌に多く、蚊、蚊柱孑孓などとしては、俳句、詩、英詩などに多し。

（蚊）

○夏の夜は蚊を傷にして五百兩　其角
○蚕の跡消ゐて間も無蚊にくはれ　著者
○蚊は名乘けり蚕は盜人のゆかり　其角
○晝の蚊の顔になり行く廣間哉　太祇
○釣鐘の中よりわんさ出ろ蚊哉　一茶
○殘ろ蚊やちよいさ小松に隱れては　一茶
○晝の蚊の來ろや手を替品をかゐ　一茶
○夕顔は蚊のなく程の暗さかな　祇巫
○子や鳴ん其子の母も蚊の喰ん　嵐蘭
○飛蚊に任せて行けは野茶屋哉　一茶
○朝顔の花に泣き行く蚊の弱り　芭蕉
○小庇やたらひ取られて蚊の迷　道彦
○唐のかや終に枯れたろ藻塩草
○南無阿彌陀佛の方より鳴蚊哉　一茶

（蚊遣火）

○わきも子に如何て知らせん蚊遣火の下もゐするは苦しかりけり　顕季
○藻塩やく煙さのみも見ゆる哉海人のさまやに立ろ蚊遣火　經盛
○蚊遣火の煙に咽む山里は秋をこめたろ夕霧そ立つ　家隆
○夏來れは室の八島の里人も倚かやり火や思立つらん　小侍従
○夕されはかやり火たかぬ宿もなしこの里人は月や見さらん　眞淵
○立上ろ夕の蚊火の煙にそ有さ知らろゝ木隱の里　千蔭
○かやり火の烟はよその思かは中目に曇ろ夏の夕暮　土御門院
○夕されは燗にふすふろかやり火の下こかれつゝ上はつれなき
○誰かかくつけは置けん夏暮は松下もゆろ宿のかやりひ　出羽
○いさゝ倚そさもの楉茂合ひて煙に暮ろゝ里のかやりひ　宗尊親王
○かやり火の烟は人に知られ嵬我下もえそ苦しかりける　行宗
○かやり火の消行見ろそ哀なろ我下もえよ果はいかにさ　長明
○藻塩やく須磨の浦はのかやり火に立ろ煙も色そ變らぬ　康賢

（蚊柱）

○蚊柱に夢の浮橋かゝろなり　其角
○草深き靜か伏屋の蚊柱に厭ふ烟を立ちそむろ哉　信友
○蚊柱のすきまから見ろ江戸の城　著者

（蚊帳）

○たくろまの風のなくれや蚊屋の雛　藏六
○物得たりかやのかくれの妹か文　召波
○かやを出て又障子あり夏の月　丈草
○かやを出て奈良を立行く若葉かな
○小にくしやかやの內の小宴　一茶
○男なき寢醒のはこは蚊帳かな　奥州

○霜寒き旅れのかやをつけ申す　　如行　　○かや高く釣煩さぬ草の庵　　友國
○面白や朝れのかやを人のそく　　篤老　　○子孑よ精出してふれあすは盆　　一茶
（子孑）○子孑や夜は結構な堀の月　　一茶　　○子孑のふろや金魚の鼻の先
○子孑の天上したり三日の月　　同人

○瞽者なるものよ、汝らは子孑を漉出して、駱駝を呑むものなり。（馬太傳二三章二四節）

And round him the Suggema,
The Mosquito, sang his war-song. Longfellow

他に二三の英詩あれども二ページに餘るものあれば省く。

○蚊はかむ也、人のはだへをかむ虫なり、むを略せしあり。　（益軒）

○蚊虻之力、不如牛馬、牛馬困於蚊虻、蚊虻乃有勢也。　（俚言）

晴畊雨讀子云ふ。この「蚊の說」は、三吉氏が將に印行せんとする著書の一節なる由なるが、舊冬余が「昆蟲世界」に連載せし慶雲蚊柱同體說の大要を、氏が摘錄して本篇の骨子に充てられしを多とするの餘り、其杜撰粗漏の節を示し置かん。（一）谷川士淸氏の說は、解釋中の一節にて、普通の書籍にあらざれば、書とせずして說に改むべし。（二）谷川氏の記載には、蚊柱の高さと圍とを缺けるに、三吉氏は私斷を以て之に附加へしは非事なり。恐くは、擅に谷川氏と天野氏の說とを混同せしものなるべし。（三）唐詩には蚊柱を詠ぜしものありとも思はれざるに、恰かも有るが如く記されしは如何にぞや。それとも確證ありての事か、疑はし。（四）草深きしづが伏屋云々の和歌は、七百年前の古歌にて、伴信友氏の詠草にはあらず。伴氏は近く弘化年間まで生存の學者なり。又此和歌中に「賤が伏屋」と書くべきを「靜が伏屋」と改めしは、片腹痛き僻事ならずや。（五）蜉蝣なども蚊柱を作るとあれども、是も甚しき誤謬なり、蜉蝣とは石蠶の化生せるカゲロフの名なれば、蚊柱と見ゆべき道理なし。定めて蚋子と蜉蝣とを同視せし過失ならん。（六）蚊虻之力不如牛馬云々の語は、一昨年一月發行の昆蟲世界に掲げ置きしを取りたるものゝ、扨其出典を知るに窮して、下に「俚言」の二字を添へしものならんが、斯る輕卒の事は、著者たらん者のなすべき業にあらずと思はる。是は、俚言にはあらで、子叢摘芳などにも引用せる格言なり。（七）唐の代に、慶雲の年號ありと言はれしかど、更に其事無し、亟かに訂正せらるべし。（八）慶雲蚊柱同體說は、余が臆想に出でしものなれば、これを以て確說とはなし難きを、三吉氏が其是非を考究せずして、之を眞理の如く斷定せられしは、余の面目は此上なき事乍ら、學術研究上、好しからぬ至りなり、注意あらま欲し。尙ほ不審もあらば幾たびも質問せらるべし。

通信

◎岡山縣下昨年の螟卵摘採數

岡山縣　篠岡春太

昨明治三十五年中、吾が岡山縣下に於て採取せし、二化生稻螟蟲卵塊數は左の如し。而して三十三年と三十四年とには、著しく其數を減じたりしも、昨年は其數倍の多きを算せり、是れ手眼の熟練によれるのみならず、また其發生の夥多なりしに因れるならん。則ちこれを以て見るも、採卵法の如きは、僅かに一兩年の實施のみを以て、滿足すべきにあらざるなり。

岡山市	一一、九一〇塊	淺口郡	三六八、〇一六	苫田郡	一、〇四六、四六六
御津郡	一、八六八、四四一	小田郡	五〇二、五九三	勝田郡	一、五二九、三三二
赤磐郡	三、三三三、二七九	後月郡	三五六、四五三	英田郡	六二六、四二八
和氣郡	五二九、三二〇	吉備郡	一、二九九、五三三	久米郡	六一〇、三三七
邑久郡	三、七七一、七六七	上房郡	一、〇六八、六一八	計	二二、八二一、五六一
上道郡	三、二一六、三三九	川上郡	二六三、五六八	（備考）卅四年採取數	三、三八五、〇九四
兒島郡	四八九、一八九	阿哲郡	九一五、五九二	卅三年同	四、八九一、九三二
都窪郡	八六、五一二	眞庭郡	九二七、八六八	卅二年同	二九、二五六、三六三

◎京都府天田郡害蟲驅除景況

京都府丹波國天田郡　菅沼岩藏

吾が京都府天田郡農會は、昨年三月下旬を以て各町村農會技手を召集し、郡農技手足立鈔太郎氏を講師として、害蟲驅除講習會を開くもの一週間、其後當業者を集めて各町村農會に短期農事講習會を開き米麥作法、農作除害法等の講習をなし、講習會毎に豫て郡農會にて製作せる害益蟲の標本を携帶展覽せしめ、以て實物敎授に勉むる所ありき。此際、短尺形苗代の奬勵は、郡役所と農會と、互に氣脈を通じて

之か實施を期し、當業者を勸奬して自から其必要を覺らしむるに勉めたりしも、敢て强制を加へざりしを以て、未だ普及するに至らず、然かも統計の上に於ては年一年と改良の實を擧くるを見る、即ち左掲第一表の如し(表は略す)。一躰に三十四年は越冬の螟蟲多かりしを以て、皆警戒を怠らざりしが、果して昨年六月五日に至り、福知山近傍に發蛾夥しく、郡衙及び郡農會より、各町村役場及び町村農會に注意を促して、專ら卵蛾と幼蟲の採獲に從事せしめんとしたりしも、時恰も養蠶期にして、一般農家は速に着手し難きの事情あるより、郡下の小學校教員に協議をなし、學校兒童を率ひて驅防を行はしめ、且其父兄の注意をも促せり、其結果として當業者及學童の採取せし卵塊は非常の多數に上りしが、之を表出するときは第二表の如し(表は略す)。而して郡内の農家は各戶多數の養蠶をなすより、害蟲の驅防期は恰も春蠶期と同時にて、專ら苗代の手入をなす能はざる事情あるを以て、共同苗代の設置續々行はれ、今や郡內を通じて七十二ヶ處の多きを數ふるに至れり、蓋し美事とすべし。又稻苗を其本田に移植せしは六月十八日より同月二十五日の間にて、苗代の害蟲驅防は概ね其効を奏したりしも、天候冷氣にして螟蛾の發生遲れ、多くは六月下旬に於てせしにや、早植のものには產卵特に多く、其六月二十二日迄に移植の分は被害甚しかりき、是れ或は挿秧期間採卵を行ふ能はざりしに基因するやも測れず。依て被害の稻莖は、悉ごとく摘採して處分する事となし、拔穗を農會に集めて燒却し、又は堆積肥料となせり、其際の被害概算反別は左表の如し(表は略す)。

次に桑の害蟲たる尺蠖驅除の價値を見積るに、一貫目の桑葉を得べき刈桑の株に、十六頭の尺蠖を放飼せしに、之を喰盡したりとの實驗者の說により、桑葉一貫目の時價を金拾錢と假定すれば、即ち十六頭にて拾錢の損失を與ふるものにて、每一頭は六厘餘に當り、百頭六拾錢に相當するなり。然れば尺蠖の驅除は中々熱心に主張せられ、遂に買收法によりて、兒童子守に至る迄も、之が捕獲に從事することとはなりぬ。原來本郡に於ては、概して山畑又は宅地の附近に尺蠖の發生多く、糸引葉捲蟲は由良川沿岸の立木(高さ一丈乃至二丈五尺)桑園に多く、桑毛蟲は到處に發生して、孰れも加害すること尠なからず之を天田郡役所調查の統計に徵すれば、最近二ヶ年の被害額は左の如し。

三十四年　葉捲蟲、尺蠖、蛅蟖　桑園三百三十三町七反步、此被害損失金高二萬六千六十二圓。

三十五年　葉捲蟲、蛅蟖、尺蠖　桑園百十五町二反步、此被害損失金高八百三十三圓。

◎土佐產の蟲報（第八の續）

高知縣土佐郡　武內護文

○食蟲虻科　〔一〕シリナガ　アブ。〔二〕アヲメ　アブ。〔三〕シホヤ　アブ。〔四〕ムシヒキ　アブ。〔五〕ツマグロ　ムシヒキ　アブ。〔六〕オホ　イシアブ。〔七〕オホ　ムシヒキ　アブ。此七種中、〔二〕と〔三〕とは最も多く〔四〕〔七〕は山中に多く〔一〕〔六〕は山中に產するを見るも、其數甚だ少く〔五〕に至りては尙少なし。

○水虻科　〔一〕ヒゲナガ　アブ。〔二〕コウカ　バヘ。水虻科の蟲類中、〔一〕は最も多く產し、夏日多く稻葉に產卵す〔二〕も亦淨房附近に多し。其他なほ二三種あるも、其種名を詳にせず。

○虻科　〔一〕ウシ　アブ。〔二〕メクラ　アブ。此中〔一〕は山間に多く、常に牛馬を追ふ〔二〕は稀に山間に於て獲べし、これ亦往々人を追ふ。其他稻田叢間には、諸種の虻を產するも、皆其種名を詳にせず。

○毛蠅科　〔一〕クサ　バヘ。〔二〕ヒメ　クサバヘ。此中〔一〕は〔二〕に比して少なく〔二〕は最も多く產す稀に人を刺すことあり。

○擬蛾蠅科　〔一〕ガモドキ　バヘ。〔二〕クロ　ガモドキ　バヘ。此二種は、共に全縣下に普通にして〔一〕は殊に多し。

○癭蠅科　ヨモギ　ノ　ワタバヘ。此種は全縣到處に其蟲癭を見る。但柳の鞠蠅は未だ之を發見せず。

○蕈蠅科　此科に屬する蟲類は、數種を獲たるも、未だ其種名を詳にせず。

○蚊子科　〔一〕カ。〔二〕ヤブカ。〔三〕ハマダラカ。此三種中〔一〕は最も多產し〔二〕之に次ぐ。近年縣下に瘧病少なし、是れ〔三〕の見出し得ざる所以なり。然れど往年此疫頗る流行せることあり、而して此蚊の時として多く發生することあるは、亦疑ひを容れず。蚊子の種類は、固より夥多あるべきも、未だ多く檢出せず。

○擬蚊科　ヒメ　クロ　カモドキ。此種春期に多く發生して、屢次農家をして驚かしむることあり。其他尙ほ數種あるも、固より種徵を詳にせず。

○大蚊科　〔一〕オホ　カガンボ。〔二〕ベッカフ　カガンボ。〔三〕キリウジ　カガンボ。此中〔一〕は山間溪畔に於て、屢次之を獲たり。〔二〕も亦北方の山中溪畔に於て僅數を產するを見る〔三〕は最も多く發生す、未だ苗代の加害を聞かずと雖ども、麥圃には屢次大害を加ふ。猶ほ一種、形ハ〔三〕に酷似するも、全体に細毛を密生し、海濱の沙地に在りて麥類に加害するものあり、只憾むらくは未だ成蟲を見ず。要するに此科に屬する小形種には多種あれども、其名を明にせず、中には單眼を有するものもあり。

◎双翅の類附報

シホヤアブを、或地方に於てはサンセウダイフと稱し、キリウジカガンボをグシ、オホツガ、オホツノガ、又はエドノカの稱あり、ヒメクロカモドキは之をウジマンと稱する地方あり、ウジマンとは巨萬の大數の意味なり。其他は一般に蠅、虻、蚋、蚊の通稱を用ゐる。〔完〕

◎岐阜縣惠那郡農會の決議事項

岐阜縣惠那郡 晝耕夜讀生

明治三十六年度惠那郡農會總會を、去月一日より同郡役所樓上に開會せしが、奥田正道、曾我文六、三宅幸三、三氏の提出に係る「明治三十六年度、稻作害蟲驅除豫防方法實施奬勵に對する方針」に對し、左の通り決定せり。

一、苗代は悉く短冊形に仕立つる事。
二、苗代期中に全力を注ぎて螟卵の摘採法を奬勵する事。但し掬殺、注油驅除をも併せ行はしむる事。
三、本田に於ては(螟蟲)採卵、被害莖切取、白穗拔取、及び稻株の低刈り、刈株堀取等を行ひ、又(浮塵子)捕蟲網を使用し、兼て注油驅除をも行ふべき事。(其他の害蟲に對しては、適宜の方法を執る事)
四、苗代期間に於て藁の處置に注意する事。
五、益蟲を保護する事。

右の方針を遂行する爲、左の方法を决定す。

一、郡內南中北の各部に、害蟲驅除奬勵委員各一名を置き、驅除豫防の督勵を爲す事。但し委員は郡農會長に於て任命する事。
二、各町村より害蟲驅除員一名つゝを招集して、驅除豫防上の方法手段を講究せしむる事。
三、驅除豫防實施に際し、警察權を利用する事。
四、小學校生徒をして、害蟲驅除益蟲保護を爲さしむる事。

◎學童の害蟲驅除成蹟表の出品

島根縣農事試驗場 田中房太郎

今讀者の參考に供せんとするは、島根縣八束郡下の學童の、害蟲驅除に從事せる効果表及び其說明なるが、是は皆第五回內國勸業博覽會に出品せしものゝ寫に係る。想ふに此等の事は、既に岐阜縣其他二三縣に於て實施せられたれば、今更耳新しき事實にあらざるも、未だ昆蟲思想の發達せざる本縣にありては、八束郡を以て之が嚆矢となす。而して此郡の斯る出品をなすに至れるは、數多の原因あるによれり

（各掛圖は縦九尺横六尺あり）

明治三十五年中島根縣八束郡學校生徒害蟲驅除効果表

害蟲驅除セシメタル學校數及ビ同生徒數	小學校及ビ實業補習學校	五九校
	生徒	三,六四〇人
驅除セシ害蟲種別		個數
螟蟲	卵塊	一八六,九八七塊
	幼蟲	一〇七,三七一匹
	蛹	一四,三三三匹
	蛾	二九四,八四四羽
地蠶	幼蟲	八五四匹
	蛾	二五七羽
浮塵子	驅除反別	一三九畝
	卵塊	三三六塊
	成蟲	無數
其他害蟲		一三〇,四三〇匹
効益推算	螟蟲驅除ノ爲被害ヲ免カレタル米穀高（第一化期）	五,一三三石
	同上價格（同上）	五一,三三七圓
捕獲セシ害蟲ヲ村農會等ニ賣却シ其代金ヲ貯金ニナシタル生徒數及金額	生徒數	一,五三七人
	貯金額	二五,三八三厘

施設要領

島根縣八束郡民ハ概子農業ヲ以テ生業トナスガ故ニ農業ニ關スル思想ヲ養フハ即チ其生活ニ必須ナル知識ヲ授クルノ道ナリトス依テ農業上害益蟲ニ關スル思想養成法ノ一方法トシテ又勤儉儲蓄ノ美徳ヲ涵養スルノ一端トシテ且又勞働ノ良習ヲ造成スルノ一助トシテ明治三十五年二月本郡長ハ學校管理者及小學校長實業補習學校長ニ訓示シテ左ノ方法ヲ實行セシメタリ

一、學校生徒ヲシテ害蟲及ビ其卵塊等ヲ捕獲セシムルヿ
二、捕獲シタル害蟲及ビ其卵塊等ヲ村農會等ニ買取ラシムルヿ
三、賣却シタル代金ハ驅除ニ從事セシ生徒ニ分付シ貯金ニ充テシムルコト

今第一表ニヨリ試ニ螟蟲（第一化期）ニ就キ其驅除ノ効益ヲ畧述スレバ左ノ如シ

一、本郡內ニ於テ玄米五千百三十二石餘ノ被害即損失ヲ免ガレ從テ其價格五萬千三百二十七圓餘ノ効益ヲ收メタリ計算ノ方法ハ解說書ニ詳記ス

又試ミニ之ヲ本郡公學費ニ對照スルトキハ左ノ如シ

螟蟲驅除ノ爲損失ヲ免カレタル總額　五萬千三百二十七圓
一校平均額八百〃十九圓餘
明治三十四年度公學費總額　四萬二千五百六十一圓
一校平均額七百二十一圓餘

一損失ヲ免ガレタル一校平均額　……公學費一校平均額

八百圓
七百圓
六百圓
五百圓
四百圓
三百圓
二百圓
百圓

即八束郡一箇年度公學費ヨリ多キヿ八千七百六十六圓ナリ

二、捕獲セシメタル害蟲ヲ村農會等ニ買取ラシメ其代金ヲ生徒ノ貯金ニ充テタル額一人平均七錢五厘餘トナレリ

之ヲ要スルニ僅ニ螟蟲ノ第一化期ニ於テ學校生徒ヲシテ驅除セシメタル爲其被害ヲ免ガレタル効益ハ一ケ年度以上ノ敎育費ヲ償フニ足リ又害蟲賣却代金ヲ貯金ニ充テシメタルハ大ニ實業思想ヲ啓發シ併セテ勤儉貯蓄ノ美徳ヲ涵養スルニ於テ有益ノ擧ナリシコトヲ疑ハザルナリ

と雖ども、また現郡長が縣の第四課に長として勸業を統管せる手腕を以て、一昨年以來、懇ろに郡務を料理せし結果たらずんばあらず。是れ啻り一郡の爲に慶すべき事たるのみならず、尙ほ進んでは縣下の事業として、實行の期の速かならんことを望みて已まざる所なり。　(未完)

◎昆蟲月報　(第九信)

第八回全國害蟲驅除講習修業生　埼玉縣　櫻井倚畊

十二月　此月に入れば積雪堅氷を見るを例とするに、天候反つて溫暖に過ぎ、雨天の日多かりき。去れば其間晴穩の日に現はるゝ蟲類も、概ね前月下旬のものと同じくクリノアブラムシと菜類の蚜蟲とは依然として生存し、向陽の不淨處にはクロバヘ愈々多く、夜間は蚊類の一種綠色を帶びたるもの、及び種々の小蟲の洋燈に飛來せるが如き溫暖數夜ありしも、唯ヘラアブ、七星瓢蟲の幼蟲は之を認めざりき此上旬より中旬に亘り、縣下各地の麥田にキリウジ多く發生して、加害甚しとの報新聞紙に傳へらる。余が近傍の少濕田に在りても、麥の完全に生長せしものとては、僅かに十中の一二にして、中には全圃殆ど禿たるが如きものあり、其以下の被害地に至りては、其多少言はずして明けし。現に長さ三尺の麥畦を穿ちて、四十二頭の多數を捕獲せしが如きは、其將來の加害如何を豫知するに足れり。又中旬には茶の殘花にてヒメアカタテハ二三を獲、時々モンキテフの陽地に飛翔するものを見き。是れ成蟲の儘越年せるものにして所謂オツチンテフの名に背かずと謂ふべし。尙ほ溫暖なる夜には往々シロスヂカミキリの燈火に誘はれ來るもありき。十七日煤拂の日、土間に据置ける置床の下より、多數のゴキブリ及びエピコホロギを發見せり。下旬に至れば、漸やく寒氣に復せり、此頃桑園の冬耕を行へしにエダシヤクトリの幼蟲の株の根際に潛み、晴和の日中には上枝に登りて屈伸するを見、クハケムシの秋生種の皆根際の枯葉、及び株下に潛伏するを見き。又時々アカサシガメ、アカガチヲサムシ、アヲヲサムシ、オホゴミムシ等を掘出し、アカアリ、クロアリの巢及び或種の裸蛹をも掘得たることありき。　(完)

附記　余や斯學に對する智識見聞共に狹く、實驗亦極めて淺薄なり、然るを自ら揣らず、昆蟲月報を綴りて、之が掲載を乞ひしに幸に捨てられず、文辭を修飾し、體裁を更め、且之が爲に貴重なる誌面を割愛せらるゝも數月、厚誼實に謝するに辭なし。而して其意たるや吾が名和先生が常に誠實を以て唱道せらるゝ蟲類の分布、及發生の時期を調査するの一端に供するに出て、又各地の知人と標本交換の便を得んが爲なりき。而かも能く採集、飼育等を試みて、目的を達するに暇無きは大に耻つる所なり。將來斯學の知識と經驗を積み、稍自得するの日を俟て宿志の遂行を期し、以て名和先生の盛意に報ひ、併て同志各位に謝する所あらんとす、幸に微衷を察し、示敎の勞を吝むこと勿らんことを。

◎岐阜縣郡上郡の蛾報

岐阜縣郡上郡上保村　鹽田健藏

先に報道せし岐阜縣郡上郡産蝶類品目中に（一）カラスバアゲハテフ、（二）イカリテフ、（三）ギフテフの三種を脱したれば、今之を補足すると丶もに、左に名稱の分明なる蛾類を報道せん。而して其名稱は「日本昆蟲學」の記載に對照記名したるものなれば、或ひは通名と相違の點無きを保せず。

○穀蛾科　●ヒゲナガテフ　●スムシテフ　●びすさろミノムシ
○羽蛾科　●フタマメトリバテフ
○尺蠖科　●エダシヤクトリ　●トゲシヤクトリ　●ムメシヤクトリ　●トンボテフ
○擬尺蠖科　●キンモンテフ　●イチアブチムシテフ　●アケビテフ　●ベニシタバ　●シロシタバ　●オホトモエテフ　●トモエテフ　●カラムシテフ
○毒蛾科　●キンケムシテフ　●マイマイテフ　●チヤケムシ
○蠶蛾科　●カヒコ　●クハゴ　●ムメケムシテフ　●マツケムシテフ　●カレハテフ
○天蠶蛾科　●ヤママユ　●テグステフ　●オホミヅアチテフ　●ヤマカマス
○天蛾科　●オホスカシバ　●ベニスズメ　●セスヂスズメ　●ウチスズメ　●モモスズメ　●メンガタスズメ　●エビガラスズメ

編者云ふ。此報告中イカリモンガを蝶類に追記したりと雖ども、此は蛾類天蛾科に屬する一種なれば、蛾類に入るを至當とす。又この蟲名は日本昆蟲學の記載に從へりと云へば、今更詮方なけれど、尺蠖蛾科と擬尺蠖蛾科のものには、青蟲蛾科、巴紋蛾科、枝尺蠖蛾科、梅尺蠖蛾科に分配すべき種類も少なからざるのみならず、マツケムシが、カレコノハガ等の毛蟲蛾科に屬すべきを、蠶蛾科に配したるすら之あり、此等は今後注意すべき點なるべし。要するに、蛾をテフと呼ぶ時は、語呂圓滑なるも、之がため時としては蝶蛾の別を失ふ事あるを以て、成るべく劃然たる分界線を設くるを可とす。又松村氏の著書には、幼蟲名を本とせる尺蠖科、十分意義を表明し難き羽蛾科の如き、科名及び蟲名を用ゐたるも、共に妥當を缺けりと思はるれば、適宜斟酌を加ふるの要あるべし。

◎愛知縣寶飯郡の冬季昆蟲展覽會

愛知縣　田中周平

吾が三河國寶飯郡に於ひては、三十六年度郡會の決議を經て、近々冬季採集の昆蟲展覽會を、豊川町妙嚴寺内に一週間開會の事に確定したるが、其開會期は名和昆蟲研究所長名和先生と協定せん筈あり、恐くは五月の初なるべしとの事より、今や郡下各處に於ては專ら其準備に忙はし、左に其二三を報告す。

一、冬季昆蟲展覽會開設に就き、去月廿八日を以て郡長中山眞琴氏より、幹事を囑托せられしは、木村永八郎、田中周平、中尾國光水野龍治郎、神谷兵吉、松尾幸治郎、山口春次郎の七氏なりしが、尋で本月五日には、郡の中部の小學校長一同を國府高等小學校に會して、出品に關する商議をなせり。東部、西部、また同樣の協議を遂ぐる都合なりと。

一、冬季昆蟲展覽會を郡事業とするに就き、中山郡長及び竹內郡視學等の熱誠は、郡參事會員並に郡會議員諸氏を動かして、何の障害も無く決定せるものゝ如し。故に此會にして好結果を得ば、異日教育上に不少の利益を與ふべきも、不幸豫想の如くならずんば反つて信望を殺ぐに至らんことを憂ひ、各關係者は皆汲々として之が設備に從事の狀あり。

一、赤阪高等小學校の冬季採集品は、約二百五十種あり、赤阪、長澤、萩の三尋常小學校また前者と伯仲の間にあり。而して昆蟲標本の外に數多の寫生圖をも出品せしめんとて、已に高等小學生に描寫せしめたるが、中には某處より發賣せる益害蟲圖と比較の爲めに、特に同種の昆蟲を畫きたるも之あり。

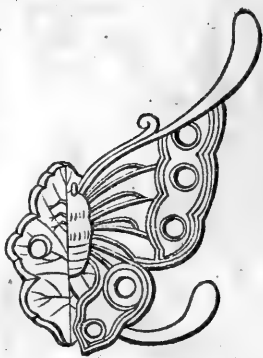
一、各學校中には、昆蟲の研究に熱心なる教員も不少なるより、或ひは終業後に製作、整理に餘念無きもあり、又或ひは部下の職員を督勵して、專意成蹟を擧ぐるに怠らざるもありて、互に競進の一方に傾注し居るものゝ如し。故に郡の利益より言ふ時は、之が爲めに一段の活氣を添へ來れるは爭ふ可きにあらず。

雜報

◉今年の蟲害を占ふ　舊冬來、稍高溫に過ぎし爲め、聊さか今年の害蟲發生を氣支ふ所ありしに、それかあらぬか、各府縣に於て、町村に簡易の害蟲驅除講習會を開設せしもの頗ふる多く、今より防備をさく油斷無ければ、假し多少の加害ありとも、遂に大災を見るに至らざる可し。且つ中央氣象臺の觀測に、最低溫度を感せしは、二月廿一日にて、東京に於ける同日の溫度は、攝氏の零下四度餘に下り、同廿三日は零下二度三、廿四日は同二度弱なりきと云へば、今に至るもなほまだ適順の天候に復したりとは思はれず。去れば啓蟄後に至るも、復た寒冷を感ずるの日ある可ければ、牛は蟲類の發育を妨害するに足らんか。故に本年は農家の放心せざる限り、不幸を來さゞるべきも、已に昨年に於て切蛆の爲めに加害せられたる麥田、尺蠖毛蟲の爲めに恐慌を來したる桑園も、多々各地にありとの報あれば

一に天候にのみ依頼して、その驅防を懈怠すべきにあらず。

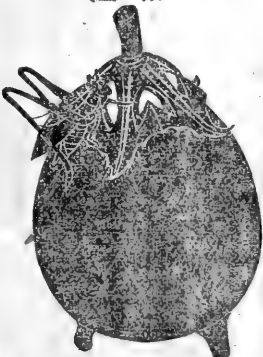
◉**農事試驗場の計畫**　聞く所によれば、東京西原の農商務省農事試驗本場にては、各府縣より生徒を募集し、約一年間修業せしめて、之を各地に配置せん計畫あるも、その園藝害蟲の講師に適當の人物なきより、未だ實行の運びに至らずと。

◉**內國勸業博覽會出品の昆蟲標本**　今月一日より開會の、第五回內國勸業博覽會に出品せる昆蟲標本に對しては、次號より公直の批評を加へん豫定なるが、それに先だちて左に參觀記を載せ以て讀者の出品大體に通せんことを乞はんとす。此記は、當昆蟲研究所員小森氏が、會場瞥見の際の所感を、過日の岐阜縣昆蟲學會例會に演說せし大要にて、固より外部に就ての鑑別に過ぎずと雖ども、また肯綮に中れる節無きにしもあらざる可し、但し他に對する遠慮より、岐阜縣の出品には、一も加評せる所あらざりき、これまた已むを得ざる次第なり。

余は岐阜縣昆蟲學會より出品の昆蟲標本を陳列せんか爲め、大阪の機會を得たれば、序に博覽會場內の各舘を一覽せしが、其際瞥見の昆蟲標本に就て、記臆の概要を紹介すべし。但し是は三月一二の兩日間入舘して、會務從事の傍ら、彷徨通觀せし所に係り、且つ開舘當日の事とて、なほ陳列を終らざる縣も多く、或は陳列して未だ出品人の名刺を揭げざるもの、或は高處に安置せし爲め、定かに其優劣を知り難きもの等ありしかば、固より精密の觀察を遂げ得へくもあらず。

工業應用昆蟲畫報の十（帽子掛）
（和歌山縣　藤枝碩三氏寄贈）
（大阪市　由比昌太郎氏寄贈）

◉農業舘　昆蟲標本の最も多く陳列せられたるは、農業舘即ち第一部第八類にして、諸官廳の出品を除くも、なほ二百餘點に上ることは、既に前號所報の如し先づ正門を入り、右折すれば、玆に北海道廳の陳列場あり。北海道は內地とは風土も異なり、且つ昆蟲の研究者もあれば、種々豫想を描き居りしに、更に其事無かりしより、何やらん物足らぬ心地せられき。其より、青森縣を過ぎて岩手縣の區域に到れば、膽澤郡農事試驗場の出品に係る有益蟲標本、有害蟲標本各一箱あり、次に島善平氏の出品有益動物標本一組（一箱？）あり。何れも感服すべき程の

工業應用昆蟲畫報の十壹
（香爐）

（大阪市　由比昌太郎氏寄贈）

價値無きものにて、特に島氏の出品に、有益動物として、中にノコギリムシ、シモフリスズメガ、ミンミンゼミ、ハルゼミ、ナツチゼミ、オホザウムシ等を配列せしは、何の意なるやを解し難かり。外には晴山立郎氏の有害蟲標本一箱と、稗貫郡農會の昆蟲標本一組(一箱?)ありしのみ。宮城、福島、秋田の諸縣を過ぎて、山形縣に移れば、都て十六箱あり、裝飾等は心を用ゐたるやう覺へしも、其出品人名も將た標本の種別も、之を知るに由無りしを以て、點數、意匠共に不明に屬せり。併し被害植物をも添へたる害蟲標本らしきもの六箱と、益蟲類を集めたる五箱、」分類標本とも見得べきもの五箱ありしは確かにて、何れも是がと云ふ缺點の少なきより評言を下せば、先づは無難のものと見て支へなからん。それより北陸區に入れば、新潟縣農事試驗場より、二化生螟蟲標本、サンセウムシ標本各一箱、二化生螟蟲蛾誘殺數對照表、」及び成蹟表、二化生螟蟲の發育式、サンセウムシの發育式、二化生螟蟲及びその寄生蜂圖解、サンセウムシ圖解等を、掛圖となしての出品あり。富山、石川の二縣を過ぎて、福井縣に抵れば苞蟲驅除器二種、誘蛾燈五種の出品あり。斯くて長野、群馬、茨城の三縣を過れば、農商務省農事試驗本場の陳列場の前に出づ、その中、昆蟲の陳列區は約十五六坪にて、東面北面に農作物害蟲十九種(二十種の内一種は田鼠)の圖解を扁額として掲げ(一面は約三尺に四尺大)下に實物標本を配置し、前に說明書を添へ、西南隅には苗代田に於ける螟蟲驅除の圖、三化螟蟲刈株堀取の圖を掲げ、下に二化生並に三化生螟蟲の發育摸型を並置し、又苗代田及び本田に於ける浮塵子驅除の圖(各圖四尺に六尺大)を掲げたる下にはヒメトビウンカ、ツマグロウンカの發育摸型を示し、更に南面には、果樹の貝殼蟲驅除に青酸瓦斯薰烟を行ふの圖及び噴霧器にて蚜蟲、黴菌等を驅除するの圖を掲げ、下には所要の器械及藥品を示したり。而して中央には六角形の巨柱を立て、各面に貝殼蟲、横蚊蟲、葉蜂、寄生蜂等の分類標本を配列し、又稻、藍、煙草、甘藍、胡瓜、桑樹、茶樹等の摸型を作り、これに二十五種の害蟲を配當して、寄生加害の狀態を知らしむるに便せり。有繫に國費を以て裝成せしだけ、其用架に、其說明方法に、覽者の注目を惹くに足れり。之に次ぎて農務局製茶試驗所の出品に係る茶樹の害蟲(六箱)あり。次に農商務省東京蠶業講習所の出品あり、其品目は蠶兒の營繭摸型、蠶蛆の經過摸型、各種の病蠶摸型、蠶體の發育順序(ホルマリン浸)、各種の消化試驗成蹟等の陳列あり。それより山梨、栃木の二縣を經て千葉縣に到れば、昆蟲標本三箱と捕蟲器、誘蛾燈の陳列あり。東京府、神奈川縣を越えて靜岡縣に到れば、周智郡の出品にて

工業應用昆蟲書報の二十　(釘隱)

(東京市　田中芳男氏寄贈)

普通の昆蟲を害蟲と益蟲とに分類せしもの凡て二十四箱あり。但し粗大なる三箱と、害蟲標本六箱とは、出品人名不明なりしが、後者には被害植物をも添へて害蟲七十種を藏め、其排列製作共に可なるものなりき。次に愛知縣渥美郡出品の害蟲標本六箱は、被害植物を添へ、且つ整理考案其宜しきに適ひ、傍目には優者の一に加ふべきものにて、外に服部松之丞氏の出品に係る標本四箱ありき。滋賀縣は農事試験場より名物の浮塵子の標本、並に被害稲の標本、寫眞を始めとして滋賀縣令規定の農作害蟲十七種(六箱)を出陳せり、可否は言はざるべし。岐阜縣は總て百十四箱にして、出品人は十五名なり、斯く多數の出品ありしより、其陳列面積に窮し、遂に之を以て門を造りたるは、蓋し艱難爾を玉にせしものか。それより順次進めば三重、和歌山の二縣よりは誘蛾燈の出品あり。徳島縣よりは農作物害蟲豫防方法書といふものを出品せしかど、主人公を知ることを得ざりし、又標本として本生良三氏の二箱、富本次郎氏の二箱ありしも、老練の痕跡を認めざりき。香川縣の十七箱中、赤澤新吾氏のもの二箱は稍可とも謂ふべく、其他には縣農事試験場より二化生螟蟲調査表、香川縣三化螟蟲分布圖等を出品せしのみ。愛媛縣よりは、愛媛縣害蟲發生圖と題する六尺に五尺もあらんかと思はるゝ大幅に、二化生螟蟲、三化生螟蟲、横這蟲、椿象、地蠶の發生及び加害の多少を設色點線を以て示したるものと、稲害蟲三化螟蟲驅除法(一冊)の出品あり。それより高知縣を過ぎて、九州區に入れば大分縣北海部郡農會より、害蟲標本九箱、益蟲標本四箱の出品あり、標本は成蟲のみにして、益蟲の部にキマハリ、ハムシ類等の害蟲を混入せしも目障りの種子なりき。鹿兒島、沖繩宮崎、長崎、佐賀、熊本の諸縣には別段記すべきものなく、福岡縣に入れば、嶺要一郎氏出品二十四箱あり、大體より云へば、優秀品の一たるに違はざるも、其一植物に數種の害蟲を添へ、且つ配列と整理とを缺きしは確かに瑕瑾とすべく、恰かも害蟲群棲圖に對するやの感ありて、蝕害の自然的狀態を示すものとも思はれざりき。特に同一植物に嚙桑と白點天牛とを宿らしたるが如き、又標本箱の不完全にして、保存には如何にやと危ふましむるが如きは、聊さか惜むべき點なるべしと雖ども、其多種なると、稍製作に注意せしとは、此標本の長處たらんか。次に高千穗宣麿氏の出品に係る害蟲標本十箱あり、可否の評言は預かるべし。次に福岡縣農事試験場よりの害蟲圖解十二枚、並に稲、柑橘、藍、粟、煙草の摸形に對する二、三化生螟蟲、アゲハノテフ、アヰノズヰムシ、アハノアチカメ、タバコノアチムシ等の害蟲標本あり。其意匠は、本家の農商務省農事試験場の出品と何の變る所も無けれど、唯彼は全國を對手とし、此は一地方を示したるの差あるのみ。山口縣にては、田口仙三郎氏に稲の莖切缺の出品あり。廣島縣に隣れる岡山縣には縣立農學校の出品として、昆蟲標本十六箱あり。他の十二箱には、採集用紙をも添へたれど、其製作の不完全なる點より想像すれば、恐くは小學兒童の採集品なるべし(出品人名並に名稱等不明)。同縣岩崎安直氏出品の園藝加害動物標本は、菓子箱大の粗末なる小木函に、十數種の昆蟲を入れたるのみなり、名實の適はざるを笑ふ人も多かりき。島根縣の部には、誘蛾燈二個を陳列し。鳥取縣の昆蟲標本二箱は、製作こそ稍丁寧にしたれ、配列亂雜にして頗ぶる其當を得ざりし、製作者と出品人とは異人なるが爲めか。兵庫縣にも標本十箱ありしが、出品人並に名稱等を知ることを得ざりし。併し其製作、配列等より考ふれば、可なり苦心を積みしもの

なるべし。外には倉垣吉藏氏出品の驅蟲器といふものありき。大阪府藤戸基氏より害蟲標本五箱、南河内郡農會より螟蟲驅除方法、及び成蹟品を出品せしが、その成蹟品の採取螟卵を以て巧に造れる額面なりしも面白く、且つ幼蟲を圓徑七寸許、高一尺二、三寸の二大玻璃瓶に滿盛せしも驚くべし。京都府には、都合十七箱ありしも、是亦出品人を知ることを得ざりき。

●林業舘　此舘には昆蟲標本の出品少なく、僅かに岐阜縣よりの五箱と、山林局より出品の參考品あるのみ。山林局のものは總て八十四箱にして、多く種類を集めたれば、參考に資すべきの價値はあれど、技術上より云へば、肯て賞するに堪へず。

●水族舘　此舘また昆蟲標本の出品無く、唯青森縣、秋田縣、兵庫縣、東京府、京都府等より蟲態摸擬の釣鉤を出品せしもの數種ありき。就中青森縣の出品に係る蜻蛉の餌鉤は、中々の上出來なりし。

●教育舘　此舘に入りし時は、時間に制せられて、匆忙裏に觀覽を遂げたれど、早已に胸臆に存する事項も少なし。先づ南口より入り右に折れて、美術學校、内務省、文部省等の出品陳列場を過ぎ、岐阜縣陳列場に到れば、出品人員八名にて、點數は八十一箱あり、去れど添出品の多かりし爲め、槪むね架上に配列せられたれど、衰眼を以てしては、到底微細なる點まで、批判を加ふること能はざりし。次の愛知縣には愛知農林學校の出品に係る農林業教育標本中に、害益蟲標本二箱あり。大分縣に三箱、鹿兒島縣にも四箱ありしと覺ゆ。大阪府早川熊次郞氏出品七箱は、兩面硝子の函にて、一面には昆蟲をバルサンゴム（？）にて糊け、昆蟲の背腹を見得る樣になせしもの、製作は可なり。兵庫縣有馬農林學校の出品せる害益蟲標本は言はねが華なるべし。滋賀縣大津尋常高等小學校の出品せる理學科敎授用昆蟲標本は、庭園モドキの繪畵に、十數種の昆蟲を配置したるもの、其拙劣は言ふまでもなし。鳥取縣の出品中に分類標本三箱あり。彼の岐阜縣大垣町西濃印刷株式會社が、全力を擧げて調製せる邦產六種の蝶類は、實に此舘内にあるなり。

●工業舘　此舘を始めとし、參考舘、美術舘なも巡覽したりしが、昆蟲を美術工藝上に應用したるもの、亦數點ありき。去れど多くは摸樣化的支那一流の形式を具備せるもの、若くは製作者の腦中にて發見せし新種變種の類のみにて、實物を摸範とせしもの、又は寫生畵より摸樣化せしものとては、遺憾乍ら觸目せざりき。

◉色と昆蟲との關係

物の色と昆蟲とは、親密の關係を有するものにて、蚊帳地の色合により蚊の侵襲よ多少あるは、その適例とすべきなり。先年、イタリー及びフランスの二國に於て、養蠶室の内外に色硝子を用ゐる時は、結果頗ぶる良好なりとて、特よ好んで紫色を賞揚せしより、本邦にても東京蠶業講習所に於て、去る三十三年以來これが試驗を繼續せしよ、前二國のとは全たく其成蹟を異にして無色のもの第一に居り、黄色、紅色、橙色これに亞ぎ、紫色と綠色のものとは、非常の不結果を來たし色素の暗黑に近づくよ從ひて、愈々昆蟲に影響あることを確めたるが、其原因よ就ては更に研究中なりと云ふ。昆蟲研究者は、深く注目をべき事ありと思はる。

◉全國害蟲驅除講習修業生同窓會

前號に所報の如く、全國害蟲驅除講習修業生の同窓會は、今月廿八日午後一時より大阪市天王寺清水八百松樓に開會の都合なるが、同日は北陸、九州、東京附近よりの申込も多ければ、これに京畿地方の會員を合せ少くも百餘名に達すべく、特に斯學界に關係を有する名家數名の臨場を肯へるあり、又大阪新農報社の由比昌太郎氏が、百事其間に斡旋の勞に當らるゝ約ある等、諸事頗ぶる圓滿に進行したれば、當日は意外の盛會を來すなるべし。

◉蟲の人の消息

松村松年氏は、獨逸より歸國以來、舊によりて北海道札幌農學校に在ることゝなるが、同校の紀要を公行の際、邦産泡吹蟲科〔有吻目、横蟲族〕の研究を發表せんとて、目下採筆中なりと。◎桑名伊之吉氏は、歸國後九州昆蟲學研究所を佐け、且つ其專攻學科を研修中なりしが、何か身上己むを得ざる都合あるやにて、近々異動を生ずるに至るべしとの事。◎岐阜中學校教諭長野菊次郎氏は、昨年來蛾類を研鑽中なりしが、遠からぬ中に、東京の某校に榮轉することゝ成りたれば、來月初旬、新任地に赴かるゝ由。◎農商務省農事試驗場技師中川久知氏は、今回其郷里より代議士に推選せられたるのみか公務に服し居りては、兎角研學上思はしからずとて、過般己に辭意を漏らしたりとも云へり。◎在米國桑港の名和梅吉氏は、其後健在にて、斯學の研究をなし居れるが、渡航以來採集せし貝殼蟲數十種を、去月二十日附にて送り越せり。

◉本號口繪の說明〔鋸蟲と深山鋸蟲〕

本號の卷首に挿入の第三版圖中の〔A〕は、ノコギリムシにして、〔B〕はミヤマノコギリムシなるが、符號の〔1〕〔2〕〔3〕を有するは、何れも雄蟲にして、〔4〕は雌蟲なり。その斯く雄蟲に於てのみ上顎の發達したるは、全たく雌雄淘汰の結果にして、其躰の發育不充分なるものは、從ひて上顎の發達も不十分なるを見る。他に此種に類似のものは、クハガタムシの各種、カブトムシ、及びダイコクムシの各種にて、是また常に前種同樣の妙理を存せり。而して此圖中〔A〕と〔B〕との雄蟲は、輙ち區別し得ること容易なるも、其雌蟲に至りては、蓋し之を難んず。たゞ〔5〕即ち其足部に於て、前種には樺色を帶ぶるが故に、分類裝成の際の特徵とすべし。

工業應用昆蟲畫報の十三（古銅錢）

（京都市　山口福太郎氏寄贈）

◎千蟲萬豸錄（第二）

最近の通信、公行の諸報告より、昆蟲界の事項を抄錄すること下の如し。

○岩手縣の南部にては、蝶をテビラ、テビラコ、又カッカベとも呼び、北部にてはテーゲラ、テーガラ抔と呼ぶ、とは同縣小出幸右衛門氏の報道する所なり。方言ほど尊くして、解せぬものは無し。

○鹿兒島縣の螢狩の童謠を聽くに「ホタイ、ホタイ、コッチケ、ソイガエハ、クッサレエ、オイガエハ、ヤナギノシタンヨカエ、ホータイ、ホタイ、ホタイ」と歌ふとは同地林俊房氏が通信の一節。

○靜岡衛戍營に在りし一友の曰く、去年夏秋季に臺灣歸還兵の齎らし來れる臭蟲營內に發生し、爲に洒掃驅除法を嚴行しき、是れ其紀念なりと、笑て一頭を惠まる。とは中遠の神村直三郎氏の所報。

○群馬縣前橋附近に於ては、昨年秋季に桑尺蠖蕃殖して、被害樹頗ぶる多かりしが、春來の暖氣のため、越冬の幼蟲の出現するもの多く、養蠶家は何れも眉を蹙めて、今年の桑葉不足を歎き居れり。

○高知縣長岡、香美、安藝三郎の町村吏員及び警察吏五十餘名、害蟲驅除豫防講習を修了して修業證書を授かる、次で吾川、幡多、土佐、吾川の四郡また各々三日間の講習會を開く。美擧賞すべし。

○宮崎縣廳訓令を發して、農作害蟲は擧動遲鈍の冬間に驅防すべきものなることを示し、且各郡に通牒して、縣廳員の指導監督の下に警察吏農會員等と戮力協定、嚴に之が實行を期すべき旨を命ず。

○奈良縣高市郡各級農會は、害蟲驅防の一策として、先づ苗代期より移植期間に、螟卵蛾の買收を行はんとす。其買收率は五卵塊二厘十蛾二厘にして、五日毎に、現金若くは買收劵と引換ふとの事。

○新潟縣廳螟蟲の大害を知り、將に細密の調査を加へんとす。即はち各郡を通じて弘く栽植する晩稻の藁一把を取り、其莖中に潛伏の螟數を算し、之を昨年調査を施せる統計に比較するにあるなり。

○兵庫縣飾磨郡に於ては、郡令を布きて畦畔の雜草燒却を命ず、注意頗ろ多とすべし。惟麥田と紫雲英田に潛伏の害蟲多々之あるを奈何せん。寧ろ遡つて其根本を絕つの策を立つるに若かざるなり。

○福島縣福島町に於て、先頃盛んに栗毛蟲の蛹繭を買收せしものあり。買價は每百目三十五錢にして、その內實は神戶某商店の依賴に係り、內外國人に轉賣して、紡織絲の原料に供せんとするなり。

○山口縣下佐波郡、昨年螟害除却に熱中し卵蛾の買收を行ふ。爲めに費す所の金額は六百拾參圓にして、捕蛾百三十八萬四千餘頭、採卵三百二十五萬二千餘塊、外になほ百八十萬餘の卵蛾を獲たり。

○德島縣名東郡害蟲驅除豫防方法を講じ、郡內各大字に數名の驅除委員を設け、又小學教員をして、昆蟲思想の注入及び實地指導に當らしめ、双々相俟て根絕を期せんとす。蓋し時務に適へるもの。

◎山梨縣中巨摩郡農會、今年より小學兒童に、捕蛾採卵せしめんことを教育會に交渉し、異議なく其希望を容れらる。久しく福音に接せざりし同郡も、是より視るべきの好果を擧げん乎、勉めよや。

◎長崎縣にては、舊臘來昆蟲の巡回講話を開始し、既に西彼杵、壹岐、北松浦の各郡を了へ、今や北高來。南松浦の方面に及ばんとす是は一回の講話に三日を費やし、之を郡内樞要の地に開くもの。

◎岐阜縣郡上郡上保村に於て、雪折の桑枝より姫象蟲十五六頭を發見し、爲に同蟲の苅桑以外にも加害し、及び郡上郡に發生の事實を確め得たりと。二月廿六日附を以て鹽田健藏氏より通報ありき。

◎**全國害蟲驅除特別講習會の開講式**　豫期の如く、本月十日午前第九時を以て、第十五回全國害蟲驅除講習會開講式を當昆蟲研究所内に於て興行せり、來賓は岐阜縣農事試驗場員、縣農會理事千葉縣杉谷彌之吉氏〔第九回全國害蟲驅除講習會修業生〕等にして、先づ名和昆蟲研究所長の開會の辭に講習中の心得の訓示あり、次に來賓林正一氏、杉谷氏の祝詞演説あり、次に各府縣よりの祝詞祝電の披露あり、次に講習員總代山形縣長岡安吉氏の答辭ありて、其式を終へしが、當日までに來着せし會員は一府十九縣の出身四十名なりき。因に同會第二回の修業生清水藏氏は、助手として盡力中なり。

◎**害蟲驅除の奬勵**　京都府天田郡曾我井村農會に於ては、昨年螟卵採取に從事せる學童に對して、去月廿七日の慰勞褒賞授與式を執行せり。當日午前には笹尾尋常小學校に於て三十二名に授賞せしが、午後は堀尋常小學校に於て百三十五名に授賞せり、其際農會長、技手、郡書記等數名臨席し學校長以下共々訓諭を加へて奬勵せしが、今年度に於ても之を行はんとて、名和昆蟲研究所發行の害蟲圖解により、各種の害益蟲を説明し、目下は桑樹の枝尺蠖を驅除中なり。〔三月三日附、菅沼岩藏氏報〕

◎**工業應用昆蟲畫報**〔第三報〕　本號に掲載の應用昆蟲畫報の〔十〕は、近ごろ發賣せる白銅製の帽懸にて、全體を蝶形に象どりしもの。〔十一〕は、青銅製の香爐にて、茄子に直翅類の昆蟲を配したるものなるが、其稍實物に近きは、富山縣工業學校の製作に係れるが爲めかと知らる。〔十二〕は、承塵裝飾用の釘隱にて、是また地質は青銅なるが、製作は尾張名古屋市なりと云ふ。〔十三〕は、何れも銅錢の搨摸なるが、其中イはトイチダマ〔福一玉、穴一玉とも云ふ〕と稱し、古へ鏡師などの鑄造せしものにて通用錢にはあらざりしも、錢面に鳳子蝶を表はせしもの。次のハ〔嘉友〕は支那宋代の鑄錢にて、ロ〔信香〕は其背面を示せるもの、是は專ら祝賀用に充てしものなりとか。

◎**水棲昆蟲の出品**　當昆蟲研究所出品の一として、左記の水棲昆蟲十五種二百餘頭を、第五回内

國勸業博覽會附屬水族館〔堺市大濱公園〕に陳列せしが、扨之が送附方法は、未だ多く經驗を有せざるより、種々苦心の末、試みに鐵葉空鑵に水苔及び藁稈を塡裝し、其中に蟲類を放ち、之を小包便に托したるは、去月廿五日なりしに、同廿七日附を以て、無事到着の報を得たれば、更に本月八日に至り、二十餘種數百頭を同一手續によりて送附せしに、此回も良結果を得たる旨の報告に接せり。想ふに水棲昆蟲は、今後大に研究せらるゝに至らんが、斯る場合に送運の方法を知らざれば、可惜、其用を全うせざる事なしとも限らず、斯學研究者は、宜しく研究すべき事ありと思はる。〔ナ、ヤ、記す〕

（甲翅類）コガタノゲンゴラウ。ガムシ。ミヅスマシ。ゲンゴラウの異品三種。
（半翅類）コミヅムシ。ヒメミヅムシ。コオヒムシ。ユリノハナスヒ。ミヅカマキリ。マツモムシ。
（羅翅類）ギンヤンマの幼蟲。イシミノムシの幼蟲。ダイコクイシムシの幼蟲。

◉**岐阜縣昆蟲學會記事**　岐阜昆蟲學會第五十一回例會を、本月七日午後當昆蟲研究所内に開會せしに、揖斐、可兒、安八等の郡部よりも、數名の會員の出席ありて、先づ小森省作氏の、第五回内國勸業博覽會に出品の昆蟲標本觀覽談あり、次に副會長名和靖氏の、博覽會出品昆蟲標本に對する所感に併せて、水棲昆蟲の出品始末、新式寫生用昆蟲標本に關する説話あり、終りに特別會員長野菊次郎氏の昆蟲蛹化の狀態、方法より學者の研究すべき要點に就ての談話ありて、五時頃散會を告げたりき。因に云ふ、次會は四月四日を以て開く事なるが、恰かも長野氏の新任地への出發は、其翌日頃に當れば、席上別意を表する爲め、何分多數の會員の參集を望む趣きなり、悉しくは廣告欄内にあり。

◉**昆蟲水曜會**　當昆蟲研究所員の催しに係る同會の近況を報せば、去月二十一日の會に、名和愛吉氏が梅毛蟲卵塊附着の樹枝調査、同月廿八日の會に、石田和三郎氏が最近刊行の諸報告より、數十種の昆蟲記事を摘採して、之を研究問題に供せる、本月七日の會に、高橋喜男氏がカハゲナの實驗談、棚橋昇氏が採集上の注意談、森宗太郎氏が蚊の飼育談等は其主要のものなりき。

◉**昆蟲標本陳列館の參觀人**　昨二月中に、當昆蟲研究所の標本陳列館を參觀せし人員は、總計二千五百三十六人にして、其中最も多かりしハ、二十七日に於ける二百五十三人、最も少なかりしは十三日に於ける四十九人にして、一日平均百〇五人強に當り、重なる參觀人は、理學士岩川友太郎氏を始め、群馬、長野、大坂、其他各府縣の實業家、操觚者、教育家等なりき。（雜報、三月十一日脫稿）

◉**注意**　記事輻輳のため、本號には紙數四頁を增し、なほ餘れるは、之を次號に讓れり。

雜誌昆蟲世界合本出來廣告

○第十二號以下完備

本邦唯一の昆蟲雜誌
昆蟲世界 合本
第六卷（昨年分）出來

西洋綴金文字入美裝

● 昆蟲世界第二卷 五部（自第拾貳號至第拾六號）
右は明治三十一年發行の分（但合本にあらず）

● 昆蟲世界第三卷合本壹册（自第拾七號至第貳拾八號）
右は明治三十二年發行の分

● 昆蟲世界第四卷合本壹册（自第貳拾九號至第四拾號）
右は明治三十三年發行の分

● 昆蟲世界第五卷合本壹册（自第四拾壹號至第五拾貳號）
右は明治三十四年發行の分

● 昆蟲世界第六卷合本壹册（自第五十三號至第六拾四號）
右は明治三十五年發行の分

（合本は每冊金壹圓貳拾錢、郵稅金貳拾錢
其他は定價の通り）

右昆蟲世界の義は發刊以來、非常の高評を博し斯學研究上の寶典として又農事改良の先驅として歡迎せられしも、未た之を合本とするに至らざりしに、今回讀者の勸告により每一年分を裝釘して閱讀索引に便にせり、請ふ愛讀を玉へ。

岐阜市京町 名和昆蟲研究所

專賣特許第四九八六號 莖切器發賣廣告

新發明莖切器の圖
ロ ハ

蝗蟲の稻作に害を及ほすや頗る大よして之れか驅除を爲さんとするには早く病稻を刈り取り害蟲を撲殺するに如かさるなきは精農家諸君の汎く認むる所にして近來之れか實行を唱導せらるゝ頻りなりと雖とも未た完全の良器なく止むを得ずに在來の鎌を使用して徒に他の良稻を戕ふのみならず全く蝗蟲の潛伏せる稻莖を根底より刈去ることを得さるが爲め害蟲を驅除の目的を達する能はす空しく蝗蟲をして其害欲を逞ふせしむるに到る實よ概嘆ゝ堪へさるなり發明者多年茲ゝ意を籠[illegible]に[illegible]考案[illegible]一良器を案出せり此鎌は[illegible]し圖に示す如く[illegible]を付したるものにして[illegible]に[illegible]は先つ把手（ハ）を握り而して切取らんとする稻莖を左手まて握り遮匙の頭部と鎌の尖端との中間（イ）に當て鎌を少し前方に押すへし然るときは遮匙（ロ）は彈力性あるを以て外方に開き稻莖を押入るへし一度押入れたる后は遮匙は彈力の爲め元形に復し鎌の尖端を被覆して他の健全なる稻莖は挿入する事なし此に於て鎌を根底迄押入れ後方に引くときは毫も他の稻莖を害せす容易く根元より刈取ることを得る至極輕便の良器にして靜岡縣農事試驗場等の協賛を博せり…定價一挺金拾錢…農會等の共同御用は特別割引…

製造元 靜岡縣小笠郡比木村 山本勘藏
發賣元 同 縣志太郡燒津町 吉野寅之助
縣下一手販賣所 岐阜市京町 高橋喜之助

大懸賞付薔薇苗販賣廣告

本園今回有感薔薇專門を以て好花諸彥と樂しみを共にせんと欲す今や開業に際し聊か祝意を表する爲左記大景品を附し本園薔薇苗の精良と廉價を世に知らしめんと欲す景品番號は三千枚限り進呈す

●薔薇苗　一組（各種取合十種）

▲箱入り　郵税共壹圓

右薔薇苗は却賣同樣廉價にして一組に付景品番號一枚を呈し景品番號三千に滿數の上は本誌及び大農園に廣告し其節定むる日の官報天氣豫報の字數より百番目を一等とし以下千番目に二等景品を附し百番毎に三等景品を呈し各十番毎に四等景品を附し最公平なる法により本誌愛讀者及び帝國農家一致協會員に限り景品を呈す

尙百番迄は一組の内へ一本五拾錢の苗一種入れ送る

●壹等　寫眞器（一組六拾圓以上の品）　一人

●貳等　寫眞器（一組貳拾五圓以上の品）　二人

●參等　細霧注射器（一臺七圓五拾錢の品）　廿七人

●四等　絹手巾一枚宛（薔薇之昆蟲模樣）　二百七十人

右の通紀念大景品を呈し特別廉價に精良種苗を供給す諸君此機に乘じ續々申込あれ

本園目下栽培薔薇種類二百十餘種

兵庫縣武庫郡須磨村　**薔薇園**

臨時刊行　第壹編

名和昆蟲研究所編輯部編

增訂再版

日本昆蟲分科表　全一冊

定價　郵税共金貳拾八錢（郵劵代用一割增）

右は四百餘種の邦產昆蟲を收載して分類分科を示したるものなり

岐阜市京町　**名和昆蟲研究所**

本月廿四日より廿九日まで、大阪出張中は、同市東區西高津中寺町十番地久成寺むし屋旅店の出店に滯在罷在候間、當昆蟲研究所同窓會員諸君幷よ御用の方は同處へ御來車被成下度候

名和昆蟲研究所長　**名和靖**

岐阜 むし屋旅店廣告

今回昆蟲學研究家各位の御便利を圖り、第五回内國勸業博覽會開會中、出店を大阪市東區、西高津中寺町、十番地久成寺内に設け特別低價を以て御休宿の御用に應じ候間續々御光臨の程奉希望候

大阪市東區、西高津、中寺町十番地、久成寺

岐阜市西野町　**蟲屋旅店**　大阪出店

登錄商標 硫曹

硫曹肥料

●硫曹肥料を稲作に用ゆれは第一ニ米質を宜しくし且つ頗る收穫を增すべし一反歩ニ付五六斗より一石二三斗を增す之を舊肥料を用ひたるものニ比すれは見掛も遙に宜しく目方も重く土用を越して蟲附稀なり舊肥料を用ひたるものは之に反したとへ見掛は異ならざるも米質惡しく又籾の收穫は同じくとも玄米となして一反歩三斗以上の相違あり之を舂きて白米となすに硫曹を用ひたる一分は舂減尠なく飯ニ炊くに頗る炊殖すべし（例之は舊肥料の米は水一升米一升なるに硫曹の分は米一升ニ水一升二合ならでは飯に適せず即二割以上炊殖の相違あり）●硫曹肥料を用ゆる農家は能々以上の事柄に注意し之を實驗して其效用の偉大なるニ驚くべし●輸出米は硫曹肥料を用ひたるものならざるべからず然らざれば有羊熱帶地方通過の際多く腐融すべし●第一（過燐酸）を稲作に用ゆるニは一反歩に三貫目より五貫目迄を舊肥料（大豆粕、油滓、堆肥、廐肥等）に混交使用すべし●硫曹肥料のみ施すなれは第八號を最も適當とす一反歩に十貫目乃至十五貫目を二回に分施すべし（堆肥は何れにも施すを宜しとす）●硫曹肥料は藍、煙草、薄荷麻、蘭其他陸稲、粟、砂糖黍、桑幷野菜物、菓物等に施して其效實ニ驚くべきものあり●第五回勸業博覽會ニ硫曹肥料を用ひたる農產物を出品し名譽金賞牌を得たるものには金參百圓づゝ、銀賞牌には金百圓づゝ、一等賞牌ニは金五拾圓づゝ、二等賞牌には金貳拾圓づゝ、三等賞牌には金拾圓づゝを贈呈すべし●第八回關西府縣聯合共進會に出品せる農產物の內第一等賞を得たる香川縣の裸麥及德島縣の葉藍は何れも硫曹肥料を使用したるものなれは會社は香川縣の近藤太郎氏へ金百圓を德島縣仁井輝藏氏へ銀盃（三ッ重）壹組を贈呈せり●硫曹肥料の明細幷に見本等は御申越次第贈呈すべし

大阪西區西野下之町

大阪硫曹株式會社

特電話西四一九番

Chaerocampa oldenlandii Fab. (Sesuji-suzume)

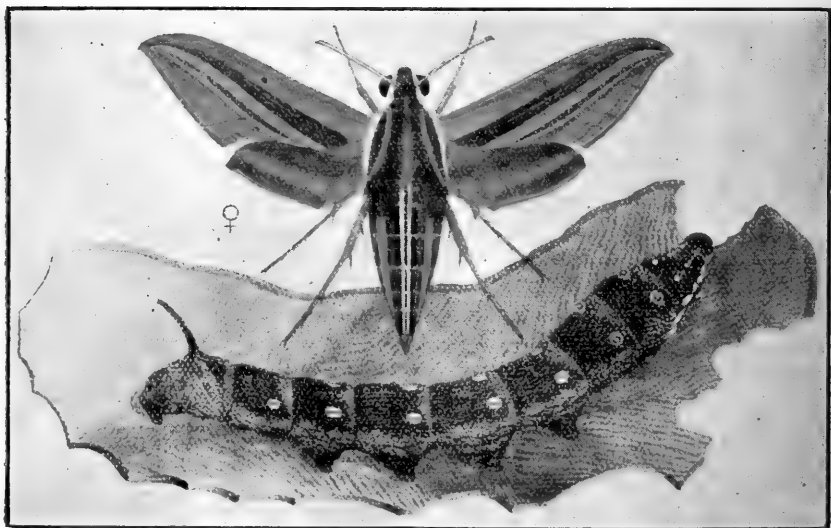
By K. Nagano.

Closely allied to C. japonica. Forewings grey-browu with greenish; a black discal dot; a yellowish-grey fascia from middle of dorsum to apex, preceded by blackish stripes and followed by blackish and yellowish-grey stripes. Hindwings blackish-brown; a wide yellowish-grey subterminal fascia. Expanse 68–74 mm. Head and thorax greenish-brown, suffused yellowish-brown with whitish border. Abdomen greenish-brown with two silvery stripes on dorsal.

Kiusiu, Shikoku, Honsiu, Yezo. May, June, July. Larva black or dark greenish-brown, partly purplish; anterior edges of 4-11 seg. yellow; a subdorsal series of yellow and white spots on 1-3 seg., and 4, 5 seg. with round black spots encircled with yellow, and 6-10 seg. with round spots mixed with red, black, pale blue and yellow. Horn black, apex white: on Colocasia antiquarum, Pinellia tuberifera, etc. July to September.

昆蟲世界

（明治三十六年三月十五日發行）　第七卷第六拾七號　（毎月一回十五日發行）

（明治三十年九月十日內務省許可　明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

◉岐阜縣昆蟲學會員に急告

一本月廿八日を以て、名和昆蟲研究所出身者の同窓會を大坂市に開催に付、本會員は博覽會出品の昆蟲標本參觀かたく可成御繰合せ同窓會ゟ御出席相成候樣致度候

一本會の爲め一方ならず盡力被下候特別會員長野菊次郎君、來月初旬東京市に轉任に付、四月の例會席上を以て、別意を表し度候間、同日は遲參なく御來會相成度候

右二件御注意まで廣告致候也

三月十日　岐阜縣昆蟲學會幹事

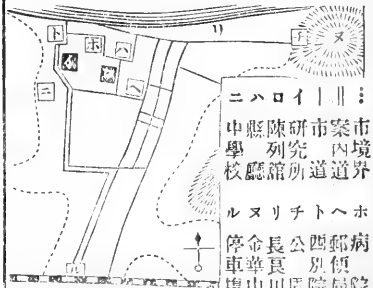
◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條ゟ依り晴雨に關はらず、毎月第一土曜日午後一時より、岐阜市京町名和昆蟲研究所內に於て開く、本會員は不及申、何人も毎會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所內　岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會本年中の日並は左の如し

第五十二回月次會（四月四日）
第五十三回月次會（五月二日）
第五十四回月次會（六月六日）
第五十五回月次會（七月四日）
第五十六回月次會（八月一日）
第五十七回月次會（九月五日）
第五十八回月次會（十月三日）
第五十九回月次會（十一月七日）
第六十回月次會（十二月五日）

⋮ 市境界
‖ 案內道
｜ 市道
イ 研究所
ロ 陳列館
ハ 縣廳
ニ 中學校
ホ 病院
ヘ 郵便局
ト 西別院
チ 公園
リ 長良川
ヌ 金華山
ル 停車場

◉名和昆蟲研究所案內

當昆蟲研究所の位置は上圖の如くにて停車場より僅に十餘町養蟲室あり又新築の岐阜縣物產館構內には常設の昆蟲標本陳列館（五間に十五間）ありて標本器具數千点を陳列す有志諸君の來訪を俟つ

岐阜縣岐阜市京町　名和昆蟲研究所

◉本誌定價並廣告料

壹部　郵稅共　金拾錢　（見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す）

壹年分拾貳部郵稅共　金壹圓八錢

（注意）本誌は總て前金ゟ非れば發送せず　◉爲替拂渡局は岐阜郵便電信局　◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす

廣告料五號活字廿二字詰一行ゟ付金拾貳錢、三十行以上一行ゟ付き金拾錢とす

明治三十六年三月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二（岐阜縣岐阜市京町）
發行所　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二　發行者　名和梅吉
同縣揖斐郡鶯村大字公郷三番戶　編輯者　小森省作
同縣安八郡大垣町字郭百五十三番戶　印刷者　河田貞城

（大垣西濃印刷株式會社印刷）

Vol.VII. APRIL. 15TH, 1903. No.4.

THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE.
EDITED BY Y. NAWA.
GIFU, JAPAN.

（四月十五日發行）

（毎月一回十五日發行）

昆蟲世界

第六拾八號　（第七卷第四冊）

（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

（明治三十六年四月十五日發行）

目次（禁轉載）

PUBLISHED BY THE NAWA'S ENTOMOLOGICAL LABORATORY IN GIFU, JAPAN.

◉寄贈物件受領公告

一金貳圓也
一金壹圓也
一金壹圓也
一金壹圓也

一半身肖像
第三回全國害蟲驅除講習修業
第十四回全國害蟲驅除講習修業
第十五回全國害蟲驅除特別講習修業

一博覽會農業館昆蟲門寫眞三葉
一蝶摸樣付匙 一個
一蝶形額面 一面
一蝶摸樣陶器(香辛料入)一個
一昆蟲摸樣付箱(其他一品)
一蝶摸樣付筆筒 一個
一昆蟲摸樣封筒(其他四品)
一除蟲御札 數十葉
一新案捕蟲器 一個
一エゾヒグラシゼミ。エゾゼミ。
一ギフテフ其他數種(新潟縣岩船郡産)
一昆蟲摸樣付ブリキ皿 一個
一飛驒國産笹魚 貳筮
一モンキアゲハテフ其他各種、(鳥取縣産)
一ムラサキテフ 二頭
一昆蟲學教科書(石川博士著)

長野縣 星野仙之助君
富山縣 稻垣豐治郎君
長野縣 清水藏君
高知縣 吉本重鄉君
静岡縣 神村直三郎君
鳥取縣 岡野庫八郎君
島根縣 安達庸一君
香川縣 佐々木傳五郎君
山梨縣 依田常吉君
京都府 近保辰三郎君
鳥取縣 川崎作市君
香川縣 木内久松君
大分縣 染矢良佑君
新潟縣 山田益五郎君
新潟縣 飯田弘君
大阪市 由比昌太郎君
岐阜市 林正一君
岐阜市 高森勝治君
愛知縣 中村義上君
岐阜市 高橋喜之助君
大阪市 廣根至宣君
静岡縣 神村直三郎君
新潟縣 佐藤榮君
岐阜縣 森野仁右衛門君
鳥取縣 高橋直義君
岐阜縣 所喜久君
東京市 開成館

右寄贈相成候に付茲に芳名を掲げて其厚意を謝す

明治三十六年四月十二日

名和昆蟲研究所

◉岐阜縣昆蟲學會々員諸君に告ぐ

本會特別會員永澤小兵衛君斯學調査のため今同臺灣幷に清韓地方へ旅行の途に上られ候よ付席上別意を表し度候間第五十三回月次會(即はち五月二日)には可成御差繰遲參なく御來會相成度候

四月十四日

岐阜縣昆蟲學會幹事

小生儀在岐中は各位の御懇情を辱ふし感銘の至りよ奉存候且つ出發の際は御見送被下候段難有御禮申上候

四月十日

東京市本所區横網町一丁目十七番地中尾方

長野菊次郎

大博覽會出品標本に對する賞品贈與

第五回内國勸業博覽會に出品の昆蟲標本は、都合數百點の多きを算する趣あれば、隨ひて斯學よ稗益を與ふるもの亦少なからざる可し。當昆蟲研究所茲に觀る所あり、此等出品標本中、左の條に該當するもの五點若くは七點を選拔して、各々これに紀念の賞品を贈與し、その斯學界に規範たるの名譽を表彰するとともに、其功勞に對して一片の謝意を致さんとす。

一、紀念賞品は、名和昆蟲研究所證明の修業證書所持者の出品に限り之を贈與す。

一、紀念賞品は、博覽會審査の結果、最優等に位せる者のみに之を贈與す。但し、審査規程に入格せざるため、優等賞を受くること能はざるも、現品の優良さ認むべきもののある時は、特に之を拔擇することある可し。

一、雜誌「昆蟲世界」愛讀者中、卓絶の標本を出品し若くは優等賞を得たる時は、特に此規程を適用することある可し。

一、紀念賞品は、昆蟲學に關係を有する書籍若くは、名和昆蟲研究所の徽章を附したる工藝品たるべし。

竹節蟲の種類

◎岡田氏の採集寄贈に係る貝殼蟲種（續）

福岡縣　桑名伊之吉

明治三十五年九月、靜岡縣農事試驗場技手岡田忠男氏の寄送に係る、同氏の靜岡縣下に於て採集したる貝殼蟲は、九屬十五種にして、採集地は皆新なり。左に之を記載すると共に、岡田氏の厚意を鳴謝す。

一、杉のアスピヂヲタス（Aspidiotus cryptomeriae Kuwana）

托生植物　杉　採集地　靜岡市　採集者岡田氏

雌蟲の貝殼、通常長楕圓形にして、少しく腫起す、長さ一乃至二ミリあり、半透明にして灰白色を呈す蛻皮は少しく一側に扁し、第一蛻皮の環節は明なり。第二蛻皮は分泌物を以て包はれたり。

雌蟲、体軀は扁平廣楕圓形にして、淡黃色なり。臀板は深黃色にして、五群の圓形分泌孔を有す。其中央にある一群は四乃至五孔より成り、前側の一對は七乃至八孔より成り、后側の一對は四乃至六孔より成る。臀板の游離縁には、能く發達せる三對の扁長板あり。第一及び第二對の外側は、尖端に向ひて次第に狹ばまりたり。第三對は、他の二對に比して、甚だ小にして、少しく鋸齒を有し、且つ、外側は斜面をなす。棘は扁長板よりは餘り長からずして、其游離縁には鋸齒を存し、第一對扁長板の中央に二本第一と第二對との間に二本、第二と第三對との間に三本、第三對の上位なる臀板縁に通常七本あり。各扁長板の基部には、一個の刺毛あり。且つ、第三對扁長板の上位に二個の刺毛あり。

雄蟲の貝殼、雌蟲の貝殼に似て小なり。蛻皮は殆んど中央に位し、長さ約一ミリあり。

是より先き、岐阜縣・福岡縣等にて、採集せしことあり。英彦山地方にては、杉の若木を害すること多し

托生植物　モミジ
採集地　静岡縣久能山　採集者岡田氏

二、黒點貝殼蟲(Aspidiotus kelloggi Kuwana)

雌蟲の貝殼、貝殼は略ぼ圓形にして、少しく腫起す。暗褐色(或は赤褐又は灰色なり)にして、蛻皮は殆んど中央にあり。第一蛻皮のある部分は炭黒色にして、臍狀を成し、第二蛻皮は少し分泌物を以て包はれたり。直徑二乃至三ミリあり。

雌蟲、雌蟲の體軀は圓形にして、淡黄色なり。臀板は黄色にして、四群の圓形分泌孔を有す。其前側の一對は、十一乃至十七孔よりなり、后側の一對は、十二乃至十四孔よりなれり。臀板の游離縁にある、三對の扁長板は、能く發達して略ぼ同大なり。棘は扁長板よりは、短かくして鋸齒を有す。臀板の游離縁の兩側には、各六個の短長不同なる、六個の棍棒形なる成濃物(Thiekening of the body wall.)相平行して、内部に向ふて縦走せり。

此種は、明治三十三年の夏、記者が福岡縣下に始めて發見せし新種にして、其托生植物の名は之を知るによしなし。

三、サンホゼー貝殼蟲(Aspidiotus perniciosus Comstock.)

岡田氏の標本は、静岡縣農事試驗場の果園、及び、同縣下三島町に於て採集せしものにして、托生植物は共に苹果樹なり。

四、赤色貝殼蟲(Aspidiotus aurantii Mask.)

是より先き、本邦各地に發生するを認めたり。

托生植物　温州橘柑　紀州橘柑　採集者岡田氏
採集地　静岡縣濱名郡知波田村及び安部郡麻機村

五、黒色貝殼蟲(Aspidiotus duplex Ckll.)　托生植物 温州橘柑　採集者岡田氏　採集地 靜岡縣濱名郡知波田村

是より先き、本邦各地に其發生を認む。

六、(Aspidiotus duplex Var. paeoniae Ckll.)　托生植物 木犀　採集者岡田氏　採集地 靜岡縣安部郡大里村

前者の變種なれども、記者の意見にては、前者と全く別種となすも不可なかるべくと信ず。其前者と異なる主要の點は、圓形分泌孔にして、前者は四群を有し、この變種は、單に二群を存す、而してデアスピデー分類中、圓形分泌孔は、最も、重要のものとされたり。

七、櫻の貝殼蟲(Diaspis pentagona Tay.)　托生植物 桃　採集者岡田氏　採集地 靜岡縣安部郡豊田村

是より先き、本邦各地にて、採集せしことあり。

八、バランの貝殼蟲(Chionaspis aspidistrae Signoret)

此種は、温暖室、及び、盆栽類に多く寄生し、大害を加ふるものにして、雌蟲の貝殼は通常茶褐色、若くば、暗褐色をなし、雄蟲の貝殼は白色にして細長し。岡田氏の寄送に係る標本は、雌蟲のみにして、萬年青に寄生せり。氏は、之を縣下安部郡大里村にて採集せしと云ふ。東京、横濱其他の植木屋に於て親しく之を見受けたり。

九、ミカンのカイヲナスピス(Chionaspis minor Mask.)　托生植物 紀州橘柑　採集者岡田氏　採集地 靜岡縣濱名郡知波田村

雌蟲の貝殼は、暗褐色にして、略ぼ牡蠣の狀をなすと雖ども、後端の幅甚だ廣し。雄蟲の貝殼は、細長にして白色を呈し、多く葉の裏面に群棲す。

是より先き、九州各地及紀州に於て、同植物に發見せり。

十、マキの貝殼蟲(Fiorinia fioriniae var. japonica Kuwa.)　托生植物 マキ　採集者岡田氏　採集地 靜岡縣安部郡大里村

雌蟲の貝殼は、褐色にして、少しく腫起し、殼緣に近づくに從ひ、半透明なり。殼緣は略ぼ平行にして外貌は蜜柑の長形貝殼蟲に似たり。
是より先き、本邦各地に於て、同植物に之を認めたり。

十一、(Parlatoria sp.)
標本の少さを以て、種類を確むること能はず。

十二、オーセジア(Orthezia sp.)
一頭の標本は岡田氏より送られたり。氏は之を、靜岡縣下小山村にて、ミゾタゼに發見したりと云ふ。
オーセジア屬の特性、雌蟲は、八環節より成る。觸角を有し、體軀は石灰質の板狀分泌物を以て包はれたり。肛門環には六個の粗毛を有す。雄蟲は、複眼を有せり。
此屬は、熱帶地方より生ずるシソ、タゼの類に多く寄生し、溫暖室の大害蟲なり。本邦に產する種類にては、未だ學名の知られたるものなし。

十三、イセリア(Icyria sp.)
柑橘樹に於て採集せしもの一頭(幼蟲)あれば、種名を知るに由なし。

十四、モノフレブス(Monophlebus sp.)
乾燥せる一頭の標本なれば、種名を確むること能はず。托生植物は柑橘なり。

十五、龜甲粉蟲(Pulrineria aurantii Ckll.)

托生植物　蜜柑　採集者岡田氏
採集地　靜岡縣安部郡大里村

（完）

◎竹節蟲科に就て（第四版圖參看）

名和昆蟲研究所長　名和靖

竹節蟲(七節蟲)は直翅目に屬するものにて、目下當所、所藏の標品は四種にして各種とも異樣の形狀を

なせり、是れ自然淘汰の結果として恰も竹の節の如き有様なるを以て此の名を得たり、又擬態としての例証には常に是を用ひらるゝを以て有名なり。本邦昔時よりアオドカケと稱し一種の有毒蟲として是に觸るゝことを嚴禁せしも全く無毒蟲に屬せり。該蟲は蟷螂科に近似するも彼は食肉蟲にして有益蟲なるも、是は食葉蟲にして有害蟲に屬す。今竹節蟲科の四種に就て左に畧述せんとす。

(1)竹節蟲(Lonchodes niponensis.)ナナフシムシは体の長さ凡そ三寸にして全体褐色をなせり。足部を收めて細長形を現せば恰も枯枝狀と成りて容易に見出し難し。岐阜を始め岡山、高知其他にも産す。

(2)枝竹節蟲(Lonchodes stomphax.)エダナナフシムシは体の長さ凡そ二寸五分にして体は帶赤褐色。足部は緑色なり。体は前種よりも細くして觸角は寧ろ長し。岐阜に於て稀に得る所なり。

(3)鋭刺竹節蟲(Acanthoderus japonicus.)トゲナナフシムシは体の長さ凡そ二寸にして全体褐色。胸部の各所より針狀突起を生せり、ナナフシムシに比して体形太く觸角又長し。岐阜縣霞間ヶ谷の鬱叢たる女竹の生ずる所に多く、又高知縣にも産す。

(4)飛揚竹節蟲(Necroscia chloris.)トビナナフシムシは体の長さ一寸五分にして全体緑色、觸角特に長し、前の三種は四翅共に退化して痕跡をも止めざるも該種は然らず、只上翅は退化するも痕跡を有し下翅は發育して飛揚に適す。其色は淡赤色なれども上端の部分は緑色を帶ぶるを以て一見恰も上翅の如し

岐阜、滋賀、愛知、靜岡、神奈川等の諸縣に産す。

以上四種の竹節蟲の記事は極めて簡單なるも圖版に對照せば恐くは其種を知り得るならん。幸に地方の諸君其産地を報せざらんことを。尚又竹節蟲科に屬するものは決して此四種に止まらざれば特に注意して新種の發見あらんことを深く希望して止まざるなり。

◎動物に對する森林の保護

岐阜中學校　岸部易太郎

余、一昨年軍馬補充部本部の命に依り、米國ジヤツチヨウ氏著森林栽培法一册を翻譯せしが、今、其中の動物と森林とに關する部分を摘錄して左に揭ぐ。

森林保護論は、森林及林產物の危害を被むる一切の物件、及、其災害の猛烈を除去し、又は、之を減少せしめんが爲めに、常に採るへき方法手段を包含す。而して此等の保護策なるものは即ち動物、若くは元行力に對して、豫め之に備ふる所のものなり。

（一）　動物と森林との關係

森林の安寧を增進する多數の有用なる動物あり。又時期に依りて有益ともあり、有害ともなりて、其價値の疑はしきものあり。又、其他の種類ありて、其生存は常に森林の生長に妨害あるものあり。第二の即ち疑はしき動物に至りては、人往々其被害を過算して、之を防禦せんとすることあり。然れども、此動物は、害を爲すこと極めて少しと雖とも、其性質、習慣の不明なるよりして、人、之を撲滅せんとするものなれば、從つて偏見妄說あり。

（イ）　有益動物

哺乳動物中、重に害蟲（蚜蟲、毛蟲、蝶、蛹及卵）を食して生活せる肉食動物あり。即ち、蝙蝠、鼩鼱の若干種、鼹鼠、蝟或は箭猪及臭獸とす。鼹鼠の穴居性は、時として森林養成場に在ては、有害なることありと雖とも、普通の森林に於ては却て大利益のものたるなり。是れ、鼹鼠は、土地を散解し、土壤をして濕氣と肥壤的物質とを收受把持するに適せしむるものなればあり。

黄鼬、鼬鼠の若干種、狐、ポール、キャット及貛は、又極めて有益なる動物なり。是等の動物は、重に鼷鼠及多數の害蟲を食するものなれば、之を保存せざるへからず。斯の如く是等の動物は、單に、鼷鼠と昆蟲のみを食して生活するものなれば、特に、其幼仔を保存せざるべからず。

鳥類は、森林の貴重なる要素として、其緊要なること、極めて大なり。若干の大なる鳥類、例せば鷲、禿鷲屬、隼、鷹、角鴟、レイヴンの如きを除きては、概して樹木の健全なる生長に資するものなり。小鳥に至つては、常に樹木の生育に有害なる敵を捕ふるものなれば、成るべく其繁殖を力めざるべからず故に小鳥は、之を保護すべきものたるのみならず、其生育期間は、其重なる敵たる、猫及栗鼠を防禦して保護せざるべからず、椋鳥、啄木鳥、一切のツグミ屬、ブラック、バルド、カスヒドリ、紫燕、黄鳥シイダー、バルド、キャット、バルド、レッド、アイド、ヴイレオ、及此種のものは、殊に有益なるを證せり。是等の鳥類は、昆蟲を食するのみならず、冬期白雪の地上に積もるに當りて、力めて樹皮、枝條中に存在する蟲卵を求るものなり。

囀鳥は、皆昆蟲を食するものなれば、森林家は殊に之を保護し、且つ灌木若くは空窩ある樹木の存在する、或一定の場所を其儘になし置くべし、是れ鳥類の巣を作るに、最も好都合なればなり。若し斯の如き便利なき場合には、函を樹間に懸けて、鳥類をして巣を作り、其雛を養育するに便ならしむべし。又普通の森林地に散在する所の野生苹果、櫻、李、梨の如き果樹は、之を放置して除去せさるを可とす。是れ果樹は、鳥類が昆蟲、毛蟲、及蟲卵を捕獲し得ざる時に於て、益鳥を養ふ助けとなる者なればなり

各種の蜥蜴、蛇の大半、ブラインド、ウオーム、蛙、蟾蜍も亦、害蟲を食するのみならず、多くは鼠、鼷鼠、其他小齧齒動物を捕ふるものなれば、又有益なる動物なり。

昆蟲類中にも肉食的にして重に自己種屬の小害蟲を食するもの多し左の甲蟲は此の種類に屬する者なり

(一)大甲蟲カラソマ、カリダム及カラソマ、スクラテートル、前者は概ね夜間に總ての軟體幼蟲を捕へ、後者は晝間に之を捕へて食するなり。

(二)伸節土甲蟲パシマカス、エロンゲイタスも亦一切の軟體幼蟲を食するものなり。

(三)斑蝥科の甲蟲はタイガー、ビートルと稱せらるゝものなり此甲蟲は穴に捿み常に其穴の項上に在つて昆蟲の來るを待ち之を捕ふれば穴中に曳き行きて徐に之を食するなり。

(四)最も廣く知られて益蟲と認めらるゝ所の甲蟲は瓢蟲即ちユッシネリデーあり此甲蟲は無聲に害蟲驅除の働を爲すものにして少時間に之を食するてと無數あり。

益蟲は啻に甲蟲のみに止らず膜翅類中に尙多數の益蟲あり殊に注意するの價値あり。

(一)蜻蛉即ちアッダーボールト、フライ(リベリユウラ)、蟻及細腰蠅、此後の二者は其初生に於て既に肉食的にして他の昆蟲を食し又其卵をも食するなり。

(二)大黄蜂は終日幼蟲と蛞蝓との捜索に忙はしく之を捕りて以て其仔を養ふものあり。

(三)又他に有害なる毛蟲の蛹に卵を附着し是が孵化したる時に其毛蟲を食する有益なるものあり此種類(寄生動物)に屬するものはヒメバチ(テンスレドウ)にして若し一時を隔てゝ蠅と相並ぶれば微細の点に至るまで其形狀類似して殆んど肉眼を以て鑑別し得べからざる程なり。大なる種類のものは蛹毎に一箇の卵を附着し小なるものは一箇の蛹に悉く其卵を附着す。卵は直ちに孵化して幼蟲となり忽ち其蛹に侵蝕して將來有害なる蛾となるへきものを食ひ盡すなり。

(ロ)疑はしき動物

鳥類中何れが益鳥にして何れが害鳥なりや之を確知し居らざるべからざる人にして往々鳥類の動の善惡に關し誤謬をなすことあり、殊に左の鳥類に關して然りとなす。

カケス、此鳥は春、有益なる小鳥の卵を求り且つ大に好んで其肉を食す。然れとも秋に至れは力めて槲(くぬぎ)の實を集め處々土中に埋めて冬期中の必要に供ふるに足るべき食を貯藏するものなるが幸に此鳥は陰匿したる場所の大半を忘却するが故に埋められたる種實は發芽して良幼樹を發生するに至るあり。

雀、此鳥に就きては近來大に其有害を訴ふるを聞くことなるが許多の点より見れば林產物、園產物に有害なるものなり。是れ此鳥は重に果實を食するものなればあり。然れとも冬期に於ては樹皮より昆蟲の卵を啄みて之を食するが故に最も有益なるものなり。春及初夏の生產期中は其仔を養はんが爲に多數の昆蟲を殺し殊に其仔は發生後の初一週間は昆蟲の外何ものをも食せざるものなり然れとも銃若くは捕獲器を以て其過度の繁殖を防遏せざるべからず。

(八)有害動物

熊、狼、狗、野猫等の如き肉食動物は貴重なる野獸又は森林生長の增進に有用なる動物を食するものなれば全然之を剿滅せざるへからず。

哺乳動物中齧齒類は最も有害なる動物にして殊に海狸を甚しとす齧齒類中直徑十二吋の樹木を一夜內に嚙斷し得るものは獨り此海狸あるのみ紐育州に於ては現今殆んど殄滅せりと雖ともアヂロンダック地方に於ける溪流小河所謂海狸澤に於ては今尙歷然として海狸の慘害を見るを得るなり(中畧)鼷鼠は森林の生長に極めて有害なり鼷鼠は種實を食し幼樹の嫩き皮を咬み又苗木を嚙斷し多葉の樹木は實に彼等亂暴の重なる目的物にして又松柏の類をも剩さゞるなり殊に松柏の森林が草の繁茂せる平野に圍繞せられ居

るに當りては其慘害を及ぼすこと甚しきものあり。鼷鼠は冬期中此草の下に潜伏し居りて此處より近隣の森林に向つて求食的遠征をなすものなり故に秋晩く幼樹間及其周圍に於ける草を成るへく短く刈り以て鼷鼠が幼樹の近隣に本營を搆ふるを防ぐべし若し既に害を被りたらば其周圍を嚙まれたる樹木をば春早く地より上に切斷し以て幼芽の發生を促すへし。勿論周圍を嚙まれたる樹木と雖とも實際發芽するものなれとも樹液が樹木に循環すること能はざるが故に其活動衰へ爲めに次期の間に枯死するに至るなり。若し鼷鼠が大に增加して一種の時疫となるが如きことあらば動物界に於ける鼷鼠の敵を飼養し又は被害の森林中に數々豚其他の家畜を驅り彼等をして騷擾せしむるより他に良法あることなし（中畧）苟くも森林家たるものは森林樹木に有害なる昆蟲の習慣と生活とに關して最も細密周到なる注意を爲さゝるべからず、何となれば是等の事實を正確に識るにあらざれば此小動物の恐るべき暴害を沮遏し若くは被害の程度を減少すること能はざればなり。蓋し昆蟲の習慣は極めて多樣的なり二、三月に發生するものあり夏、發生するものあり。又は秋に至りて發生するものありて一樣ならず。又一年間に其發達の四段階（卵、幼蟲、蛹、成蟲）を經過するものあり或は數年を經て完全なる發育をなすものあり又は一季期に數回孵化するものあり且つ昆蟲は其發達の段階中何れの狀態に於て樹木を害するものなるや之を知ること亦趣味あり、通例昆蟲は其幼蟲たるの際に於て葉と小條とを食して害を爲すものあり、時としては羽翼の具りたる昆蟲殊に許多の甲蟲が斯の如き害を爲すことあり、一二の昆蟲が殊に如何なる樹木に害をなすものなるや之を觀察するも亦肝要なり。一種の樹木に限るあり數種の樹木を害するあり就中最も有害なるは松柏類と厚葉樹とを食するものなりとす。又葉のみ食するものあり芽を食するものあり樹木の內部に生活するものあり木質部と樹皮との間に住むものあり。又常に群をなして出つるものあり外に

出でざるものあり然るに其出づるや非常の大群をなすことあり或は動作遲緩にして單に歩むものあり又は飛びて忽ち森林の大部分を覆ふものあり。

是に依りて之を見れば必ずや嚴正なる觀察を以て時期に應じ場處に應じて昆蟲の暴害を制し且つ之が蔓延を防禦すべき方法手段を採らざるべからず。而して之が好結果を奏すべき最有効なる方法は害蟲の自然の敵を蕃殖保護するのみならず進んで之を飼養するに在り、有益動物と有害動物との間に於ける比例が動物界に維持せらるゝは有害動物を殺戮する有益動物の蕃殖如何に因るものなり。蓋し此法則は之を昆蟲に適用するより明瞭なるはなし、多數の有益動物は有害動物を殺戮するに依りて眞に人類の恩惠者として貴重すべきものなりとす。

尚蟲害防禦策としては斷株、乾燥せる樹木、樹枝、伐採せる木材を移去し。又移去し能はざる木材は其樹皮を剝脫し以て昆蟲の發生所を打破するに在りとす、蟲害防壓の最も有効なる方法殊に天然林に於ける有効法は組織的整理法を應用することと是れなり、之を應用するに第一着手とすべきは正當に定期的に數回疏伐を行ふことなりとす此疏伐に依りて樹木は充分有力强壯なる生長を爲すに至る。而して斯の如き樹木に對しては有害なる昆蟲も甚だしき害を爲し能はざるものなり。

以上列擧せる被害の蔓延を防禦すべき方法を勵行せば充分昆蟲の害を避くるに難からざるなり。苟くも此目的の爲めには被害の樹皮を剝取して之を燒棄し枯木は之を切り若し移去すること能はざらば之を燒棄すべし。又斷株は松柏類の斷株と雖とも悉く其樹皮を剝きて他に移すか若くば燒棄すべし何となれば斷株殊に二年前に倒伐せられたる樹木の斷株は概ね總べて樹木を穿食する害蟲の巣窟となるを以て必ず之を根絶せざるべからざればなり。然れとも若し之を大仕掛に行へば其費用鮮少ならざるが故に唯其樹

皮を剝取すべし以て同一の効果を奏するを得是れ樹皮を剝きたる斷株は有害昆蟲の巣窟とならざれば也森林家にして有害昆蟲の習慣を細心觀察したるものは尙進んで相當の場所に所謂誘陷木なるものを置きて宜しく其林地の被害を避くべし、害蟲の初めて群飛するに至らば森林の諸處に健全なる生木殊に松柏類を倒伐し樹皮を剝取せず又枝をも除去することなく地に放棄し置くべし、昆蟲は好んで此新に倒伐したる樹木に附着するものなれば蟲卵の孵化するに先だち其樹木を移去し若くば燒燼すれば害蟲子孫の繁殖に依りて受くる所の一切の危險を避くることを得るなり。然れども森林家たるものは力めて害蟲の習慣を確知せざるべからず何となれば之を確知するにあらずんば夫の所謂誘陷木を移去燒棄すへき最も適當の時期を確定すること能はざればなり。

合衆國昆蟲學取調委員會は一千八百八十一年其報告第七號中に森林及日避け樹木に有害なる昆蟲に關し極めて興味ある有益なる論文を掲載せり。之に依りて吾人は合衆國に於て實に昆蟲の多數にして慘害を逞しふするを知るなり、若しそれ深く之を知らんと欲するものは宜しく前記の冊子を參照すへし。著者はドクトル、エイ、エス、パックハード氏なり。

前記の報告に據れば槲は二百十四種の昆蟲に攻擊せられ楡は四十三種、ヒッコリーは八十七種、黑胡桃は十一種、バッター、ナットは十八種、栗は十八種、ローカストは二十種、槭は三十七種、樺は十九種栂は十五種、チユーリップ樹は九種、松柏は百二種、唐檜は二十四種の昆蟲に攻擊せらるゝものとす。此報告には是等の昆蟲を列擧說明するの外是等の害蟲を驅除するに應用すべき防禦策の事項をも記述する所あり然れども此驅除策は廣濶なる森林に於ては費用多く勞力を要することも大なれば普通の森林家は能く之を應用する者極めて稀なるべし、若し森林中の大區域が昆蟲に占領せられ居らば吾人は其中

尙は何れの部分を救濟し得べきや先づ之を決定し然る後其蟲害を抑壓すへき手段を施して餘す所なきを要す。然れども若し非常に蔓延し來りて人力も到底之を施すに由なくんば被害の樹木を切斷せざるべからず、若し實際に之を切斷すること能はざる場合には火把にて昆蟲の驅除を計らざるべからず但し被害區域外に火の延燒せざる樣適當の防備をなすべし、斯く火を以て昆蟲及蟲卵を燼滅したらば後ち直ちに被害の面積を再植し成るべく速かに森林の空隙を充實し風霜日光の侵入を防ぐべし。

紐育州に於ける森林樹木の種類が其數歐洲に於ける種類に對し大に超過すると同一比例にて森林に有害なる昆蟲の數も亦歐洲より遙に多數なり。然れども紐育州にて昆蟲が森林の生長に及ぼす有害なる影響は我が天然林に生長する樹木の雜駁不同なると我が森林の濶大なるとに因りて今日に至るまで其被害歐州の如く一般ならざりしなり、蓋し斯の如き天然林に於ては昆蟲は恐らく其已れの欲する一定の樹木に在りて靜に生活するものなるべく、又た斯の如き廣濶なる森林に於ては數種の昆蟲が或る一箇の樹木に及ぼす慘害の或は顯著ならざるものあらん。而して森林樹木の雜駁不同なると森林の濶大なると此二者の事情は同時に有害昆蟲の自然の敵を多數繁殖せしむる好機會とはなれり然るにアジロンダック地方の森林のみならず又他州に於ても貴重なる森林區域が漸次枯死しつゝあるを訴ふること盛なるが故に吾人は此蟲害の件に就きて等閑不注意なるへからざるなり、吾人は嚴に是等小動物の動作を觀察し其驅除に資することは總て之を等閑に附すへきにあらず。而して我が森林の濶大なることに就き精細なる觀察家が旣に次期の未來は森林の豐富を誇らんよりは却つて森林稀少の不平を聞くの時なりと言へたるを考察し來れば吾人は害蟲の驅除を以て焦眉の急務なりとせざるべからず。而して觀察家の言へるが如く事玆に至らんか森林樹木の多種類あることも亦過去の夢とならんのみ。

左に掲ぐるは去三月十日より廿八日迄當昆蟲研究所の開催せる第拾五回全國害蟲驅除特別講習會に於て其會員のなしたる五分時演說の一斑なり紙面の都合により僅に左の五名を本欄に掲ぐ。

◎第拾五回全國害蟲驅除特別講習會員の五分時演說

（一）物の見解

德島縣　中瀨陸太郎

物の見解は、幾多の方面よりせねばなりませぬ。彼の圓體と申す處のものは、存外内方より見れば、窪みたるものではありませぬか。又良港と申す陸地の突き出でたるものも、實は海の突出せるものでありませう。諸君が上下と申さるゝ言葉も、廣き宇宙より見ますれば、左樣には云へないことになります。野に咲き出たる薔薇は、美しとのみ思ひなば必ぞ棘にさゝれます。心して見られよ、極めて美麗なるこのはてふも、其翅裏は枯葉と異りませぬ。茲に一錢銅貨とうんかとを比較せば、其大小に於ては迚も同日の比ではありませぬ。然るに、之を捨て置かんか、一は一錢のみの損であるが、一は幾千万圓の損になるか豫め知れませせぬ。かゝる見地より、蟷螂と蜻蛉とを御覽なさい、彼は其鎌の如きものを振り翳し首は長く、腹太くして醜く、是れは翅の美麗にして、しかも飛翔輕快に、只何となく人にすかれ、彼れは醜なるが爲めに無慈悲の手に斃れ、是れは美なるが爲めに弄殺さるゝではありませぬか。されど（蟷螂よ、天が汝に與へたる醜且つ殺伐なる態を恨む勿れ。蜻蛉よ、汝は邦人が女子を愚弄し、遂に美人落命などゝ口きく事に酷似するの甚しさよ。さはいへ、社會は汝等を幾年までも斯くはせしめじ、汝等は遠からず活計歡樂の遊に耽るの時は必ず來らん）、と天に代つて推理するものは人のみである。果して然らば、我等が社會に對する務は餘程重いではせりませぬか。

（二）新潟縣に於ける害蟲驅除の根本的改良

新潟縣　山田益五郎

新潟縣に於ける害蟲驅除は、先づ農業組織の根本的改革よりせなければ、完全には出來ないのであります。新潟縣に於ての害蟲驅除の手段方法は、遺憾ながら幼稚なものでありまして、好成績を擧ぐること

は期して望まれないので御座います。彼の明治三十一年に於て、浮塵子の爲めに空前の惨狀を極めました際に、當局者は、日に夜を繼ぎて奔走し、之れが驅除に盡瘁せられ其他政府に於ては國庫より補助をなし、縣農會郡農會も共に極力務められたけれども、遂に其効果を完ふせなかつたのであります。此の如き有樣ゆへ頑固なる農民は到底驅除などは行はるべき筈がないとして、放棄するに至つたのであります。之れを早計にも測斷を下さしめたなれば、當局者なるものが其順序を無視したと云ふもので、恰も乞食に向て貯蓄を求むる如きもので御座います。夫れ驅除の完全に出來ないと云ふは、畢竟農民の位置の揚らないと云ふ事が大原因であります。何となれば、元來吾が縣下は、各所に石油事業が盛んで、農民の多數は漸次之れに吸收されつゝある有樣で、從來、宛然親子の如き密接なる關係を有して居りました地主と小作人とは、追々疎遠となり、即ち地主は商工業に手を出して失敗し、其結果農業資本は商工業者の手に入ると共に彼の嫌ふべき土地兼併の現象が益々多くなつたから、小作人は到底獨立の見込がなくなり、遂に祖先傳來の本城をも抛ち、一身を他方に投ずる機に至つたのである。斯の如く農民は、漸々郷里を去りて都會に集まるが故に、都會は益々繁盛し、其反動として農業萎靡の趨勢は彌や益しに強大となつたので御座います。曾て横井農學博士の申された都會熱なる現象は、此所に於て顯はれ來たのであります、斯樣に農界が不振の逆境に陷りし事は、我が新潟縣の爲め、否日本帝國の爲めに嘆息せなければならんことであります。依て之れが救濟策として、私は害蟲驅除に依りて今迄二石取れた處かふ、二石五斗乃至三石の收穫を得んとするには、先づ農業の根本的より改良せなければならぬと存じます。要するに、今日の處では、一方からは地主と小作人との關係を、往昔の如く圓滑ならしむる政策を講究すると同時に、他の方面より農事改良の消極的唯一の方法たる、害蟲の思想を農家に普及せしめ、驅除の實行を貫徹して以て兩々相俟ち、茲に始めて農業の隆盛を見るに至ることは、火を見るよりも尙ほ明かなることゝ存じます。聊か平素の持論の一端を申上げて、五分間演説の責を塞ぎます。

(三)浮塵子共同驅除の實驗談

大分縣　染矢良佑

私は浮塵子共同驅除の實驗談を致しまして、五分間演説の責を塞ふと存じます。よつて順序上、苗代驅除の模樣を御話して、其れより本田に移ろうと存じます。そこで驅除委員が浮塵子の發生を認めましたときは、先づ一着手として、苗代共同驅除の前日早朝、二三歩の小區域に注油驅除の試驗をなし、以て全苗代反別に使用する總油量を確定し、直ちに共同購入を致しまそ。而して苗代地主に對しては、明

早朝苗代田の共同驅除を致すから、本夜中は水の加減、即ち只僅かに油の水面に浮び得るを程度とすべき旨を通告し、尚女笹の繁茂せるもの各一握宛を持參すべき樣に傳へます。翌日に至り定時限に集合しますれば、其中より年長にして監督者たるべき適任のもの、及び注意周到で注油方に熟練なるもの若干名を撰定致します。是に於て驅除委員は注油者に油量を指示し、直ちに水上より順次短冊形の間路に注油せしめ、他の者には短冊形の方向に横隊に列ばしめ、適當なる間隔を採り、遲速なき樣歩調を揃へ、手にせる竹笹を極めて強く左右に振り、可成苗に觸れざる樣に致しまして、全たく其の竹を振りて起る所の風力を以て、害蟲を通路上の水面に掃ひ落すのであります。而して監督者は、横隊の後方に在りて其動作を監視し、不完全の點あれば直ちに警告を致します。以上の如く施行しましたが、注油の適量なりしと、一方面より他方面に整頓前進するから、彼の害蟲は遁避すべき活路を失ひ悉く溺死致しました以上は即ち苗代田に於て行つた方法でありますが、是れより本田に就ての摸樣を御話し致しませう。本田に於ても驅蟲劑の共同購入とか、監督者注油者の撰定抔は、苗代驅除の時と同樣でありますが、只少し異なる所は、苗代と違ひ面積が廣くありますから、多數の人員を要します、故に、自然混雜を來し易くなります。依て一見其組々を明瞭ならしむるため、赤、青等の片布を笠上に点附し、監督者は責任を負んで、決して間隔に不同を來たし、或は苗を踏み込む等のことなき樣監督を嚴重にしました。そこで注油者先づ竹筒製の注油器を以て注油を始め、稍暫くして注油の一面に波及しますれば、竹笹を持てるもの、適當の間隔を採り横隊となり、輕く稻葉を掃ひ浮塵子を水面に落すのであります。右樣致しますれば、單獨の驅除よりも、割合に僅少の時間にて比較的綿密なる驅除を行ふことを得、成績も餘程良好で御座りました。右御參考の一助とも相成りますれば仕合と存じます。

（四）千葉縣下に於る害蟲の種類より之が驅除法に及ぶ　千葉縣　行木　勝

私は只今御照會下されました、千葉縣の行木であります。今晩は、千葉縣下に於ける害蟲の種類と云ふことに付て少しく御話し致さうと存じます。吾が千葉縣下に於ける害蟲は、大別して二種として一を社會的害蟲一を作物害蟲と致します。而して吾縣下に害を及ぼすことの大なるものは、蟲類即ち六足蟲の害にあらずして、社會的害蟲即ち二本足の高等動物の害であります。此社會的害蟲は、何れの方面に害あるかと云へば、農作物を害するものにあらずして、農作物を耕作する者、且つは熱心に農事に從事する農民あり、漸く改良に向ひたる農家をして、其方針を誤まらしむるのみならず、種々惡戲をなして其改

良驅除の發達を防害します。是等の農民は多く頑固で智識が乏しいから、之れを驅除するには正當の道を以て行ふことが出來ませぬので、縣當局者は大に苦慮して、協議の結果法律第十七號を應用して縣令を發布することになりました。故に昨年は直に實施を試みましたよ、大に好結果を得ました、然れども之れのみでは滿足が出來ませぬ。尚ほ作物の害蟲、即ち螟蟲、浮塵子、椿象等種々あります。是等の蟲は、採卵に、捕蟲網に、誘蛾燈に種々の手段、器械を以て驅除に從事せしめて、幾分其効を奏しました以上は何れも行政の力を借りて行ひましたので、未だ完全と云ふことが出來ませぬ。即ち今日迄は、形式的の驅除でありました。然らば今後完全に此道を行ふの策如何と云ふに、即ち農民に昆蟲志想を有せしむるのが上策であらうと存じます。左樣致しますれば、農民は害蟲の恐るべきことを知り、天然に發生する抔といふ迷信を破りて、眞に驅除を行ふ樣になりませう。此責任こそ吾人が兩肩に荷ひつゝあるのであるから、歸國后は、夫々熱心に斯學の普及を計らねばならぬと存じます。

(五)鹿兒島縣下に於ける農事上の摸樣

鹿兒島縣　河野綾橋

我が鹿兒島縣下は、他縣に比して一般の事業後れまして、漸く今日に至り、昔日の夢を破り、稍々改良の端緒を開かんとする有樣であります。然し乍ら農事に於ては、改良の途未だ開けず舊習を守り一向發達の形跡がありませぬ。然るに近頃縣に農事試驗場及び農會を設立せられ、之れが主催となりて農事講習會とか、農事講話會などを開き、改良の途を講ぜられますけれども、愚昧なる農民は毫も耳を傾けず失張舊來の方法を固守し、先祖代々の方法に從へば間違はないと頑として之れに從はないものが多いのであります。然し一方には、農事試驗場なり、農會なりが摸範農場を開設して成績を發表し、確かな証跡を示しますから、少しく智識ある農民は、其實を悟り幾分か信ずる樣になりました。然しながら害蟲驅除と云ふことになりますると、種々なる迷信を抱き、中々行ひませぬので、當局者は大に苦心して居らるゝ有樣であります。明治三十年度以來漸く浮塵子發生の場合に注油する位で、採卵法とか成蟲を捕獲する如き方法は更に行ひませぬ。偶々之れを教へますれば、反言して蟲の發生は歲柄によりて自然にわくのである、棄置けば自然に無くなる、餘計の御世話であると云ふ塩梅であります。害蟲發生すれば神佛に祈願し、太皷や鐘を打鳴らして、蟲舞り、蟲祭り抔して色々騷ぎ立て狼狽し、唯目視して居る風であります。而して收穫の際は、本年は蟲が付きましたから掟米を減じて呉れと地主に强請し、地主も止むを得ず之れを聞く樣なことで、蟲に關する觀念は皆無であります。右樣の有樣でありますから、第

一迷信を打破し根本的改良の必要がある、實に其局に當るもの丶心配であります。故に我縣下にハ大に害蟲の講話會を開き、標本抔を示して該思想の發達を謀るのが目下の急務であります。斯く申せば、我縣下農民の愚昧を發表し、耻を曝す樣でありますけれども、外に申上る實驗談が御座りませぬので、實は五分間演說の責め防ぎ迄に、吾縣下農民の有樣を申し上げた譯であります。

◎博覽會出品の昆蟲標本（續）

岐阜縣不破郡垂井尋常高等小學校　小竹　浩

第六昆蟲の保護色　　昆蟲界に就き仔細に之を觀察すれば其彩色の万別なる口能く其形容する能はず筆能く描出する能はざるあり是れ巧みに敵の目を晦まし己が身を安全に護衞するに外ならず即常に綠葉上に捿む蟲類は其体色綠色を呈し砂上若くは土上に棲息するものは概ね土色を呈し蝶類は其止まるや概ね兩翅を背上に疊むを以て表面美なれとも其裏面外界の諸物体に似たり蛾類は其止まるや概ね前翅を以て后翅を蔽ふを以て前翅の表面能く留止する處の物体に似たる色を有せり是れ昆蟲學上保護色と名く其他幼蟲より蛹に至るまて之れ等の保護色を有するもの枚擧に遑あらず今是等の妙味を知らしめんため八種に區別し標本三十有余を配列せり即樹幹に靜止するを以て樹皮と同色を呈するものアカタテハテフの翅の裏面ミミズクヨコバヒ等七種。草上に棲むを以て綠色あるものクツハムシ、アヲガメムシ等八種。苔の附きたる樹木に靜止するを以て地衣と同色なるものキノカハガ（尺蠖蛾の一種）等四種。砂上に棲むを以て前翅の砂色なるものカハラバツタ等四種。夜間出つるを以て黑色あるものクロゴミムシ、クロオサムシ等五種。土中に棲むを以て土色を呈するものキリウヂカヾンボノ幼蟲。青葉の上に棲むを以て綠色なるものヤマカマスノ幼蟲等の類を以てせり。

第七昆蟲之擬態　　已が安全を圖り子孫の繁殖を全ふせんとするの必要より蟲類に保護色を有するは第六に示せり尙緻密に觀察せば其形態の奇異なる千差萬別にして實物を一見せば何人も其奇に驚かざるを得ず即樹枝に似たるあり鳥糞を擬するあり枯葉に似たるあり强動物に摸擬するあり是れ皆保護色と相待

て必要あるものにして自然の妙至れりと云ふべし之等を擬態と名く今其内容を擧ぐれば弱者が强敵の眼を避けん爲め其形色を外界の物体に似せしめ以て敵の攻擊を免るゝ者、弱者が其形色を他の强動物の形色に類似せしめ以て敵の攻擊を免るゝ者との二種に別ち更に前者を五に后者を四に細別せり即前者は樹枝に摸倣するものナゝフシムシ、エダシヤクトリムシ等五種、木の瘤に似たるものヲジロカミキリムシオホコブザウムシ等五種、鳥糞に紛るゝものアゲハノテフノ幼蟲、木の枯葉に似たるものアケビノガ、敵に逢ひて死態を擬するものコガネムシ、ナシザウムシ等五種を配列し、后者は、蜂に似たる双翅類オホハチダマシ等三種、蜂に似たる蛾コスカシバガ、蜂に似たる甲蟲トラカミキリムシ等三種、蟻に似たる椿象アリモドキガメムシ等二種を配列せり。

第八昆蟲之警戒色幷誘惑色　惡味を有する鳥蠋の如き惡臭を放つ椿象の如きは多く鳥類の啄食を好まざるものなり斯の如き蟲類は已が所在を知らしめん爲め益々其彩色をして顯著ならしむ之れを警戒色と云ふ强動物が弱動物を進擊し已が口腹を肥さんとする爲め其体色已が棲息する周圍の色に似たるもの若くば躰軀の外物に似たるもの之れを誘惑色と云ふ第八は全くこの理を示さんために裝成せるものなり今其内容を擧ぐれば警戒色を四に別つ即惡臭を分泌する蟲なることを外敵に表示する必要より美色を裝ふものミチヲシヘ、キンガメムシ類八種、惡味を有する蟲なることを知らしめて外敵の誤食なからしめん爲め体色を裝ふものイモムシの類六種、毒毛を以て敵害を防ぐ蟲なるを知らしめん爲め美色を有するもののキンケムシ類四種、敵をして害を加へざらしめんため多毛を以つて警戒するものサクラケムシ類三種を配列せり。誘惑色亦四種に別つ即水中にある竹木の切片に似たるものトンボウの幼蟲、ユリノハナスヒ、水中に溜りたる枯枝に似たるものミヅカマキリ類、常に葉上若くば枝上に在るを以て綠色なるものカマキリの類、常に水中の土上にあるを以て泥色を呈するものタガメ等を配列せり。

第九昆蟲之生存競爭　前に示せる如く已が体色を外物に摸倣し奇異なる形態を以て他物に擬し巧に敵眼を避け或は樹心に入り或は他物を纏ひ若くは堅き繭を造るなどあらゆる手段を以て安全を圖るも又一方には之れが弱点を看破し巧に寄生するあり捕食するありて其慘狀至らざるなしこれを生存競爭と云ふ今其内容を示さば、葉を蠶食して一葉の靑なきに至らしむる蛄蟖は(マツケムシ類)寄生蜂の爲めに其肉を食せらる(ウスバヤドリバチ、梅毛蟲寄生蜂類)、非常の速力を以て繁殖する蚜蟲は(ミドリアブラムシ類)片隅より敵蟲の爲めに征伐せらる、(クサカゲロフ、ヒラタアブ、テンタウムシ類)、樹幹の中に巣をく

ひて安全を誇る木蠹蟲は(テツパウムシ)馬尾蜂の長き産卵管に挿入せらる(ヲナガバチ類)、堅固なる城郭を造りて敵害を防ぐ簑蟲は(茶ノミノムシ)寄生蜂の襲ふ所となる(茶ノミノムシヤドリバチ)、枝に摸倣して巧に强敵の眼を瞞着する枝尺蠖は(エダシヤクトリムシ)かもどきばちに寄生せらる(カモドキバチ)、飄々として艶花に戯れ餘念なき蝶は(キテフ類)蜻蛉の爲に不意に捕へ去らる(コヤマトンバウ)、夏日腥血を吸ひて人を困らす蚊は(蚊)蜻蛉に驅られ其幼蟲亦蜻蛉の幼蟲に食はる(カトリトンバウ、トンバウの幼蟲)、小蟲を捕へ巣に運はんとする蟻は(クマアリの類)ありぢごくの落穴に陷りて其餌食となる(ウスバカゲロフ幼蟲等)

第十昆蟲之自巳防禦本能　前に示す如く昆蟲界に修羅場を演するは常に目擊するなりされば固き繭を造り或は恐嚇手段を以て或は跳躍する等種々の手段を以て生命を全ふせんとするは自然の理なりこれ等の方法を先天的に得たるを即自巳防禦本能と云ふ其配列下の如し落下して敵害を免るゝもの（ナシザウムシ、バラルリハムシの類六種）恐嚇手段を以て敵害を免るゝもの(イモムシの類三種)、惡臭ある肉角を出して敵害を免るゝ者(アゲハノテフの幼蟲類二種)、惡臭を出して敵害を免るゝ者(三井寺ハンメウ、ガメムシの類五種)毒針を以て敵を攻擊するもの(ダンゴバチ類六種)、跳躍して敵害を免るゝもの(ノミ、トビムシの類六種)横に這ひて体を隱すもの(ヨコバヒムシ類六種)、他物を纏ひて自体を護るもの、(ミノムシの類六種)繭を造りて自体を護るもの(イラムシ、ヤマカマスノガ類六種)、葉を綴りて自体を護るもの(ハマキムシ類四種)

(未完)

◎六足蟲彙纂（卯の巻）

在東京　長野菊次郎

(九)蝗を斃す黴菌　蝗類が或る疫病の爲めに斃さるゝことあるは數年來昆蟲學者の注意せる所にして其病源の一としては或る黴菌の軀内に生育するによるものなることも亦知られたり。此黴菌の爲めに撲滅せらるゝものは獨り蝗類のみにあらずして他の昆蟲にも及ぶものなれば數年來害蟲驅除の一法として殺蝗菌の各種を人工的に蕃布せしめて効を奏したること少からず。然るに最も慘害を逞しくする蝗類が最も此黴菌に感染し易きは實に吾人の幸とする所なり。北亞米利加に於て往々自生的及び移住的蝗類の巨萬を打擔したる疫病の源因をなせる黴菌は數年前の發見にして其流行區域狹からず一地方に於ては全く殄滅に歸せしめたることあり、若し蝗類が此黴菌に惱まさるゝときは其動作不活潑となり將に死に瀕

菌の爲に死したる蝗

せんとするや或る雜草の頂に攀ち登り前中二對の脚を以て確と莖を抱きながら死期を待ち死したる後も其狀態を保つものなり、かくて躰軀は膨脹して柔軟となり脆弱と化し數日にして關節より分離し褐色の塵狀胞子は風の爲めに飛散せらる若し他の蝗が此胞子の附着したる植物を食ふ時は忽ち此疫に感染するなり、蓋し此等の事實を發見したるはローレンス、ブルーナー(Lawrence Bruner)氏の効なり、今蝗類驅除の目的を以て殺蝗菌を撒布せんには菌害を受たる蝗の生きたるもの又は死せるもの數多を捕へて之を穴に投じ是に撒布するに水を以てし又此上に投ずるに蝗の一列を以てして同じく水を撒布し次第に此の如くして穴に滿つるに至らしむ然る後錫板を以て其穴を蓋ひ數日間其儘になし置くべし但し其日數は氣候によりて多少の差異ありかくて其死せる蝗を地面に擴げて十分に之を乾かし其後之を碎粉して水に混ずるなり、水に混じたるものは十二時乃至四十八時間之を温めて此内に浸すに新に捕へる蝗を以てし其後之を放つべし。然るときは早晩他の蝗に傳染して遂に全群に蔓延するに至るべしとなり、(昨年十二月十八日のシカゴ、ツリビユーン)

◎食蟲動物の餌食

在東京　林　壽祐

爰に出したる食蟲動物の餌食表中、有益有害と評せしは、主として農業山林業に對して定めしものなれば、縱令こゝには有害と附せらるゝものありといへども、強ち惜却すべくもあらず。而して評價を定むるに困難なるもの尠からず。又蟲類を食する事實あるも、如何なる蟲種を食するか、野外にあつては吾人の視力の及ばざること多し、讀者豫めこれを諒せよ。

食蟲動物の餌食表

種名	類別	餌食の種類	評價	摘要
アヲハヅク	猛禽類	(益蟲)……蜻蛉。蜻蜓。蜂。 (害蟲)……飛生蟲。鍬形蟲。金龜子。蟬。	有益	
雉(キジ)	雉鷄類	(穀類)……稻。麥。粟。黍。蕎麥。大豆。小豆。 (果實)……椎。 (嫩葉)……ハコベ。クサボケ。菜。薺。雜草。 (昆蟲)……螽蟖。蝗。蟋蟀。烏蠋。螟蛉。	有害？	蕃殖スルヰハ農作物ヲ食荒ラシ農家ヲ苦マシム
鸐雉(ヤマドリ)	雉鷄類	(穀類)……豆。 (果實)……椎。コナラ。樫。ジヤノヒゲ。雜草。 (葉花)……ハコベ。クサボケの嫩葉。春蘭の花。 (昆蟲)……椎。コナラ等の蠹蟲。	有益？	穀類ハ豆ノ外食スルコト尠シ
鳥鴉(ハシブトカラス)	燕雀類	(動物性)……飛蝗。蝗。螽蟖。金龜子。野蠶。田螺。蛙。鼠。蛇。鷄雛。鷄卵。有脊椎動物の內臟。 (植物性)……玉蜀。黍。柿。密柑。落花生。甘藷。 (人造物)……豆腐。飯。團子。餅。	有害	
白頭鳥(ヒヨドリ)	燕雀類	(果實)……南天。萬兩。モチ。カナメモチ。ウルシケシ。ガマズミ。ヤブニッケイ。バラ。柿。榊。密柑 (雜類)……木牛夏の芽。椿の花液。樫の樹液。菜。甘藷。南瓜。飯。	？	未ダ蟲類ヲ啄食スルヲ見ザレドモ其習性ヨリ考フレバ必ズ食蟲スルナラン
アカツパラ	燕雀類	(果實)……南天。萬兩。モチ。カナメモチ。バラ。ツルウメモドキ。ガマヅミ。ヤブニッケイ。榊。柿。 (蟲類)……螻蛄。蚯蚓。	有害	蚯蚓ヲ獲ンガ爲メ古屋根ヲ破損スルヿ多シ
繡眼兒(メジロ)	燕雀類	(植物性)……密柑。柿。花液。樹液。甘藷。 (昆蟲類)……蜘蛛。虻。蠅。蚋。蚊。蚜蟲。螟蛉。	有益	

◎昆蟲應用の釣魚法に就て

千葉縣　高橋徹一

昆蟲學研究の結果として農業工業醫學界に將た敎育界に尠からざる裨補がある事は識者の夙に唱導する所なり而して猶水産業上にも應用し厚生利用の一要素たるのみならず兼て遊樂として一種の興味を有するものありそは鰹鮪等を釣獲する擬餌釣と同一法にして昆蟲の形体色澤班紋等を摸倣して釣餌と爲しこれに釣具を附し鮎鰺嘉魚の如き淡水魚類を欺誘し坐して之を釣獲するなり所謂擬蟲釣ゝして現に相摸地

方にては盛に行はれつゝあれども未だ以て廣く世に歡迎流布するに至らざるなり蓋し其擬蟲の製作不完全にして顯著なる効果を收め得ざるに基因せずんばあらず元來此法たるや昆蟲の水上を飛行するの際魚類の跳躍捕獲するの狀況より案出せるものなるを以て其意匠材料色彩等今一層の思考を凝し昆蟲家の意見を參酌し之か製作を改良したらむには爲に魚類の注目を惹起し釣漁を容易ならしめ全國を横貫する大小の川流各地に散在する無數の湖澤中より此法により年々多額の漁獲を爲し延ひては國家經濟上好果を呈するに至らん乎而して此法たる從來專ら淡水魚類を漁するのみなれ共更に擬餌を工夫せば又以て鹹水魚類の釣獲にも應用するを得べしされど海上に遊飛する昆蟲なきが如し然るに既刊昆蟲世界の所報に依れば彼のイチモジセゝリの如きは能く海上數里の遠程を羣集飛越すと云ふ斯る事實に徵せば擬蟲釣の範圍を擴張するも豈難からんや昆蟲と水産との關係如此聊か所見を陳べ斯學研究家と水産家の參考に供す

◎昆蟲と地名

伊豫　田村晴耕農夫

日本紀に曰く雄畧天皇四年秋八月辛卯吉野宮に行幸し玉ふ虻疾く飛び來りて天皇の臂を噆ふ是に於て蜻蛉忽然として飛び來て虻を齧むで去る天皇其心有るを喜び玉ひ蜻蛉を讃し此地を名けて蜻蛉野と爲すと昆蟲に關する地名を仔細に調ぶるに於ては中には面白き話柄となるものも有らん、趣味ある歷史を有する處も有らん左に昆蟲名を呼ばれたる地名を報じて日永のお伽草とせん

京都市下京區蟷螂山町、近江愛知郡八木莊村蚊野外、伊勢度會郡東外城田村蚊野、上野北甘樂郡吉田村蚊沼、備中阿哲郡新砥村蚊家、日向兒湯郡高鍋町蚊口浦、渡島爾志郡乙部村蚊柱、下總印幡郡野原村松蟲新田、肥前西彼杵郡蚊焼村、膽振虻田郡虻田村、越後南蒲原郡鹿峠村蝶名林、岩代耶摩郡吾妻村蠶養、美濃加茂郡蜂屋村、近江栗太郡大寶村蜂屋、駿河庵原郡飯田村蜂ヶ谷、阿波海草郡中木頭村蜂ヶ谷、下野那須郡川西町蜂巣、肥前杵島郡住吉村蜂巣、信濃東筑摩郡松本町蟻ヶ崎、上野吾妻郡伊參村蟻川。

◎泥負蟲の冬期潛伏箇所に就て

長野縣　中浦藤吉

余は昨年十一月諏訪郡農事巡回教師の任を受け、赴任後、該郡に於ける農作物各種の事項に就き調査せしに、稻作の害蟲たる泥負蟲の繁殖甚しく、最も慘害を逞ふする箇所あり。即ち同郡の東方に聳ゆる、八ヶ嶽の山麓たる泉野、豊平、湖東、玉川、原の五ヶ村とす總て泥負蟲は、山間の冷水の掛れる田に繁

殖し、其區域狹小なるものなるに、該所に就き、其被害の度を調査せしに、何れも箇所に因りて多少の輕重ありと雖とも、其繁殖區域全面に亘り、加害の度も意外に甚しく、爲に稻は生育時期遲れ、收穫の減少を蒙ること甚しきを知り、昨年十二月泉野村に出張し、冬期間に於ける、成蟲の潛伏所搜索に從事せり其狀況次の如し。　昨明治三十六年十二月二日、早朝より同郡泉野村へ出張し、同村長に相談して人夫四人を出さしめ、同村大字槻木の田圃にして每年被害甚しき箇所に就き搜索に就事せり、最初各稻田の畦畔に探求せしも見當らず、次に小溝の水流に沿ふ畦畔に就き探求するも、之れ又見當らず、夫れより八ヶ嶽より流出し、同村を貫流する柳川の中洲にある、沙山の各暖所を搜索せしに、始めて野管の株中に此蟲の成蟲潛伏するを發見し、夫れより同所に在る此類の草株を取調たるに、大抵野管或は萱株中にて、砂の入り込み居るものゝ砂中に淺く潛み居るを發見せり。其數凡そ十頭乃至廿四五頭なりき。夫れより、山に生する萱及畦畔に生せる野管萱の株を驗せしに、何れも蟲の潛伏せざるものなし。玆に於て、始めて冬期間に於ける、此蟲の潛伏ヶ所を知れり、　其後、本年二月二十七日、重ねて同村へ出張し、其後の經過を驗せしに、とき即ち嚴寒積雪の候なりければ、積雪を堀り、萱管の株を取調べたるに、蟲は前の如く沙中に潛み居らずして、此等株の根元に出で、其莖葉に附着し居れり。之れ、即ち當地は寒氣最も强き所にして、寒中の氷結甚しく大抵地下四五寸迄は氷結し、一面の氷板とある、故に彼れ此氷板に閉ち込めらるゝを恐れ、株上に出て其莖葉中に潛むものならんと察せらる。其後、三月廿七日又同村へ出張し、其經過の狀態如何を驗せしに、此時期は旣に暖候に向ひ居り、地中甚しく氷結することなきを以て、又昨年暮の如く株に在る沙中に淺く潛み居れり。

編者云ふ本誌第一卷第三號論說欄內に於て理學博士佐々木忠二郎氏の泥負蟲調査の顚末を揭載せしが今又該蟲に付中浦氏より冬期潛伏個所に就て研究せられし記事を寄せられたれば之れを記すことゝなしぬ讀者夫れ兩々相對照せば利する處蓋し尠からざるべし

◎學童の害蟲驅除成績表の出品（續）

島根縣農事試驗場　田中房太郎

前號に於て今回第五回內國勸業博覽會に出品せし島根縣八束郡學校生徒害蟲驅除効果表なるものを紹介し置きしが茲に該の解說書をも記載して讀者の參考に資せんとす。

解說書

部	類	番號	品名	出品人
九	四九	一	島根縣八束郡學校生徒害蟲驅除効果表	島根縣八束郡長　村上壽夫

材料　島根縣八束郡民ハ概ね農業を以て生業となすが故に農業に關する思想を養ふは即ち其生活に必須なる知識を授くる所以なりとす仍て農業上害益蟲に關する思想養成の一方法として又勤儉儲蓄の美德を涵養するの一端として且又勞働の良習を造成するの一助として明治三十五年二月本郡長は學校管理者及小學校長、實業補習學校長に訓示して左の方法を實行せしめ毎月學校生徒の捕獲せし害蟲の數及び驅除に從事せし生徒數幷に害蟲賣却代金等を報告せしめ之を統計せり

一、學校生徒をして害蟲及其卵塊等を捕獲せしむること
二、捕獲したる害蟲及其卵塊等を村農會等に買取らしむること
三、賣却したる代金は驅除に從事せし生徒に分付し貯金に充てしむること

効果の計算法　明治三十五年中各學校生徒の捕獲したる害蟲及其卵塊數幷に其生徒數貯金額を統計し尙之に螟蟲の驅除より生する効益の推算を詳記し之を印刷して各學校管理者及學校長に配付せしが學校長は之を教材に管理者は一般農民に對し講話の材料に用ゐたるを以て其稗益實に尠なしとせず而して其の効益の推算は第一化期第二化期の兩期に區分せしにより今第一化期に於ける推算を左に揭ぐ

明治三十五年中螟蟲第一化期捕獲數

螟蟲幼蟲總數	同蛾總數	同蛹總數	計	雌蛾數(上ノ計ノ二分ノ一)
五、一二五	二、四二八	二八〇、三六四	二九六、九一七	一四八、四五八

(備考)幼蟲、蛹、蛾は各雌雄の比例五分五分の割合と假定す

雌蛾產卵塊數	卵塊數(採取ノ分)	卵塊數計
一四八、四五八	一八四、六四八	三三三、一〇六塊

(備考)雌蛾は卵塊一箇を產するものと假定す

卵塊數	一塊卵數	卵塊總卵數	孵化すべき幼蟲の數
三三三、一〇六	八〇	二六六四八、四八〇	二一三一八、七八四

(備考)總卵數の內二割は死し八割は孵化するものと假定す又一塊の卵數は平均八十個と假定す

孵化すべき幼蟲數	雌蛾產卵塊數(二化期)
二一三一八、七八四	一〇六五九、三九二

(備考)幼蟲の內二分の一を雌蛾とし雌蛾は卵塊一箇を產するものと假定す

卵塊數	一塊卵數	總卵數	孚化すべき幼蟲の數
三四八、五三三	八〇	八五二七五一、三六〇	六八二二〇一、〇八八

(備考)總卵數の内二割は死し八割は孚化するものと假定す
今稻の株數一坪七拾株とし株張を合せ一株の莖數を十本とし一坪の總莖數を七百本と定め第二化期の幼蟲一匹は稻一本宛を白枯せしむるものとせば其被害坪數及改算反別左の如し

被害總坪數	改算反別
九七四五七二、九八坪	三二四八、五二三反畝

本郡米作一反歩平均收納額一石五斗八升なるにより損失石數及其價格左の如し

被害反別	一反歩收米	損失總石數	同上價格
三四八、五三三反畝	一、五八〇石	五一三二、七五二石	五一、三二七、五二〇円

(備考)米價一石拾圓と假定す
即ち五千百三十二石餘は螟蟲驅除の爲損失を免れたるものとするを得べく又價格にしては五萬千三百二十七圓餘の損失を免れたるものと云ふを得べし
試に之を本郡各村の公學費に比較するば左の如し

明治三十四年度公學費總計	總校數	一校平均額
四二、五六一円	五九	七二一、三七二円

害蟲驅除ノ爲損失ヲ免レタル額	總校數	一校平均額
五一三二七、五一〇円	五九	八六九、九五八円

損失ヲ免レタル一校平均額	公學費一校平均額	公學費一校平均額ニ對スル割合
八六九、九五八円	七二一、三七二円	一、二〇五強

即ち僅に本年螟蟲第一化期中學校生徒の驅除したる螟蟲の爲め損害を免れたるもののみにても學校一ヶ年度の經費を支へ得て尚餘裕あるを見る況んや地蠶浮塵子其他害蟲驅除に係るものを併算せば其効益の更に偉大なるべきに於てをや

審査請求の主眼 一、實業ニ關する思想を涵養すること。二、害益蟲の智識を與へ併て驅除豫防保護の必要を知らしむること。三、勞働の良習を造成すること。四、生徒をして貯金をなさしめ且勤儉儲蓄の美德を養成すること。五、實業の發達を圖ること。

(完)

◎岐阜縣郡上郡の蟲報

郡上郡上保村 塩田健藏

岐阜縣郡上郡産の鞘翅目中種名の分明なりしものを報導せん而して其名稱は多く松村氏著日本昆蟲學に則りたるものなり。

○瓢蟲科

●テンタウムシダマシ ●ナナホシテンタウムシ ●ムツテンタウムシ ●ヒメアカホシテンタウムシ ●シロホシテンタウムシ

○天牛科　●クハトラムシ　●ハナカミキリムシ　●ゴマカミキリ　●ベニカミキリ　●シロスヂカミキリ　●ホタルカミキリ
●クワカミキリ　●カミキリ　●キクスヒ
○象鼻蟲科　●オホザウムシ　●イチザウムシ　●オトシブミ　●ヒメクロオトシブミ　●ヒメザウムシ
○芫菁科　●マメハンメウ　●ツチハンメウ
○金龜子科　●ダイコクコガ子　●マグソコガ子　●センチコガ子　●ヒメゴガ子　●マメコガ子　●サイカチムシ　●ハナムグリ　●オホハナムグリ　●カナブン
○鍬形蟲科　●ミヤマクワガタ　●ノコギリクワガタ　●ヒメクワガタ
○埋葬蟲科　●シデムシ　●ヨツメヨウマ　●シルフア　●アカクビシルフア
○ガムシ科　●ガムシ　●コガムシ
○龍蝨科　●ゲンゴロフ　●キスヂゲンコロフ　●コシマゲンロフ　●コクロケンロフ　●スナムグリ　●オホスナムグリ

◎小學兒童害蟲驅除成蹟表

大分縣　藤澤節太郎

吾大分縣北海部郡は昨三十五年小學校兒童を督勵し苗代田に於て螟蟲驅除を行ひしが其成蹟表及說明は左の如し

明治三十五年苗代田ニ於ケル小學校生徒害蟲豫防成蹟表
（△印は高等小學校、無印は尋常小學校）

校名	教師ガ生徒ヲ引率シテ捕獲セシ 蛾數	卵塊數	生徒ガ隨意ニ捕獲セシ 蛾數	卵塊數	合計 蛾數	卵塊數
宮河內	八、一三四	四、〇九一	四、四七七	二、六六六	一二、六一一	六、七五七
種迫	八〇三	三七六	二、一五一	二、二三七	二、九一三	二、六一三
丹生	三、七〇五	二、一九五	二、四七九	二、八六〇	六、一八四	五、〇五五
西大在	九〇四	二、二六六	七二二	四、八八七	一、六二六	七、一五三
大在	五〇〇	三〇〇	一九、五七三	八、〇三六	二〇、〇七三	八、三三六
市尾	三、三五九	一一、五一二	一〇、九七三	一九、一四四	一四、三三二	三〇、六五六
木田	五、八三二	一四、九四八	四、三二一	五、二一三	一〇、一五三	二〇、一六一
佐賀	―	―	―	―	二〇、五八一	六二、三四八
木佐上	七、二五八	四、八五六	一四、八四九	三、〇二九	二二、一〇七	七、八八五
神崎	二〇、三四五	一五、〇九七	七、三二五	九、二六〇	二七、六七〇	二四、三五七
大志生木	二、八六二	三、三二八	九四二	二、六八四	三、八〇四	五、九〇五
佐志生	一、六五〇	五、一五一	一、五二六	三、七三〇	七、一七六	八、八八一
下ノ江	三、一〇七	六、五三〇	三、六七七	七、八六三	六、七八四	一四、三九三
藤河內	三、六七三		五、二三七		―	―

熊崎	六、〇〇〇	三、〇〇〇	七、九三〇	六、〇〇〇	一三、九三〇	九、〇〇〇
上北津留	四、五〇〇	七、二六六	—	—	四、五〇〇	七、二六六
中臼杵	—	四、五三〇	—	—	—	四、五三〇
下中臼杵	六二九	三、七〇七	}三、一六〇		六二九	三、七〇七
上南津留	—	—	—	—	三三一	六、六七〇
下南津留	五〇〇	八一七	—	—	五〇〇	八一七
市濱	—	一三、七五七	—	九、九一四	—	二三、六七一
堅徳	三、三六九	一、七六四	二〇六	一八五	三、四七五	一、九三九
青江上	一、七一三	六、三〇七	三二六	一、〇一五	二、〇三九	七、三二二
青江下	四二五	四〇八	二、三三一	二、一八四	二、七五六	二、五九二
津久見	一、〇一六	七二八	—	一三	一、〇一六	七四一
千怒	一、二六四	五六九	—	二一七	一、二六四	七八六
△北部	—	—	—	—	二〇五、九〇九	一四三、九三四
△下北津留	二、三七〇	三、五三〇	五、〇七五	六、八六四	七、四四五	一〇、三六六
△上北津留	四七四	五、二七一	二七〇	一、六五七	七四四	六、九二八
△南部	八九三	二、四〇一	一、八七一	三、五〇五	二、七六四	五、九〇六
計	—	—	—	—	四〇三、二〇六	四五二、二七〇

豫防驅除實行の爲め生せし効果の要點は左の如し

一、生徒の昆蟲志想を養成し益蟲の愛護をべく害蟲の嫌惡すべくして驅除の必要なることを知らしめ惹て父兄農民を感化せり　二、公共心を惹起せしめたり　三、共同驅除の必要を悟らしめたり。小貫農學士の調査によれば螟蟲は一雌蛾にして平均三百粒以內二百五十粒以上の卵子を生じ又一卵塊卵粒の多きは二百六十五粒少きも三十粒にして二十個の卵塊平均の卵粒は九十二個余なり此計算に依り前表示す處の卵塊の生育する場合には如何なる被害を及ぼすやを統計的に示せば左の如し　但卵塊中には二化性螟蟲三化性螟蟲の卵塊混和せしも計算の便宜上總て二化性の者とせり卵塊總數は四十四万五千三百個にして一卵塊の平均卵粒數を九十二個とせは總卵數は四千百六十万八千八百四十粒なり內五割は敵蟲のため孵化又は發育せざるものありとし。第一回發育の幼蟲數二千八十万四千四百二十四。此幼蟲は蛾化して雌雄相半するものとし雌蛾の數千四十万二千二百十四なり一雌蛾二百五十粒を產卵せば總卵粒數廿六億五十五万二千五百粒あり內五割は敵蟲の爲め孵化又は發生せざるものありとし。第二回發育幼蟲數十三億二十七万六千二百五十四。今此幼蟲は各一本の稻を枯死せしむるものとし前記第一回第二回の幼蟲の爲め損失する處の稻數は合計十三億二千百八萬六百七十本に達て一本の稻は平均百粒の籾を結ぶものとし其籾粒數一千三百二十一億〇八百六萬七千粒なり一升の籾粒數を四万粒とし其容量三萬三千〇二十七石〇一升六合七勺五才あり之れを五割摺とし產出する、玄米容量一萬六千五百十三石五斗〇八合五

勺七才の被害にして換言せば小學校生徒の豫防し得たる効果あり。今又本郡に於て米の最近平均産額を見るに三萬七千八百十六石六斗なれば前記豫防高は此平均産額の四割三分六厘强なり豫防の効力又大ならずや。

◎土佐産の蟲報（第九）

高知縣土佐郡　武内讓文

○鞘翅類瓢蟲科　（一）テンタウムシ。（二）ナヽホシテンタウムシ。（三）シロホシテンタウムシ。（四）ヒメカメノコテンタウムシ。（五）オホテンタウムシ。（六）セスヂテンタウムシ。（七）ヒメアカホシテンタウムシ。（八）クビアカテンタウムシ。（九）アトホシテンタウムシ。（十）コクロテンタウムシ。（十一）テンタウムシダマシ。以上の數種中（一）は菜園に多く來り、菜甫には比較的少し。（二）は之れに反す。（三）は野生の薔薇其他小雜草木に多く、（四）はミヅソバ、蓼藍等の蓼科植物に來るもの多く、又其他の雜草に在ること少からず。而して此四種は晩春には、皆多く麥類に集り、早春には獨り（二）の紫雲英田に多きを見る、此内（一）（二）は全縣到る所に多く產し、（三）（四）は之れに次ぎ、（五）は到る所の桑樹に於てのみ、之を見ると雖も、余り多からず。（六）に至ては、雜木間を搜て、偶然其一頭を獲たるのみ。（七）は到る所の桑樹菓樹等に、早春二三月の頃より、幹枝に匍行す。（八）は野外に於ては未だ其成蟲を得ずと雖ども、幼蟲は時に桃樹に於て、ダイアスピス貝殼蟲の蛹を食すること少からざるを見る。（九）は山野の小木に多く之を見、（十）は稀に菓樹に之を見る。（十一）は馬鈴薯、茄子等に加害することは比較的少く專ら酸漿を食とす。而して其幼蟲の發生するは、主として夏月陰涼の地に茂生せる酸漿に在りとす。土佐に在りては、瓢蟲科中有害のものは僅に此一種あるを見るのみ、其他此科中小形の種に至ては、種名の不詳なるもの亦少からず、而して籬邊の竹蝨を食ふ一種は、最も大形なりとす。

○僞紅色葉蟲科　ヨツホシハムシダマシ。体長二分許、後方少く狹まり、脚細長にして、全体漆黑に四黃小斑あり。稀に朽木皮下に於て發見するものは、即ち是ならんか、疑の儘之を揭ぐ。

○乾鰹蟲科　（一）カツヲブシノムシ。（二）カマキリタマゴノムシ。（一）は鰹魚が縣下の主要物產の一に在るを以て、大害蟲の一に加ふべき者なり。而して又乾藏の魚肥類を蠧蝕すること少からず。（二）は螳螂の卵を蝕害する小形種にして、其多毛の幼蟲が、螳螂卵塊中に群棲するに因て、俗に此卵塊を以て、蛄蟖類の巢なりと呼ぶの好證となすことあり。予は其成蟲の標本僅に一頭を有し、未だ撿鏡をなさずと雖

ども、此科の一屬なるを信ず。種名は一に準じて仮りに之を附し置き、後日先識者の命名あるを知るの時、之に順はんと欲す。

○圓形蟲科　コマルガタムシ。夏月動物の死体に多し。此科の大形なるものは未だ之を獲ず、或は褐色にして堆肥中に在るものあり、稀に之を見る。

○木蝕蟲科　キクヒムシ。体長四分内外、黑色にして翅鞘に赤紋あり。殼斗科の蠹傷中に在るものは即ち此種に非ずや。

○擬蟻科　(一)ルリホネムシ。(二)アカアシホシカムシ。(三)アカクビホシカムシ。共に鳥獸の腐肉に於て之を見る、而して(二)(三)は乾藏の魚肥に來集すること少からず。

○吉丁蟲科　(一)タマムシ。(二)ウバタムシ。(三)ヒメタマムシ。此三種中(一)は夏月榎樹に多く、(二)は松樹に多し。(三)は往々山野の花上に見ることあり。其他、金綠色を呈するもの二種、(一)の形色に似たるもの二種あるを見るも、産數少く、マメタマムシの形をなせるもの二種あり、産數稍多く、夏月点々樹葉に之を見る。

○叩頭蟲科　(一)サビキコリムシ。(二)コメツキムシ。(三)ウバタマムシモドキ。(一)は夏月山野の土上、草莖等に於て之を獲、(二)は多く草上に之を獲、(三)は飛揚するものよりは寧ろ樹上に於て多く之を見る、而して冬月は、稀に朽木の皮下に之を見る。此三者は、夏月到る所に之を見る。朽木皮下を捜て、大形にして尾端の針斷せる針金蟲多きを見るは、想ふに(三)の幼蟲ならん。海濱の沙土中には、冬月多く、尾端の錐狀をなせる針金蟲の、越年せるものあり。土佐に於ける甘蔗作及び麥作の大害蟲なり。其他、小形なるものは、土上或は花葉上に於て獲るもの、其種類甚だ多く、最小なるものは体長僅に一分に充たず。ヒゲコメツキムシは之を産するも、稀少特異なるを見る。

○螢火科　(一)ホタル。(二)ヒメホタル。(三)キクスヒモドキ。(四)ヒメキクスヒモドキ。(五)クロキクスヒモドキ。以上の數種中(一)は山間の溪畔に主産し、(二)は到る所に多し。(三)は最も普通にして、成蟲は稀に麥穗を咬嚼し、或は他蟲を捕食するを見る。(四)と(五)は、(三)に次て之を産す。キクスヒモドキの種類にして、銅紫色を有するものは、北方の山中に主産し、最も大形となす。ウバホタルは山中にのみ之を産せるを見る。

○死狀蟲科　ヘウホンムシ。未だ動植物の標本に加害するを見ずと雖ども、冬期寒氣酷烈の時に於て

も、室內に出て來るもの少らざるとあり。

○花蚤科　ハナノミ。此一種を花上に於て獲たるのみ、未だ他種を發見せず。

○鍬形蟲科　（一）オホクハガタムシ。（二）クハガタムシ。（三）ヒメクハガタムシ。（四）ノコギリクハガタムシ。（五）ミヤマクハガタムシ。此五種は、山中殼斗科植物の樹液の滲出せる所には、大概之を見ると雖ども、（四）と（五）は其數極めて少く、（二）と（三）は又た柳樹にも來る。

○金龜子科　（一）ダイコクムシ。（二）クソコガネムシ。（三）コウカコガネムシ。（四）ビロウドコガネムシ。（五）ヒゲコガネムシ。（六）コフキコガネムシ。（七）シロスヂコガネムシ。（八）マメノコガネムシ（九）コガネムシ。（十）ヒメコガネムシ。（十一）ドウガネブイブイ。（十二）ハナモグリ。（十三）クロハナモグリ。（十四）カナブイブイ。（十五）カブトムシ。此種の中（一）は頗る少く、（二）は到る所路上、十、十一月及び二、三月の頃に多し、（三）は山中に之を獲、（四）は冬月石下、土中等に於て稀に之を見るも未だ春秋間に於て多く加害するを見ず。（五）は嘗て高知市附近に之を見ず、高岡郡の某地に於て、採取したる一頭を見たり。（六）は夏月山中に於て、到る所之を見。（七）は松樹に於てのみ之を見る。此二種は近時餘り多産せざ。近時多產して、松樹を占居するものはシマコガネあり。（八）は最も多產し、豆類に加害すると少からず。又野生の薔薇等にも多し、略ぼ（十）と食草を同す。（九）は又さ一般に多く、往々作物葉を害す。（十二）も亦最も普通にして、菓實に加害すると少からず。（十二）と（十三）は花上に多く、（十四）は他蟲を壓して、樹液に集る。（十五）は幼蟲を堆肥中に見ると頗る多くして、成蟲を樹上に見ると少し。成蟲には驚くべき大形のものあり。此他、猶ほ他種類を產す。

○天牛科　（一）ノコギリカミキリムシ。（二）トラフカミキリムシ。（三）ホシカミキリムシ。（四）クハノカミキリムシ。（五）タケノトラフカミキリムシ。（六）ハナカミキリムシ。（七）タケノベニカミキリムシ。（八）キクスヒ。（九）オホキクスヒ。（十）セスヂカミキリムシ。（十一）ホタルカミキリムシ。（十二）ヤハズカミキリムシ。（十三）カミキリムシ。（十四）ミドリカミキリムシ。以上の數種中（一）は夏日到る所の林間に之を見るも、產數敢て多からざ。（二）は桑樹に於てのみ之を見、（三）は主ら柳樹に集り、又山野の諸木にも少からざるを見る。（四）は桑樹を害すると最も大なり。（五）は山野に棲み、又家屋內の竹器に來る。（六）は夏日花上に來る、然れとも近時高知附近には、殆ど之を見ず。（七）は往々成蟲の越冬せるを見る、春期は往々麥類の莖葉上に來ることあり。（八）は山中に多く、（九）は山中及び菜園に少

からず、加害亦多し。（十）は中形にして黑色に、且つ赤條を有するもの是ならん。僅に一頭を獲たるのみ。（十一）は多く産せずと雖ども、亦獲難きの種類に非ず。（十二）と（十四）も亦同じ。（十三）は櫟、樫樹及び栗樹の加害を擅にし、到る所之を産せざるはなし。其他、松樹に於て獲たるもの大小三種、大形長角のもの一種、中形乃至小形のものは、頗る多種を産するを見る、予嘗て土、阿の國境に於て見たるもの及び他の鞘翅目採集者の集むる所を見るに、往々中形以上の種にして、頗る異形なるものもあり。想ふに全縣皆山にして百種の樹林に富む我高知は、遍く蹈査すれば幾多の異種を發見するや、未だ測り知るべからざるなり。

（未完）

◎害蟲驅防に關する建議

静岡縣　岡田忠男

静岡縣農會は、本月七日の總會にて、左の如き害蟲驅防上に關する決議をなし、已に知事に建議したれば、茲に報告す。

害蟲防除に關する敎習を警察官吏に施行する建議書

害蟲農作物に於ける恰も疫癘の人命に於けるが如く其の禍害の劇甚にして其の損害の多大なる敢て論を竢たす本縣下の如き氣候暖和にして各種農作物の生産上天與の利便を有すると共に害蟲の生息繁殖にもまた適恰し人力を以て之れが絶滅を圖ること最も周到なるにあらずんば生産上の天惠は空しく害蟲の爲めに減却せらるゝ虞あり國家の害蟲驅除豫防法を布き之れが防除の功を奏せんとする寔に宜なりとす本縣各階級農會或は講習講話に其の禍蟲を説き或は實地に是れが防除の方法を指示し當業者を提携し百方努力して措かずと雖とも未だ効果を完するを得ざるは深く遺憾とする所にして又憂慮に堪へざる所あり蓋し其効を奏するの難きは害蟲繁殖の强勢少しに因ると雖とも復た當業者の盡力未だ周到ならざるに職由せずんばあらず而して當業者をして充分に盡力せしむるは農會其の他督勵の任にある者の當に勉むべき所たるや勿論なるも之れを現今の情勢に徴するに郡村駐在の警察官吏をして督勵一層適切なるを得せしめば其の効果彌々大なるべきを思ふ警察官吏の督勵適切なるを得んには害蟲驅除豫防并に益蟲保護に關する適當の觀念を得せしむること殊に緊要なるを認む而して之を行ふの方法は巡査敎習科目中に害蟲防除の一科を加へ尙は郡村駐在警察官吏をして便宜之れを修むるの要を訓示せらるゝに在り若し夫れ講師の如きは官民其の人に乏しからず窃に聞く所に據れば福岡島根兩縣の如き既に之を實施し其他地方に於ても今や其の準備中に在る者一二にして止まらすと謂ふ閣下幸に明察を垂れ速に之を施行せらるゝに

於ては其効果蓋し顯著なるを信ず。

右本會總會の決議に因り謹で建議候也

靜岡縣農會長

靜岡縣知事宛

◎三重縣阿山郡の昆蟲方言

第八回全國害蟲驅除講習會修業生　三重縣　西岡嘉十郎

我三重縣阿山郡地方に於ける昆蟲の方言は、本誌第五拾參號通信欄に於て、是れを報じ置きしが、其后予は所用ありて、長田、島ヶ原、小田の各村を巡回したる際、尚左記の數種を採り得たれば、是れを追報せんとす。

◎野蠶をノガイコ◎キクスイダマシをホタルノオバ◎ウバタマムシをクソタマムシ◎桑蝨をシロコ◎オニヤンマをヤクワントンボ◎キリウジカガンボをカノオバ◎桑天牛をケキリムシ◎天牛をドクムシ◎タガメをドテダヽキ◎トンボ類を凡てドンボ◎ヒメカマキリをカマキリノ三番子◎蠶をカイコサン又オカヒコ女郎サン◎マツモムシをアオノギムシ◎マツノコバチをマツモシ◎ノミをアカウマ◎茶毛蟲をホウジョウムシ◎凡ての繭をマヘ◎トンボの幼蟲をヤモメ

◎昆蟲に關する葉書通信（第三十報）

（一六五）廿四鳥羽蛾の一產地（福岡縣企救郡、矢野宗幹）

明治卅五年十二月廿八日？豐前國企救郡城野村大字城野の雜樹中にて此蛾を得たり。

（一六六）蟬寄生蛾の一產地（栃木縣宇都宮市、水野清）

昆蟲世界第六十五號口繪に御記載有之候セミノヤドリガの御說明に接し數年來の疑を解き申候段偏に鳴謝たてまつり候、該蛾の幼蟲の蟬体に寄生致せるを余の認めしは數年前の事に候も其當時更に意に留めざりしのみならず寄生蟲たることは夢にも知らず候、愚弟等の夏日採集め玩ぶ所の蟬を見るに此寄生蟲の害を被り居るは多くミンミンゼミ及びヒグラシゼミに於て認め申候夏日に至り候はば必ず採集致し御參考の爲御送附致すべく候雜誌記事中其產地は滋賀、富山、鳥取及岐阜縣等とす恐くは猶多くの分布地あらん云々との事故當縣にも慥に分布致し居り候故一筆御報導申上候（三月十九日附）

(一六七)郡會の決議事項(三重縣阿山郡、西岡嘉十郎)　當三重縣阿山郡會は去る二月十四日より十七日迄四日間開會せしが決議事項中昆蟲に關する事項次の如し(一)蠶業講習會費金四拾六圓八拾五錢(二)害蟲驅除講習會費金五拾六圓貳拾九錢(三)蠶病消毒奬勵費金九拾九圓(四)螟蟲卵買上補助費金百五拾圓

(一六八)水棲昆蟲の動靜に就て(在堺市水族館、藤田政勝)　御寄贈被下候水棲昆蟲の爾來動靜に就き次に御一報申上候。淡水槽廿九號を熟覽致し候得ば底には小砂水中にはクロモ、ヤナギモ茂生し隅には古き棒杭四五本突立て居り何んとなく物騷の水中、所で杭にはトンボ幼蟲、ミヅカマキリ、ゲンゴロウ各々割據して窺ひ居り底にはイシミノムシ類ノコ〳〵と匍ひ廻り居り水上にはミヅスマシ、マツモムシ陣取り恰も戰爭や今に開かれんとするの有樣を浮ばせ申候偶に魚肉二三片を投與致し候へば佐々木先陣をキメ込むのはゲンゴロウにて次ぎはトンボ幼蟲に候互に食を取り合ひ爰に一大活劇は開始致され候次第誠に生存競爭の眞景を一目窺知致すを得如何許りか世人の腦裏を刺擊致すか知れませんと存居候。尚面白き顯象は此水中に針魚即トゲウヲを二三尾入れ置き申候所恰も天然の境遇に於けるが如くトゲウヲはイシミノムシを食ひ回り申候、所がゲンゴロウ先生は忽然隅より躍り出てトゲウヲにかみ付き遂に是を斃し食ふ有樣丁度互に敵討の狀況を見るに異ならず候實に水棲昆蟲と魚類との關係に就ては大に研究を要する次第に候。如此有樣にては所謂農業上の益蟲たるトンボは大に水產上の害蟲と云はざるを得ざる次第かと存候從て小生の主唱致居候其專門〳〵の範圍内に於て害益蟲を區分し是れが保護、驅除を致すが大に必要の件と信じて疑ばざる次第に御座候。マツモムシ先生は一向元氣なく中々水中に入らず別に面白き樣を呈し申さず候。却てトンボとかユリハナスヒ、ゲンゴロウ、ミヅカマキリの方が面白く見物人に感を抱かせ申候云々。(三月廿二日附)

(一六九)害蟲報告(岐阜縣益田郡、松下千吉)　(一)桑樹にはシンムシ、カミキリムシ幷に貝殼蟲、枝尺蠖等にして姬象鼻蟲は見當らず(二)稻田には螟蟲のみにてウンカ等は見當らず(三)麥畑にはキリウジの害あり(四)馬鈴薯の害蟲廿八星瓢蟲は近くの暖氣にて這ひ出せり(四月七日附)

(一七〇)昆蟲研究會の發會(鳥取縣東伯郡、足羽財藏)　鳥取縣東伯郡昆蟲研究會の發會式擧行は四月廿五日の豫定なり(三月廿六日附)

◉作物病蟲害展覽會の昆蟲標本

此記事は本月一日より開會の大阪府農會主催の作物病蟲害展覽會場を愛知縣田中周平氏が縦覽せられし際の所感を本月四日岐阜縣昆蟲學會に於て演説せし大要にて今其原稿を得たれば茲ゝ掲ぐることゝなしぬ

四月一日大阪府立農學校に到り同府農會開催に係る作物病蟲害展覽會を觀る本日始めて開場したることゝて未だ整頓に至らざれども陳列場五箇室の内三箇室は殆んど陳列を終りたれば夫等に就き左に昆蟲に關するものゝみを記して讀者に紹介せんとす、第一室は昆蟲標本及び昆蟲圖畫を以て充たされたり中にも名和昆蟲研究所の製作に係る害蟲標本四拾八箱は毎箱植物を挿入し害蟲との關係及經過を示されしは用意周到といふべし、尙同所出版の益蟲集覽(説明書付)害蟲圖解あり、愛知縣農事試驗場より害蟲標本四拾八箱、其他害蟲被害圖、同驅除圖、根蚜蟲、愛知縣分布圖の出品ありて害蟲標本には箱の底に植物を圖し其上に蟲を配せられしは上出來なり、同縣中島郡服部松之亟氏出品の介殻蟲標本一箱愛媛縣南宇和郡長月山口大吉氏出品の夜盜蟲標本一箱大坂府藤戸作次郎氏出品の浮塵子夜盜稻葉蟲類は何れも餘り感服し難く富山縣坪田辰雄氏出品は中央に吉丁蟲を置き周圍に益蟲九種を配せしは如何に栃木縣下都賀郡富山村宮田峯太郎氏出品の害益蟲標本は大形なる箱一個を以て左右二つに區劃し右方には害蟲を左方には益蟲を配布しあれども其益蟲の中に害蟲の混入したるは目障りなりき大坂府門脇嘉治馬氏の出品は害蟲十數種を十區に配置し毎區害蟲數へ歌を添へたるは面白けれども歌には字癖あるを遺憾とす、岐阜縣揖斐郡昆蟲學會出品の害蟲標本五箱奈良縣農事試驗場出品の害蟲標本二箱兵庫縣明石郡井上藤太郎氏出品の害蟲標本一箱益蟲標本一箱は共に優秀のものならん、大阪府農會出品の昆蟲標本二拾六箱は製作排置共に感服する程の價値なし去れど府農會（長？）作間氏の言に該標本製作人は誰を師としたるにあらず全く我流なれば体裁拙なれども斯道に熱心の程は實に感服の外なしと、愛知縣農事試驗場よりは根蚜蟲飼育試驗器の出品あり太坂府三島郡吹田村農會出品の害蟲驅除統計表及苗代田所在地略圖は賞すべし愛知縣渥美郡より岡田螟蟲採卵法成績の出品あり尙此他數点の出品あれども出品人未詳なれば畧す、第二室に入れば此處は全く南河内郡農會出品の螟蟲採卵成績及苗代田摸型を以て充たされたり今同郡農會に於て實行したる方法を聞き得たれば其大要を述べん同農會にては明治三十五年四月各小學校教員及び兒童に對し害蟲驅除講

習會を開き同年五月廿九日螟蟲卵買上法を決議せり、苗代田は短册形にして共同苗代となし一個所百五十坪以下は許可せず、藁は田野に積み置くことを許さず(或る期間なるべし)若し聞かざるときは燒き棄つることゝせり、買上卵塊百九十万五千五百八十六、一塊の買上代金六毛つゝとし凡て郵便貯金臺紙及切手を以てし現金を與へず之れを獎勵金と名づく其金額壹千百貳拾五圓七拾八錢五厘なりきと、内兒童一人に對する最多額の獎勵金を受けしは加納尋常小學校にして平均一人に付實に貳圓四拾貳錢に當り採卵數の最多平均を擧ぐれば白木村の一反步平均七千八百三十二塊にして兒童一人一時間の平均實に百四拾六塊を採集せしと驚くべきとならずや且教師の監督宜しきを得て苗を傷むる等のことなく多數の卵塊を採蒐せしかば大に各町村に歡迎せられたるより本年は之れに倣ひ大阪府下一般に買上法を實施することに確定せりと聞く、兒童は之れより大に貯蓄心を興し昨年末に於て貯金總額四千九百九拾八圓壹錢四厘に達せりといふ、第三室に到れば害蟲驅除器械を陳列し室外には北河内郡農會より蒸熱藁の出品あり該藁は螟蟲被害藁を集めて天保山に運び蒸氣殺蟲法を行ひたるものにて今尚同法を行ひつゝありと聞く、刈取再出稻試驗成績（螟蟲被害の稻を悉く刈取て其株より發芽せしめ收穫の如何を試みん爲め昨年は無害の稻を以てせり）

刈取期	刈らざるもの	七月九日刈	七月十九日刈	七月廿九日刈	八月十日刈
玄米收穫高	石 二、五五二	二、四〇五	二、一〇七	一、九二〇	一、六八五

以上は余が縱覽せし大要なるが恰も開會の初日なりし故出品人の名札をも貼付なきを以て誰が出品なるか判明せざれば一々事務員に聞糺したれども記事中出品人未詳とあるは事務員の多忙なりし爲め質問を見合せたるなりと讀者之れを了せよ

◉第十五回全國害蟲驅除特別講習會

三月十日より開講の、第十五回全國害蟲驅除特別講習會は、二十三日迄に普通學科を修了し、廿四日永澤講師及森助手引率の下に、修學旅行として滋賀縣農事試驗場を參觀し、其より比叡山に昆蟲採集すべき筈の所生憎雨天の爲め京都に直行して同地に一泊の上大阪市に出で、廿六、廿七の兩日は第五回内國勸業博覽會場に到り、全國より出品の昆蟲標本數百點に就き、一々講習生をして各自批評せしめ、講師は之が判定を下して研究せしは本誌前號の論說欄に於て、博覽會なるものは單に昆蟲學の上より見るも、優に一大活學教室たるの資格を有するなるべしと豫言せしを、今茲に、之を實地に確めたるなり。廿八日は、午前中各自の意に任じ、午后一時より同市東區天王寺淸水八百松樓に於て、修業證書授與式を擧行せり。今其次第を記さんに、重なる來賓には貴族院議員田中芳男氏、同氏の令息五一氏、令孫健太郎氏、秋田縣技師農學士小西文之進氏、農科大學教授理學博士佐々木忠次郎氏の諸氏を始め、大阪朝日、大阪毎日、大阪新報、及岐阜市濃飛日報等の諸新聞社員、三宅岐阜縣第四課長、渡邊、林、松尾縣屬、春日、大野の兩岐阜縣勸業委員等の人々にて、席定

まるや、名和昆蟲研究所長は授與式舉行の旨を告げ、次ェ証書を授與して一場の訓諭を爲し、夫より小西文之進氏の祝辭に代ふる演説、春日善一氏の祝辭朗讀、第一回全國害蟲驅除講習修業生三枝角太郎氏の演説ありて、講習生總代大分縣染矢良佑氏左の答辭を朗讀して、式を終り、暫時休憩の後、全國害蟲驅除講習生の同窓會ェ移れり。

答　辭

天時地利人和三ツナガラ之ヲ併セ得テ玆ニ第十五回全國害蟲驅除特別講習會修業證書授與式ヲ擧行スルニ當リ昆蟲學界錚々ノ名士並各新聞記者及同窓先輩諸君ノ臨場ヲ辱フシ且賜フニ高諭ヲ以テセラル本會ノ光榮何モノカ之ニ如カン抑モ萬般ノ事利ヲ興サント欲スレバ必スヤ先ツ之カ害物ヲ除去セザルベカラズ我ガ殖産力ノ增進ハ諸害蟲ノ驅除豫防ニ如クハナシ然リト雖モ經濟的ニ之ガ驅除豫防ヲ行ハント欲スレバ必スヤ蟲類ノ發生經過習性ヲ知悉スルニアラズンバ能ハス生等短時日ノ講習ナリト雖モ懇切ナル名和永澤兩講師ノ薫陶ニヨリ幸ニシテ其一端ヲ窺フコトヲ得タリ爾今以後千挫不屈万折不撓ノ精神ヲ以テ彌益斯學ヲ勉メ近キ將來ニ於テ東西相呼ヒ南北相應ジ經濟ニ適スル根本的大驅防ヲ行ヒ諸害蟲ノ全滅ヲ期シ大ニ我經濟界ニ貢献スル處アラント欲ス聊カ蕪辭ヲ綴リ答辭トナス

明治三十六年三月廿八日　第十五回全國害蟲驅除特別講習會員總代

大分縣　染矢良佑敬白

◉全國害蟲驅除講習會修業生同窓會

別項記載の通り、第拾五回全國害蟲驅除特別講習會修業証書授與式終了後、引續き開會せり。今其順序を記さんに、出席者百三十餘名にして、名和昆蟲研究所長名和靖氏開會の旨趣を演べ、次に貴族院議員田中芳男氏及び濃飛日報社主筆原眞澄氏の演説あり次に病氣又は差支等の爲臨席出來ざりし左の人々よりの祝詞祝電を披露せり。

工業應用昆蟲畫報(り十四)（パイプ）（大阪市　由比昌太郎寄贈）

福岡縣桑名伊之吉氏、靜岡縣増田秀雄氏、同縣吉野寅之助氏、鳥取縣岡野庫八郎氏、兵庫縣堂本俊治郎氏、同縣井上藤太郎氏、岡山縣稲井克雄氏

次に、第三回全國害蟲驅除講習修業生大阪府橋本亮氏外二名の發議ェ係る、左記の數項を決議し、直ちに宴會に移れり。

決議事項　一、同窓會を成るべく年一回開會する事。二、同窓會員間の氣脈は昆蟲世界誌上に於て通ずる事。三、同窓會員間に於て勉めて採集品を交換する事。四、同窓會員に非常の災厄あるときは之が救濟方を講ずる事。五、同窓會員旅行採集のときは常に便宜を與ふる事。

尙、宴會の摸樣を少しく記さんに、宴席に於て來會者一同へ、名和昆蟲研究所より寄贈の紀念盃、昆蟲世界雜誌幷ェ害蟲圖解、大阪硫曹會社の寄贈品箱入菓子及び大阪市街幷に博覽會場全圖、岐阜縣大垣町西

濃印刷株式會社寄贈の紀念昆蟲繪葉書、靜岡縣燒津町吉野寅之助氏の寄贈ょ係る同氏が特許を受けたる莖切鎌、新潟縣岩船郡神納村佐藤榮氏寄贈の印刷物（岐阜の蟲歌）を配布し、尙大阪硫曹會社由比昌太郎中島喜三郎の兩氏より同窓會費の中へ金五圓、岐阜市安田定壽氏寄贈蝶摸樣付莚、岐阜縣揖斐郡小森省作氏寄贈昆蟲摸樣付漆器、名和昆蟲研究所の寄贈に係る昆蟲應用の工藝品數十点は、或は餘興の福引とし て、或は抽籤として、夫々一同へ分配せり。着席は例の蟲名を附して席順を定め、互に相献酬して同窓間の舊交を温め、絃歌盛んょ起りて非常ょ盛會なりき。

因に記す、今回の同窓會に最も斡旋盡力せられし人々は、名和先生夫妻を始め名和昆蟲研究所員、西濃印刷株式會社の河田貞城氏、新農報社の由比昌太郎氏、岐阜縣屬松尾國松氏、林茂氏、山内幢爾氏、第三回修業生大阪府橋本亮氏、第十二回修業生新潟縣佐藤榮氏第十四回修業生大阪府錐部利作氏、同群馬縣高山助太郎氏、第十五回修業生新潟縣山田益五郎氏、同佐藤田次郎氏、同秋田縣富樫明治郎氏、同大分縣染矢貞佑氏、同奈良縣松村松次郎氏、同岡山縣原田寛太郎氏等の諸氏なりき。

◉特別講習修業生の姓名

別項に記せる第十五回全國害蟲驅除特別講習會の修業生は左表の如く、一府十七縣四十八名なるが皆々熱心と一致とにより晝夜の別なく苦學の結果其成績に至りては非常に優良なりき尙姓名畧歷等は次の如し。

組別	府縣名	郡市名	町村名	族籍	役名	氏名	生年月	畧歷
第一組	山形縣	西村山郡	西五百川村	平民	組長	長岡安吉	慶應二年九月	農事講習會修業、農業ニ從事ス
	兵庫縣	氷上郡	吉見村	平民		宮本盛一	明治十二年七月	高溪義塾卒業、村吏員
	千葉縣	印旛郡	八生村	平民		山田新之助	明治十四年九月	高等小學校卒業、農事講習會修業
	長野縣	東筑摩郡	里山邊村	士族		藤森清	明治十四年十月	高等小學校卒業、農蠶講習會修業
第二組	德島縣	坂野郡	川內村	平民		中瀨陸太郎	明治九年九月	師範學校卒業、小學校訓導
	奈良縣	北葛城郡	陵西村	平民		松村松次郎	明治九年七月	北葛城郡吏員
	岡山縣	淺口郡	小坂村	平民		中元義忠	明治十二年五月	農學校農科卒業、淺口郡農會技手
	京都府	與謝郡	上宮津村	平民	組長	武若喜藏	明治十六年十月	高等小學校卒業、農事ニ從事ス
第三組	兵庫縣	多紀郡	畑村	平民		木寅廣造	明治八年五月	郡農事試驗場員、農友會幹事
	新潟縣	三島郡	與板町	平民	組長	山田益五郎	明治九年二月	高等農學校在學中
	長野縣	上水內郡	大豆島村	平民		保谷元三郎	明治十一年十月	農事講習會修業、農蠶業ニ從事
	鹿兒島縣	鹿兒島市	千石町	士族		河野綾橘	明治十三年九月	鹿兒島縣農學校卒業、農事試驗場ニ研究中
第四組	秋田縣	仙北郡	神宮寺町	平民	副級長	富樫明治郎	明治四年四月	縣農會評議員
	德島縣	板野郡	大山村	平民		遠藤庄八	明治十年一月	明應義塾卒業、蠶業ニ從事ス
	奈良縣	磯城郡	川西村	平民	組長	片山莊平	明治十二年十月	中學校三ヶ年修業
	山梨縣	東八代郡	五成村	平民		角田伊德	明治十四年十一月	農事講習會修業、農業ニ從事ス

組	府縣	郡市	町村	族籍	役	氏名	生年月	履歴
第五組	大分縣	南海部郡	上野村	平民	級長	染矢良佑	明治元年四月	農事講習會修業、南海部郡農會幹事
	高知縣	香美郡	前濱村	士族	組長	弘光驍馬	明治九年十月	農商務省京都蠶業講習所卒業高知縣蠶種檢查員
	福井縣	大野郡	富田村	平民		松本甚太郎	明治十四年十月	福井縣農學校別科卒業、昆蟲講習會修業
	愛媛縣	松山市	新玉町	平民		松末清	明治十七年八月	元愛媛縣師範學校書記
第六組	山形縣	南置賜郡	塩井村	平民	組長	齋藤作兵衛	元治元年三月	南置賜郡農事試驗場長
	新潟縣	岩船郡	神納村	平民		佐藤田次郎	明治七年二月	元神納村役場書記、農業ニ從事ス
	德島縣	海部郡	宍喰村	平民		吉田政吉	明治十七年二月	農事講習會修業、農事ニ從事ス
	京都府	天田郡	川合村	平民		土佐市藏	明治十六年五月	元錦林學校教員、村農會技手
第七組	千葉縣	安房郡	岩井村	平民	組長	仲山順之助	明治三年五月	農事講習會修業、農業ニ從事ス
	兵庫縣	朝來郡	山口村	平民		長谷波廣助	明治八年七月	農事講習會修業、郡農會評議員
	愛媛縣	越智郡	素鵞村	平民		伊賀金次郎	明治十年四月	中學校卒業農業ニ從事ス、陸軍步兵少尉
	大分縣	南海部郡	上堅田村	平民		岩田秀太郎	明治十年六月	農業蠶業講習會修業、南海部青年農會副長
第八組	愛媛縣	越智郡	櫻井村	平民	組長	加藤徹太郎	明治七年十二月	農事講習會修業、農友會幹事
	岡山縣	川上郡	日里村	平民		原田寛太郎	明治八年一月	速記術專修所修業、農友會幹事
	兵庫縣	朝來郡	竹田村	平民		新田猛治	明治十六年一月	農事講習所卒業、農事試驗場助手
	德島縣	勝浦郡	勝占村			宮本國次郎	明治十六年四月	中學校修業、農業ニ從事ス
第九組	兵庫縣	朝來郡	東河村	平民	組長	細見愛三郎	明治六年六月	農事講習會修業、農業ニ從事ス
	千葉縣	印旛郡	根郷村	平民		渡邊庄治	明治十年四月	根郷村農會長、同村助役
	愛媛縣	松山市	北夷子町	平民		秀野紀	明治十五年十二月	東京工手學校修業、農業ニ從事ス
	德島縣	海部郡	三岐田村	平民		增田茂吉	明治十五年七月	農事講習會修業、農業ニ從事
第十組	兵庫縣	氷上郡	吉見村	平民	組長	荒木大五郎	明治九年一月	高等小學校卒業、農事講習會修業
	長野縣	北安曇郡	松川村	平民		帶刀喜市	明治八年六月	昆蟲及農業講習會修業、農業ニ從事ス
	德島縣	勝浦郡	勝占村	士族		的場宗三郎	明治十七年一月	農事講習會修業、農業ニ從事ス
	愛媛縣	溫泉郡	石井村	平民		岡田朋義	明治十七年四月	縣立農學校二ヶ年修業ス
第十一組	高知縣	香美郡	明治村	士族	組長	吉本重鄉	明治四年十月	元明治村裁縫學校長
	德島縣	板野郡	川內村	平民		中瀨謙吉	明治十二年三月	師範學校卒業、小學校訓導
	千葉縣	山武郡	公手村	平民		行木勝	明治十五年三月	縣立農學校卒業、印旛郡農事教師
	新潟縣	佐渡郡	二宮村	平民		飯田弘	明治十六年一月	中學校卒業、高等農學校在學中
第十二組	兵庫縣	神崎郡	長谷村	平民	組長	芦田耕治	明治八年十二月	農蠶學講習修業、長谷村助役
	高知縣	長岡郡	大篠村	平民		中澤涙治	明治十年四月	高知縣農學校卒業、農事試驗場技手
	岐阜縣	安八郡	川並村	平民		大橋由太郎	明治十四年十月	中學校二ヶ年修業、村役場書記
	群馬縣	佐波郡	上陽村	平民		關口福太郎	慶應三年二月	佐波郡農會評議員

◉內國勸業博覽會昆蟲標本評

第五回內國勸業博覽會に出品の昆蟲標本に對する批評は、豫記の如く之を本號より順次連載すべし。此批評は、當昆蟲研究所の永澤小兵衛氏が、或標準に照合して可否を鑒別せしものに係れば、決して無責任の言辭を弄するものにあらず、故に中ゝ或ひは酷言冷語を加ふるもの莫きにあらざる可きも、其の全般に對する觀察に至りては、稍正鵠を失せざるべきか。

◎出品に對する概評　今回開設の內國勸業博覽會に出品の昆蟲標本は、南の方臺灣島より、北の方奧羽地方に涉り、其數實に數百點に下らず。而して之を大別する時は、農林の昆蟲と、學術研究用の昆蟲となすことを得べし。則ち前者には、植物に加害の蟲種より、その敵蟲及び害蟲驅防規則外の蠶蠅をも含ましめ、後者には、蟲學上の分布調査より、衛生の害蟲たる瘧媒蚊を包有せり。故に斯學研究上、不少の利便あるは勿論、歷々として近年蟲學普及の跡を知るべきものあり。乃はち之を前回に比較すれば、蟲學思想鼓吹の點に於ては、稍成功に殆しとすべし。

然れども、細かに之を觀察する時は、未だ頗ぶる遺憾の節なきにあらず。例へば各官衙、學校、農會間に於て其連絡を圖らざりし如き、個人出品の意外に多きが如き、收容蟲種の雜駁にして且つ少數なるが如き、昆蟲と植物の關係を示せるもの稀少なりしが如き、幾多の天敵を添加せざりしが如き、種類の選擇を愼まざりしが如き、出品物に對する說明を粗漫にせしが如き、邦稱を誤り學名を記入せざりしが如き、觸角脚部の整理より其他の裝成を顧ざりしが如き、保存を忽諸に附して早巳に黴菌を宿らしめたるが如き、分科分類に交錯多きが如き、驅除器械及び藥劑に優良のもの無きが如き、昆蟲に對する記載及び附箋等を缺きしもの多きが如き、著書及び方案に觀るべきもの無きが如きは、決して斯學發達の兆と言ふことを得ざるべし。去れば、俚言を藉りて之を評すれば、所謂ドングリの身長較べに過ぎざるなり。此より之を讀者に紹介するに當り、先づ臺灣、水產二館の出品より始めて、次に美術館昆蟲應用品に入り、再轉林業館より農業館に及ばんとす。蓋し審查未了の際に、恣に私評を加ふる時は、爲めに不少の影響を來たすべきを以て成るべく他に煩累を及ぼさしめざるやう注意するは、操觚者の德義なりと信ぜしに因れり。

◎臺灣館　臺灣館に陳列せられしものゝ中にて、昆蟲學に關係を有し、兼て一般觀者の參考に供すべきは、恐くは蚊子の寫眞に及くもの莫かるべし。此寫眞は都合數葉より成り(一)は普通蚊種の卵塊(二)は瘧媒蚊種の卵塊(三)は邦產瘧媒種の幼蟲臺灣產瘧媒種の幼蟲、普通種の幼蟲及び瘧媒種の幼蟲(四)は瘧媒種の蛹、普通種の蛹(五)は普通種の雄(六)は普通種の雌(七)は邦產瘧媒種の雄(八)は同種の雌(九)は臺灣產瘧媒種の雄(十)は同種の雌にて、何れも引伸寫眞器を以て放大となし、一見蚊屬の區別を知らしめし者なれば斯學者より、延て刀圭社會に益する所多し。然れども、これに關する解說とては一も之無く、唯不規則に配列せられしに止まれば未だ弘く覽者の注目を惹くに足らざるのみならず、之を一見したりとて、何が爲に出品せられしやを理會する者少なかりしが如し。

同島傳染病及び地方病累年比較表の示す所によれば、去三十年に、內地人の瘧疾に斃れし數は、患者一万人に對し二百三十八人九分

にて、卅一年には百十一人八分弱、卅二年には百十二人二分強、卅三年には八十人九分弱、卅四年には六十人三分の多數なりきと云へば、臺灣經營上此種の説明を要するや固より論なかるへきに、その玆に出でざりしは、千慮の一失とや謂はまし。なほ總督府は一昨年一部の醫家の命名せるアノフエーレス北海道てふ假稱を採用せしにや、各寫眞に此名稱を記載したるが、是將た却つて觀者を迷はしむる仲媒たらざる莫きか。蓋し北海道の名は未だ廣く内地に分布の種類たることを説明するに足らざるのみならず、其命名の理由を知らざる者をして、頗ぶる疑ひを挿ましむるものあればなり。余は信ず、斯る小事と雖ども、其影響する所少なからざれば、寧ろ内地產の意義を附することそ適當ならんと。

工業應用昆蟲畫報の十五（置物）

蚊子の寫眞に對して、臺灣產の昆蟲標本八函あり、何れも分類的に排列せられしものにて、其種類また少なからざれば、斯學研究者は誰しも、垂涎せざることと莫し。是は總督府國語學校の出品にて博物科敎員永澤定一氏の整理せしもの丶由なるが、大體に於て異論無しと雖も、科名を舊式に採り、また横蚑蟲科に僅に一頭を添附し、天狗蝶科に二頭を示し乍ら、其異同を知らしめざる等は、隔履の感なきにしもあらず。特に之を扁額に擬して、高く楣間の裝飾物となしたるが如き、又その陳列の順序を紊して各類目を混ぜしめたるは研究者に一方ならぬ不便を與ふる點にて、陳列係の無邪氣なる寧ろ憫むべきものあり。何れも各科の代表蟲を蒐收し、製作また普通の出來なるも、展翅板は舊製のものらしく、且昆蟲を左列させしも異樣に思はしめぬ。更に望蜀主義より云へば、蟲側には一々土言と漢名とを記入せられ度かりしなり、其上學名あれば、なほ恩惠を被けし者多かりしならん、惜しき事してけり。試みに、その收容の科類を數へたるに、左の十目數十科類に上り、有吻目、直翅目、鞘翅目には、未だ見聞せざる奇品も鮮なからざりき。

○彈尾目　シミ科。トビムシ科。

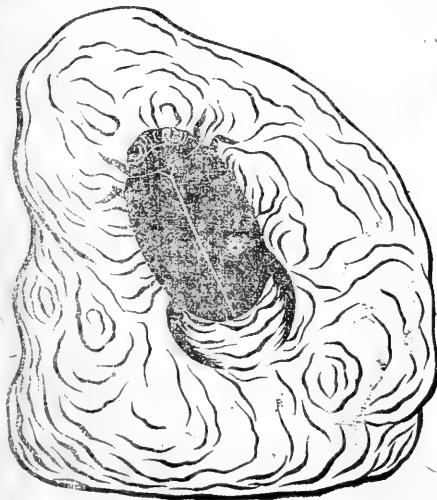
○直翅目　ハサミムシ科。アブラムシ科。カマキリ科。ナナフシムシ科。イナゴ科。キリギリス科。コホロギ科。

○毛翅目　イサゴムシ科。

○擬脈翅目　トンバウ科。イトトンバウ科。

○有吻目　セミ科。ヨコバヒムシ科。ユリノハナスヒ科。ヒゲボソガメムシ科。メダカガメムシ科。アヅキガメムシ科。ガメムシ科。トコジラミ科。

○脈翅目　カトンバウ科。

○鱗翅目　ハナセセリテフ科。シジミテフ科。タテハテフ科。マダラ

（岐阜縣□野村安太郎氏寄贈）

・テフ科。アゲハノテフ科。テングテフ科。ジヤノメテフ科。コフテ科。外に蛾類數十種あり。
〇鞘翅目　隱四節類。隱五節類。異節類。五節類。
〇雙翅目　イヘバヘ科。アシナガバヘ科。ムシヒキアブ科。アブ科。カ科。カガンボ科。
〇膜翅目　有錐類各種。有劍類各種。
なほ他に手藝科三學年生の刺繡せる牡丹に蝶摸樣のもの、刺繡科敎授標本に供用の藤花に蝶摸樣の布帛等ありしも、支那一流の形式に止まれば茲に略す。

◎水産舘　此舘には昆蟲に關するもの極めて少なし、然かも水産講習所の出品に係る三種の釣緡は國益上輕視すべきものにあらず、從來テグスと云へば、天蠶の絲腺を用ゐしも、茲に陳列のものは、原料を家蠶アーレ、家蠶青熟、家蠶バクダに取り、各種の繭、幼蟲、絲腺をも添附して觀者の注意を促がせり。浸酒の方法適當にて、配列また佳なり、但之を出品するに臨み、何が故に他の官衙と連絡を通ぜざりしやを怪しむのみ。假令今回の官衙の出品は、封建割居の觀ありとは云へ。●奈良縣生駒郡郡山町平野竹史氏の出品に魚族の害蟲標本あり、其種類はタガメ、ユリノハナスヒ、コオヒムシ、ミカラ、ゲンゴラウムシ、コガタノゲンゴラウムシ、ヤゴ、ガムシ、ミヅスマシ、フサセンムシ、ミヅカマキリ、ミヅムシ、コミヅムシ等にて、製作は熟練を缺けるが如し。●大阪市西區本田町通清水五郎兵衞氏は、釣緡數種を出品せしが、一見精粗良惡を知るの便あり。●秋田縣北秋田郡の下遠時之助氏及青森縣弘前市の下山竹次郎氏の蟲形釣鉤は、蜻蛉その他に擬したるものにて、可なり巧みに製出せしかども、普通のものなれば評するまでの價値なかるべし。

(未完)

◉寶飯郡小學校冬季昆蟲展覽會規則

前號に於て愛知縣寶飯郡小學校冬季昆蟲展覽會よ關する記事を揭げしが愈々開期は五月三日より一週間と確定せり尙該規則を得たれば左に揭げん。

第一條　本會は昆蟲學思想の發達及び之が應用を圖らんが爲め明治卅六年五月三日より同月九日迄一週間寶飯郡役所内に於て開設す●第二條　本會の出品は凡そ左の各種とす。〇第一類分類標本　〇第二類害蟲標本　〇第三類益蟲標本　〇第四類敎育用標本　〇第五類裝飾用標本　〇第六類　參考品●第三條　前條の出品は學校其他團體若くは自已の製作又は考案に係るものとす●第四條　出品は參考品を除き總て審査す、但參考品と雖も出品人の希望により審査することあるべし●第五條　出品人は出品に對し再審査を乞ひ又は授與の褒賞を拒み若くは審査の決定に對し異議の中立をなす事を得ず●第六條　出品は審査上優等なるものには其の出品に對し一等より四等に至る等級に從ひ褒賞を授與す、但授賞外の者又は參考品と雖も特に紀念狀を授與することあるべし●第七條　本會に出品せんとするものは第一號書式の出品目錄を作り明治三十六年四月廿日までは寶飯郡役所第三課に差出すべし●第八條　現品には採集場所及其の年月日を記載したる小札を一頭毎に添附すべし、但貝殼蟲等の類は一枝毎に添附すべし●第九條　出品及解說書は明治三十六年四月廿七日までに必ず到着の日取を以て會場へ發送すべし●第十條　出品運送に關する費用は總て出品人の負擔とす●第十一條　本會に左の役員を置く。會長壹名。事務委員長壹名。審査委員長壹名。事務委員若干名。幹事若干名。審査委員若干名●第十二條　會長は本會一切の事務を統轄す。事務委員長は會長の指揮を受け事務を整理す。審査委員長は會長の囑托を受け審査事務を統轄す。事務委員は會長及び事務委員長の指揮を受け事務に從事す。幹事は會長及び事務委員長の指揮を受け會務を處理す。審査委員は審査委員長の指揮を受け審査事務に從事す●第十三條　開會中は毎日午前八時より午後四時まで衆庶の參觀を許す●第十四條、參觀人は本會役員又は監守人の承諾を得るに非らざれば陳列品に手を觸るゝことを得ず(以下書式略)

◉紀念昆蟲繪葉書

前項記載に係る全國害蟲驅除講習修業生同窓會へ、大垣町西濃印刷株式會社より寄贈されし繪葉書は、一組都合三葉にて、一葉は綠と樺色との暈し地に、イトトンバウと寄生蜂とを配置したるものにして、頗る優美なり、一葉は岐阜蝶と其食草たる細辛とを配置したる十二回着色石版刷りの由なるが、是亦意匠と云ひ、技術と云ひ、驚くべきものにして、岐阜蝶が飛揚の樣は實に眞に逼まれり、尙他の一葉は、即ち下圖に示せる如く、第五回內國勸業博覽會農業館內岐阜縣の昆蟲門を寫せるものなるが技術に於ては前二者に比し、或は遜色あるも、有繫に老鍊と機敏なる同會社なれば、却々面白き思ひつきにて、見事なるものなり

第五回博覽會農業館の昆蟲門 （大垣西濃印刷株式會社印刷）

●昆蟲學者の歸朝　兼て洋行中なりし米國理學博士河内忠二郎氏は本月十三日無事歸朝されたる由當昆蟲研究所へ通知ありたり。

●昆蟲標本の審査　第五回內國勸業博覽會に出品の昆蟲標本の內、教育館の分は、本月二日頃より審査始まりて、最早結了の由なれども、農業館の分は、十五日頃より、開始の由に聞知せり。

●溫室と瓢蟲　今回博覽會場內に設けられたる溫室には、內國產を始め、諸外國の植物ありて、時ならぬ花、今を盛りと咲き揃ひ、一段の美を放て觀覽者を迎ふる様、最も見事なるが、之れに伴ひ、蚜蟲、貝殼蟲等の害蟲は、時を得顔に容捨なく繁殖し、係員は、大に苦辛して驅除に盡力せられしも、繁殖力に強さと、且つは適當の溫度を得たる該蟲は、容易く滅盡せず、大に苦慮されしかば、當昆蟲研究所より、彼の天敵たる瓢蟲類多數を送りたれば定めて相當に働き居るなるべし。

●岐阜縣害蟲驅除長期講習と短期講習會　既記の如く、岐阜縣害蟲驅除長期講習は、本月五日に、短期講習會は、十日に簡單なる開講式を擧げしが、詳細は紙面の都合に依り次號に記載すべし。

●工業應用昆蟲畫報（第四報）　本號に掲載の應用昆蟲畫報の（十四）はパイプの眞形にして角質に數頭の昆蟲を巧みに彫刻したるものにて今其技術者の姓名を知るに由なけれ共由比昌太郎氏には非常の困難をして得られ更に當所に寄贈せられたるものなり又（十五）は美濃國金生山產出の褐色大理石に黑色大理石の附着したるものを以て黑色の分にコガタノゲンゴロウムシを巧みに彫刻したるものにて一見恰も現蟲の附着したるが如し、野村安太郎氏は元來大理石彫刻に妙を得たる人にて曾て全國昆蟲展覽會の際にキアゲハテフを出品して賞讃せられ今回又博覽會へ枯木にウバタマムシの附着したる所を出品されたるが實に眞に迫りて觀るもの一人として驚かざるはなしと云へり。

●岐阜縣昆蟲學會記事　岐阜縣昆蟲學會第五十二回例會は、前號豫報の通り去四日午後より名和昆蟲研究所內に開會せり。今其次第を記さんに、第一席名和副會長開會の辭に、續て特別會員長野菊次郎氏今回轉任の理由を報告し、第二席愛知縣田中周平氏大阪府農會主催に係る作物病蟲害展覽會觀覽談、第三席永澤小兵衛氏松岡恕庵先生傳補遺、第四席岐阜中學校教諭長野菊次郎氏は今回東京市の學校に轉任につき告別の辭を述べ、次て害蟲驅除に黴菌を利用することに就き、外國の例を擧げて講話せられ、次に名和副會長は、本會を代表して、是迄長野氏が本會に對し、非常に盡力せられしを謝し、一同大に惜別の意を表し、散會したりき。

（雜報、四月十四日脫稿）

◎害蟲圖解の刊行に就き

此害蟲圖解は、本邦産有害蟲種の大要を、何人にも理解し易からしめんがため當昆蟲研究所の一事業として、數年續刊し來れるものにて、既に府縣の各級農會より諸學校、警察署、郡衙等に備附られしもの甚だ多く、或地方の如きは之を小學校の教授用に充てしも有之候、然るに近來これと類似のものを出版して當昆蟲研究所の名を騙り、若くは同一の名稱を附して、是は害蟲圖解を更に放大圖に製せしものなりなど言觸らし、其僞版同樣乃ものを販賣する者有之哉にも相聞へ候間、愛讀者は此際十分御注意相成度候。

◎害蟲圖解既刊の分廣告

- ●第一。桑樹害蟲エダシャクトリ（枝尺蠖）（三版）
- ●第二。桑樹害蟲トゲシャクトリ（刺尺蠖）（再版）
- ●第三。稻の害蟲イチノズヰムシ（二化生螟蟲）
- ●第四。煙草害蟲タバコノアヲムシ（煙草螟蛉）
- ●第五。稻の害蟲イチモジセセリ（苞蟲又葉捲蟲）
- ●第六。桑樹害蟲ヒメザウムシ（姫象鼻蟲）
- ●第七。桑樹害蟲シンムシ（心蟲）
- ●第八。稻の害蟲イチノアヲムシ（稻螟蛉）
- ●第九。茶樹及果樹害蟲ミノムシ（避債蟲）
- ●第十。豌豆害蟲ヱンドウキリムシ（夜盗蟲又地蠶）
- ●第十一。桑樹害蟲クハカミキリ（桑天牛）
- ●第十二。稻の害蟲ツマグロヨコバヒ（褄黑横蚊又浮塵子）
- ●第十三。桑樹害蟲イトヒキハマキムシ（糸引葉捲蟲）
- ●第十四。茶樹害蟲チヤケムシ（茶蛄蟖）
- ●第十五。馬鈴薯及茄子の害蟲テントウムシダマシ（擬瓢蟲）
- ●第十六。稻と麥の害蟲キリウジガガンボ（切蛆蚊姥）
- ●第十七。桑樹害蟲キンケムシ（金條毛蟲）
- ●第十八。桑樹害蟲アヲハマキムシ（青色葉捲蟲）

定價壹枚金拾五錢　郵税貳錢　百枚以上一纏壹枚拾錢の割郵税百枚に付貳拾錢

- ●第十九。桑樹の害蟲クハケムシ（桑蛄蟖）（昨年八月新刊）
- ●第二十。稻の害蟲フタホシズヰムシ（三化生螟蟲）（同十一月新刊）

發行所　岐阜市京町　名和昆蟲研究所

登録商標

硫曹

硫曹肥料

●硫曹肥料を肥作に用ゆれは第一ニ米質を宜しくし且つ頗る收穫を增すべし一反歩ニ付五六斗より一石二三斗を增すニ之を舊肥料を用ひたるものニ比すれは見掛ヶ遥に宜しく目方も重く土用を越して蟲附稀なり舊肥料を用ひたるものは之に反したこへ見掛は異ならざるも米質惡しく又糾の收穫は同じくとも玄米となして一反歩三斗以上の相違あり之を舂きて白米となすに硫曹を用ひたる分は舂減尠なく飯ニ炊くに頗る炊殖すべし(例之は舊肥料の米は水一升米一升なるに硫曹の分は米一升ニ水一升二合ならでは飯に適せず即二割以上炊殖の相違あり)●硫曹肥料を用ゆる農家は能々以上の事柄に注意し之を實驗して其效用の偉大なるニ驚くべし●輸出米は硫曹肥料を用ひたるものならざるべからず然らざれば南洋熱帶地方通過の際多く腐融すべし●第一(過燐酸)を稻作に用ゆるニは一反歩に三貫目より五貫目迄を舊肥料(大豆粕、油滓、堆肥、廐肥等)に混交使用すべし●硫曹肥料のみ施すなれは第八號を最も適當とす一反步に十貫目乃至十五貫目を二回に分施すべし(堆肥は何れニも施すを宜しとす)●硫曹肥料は藍、煙草、薄荷、麻、藺其他陸稻、粟、砂糖黍、桑并野菜物、菓物等に施して其效實ニ驚くべきものあり●第五回勸業博覽會ニ硫曹肥料を用ひたる農產物を出品し名譽金賞牌を得たるものには金參百圓づヽ銀賞牌には金百圓づヽ一等賞牌ニは金五拾圓づヽ二等賞牌には金貳拾圓づヽ三等賞牌には金拾圓づヽを贈呈すべし●第八回關西府縣聯合共進會に出品せる農產物の内第一等賞を得たる香川縣の裸麥及德島縣の葉藍は何れも硫曹肥料を使用したるものなれば會社は香川縣の近藤太郎氏へ金百圓を德島縣仁井輝藏氏へ銀盃(三ッ重)壹組を贈呈せり●硫曹肥料の明細书に見本等は御申越次第贈呈すべし

大坂西區西野下之町

大阪硫曹株式會社

電話西四一九番

雜誌昆蟲世界合本出來廣告

○第十二號以下完備

本邦唯一の昆蟲雜誌

昆蟲世界合本

第六卷（昨年分）出來

西洋綴金文字入美裝

●昆蟲世界第二卷　五部（自第拾貳號至第拾六號）

右は明治三十一年發行の分（但合本にあらず）

●昆蟲世界第三卷合本壹冊（自第拾七號至第貳拾八號）

右は明治三十二年發行の分

●昆蟲世界第四卷合本壹冊（自第貳拾九號至第四拾號）

右は明治三十三年發行の分

●昆蟲世界第五卷合本壹冊（自第四拾壹號至第五拾貳號）

右は明治三十四年發行の分

●昆蟲世界第六卷合本壹冊（自第五十三號至第六拾四號）

右は明治三十五年發行の分

（合本は每冊金壹圓貳拾錢、郵稅金貳拾錢

其他は定價の通り）

右昆蟲世界の義は發刊以來、非常の高評を博し斯學研究上の寶典として又農事改良の先驅として歡迎せられしも、未た之を合本とするに至らざりしに、今回讀者の勸告により每一年分を裝釘して閲讀索引に便にせり、請ふ愛讀を玉へ。

岐阜市京町　**名和昆蟲研究所**

專賣特許第四九八六號

莖切器發賣廣告

螟蟲の稻作に害を及はすや頗る大にして之れか驅除を爲さんとするには早く病稻を刈り取り害蟲を撲殺するに如かさるなきは精農家諸君の汎く認むる所にして近來之れか實行を唱導せらるゝ頻りなりと雖とも未た完全の良器なく止むを得ずして在來の鎌を使用して徒に他の良稻を戕ふのみならず全く螟蟲の潛伏せる稻莖を根底より刈去ることを得さるが爲め害蟲を驅除の目的を達する能はず空しく螟蟲をして其害欲を逞ふせしむるに到る實に慨嘆に堪へさるなり發明者多年茲に意を籠め遂に完全なる一良器を案出せり此鎌は上圖に示す如く小形の鎌に彈力性の遮匙を付したるものにして本器を使用するには先つ把手（ハ）を握り而して切取らんとする稻莖を左手にて握り遮匙の頭部と鎌の尖端との中間（イ）に當て鎌を少しく前方に押すへし然るときは遮匙（ロ）は彈力性あるを以て外方に開き稻莖を押入るへし一度押入れたる后は遮匙は彈力の爲め元形に復し鎌の尖端を被覆して他の健全なる稻莖は插入する事なし此に於て鎌を根底迄押入れ後方に引くときは毫も他の稻莖を害せす容易く根元より刈取ることを得る至極輕便の良器にして靜岡縣農事試驗場等の協贊を博せり…定價一挺金拾錢…農會等の共同御用は特別割引…

新發明莖切器の圖

イ　ロ　ハ

製造元　靜岡縣小笠郡北木村　山本勘藏

發賣元　同　縣志太郡燒津町　吉野寅之助

縣下一手販賣所　岐阜市京町　高橋喜之助

Protoparce orientalis Butler. (Ebigara-suzume)

By K. Nagano.

This species seems to be same to Sphinx convolvuli, L. Forewings dark grey, whitish-sprinked, with darker dentate striae; two narrow black streaks in middle; an irregnlar black apical line. Hindwings grey, whitish-sprinkled, with four black bands. Expanse 93-107mm. Abdomen dark grey, banded with white, red and black in each segments.

Kiusu, Shikoku, Honsiu, Yezo; 7, 8 ,9. Lar va green or brown, sometimes closely streaked; dorsal line dark; subdorsal line sometimes blackish; on 4-11 seg. often a series of oblique lateral white or dark stripes; horn black or ochreous, tip black: on Ipomaea batatas, Calystegia sepium, Rharbitis hederacca, Tetragonia expansa, etc.; 9,10, 11. Pupa furnished with a long projecting convoluted tongue sheath.

明治三十年九月十日内務省許可
明治三十年九月十四日第三種郵便物認可

◉鱗翅目、蝶の部、天蛾の部
◉擬脈翅目、蜻蛉の部悉皆

右今回寫生圖出來分布調査用紙に納めたれば最早何時にても調査の上記入に差支なければ各地同志の諸君續々標本御寄贈あらんことを望む。

◉アブラムシ(蜚蠊又は滑蟲)の標本

右分布調査材料として、同志の寄贈を望む。

岐阜市京町 名和昆蟲研究所

◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條ニ依り晴雨に關はらず、毎月第一土曜日午後一時より、岐阜市京町名和昆蟲研究所内に於て開く、本會員は不及申、何人も毎會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所内 岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會本年中の日並は左の如し

第五十三回月次會(五月二日)
第五十四回月次會(六月六日)
第五十五回月次會(七月四日)
第五十六回月次會(八月一日)
第五十七回月次會(九月五日)
第五十八回月次會(十月三日)
第五十九回月次會(十一月七日)
第六十回月次會(十二月五日)

：市境界　‖案内道　|市道　イ研究所　ロ陳列館　ハ縣廳　ニ中學校
ホ病院　ヘ郵便局　ト西別院　チ公園　リ長良川　ヌ金華山　ル停車場

◉名和昆蟲研究所案内

當昆蟲研究所の位置は上圖の如くにて停車場よりは僅に十餘町養蟲室あり又新築の岐阜縣物産館構内には常設の昆蟲標本陳列館(五間に十六間)ありて標本器具數千点を陳列す有志諸君の來訪を俟つ

岐阜縣岐阜市京町 名和昆蟲研究所

◉本誌定價並廣告料

壹部 郵税共 金拾錢
壹年分拾貳部郵税共 金壹圓八錢
(見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す)

(注意)本誌は總て前金ニ非れば發送せず
◉爲替拂渡局は岐阜郵便局 ◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす
◉廣告料五號活字廿二字詰一行ニ付金拾貳錢、三十行以上一行ニ付き金拾錢とす

明治三十六年四月十五日印刷並發行

發行所 岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二 (岐阜縣岐阜市京町) 名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二 發行者 名和梅吉
同縣揖斐郡鶯村大字公郷三番戶 編輯者 小森省作
同縣安八郡大垣町字郭百五十三番戶 印刷者 河田貞城

(大垣 西濃印刷株式會社印刷)

Vol. VII. MAY. 15TH, 1903. No. 5.

THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE.

EDITED BY Y. NAWA.

GIFU, JAPAN.

（五月十五日發行）

（毎月一回十五日發行）

昆蟲世界

（第七卷第五册）　第六拾九號

目次　（禁轉載）

（明治三十六年五月十五日發行）

（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

PUBLISHED BY THE NAWA'S ENTOMOLOGICAL LABORATORY IN GIFU, JAPAN.

◉寄贈物件受領公告

一金壹圓五拾錢　奈良縣　片山莊平君
一金壹圓　鳥取縣　神波信藏君
一金壹圓　東京市　高邑虎次君
一本邦産葉蜂科第一集　一册　東京市　中川久知君
一昆蟲摸樣罫紙　貳千枚　岐阜市　井深敏君・山田藤太郎君・小塩百太郎君
一蝶摸樣七寶皿　一枚　岐阜市　三吉艾君
一蜻蛉摸樣商標　一枚　岐阜市　安井此子君
一支那樟蠶蛾　一頭
一大形芋蟲　一頭
一紅天蛾蛹　數頭
一靜岡民友新聞（昆蟲記事）一葉　（以上）靜岡縣　神村直三郎君
一三陸新聞（昆蟲記事）一葉　岩手縣　晴山立郎君

右寄贈相成候に付茲に芳名を掲げて其厚意を謝す

明治三十六年五月十二日　名和昆蟲研究所

◉昆蟲世界購讀紹介者芳名

大阪府　橋本亮君（貳名）
長野縣　三吉米熊君（壹名）
岐阜縣　中井藤助君（壹名）

◉鱗翅目、蝶の部、天蛾の部
◉擬脈翅目、蜻蛉の部悉皆

右今回寫生圖出來分布調査用紙に納めたれば最早何時にても調査の上記入に差支なければ各地同志の諸君續々標本御寄贈あらんことを望む。

◉アブラムシ（蜚蠊又は滑蟲）の標本

右分布調査材料として、同志の寄贈を望む。

岐阜市京町　名和昆蟲研究所

過日錦地へ罷出候節は不一方御優待に預り不堪感銘候皈所早々御挨拶可致之處所務多忙の爲め其義に及び兼候間乍失禮以本紙上謝意を申述候

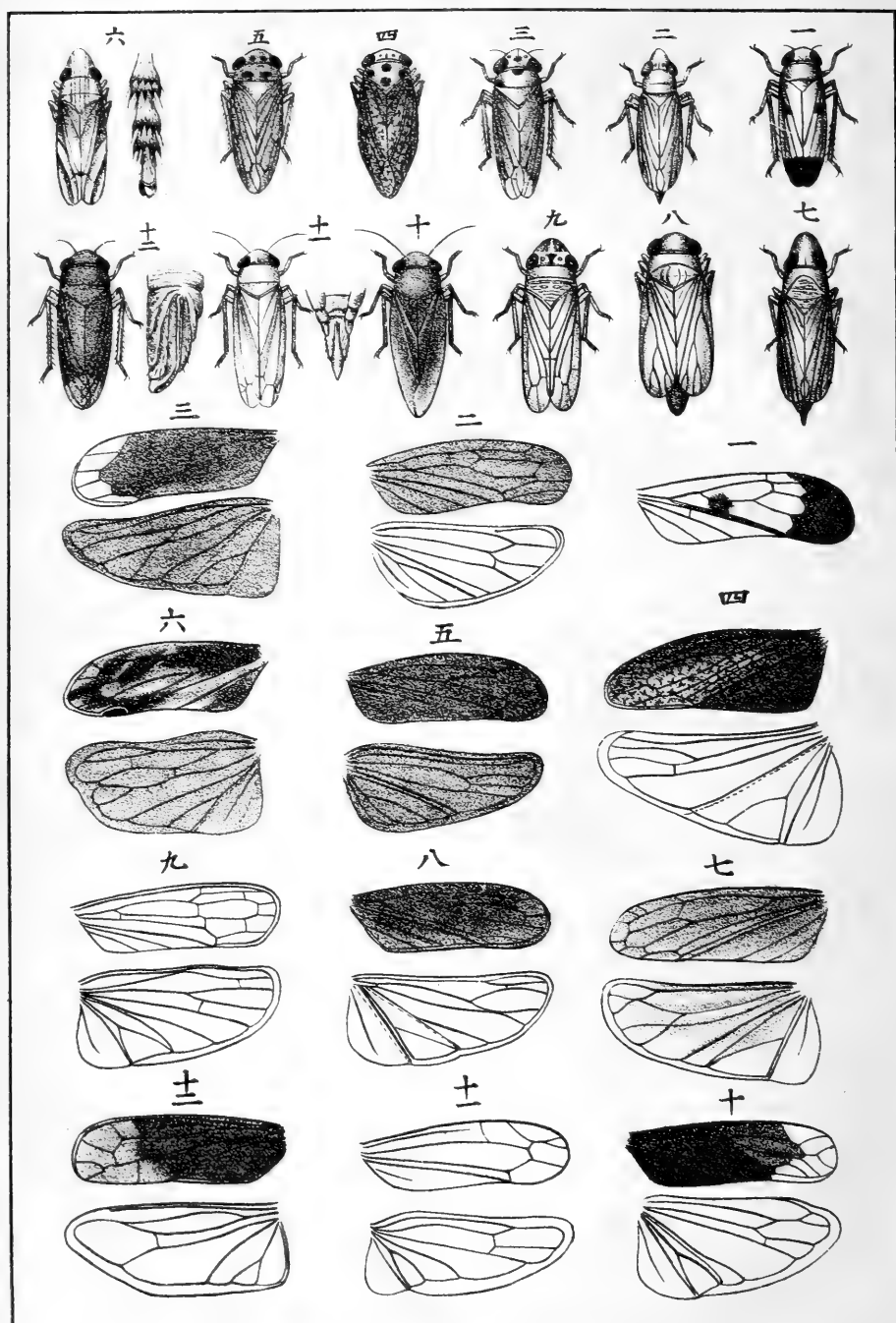
五月十三日　名和昆蟲研究所長　名和靖

愛知縣寶飯郡辱交諸君各位

大博覽會出品標本に對する賞品贈與

第五回内國勸業博覽會に出品の昆蟲標本は、都合數百點の多きを算する趣なれば、隨ひて斯學より稗益を與ふるもの亦少なからざる可し。當昆蟲研究所茲に觀る所あり、此等出品標本中、左の條に該當するもの五點若くは七點を選拔して、各々これに紀念の賞品を贈與し、その斯學界に規範たるの名譽を表彰するとともに、其功勞に對して一片の謝意を致さんとす。

一、紀念賞品は、名和昆蟲研究所證明の修業證書所持者の出品に限り之を贈與す。
一、紀念賞品は、博覽會審査の結果、最優等に位せる者のみに之を贈與す。但し、審査規程に入格せざるため、優等賞を受くること能はざるも、現品の優良と認むべきものある時は、特に之を拔擇することある可し。
一、雜誌「昆蟲世界」愛讀者中、卓絶の標本を出品し若くは優等賞を得たる時は、特に此規程を適用することある可し。
一、紀念賞品は、昆蟲學に關係を有する書籍若くは、名和昆蟲研究所の徽章を附したる工藝品たるべし。

大島産の浮塵子各種(一)

◎大島産の浮塵子に就て（第五版圖參看）

在鹿兒島　生熊與一郎

此處に掲ぐるものは、余が客年夏期休暇を利用して、大島の各島を跋渉し、浮塵子に就き採集調査したるものなり、而して其獲たるものは、浮塵子科(Cicadellidae.)に屬するもの二十五種、薄羽浮塵子科(Fulgaridae.)に屬するもの二十一種、角蟬科(Membracidae.)に屬するもの一種（調査未濟のもの數種）、都合五十余種なれども、内地に産する普通なるものは何れも皆其名稱のみを掲げ、說明を省きたり。然れども内地に産するものと同種にして、体形の異なるもの等は、特に記載する事となしぬ。

第一、Cicadellidae.に屬するもの

其一、ツマグロヨコバヒ變種(Selenocephalus sp.)　大島本島の南部（殊に篠川村）には、褄黒浮塵子の變種、夥しく稻田に發生す。大小、形狀、共に普通の褄黒浮塵子と全く同樣なれども、背面は濃綠にして腹面は普通のものより一層濃く、前翅の臀脈の殆ど中央より半經脈に跨りたる著しき黒紋を有す。而して臀脈も亦多少黒色を帶ぶるを以て、一見前翅の破損して、后翅の黒色を顯したるが如き觀あり。本種は内地（鹿兒島縣下）に於ても五月中旬頃より發生し、常に稻田に棲息すれども、其數極て稀なり。

其二、クサノミヨコバヒ(Tettigonia sp.)　全体、灰黄色にして著しき斑紋無く、紡錘形をなし、

前翅の翅脈は稍縱縞をなすを以て、禾本科植物の種子に酷似す。故に、余は草實浮塵子の新稱を附せり雌は体長二分六厘、翅の開張三分强あり。頭部は灰黃色にして前方に突出し、其后方兩側に灰色長卵形の複眼を有し、尙其兩複眼の中央背面には細き短縱線、及二小黑點を有す。前胸部は大にして稍半球形をなし、頭部と同色を呈す。前翅は前胸部と同色にして細長く、長さ一分三厘、幅約四厘ありて濃色の太き翅脈を有す。后翅は前翅と同長なれども、幅六厘を算し、無色透明にして、翅脈のみ灰黃色をなす肢は何れも黃褐色を呈し、長さ一分一、二厘内外あり。腹部は紡狀にして八關節より成り、頭部と同色を帶び、第二、三、四關節の背面には、各一對宛の褐色帶を具ふ。產卵管は著しく長く約八九厘ありて腹面の殆ど中央より顯れ、腹端に三厘餘を顯す。

該種は本島の北方なる山中に於て多く採集したり。蓋し乾燥地を好むものならんか。

其三、**桑黃浮塵子變種**(Tettigonia sp.)　前種と同じく大形種中の小なるものにして、体長二分四厘、翅の開張三分六厘内外あり。頭部は背腹共に黃褐色を呈し、兩複眼の中央、稍、頭頂に近く方形の大なる黑紋を具へ、其左右側に光澤を帶びたる單眼を具ふ。額面は中央少しく隆起し、頂部に二個、中央部に二個の黑紋を配列し、觸角は細くして鞭狀をなし、長四厘内外あり。前胸部及中胸部の背面は頭部と同色を呈し、前胸部の前方即ち頭部に接したる所、及前翅の翅底に接する部分に、各一個宛の黑紋を有す。而して各胸節の腹面は黃色にして肢も亦同色を帶ぶ。前肢は長さ一分二厘、中肢は一分三厘、后肢は二分三厘内外ありて、后肢の脛節(Tibia)及跗節(Tarsus)には長粗毛を生ず、前翅は稍長方形にして長さ一分六厘、幅五厘ありて、大部分は灰黃色をなし、金屬性の光澤を有すれども、先端三分の一、及后縁に接したる部分は無色透明をなす。后翅は前翅と畧同長にして巾七厘許りあり、全体淡き黑色をな

す。腹部は八關節より成り、背面の一帶は黒色、側面は黄色、腹面は淡黄色にして、肛門は第八關節の背面にあり、鮮黄色の肛門片を有す。

該種は本島の北部なる福本村山中に於て採集したるものなれども、体形及採色は一見黄大浮塵子（小貫氏）桑黄浮塵子（松村氏）に酷似するを以て、余は桑黄浮塵子の變種となせり。今本種と、内地産の桑黄浮塵子(Tettigonia gattigera)(從小貫氏)と異なる主なる點を摘記すれば左の如し。

		内地産のもの	大島産のもの
頭部		幅廣く四個の黒紋を有す	幅狹く背面に一個の黒紋を有す
胸部		前胸の后縁一帶は黒色をなす	前胸の前方及翅底に近き部に黒紋を有す
前翅		淡黄色を帶び后縁に接する部は褐色を呈す	灰黄色を帶び一種の光澤を有す 先端三分の一及后縁に接する部は無色透明
后翅		淡褐色を帶す	淡黒色を呈す
大さ	雌	二分	二分五厘―二分三厘
	雄	一分八厘	二分三厘―二分

其四、トビイロ　マダラ　ヨコバヒ (Thamnotettix sp.)　全体褐色の大形種にして体長二分七厘、翅の開張四分六厘あり、前翅に濃色のY字形斑紋を散在するを以て特徴となす。故に、余は鳶色斑浮塵子の新稱を附せり。頭部は頭巾狀をなし、幅廣く、赤褐色にして兩複眼間の前方に二個の小黒點を横列す。額面は中央三角形に隆起して下端は丸え。口吻は三節共に判然すれども短かく、觸角は中央の隆起部に沿ふて存在し、形ち鞭狀にして長さ九厘内外あり。胸背も亦赤褐色なれども、少しく黒味を帶び、四個の不判明なる斑紋を具ふ。前翅は少しく硬化し、長さ一分九厘、幅六厘内外あり、前縁角は稍尖鋭にして全体赤褐色なれども、中央部に白色の部ありて、全面にY字形の斑紋を密布す。后翅は長さ一分八九厘幅八厘許りありて、全体淡黒色をなす。肢は三對共に褐色にして、后肢は太くして長く約一分九厘あれ

ども、前肢並に中肢は一分四厘内外なりとす。腹部は紡状をなし、八關節より成る。其末節を除きたる他の各關節の背面は黒色を呈し、側面、腹面及末節は赤褐色をなす。産卵管は余り長からずと雖も、体に密着せざるを常とす。

該種は大島の南部阿木名村なる川畔に於て多く採集せり。

其五、トビヨツモンヨコバヒ　翅を疊む時は背腹共に赤褐色にして、体長六厘五毛幅二厘内外を算し、頭部の背面に二個、胸部の背面に二個の黒紋あるを以て、鳶四紋浮塵子の新稱を附せり。頭部は前種と同じく頭巾狀をなし、背面は濃赤褐色、腹面は褐色にして黒色の複眼は割合に小さく、兩複眼の中央に二個の大黒紋を横列し、腹面には頂部に二黒紋を有す。

前胸部は半球形にして頭部と同色をなし、頭部の黒紋と相平行して二黒紋を横列す。前翅は全部濃褐色を呈し、長さ九厘、幅三厘内外あり。后翅は前翅より稍々短かく、長さ八厘幅四厘餘あり、全体淡黒色をなす。前肢は長さ五厘、中肢は六厘、后肢は一分ありて共に灰黄色をなす。后肢の脛節及蹠節には長粗毛を生じ、前肢の脛節は稍褐色を帯ぶ。腹部は前種と同じく、腹面及尾節は褐色なせども、末節を除きたる他の關節の背面は黒色をなす。

該種は本島の東部戸口村なる山中に於て採集したりき。

其六、トビイロサジヨコバヒ　全体黄褐色の大形種にして体長二分八厘内外、翅の開張五分あり、頭部は前方に突出して匙狀をなすを以て鳶色匙浮塵子の新稱を附せり。頭部は背腹共に灰黄色を呈し著しく前方に突出す。複眼は割合に小さく、頭部の后頭角に位して黒褐色をなし、背面には縦走する四條の濃色線を具へ、其兩側即ち複眼の前方に、畧三角形をなせる青黒紋を具ふ。額面は稍扁平にして二

縦の濃色線を有し、其二線に沿ふて複眼の少しく前方に、長さ七厘なる鞭狀の觸角を有す。胸部は灰褐色にして、前胸部は畧ぼ長方形をなし、中胸の菱狀部は大にして、其兩節に通じ、五條の濃色縱線を有す。而して其兩側の四條は、頭部の縱線と相接して一直線をなし、腹面は灰褐色を帶ぶ。前肢は一分五厘ありて全部又灰褐色をなせども中肢は一分五厘、后肢は二分五厘ありて、脛節及跗節は鮮青色を帶び、且つ后肢の脛節の外側に二刺と、先端に十個の棘狀突起を出し、跗節の第一及第二小節にも、十個内外の棘狀突起及長粗毛を生ず。前翅は前緣角少しく尖り、長さ二分二厘、幅八厘あり、灰褐色にして三個の大黑紋を有し、內緣は少しく青色を帶び、外緣の后緣角に接する所に、判然したる濃黑紋を印す。后翅は長さ二分、幅九厘あり、全脉に凸凹多くして、且つ全面紫黑色を帶ぶ。腹部は能く肥大し、末節を除きたる背面の全部は淡黑色をなし、腹片及末節は灰褐色をなす。而して產卵管は短かくして末節に短毛多し。

本種ハ大島の西部（久滋村）及德之島南部の山中に於て採集したりき。

其七、大サジヨコバヒ（Healus sp.）　全体青色の大形種にして、前種と同じく頭部ハ匙狀を呈し、体長三分、翅の開張四分五厘餘あり。頭部は背腹共に青色を帶び、扁平にして前方に突出し、複眼は小さく后頭部の兩側に扁在し、兩複眼の間即ち后頭部の中央に短縱線を有す。額面は隆起少なくして斑紋無く、口吻は短小にして、關節は不判明なり。觸角は額面複眼の稍々上部より出で、短かき鞭狀をなす。胸部は頭部と同色にして斑紋無く、前胸部は倒凹字形をなし、中胸部は之れに嵌頓し、其背面には少しく橫皺を有す。前翅は前種と畧同形にして全部青色をなし、長さ一分八厘、幅六厘五毛あり。后翅は稍乳黃色を帶び、長さ一分六厘、幅七厘五毛を算す。肢は三對共に基、轉、腿節は綠色を呈し、脛節及跗

節は鮮青色を帶ぶ。腹部は背腹共に灰青色を呈し、各關節の終りに淡色帶を有す。産卵管は稍褐色を帶び、短かけれども少しく尾端に現る。

該種は嘗に小貫氏が農事試驗場特別報告第十號に於て、大サジヨコバヒとして發表せられたるものに酷似す。而して同氏は香川縣に於て只一頭を得たるものにて、寧ろ奇種に屬するものなり、と附記せられたれども大島に於ては、其全島に發生するもの丶如し。今、右兩者の異なる所を摘記すれば左の如し

	小貫氏の大サジヨコバヒ	大島産のもの
体長	二分八厘	三分
頭部及胸部	褐色を帶ぶる部あり	上記のもの無し
頭部の額面	淡褐紋を有す	斑紋あるを認めず
前翅の前緣脉に附着する翅脉	三個	四個

右の如くなれども、色及大小は內地と島とに依て生じたる差異となし、前后翅の翅脉にも小異の點あれども、深く質すべきものにも非らざるもの丶如くなるを以て、余は右二者を同種となし、小貫氏に從て大匙浮塵子と名稱し置きぬ。

其八、**小サジヨコバヒ** (Healus sp.)　一見前種に酷似すれども、形小にして、且つ頭部の突起も少なきを以て、余は大サジヨコバヒに對し小サジヨコバヒの新稱を附せり。頭部は畧三角形にして全部青色をなし、后方の兩角に黒色卵形の複眼を有す。額面は畧正角形をなし、複眼の前方より短かき同色の觸角を出す。胸部は頭部と同じく青色を呈すれども、中胸背の中央に少しく淡褐色を帶びたる部分ありて、其部に四條の短縦線を具ふ。前翅は前種よりも短大にして、長さ一分五厘、幅六厘五毛あり、全面青色をなす。后翅は灰色半透明にして、長さ一分五厘、幅五厘餘あり。后肢は長さ二分五厘ありて全体

青色をなし、中肢及前肢は共に一分四厘にして、后翅と同じく青色を呈すれども、中肢は著しく褐色を混ず。腹部は西洋獨樂狀をなし、全体青色を帶び、尾端に粗毛を密生す。產卵管は短くして腹端に現れず該種は大島の東部、及南部に於ける稻田の雜草、及河畔等の雜草中に於て多く之を採集せり。

其九、大シロ ヨコバヒ (Tettigonia sp.) 大形種にして全体白色を帶び、体長二分二厘、翅の開張四分七厘あり。頭部は白色にして、複眼は紅色を呈し、兩複眼の中間に畧三角形をなせる黑紋ありて、其兩側に單眼を有し、單眼の前方即ち頭部の兩側に沿ふて淡褐の三角紋を有す。額面は背面と同じく白色をなせども、中央に一縱線及十數條の橫線ありて、其部は淡褐色を帶び、頂部に近く三個の黑紋を橫列す胸部及翅肢は頭部と同じく白色を呈し、前胸部は前方に彎曲し、中胸部は大にして橫皺多く、中に二圓紋を橫列す。前翅は長さ二分、幅五厘餘、后翅は長さ一分七厘、幅七厘許りあり。肢は、后肢最も長く三分內外あれども、前肢及中肢は二分弱に過ぎず。腹部も亦白色なれども、腹面は末端に至るに從ひ、稍黃色を帶び、短毛を密生す。產卵管は割合に短かし。

該種は大島全島の田圃及河畔の雜草中に夥しく發生するものゝ如し。本種は嚮に小貫氏が農事試驗場特別報告第十號に依て公にせられたるミツテン 大ヨコバヒ に酷似すれども頭、胸部の斑紋及翅脈に異なる點多きを以て、余は之れを別種となし、大白浮塵子の新種を附せり。

其十、タケ ヨコバヒ (Cicadula sp.) 一見黃綠色をなせる小形種にして、常に竹に夥しく發生するを以て竹浮塵子の新稱を附せり。頭部は背腹共に黃赤色をなし複眼は灰褐色を呈す。額面は中央に隆起し複眼の內側には黃色鞭狀の觸角を有す、其長四厘あり。胸部及翅は灰褐色にして、前翅は長さ一分一厘、幅三厘を算し、內緣及后緣に接したる部分は少しく綠色を帶び、翅端は無色透明をなす。后翅は

長さ九厘餘、幅約五厘あり、極めて淡き黄色を帶ぶ。后肢は前翅と畧同色を呈し、脛節及跗節に長粗毛多く、長さ一分五厘内外あり。前、中肢は共に淡灰色にして、脛節及跗節は黄色をなす。腹部は八關節より成り、側面及腹面は黄色をなせども、背面は黒色を帶ぶ。産卵管は短かく、且つ著からざるを以て、一見生殖器の外貌により雌雄を區別し能はざる程なれども、雄は尾端に長粗毛を密生す。

該種は本島阿木名村（東南部）なる路傍の竹垣中に於て、夥しく採集せり。

其十一、**ヒメシロヨコバヒ**(Dieraneura sp.)　全体白色の小形種にして、体長七厘六毛、翅の開張一分二厘あり。頭部は幅廣く、複眼は稍紡錘狀をなし、背面の后方に不判明なる一條の縱線を具ふ。額面は割合に長く、口吻は著しく三關節に分れ、觸角は鞭狀にして極めて長く、約三厘五毛あり。前胸部い背腹共に頭部と同じく白色を呈し、二對の翅は共に極めて薄く、白色半透明にして、前翅は長一分餘、幅二厘八毛、后翅は長さ八厘、幅三厘二毛を算す。肢は三對共に純白色をなし、前、中肢は六厘餘、后肢は一分二厘弱あり、能く飛跳す。腹部は紡狀をなし、長さ四厘あり、背面は淡黒色にして、腹面は白色を帶び、末節及産卵管は極めて淡き紅色を呈し、同色の粗毛を散生す。

該種は大島の東部及、德之島の畦畔に於て採集したるものにして、内地に産する白色浮塵子（Empoasca sp.）に酷似すれども詳細に調査する時はPiaraneura屬なるを以て、姫白浮塵子の新稱を附し、Empoasca屬なるシロコヨコバヒ及Tettigonia屬なる大シロコヨコバヒと區別せり。今内地産のものと著しく異なる點を摘記すれば、内地産のシロコヨコバヒの腹部は、全体白色にして后翅に一頂室(Apical cell)を有すれども(即ちEmpoasca屬の特徴)大島産のものは腹部の背面少しく黒味を帶び、后翅に二個の頂室（即はちDieraneura屬の特徴)を有す。

其十二、べニイロヨコバヒ(Empoasca sp.)　雌は体長一分、雄は九厘内外、翅の開張二分一厘乃至一分九厘あり。頭、胸、腹共に美麗なる紅色なるを以て紅色浮塵子の新稱を附せり。頭部は僧笠狀をなし複眼は紫青色をなす。觸角は長さ二厘五毛ありて基部の三節は長大なれども、第四節よりは著しく細まりて毛狀をなす。前翅は長さ八厘乃至九厘、幅二厘内外あり、其翅底に接する大半は美しき紅色を呈すれども、先端は殆ど透明にして、極めて淡き桃色を帶ぶ。翅脈は又桃色をなし、臀脈は淡色透明をなす后翅は長さ六厘五毛、幅二厘五毛内外あり、透明にして僅かに紅色を帶び、濃色の翅脈を具ふ、脚は三對皆淺黄色をなし、而して前、中肢は共に長さ五厘弱ありて、前肢には其脛節端に紅色を混ず、后肢は長さ一分弱あり、基節及脛節の基部に紅色の部あり。腹部は形、紡狀にして八關節より成り、長さ五厘餘、幅約二厘あり、產卵管は黑色を呈し、少しく腹端に顯る。

該種は大島の北部、及德之島の雜草多き稻田に於て採集したりき。

(未完)

◎コオヒムシ(負子)につきての疑問

在東京　長野菊次郎

コオヒムシは有吻目中、異翅亞目の水爬蟲科に屬するものにして、本邦普通に產するものにつきては、Appasus japonicus Vuillet の學名を有せり。然れども、單にコオヒムシと云へる、名稱の下に隷せる、種類につきては、本邦、幾何種を產するかは、未だ精檢せられざるが如し(全國昆蟲展覽會出品目錄には、コオヒムシの一種として京都產の別種をも擧げたり)。外國にて能く知られたるは、ザイタ屬(Zaitha)及びヂプロニクス屬(Diplonychus)のものなり。此蟲の成蟲は、其背上に多數の卵子を負へるを以て、人の能く知る所にして、京都にてヒルメシモチ又はメシモリと呼び、大阪にても亦ヒルメシモチ、下野にては、オコシウリなどの方名あり。皆、其の習性を表はせるなり。扨、其の卵子を負へるは、雌なるか

將た雄なるかにつきては、古來學者間に、多少の異見ありたることにて、本誌第六十七號六足蟲彙纂中に掲げたるは、ジョルダン氏のアニマル、ライフを、其儘譯したるものにして、卵子を負ふは、雄とせる方なり。又栗本丹州氏の如きも、雄蟲論者にして、其詳細なる記事は、千蟲譜中にあり。今之を摘記せんに、負子は汚水の溝中、或は地塘中にあり、其形タイコウチに似て、背は青黑、六脚は黑褐にして、赤色を帶ぶ、雄の背上に雌者卵を生みつくるに、粘着してはなれず、不日にして、其卵子より子を生ずると、一夜に二十個に及ぶ。始めは白色に微黄を帶び、背に一條の緑色なる所あり、卵を出で、立所に水中を游泳すること至て疾速なり、漸次青黑色に變ず。卵を負ふ最初は白色にして、明徹圓かなる形なり。日を經て長く横よりみれば、蜂房の如く、上よりみれば、龜甲紋に似たり。又微しく褐色に變ずれば、卵頭兩眼の黑點、すきとほりて見ゆるものなり。其卵を破つて出る所、至て速なり。小兒捕へて弄玩し、之を龜甲蟲と云ふ。龍蝨に比すれば、甲柔にしてミガラの類なり。卵盡く子を生ずるの後、甲ありて、石上に日に晒して、能飛行す云々とあり、(又此餘白に田中芳男先生の附記せられたる事實は第六十七號六足蟲彙纂の末尾に編者の添附せられたる所あれば之を參照すべし)、然るにカムストツク Comstock氏は、雌蟲論者にして、同氏の著はされたる昆蟲全書 Manual for the study of insects 及び昆蟲生活 Insect life 等には、下の如く記せり。コオヒムシの雌は、水の浸透せざる薄膜を有せる卵子を、背上に附着せり、蓋し其薄膜たる、自身の分泌せるものなり。と又ケンブリッヂ博物誌中に記せる所を見るに、コオヒムシは、其背に卵子を負へり。然れども之を負はんが爲めに、特別の托器を有するにあらず、唯水に溶解せざるセメントの狀態にて、一定の場所に附着せるのみなり。是につき

（コオヒムシの圖）

てチムモツク氏(Dimmock)は說をなして曰く、蓋し長くして、屈撓し易き、產卵管の働作によりて、之を產附するなりと、是亦雌蟲論者たるを知るべし。然るに獨逸のシユミツト氏(Schmidt)は、チプロニクス屬(Diplonychus)の卵子を負へるもの丶、一標本を驗せしに、全く雄なることを知り、爾來、其他の種類中にも、此と同一の事實を驗し得たり。然れども如何にして卵子を雄蟲の背部に置くか、又は此の如き奇異なる習性の目的は、如何なる點にあるかの如きは、不明に屬したりき。此の如く、甲乙の學者、互に其見る所を異にせしが、輓近に至り、米國スラツター孃(Miss Slater)の實驗によりて略、其眞疑を解決せられたるが如し。即ち孃は、水中飼育器(Aquarium)內に於て、負子の習性を觀察せしに、雌は思ひ掛けなき雄の背に、卵子を產附すること通常にして、時としては其亂暴なる目的を遂げんが爲には、數時間爭ふことすらあり。斯くて、遂に其目的を成就し、已の配偶なる雄をして、幼仔を運ぶ馬車の役目をなさしむるに至れり。尙孃の言によれば、元來負子(ザイタ屬)は、甚だ活潑にして、迅速に馳走するものなり。然れども、卵子を負へるものは、水面に腹部の尾端を出して、葉片に附着し、靜に其躰を保てり、若し攻擊せらる丶ときは、穩に其打擊を受けて、死したる樣を裝ひ、卵子の運搬と、保護とに對しては、侮辱をも忍びて、却て好果を奏するものなりと。此等の實事によれば、略、其眞僞を決せられたるが如しといへども、此實驗は、重にザイタ(Zaitha)屬のものにつきてなせるものなれば、直に以て屬を異にせる、邦產のものを概括すべきにあらず、特に本誌第三十九號の雜錄欄に載せられたる、神村直三郎氏の實驗によれば、邦產種の負卵者は、寧ろ雌蟲なりとの論決を與へられたるが如し。然れども、同氏の記事を案ずるに、多少の疑なきを得ず。尙は同氏の言によれば、三十四頭中、卵粒を負ふたるもの七にして、負はざるもの二十七なり。但し負はざるものにして、腹中に卵を藏するもの二

十二にして、藏せざるもの僅々五のみ。又負ふたるものにして、腹中に卵子を藏するものは、一もこれなく、七頭ながら皆無卵なりし、と而して同氏は、腹中に卵子を藏せるものも、藏せざるものも、皆其尾部を同一にせるを以て、盡く雌蟲なり、との斷定を與へたれども、藏卵の如何に關せず、雌は雌生殖器を有せるを以て、雌なりとの斷言はなさゞるが如し。固より田中先生の説にも雌雄は其尾端を異にせること見ゑたれば、尾端の差が、果して雌雄を區別し得べきものならば、神村氏の決定たる、少しも間然すべき處なし。然れども三十四頭中、一の雄蟲なきことは、大に驚くべきことにして、若し同氏の説の如く、雄蟲は已に交尾の義務を了りて、斃れたるものとすれば、今一層溯りて、雄蟲の生涯を研究すべき必要あり。特に卵子を負はざる雌蟲にして、腹中卵を藏せざるもの五個ありとせば、此五頭は、其卵粒を如何にせしか、是亦疑はざるを得ず。余は好みて神村氏の説を疑ふにあらねども、上述の如く負子に於ける疑問、百出の際なれば、斯學の進歩上、今一層の研鑽を希望するものなり。之を要するに第一負子の種屬を確定すること、第二雌雄の區別を明にすること、は此問題を決すべき根本なり。此根本だに確定せば、卵子を負ふもの果して雄なるか、雌なるか、又は雌雄共にするか、の疑問を決するは易々たることならんのみ。聊か余が知れる範圍内に於て、諸家の所見の異同を羅列して、其間、なほ研究の餘地あることを辨じ、斯學に忠實なる諸君の、參考に供すること爾り。

（完）

◎Anopheles maculatus Theobald. Anopheles Leucopus dōoiz. を臺北附近に於て檢出せり

臺北衛戍病院細菌病理室　英　健　也

本篇は臺北衛戍病院細菌病理室在勤の英健也氏が臺灣産瘧媒蚊種に就き研究せられたる事項を臺灣醫學雜誌に載せられたるものなるが時節柄參考に資すべきものなるを以て特に之を轉載せり

臺灣に產するアノフエレスの研究は、羽鳥、木下、都築諸氏に據り、旣に其一面は世論に嘖々たり、予任を本島に帶ぶるや、親しく木下君等と交誼を辱ふし、相携へてアノフエレス捕獲吸血試驗等を共にし、斯學先輩の示敎を受け、幾多の便益を得たるは多謝する所あり、されどアノフエレス種族命名に關しては、論評未だ同軌に出でず、こは不日、木下氏肉叉蚊第二回報告に詳述せらる可きを以て、之れを後日に讓り、茲に近時予の下に採集し得られたる、本島アノフエレス中二箇の新種を補追せんとす。

其一、　本年一月基隆衛戍病院附長濱二等軍醫より送附せられたるものにして左の性狀を有せり。

全長、大約六、五mm、羽翼の長さ三、四mmにして、アノフエレス北海道（都築氏）より稍小なれども、アノフエレス臺灣I及II（同氏）より稍大なり、脚の長さ之に準す。

特徵、後脚跗節三箇の末節は、其上下の關節端に廣き白輪を有し、中央に黑色の長き帶輪あり、後脚跗節最末の一節は純白なり、羽翼の前緣に、四箇の大黑斑と三箇の黃斑を有し、第二黑斑は、第一黑斑第三黑斑の和に均しき長を占む。第一黃斑は、羽翼の前緣に達せず。第二黑斑上の第一縱脈は、三箇の小黑斑よりなる。第二縱脈と第四縱脈は殆んど同じ高さに於て、或は第四縱脈少しく早く分岐す。頭部顱頂は灰白色にして、集簇眼は帶綠色を呈し、顱頂毛は長く、後頭緣には淡黑色の鱗片放散す。

觸角、其色淡黃褐色にして、尖端は透明、肉眼上白色を呈す。

觸鬚、各關節端は鱗片を缺けるも、他は黑褐色鱗片を以て被はる。末端二節の觸鬚は黃褐色透明にして黑色小鱗片を附著す。各節の長さは〇、六四―〇、七三―〇、三八―〇、二一を算せり。嘴は黑褐色にして其唇のみ色淡し。

胸部、黃褐色を呈し、肩胛に黑鱗片叢あり。其他橫縫線竝に背甲の周緣に長毛を發生す。振球柄は白色也。

羽翼、前緣に於ては、第一黑斑の前方に、二箇の小黑斑を有す。第一及第二黑斑は、連續して全長の半に達する黑線を形成し、爲めに第一黃斑は前緣に達せず。第二黑斑の長さは第一、第三黑斑の和に均し第二黑斑と第三黑斑間、及第三黑斑と第四黑斑間には巾廣き黃斑あり。副脈は第一黑斑に一致せる黑斑を有し、次で第一黃斑を形成し、進で第二黑斑に參與し、其末端に至りて止む。第一縱脈は第一黑斑、竝に第一黃斑の形成に參與し、第二黑斑の部に於ては三箇の小黑斑を以て、其形成に參與し、以下前緣の第三黑斑、第四黑斑、竝に其間の黃斑に一致す。第二縱脈は第一縱脈第二大黑斑中の第二小黑斑部より起り、先つ起始部に小黑斑を有し、次で上横脈の前後に二小黑斑を形成し、第三黑斑の外半部に一致する所に於て分岐す。其前枝は殆んど色稍淡く、粗なる黑鱗片にて被はれ、後肢は先つ稍長き小黑斑を有し、次で同長の黃鱗片とあり、再び小黑斑とある。第三縱脈は第二大黑斑の第一縱脈上第三小黑斑部より起りて小黑斑を形成し、更に其末端に一黑點を備ふ。第四縱脈は第一大黑斑の外緣に一致する部より黑鱗片となり、第二縱脈の分岐と殆んど同ド高さに於て分岐す。其前肢は二小黑點を具ふ。後肢も亦淡き二三の小黑鱗片を二箇所に具有せり。第五縱脈は、著しき根斑を有し、其前肢は三箇の黑斑、後肢は剪綵に達する部に於て、小黑點を有す。第六縱脈上には、三箇の黑斑あり。外緣は黑黃鱗片二三箇錯綜せり。前緣に於ても、諸々に黑鱗片を混ず。

脚、前脚の大腿は少しく膨大すれどもアノフエレス北海道に於けるが如く、著しき棍棒狀をなせるに非らず、僅かに其厚徑の他より太さのみ。前脚、竝に中脚の大腿、及脛部は小黑鱗片を以て縞狀を呈し、跗節は第一節も亦縞狀なれども、以下跗節は黃褐色にして、帶輪を有せず。後脚の各關節部は、其色淡く、第一跗節迄は、前、中兩脚の如く縞狀なれども、第二跗節の下關節端と第三跗節の上關節端とは、

廣き白輪を形成し、以下の跗節關節は、皆白輪を具有す。而して第三、第四跗節體の中央は、黑色の廣き帶輪を形成し、第五跗節は全然純白なり。

腹部、各部には一對の薄き斑點を有し、各節何れも黃色の長毛を粗生し、終末節には金黃色の美麗なる長毛あり。

鑑別、其羽翼はアノフエレス臺灣IIに類すれども、第一縱脈上の關係は、全く之れと異れり。即ち彼の如き丁字形をなさずして、三箇の黑斑を有せり。後脚は全然彼れと差あること、記載の如し。羽翼に於て類似せるものはアノフエレス、ロイコウプスなれども、第二、第三黃斑は彼れに於ては著しく狹く、且つ其後脚跗節は、其末節の三箇、純白なれども、本蚊に於ては、末節一箇のみ白色なり。本蚊に最も符合せるものは、Anopheles maculatus theobald として、近時 dönitz が北スマトラより齎らせられたる一種に付記載せるもの、竝に其寫眞附圖に示せる羽翼にして、大體の所見は概ね相一致せり。故に予は本蚊を以て、臺灣產アノフエレス、マクラツゥスなり、と判定せんとす。若しデオニッツの記載せるものと、予が標本との異點を擧ぐれば。一、觸鬚第二末節は、彼れに於ては白色にして黑輪あれども、予のものは黑鱗片散生して、帶輪狀と認め難し。一、羽翼第二縱脈前肢は、彼れの寫眞圖に於ては二箇の黑斑を有すれども、予のものは殆んど黑鱗片を以て被はる、第四條脈後肢は、彼れに於ては一箇の黑斑なれども、予のものは二箇なり。

其二、　本年二月、臺北衞戍病院附西春一等軍醫、私用の爲め屈尺に赴かるゝを機とし、アノフエレス蚊の採集を囑託し其十數頭中、左記の性狀を有するものを得たり。

全長、五、五mm、翼の長さ三、三mmを有し、大約アノフエレス臺灣IIに類する大さを有す。脚の長さ之れ

に準ず。

特徴。跗節に於ては、其關節端に三箇の白輪を有し、其後脚第二跗節の下端より以下は、全然純白なり觸鬚の末端は、白色を呈す。羽翼の前縁には、四箇の細長なる黒斑あり、黄斑は甚だ狹小なり。第二黄班は、第一縱脈上に達せず。第二縱脈の分岐は、僅かに第四縱脈より早し。

頭部、後頭縁に、黒褐色鱗片叢あり、其他白毛を有す。

觸鬚、根幹は黒褐色長大なる鱗片を具有し、其他の節も黒褐色を呈すれども、其末節は黄色透明なり各關節端に於ても鱗片を缺けるを以て、帶輪狀の觀を呈す。各節の長さ〇、四七―〇、五八―〇、三五―〇、一七あり。

觸角、黒褐色を有すれども、其末節に近づくに從ひ色淡く、各關節端は白色を帶び、淡黄色の毛を有す嘴は黒褐色鱗片を以て被はれ、橄欖體は透明黄色を呈せり。

胸部、黒褐色を呈し、其中央線は黒色、後半部、横縱腺部は暗色にして、長毛は黄色肩胛部に鱗片叢なし。振球の柄は黒褐色なり。

羽翼、前縁に於て四箇の細長なる黒斑を有し、其間の黄班は狹小なり、第一黒班の前端も、黒鱗片を具有し、僅かに黄鱗片を混ずることあれども、一見起根より第一黒班迄は、一條の黒線を爲せり。第二黒線は最も長く、第二黄班は前縁に止まり、第一縱脈上に達せず。第四黒班は短くして外縁に及べり、前縁は槪して其鱗片他部より其色黒し。副脈は第一、及第二黒班の形成に參與し、第二黒班の末端に到りて止む。第一縱脈は、其起始部より第一黒班迄は黒鱗片を附著し、次で僅かに黄班に參與し、再び第二黒班に一致し、第三黒班の末端に到る迄黒鱗片を有す、故に第二黄班は只前縁のみに止まれり。第三黄

斑の成形に參與し、第四黃斑に一致す。第二縱脈は第二黑斑の內緣より起り、分岐部までは黑鱗片を以て被はれ、其の前肢も亦黑鱗片、後肢は一般に鱗片粗なれども、特に白斑を認め難し。第三縱脈は第二黑斑の中央に當る部より起り、中央に於て黃鱗片を缺み、前後は黑鱗片を以て被はる。第四縱脈は起始部より分岐部迄、殆んど黑鱗片のみを有し、第二縱脈分岐部より僅かに遲く分岐す、前肢は外緣近き側に於て、後肢は其中央に於て、黃鱗片を有するの外、黑鱗片を以て被はる。第五縱脈は根斑の外分岐迄粗なる黑鱗片あり、前肢は前後兩端に黑鱗片を有し、中央の大部は黃鱗片、後肢は殆んど全く黑鱗片を以て被はる。第六縱脈上に於ては、三箇の黑斑を有す。外緣は黑鱗片に富み、各縱脈の末端は黃鱗片を混せり、前綵は黃鱗片よりなる。

脚、前脚の大腿は膨大せず、僅かに其起始部の厚經廣きが如し、各脚の大腿より脛骨、並に第一跗節に到る迄は、黑白の鱗片叢により縞狀を呈し、前、中兩脚以下の跗節は、其關節端に於て白色の帶輪を呈し、體は黑褐色を呈すれども、後脚の第二跗節末端より以下は、全然白色なり。

腹部、暗黑色にして長毛を發生し、生殖部に於ては著しく黑鱗片を密生せり。其他最末第二節の腹面に於ても、鱗片叢を具有せず。

鑑別、後脚跗節の白色なるアノフエレス屬は稍多し、例へば A. argyrotarsis desvoidy, A. paludis theob, A. mauritianus charmoy, A. maculipalpis theob, An. Jamesii theob, An. ablipes theob, 等の如し。然れども其羽翼に於て差異多く、獨り類似せるものは前段の A. maculatus なるが如きも、既に記載せる所に照せば、其差自から明かならん。Anopheles fuliginosus Giles は最も本蚊に類似し、Gnats or Mospuitoes Giles 1902 第二段に於ては、同氏はフリギノーヅスを以て、全然 Anopheles leucopusdönitz と同一なりと認

めて記載したり。されど dönitz 氏はフリギノウズスに於ては、其後脚跗節は最終二節のみ純白にして、ロイコーブスは第二跗節末端以下純白なり。何人や二と三とを同一なりと唱ふやと。

以上記載する所に據り、予は之れを Anopheles leucopus dönitz と判定せんとす。

予の標本とデォニッツの記載、竝に其寫眞圖と符合せざる點を擧ぐれば、次の如し。

dönitzの記載	臺灣產
第二縱脈は第四縱脈より早く分岐す、	同上なれ共其差渠の如く著しからずして僅に〇、〇八mmに過ぎず、
羽翼前緣の第一黑斑前には二箇の黑斑を著はす、	前緣第一黑斑迄は殆んど一直線に黑鱗片を附著す、
第二縱脈の後枝に白點あり、	明かならず、
第五縱脈は二箇處に於て黃鱗片を有せり、	中央のみ黃鱗片なり、
前脚の大腿の三分の一は他脚より厚徑なり他脚のものは其末端部厚徑なり、	上記の如き厚徑の差を認め難し、
腹節第六節に白斑を認む、	明かならず、

終りに西春長濱兩軍醫のアノフエレスの採集、竝に送附を快諾せられたる厚意を謝す。

講話

◎害益蟲の二、三に就て

名和昆蟲研究所長 名和靖

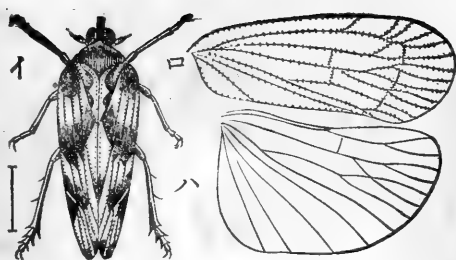
左の一篇は、此頃、當昆蟲研究所長が、縣下を始め、各處に於て、小學兒童などに向ひ、普通害益蟲に就き講話を試みられし際、兒童の極て了解し易からしめんが爲、圖入にて一葉刷となし配付されし者なるが、讀者の參考に資する点もあれば茲に掲載する事となしぬ

蟲の種類は極めて多い中にも益蟲と申して農家の大層爲めになる蟲もあれば、害蟲と申して大變の害をなす蟲もあります、其害と申すも蟲に由ては中々非常なもので彼の二化生螟蟲の如きは年々米作の一割以上、即、全國で四百万石以上の害をして居るのであります、其他の蟲の害を合せますれば實に莫大な

ものであります、日本は昔から瑞穗國と申して結構なお米が穫れますが此、よいお米を澤山蟲に喰せて置て只今では年々味ない外國米を澤山に買い込むと云ふ有樣で誠に殘念なことであります、此一事を見ても害蟲の惡むべきことゝ、之れを驅除せねばならぬことが分りませう、いでや左に最も惡むべき害蟲即二化生螟蟲と浮塵子とに就て其大畧を述べませう。

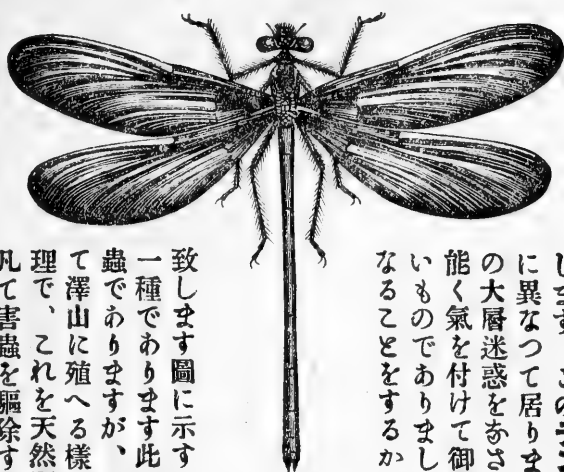
○二化生螟蟲は**イネノズ井ムシ**とも申しまして一年に二回發生致します、其順序は冬は幼蟲で藁の莖の中又は稻株の莖中に潜んで居て五、六月頃成蟲となつて出で稻葉に卵を產み約一週間位經つと孵化して幼蟲となり莖中に喰ひ込み大きくなると其中で蛹となり八、九月頃又成蟲となつて卵を產み前の如く孵化すると直に莖中に喰ひ込みその儘冬を越して翌年五、六月頃成蟲となります、斯樣な順序で發育致しますが之れを驅除致しますには色々の方法がありまして小學校兒童即ち阿方等に最も容易く出來ますのは採卵法と申して卵塊を採るのであります、其卵塊は圖に示す如く稻葉の表、しかも上の方に一所に澤山產みますから、これを見出して採るのであります、早きは苗代田に於て產みますから、よく氣を付けて採つて御覽なさい、それから田植をしてからも三、四回採卵をせねばなりませぬ試に本年は何れ位採れるかやつて御覽意外に澤山採れます、其採れた丈は蟲の害を除いたのであります。

ウンカの圖

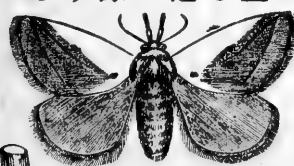
螟蟲卵塊の圖

○浮塵子は**ヨコバヒムシ**又は**ウンカ**などと申しまして、之れも時とすると非常な害を致します、明治三十年の如きは全國で七千五百万圓と云ふ莫大な害を致しました、此蟲は幼蟲も成蟲も共に稻の液を吸ひますから澤山つきますと遂に稻が枯れてしまひます、この蟲には澤山の種類があつて一樣ではありませぬ、早きものは苗代田に於て卵を產み成蟲になる迄の間が短くて秋の末迄には四、五回も發生致しますから初の一匹は年内に二万程になる勘定であります、斯樣に殖へ方が早いから初は少い樣でも中々油斷が出來ませぬ、之れを驅除するには苗代田に於て捕蟲網を以て度々掬ふのが一番宜しい、斯く致しますれば、啻に浮塵子のみならず前申した螟蟲の蛾や、稻の青蟲やら、其の他色々の蟲が澤山採れますから是非

苗代田に於て度々捌つて澤山に殖へぬ中に採るのが上策であります、圖の（イ）は浮塵子の一種で（ロ）と（ハ）は其翅を擴いた所であります。

○前に吾々の爲めになる蟲があると申しましたが、其れも澤山の種類がありまして夜となく晝となく害蟲を捕食して吾々に非常な利益を與へて居ります、皆さん試に蚜蟲や貝殼蟲の居る處を御覽なさい、圖に示す如き形の蟲が居りませ、これはテンタウムシと申します、このテンタウムシにも色々の種類があつて背の點が種々に異なつて居りますが形狀は大概一樣であります此ものがお百姓の大層迷惑をなさいます蚜蟲抔を頻りに食べますから大變の益蟲であります、尚能く氣を付けて御覽なさい此の外に色色の蟲が來て蚜蟲を食べる有樣は中々面白いものでありまして、これ等のことは直に實驗が出來ますから何の樣な蟲が如何なることをするかと云ふことを、よく御調べを願ひます。

テンタウムシの圖

○皆さん度々捕へて弄になさいましたトンバウも矢張り大變の益蟲であります、蝶々〳〵菜の葉にとまれと云ふ唱歌は皆さんよく御存じでありませう、此の蝶は菜の葉や柑橘類其他色々の葉抔を食べる所の蟲の親であります、トンバウは此れ等の蝶や或は蚊などを捕るもので、其幼蟲も共に非常の益を致します圖に示すところのものはトンバウの一種であります此の外カマキリ、蜂なども益蟲でありますが、之れ等の蟲は、よく愛護して澤山に殖へる樣にすれば自然害蟲が減る道理で、これを天然驅除と云ふのであります、凡て害蟲を驅除するには天然驅除と人工驅除との二つを行はなければ到底十分なる驅除は出來ないのでありますから、皆さん其心して害蟲を惡むと共にこれ等の益蟲を愛護するの心掛がなければなりませぬ。

トンバウの圖

ハ　♀　イ　ロ

イラムシの圖

終に望んで一言申上げて實驗の材料に致しませう、皆さん柿の木や、梨、梅抔の木を御覧なさい俗に雀の壺とか、雀の枕とか申す、即ち圖の(イ)に示す所の堅いものが枝に澤山付て居ります之れを採て貯へて置て御覧、六、七月頃になりますと一方の口が開いて(ハ)の樣な蛾が出ます、之は即ちイラムシの親でありまして(イ)は其繭であります、此の蛾が柿の葉抔に卵を産み遂に孵化して幼蟲即イラムシとなり葉を食し網の樣に致しますこの蟲ハ大層奇麗でありますけれども毒のある毛をもつて居ますから、うつかり觸ると大變痛みを感じます、故に鳥なども容易に食べませぬから他にも之れに眞似て体に恐しい毛を以て鳥などに食れない樣に警戒して居る蛅蟖も澤山あります、即梅毛蟲とか櫻毛蟲などは其中の一でありますこの梅毛蟲などは毒を有つていないけれども恐ろしい毛の爲めに巧に敵の害を免れ益々子孫の繁殖を圖ります、其巧妙なる實に想像も及ばないのであります、皆さん活眼を開てよく觀察なさい幾多の面白い道理を發見することが出來ませう。

○問ふ幼蟲とは如何なるものを申しますか○答、幼蟲とは卵から孵りたる蟲、即お蠶で申さば桑葉を食べる蟲を云ふのであります○問ふ蛹とは如何○答、幼蟲が食物を食べて段々大きくなると食物を止めて形の變る時代があります、其食を止めたる時代を蛹と申します、即お蠶で申さば繭の中に居るムツゴを蛹と云ひます○問ふ成蟲とは如何に○答、成蟲とは蝶とかトンバウとかカマキリの如く親蟲のことであります

◎ヱンドノキリムシの驅除法

名和昆蟲研究所助手　石田和三郎

編者云、本篇は四月廿九日、當昆蟲研究所員の催しに係る、水曜昆蟲會席上に於て、助手石田和三郎氏が講演せられたる大要なり。夜盗蟲驅除は、目下急眉の時期なれば、特に掲ぐる事となしぬ。

ヱンドノキリムシは糖蛾類地蠶蛾科に屬するもので、蕎麥、豌豆其他蔬菜類等、各種の植物に發生して、農家を困むる所の一大害蟲でありまして、一年二回發生致します、此の幼蟲は、晝は土中或は塵芥等の下に潜み、夜間出でゝ食害致します故、此等の類を夜盗蟲とも申します。而して夜盗蟲の中でも、此のヱンドノキリムシが最も害を致します(以下夜盗蟲と云へるはヱンドノキリムシを指す)。該蟲の驅除法に就きましては、幼蟲の時代に明渠を設けて、之に陷るとか、或は潜所に誘ひて、捕殺すると云ふ方法は、往々各地に於て、目擊する所でありますが、此等の方法は、皆被害當時、狼狽の余り、止むを得ず行ふ處の窮策でありまして、假令其方法にして、多少効を奏するにせよ、早や、既に幾多の損

害を蒙り居る次第でありますから、成るべく、害を未發に防ぐ方法を講究せねばありませぬ。如何なる害蟲でも、既に發生してからは、如何とも致し方がありませぬ故、驅除の百斤は、豫防の一斤に如かずと申しまして、豫防と云ふ事が肝要であります。處で敵を破るには、其敵の弱点を突かなければなりませぬが、害蟲を驅除する上にも、やはり其弱点を見出して、之を突いたならば、一擧して驅除する事が出來ませう。此夜盜蟲の弱点は、何であるかと申しますれば、成蟲が、非常に糖蜜を好む性質で、余程の遠方よりも、其香を慕ひて、集り來ます故、其性質を應用して、驅除するを糖蜜誘殺法と申し、うまく應用したならば、簡單にして中々効果があります。私は昨年所長の命に依り、夜中採集を利用して、岐阜市近傍にて、年々此夜盜蟲の爲めに困めらるゝ、稻葉郡則武村の地を撰み、同地の林中にて、約四十本の樹幹に、夕方より糖蜜を塗抹し、之れが試驗を行ひましたに、意外の好結果を得たれば、其の方法と實驗の成蹟を報告して、諸君の御參考に供する次第であります。糖蜜の調製法は、黑砂糖を酒にて溶くのみでありまして、其溶き加減は、既に御承知の事と存じますが、先づ、黑砂糖と酒とを混へ、擂鉢にて能く擂り、普通焚込と稱する下等の砂糖位ひの粘液に致します。余り淡ければ流れまして、且功能が薄く、濃くあれば、從て糖蜜の多量を要する事になりますれば、其邊は適度を見計らはねばなりませぬ。斯くして調製したる糖蜜を樹幹に塗りますと、夜盜蟲の成蟲即ち蛾は、砂糖と酒の香を尋ねて來ますのでありますが、爰に、其塗方等に就て、注意の要點を掲ぐれば左の通です。

○塗り方は樹幹へ幅約一寸、縱三寸乃至四寸位に、刷毛にて塗り付くべし、○椚、櫟、栗、樫等の如き、樹皮粗なるものにして、脂のなき樹木に塗抹すれば、多數集り來るも、松、杉、椿等脂の出ずるもの、又は外皮滑かなるものは、其効少し。○月夜の時は、月影に、風のある夜は、風の當らざる方面を撰みて塗るべし。○冷かなる夜は、成るべく下部（一、二尺の高さ）に、暖かなる夜は、四五尺位の高さに塗るべし。但し、普通三尺乃至四尺の高さを度とす。○塗抹すべき場所は、成るべく夜盜蟲の被害地に接近せる林を宜しとす。○糖蜜は、黃昏之を塗り置き、三十分乃至四十分間毎に見廻りて、其蛾を捕獲すべし。○時々マヒマヒカブリ（舞々掉頭）ハチ（蜂）ゲジゲジ（蚰蜒）等來るものなり。是れ等の蟲類の來る時は、夜盜蟲の蛾は來らざるを以て、見付次第直に取除くべし。

前記の方法に依りまして、集り來る所の夜盜蟲の蛾は、糖蜜を充分に吸收しまして、燈火を差出すも、人の近つくも、一向平氣なものでありますから、靜かに其下に、捕蟲器を受け、然る后、毒瓶にて一頭宛伏せますれば、容易に捕獲する事を得るものであります。若し、驚て逃げんとするも、大抵は糖蜜中にある酒の爲めに、身体の自由を失ふものと見へて、下なる捕蟲器の中へ落ちますから、中々愉快に捕

獲が出來得るものであります。故に該蟲發生の地は、是等の方法を共同して執行したならば、大に効果がある事と信じます。勿論私は標本の製作を第一の目的とし、旁々試驗を行ひましたのですが、驅除を第一の目的とすれば、一々毒瓶を用ひずとも宜しい、尙糖蜜の中に毒藥を入れ置けば、勞せずして功を奏する事が出來ませう、尙昨年十月採集試驗の結果は、左の通りであります。最も十月七日以前は、種々差支の爲め、採集を行ふ事が出來ませんでしたのは、如何にも殘念に存じます。

採集月日／回數	第一回採集數	第二回採集數	第三回採集數	計
十月七日	三九	一二	三	五四
同八日	四八	二七	|	七五
同十一日	四九	三二	五	八六
同十四日	四七	三八	四	八九
同十五日	四二	二一	二	六五
同十六日	三七	一九	二	五八
同十七日	六九	三二	|	一〇一
同十九日	六七	四五	三〇	一四二
同廿日	五八	二三	二	八三
同廿一日	四〇	七	|	四七
同廿五日	三七	一八	四	五九
同廿六日	三三	九	|	四二
同廿八日	八	四	|	一二
同廿九日	六	一	|	七
十一月四日	二	|	|	二
同八日	一	|	|	一
合計	五八三	二八八	五二	九二三

卽ち前表に依りますれば、十月七日頃は、第二期發生の夜盜蟲の蛾は、旣に發生最中でありまして、十月十九日は最も盛に、二十日よりは漸時衰へ、廿九日に至りまして僅に七頭、尙下て十一月八日には、殆んど絶滅に皈した、否成蟲の時期でないと云ふ事が分ります。而して前表の如く、僅か十六日間の採集に、九百廿三頭を得、一日平均五十七頭强に當る夜盜蟲の蛾を、しかも黃昏より僅か一、二時間に捕獲すると云ふ事は、非常なる好結果と云はねばなりますまい、そこで又九百二十三頭の蛾に就て調べて見ますると、發生の初期は雄多く、中頃は相半し、晩期は雌の方が多數を占むる樣になります、然しながら全体より申せば、雌は雄の三分の一に當る勘定でありました、尙又雌の腹中の卵を調べて見ましたが、一蛾の有する卵は、五百粒乃至七百粒ありました、今假りに昨年捕獲したる九百二十三頭の內、三割雌として、其雌が一頭に付き、五百粒の卵を產するものとしたならば、其卵より十五、六万頭の幼蟲が出る勘定であります。然しながら、此內氣候、或は天敵等の爲め、三割位は斃れるものと見ても、優に十万頭の夜盜蟲を驅除することが出來たと申してもよろしい、此十万頭の幼蟲が、勢を揃へて前記則武村一部の農作物を害するとしたならば、實に由々しき事であらうと考へます。斯る次第でありますか

ら、該蟲に苦めらるゝ地方は、宜しく此時に於て、大に驅除を講せねばなりませぬ。序ながら申ます、本年も矢張り、昨年の試驗を經續して、實行に取掛りましたが、第一期發生の夜盜蟲の蛾も、既に四月八日より糖蜜に來り、漸次其數を增して、目下は一夜十數頭も採集し得る事故、此際大に試驗を正確にし、種々なる方面に向て觀察しつゝあります故、此報告は追て申上ぐる事に致します。

◎六足蟲彙纂（辰の卷）

在東京　長野菊次郎

(十一)蝶の雌雄數　昆蟲の雌雄の比較數は、各類、各種によりて同じからざれども、鱗翅類に於ては雄數の雌數に超過せる場合多しとす。就中蝶類につきバッテス(Bates)氏の言によれば、上アマゾン地方(Upper Amazons)に産する、百種に近き蝶の雌雄の割合は、雌一に對して、雄百に當れりと。又エドワルド(Edward)氏の實驗によれば、北米にて鳳蝶屬の雌と雄とは、一と四との割合なり。と又ツライメン(Trimen)氏は、南米に於ける十九種の蝶は、皆雄の數の超過せることを見出し、特に其中の一種は、雌一と雄五十との割合に當りたれども、其他の種につきては、六年間の採集に、雄は各地にて多數を得たるに關せず、雌は僅に五頭を得しのみなり、とは驚くに餘あり。又メーラルド(Maillard)氏の言によれば、ボルボン(Bourbon)島に於ける鳳蝶の一種は、雌一、雄二十の割合に當れり、と此他稀に雌の雄に超過せることあれども、概して雄數の雌數に超過せることを知るべし。

(十二)蛾の雌雄數　蛾も亦概して、雄數の雌數に超過せるものにして、或る蛾の雄が、非常の多數を以て一雌蛾の周圍に群集することは、往々認むる所なり。ステーントン(Stainton)氏の報告によれば、某蛾(Elachista rufocinerea)の一雌の周圍には、十二乃至二十頭の雄の群飛せることありき、と又カレコノハガ或はサツルニア、カルピニ(Saturnia carpini)(野蠶蛾科の一種)の一雌を籠に入れて、外に露らせしに多數の雄蛾集り來り、之を室内に禁錮せしに、烟突を傳ひてさへ來りたりと、ダーブルデー(Doubleday)

氏は是につきて、一日間に兩種の雄が、五十乃至百頭來りしことを見たり、と言へり。アウスツラリア(Australia)にて、ベルレアウクス(Verreaux)氏は、小箱の內に、蠶蛾類の一雌を入れて、之を洋服のホッケット中に挾みしに、殆んど二百頭の雄蛾は、其後より追躡し來りて、遂に家屋の內に侵入したりとあり。

(十三)蝶蛾雌雄の價額　ダーブルデー氏は、スタウヂンゲル(Staudinger)氏の、鱗翅類目錄を調査せしに、三百種の蝶類標本につき、最も普通なる種類は、雌雄共に同價なれども、稀少なる種類百十一種は、其中僅か一種を除くの外、皆雄の價額廉にして、之を平均するに、假に雄の價を壹圓とすれば、雌は壹圓四拾九錢に當れり、又二千種の蛾類につきて、雌雄其價を異にせるは、百四十一種にして、其中百三十種は、皆雄の方廉にして、僅か十一種のみ雄の高價に歸し、之を平均するに、雄を壹圓とすれば雌は壹圓四拾參錢の割合に當れりとなり。是れ亦雄數の、雌數に超過せる影響にあらずや。(以上三件ダーウヰン氏のゼ、デッセント、ヲブ、マン)

因に曰く、余はスタウヂンゲル氏の最近の目錄を得て、近時の趨勢を知りたきと同時に、多數の昆蟲を採集、又は貯藏せらるゝ諸君が、其雌雄の數を比較せられて、本誌に投ぜ、以て雌雄淘汰說の好材料を、供せられんことを希望するものなり。

◎博覽會出品の昆蟲標本(續)

岐阜縣不破郡垂井尋常高等小學校　小竹浩

第十一凾、昆蟲之孳殖本能　昆蟲類が子孫の繁殖を圖るに於て、各其巧妙なる本能を有するは、何人も疑はざる所なり。卽我子の生育するに都合よき、食物豐富なる場所を撰みて產卵するあり。木材に穴を穿ちて、巢を營むあり、或は他の動物体內に產卵する等、皆子孫の繁殖を圖るに外あらず、之れを孳殖本能と名づく。其內容下の如し。蟲癭を造るもの、イガバチ、ヨモギワタバヘの類四種。卵を幼蟲の食となる葉に包つみ置くもの、オトシブミ、ザウムシ類二種。土中又は木材に穴を穿ち巢を營むもの、ベッコウバチ、クマバチの類五種。土にて巢を造り、卵を產みつけて食物を入れ置くもの、キスヂバチ、トックリバチ類九種。樹脂木皮等を以て巢を營み子を養ふもの、蜂類六種

第十二凾、昆蟲冬季蟄伏狀態　害蟲驅防の聲大なる割合に、其實の擧らざるは、必竟昆蟲學思想の乏しきより、夏秋害を逞ふせし昆蟲も、冬季に至れば自然に死滅するものなりとし、冬季に於ける蟄伏狀態の明ならざるより、其患を後年に遺すものゝみあらずと信じ、之れが驅防を等閑に付するによるならん

然れども一たび冬季採集を試みたらんには、忽ち之れが迷想を氷解し、其發生は已に冬季ょ胚胎するものあるを覺らん、今是れ等の迷誤を訂さん爲め、これを調成せり。其內容次の如し。

○卵、木の皮にあるものヤマカマスノガ、土の中にあるものイナゴ、枯枝の中にあるものセミ、木枝に纒ひ付けあるものウメケムシノガ、

○幼蟲、卵に寄食しあるものカミキリヤドリバチ、繭の中にあるものイラムシ、巢の中ょあるものヂバチ、スズバチ、石の下ょ居るもの、ケムシの一種、他物を纒ひ居るもの、ミノムシ、土の中ょ居るものキリウジ、カブトムシ等、水中に居るものイサゴムシ、トンバウ等、木の中に居るものテッバゥムシ、朽木の中に居るものコメツキムシ、

○蛹、木の枝にあるものアゲハノテフ等、土の中にあるものセミ、ブダウノイモムシ等、

○成蟲、蝶にて越年するものアカタテハテフ、モンキテフ等、土中に居るものケラ、朽木の中に潜み居るものヒメクロアリ、キノコムシ等、塵芥中ょ居るものゴミムシ等、草若くは根の間に居るものヨコバヒムシ、テンタウムシ等、

第十三函、害蟲各種　茲に害蟲として蒐集せしは廣く一般の害蟲を示さんため裝成せるものにして、農作物の害蟲の重なるものは發生經過より之れが敵蟲をも添へ別に十箱を調成せしを以て茲には只數種を配列するょ過ぎず。

人体ょ害を與ふるものカ、ブト、ノミ、シラミ、アタマジラミの類、傳染病の媒介をなすものイヘバヘカの類、衣服ょ害を與ふるもの衣蛾、シミ等、筆の軸を害するものタケノシンクヒ、家畜に害を與ふるもの山羊ノシラミ、イヌノミ、ハジラミの類、標本を害する者カツヲブシムシの一種、有益蟲を害する者カマキリ卵蜂、有用蟲を害するものカヒコノウヂバヘ、肥料成分を減少するものベッカフバヘ、ハナアブの類、貯藏種子を害するものコクザウムシ、バクガ、コメツヾリムシの類、果實を害すものナシザウムシ、木材を害するものスギカミキリムシ、キバチの類、蟲癭を造り成長を害するものイガバチの類、葉を貪食するものイナゴ、マツケムシ等の類、養液を吸收するものツマグロヨコバヒ、桑貝殼蟲、蚜蟲の類、莖を害するものイ子ノズヰムシ、樹心を害するものリンゴノカミキリムシ、クハカミキリムシの類、養魚の害をなすものコオヒムシ、ゲンゴラウムシ等の類、

第十四函、益蟲各種　作物を害せる蟲類を斃すもの、即食肉蟲類の多くは、之れ益蟲なり。等しく食

肉性のものと雖も、其性質を見易からしめん爲め、食肉蟲類、寄生蟲類の二つに分つ、即次の如し。

○食肉蟲類、蟲の來るを待ち構へ一攫して捕食するものカマキリの各種、空中を翔りながら巧に多數の小蟲を捕食するものトンバウ、シホヤアブの類、晝隱れ夜出でゝ小蟲を捕食するものゴミムシの各種、マイマイカブリ等、青蟲尺蠖蟲の類を捕へ來りて幼蟲の食餌とするもの蜂の各種、小害蟲を刺殺するもののサシガメの各種、蚜蟲又は貝殼蟲を食するものテンタウムシ類、尾端の鋏にて小蟲を捕食するものハサミムシの類、他の蟲を追擊して捕食するものミチヲシヘの類、穴を堀り小蟲を陷落せしめて食するもののアリヂゴク、○寄生蟲類、他の昆蟲に寄生するもの馬尾蜂、カモドキバチ、ハマクリヤドリバヘ、アグハヤドリバチ等の類、

第十五函、昆蟲に就ての俗説と迷信　害蟲驅除の行はれざるは、種々なる原因あるべしと雖も、古來種々なる俗説の行はるゝあり、迷信のあるあり、さればにや、田間に神符を建てゝ驅除の極意となし蟲送りを以て最良の方法と爲す等より、延て害蟲驅除に影響を及ぼすや大なり。今是等の迷夢を醒さんため、尤も普通に、且つ廣く行はるゝ、俗説と迷信とを集めて、簡單なる說明を加へたり。

○木田玄蕃に仕へしお菊の靈魂と稱せらるゝもの、お菊蟲　○駿河の人由井正雪の靈魂と稱せらるゝもの、シヨウセツトンバウ　○優曇華の花とて世人の珍重せるもの、クサカゲロウの卵　○甘露の降りしとて嘉瑞と稱せらるゝもの、蚜蟲　○麥化して蝶となると稱ふるもの、麥蛾　○小豆化して蟲となると稱せらるゝもの、ヒゲザウムシ　○實盛の靈魂が蟲となり稻田に害を與ふるなりと稱し蟲送をなすものツマグロヨコバヒ　○鶯の落し行きし文なりと稱せふるゝもの、オトシブミザウムシ　○雌雄の群集を以て螢合戰と稱せらるゝもの、螢　○慶雲とて瑞祥となし、蚊柱とて凶事の前兆と稱せふるゝもの、蚊　○ゲジ／＼の涎と稱し之に觸るれば禿頭病を起すと言ひ傳ふるもの、カマキリの卵　○佛者の使ゆへ之を虐待すれば瘧病を起すと言ひ傳へしもの、シヤウジヤウトンバウ　○マメハンメウの獄門とて串に貫き畑中に立て置けば他に移轉すと云ふもの、マメハンメウ　○古來冬は蟲となり夏は草となると稱せふるゝもの、セミタケ　○笹の節より生ぜし筍落ちて溪に入れば化して岩魚となると稱せらるゝもの、ササウヲ　（完）

因に記す右標本材料は全部兒童の採集せしもののみを以て調成せしものなり故に倘適當の材料に缺くる所あれば他日を待つて完成せんとす

◎昆蟲發句集

三重縣一志郡高岡村　喜田川要三郎

（一）螢

晝見れば首筋赤きほたるかな　芭蕉
螢火も百がものなりなめり川　宗因
ほたる火や吹とはされて鳰の闇　去來
簑干して朝々ふるふ螢かな　嵐雪
草も木も螢くさゝよ水の音　正秀
走り込む螢のなかや谷の水　丈草
田の水を見せて螢のさかり哉　北枝
蚊遣火の煙にうれる螢かな　許六
傘をたゝまで螢見る夜かな　舟泉
みだれ落て螢くさゝよ舟の飯　家松
煙ともならで螢の行末かな　度雄
水と火の相性もよき螢かな　望一
螢火に引かれてたよく蛙かな　花子
牛部屋に晝見る草のほたる哉　言水
疊むまで傘を放れぬほたる哉　流芝
山水や見えぬ螢の影うつる　鳳朗
草離れもる間もとかしはつ螢　圭布
取りたがる顔てらし行く螢哉　梅室

わりなしや螢もまはる水車　孤山
往て戻る程の智惠あり飛螢　井眉
ほたる程無事なものなし水の上　大曾
飛螢人懼るでもなかりけり　史千
水の上を闇よして飛ぶ螢かな　柳眉
風呂流す頃は地を這ふ螢哉　岱雲
飛かけて光りを見する螢かな　南枝
くらがりに牛の鼾や飛螢　昪左
むつかしき世も日は暮れて飛螢　成美
ほたる火に飛つく魚や水の音　鐘昏
孫に手を引かれて出たり螢狩　素明
叱ふるゝ子の手よ光る螢る哉　也有
奪合ふて蹈つぶしたる螢哉　巳百
呼ぶ聲は絶えて螢のさかり哉　丈草
明からくらがりへ入る螢かな　東工
螢火や草にたさまる夜明方　怒風
おのが火を木々の螢や花の宿　芭蕉
人魂か魂祭る野よ飛ぶほたる　德之

◎工業に於ける螢の應用

千葉縣　高橋徽一

古來螢は、詩歌俳句の材料となるの外、一般兒童等の玩弄物たるに過ざりしが、近時昆蟲學發達の結果有益蟲として愛護せらるゝに至れり、而して、螢光は專ら燐火なりと稱したりしが、其酸化作用よ基け

るものあることは、渡瀨博士の學說發表に依り、彌々明白となれり。同博士は、今猶將來理想の燈火として研究せられつゝありといふ。余輩は、是れが實際に發明せらる日の來らんことを、切望して已まざるなり。爰に亦、從來我地方に於て、螢を工業に應用するの一事あり。其は、夏時螢發生の際にあたりて、多く之れを採集し、陰干として貯へ置き竹細工の製藥に供するものなり。今若し竹を板の如く成さんとする時は、先づ丸竹を伐り、之を兩半し、豫め一升許りの水に螢少しを入れたる溶液を備へ置き、其中に投じて煮沸し、數時間の後ち取揚げ、厚板にて壓し、其上に重石を置くときは、扁平なる竹を製し得べく、而かも後來火水の爲めに、決して其形を變ずることなきを以て、殊に賞美せらるゝなり。彼の方形若くは楕圓形ある煙管筒の如き製作は、多く此法に依るものなりと云ふ。噫微々たる小蟲と雖も前後相對照し來れば其効用亦多とするに足らん。

◎博覽會出品害蟲標本解說書

岐阜縣　揖斐郡昆蟲學會

本會は、今回第五回內國勸業博覽會に、昆蟲標本を、第一部八類へ十五箱、第九部五十類へ八箱を出品せしが、今覽者の參考に資せん爲め、本誌の餘白を借りて、第一部八類に於ける出品物の解說書を紹介せんとす、幸に御揭載あらん事を望む。

解說書

部類	番號	品名	出品人
一　八	一	害蟲標本	岐阜縣揖斐郡昆蟲學會 代表者　高橋俊益

一、出品の種類幷に數　今回の出品は害蟲標本と稱し、岐阜縣揖斐郡內に於て最有害と認むべき害蟲卅三種に就き、從來本會員の調査研究の結果を標本に作成せしものたり。其種類と箱數及頭數は如左。

種類	箱數	蟲種數	頭數	附屬蟲種數	頭數
第一、稻の害蟲	五	九	一一一	七	二八
第二、桑樹の害蟲	四	八	八一	九	一四
第三、茶樹の害蟲	一	二	三一	一	一
第四、蔬菜類の害蟲	二	四	五二	一	二
第五、果樹の害蟲	二	三	一五	三	五
第六、森林の害蟲	二	六	四三	五	七
計	一五	三三	三三三	二六	五七

以上の標本中、第六森林に關する害蟲は第二部第九類に屬するものなりと雖ども、古來山林に富める本郡の一大害蟲として示すの要あれば、特に之を加へり。

一、添出品　第一號、害蟲標本說明書一冊。第二號、揖斐郡害蟲被害統計表一冊。第三號、揖斐郡害蟲損害統計色別地圖、同被害步合色別地圖六十二枚。第四號、寫眞四葉。

一、採集　本出品は、岐阜縣揖斐郡內害蟲驅除豫防委員、特別害蟲驅除豫防委員、及常務委員、其他一般會員の採集、或は飼育せしものたり。就中寄生蜂幷に寄生蠅等は、專ら常務委員の飼育研究せしものに係る。

一、目的　郡內農作に對する主なる害蟲の發生經過及被害の有樣、併に損害の尠少ならざるを示し、且害蟲の偶然に發生するものに非ざることを普知せしめて、害蟲驅除豫防、益蟲保護の必要を、何人にも理解し得る樣、專ら啓發開導の點に重きを置き、各種の狀態より、天敵、食物の關係をも說明せり是れ每函、卵、仔、蛹より其敵蟲、及び被害植物をも、添加したる所以なり。

一、本會の來歷及事業　岐阜縣揖斐郡昆蟲學會は、明治三十二年四月の創設にして、始め揖斐郡昆蟲研究會と稱せしが、明治三十五年四月、揖斐郡昆蟲學會と改稱せり。目下會員は、正會員六十六名、特別會員四十七名、名譽會員四名を有せり。本會の事業は專ら昆蟲學を研究して、理科思想の發達を計るにありと雖ども、主として應用昆蟲學の發展に力を注ぎたるを以て、郡下に於ける害蟲驅除豫防事業の

設計等は、從來、皆本會の掌る所たり。而して、其組織方法は、害蟲驅除豫防委員七名、特別害蟲驅除豫防委員三十名(一小學校に一名)を置きて、常に、專ら害蟲驅除豫防に當らしめ、又常務委員一名を置き諸害蟲を始め、一般の昆蟲をも飼育せしめて、害蟲驅除、益蟲保護の方法を研究せしめ居れり。

害蟲驅除をして完全に行はしめんとせば、先づ昆蟲學思想を養成して、害蟲の如何に恐るべきかの觀念を與へざる可らず。故に本會より、岐阜縣害蟲驅除講習會修業生を出せるもの十名、又本郡に於て、昆蟲講習會を開くこと前後三回に及び、特に、明治三十二年六月には、小學校教員昆蟲講習會を開設して一般教職にも、害蟲の觀念を與へ、之を小學兒童に注入して、感化誘導の功を他日に期せり。

郡內の諸害蟲中、最も有害なるは、イチノズヰムシ即ち二化生螟蟲なるを以て、驅除豫防の全力は、殆んど之に傾注せり。而して本會の之に對する方法は、一面には會員自から其衝に當り。一面には小學兒童、其他一般人民を奬勵して、春季より各種の驅防を實施するに努めり、其他、また小學兒童をして、稻蝨卵塊、浮塵子を採取せしめたる等、實施の成果少しとせず、此に參考の爲、明治三十三年度に於て苗代田害蟲の驅除に從事せる、揖斐郡鶯尋常小學校兒童の寫眞一葉を附せり。

苗代田は、目下、殆んど短冊形播きに改良したるは、本會が從來、屢次利益得失を說き、盡力したる功果多しとす。今や、更に進んで、共同苗代田に改めしめんとの目的を以て、既に四五ヶ村をして之を實行せしむ、則ち、揖斐郡淸水村共同苗代田の寫眞三葉を附して參考に供す。

本會が小學兒童を奬勵して、意外の効果を得たるは、稻蝨の驅除に在り、則ち五六月頃、灌水の時を以て、先づ卵塊を採集し、後秋季に及んで成蟲を採集したる際には、之を盡く肥料、或は家禽、養魚の飼料、其他儀助資等の、實用に供せしめたる一事にて、數年間の經驗によれば、驅除に要したる費用は、廢物利用に依りて得たる收入に比して、遙に少なきことを確認せり。

其他の害蟲に於ては、一々說明書、及被害統計表、幷に被害統計色別地圖等を添へたれば、爰に略す。

倘、本會は、五倍子(木附子)、柞蠶、栗蟲等の、有効、有用蟲類利用の途を開かんが爲め、之が調査を加へたるに、春日村、久瀨村、坂內村等より產出する五倍子の、少額にあらざることを知り、將來大に之を奬勵せんとの決議をなせり。

本會は、又昆蟲に就ての智識を與ふるには、標本を以て實物教授に賴るの利にして、且益あるを信し、本會事務所を始め、各小學校には、普通の害益蟲、其他普通の昆蟲標本を陳列したりと雖ども、更に、

尙進んで、明治三十六年度の事業として、各町村役塲、及各區長の宅等にも、直接郷村の利害に關係を有する標本を備ふることを決議し、現今の事務所を擴張して、昆蟲陳列舘に充つる計劃をなし、今や一郡下に於ける昆蟲の分布調査に着手せり。

一、補助　揖斐郡よりは、本會の事業を有益と認め、年々郡費より五拾圓内外の、補助金額を交附せり。

一褒賞　明治三十四年、岐阜市に於て開催の第一回全國昆蟲展覽會に、分類標本を出品して、一等賞銀盃を、害蟲標本を出品して、二等賞を受領せり。

一、審査請求の主眼　一、普通農家の智識を啓發し、又小學兒童をして、害益蟲の區別を知らしめんが爲めに、或標準を設けて、土地の實況と、人智に適切の標本を作成したること。二、本出品の蟲種は皆郡内所産なるが故に、各級農會等に於ける説明の實用に供し、併せて昆蟲の地理的分布を知らしむるに稗益あること。三、標本は、各方面より觀察し得る樣の意匠を加へたるを以て、古來の迷謬を破り、兼ねて一般生物學上の智識をも、見學者に與ふべきこと。四、農桑業各種の害蟲を分別し、又極めて簡切に、昆蟲の狀態を示し、兼て自然の制裁より、淘汰作用の利をも、明示したるが故に、農業上、直接に受くべき利益は、極めて顯著たるべきこと。五、本會の事業は、實利を擧くることを以て目的となしたるを以て、他の諸會の如く、理論にのみ傾かず、着々、學理と經驗とを實試して、害蟲驅除の上には不少の成果を來したること。六、標本は凡て昆蟲學上の規準を守り、成るべく雌雄の別を示し、又、其保存配列等にも、注意を加へたること。

◎土佐産の蟲報 (第九の續)

高知縣土佐郡　武内護文

○葉蟲科　(一)アカソチハムシ。(二)ヨモギノヒメハムシ。(三)ヨモギノハムシ。(四)ハツカノハムシ。(五)フヂノハムシ。(六)ヤナギノハムシ。(七)イチゴハムシ。(八)クハノハムシ。(九)ウリノハムシ。(十)クロウリハムシ。(十一)ゴボウノハムシ。(十二)サツマイモノヒメハムシ。(十三)ヂンガサムシ。(十四)トゲトゲノ一種。(十五)ナノノミハムシ。(十六)アヰノノミハムシ。(十七)ヤナギノルリハムシ(十八)サルハムシ。(十九)ミヅキノハムシ。(二十)ダイヅノハムシ。以上二十種中、(一)は産數少く、(二)と(三)は主ら艾葉に來集し、(三)は時に牛蒡を害す。(四)は稀に之を獲るとあり。(五)は幼蟲成蟲共に藤葉に多し。即ち、濁朱色の翅鞘を有するものならん。(六)は柳葉に多く發生する地方あり。即ち

大形鈍黄にして、數多の小黒点あるものならん。(七)は時に西洋苺を害することあるも主にミヅツバ、諸種の蓼類及び野大黄に多く、幼蟲、成蟲共に往々蓼藍を害すること少からず。成蟲の狀態を以て越冬し、一年六回内外の發生をなす。(八)は全縣到る所早春桑樹の新葉を害すること少からず。(九)は幼蟲成蟲共に最も農家を苦しむ。(十)は之に次ぐ。(十一)は幼蟲、成蟲、共に牛蒡を害すること頗る甚しきを以て、仮りに此名を附す。胸部黄色にして、鞘翅は同色或は黒色に、脚亦黒色なり。形(十)より稍小く、鞘翅は柔軟にして、其後端相合せずして尖る。(十二)は一見(二)に似て甘藷葉に加害するもの、未だ細撿したるに非ず。(十三)は稀に之を産するを見る。(十四)は樹葉上に鳥糞を擬し、産數少からず。(十五)と(十八)は到る所、蔬菜を害すること極めて大なり。(十六)は野生の蓼科植物及び蓼藍に多く、(十七)は形(十八)に似て稍小に、澗畔の柳葉に多きもの是ならん。(十九)は專らトサミヅキに發生し、大形にして深紅深綠の二色を交へ、金屬光を放て、最も美麗なるもの、仮りに此名を附す。(二十)ハ一分弱の小形種なり。淡黄褐にして、二黒條あり、大豆の新葉を害す。故に此仮名を附せり。此他、猶ほ幾倍の種類あるか、殆ど數へ盡すべからず。

○豆象鼻蟲科　ヒゲゾウムシ。貯藏の小豆に加害すること頗る大なり。

○偽步行蟲科　(一)キマハリムシ。(二)スナモグリムシ。(三)コクヌストモドキ。(一)は山中に普通なり。(二)は海濱の沙地に多く、悪臭堪へ難き黒色なるもの、即ち是ならん。(三)はオホコクヌストと共に穀類に大害を加ふ。

○地膽科　(一)マメハンメウ。(二)ツチハンメウ。此二種中(一)は高知市附近には之を見ずと雖ども地方によりては大豆に大害を加ふ。(二)は早春三月の頃より、既に地上に匐行す。

○赤翅蟲科　ベニカミキリダマシ。稀に山中に於て之を獲ることあり。

○小蠹蟲科　(一)マツノシンクヒ。(二)クハノコシンクヒ。(三)タケノコシンクヒ。(四)クハノヒメシンクヒ。此中(一)は松樹に多く。(二)は時に桑樹を枯死せしむることあり。(三)は竹製の器物を害すること頗る大なり。(四)は二に比して小形、体長五厘餘あるを以て、仮りに此名を附す。全縣桑樹に加害すること極めて大なり。

○青色象鼻蟲科　(一)オトシブミザウムシ。(二)ヒメクロオトシブミ。(三)クロホシオトシブミ。此三種の中(一)は到る所栗、櫟等に多く。(二)は薔薇に大害を加ふることあり。又山野に少からず。(三)は

櫟樹等ニ在る大形黄色にして、數多の小黒点あるもの即ち是ならん。

○象鼻蟲科　(一)シギザウムシ。(二)イチノザウムシ。(三)ヒメザウムシ。(四)サルザウムシ。(五)マツノザウムシ。(六)ナシザウムシ。(七)コクザウムシ二種。右の中(一)は成蟲を見るヿ餘り多からず(二)は最も普通ニして、農家を困むるヿ少からず。成蟲の狀態を以て越年し早春二三月の頃、既に交尾せるを見るヿ少からぞ。他の稻作諸害蟲と同じくスヾメノテッポウを食す。(三)は到る所桑樹に大害を加ふ。(四)はミヅソバ及び蓼藍等に多く來るを見る。(五)は松樹に加害するヿ少からず。(六)は全縣到る所に之を産するを見ずと雖ども、地方によりては枇杷ニ加害するヿ大なり。或は梅實を害するヿあり無論、梨果を害するヿは疑はざれども、未だ梨樹栽培家の報を得ぞ。(七)は大小二種共ニ、全縣農商を論せず、擧て其害に苦む。此他、此科のもの猶ほ幾倍種あるか殆ど知るべからざるなり。

鞘翅類附報　ミチシルベの類は俗に皆之をハンメウと稱し、其幼蟲をツボムシと云ふ地方あり。ゴミムシ類には俗稱なし。唯、行夜一種をヘヒリムシと稱するのみ。(大和金峯地方にてはマヒマヒカブリをビハムシと稱す。形琵琶に似たる故なり)。ゴミムシの稻田に來るものは、時にクロクサガメムシと誤認して捕殺せらるゝヿあり。龍蝨類には俗稱あるを聞かず。幼蟲、成蟲、共にガムシと同一視するもの多し。ガムシは地方ニよりては之をカハゴゼと稱す。川蜚蠊の義なり。其俗稱なき地方にても、水中に棲む蜚蠊に似たる蟲と云へば、皆な之を解す。春季往々稻苗に卵を附するに因りて、農家を驚訝せしむるヿあり。幼蟲はタムカデ(田蜈蚣)と稱し、又たヤマメとも云ふ。頗る衆人の忌避する所たり。ミヅスマシは之をマイマイムシと稱し、瓢蟲類は地方によりてはマンヂユウムシ(饅頭蟲)と稱し、蚜蟲と共に忌嫉せらるゝヿあり、カツヲブシムシは一般に幼蟲成蟲共にガイダと稱す。一商人烏賊の甲殼を刻で兎鼠小鳥等を作り、其底を凹を陷せしめて、此蟲數頭の背面を其凹部に糊着し、負ふて之を動かさしめ、之を兒玩の爲に鬻ひて頗る利を得たるものありと云ふ。タマムシは女兒の白粉函中ニ投して愛重するヿあり。ウバタマムシはヂンマ或はヂイと稱する地方あり、翁の義なり、往々タマムシの雌と稱す。コメツキムシはツメハジキと稱し、其幼蟲の加害するものはハリガチムシと云ひ、或は螟蟲と同しくスドウシの名を用ふ。ヒメホタルは一般にホタロ或はホウタロと稱し、ホタルは之をオニホタロと稱す。兒女歌ふて之を捕ふ。幼蟲をムシホタロと稱す。大形の天牛、カブトムシ及びクハガタムシは通して多くヨロヒムシと稱し、金龜子の幼蟲は之をニウドウムシと云ふ化して蟬となると稱するもの多し。天牛類ハカ

ヂワラムシと稱する地方あり、裝甲せるが故ならん。又カヂキリムシと稱するもの多し、クハノカミキリムシが縣下の重要作物たる楮樹を咬害するが故ならん。カミキリムシの幼蟲をテッポウムシ、又はカシムシと云ひ、兒童の疳疾を治するの效ありと傳ふ。ウリハムシはハラボテと稱する地方あり、腹膨の義なり。或はキハヘ(黄蠅)と云ひ、瓜に附く蠅とも稱す。サルハムシは金龜子に比してコガ子と稱する地方多く、其幼蟲は蛄螻に比してイラと稱するもの多し。ヒゲザウムシには俗稱なしと雖ども、小豆化して蟲となると稱するは、此害多きに因るならん。マメハンメウはサルミヨウジンと稱する地方あり。コクザウムシは之をホリと稱す。故にヒメザウムシ及びイネノザウムシ、ナシザウムシの如き、皆ホリの稱を用ふ

(完)

◎農事試驗場擔當人會の決議事項

三重縣　西岡嘉十郎

三重縣阿山郡農事試驗場各町村擔當人會は、四月廿日午前十時より、阿山郡役所内に於て開會せしが、出席者拾四名にして、其協議事項中昆蟲に關するものは、左の如くなりしと。

一、苗代田に於ける捕蟲の準備を完成し、捕蟲器の使用、並に誘蛾燈の裝置等完成を期すること。

二、浮塵子及螟蟲其他病蟲害の發生を認めたる時は、其狀況を急報すること。

三、誘蛾燈は調査を精密にし、郡内の點火期日を定めて豫察の實を擧げ、且つ其裝置等一般の摸範的施設を期すると、尤も例により、兩期とも初めて拾蛾以上の誘殺を認めたる時は、本郡役所及町村役場へ急報すること。

◎昆蟲に關する葉書通信　(第三十一報)

(一七一)昆蟲採集報(岐阜縣郡上郡、塩田健藏)　本郡に産する昆蟲の種類割合に多く、先般報導せし蝶類の外、本月に至りてギフテフ、クジャクテフ、チャマダラセセリ、コツバメテフ、其他蟲名不明のもの三種を獲たり。本郡の昆蟲に富めるは、我々採集者には好都合なれども、裏面には農業上寒心すべき事にこそ。(四月十三日附)

(一七二)サンホーゼー貝殼蟲分布報告(新潟縣農事試驗場、星野信)　本縣西蒲原郡秋津村梨樹に、サンホーゼー貝殼蟲を發見せり。聞く、同地は既に十餘年前より發生し居れりと、尚ほ大に調査せんとす。(四月二十一日附)

（一七三）ギフテフの分布報告（鳥取縣、高橋直義）　博覽會見物の爲め、生徒六十名を引率し、京坂まで旅行せしが、時日の都合上貴所を參觀し得ざりしは、今更殘念なり。右旅行中京都泉涌寺にてギフテフを見出し、寺福寺にて三頭を捕獲せり。思ふに、此附近に多く發生するならん。（四月二十一日附）

（一七四）竹節蟲の產地（三重縣阿山郡、西岡嘉十郎）　前號の本誌に於て、名和先生の圖說せられし竹節蟲科四種の內、予が當地方に於て採集せしものは、トゲナヽフシムシ（昨年八月十六日竹林中にて採集）、エダナヽフシムシ（同年十月二日松林中にて採集）の二種にして、今尙、予が標本箱裡に、之れ有り候。（四月廿三日附）

（一七五）桑のシンムシに付報告（岐阜縣武儀郡、松村菊太郎）　愛知縣より輸入したるシンムシ被害の桑苗出所の儀に付、御申越の趣拜誦、右は尾州丹羽郡布袋野町の者にて、其當時下之保村にて事實を確めし者なり、其行商人の氏名を取調べんとせしも、其年死亡せし由に付、遂に事止みし次第に有之候、併しながら布袋野町なるは事實に御座候、尙同縣羽栗郡飛保村に行きし人の談に、同地にも發生あるやの由傳聞せし事有之候、熊本縣上益城郡農事巡回敎師田中氏雄なる人の話に、同地にも發生し、被害甚しき由、大阪の博覽會にて、本郡の出品標本を見て、驅除法等を問合せ越せしに付、回答に該標本をも送付致し置き候云々。（四月廿三日附）

編者附記す、シンムシは目下の調査によれば、岐阜縣に於ては、武儀、益田を始め其他郡上、加茂、惠那、大野、吉城、山縣、土岐、可兒の各郡に蔓延し且つ隣縣、長野、愛知の兩縣にも分布し居れば三縣聯合して大驅除を行はんと夫々準備中の由。

（一七六）水族館の昆蟲（堺市水族館、藤田政勝）　曩きに御報告致置き候、水棲昆蟲中ギンヤンマの幼蟲は、去る四月廿五日に孵化し成蟲は盛んに飛翔しつゝあり、右は非常に面白く、從來の水族館にては未だ曾て見ざる所に御座候。（四月二十八日附）

雜報

◉內國勸業博覽會昆蟲標本評（續）

美術館出品のものゝ、昆蟲標本にあらざるは勿論、是は美術以外より觀察して批評を加ふべき性質のものにも非ず、然れども古來東洋に於て昆蟲を多く工業に應

用するの上より、將た現時の工業家の理科思想を忖度するの上より云へば、全國の精粹を蒐めたる美術品と昆蟲の關係とを觀察するも、强がち用無きにしもあらざるなり。乃はち下に出品名目其他を摘記し之を次回の博覽會に於ける出品物との對比用に供せんとす。（名和昆蟲研究所、永澤小兵衛記）

●美術館（樓下）　大阪市芝川又右衛門氏出品の蝶硯筥は小形のものなるが、蓋に十四頭の金色燦爛たる群蝶を描き、内部には七蝶を描けり、價は貳百圓とのこと。●京都市戸島彌一郎氏の牡丹蝶蒔繪硯筥は五百圓と云ふ贅澤品なるが、蓋には牡丹花を描き、硯の邊りに金と青貝とにて十一二蝶を適宜配置し、附箋には「待華日久見華綫。無雨無風滿意開。一夢沈香亭下宴。春魂化蝶又飛來」の一絕をさへ添置けり。●東京市日進塗料工場の色紙筥は、其蓋に金銀高蒔繪の牡丹花を咲かせ、内部の金梨地に大小の二蝶を描けるものにて、意匠は面白きも蝶形は面白からず、價は三百圓。●京都市並河靖之氏の筒形の七寶花瓶は、濃褐色の地質に竹を描き、上に翩々たる小蝶を飛ばしたるものにて、其内部は銀色なり、價は二百七拾圓。●京都市飯田新七氏の女帶地は、地質を七絲織金銀通しとし、これに雲に蝶を總散しとなしたる優良品にて、價は百七拾圓との事なるも、其蝶形の實を失へたるは昆蟲學者の家人用とするの價値なかる可し、但し翅の內面を金絲とし、外緣を銀絲とし、最小の蝶をば、全部銀絲にて織成せしを以て、外觀だけは人目を惹くなるべし。●東京市中丸淸十郞氏の扁額モザイックは、橫八寸許、縱凡そ尺二寸のものなるが、陶片を以て草花を造り、上に彩蝶を添へり（非賣品）。●京都市市田文次郞氏の錦上織女帶地は、前者にも增して四百五拾圓の高價のもの、扇面散し模樣の錆茶色にて、中に三蝶を織出したる數扇あり、蝶形の不合格なるは千里同風の感なきにあらず。此意匠は和歌御題「新年海」に取れるものとか云へど、甚だ覺束なき事と思はる。●島根縣園山與市氏の牡丹額面は、木彫の花蝶を杉板に膠したるものなるが、製作は巧妙ならず、價また低くして貳拾圓に過ぎず。

工業應用昆蟲畫報の十六（鉢）

●美術館（樓上）　東京市白馬會の出品に係る、昨年二月發行の雜誌「歌舞伎」の表紙には蝶形あり、是は長原孝太郞氏の意匠なりと

あれど、出處や典故を知らず。●東京市大日本圖案協會員深田藤三郎氏の形附圖案の上部には、我邦産外の鳳蝶三頭を寫生的に畫きなほ暗影を以て五頭許りを現はせり。是は當世語の所謂ハイカラ式の骨頂なれども、舊式に比較すれば優れる點なきにあらず。其他なほ花卉と配合せるもの、又は暗影となせるもの等數點あり、何れも同一筆法を用ゐて描出せり。●同協會員長澤時基氏の圖案資料中には、菊花に有紋白蝶、黄鳳蝶を以て模樣となせるものあり、外に菊模樣の花瓶形に數頭の鳳蝶を點添せしもあれば、書籍の表紙鏡縁、寫眞縁等を同じ菊花と共に飛蝶を配合せしものも少なからず。是亦洋式なれば花蝶は大醇小疵なるも、多く霜枯時の花とか平生蝴蝶などの好まぬ花と呼ばるゝ菊花に此昆蟲を配合せしを訝かる、これにても畫家と動植物の研究の必要を見るべし。●同會員十二町貞吉氏の織物圖案（テーブル掛）は先づ面白し、則ち中央をば群蝶を以て圓形となし、其四隅をば、菜花を以て飾り模樣となせしものなり。●京都市山下宜十郎氏の眞美大觀は、古畫を臨摹せる精緻の木版刷なるが、中に藤の枝に蜂窩と孤蜂とがあり。●東京市小島六太郎氏の服裝圖案は、地色を葡萄色とし、白き葡萄蔓を以て唐草に擬ひ、上に金色の三蝶を放てるもの。●東京市小池盛之助氏の春秋模樣服裝圖案は、裙摸樣に他の花鳥と共に數蝶を配合せしもの。●東京市櫻井春吉氏のリボン摸樣服裝圖案は、赤地に金の鶴龜及び松竹梅を顯はし、更に白きリボンを摸樣化して五蝶を配合せしもの。●島根縣塩津親次氏の蝶香爐は、銅地に銀の象嵌を施し、蓋には唐草を綴ひ、上部の周邊に群蝶を飾れるものにて、其價百七拾圓。●石川縣宮地次右衛門氏の南鐐蝶撮香爐は、銀地に象嵌を施したるものなるが、其蓋に群蝶あり、中央の撮また蝶形にて、下部の菊花は象嵌とす、價は二百五拾圓なり。●沖繩縣山口辰吉氏（號瑞雨）の風俗踊圖には、踊手の持てる杖の飾房に二蝶あり。●東京市關袖江氏の畫は、猿兒飛蜂の圖なり、感服すべき程のものにあらざるも、一枚の價は百五拾圓との事。●東京市松野霞城氏の揮毫せる五穀豐穰圖は、其價五拾圓とかにて穀菽の上に稻螽三頭を配合せり。●東京市藤本翠香氏の秋草猫兒圖は、月前秋花の咲亂れたる傍に四猫兒戯るゝ景にて、一猫兒の竈馬を追ふ所如何にも可憐なり。

其他一二の出品ありしやうなれど、左まで眼に入るべき大作妙畫も無かりしを以て、爰に掲げざるべしなほ次號には、筆の序に、京都帝室博物館に於ける、時代美術品中の昆蟲をも紹介せんとす。（未完）

◉工業應用昆蟲畫報（第五報）

本號掲載の應用昆蟲畫報の（十六）は石川縣能美郡小松町にて購入したる同地産有名の九谷燒なり、元來九谷燒には種々の昆蟲模樣を現し居るも殆んど見るべきものなし、該器の蝶は比較的宜しきものなれども是を以て滿足し得べきものにあらざるなり、又（十七）は同縣工業學校の製作にして大小廿八頭の蝶を寫し出せり是は僅に先人の糟粕を舐めたるものにあらざれば今一層の研究を積みなば恐らく高評を拍するに到らんか。

◉第六回岐阜縣害蟲驅除講習會

前號所載の如く、四月十日より二週間、當昆蟲研究所内に

開きたる、岐阜縣主催の同會は、從來、縣費より其費用の殆んど全部を、各會員に補助し來りしかば、或はお義理的聽講者も有りし樣間々見受けたりしが、今回は全く會員の自辨となりし故にや、會員僅十八名なりと雖も、皆熱心に日夜修業し、好良の成績を擧げて、去月二十三日修業證書を受領せり、今修業者の氏名を擧ぐれば左の如し。

組別	郡市名	町村名	族籍	役名	氏名	生年月	履歴摘要
第壹組	安八郡	名森村	平民	組長	古澤濤一	明治十年十一月	高等小學校卒業、漢學修業
	稻葉郡	鷺山村	平民		川島俊治郎	明治十五年五月	高等小學校卒業、農業ニ從事ス
	本巣郡	川崎村	平民		大平艮吉	明治十八年十一月	大垣中學校修業
	不破郡	關ヶ原村	平民		山口吉彌	明治二十年三月	農事講習會修業、農業ニ從事ス
第貳組	不破郡	表佐村	平民		杉江初治	明治十六年一月	農事講習會修業、農業ニ從事ス
	安八郡	名森村	平民	組長	岩田六三	明治十四年七月	小學校授業生勤務、郡教育講習會修業
	武儀郡	北武藝村	平民		早川義勝	明治十六年八月	農事講習會修業、農業ニ從事ス
	山縣郡	北山村	平民		土岐五郎	明治廿一年十一月	高等小學校卒業
第參組	惠那郡	武並村	平民	副級長	丹羽一	明治九年十一月	惠那郡書記
	武儀郡	中ノ保村	平民	組長	丹羽高通	明治十六年四月	小學校補習科卒業、村役場書記
	安八郡	名森村	士族		安藤善之助	明治十八年六月	小學校全科卒業、漢學修業
	可兒郡	帷子村	平民		齋藤五六郎	明治十九年十一月	農事講習會修業、農業ニ從事
第四組	武儀郡	南武藝村	平民	級長	相宮廣吉	慶應二年四月	村會議員、村役場書記
	安八郡	結村	平民	組長	岡田曠	明治十五年三月	高等小學校卒業、漢學修業
	稻葉郡	北長森村	平民		林之作	明治十五年九月	高等小學校卒業、農業ニ從事ス
	可兒郡	帷子村	平民		前田一重	明治十五年十二月	高等小學校卒業、農業ニ從事ス
第五組	大野郡	濤見村	平民	組長	墟谷市之助	明治七年五月	農事講習會卒業、農蠶業ニ從事ス
	稻葉郡	北長森村	平民		足立佐吉	明治八年六月	郡害蟲驅除講習會修業、農事講習會修業

◎第十六回全國害蟲驅除講習會

全國害蟲驅除講習會は、前回迄、既に回を重ぬる十五、八百餘名の有爲なる修業生を出せしが、尙益々斯學の奮興を謀らんが爲、來八月上旬に於て、第十六回の講習會を開かんとす、尙詳細は、次號に於て報導すべし。

◉鳥取縣東伯郡昆蟲研究會　昨秋、當昆蟲研究所長名和氏が、鳥取縣下出張の序ゟ、東伯郡有志の請ひに應じて一場の講演をなしたる折、同志間の機關として、昆蟲研究會を興との必要を說き且懇ろに之が設立を慫慂せしことありしが、同郡有志者は其勸奬に從ひ、舊冬左掲の規則を協定の上愈發會せし趣き、足羽財藏氏より通知ありき。

第一條　本會は東伯郡昆蟲研究會と稱し、事務所を當東伯郡農會内に置く。◉第二條　本會は昆蟲學の研究、及び害蟲驅除豫防の普及を圖るを以て目的とす。◉第三條　本會の事業は左の如し。（一）昆蟲標本を製作し一般の參考に供する事（二）昆蟲に關する講話會及談話會を開設すること（三）昆蟲に關する諸般の事項を協議し、汎く他研究會と氣脉を通ずる事（四）官廳に建議し又は其諮問に應答する事（五）前各項の外必要と認むる事項。◉第四條　本會々員は左の三種とす。（一）名譽會員（二）特別會員（三）通常會員。◉第五條　名譽會員は學識經驗ある者を、特別會員は本會に功勞ある者を總會に於て推選す。◉第六條　通常會員は本會の目的を贊成したる者に限る。◉第七條　本會々費は每年金拾錢通常會員より醵出するものとす、但納期は總會に於て之を定む。◉第八條　本會に左の役員を置く、其任期は各二ケ年とす、但し役員は名譽職とす。會長一名　副會長一名　理事三名　評議員六名。◉第九條　會長は郡農會長を推戴し、副會長以下は總會に於て之を選擧す。◉第十條　本會役員の職務を規程する事左の如し。會長は本會を總理し會議の長となる。副會長は會長を補佐し又は代理をなす。理事は會長の指揮を受け諸般の事務に從事す。◉第十一條　本會總會は每年春秋二期に開く、會務の狀況及其他報告は春期に之をなすものとす、但し會長の意見に依り臨時總會を開くことを得。◉第十二條　評議員會は隨時必要に應し會長之を招集し、急施を要する場合は總會に代りて議決するものとす。◉第十三條　本會々則の加除更正を要するときは總會の決議に依る。

◉名和昆蟲研究所長の出張　四月二十五日岐阜縣本巢郡彈正村農會ゟ、五月三日愛知縣渥美郡昆蟲研究會總會へ臨席、次て同縣寶飯郡冬季昆蟲展覽會審査長として同會へ出張せられたり。

◉愛知縣寶飯郡小學校冬季昆蟲展覽會概況　寶飯郡冬季昆蟲展覽會は、五月三日より一週間、同郡役所内に開會せしが、意外の盛會にて、出品の重なるものは、分類標本百六十二箱（一万百三十頭）、害蟲標本五十六箱（三千百六十四頭）、益蟲標本二十九箱（千四百三十四頭）、教育用標本五十八箱（二千五百頭）、其他裝飾用標本二十五箱、參考品百四十二個、小學校兒童圖畫二百五十四個等にして尤も特色とする處は、生徒の圖畫は悉く實物寫生圖なるよあり、其他小學校教員の手に成る、教場用昆蟲掛圖等ありて、教員と多大の利益あるを認む。審査は名和昆蟲研究所長指揮の下に、去六日全く完了を告げ、七日褒狀授與式を擧行したり。

◉日本最初の昆蟲學者

三月發行の米國費府理科大學昆蟲學教室にてヘンリー、スキンナアー氏に依て編輯せらるゝ昆蟲學新報は、口繪に當昆蟲研究所發行の、昆蟲世界雜誌の表紙を入れ、其中央に名和所長并に、息女貴子の最も鮮明なる肖像を掲げ、卷首に日本最初の昆蟲學者（Japan's Foremost Enomologist.）と題し、マーラット氏に依て、氏が先年名和昆蟲研究所を訪はれし時の有樣を數頁記載せられたり。或は紙面の都合により次號に掲載することあるべし。

◉新刊昆蟲書

開成館發行に係る、理學博士石川千代松氏著書、昆蟲學教科書は、凡て廿八章一七七頁より成り、分類及害益蟲、採集法、保存法等の、從來其記事に乏しからざる所のものは、記事を節略し、外形の構造、内部の生理作用及外界との關係、即自然淘汰の妙理等は、鮮細に説述し、且鮮明なる圖版百六十九圖を挿入し斯學の研究に一大利益を與へられたるは、是れ氏の賜といふべし。

○所友桑名伊之吉氏、昆蟲學研究法てふ一書を著し、裳華房より發行す、該書は最も人目に觸れ易き普通の種類を以てし、章を分つ七、更に別ちて五十一節となし、百三十九の圖版を挿入し、研究の方法を簡明に記述したるものにして、書名に背かず、初學者の指南車たらんか。

工業應用の昆蟲書報十七（花瓶）

（岐阜縣　河田貞城氏寄贈）

◉千蟲萬豸錄(第三)　最近の諸報告より昆蟲界の記事を抄錄すること左の如し

○奈良縣に於ては、巡査教習所に、自今害蟲驅除及豫防法の一科を加へ、且、農事巡回教師の設けなき郡には、縣廳より主務官を派遣し、害蟲驅除講習會を開くと、斯道の爲め慶すべし、何れの縣も斯くあらまほし。

○福井縣下各郡に於て、一郡一箇所、乃至二箇所に、其他、愛媛、鹿兒島、德島、千葉等の各縣、亦害蟲驅除講習會開設の擧を諸新聞に散見す、根本的驅除は昆蟲思想を與ふるを上策とす、益此擧の多からんを望む。

○兵庫縣知事は、今回各市郡長へ向け、害蟲の發生は、年を逐ふて增加するの趨勢なれば、自今嚴に之れが驅除を勵行し、其撲滅を期する爲め、採卵、捕蛾、短册形苗代田實行に努めしむる樣、訓令を發せられたり。

○千葉縣に於ては、稻作害蟲驅除豫防心得を發し、害蟲の習性經過及、之れか驅除豫防法に付き、詳細なる說明を與ふ、且地方長官の命令に從はざるものは、科料、拘留、若くは相當の罰則に處する旨の條項を含む。

○其十二條に曰く、第六條、及第八條に依れる官吏、若くは其指揮を承くる者の行爲を妨害する者は、貳圓以上廿圓以下の罰金、又は十一日以上廿日以下の重禁錮に處すと、宜しく命令を待たず、進んで驅除すべし。

○農學士舟木文次郎氏、此頃、螟蟲驅除に付き說をなして曰く、螟蟲は稻藁內に蟄伏し居れば、豫め藁を細密に打潰すか、熱湯に浸漬し後使ふべし、刈株は堀起して燒却すべしと叫ばれたり、知らず行はるゝや否や。

○兵庫縣朝來郡粟賀村農會は、桑樹害蟲、枝尺蠖幼蟲買上法を議し、十匹貳厘にて既に實行せしが、當業者は勿論、小學兒童は、歸宅後競て捕獲し、其收益を貯金せり、而て三日間に五萬頭とは、實に其多數に驚く。

○岐阜縣稻葉郡鶉沼村、字幅及菖蒲池地方の桑園には、クハハムシの發生甚しく、數年前より非常に蕃殖し、爲めに春蠶には、該桑葉を用ふる能はずと聞く、依て驅除法を指導せしとは、可兒郡齋藤五六郎氏の所報。

○野生が澤山鳴出す頃には、相場も大に下落するならんが、目下螽斯、轡蟲、草雲雀、邯鄲等は一疋拾六錢、鈴蟲六錢、松蟲七錢、閻魔蟋蟀七錢等にて、蟲籠は貳錢五厘より廿貳圓迄とは、東京賣蟲屋の相場なりと。

◉諸國の蟲送

(イ)島根縣邑知郡矢上村にては、蟲送りの當日に、稻田へ(何蟲ヲ送ルカアブラ蟲ヲ送ルゾ)と書したる旗を樹て、之を社頭に集めて燒棄て、而して後藁人形を造りて藁馬に乘せ、實盛樣と云ひて擔ぎ出し、河の下流に棄つ、又蟲送りの當日には、踊子と稱する者、裝飾したる笠を被り、太鼓などを打ち、奇異なる噺子にて歌舞せり。(ロ)同縣能義郡赤江村にては、近年まで普通に行はれ、一名實盛と稱し、維新前後迄は、地主より獎勵して、行はれたるが如し。今、其概略を述ぶれば、揷秧後害蟲發生の兆ある時は、一部落の農民は氏神社に集合し、實盛の像に擬したる藁人形を造り之れに害

蟲を入れたる紙袋を付し、竹又は藁製の輿に載せ、神官をして、祈禱をなさしめたる後（夜間）、實盛道と稱する、一定の道路に沿ひて、多勢、行列をなして、擔ぎ步き、鳴り物を打ち、法螺を吹き、各自に松明、提灯等を携へて、（實盛登りよつた、實盛送る）、と大聲に連呼し、部落内を廻り、後飯梨川尻又は村界に至て、再び神官の祈禱を了りて、燒棄つるあり。（ハ）同縣飯名郡來島村にては、往古齋藤實盛が討死の時、深田に於て奔走自由ならざるに乘じ、百姓之を打ち殺したるに、其年稻作害蟲の爲、收穫皆無に屬せり。時人、以て實盛の祟りとなし、其蟲を名けて、實盛蟲又カブト蟲と呼べり、之れ浮塵子の一種なり。世人、大に其被害を患ひ、蟲除祈念祭として、蟲送り法を講じ、名けて實盛送りと稱し、藁にて人形及馬を作るれ前諸村と同しく、先づ夏土用前に於て、壯丁之を擔ぎ、全村農家毎戶より一人づゝ相集り、各小旗を樹て、太鼓を擊ち、（何蟲を送るか、稻の蟲を送るよ、何處まで送るか、界まで送るよ）と蟲送り歌を唱ひつゝ、終日田圃間を奔走し、村界に至りて茲に藁人形、馬及び旗を集めて以て神職祈念を爲し、後河中に投するか又は燒き棄つるを例とせり。然るに明治十七、十八年より、之を改めて火送りに變更せり。則ち夜中、前例に倣ひ、行列をなし、各人手に松明を點して田畦を駈廻り、土產神社の境内に集めて燒棄し、可成徹夜神社に籠り、祈念をなせり。然るに、今より十年前より又之を一變して、夏土用前、土產神社に於て祈念を行ひ、毎戶參拜して、了る事となり、（此習慣は）年一年と廢頹して、其現象を見ざるに至るは、蓋し遠きにあらざるべし。（ニ）鹿足郡朝倉村にては、古來の習慣としては、年一回、蟲祈禱と稱して、各大字共、社頭に於て害蟲退散の祈念をなし、且つ神輿を舁ぎ廻るの風習あり。其費用は反別割として、地主の負擔とす。（ホ）八東郡忌部村に於ても、農作物に害蟲發生したるときは、藁人形を作り之を實盛と稱して擔ぎ廻し事は殆ど前諸村と同樣にて古來より行はれしが、明治三十四年より村農會に於て斷然之を廢止の事に決したり（以上島根縣農事試驗場、田中房太郎氏報）

◉新刊雜誌中の昆蟲記事

近刊發行の諸雜誌中に揭載せられたる昆蟲記事は左の如し。

（一）大日本農會報（第二百五十九號）農學士堀健氏の柑橘に寄生する貝殼蟲に就て柑橘栽培上の關係より該蟲の發生經過及び加害の狀天然驅除の有樣、人工驅除の方法等を詳細に說明せられ、新潟縣平田氏萍果害蟲の質問に對する、農學士小貫信太郎氏の應答あり。●（二）新農報（第五十號）には農事試驗場畿內支場岡田嘉一氏の飜譯に係る驅蟲劑調製法及び使用法を第四十八號より連載せらる。●（三）農事雜報（第五十七號）小貫信太郎氏は蟲害の豫防は冬季の仕事にすべしとて諸害蟲の經過習性より驅除豫防方法の注意を與へられたり。●（四）島根縣農會報（第五十九號）島根縣農藝委員伊藤權一郎氏は和歌山縣に於ける柑橘栽培狀況視察の記事中に同樹の害蟲たる蚜蟲、貝殼蟲、天牛、葉捲蟲、避債蟲等の簡易驅除方法をも載せられたり。

●岐阜縣昆蟲學會記事　同會第五十三回例會は、去る五月二日、當昆蟲研究所内に於て開會せり。當日は當昆蟲研究所主任永澤小兵衛氏の、臺灣並に清、韓地方へ斯學研究の目的を以て、近日中に渡航せらるべきに付、席上別意を表する事とて、各地の篤志者は、孰れも出席せられ、尚千葉縣の老農大竹義道氏、及農商務省農事試驗場より、昆蟲調査の爲來所中の高邑助手等、特に出席せられたり。今其次第を記すれば、午後一時名和副會長の開會の辭に、次て第一席石田和三郎氏は、愛知縣渥美郡昆蟲分布調査報告をなして、環紋蝶科に屬するコノマテフ外數種の奇品が、該郡に於て採集せられたる事に及ぼし、名和氏は之に敷衍して、是等の分布を說き、第二席高邑虎治氏は、西ヶ原農事試驗場備付の昆蟲標本に就て、一部の標本を供覽し、第三席名和靖氏は、姬蜂科に屬する寄生蜂の一種に就て、講演せられ、第四席岐阜縣大垣中學校教諭森宇多司氏は、トノサマバッタの聽音器と眼に就き、生理的關係を說明し、第五席大竹義道氏は、害蟲驅除に就て、自己の實驗に徵して、驅除の方法を詳說し、目下の有樣を歎息せられたり。右終て、暫時休憩後永澤小兵衛氏は、今回洋行の目的、及將來の希望を述べて、告別の辭をなし、次に本會幹事村井正元氏は、岐阜縣昆蟲學會を代表し、揖斐郡坪井伊助氏、岡山縣福井究雄氏、名和昆蟲研究所長等の送辭ありて、一同惜別の意を表し、午後五時散會せしが、頗る盛んなりき。

●昆蟲水曜會　當昆蟲研究所員の催しに係る同會は、前號に報告後、毎水曜日に開會して、都合九回なりしが、紙面の都合上詳載するを得ず、故に其講演者と、談話の重なるものを、左に摘載せん。

小森省作氏は蝶類の翅脉研究談、貝殼蟲の種類と驅除法、某農學士の害蟲驅除論に就て、邦産環紋蝶科の分類說。蛺蝶科の分類。高橋喜男氏はルリタテハテフ、アチスヂアゲハテフ、ヤナギハムシ等に就て毎會卵の研究談。棚橋昇氏は昆蟲腹部に就ての研究及目下採集すべき昆蟲の種類、桑葉蟲の食量試驗、クハケムシの黴菌幷に蜻蛉に就て。名和愛吉氏はカハゲナの幼蟲並に梨葉蜂の經過に就て及避債蟲の種類調査、桑葉蟲の食葉調査等。森宗太郎氏はハマダラ蚊に就ての研究並に京阪地方の昆蟲採集旅行談、昆蟲採集方法及昆蟲脚部の名稱に就て等。石田和三郎氏はサリハムシの經過並に蝶蛾類の蛹に就ての研究談及夜中採集方法、夜盜蟲驅除試驗の結果報告等。渡邊楠四平氏はコチムキカゲロフの性質、松毛蟲と蟲送りに就て。中井藤助氏はハマクリムシの話、飛驒國の昆蟲方言、蚊遺香の話等なりき。

●昆蟲標本陳列館の觀覽人　去る三、四兩月中に、名和昆蟲研究所の標本陳列館を觀覽せし人員は、總計九千貳百七十八人にして、其中最も多かりしは、三月二十二日に於ける二千二百三十五人、最も少なかりしは四月二十九日に於ける三十二人にして、一日平均百七十八人に當り、其重なる觀覽人は愛基園東宮侍從を始め、愛知縣病院長乙狩醫學博士、理科大學教授箕作理學博士、大森農學博士、東京高等師範學校教諭岩川理學士、及各府縣の實業家、教育者、學生等の諸氏なりき。（雜報、五月十一日脫稿）

名和昆蟲研究所長名和靖著

第六版

嶄微の一株 **昆蟲世界** 全

定價貳拾錢 郵稅貳錢（郵券代用一割增）

臨時刊行第二編

通俗益蟲集覽 第一輯再版（說明書附）

定價（郵稅共）金貳拾貳錢（同上）

臨時刊行第三編

貝殼蟲圖說 全一冊（再版）

定價（郵稅共）金拾七錢（同上）

● 農作物害蟲標本　壹組（桐箱入解說附　金四圓五拾錢）
● 農作物益蟲標本　壹組（桐箱入解說附　金[illegible]圓五拾錢）
● 教育用昆蟲標本　壹組（桐箱入解說附　金四圓五拾錢）
● 自然淘汰標本　壹組（桐箱入解說附　金五圓五拾錢）
● 雌雄淘汰標本　壹組（桐箱入解說附　金五圓五拾錢）
● 氣候變形標本　壹組（桐箱入解說附　金四圓）

（壹組の荷造費金貳拾錢小包料は壹拾錢）

● 昆蟲發育標本　各種
● 山林園藝害蟲標本　各種
● 昆蟲學研究用書籍及び器具一式

明治三十六年五月

名和昆蟲研究所會計部

昆蟲廻轉器頒與廣告

この昆蟲廻轉器は、昆蟲の翅色と光線の關係を示さんが爲め、數年前考案せしものなりしも、適當の製作者に乏しかりしより弘く頒與するに至らざりしが、今回特別調製の依賴を受けし序を以て、拾餘個を製作し、世の希望者に分たんとす、雌雄淘汰の原理を說き、天地自然の妙用を知らしめんと欲せば、少なくも此種の備へ無かる可からざるべし、一器の價は、金六圓とす、別に送費を要す。

（昆蟲廻轉器）

岐阜市京町　名和昆蟲研究所

◎害蟲圖解の刊行に就き

此害蟲圖解は、本邦産有害蟲種の大要を、何人にも理解し易からしめんがため當昆蟲研究所の一事業として、數年續刊し來れるものにて、既に府縣の各級農會より諸學校、警察署、郡衙等に備附られしもの甚だ多く、或地方の如きは之を小學校の教授用に充てしも有之候、然るに近來これと類似のものを出版して當昆蟲研究所の名を騙り、若くは同一の名稱を附して、是は害蟲圖解を更に放大圖に製せしものなりなど言觸らし、其僞版同樣乃ものを販賣する者有之哉にも相聞へ候間、愛讀者は此際十分御注意相成度候。

登録商標 硫曹

硫曹肥料

●硫曹肥料を肥作に用ゆれは第一に米質を宜しくし且つ頗る收穫を増すべし一反歩に付五六斗より一石二三斗を増す之を舊肥料を用ひたるものに比すれは見掛も遙に宜しく目方も重く土用を越して蟲附も稀なり舊肥料を用ひたるものは之に反したとへ見掛は異ならざるも米質惡しく又粒の收穫は同じくとも玄米となして一反歩三斗以上の相違あり之を舂きて白米となすに硫曹を用ひたる一分は舂減尠なく飯に炊くに頗る炊殖すべし（例之は舊肥料の米は水一升米一升なるに硫曹の分は米一升に水一升二合ならでは飯に適せず即二割以上炊殖の相違あり）●硫曹肥料を用ゆる農家は能々以上の事柄に注意し之を實驗して其效用の偉大なるに驚くべし●輸出米は硫曹肥料を用ひたるものならざるべからず然らざれば南洋熱帯地方通過の際多く腐融すべし●第一（過燐酸）を稻作に用ゆるには一反歩に三貫目より五貫目迄を舊肥料（大豆粕、油滓、堆肥、廐肥等）に混交使用すべし●硫曹肥料のみ施すなれは第八號を最も適當とす一反歩に十貫目乃至十五貫目を二回に分施すべし（堆肥は何れにも施すを宜しとす）●硫曹肥料は藍、煙草、薄荷麻、繭其他陸稻、粟、砂糖黍、桑并野菜物、菓物等に施して其效質に驚くべきものあり●第五回勸業博覽會に硫曹肥料を用ひたる農産物を出品し名譽金賞牌を得たるものには金壹百圓づゝ銀賞牌には金百圓づゝ一等賞牌には金五拾圓づゝ二等賞牌には金貳拾圓づゝ三等賞牌には金拾圓づゝを贈呈すべし●第八回關西府縣聯合共進會に出品せる農産物の內第一等賞を得たる香川縣の裸麥及德島縣の葉藍は何れも硫曹肥料を使用したるものなれば會社は香川縣の近藤太郎氏へ金百圓を德島縣[illegible]井[illegible]藏氏へ銀盃三ッ重壹組を贈呈せり●硫曹肥料の明細并に見本等は御申越次第贈呈すべし

大坂西區西野下之町

大阪硫曹株式會社

特許電話西四一九番

雜誌昆蟲世界合本出來廣告

○第十二號以下完備

本邦唯一の昆蟲雜誌

昆蟲世界 合本

第六卷（昨年分）出來

西洋綴金文字入美裝

●昆蟲世界第一卷　五部（自第拾貳號至第拾六號）
右は明治三十一年發行の分（但合本にあらず）

●昆蟲世界第二卷合本壹册（自第拾七號至第貳拾八號）
右は明治三十二年發行の分

●昆蟲世界第四卷合本壹册（自第貳拾九號至第四拾號）
右は明治三十三年發行の分

●昆蟲世界第五卷合本壹册（自第四拾壹號至第五拾貳號）
右は明治三十四年發行の分

●昆蟲世界第六卷合本壹册（自第五十三號至第六拾四號）
右は明治三十五年發行の分

（合本は毎册金壹圓貳拾錢、郵稅金貳拾錢
其他は定價の通り）

右昆蟲世界の義は發刊以來、非常の高評を博し斯學研究上の寶典として又農事改良の先驅として歡迎せられしも、未た之を合本とするに至らざりしに、今回讀者の勸告により毎一年分を裝釘して閲讀索引に便にせり、請ふ愛讀を玉へ。

岐阜市京町　**名和昆蟲研究所**

專賣特許第四九八六號　**莖切器發賣廣告**

螟蟲の稻作に害を及ぼすや頗る大にして之れか驅除を爲さんとするには早く病稻を刈り取り害蟲を撲殺するに如かさるなきは精農家諸君の[illegible]認むる所にして近來之れか實行を唱導せらるゝ頻りなりと雖とも未た完全の良器なく止むを得ず在來の鎌を使用して徒に他の良稻を戕ふのみならす全く螟蟲の潜伏せる稻莖を根底より刈去ることを得さるが爲め害蟲を驅除の目的を達する能はす空しく螟蟲をして其害欲を逞ふせしむるに到る實に慨嘆に堪へさるなり發明者多年茲に意を籠め遂に完全なる一良器を案出せり此鎌は上圖に示す如く小形の鎌に彈力性の遮匙を付したるものにして本器を使用するには先つ把手（ハ）を握り而して切取らんとする稻莖を左手にて握り遮匙の頭部と鎌の尖端との中間（イ）に當て鎌を少しく前方に押すへし然るときは遮匙（ロ）は彈力性あるを以て外方に開き稻莖を押入るへし一度押入れたる后は遮匙は彈力の爲め元形に復し鎌の尖端を被覆して他の健全なる稻莖は挿入する事なし此に於て鎌を根底迄押入れ後方に引くときは毫も他の稻莖を害せす容易く根元より刈取ることを得る至極輕便の良器にして靜岡縣農事試驗場等の協贊を博せり…定價一挺金拾錢…農會等の共同御用は特別割引…

新發明莖切器の圖

ロ　イ　ハ

製造元　靜岡縣小笠郡比木村　山本勘藏

發賣元　同　縣志太郡燒津町　吉野寅之助

縣下一手販賣所　岐阜市京町　高橋喜之助

Diludia increta Walker. (Shimofuri-suzume)

By K. Nagano.

Forewings dark grey, whitish-sprinkled with darker dentate striae; a discal white dot; two black median streaks; an irregular black apical streak. Hindwings blackish brown, partly whitish-sprinkled. Expanse 100-130mm. Body dark grey, whitish-sprinkled, below whitish; head and thorax black bordered; abdomen with three longituginal blackish brown stripes.

Kiusiu, Shikoku, Honsiu; 7, 8. Larva green, lighter or deeper; 1–3 seg. white dotted; sometimes other seg. black dotted; on 4–11 seg. a series of oblique lateral white stripes; sometimes a subdorsal and spiracular series of brown spots; horn brown: on Paulownia tomentosa, Clerodendron tricotomum, Ligustrum lbota, Osmanthus aquifolium; 7–9. Pupa furnished with a projecting curve tongue-sheath.

（明治三十年九月十日内務省許可）
（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

◎岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條に依り晴雨に關はらず、毎月第一土曜日午後一時より、岐阜市京町名和昆蟲研究所内に於て開く、本會員は不及申、何人も毎會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所内 岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會本年中の日並は左の如し

第五十四回月次會（六月六日）
第五十五回月次會（七月四日）
第五十六回月次會（八月一日）
第五十七回月次會（九月五日）
第五十八回月次會（十月三日）
第五十九回月次會（十一月七日）
第六十回月次會（十二月五日）

：市境界　‖案内道　｜市道　イ研究所　ロ陳列館　ハ縣廳　ニ中學校
ホ病院　ヘ郵便局　ト西別院　チ公園　リ長良川　ヌ金華山　ル停車場

◎名和昆蟲研究所案内

當昆蟲研究所の位置は上圖の如くにて停車場よりは僅に十餘町養蠶室あり又新築の岐阜縣物産館構内には常設の昆蟲標本陳列館（五間に十六間）ありて標本器具數千点を陳列す有志諸君の來訪を俟つ

岐阜縣岐阜市京町 名和昆蟲研究所

◎本誌定價並廣告料

壹部郵税共金拾錢 （見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す）
壹年分拾貳部郵税共 金壹圓八錢

（注意）本誌は總て前金に非れば發送せず◎爲替拂渡局は岐阜郵便局◎郵券代用は五厘切手にて壹割增とす

廣告料五號活字廿二字詰一行に付金拾貳錢、三十行以上一行に付き金拾錢とす

明治三十六年五月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二（岐阜縣岐阜市京町）
發行所 名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二 發行者 名和梅吉
同縣揖斐郡鶯村大字公郷三番戸 編輯者 小森省作
同縣安八郡大垣町字郭百五十三番戸 印刷者 河田貞城

（大垣 西濃印刷株式會社印刷）

Vol. VII. JUNE. 15TH, 1903. No. 6.

(六月十五日發行)

(毎月一回十五日發行)

THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE.

EDITED BY Y. NAWA.

GIFU, JAPAN.

昆蟲世界

第七拾號　(第七卷第六册)

目次　(禁轉載)

(明治三十六年六月十五日發行)

(明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)

PUBLISHED BY THE NAWA'S ENTOMOLOGICAL LABORATORY IN GIFU, JAPAN.

◉寄贈物件受領公告

一金五圓也
一金壹圓也
一半身肖像　一葉
一半身肖像　一葉
一半身肖像　一葉
一半身肖像　一葉
一靜岡縣農事試驗場寫眞一葉
一養蟲并に實驗室
一害蟲標本寫眞　一葉
一石印（瓢蟲女史）　一個
一金屬製虻形緒〆　一個
一農事試驗成績報告　第二號
一事業成績報告（螟蟲記事）　一册
一農事試驗成績特別報告（根蚜蟲に關する調査并に研究）第一報
一札幌農學校紀要第二卷第一號（松村氏泡吹蟲の研究）
一昆蟲學研究法
一昆蟲採集日記
一蜚蠊　數頭
一同　數十頭
一同　數十頭
一小學兒童採集昆蟲　數百頭
一黴菌に斃れたる蜻蛉　一頭
一蚜蟲十三種其他數種
一貝子二頭

千葉縣　伯爵　堀田正倫君
三重縣　三輪好孝君
島根縣　梅啓之助君
秋田縣　寫樫明治郎君
茨城縣　日比野吉彦君
靜岡縣　岡田忠男君
愛知縣渥美郡昆蟲研究會
秋田縣　武田安之助君
長野縣　帶刀喜一君
愛媛縣農事試驗場
大阪府南河內郡農會
愛知縣農事試驗場
東京市　裳華房
石川縣　西川豊次郎君
鳥取縣　岡野庫八郎君
京都府　菅沼岩藏君
岐阜縣　壚田健藏君
靜岡縣　石井沘年君
長野縣　帶刀喜一君
京都府　岩見勇藏君

右寄贈相成候に付茲に芳名を揭けて其厚意を謝す

明治三十六年六月十日

名和昆蟲研究所

◉昆蟲世界購讀紹介者芳名

德島縣　松林竹肥虎君（貳名）
茨城縣　遠藤庄八君（壹名）
大分縣　安部香之助君（壹名）

第十六回全國害蟲驅除講習會員募集

開期（自八月一日至同月十四日）二週間（定員四十名）

全國害蟲驅除講習會は、回は一回と同志の歡迎を受け、既に前回迄に、三府四十一縣の出身者約八百名の有爲なる修業生を出せり依りて此際益々斯學の奮興を期せんことを欲し、又應募者の便を圖り、來る八月一日を以て第十六回の開講式を擧げんとす。斯學に志ある士は、速に其手續を經由せられよ、尙今回の講習には左記條々の利益あるべしと信ず。

一、開會の季節は、諸學校、官衙の夏季休業中なるを以て、公務に從事せらるゝ士は好都合なる事。
一、今回は教授科目に改正を加へ、更に有用にして實行に適切なる方法に賴る事。
一、時恰も害蟲發生の季節なれは、實地に臨み研究の利あること
一、當昆蟲研究所々藏の昆蟲標本を觀覽に供するを以て、見學に多大の益あること。

尙申込期限を**七月二十日以前**と定むと雖も、當所の都合により、隨時入會を謝絕することあるべし。規則書入用の向は郵券二錢添へ至急照會あれ、直に回送すべし。

明治三十六年六月

岐阜市京町
名和昆蟲研究所

◉昆蟲分布調査材料募集

○鞘翅目。瓢蟲の部。
○鱗翅目。蝶の部、天蛾の部。
○脈翅目。擬蟷螂、薄翅蜻蛉、長角蜻蛉の部。
○有吻目。水棲の部、蟬の部。
○直翅目。蟷螂の部、竹節蟲の部、蜚蠊の部。
○擬脈翅目。蜻蛉の部。
右今回寫主圖出來分布調査用紙に納めたれば最早何時にても調査の上記入に差支けなれば各地同志の諸君續々標本御寄贈あらんとを望む
○アブラ　ムシ（蜚蠊又は滑蟲）の標本
右特別分布調査材料として同志の寄贈を望む

岐阜市京町
名和昆蟲研究所

大島産の浮塵子各種(二)

◎大島産の浮塵子に就て (續) (第六版圖參看)

在鹿兒島 生熊與一郎

第二、Fulgoridaeに屬するもの

其一、クモガタヨコバヒ (Saterumar sp.)

雌は雄に比し稍大なれども、略々同大同形にして、体長一分一厘、翅の開張二分乃至二分二厘あり。雲狀の斑紋あるを以て、雲形浮塵子の新稱を附せり。頭部は灰黄色にして三日月形をなし、其兩端に黑紫色の複眼を具ふ。觸角は複眼の下方より出で、頭部と同色にして、基部の三關節は何れも圓柱形に膨大し、額面の中央及口吻に近き所は黑色をなす。胸部の第一關節は著しく小さく、中胸部の背面は濃青色をなし、三條の縱線を有す、前翅は長さ九厘乃至一分幅四厘内外あり、暗青色に、濃淡相交りて雲狀をなし、前緣に五個、外緣に二個、臀脉に三個の白色紋を具ふ。後翅は長さ八厘、幅三厘五毛あり、無色透明にして、太き暗黄色の翅脉と、細き灰黄色の翅脉とを有す。肢は三對共に淺黄色を呈し、前肢は六厘五毛、中肢は五厘五毛、後肢は八厘ありて、後肢の脛節より一葉の肢片を出す。腹部は黑黄色にして(末節は黄色)、八關節より成り、末節の背面に肛門片を具ふ。肛門片は黄色楕圓形をなし、顯著なれども、産卵管は尾端に現れず。

該種は、大島全島に發生するもの丶如くなれども、大島の最南部(嘉喜留摩島の南面於齋村)なる、雜草

多き稻田に於て、夥しく採集したり。

其二、セジロクモガタヨコバヒ(Saterumar sp.)　該種は前記のクモガタヨコバヒよりも稍小形にして、体長九厘、翅の開張二分内外ありて、同じくSaterumar屬に屬し、胸部の背面に白色部あるを以て、背白雲形浮塵子の新稱を附せり。頭部は黒綠色にして劍狀に突出し、背面に四條の黃赤色線を列ね、後頭部の兩側に二黒紋を有す。複眼は楕圓形をなし頭の大部を占む。觸角は第一、二節は能く發達して大きく、灰黃色を呈し、感覺孔は著しく複眼に相接して存するが故に、複眼は圖の如く變形し、其孔口に近く單眼を具ふ。胸部は黒綠色を呈し、前胸の背面に黒色の二圓紋を横列し、中胸部の背面は稍々瓢形をなし、判然したる白色紋を有す。而して中、後肢は九厘内外、前肢は六厘内外あり、共に褐色をなせども、何れも基節のみは黒色をなす。前翅は頭部と同しく黒綠色をなし、前緣の終りに近く、各翅脉間に四個、外緣に三個の三角形をなしたる、無色透明なる部分、及後緣の殆ど中央に白斑を具ふ。後翅は無色透明にして、前記クモガタヨコバヒと殆んど同樣なる翅脉を有す。腹部は全体黒く、稍綠色を帶び、各關節の終りは少しく黃色を帶ぶ。

本種は、大島南部の各村に於ける田圃に於て多く採集せり。

其三、ヘリクロカバヨコバヒ(學名?)　体長八厘、翅の開張二分六厘あり、全体樺色にして、翅を疊みたる時、其外周黒色を呈するを以て、黒緣樺浮塵子の新稱を附せり。頭部は形小さく、黃褐色を呈し、背面に三角形をなせる隆起線あり、額面は黒褐色をなし、黒紅色の複眼の下方に、黃褐色の長き觸角を具ふ。觸角は其第一、二節は長大にして、短毛多く、殊に第二節には數多の感覺突起を有す。口吻は額面と同色をなし二節より成り、其先端は第三肢の基部に達す。單眼は二個にして、觸角及複眼に接

近して存在し、著しき光澤を有す。胸部は淡樺色を呈し、前胸部は小さく、中胸部は大にして、左右の翅底に相接する淡黑帶ありて、前翅は半透明をなし、長さ一分二厘、幅三厘あり、淡黃色にして、前緣及後緣は黑味を帶び、各翅脉は其兩側に顆粒物を並列す。後翅は全部淡灰色をなし、半透明にして長さ一分、幅五厘を算す。肢は皆淡黃色を呈し、前、中肢は殆んど同大にして、後肢は前者より稍長く、長さ一分四厘内外あり。腹部は背腹兩面共に胸背と同色にして、產卵管は他のSaterumar屬と同樣なり。

本種は、大島北部の雜草多き田圃及堤塘等に於て採集せり。

其四、クロバヨコバヒ(學名?)　体長一分二厘、翅の開張三分餘あり。全体灰黑色にして、前翅は黑色なるを以て、黑羽浮塵子の新稱を附せり。頭部は黑褐色にして少しく黃色を帶び、方形をなして前方に突出し、複眼は灰黃色を呈し、大にして橢圓形をなし、兩側に突出す。額面は長くして少しく隆起し、黑褐色を呈す。觸角は複眼より稍離れて存在し、灰黃色をなし、第一節は小さく、第二節は最も大にして多くの感覺孔を具ふ。口吻は長くして、灰黃色をなし先端は黑褐色にして、第三肢の基部に達す。前胸部及后胸部は灰色をなせども、中胸部の背面の一部は褐色を呈し、内に二條の縱走線を有す前翅は長さ一分四厘、幅五厘あり、殆んど長方形にして、全部黑紫色を呈す。后翅は長さ一分四厘、幅六厘あり、極めて淡き黑紫色をなす。前肢は長さ八厘、中股は七厘、后股は一分餘を算し、共に灰紫色を呈す。腹部は全体淡鼠色をなし、九關節より成りて能く肥大し、尾端は太く、末節の背面に存する肛門片は、著しく大にして橢圓形をなす。

本種は、大島の最南部(諸勝村)の雜草多き田圃に於て、多く採集せり。

其五、クロヒシヨコバヒ(Cixins sp.)　全体黑色をなし、体長一分五厘、翅の開張二分六厘あり、中

胸部の菱狀部は著く大にして、且つCixins屬に屬すべきものなるを以て、黑菱浮塵子の新稱を附せり。
頭部は黑褐色をなし、幅廣けれども、兩側に大なる黑紫色の複眼あるを以て、背面より見るときは幅狹く、中央に黑色の大なる縱溝を具ふ。額面に長くして、且中央部は著しく幅廣く、其裏面に當り、複眼に近く二個の單眼を具へ、背面に存する黑色の縱溝は、口吻の基部に迄達す、口吻は長く、長さ五厘あり、三關節は判然し、腹部の第二關節に達す。

前胸部は(へ)字形をなし、中胸部は大にして黑く、內に眞黑色をなせる五縱線を有す。前翅は稍々方形にして、全体淡鼠色を呈し、長さ一分六厘、幅六厘あり、前線の終りに近く褐色紋を有す。后翅は長さ一分五厘、幅八厘餘あり、無色透明なれども、先端三分の一は淡鼠色を帶ぶ。肢の彩色は三對共に同樣にして、基節は黑色をなし、轉節より跗節迄は黃灰色(時に少しく紅色を混ずる事あり)をなし、前肢は長さ一分一厘、中肢は一分四厘、后肢は一分六厘內外ありて、后肢の脛節、及跗節の第一、二節端には、數多の棘狀突起を有す。腹部は短大にして、背、腹共に黑色を呈し、腹片は極めて小さく、產卵管は濃褐色にして、肛門片は背端にありて、葉片狀をなし、尾端に白粉を有す。

本種は、名瀨附近田圃の雜草中に於て、多く之を採集せり。

其六、カスリヨコバヒ(Cixins sp.)　小形種にして体長一分二厘、翅の開張二分八厘あり、前翅の翅脉は太く、飛白狀をなすを以て、飛白浮塵子の新稱を附せり。頭部は背面より見るときは、黑褐色をなし前方に鋭く突出し、中央に判然したる一本の白色縱線ありて、兩側に黑赤色の大なる複眼あるのみなれども、額面は著しく變形して蕈傘狀を呈し、淡褐色を帶び、其裏面即ち複眼に接して觸角、及黑斑內に鮮紅色の單眼を具ふ。口吻は割合に短かく、灰褐色をなし、先端少しく黑褐色を帶ぶ。前胸部は(へ)字

形、中胸の菱狀部は畧方形をなし、三條の白色縱線ありて、條線の上には各一個宛の圓紋を具ふ。而して其中央なる線は、第一關節に亘り、頭部の白線と相接す。前翅は長さ一分二厘、幅五厘あり、殆ど無色透明にして、數個の黑紋、及前縁に紅色紋を有し、彎曲せる太き翅脉は飛白狀をなす、后翅は稍々蝶類の後翅に似て、長さ一分、幅六厘あり、全体黑色をなす。肢は三對共に灰黃色を呈し、前、中肢は長さ八厘、后肢は一分餘あり。腹部は背腹共に褐色を帶び、短大にして、背面少しく隆起す。

該種は、名瀨港附近、田圃及河に沿ひたる山中にて採集せり。

其七、イチモジ ヨコバヒ(Derbe sp.)　体長一分、翅の開張二分六厘あり、前翅に赤色の横帶ありて、一文字形をなすが故に、一文字浮塵子の新稱を附せり。頭部は小形にして、赤褐色を呈し、兩側に黑赤色の複眼を具ふ。額面は褐色扁平をなし、兩側の複眼に沿ふて、短かき赤褐色の觸角を有す。口吻は稍黃色を混じ、二節に區別せらる長さ六厘あり。胸部は頭部と同じく、赤褐色を呈し、前胸部と中胸部の接線は判然し、背面の菱狀部に三個の隆起線を有す。前、后兩翅は共に無色透明にして、后翅は長さ一分三厘、幅六厘餘あり。前翅は長さ一分三厘、幅五厘ありて、中央より稍翅底に近く、前縁より后縁に亘りたる、赤褐色の横帶を具ふ。后肢は長さ一分一厘あり、褐色にして脛節端に二個の棘狀突起を有し中肢及前肢は八厘弱にして、前肢は后肢と同色をなせども、中肢は黃褐色をなす。腹部は能く肥大し、七節より成り、背面は淡き黑褐色にして、腹片は灰褐色をなす。肛門片は球狀をなし、長毛多く、產卵管は背片と畧同色をなし、短かけれども、腹端に現るゝ部は割合に長し。

該種は、大島南部の薩川村及德之島、母間村等に於ける田圃の雜草中に於て、多く之を採集せり。

其八、アヲ ウスバ ヨコバヒ(Lerda sp.)　大形種中の小なるものにして、体長一分五厘、翅の開張二

分二厘あり、全体水色をなし、前翅は稍透明なるを以て、綠薄羽浮塵子の新稱を附せり。頭部は青褐色にして、五角形をなし、其兩側に殆ど球形にして、短毛を有する、黑褐色の複眼あり。額面は稍平たく口吻は二關節より成り、其先端は第三肢の基部に達す。觸角は複眼に沿ふて存在し、鮮青色をなし第一二節は能く發達し、前面に短毛を密生す。胸部は頭部と同色にして、前胸部は三角形をなし、前翅の翅底に相接し、中胸の菱狀部は正三角形をなす。前翅は殆ど無色透明にして、稍々褐色を帶び、太き縱走翅脉と、數多の横脉とを具へ、長さ二分、幅九厘あり。后翅は長さ二分、幅一分三厘あり、無色透明をなし、外緣は二個所に於て著しく凹陷す。后肢は長さ二分八厘を算し、基、轉及腿の三節は褐色にして脛節及跗節は青色を帶び、短毛を密生す。前、中の二肢は共に一分八厘あり、基節は胸部と畧同色をなし、他は褐色をなす。腹部は背腹ともに青灰色をなし、末節は黑褐色を呈す。産卵管は短かく、肛門片は著しく長く、背面より腹面に達し、長粗毛を生ず。

該種は、大島東部の山中路傍に於て採集せり。

其九、トビイロマルヨコバヒ(Lerda sp.)　体長二分、翅の開張五分あり、全体褐色を呈し、体軀肥大して幅廣きが故に、鳶色丸浮塵子の新稱を附せり。頭部は短大にして黃褐色をなし、背面の中央に黑色の縱線、及頭頂に黑色紋あり、額面は少しく綠色を帶び、短大にして兩複眼間に輪紋を具へ、小黑點を散在す。觸角は複眼の下方にありて、Fulgoridae科の他の種類と同じく、第一、二關節は能く發達し第三節よりは著しく小となり、毛狀をなせども、全体甚だ小形なりとす。前胸部は頭部と同色にして、鋭く前方に突出し、中央に濃色縱線ありて、其左右に同色の小斑紋を散在し、中胸の菱狀部は、鋭とく后方に突出して、濃色の三縱線を有す。前翅は短かく長さ二分二厘、幅一分あり、全体褐色を呈し内に

不規則ある濃色紋を印す。后翅は淡黒色にして、外縁に凸凹多く、長さ二分、幅一分三厘あり。肢は三對共に其色及大さを異にす、即ち后肢は長さ一分九厘あり、濃褐色を呈す。中肢は黄色にして最も短かく、長さ一分四厘あり。前肢は全部褐色を帶び、最も長く、長さ二分餘に達す。腹部も亦短大にして、背面は黒色を呈し、腹面は褐色を帶ぶ。

本種は、大島西部(字撿村)の河原に叢生せる雜草中に於て、多く採集せり。

其十、トビマダラハゴロモ(Poeciloptera sp.) 該種はPoeciloptera屬の小形種にして、体長一分八厘、幅五厘内外あり、全体褐色にして、黒褐色の斑紋あるを以て、鳶色斑浮塵子の新稱を附せり。頭部は著しき側扁にして、褐色をなし、細く前方に突出す。中央部及兩側は隆起し、左右兩側に球狀をなせる、灰黒色の複眼を具ふ。額面は其先端少しく傘狀を呈し、中央の側面に一個の大黒紋を有し、其前方に黒色の二斜線を有す。單眼は黒紋に沿ふて複眼との間に位し、觸角は複眼の下方にありて頭部と同色をなし、基部の三關節、殊に第二節は大にして、第四節よりは觸毛狀をなし、第三節に附着す。其長さ約七厘あり。前胸及中胸の菱狀部は、頭部と同色にして、兩節の接線は著しく、背面には三縱條の隆起線あり。前翅は長さ二分一厘、幅九厘を算し、全体褐色をなして先端は丸く、諸所に黒褐の斜紋、及斑点を有す。後翅は前翅より稍々短かく、長さ一分七厘、幅一分あり、稍々透明にして、黒色を呈す。肢は何れも灰黄色をなし、腿節、脛節及跗節には、數個の黒紋を有し、長さ一分一厘内外なれども、後肢は脛節のみ特に發達して、跗節は短かく、一見、二小節より成れるが如くなれども、背面より見るときは、第二節は第一節に被匿せらるゝを認め得べし。腹部は七關節より成り、全体黒褐色をなせども、腹片は稍々淡く、生殖器は甚だ短かし。

本種は、大島の北部(福之本)なる山中に於て採集せり。

其十一、メンガタハゴロモ(Ricania sp.)　該種はRicania屬に屬する大形種にして、全体二分八厘、翅の開張四分あり。前翅に眼狀及眉狀の斑紋を具へ、恰も人面狀をなすを以て、余は面形羽衣の新稱を附せり。頭部は灰黄褐色をなし、極めて平たく、複眼は殆ど圓形をなし、其下方に灰黄色の短かき觸角を有し、觸角及複眼に接近して、鮮紅色を呈せる單眼を具ふ。胸部は濃褐色を呈し、前胸部は(へ)字形をなし、中胸部に淡色の三縱線を具ふ。前翅は長さ二分一厘あり、膜質透明にして、其殆ど中央に褐色の眼狀紋、及横脉系上に眉狀紋を有す。後翅は膜質透明にして、稍々褐色を帶び、長さ一分三厘、幅八厘あり。肢は三對共に褐色にして、前肢は一分一厘、中肢は一分、後肢は一分二厘あり。後肢の脛節の先端、及跗節には、多數の棘狀突起を有す、腹部は背、腹共に褐色を呈し八節より成り紡狀をなす。本種は、大島南部の山中(蕨の多く繁茂せる所)に於て、夥しく採集せり。

第三、Membracidaeに屬するもの

其一、ヒメツノヨコバヒ(Smilia sp.)　該種は体長一分、翅の開張二分八厘あり。本族の小形種なるを以て、姫角蟬の新稱を附せり。頭部は胸部と同色をなし、殆ど同幅なれども、長さは極めて短かく常に胸部の下に隱る、額面は平たく、兩複眼間に二個の單眼を横列す。觸角は極めて短小にして、三小節より成り、頭部と略同色をなす。口吻は褐色を呈し、二節より成り、上下顋は長くして下唇端に出づ前胸部は黒褐をなし、能く發達して全面に小黒點を散在し、後端は角狀をなして、後方に延長し、腹部の第六關節に迄達す。前翅は長さ一分二厘、幅五厘を算し、稍々褐色を帶び、膜質透明なり。後翅は其大さ前翅と同樣にして、無色透明をなし、二翅共に全脉は外緣と著しく相分離す。肢も亦三對共に同

色ょして、基節、轉節、及腿節の基部は黒色を帶び、跗節、脛節、及腿節の先端は褐色を呈す。腹部は能く肥大し、八關節より成り、淡黒褐色をなす。

本種は、大島北部の山中に於て採集したるものなれども、余は内地に於ても、椿樹等に捿息するものを數回採集したる事あり。

此他、尚余が大島ょ於て採集し得たる浮塵子中、内地ょ産する普通なるものは次の如し。

第一、Cicadellidaeに屬するもの　一、ツマグロ ヨコバヒ(Selenophalus cincticeps, Uh.)　二、イナヅマ ヨコバヒ(Thamnotettix storratus, Li.)　三、フタテン ヨコバヒ(Ciadula waroni, Lethert.)　四、ヨツモン ヨコバヒ(Cicadula sp.)　五、オホツマグロ ヨコバヒ(Tettigonia ferruginea, Fab.)　六、ハトムネ ヨコバヒ(Pediopsis sp.)　七、ヒシモン ヨコバヒ(Thamnotettix sp.)　八、マダラ ヨコバヒ(Deltocephalus striatus, Linn.)　九、ハチノジ ヨコバヒ(學名?)　十、ミドリ ナガ ヨコバヒ(學名?)　十一、チャイロ ヨコバヒ(Emgoasca sp.)　十二、ヒメ ミドリ ヨコバヒ(Empoasca sp.)　十三、キイロ ヨコバヒ(Typhlocyda sp.)

第二、Fulgoridaeに屬するもの　一、セジロ ヨコバヒ(Delphax sp.)　二、ヒトスヂ ヨコバヒ(學名?)　三、ヒシ ヨコバヒ(Myndus apicalis, Uh.)　四、シマ ヨコバヒ(學名?)　五、ヤナギ ヨコバヒ(Cotyleceps marmorata, Uh.)　六、オホトビイロ ヨコバヒ(學名?)　七、テング スケバ(Dictyophara inscripta, Walker.)　八、ベツカウ ハゴロモ(Ricania albomaculata, Uh.)　九、アヲバ ハゴロモ(Poesioptera distinctissima, Walker.)　十、マダラ アシナガ ヨコバヒ(Orthopagus lunulifer, Uh.)

◎コオヒムシ（負子）に就て

千葉縣印旛郡　齋藤啓二

負子に就ては、先きに增田、神村二氏の實驗說ありしが、今又本誌前號の紙上に於て、長野氏の內外の異說を列擧したる說ありて、余輩研究者を利したると、淺少ならざりき。然るに、其論点たる、彼の負卵せるものが、果して雌なるか、將た又雄なるかに付ては、增田、神村二氏は雌蟲論に傾き、長野氏はや、雄蟲論に近きが如し。余も亦本年聊之れが研究を企て、今尙數頭飼養中にて、未だ十分の効果を收むる能はずと雖も、今日迄に得たる結果を以てすれば、余は寧ろ雄蟲論に左袒するものなり。蓋し、之を確定せんには、精細に剖撿するを要すと雖ども、余事に遮られて、未だ之を果さず、故に解剖上より立論するにあらざるを以て、議論甚だ薄弱なるを免れざれども、今此の問題の起りたる際なれば、余が觀察の要点を述べて、讀者諸君の參考に資するも、强ち徒勞のみにはあらざるべし。

一、負子の負卵期は、當地方に於ては、四月初旬より、七月下旬に至る、殆んど四ヶ月に亘る（是れ一回の產卵期には、餘り永きが如し、或は二回あるか、暫く疑を存す）

二、負卵の數、多きは八、九十、乃至百內外を算す。而して、是れは一時に產付したるものにあらずして、漸々產附したるものと、斷ぜざるを得ず。何となれば、負卵期の初めに於ては、負卵の數甚だ少なく、漸次に增加すればなり。

三、若し負卵せるものを以て雌なりとせば、其產卵の方法は、自から背上に產附したるか、又は他蟲に依りて產附せられたるか、の二途に外ならず。何れにもせよ、其產卵期中は、腹中に藏卵せざるべからず。然るに本年四月初旬より、五月中旬に至る間、余が實驗の範圍に於ては、負卵せるもの（負卵の數少なきもの、即ち自から背上に產附するものとせば、尙腹中に多くの卵あるべし、と想像せらるゝものをも含む）に、藏卵せるもの一もなく、之に反して、負卵せざるものには、悉く卵あり。

四、負卵せるもの（即ち雄と想定せらるゝもの）の卵を剝ぎ取りて、更に雌蟲と同居せしむるに、雌は雄の背上にあると、しば〳〵なり。

五、負卵せるものは、雄蟲より、躰軀少しく小形なり。

右數條の前提に依りて、余は彼の負卵せるものは、雄蟲なりと、推斷せんとするものなり。蓋し、神村氏の實驗に依るも、負卵せるものには、藏卵するもの一もなく、又負卵せざるものにして、藏卵せるもの二十七頭中、二十二ありと、而して是れは七月十七日より、同廿九日迄の實驗に係ると云ふ。即ち氏の實驗たる、余が地方の情況を以てすれば、產卵期の最終期と云はざるを得ず。或は疑ふ、殘りの五頭は、早已に悉く放卵し終りたりしにはあらざるか、然らざれば負卵せざる雄蟲なりしならん（背上の卵塊は孵化するの后、間もなく脫落す）。若し、果して然りとせば、氏の實驗たる、取りも直さず、雄蟲論を証するものと云はざるべからず（但し氏は悉皆解剖したる趣なれども、長野氏の云ふ如く卵と尾部のみを撿して、生殖器には關せざる如き觀ありて、やゝ疑なき能はず、今一度精撿せられんことを望む）已に負卵せるものを以て雄蟲なりとせば、其の卵は、即ち他の雌蟲が產附したるものなること、決して疑ふべからず。即ち米國スラッター孃の觀察せられしと云ふもの、亦以て邦產の負子を說明し得べし。現に余が本年の飼養試驗に於て、雌がしばしば雄の背上にあることを、觀察したればなり。

右は、負子に關する、余が卑見なり。之を要するに、眞因に此問題を決せんには、長野氏の云ふ如く、其種屬を確定すると、更に解剖上より精撿することを、勉めざるべからず。想ふに讀者諸君中には、已に這般の研究を遂げたるものあらん、速に稿を寄せ、余輩の蒙を啓かれんことを、切望して止まず。

編者云、負子に就ては、本誌第六十七號雜錄欄內、六足蟲彙纂の末尾に附記せしが如く、其雌雄の區別は、田中先生の實驗により既に明にして、敢て剖撿するの要なし（當所は念の爲剖撿したり）。當所は其負卵者が果して雄なるか、雌なるか、將又、雌雄の別なきかを各二十頭に就き撿したるに、負卵者は皆雄にして、負卵せざるものは十八頭迄雌なりき。然らば齋藤氏の說の如く、神村氏の實驗に徴するも、負卵者は凡て雄なりと斷言して、憚らざるを信ず（尙當所に於て飼育中雌が雄の背上に產卵しつゝあるを見たり）。

◎外國の昆蟲書に就きて

在東京　長野菊次郎

〔三〕ヂッケルソン氏の蝶蛾書 (Dickerson's Moths and Butterflies) 昆蟲類中にて最も人の注意を惹くものは蝶蛾類にして、其發育、變化の狀態の最も觀察し易きも亦此類なり。然れば、普通の昆蟲書中、蝶蛾の發育を記せることは、東西殆んど同一轍に出で、ユズボウがオキクムシとなり、嗣でアゲハノテフとあるが如きは、孩提の童幼すら之れを知れり。然れども、飜て其評細を探らんか、識者と雖ども亦及ばざる所無きにしもあらず。例へばユズボウが柑橘類の葉を食ふには、如何なる部分より始めて如何なる部分に擧るか、不規則なるか、果た規則あるか、幾回脫皮の後、如何にして躰の一端を以て樹枝を支へ如何なる方法によりて環狀の絲を績ぎ、以て己の躰を支ふるか、の如き連續せる生活歴史につきては殆んど判然たる答辯を與ふるもの少からん。ヂッケルソン氏の此書の如きは、此等の點につき、實に綿密にして、丁寧ある觀察を述へたるものにして、蝶蛾の生活史を知るには、無上の好侶たるなり。全部は三編より成り、第一編には九種の蝶類を、第二編には十八種の蛾類を述べ、第三編には各種の蝶蛾を比較總括して、其區別の要點を明にし、又保護色、及び擬躰の一、二例を擧げ、次に二形的を述べ、次に普通の蝶蛾の分類を試み、漸次蝶蛾の發生の相同じきことより、幼蟲、及び蛹の一般の搆造、及び其等の成蟲の搆造、及び習性の相同じき點に及ぼし、遂に他の昆蟲との關係より、節足動物との關係に論及し、最終に採集法、保存法等を附記せり。特に幼蟲、蛹、成蟲等につき、戶内及び戶外に於て、觀察すべき要點一百三十餘條を列擧せるが如きは、實に用意周到なりと云ふべし。著者の言の如く、本書は童幼の爲め、師範生徒の爲め、又夏期學校敎師等の爲めに、著はされたるものなりといへば、其順序たる多數の昆蟲書の如く演繹的にあらずして、歸納的なることは、最も初學者の敎育法、又は自習の方法

等に協へりと云ふべし。世の斯學に忠實なる、特に地方に在りて、參考書籍に欠乏を感せらるゝ君子、此書の示も所に從ひて、觀察實驗を積まれたらんには、徒に書籍に拘泥して、疊上の水練者たる笑を免るゝのみならず、到底研究室にのみ蟄居するものゝ企て及はざる好成績を擧ぐること、敢て難からざるを信ずるなり。

本書は一千九百一年ボストン府の出版にして、本文の紙數三百二十九頁、之に挿むに、著者の手に成れる寫眞版二百三十二圖を以てし、重に生活の狀態を表はせり。紺色のクロス表紙に、金色の蝶蛾摸樣を溢るゝ許に鏤め、光澤紙を用ひたるオクタボ形の美本なり。代價は丸善にて五圓なるべし。

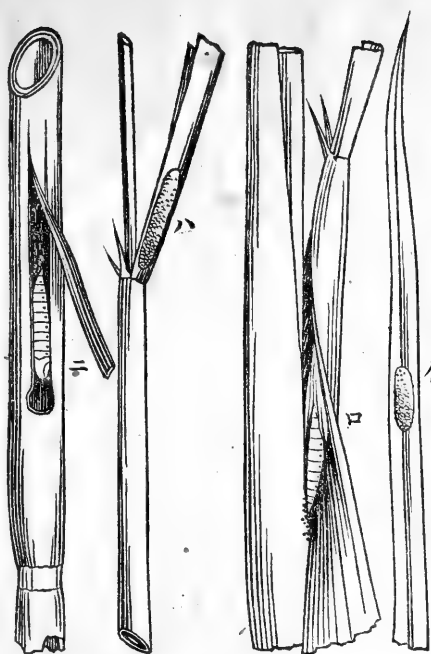
因に曰く、此書の一部分は、他日本誌の餘白を借りて、紹介すべし。

◎二化生螟蟲の卵蛹の位置に就て

名和昆蟲研究所助手　森　宗太郎

編者云、本編は當昆蟲研究所員の催しに係る、水曜昆蟲會席上に於て、當所養蟲係主任、森助手の講演せられし大要なり。

二化生螟蟲に就ては、本誌に屢々記載もあり、且發生經過の如きも、最早世人の一般に承知し、驅除法とても、種々なる方法を以て實行しつゝある時に當て、今更私が申上ぐる必要もない樣でありますが、乍然、害蟲軍の王だけあつて、容易に盡滅し得られず、隨て研究すべき餘地ハ、未だ澤山にあるのでありますから、今私が該蟲に就て申上ぐるも、敢て無用の事でなからうと存じます。故に聊か研究しました幾部分を、簡單に申上げて、御參考に供する次第であります。扨私が申上げ樣と思ふのは、二化生螟蟲が第一回の時と、第二回の時とは、如何樣に差異が起るかといふことであります。卽第一回の成蟲は、御

承知の通り、五月から六月に亘りて發生致しますが、其產卵は圖の(イ)に示す如く、大概は稻葉の表面しかも上の方に產みつけます。これは一寸考へますれば、直ちに人目に觸れ、敵蟲にも襲はれ易く、甚だ不利益の樣に思はれます。去りながら、これが此蟲の生存上必要な事で、即此時分は溫度が低いから、葉の表面に產み、日光を受けるのが、丁度孵化するに適當の溫度である故に、大概は葉の表に產むのであらうと存じます。而してなぜ葉の上の方に產むかといへば、これも必要があるので、此の時は稻が未だ小さいから、一本の莖に澤山の蟲が蝕入すれば忽ち枯れて、直ぐ他に移轉せねばならぬ事になるそれで可成上の方に產み付け、孵化すれば糸を引き、出來得べきだけ廣く擴がる必要があるからである、故に第一回の幼蟲は孵化の當時でも、一莖中に澤山蝕入せぬ事は、實驗上確であります。ところが等しく第一回の時でも、時候が段々暑くなるに從ひ、產卵の塲所も違つて、葉の中程、且裏面に多く產む樣になる、第二回の產卵期は、八、九月頃で、氣候が極めて暑い時であるから、此時は最早葉の表には產まない、第一回の始め即ち五月から六月頃に產むものとは反對で(ハ)に示す如く葉裏の下方、葉鞘に近き處に產むのであります。此時分は稻も太くなつて居るから、一所に澤山蝕入しても差支がない、此時に莖を取て、調べて見ますと、一莖中に二三十頭、多きは百頭以上も入つて居りまそ。故に此の時の驅除法としては、孵化して何日も經たない內に、被害莖を刈り取るが、最も良法と存じます。日を經るに從て、幼蟲は他の莖に移るから、此の好機を失してはありませぬ。以上申上げました如く、第一回と、第二回との產卵個所に於て、氣候の關係、生存上の必要から、彼樣に違ひがありますが、孵化の時機も、第一回の時は

二化生螟蟲卵、蛹の圖
(イ)は第一回發生の卵塊　(ロ)は同じく蛹
(ハ)は第二回發生の卵塊　(ニ)は同じく蛹

大低午前十一時頃ょ孵化するものが多く、第二回の時は朝早く孵化するものが多いのであります。蛹時代ょ於ても亦差異がありまして、即第一回の時は、莖の髓部に入りて蛹化することは少なく、大概は圖の(ロ)に示す如く、葉鞘部に於て蛹化するのであります。之れは蛹期短かく、且成蟲となつて、外ょ出づるに都合がよいからであらうと思ひます。第二回の時は寒くなるにつれて、幼蟲は莖の髓部を段々下方ょ蝕ひ下り、翌年三月頃蛹化致しますが、其前ょ一方を喰ひ破りて、其穴に糸を纏ひ、何時でも成蟲の出るに都合のよい樣ょしてあります。且第一回の蛹化ハ、藁の中程に於て致しますが、第二回の時は藁の株の方ょ下りて、蛹化致します。之れも生存上必要な事で、若し第一回の如く藁の中程ょ在つては藁を積上げたり、或は葺藁ょ用ひた時ょは、彼れ成蟲の出づるょ非常の困難であるから、可成株の方に於て、蛹化するので有らうと存じます。彼樣ょ第一回と第二回とは、種々なる原因からして、違ひが起りますが、此性質を能く知らないと、折角の驅除も、非常に手間取り、時には徒勞ょ歸する事も御座いますから、能く此性質を利用して、時機を外さず、驅除せねばならぬ事と存じます。

◎害蟲視察談

岐阜縣長期害蟲驅除講習生　渡邊樵四平

私は、五月二十八日害蟲取調べの命を受け、稻葉郡本莊村へ出張致まして、主としてキリウジカヾンボの幼蟲即ちキリウジと、螟蟲とを取調べましたから、其摸樣を御話し申上げ樣と存じます。先づ本莊村字中村の苗代田ょ於て、キリウジに就て取調べましたが、其發生意外に多く、苗代田の畦畔の如きは、該蟲の爲め地上ょ無數の小孔を穿たれ、殆んど原形を止めない位でありました。其他乾田、及濕潤なる畑地に至るまで、發生せざるの地なく、實に豫想外のことで御座いました。隨分此地は、年々キリウジの發生多く、時としては籾種の蒔直しを成すこともあるそうで御座います。故に本年は殊ょ其筋よりの注意がありまして、苗代田の周圍に豫防溝即ち幅一尺深四五寸位の小溝を設け、常に水を貯へてありますから、斯く發生の多きにも係はらず、殆んど其被害を認めませんでしたが、中には溝の不完全で泥土の埋れたる爲め、甚しく害を蒙りし苗代も二三箇所見受けました、之れを見ても、豫防溝の如何に有効なるかを証することが出來ます。目下幼蟲は大なるは七分位に達して居りますが、私が之れを採集するを見て、さも珍らしげに、近傍ょ耕やす農夫は、一人寄り二人寄り、遂に七八人集りました。依て試に此蟲に就て色々尋ねましたが、其内の一人より、これはイボと稱する蟲で、晝は土中ょ潜み、夜出でゝ苗

代田に入り、苗を食害し、且此蟲は陸上にも、水中にも棲むものであるから、如何に水を深くするも、害を成すものであるとの答を得ました。故に私は、此蟲は決して水中に棲むものでなく、水の深きときは畦畔に遁れ、漸次水の減じて田土の露はるゝときは直ちに浸入し、つまり水の深淺によりて進退するものである、其往返の際、障碍となる苗を切斷するので、苗を常食とするに非ざることを說き、其證據として、豫防溝の完全なる所は、決して被害なきこと、其他種々此蟲の特性を語りましたれば、農夫は始めて悟りしものゝ如く、直ちに携へたる鍬を以て溝を浚へ、水を灌くものも御座いました。私は斯く話しながら幼蟲を採集しましたに、僅か三四十分間に殆んど一千頭近くを得ました、現に此通りで御座います(實物を示す)。實に之れを見ても、大概想像が出來樣と思ひます。次に螟蟲に就て取調べ樣と思ひまして、或る農家に就て、昨年被害の多かりし所の藁一束(十把)を求め、之れを取調べましたに、是又其意外に驚きました。目下は尙悉く幼蟲で、此内より二百五十五頭の多きを得ました。今假りに、一把の藁數二百本とすれば、一束の數二千本、內被害莖が二百五十本とすれば、昨年は僅に一割二分强の被害で、恐らく之れより少なき事はなからうと存じます。此多數の螟蟲が、最早遠からず羽化して四方に飛散し、産卵するでありませうが、今より其覺悟がなくては、遂に救ふべからざる慘狀に陷る時が御座いませう、之れを思へば轉た寒心に耐へませぬ。聞く、此地は年々螟蟲害多く、昨年も或る一小部分は螟蟲の爲めに、收穫皆無の處が有つたさうで御座います。之れも充分驅除をせざる結果で、實に遺憾に堪へませぬが、本年は今より注意して、再び昨年の轍を踏まない樣に致したいもので御座ります。

編者云ふ、右は本月三日水曜昆蟲會席上に於て話されたる同氏の視察談なり。本年は何れの縣にてもキリウジガヽンボの發生多き事は、諸報告を見るも明白にして、中には非常に狼狽して驅除法を問合はさるゝ向もあり、尙該蟲に就ては昆蟲世界第五十七號に詳細なる記載あれば參照せられよ。

◎アゲハノテフ幼蟲蛹化の準備に就ての實驗

岐阜縣長期害蟲驅除講習生 中井藤助

編者云ふ、本篇も亦去三日に於ける、水曜昆蟲會の談話なり。鳳蝶に就ては、同氏は晝夜の別なく成蟲に至るまで、調査を遂げ、本月十日の水曜昆蟲會に於て既に發表せられたるも、紙面の都合と、會の順序により、茲には、只蛹化の準備に就てのみ掲げ、餘は次號に掲載することとせり。

アゲハノテフの蛹が、奇異なる形態をなし、胸部に糸を懸け、体を支へて居ることは、既に諸君も知らる丶通りで御座いますが、幼蟲が如何にして糸を懸くるかと云ふことは、大に疑ひが有つたのであります。故に幼蟲の充分成長して、はや蛹化せんとするものにつき、觀察を遂げ、大に愉快を感しましたから、只体を支ふる所の、糸を懸くる順序を、御話申上げ様と存じます。

五月廿七日午前より、一頭の幼蟲が食を斷ち、數回柔かき糞を出しまして、午后一時頃、殆んど体量の二分の一程、水の如き黒汁を出し、其れより一時間餘靜止の後、動き初めまして、所々這ひ廻り、頻りに居所を求むるもの丶様でありました。而して此時体は、丁度蠶の熟蠶の如く、半透明となりました。やがて約四十五度の斜面をなせる、一樹枝の下面に來まして、其處を蛹化の場所と定めたると覺しく、午後十時五十分頃より、糸を其枝一寸五分計りの間に、三十五分間程纏ひまして、休止すること五分間十一時三十分より、上部及び下部に糸を纏ふこと十分間餘、又休止せること三分間、十一時五十一分より糸を纏ひ、休むこと三、四分時間でありました。而して是等の動作に就ては、頭胸部は伸縮自由にすれども、腹部は少しも移動することはありませぬ。

翌二十八日午前零時五分動き初め、今迄頭部を樹枝の上部に向け居りしもの、一轉して、初め腹部を据へ置きし邊に糸を纏ふこと七分間、後休止すること七分間、零時廿分、前の如く糸を纏ふこと五分間にして、復た止む十分間、零時卅分動き出し、折返して躰の位置を舊の如くし、休むこと一分間、復た糸を纏ひ、後止む(此時一分間目位に全体大なる脉搏の如き震動四回來る)。零時五十八分に漸次躰縮み一時五分胸部第一、二の肢を枝より放つ五分間(此時一分間毎に二回の震動をなす)、復た肢を舊の如くして靜止すること三十分(一時三十分より五分間に四回の震動來る、一時四十七分全躰甚だ縮少し、一時五十四分大小四回の震動來る)、二時卅分に至り、又漸く糸を纏ふこと三分間にして又前の如く、(第二回目)躰を一轉して頭部を下部に向け、前に腹端を据へ置きし邊に、頻りに糸を纏ひます。是れ蛹化の際尾端の樹枝より離れざらしめんが爲め、特に玆に多く糸を纏附するもの丶如く思はれます。此間廿分、二時五十三分躰を舊の如くし(三時一分に一回の震動と共に、枝尺蠖の如く、腹脚を殘して、頭胸部を枝より離れ、枝に斜になる事凡一分間、三時六分に躰を震動する事五回)復た休止する事廿一分間、三時三十六分に動き出し、三時卅八分(第三回目)頭部を枝の下方に轉向し、級々として前の如く糸を纏ひます。三時五十四分に、再び轉して頭部を上に向け、腹部の末端を動搖します。四時三分(第四回目)躰

を一轉し、尾端を据へ置く邊ゝ、幾度となく糸を纏ひ、四時四十六分躰の向を舊に復します。四時五十六分ゝ至り、頭胸部を斜に伸長すること四五回にして止む、五時八分復た頭胸を斜ゝ張り、頭を微動をること數回、五時九分頭胸を屈曲して、第六關節邊の、枝の側面に糸を纏附する事一分間、是れを端緒として一條の糸を引き、靜かに第五、六節の間より白色の班紋上を經て、第一、第二の腹脚の中央ゝ掛け一方の班紋上を經て、第六關節邊の枝の側面に達し、茲に糸を附けます。而して枝の一方より一方に、自体を釣るべき一條の糸を纏附するには、三分時を要します。斯くの如く、殆んど一定の時を消やし、糸を引き終れば復た其糸に沿ふて一方に達し、糸を纏附すると實に十五回、それより直に第五關節と其張糸との僅かの空隙に、漸くにして頭の先端を入れ、糸の頭部に過半被ひるや否や、全力を擧げて頭部を樹枝の上部へ向け突き出し、數回躰を動搖すれば、糸は頭部を經て背に廻り、第五と第六關節の中央に至るに及ひて止み、漸次躰軀が縮少致しました。初め自己の躰を釣るべき糸を、枝ゝ掛け初めてより、十五回の往復をなし時を費す事四十六分間、最初場所を定め、糸を纏ひ初めしより約七時間、即ち午前第五時五十七分に糸を懸け終りました、實に本能とは云へ、其巧みなること筆紙の能く盡す所でありませぬ。以後晝間は別に變動なく、纏糸ゝ靜垂するのみでありましたが、翌廿九日午前一時卅分より、躰は尾脚一對のみを殘し、他は皆枝を離れ、三時廿五分數回の震動がありました。此時ゝ至る迄に、躰色は背上稍々淡白を帶び、側面の各關節にある白き班紋は、變じて淡赤色となり、躰の容積又漸く減じ、殆んど(初め糸を纏ひし當時より)十分の三を縮少しました。以上ハ即ち蛹化の準備で、此のものが脱皮をすれば、全く蛹となるのでありますが、其脱皮を遂げ、蛹となるには、隨分巧妙なる經過をするならんと思はれますが、何れ又取調べて御話申上ぐる時機があらうと存じます。

◎六足蟲彙纂 (巳の卷)

在東京　長野菊次郎

(十四)烏蠋に對する迷信

迷信や誤解は、孰れの國にても多少有り勝ちの事にて、歐米にては、古來

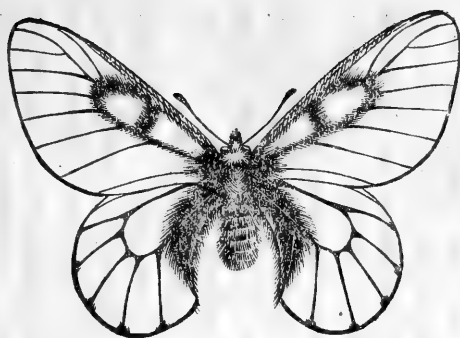
天蛾類の幼蟲は、有毒なるものと信ぜられたり。然れば英國よては、ベニスズメの一種キーロカンパ、エルペノル(Chaerocampa elpenor)の幼蟲は、俗に家畜の疫病蟲(Murrain worm)と稱せられ、若し牛羊等が之を舐るか、又は呑むか、又は是が爲めよ螫さるゝときは一種の疫病を發し、又は腫物を生するなど ゝ信ぜられたり。抑も天蛾に化すべき烏蠋は、通例其形の大なると、著しき色彩紋理を有せると、特に尾角を具へたる等は、一見人をして恐怖嫌忌の念を生せしむるを以て、斯かる誤解を來たしたるものならん。然れども其實全く無毒のものよして、其色彩紋理の如きは、寧しろ保護的よ屬し、尾角の如きも全く示威的よ止まりて、決して刺螫の具よあらざるなり。然らば如何にして、かゝる迷信の種を蒔きしかと問はんよ、元來此蟲の嗜食する植物ハ、重にアカバナの類(Epilobium hirstum)ヤヘムグラの類(Galium mollugo)等の、水邊に產する草にして、此等は、固より家畜に對して有害なるものにあらず。然るに同じく溝渠、又は濕地よ生する繖形科の植物にて、イーナンテ、クロカタ(Oenanthe Crocata)(ドクゼリの一種)と名づくるものあり、此草は激烈なる毒分を含有するものに much、家畜之を食へば斃死すと云へり。固より家畜の疫病につきては、此草以外よ其原因とあるべきものあるべしと雖ども、畢竟エルペノルの幼蟲が、水邊の雜草を嗜好せるより、思ひ掛あき寃罪を被りたるあるべし。兎にかく、此烏蠋が家畜病の原因たる俗説は、全く無根なる事を斷言し得べしとなり(オロメロード氏の害蟲報告抄畧)。

(十五)昆蟲の關節數　昆蟲の體制が、頭、胸、腹の三部より成れることは、通常人の知れる所なるが其關節數に至りては、種類によりて多少の異同あり、今ケンブリッヂ博物誌に記載せる所を見るに、其最大數は頭部に七節、胸部よ六節、腹部に十一節、總計二十四節よして、其最小數は頭部よ三節、胸部に三節、腹部よ五節にして、總計十一節なりといへり。

◎春日谷地方の昆蟲採集

名和昆蟲研究所助手　小森省作

去五月十六、十七の兩日、春日谷地方の採集を試みたり。抑も春日谷は、岐阜縣揖斐郡西南部の山村、春日村一體の地よして、西は滋賀縣に隣り、彼の伊吹山ハ過半此の村に位せり。岐阜市を距る北西七里よして該村入口の部落に達することを得、而して余は僅か二日間の採集に、加ふるよ中途より風邪に冐され、爲に充分の採集を行ふ事能はざりしと、尙單獨なりしを以て、何處よても採集し得べき普通種は皆多く見逃したりき。今其模樣を概記すれば、十六日早起輕裝腕車を驅りて揖斐郡池田山麓なる小島村

市場區に達す、時に午前九時なりき。其より道路幅九尺にして、車馬の行通自由なりと雖ども、坂路に屬し、一面は山に、一面は谷なり。採集しつゝ登ること半里にして春日村瀧區に至る、右折山を攀つる約三丁、一大瀑布あり、高さ數丈、風景亦可なり、夏時杖を曳くもの多しと云ふ。下つて故道に據り、行く事里餘にして下ケ流區に達す。該區は家屋七八十戸にして學校、役塲、其他雜貨店、旅人宿等ありて春日村第一の部落なり。爰に於て晝飯を濟す、時に正午なりき。而して此間に採集せし種類は、鱗翅目鳳蝶科にはカラスバ アゲハ テフ、オナガ アゲハ テフ、アラスヂ アゲハ テフにして、此三種は非常に數多飛翔せるを見たりき。弄蝶科にはクロ ハナセセリ テフ、コ チャバネ ハナセセリ テフ、ウラボシハナセセリ テフを獲たり、此三種も亦普通にして、クロ ハナセセリ テフ最も多數を占めたり。環紋蝶科にはコ ジャノメ テフを獲たり、ヒメ ジャノメ テフは到る所に多かりしも、採集せざりき。鞘翅目には叩頭蟲科のコメツキ ムシ、ヒメ コメツキ ムシ、其他葉蟲科數種を獲たり。擬脉翅目には豆娘科のヤナギ イト トンバウを、毛翅目には石蠶科に屬するもの二種を獲たり。共に谿に臨み、濕氣多き所に飛翔せる者なり。シホヤ トンバウ、ギン ヤンマ等は非常に飛翔しつゝありしが、皆見逃したりき。之より行く事數丁にして、ニックヮコウ シロ テフ數頭を獲たり、是れ余の意外にして、該蝶が揖斐郡にも分布し居たるを發見し得たる事の愉快には、風邪の爲、快々たる此採集旅行に、大に元氣を添へたり。暫くにしてコ イチモジ テフを採る、行くこと里餘、小宮神に到る間、諸々に小瀑布あり。風景幽邃、佇立觀望する所ありしが、左折川合區に到り、之より伊吹山麓なる古屋、笹又等に到る間は、斷崖壁絕にして、僅かに一徑の存するのみ、一歩を過れば千仭の谷底に墮落し、晝尚暗きの處、此里程二里にして古屋に達す。坂路狹險にして、採集自由ならずと雖ども、昆蟲の多産なる、亦好適地ならんか、鳳蝶科にはオナガ アゲハ テフ最も多く、カラスバ アゲハ テフ、クロ アゲハ テフ之に次ぐ、アヲスヂ アゲハ テフは川合以南の山奥には見受ざりし。蛺蝶科のコ イチモジ テフ亦多かりしが、余り多くは採集出來ざりき。ミスヂ テフは到る處に多く、粉蝶科にはツマキ テフ 二

日光白蝶の圖

頭を獲たり、モンシロテフ、スヂクロテフ、キテフ、モンキテフ、小灰蝶科にはベニシジミテフ、キルヤマトシジミテフ、ツバメシジミテフは又到る處に多く、ルリツバメテフは僅よ一頭を獲たりき。豚翅目には、擧尾蟲科に屬する者四種を獲たり、此中、黄褐色にして翅に無紋の者最も多く、人の進むに從ひ、群をなして逃れ去る時は、爲に音を發するに至る、以て其多きを知るに足らん、之に次ぐは普通のシリアゲムシあり。其他奇品に屬するもの二種、草蜻蛉科よ屬するもの三種を獲たり。擬脉翅目には積翅蟲科に屬するもの二種、豆娘科よ屬するミヤマイトトンバウを採集せり。鞘翅目よは歩行蟲科に屬するもの三種、隱翅蟲科よ屬するもの二種、瓢蟲科に屬するもの一種、吉丁蟲科に屬するもの二種、叩頭蟲科に屬するもの三種、螢火科よ屬するもの四種、金龜子科に屬するもの三種、天牛科よ屬するもの一種、葉蟲科よ屬するもの二十一種、僞天牛科に屬するもの二種、赤翅蟲科に屬するもの一種、捲葉象鼻蟲科に屬するもの四種、青象鼻蟲科よ屬するもの四種、象鼻蟲科に屬するもの四種にして、有吻目よは黑椿象科に屬するもの一種、椿象科に屬するもの二種、有縁椿象科に屬するもの二種、食肉椿象科に屬するもの三種、泡吹蟲科に屬するもの一種、横蛺蟲科よ屬するもの九種、角蟬科に屬するもの一種、直翅目よは竹節蟲、及蠼螋科よ屬するもの一種、双翅目よは喰蚜虻科よ屬するもの二種、長脚蠅科に屬するもの二種、斑翅蠅科よ屬するもの一種、寄生蠅科よ屬するもの一種、膜翅目よは姬蜂科に屬するもの三種を獲たるが、皆多くは奇品よ屬するものにして、他の普通種は大低見逃したりき。午後六時古屋に達す、此處には旅人宿を營む家一軒あり、寢食すると云ふ迄なり、茶は此地方の名産なり。明れば十七日午前六時起床、直ちに支度を調へ、尙登ること約半里よして笹又に至る、同地よはニックワウシロテフの非常に飛翔せるあり、忽よして十數頭を獲たり。時よ午前十時、余は尙登山を試むる意ありしも、天氣模樣の惡かりし爲、此山奥よて降り籠めらるればやと、恐れて早々歸途に就きぬ。途中ニックワウシロテフ非常に多かりしかば、方針を全く該蝶の採集に轉せり。

◎誘蛾燈は果して螟蟲驅除に有効なりや

播摩國　大上宇一

螟蟲の一大害蟲なるや、言を俟たずと雖も、之に對する驅除法に至りては、種々の說あれども、其効少なくして、有力の方法とては未だ之あるを見ず。徒らに手數を掛けしめ、又漫りに費用を要せしめ、而して効果を收むる能はざるものは、驅除の方法よ於て、其當を得ざるに起因せずんばあらず、是れ今日

螟害の減せざる一事にて明なり。若し此等の方法にして徒勞に屬せざりしせば、多年の實施上如何の效果を得たるや、必ず世に示す處なかるべからず。從來の試驗成蹟に於て其報告を見るに、結論の誤謬たる者多し。例へば一兩年採卵、又誘蛾燈を實施し、其翌年天然驅除の效果ありしにも氣付かず、直に其結果なりと斷定を下し、其次年には氣候適順、加ふるに寄生蟲少なかりし爲、又其害の甚しきに當て、始めて前年の判斷の誤りなりしを知る其例多し、夫れ害蟲には天然驅除あり、人の病にも亦自然療法ありて、其服藥無効なりと雖も、偶然病の治する事往々あり、直に之を以て藥効と見る時は大なる誤謬を生ず。此の如き病に用ゐたる藥を採て、直ちに之を他人に應用したりとて、何の効なきや必せり。害蟲驅除に於ける又然り、直ちに臆斷を下して、豫防法其者の効と云ふが如きは、未だ早計にして、唯一の藥法を以て他に之を應用せんとする無智の醫師に等しきのみ。害蟲驅除に於ける、天然驅除の有力なるは、人工の遠く及はざる所にして、特に螟卵寄生蜂を以て最とす。然るに一方には、國家經濟にも關係を及ぼすべき石油を施用し、莫大なる手數と、費用とを擲ち、寄生蟲其他有益蟲の保護を等閑に付する地方多きは、實に憐むべきに非らずや。誘蛾燈其者には、多分の有益蟲即ち寄生蜂の各種、石蠶科、がむし科、げんごろうむし科等無罪者の死刑に注意せず、其益蟲、害蟲の區別を農家其人に教へざるが故に、保護すべき者も保護せず、誘蛾燈の爲、却て愛護せざるべからざる有益蟲までが死刑とは、實に無謀も亦甚しからずや。是れ恰も未開國人が罪を定むるに、罪者を鰐魚に與へて、之を食へは有罪と認むるが如く、有益蟲の爲實に氣の毒千萬の事にぞある。是等有益蟲は、定めて邦人の無智なるを悔むなるべし從來誘蛾燈の結果報告は、往々諸雜誌に見受くるに、價値ある報告は一も見へぞ、皆杜撰の報告に過ぎずして、其報告する所を見るに、何日夜蛾何疋、何日夜何疋合計何百疋等の記事にして、其有害蟲に對しては、有益蟲の死數も計算報告し、其利害得失を論せざるべからざるに、之をなさゞるは、恰も戰報を成すに、敵の死數のみ手柄顔に云ふて、味方の死數を云はざると同一轍なり。何ぞ其報告の當を得ざるや、余が杜撰の報告と云ふ所以なり。

又採卵數の報告に就ても、注意せざるべからず、其報告を見るに是れ亦何れも多少の誤謬あり、即ち何十何村、採集數何程、此を雌雄に分てば何程、之が産卵數何程、之に寄生蜂歩合何程、此が成長すれば何程の稻穗を害す、之が損益何程、此代價何程、此を本郡教育費何程に比せば何程の剰餘あり、など机上にて算盤的の報告多し、是亦其當を得たる報告にあらざるを信ず。昆蟲學大家さへ、未だ充分昆蟲界

の智識なきに、別ゝ昆蟲學も研究せざる者が、採卵數を基礎として立論するが如きは、薄弱の考にして無用の言多し、天然の事は、專門大家何程注意しても、未だ見透す事能はざるの点多くして、やゝもすれば誤謬に陷入るなきを保せず。況んや初學者ゝ於てをや、未だ諸學者が論せざる点に於て、天然驅除の行れつゝある事多々存す。害蟲の利害を知らんと欲せば、頻々撿視せよ、其內にも天然の道理より、其他の理由も發見する所あるべし。螟蟲卵の孵化したる際、是を食殺する所の益蟲を見る事難からず、即ち步行蟲科がむし科けんごふう科の小形種は多種ありて、此等有益蟲が稻株ゝのぼり、好食を待つ事多し。此際此蟲に捕食せらるゝ螟蟲の鈔は、又尠少からざるなり。此一事のみゝても、諸氏の從來の報告ゝは、誤謬ある事を知る、依りて天然の驅除は有力にして、年に依り多少の增減あれども、多生すれば隨て寄生蜂、其他も多生して之を食滅す、今日多少の盛衰は免れざれども、螟蟲害は依然として昔日に讓らず、誘蛾燈は費用多くして、之を償ふの價値少なし。採卵とて、益蟲の保護を怠る時は、又小兒の手數を償ふに足るや否や、今日諸氏の云ふ如き利益ある事は、螟蟲其者が減せざるゝても知るを得、良法の發見者を待つの外なし。

編者云、大上氏は徒らに天敵のみに任せて、良法のなきを歎ぜらる、如何に良薬と雖も、之を服せざれば、其効なきを如何せん。害蟲驅除の事は根本的思想を養成し、共同以て之れに當らずんば、好果を收むる能はず。採卵法の如きは、優に有力なる一方法と云ふべし。

◎昆蟲發句集

（一）　蟬

（歲事記）初蟬、空蟬、（格物論）蟬、兩翼、喙長くして腋の下にあり或は以爲口なし脇を以て鳴者なり云々種類多し枚擧するに遑あらず暑之○空蟬、すべての蟬をもいひ又もぬけたるをいふこと古歌ともに多し○蟬しぐれ、蟬の聲しんしんとして時雨るゝ樣に聞

頓て死ぬ景色は見ねず蟬の聲　芭蕉
ゆすりてゝ筆捨松に蟬の聲　宗因

三重縣一志郡高岡村　喜田川要三郎

蟬なくや木登りしたる團扇賣　素堂
森のせみ涼しき聲や暑き聲　乙州
月代に夢見て飛ぶか蟬の聲　正秀
啞蟬の鳴かぬ梢もあはれあり　杉風
逢坂やいとゞせき合ふ蟬の聲　智月
客ふりや居所かへる蟬の聲　掬志
風の蟬いよいよ竹に鳴つのる　氷狐
蟬鳴や寐て草臥る船の底　漫々
桐の木や雨の流るゝ蟬の腹　梅室

蟬なくやおなじかげなる松柏　梧十
蟬なくや貰ひ欠伸の渡し守　鶴年
蟬の聲人の夕かげ出來にけり　一具
日半日同じ茂みやあぶら蟬　抱儀
おとろへや一聲高き夜のせみ　烏明
蟬なくやしぶ〳〵晴るゝ山の雨　禾木
顏に來る瀧のしぶきや蟬の聲　太珉
初せみや夕暮の聲は草の中　冢松
初蟬や眼鏡かけれぱ飛で行　五明
蟬のかゝふ働くやうで哀れなり　句空
空蟬や石の鳥居も鳴すてし　一井
音の中になる山風やせみ時雨　丁知
日の丘やせみのよるべもなき時雨　三千彥
雛の聲も聞えずせみしぐれ　禾木

いてや我よき衣着たりせみ衣　芭蕉
梢よりほたと落ちけりせみの殼　同

稻葉山にて

撞く鐘もひゞくやうなりせみの聲　芭蕉
しづかさや岩にしみ入せみの聲　同
せみの聲たまらで涼し薄羽織　許六
桐の葉に落ちよ〳〵とせみの聲　同
せみなくやよく〳〵見れば松のこぶ　桃葉
啼まではあかぬせみかとおもひけり　幾秋
家ひとつありてせみ啼く野間かな　史千
夕せみや是かふ道もはかのゆく　蘆畝
清瀧や夢のやうなるせみの聲　蒼虬
せみよりも夕かげ出來て紀川　同
せみなくや思へば古き庭の竈　同

◎昆蟲に關する隨感隨筆（第一回）

昆蟲翁

(一)三化の二化と二化の一化生螟蟲　愛媛縣に於ける試驗の結果に依れば、三化生螟蟲の必ずしも三回發生するにあらずして、山間の冷氣なると、濕地の低温なる場所に於ては、往々二化生に變ずるとありと云へり。又富士の裾野に於て、二化生螟蟲は、大凡一化生なりと云へるも、恐らく事實と信せらるゝに依り、各所に於ても、深く實驗するの必要ありと確信す。

(二)螟蟲に關する博覽會　本邦の最大害蟲は如何なるものと問へば、必ず稻の螟蟲（損害高少くも年々四、五千萬圓）なり、と答ふるを以て至當と云ふべし。然るに該蟲驅除に付、未だ明瞭せざる所多々ありて、到底滿足する程の良法あるを知らず、仮令良法のあるも、未だ普及の域に達せざるは、遺憾とする所なり。現今本邦の昆蟲學は、實に一大進歩を來したるを以て、此期を失せず、稻螟蟲一切に關する、博覽會と迄には到らざるも、展覽會を開設して、廣く各地方に於て研究せられたる、長所を集めたらば

必ず得る所意外に多かるべしと信ず、讀者諸君以て如何となす。

(三)富士山採集の昆蟲　昨卅五年八月初め、讀賣新聞日就社發起の富士登山會に加はりし、當所助手名和梅吉の採集したる昆蟲は、七拾八種即ち膜翅類十二種、鱗翅類八種、雙翅類十一種、甲翅類三十五種、半翅類十種、羅翅類二種なり。其際の登山は、生憎暴風雨に出合ひたる爲め、全く頂上に達することなくして下山したる有樣なれば、從ひて採集品の少き事は當然の事なり。然れども、採集し得たる所のものを見るに、珍種奇品も多ければ、好時期を撰みて充分に採集せば、必ず意外の獲物あるや疑ひなし速かに採集し得て、富嶽の名と共に、高く名譽を擧げられんことを希望す。

(四)小學兒童採集の昆蟲　岐阜縣郡上郡上保村尋常高等小學校長塩田健藏氏(第三回全國害蟲驅除講習修業)は、屢々小學兒童の採集したる昆蟲標本を寄送せられしが、茲に最近送附(五月初旬採集)の分を見るに、實に七十一種に達せり、今是を七類に分てば、膜翅類四種、鱗翅類三種、雙翅類五種、甲翅類四十五種、半翅類十種、直翅類一種、羅翅類三種あり。其内甲翅類に屬せる葉蟲の一種(赤色にして百合の葉を食するもの)、幷に瓢蟲の一種(四星瓢蟲に近似のもの)は、慥に珍種に屬するものと云ふべし。

I

六星瓢蟲の圖

(五)黴菌の爲に斃れたる昆蟲　縞蠅　糞蠅を始め、バッタ、蟬、蛾等の、黴菌の爲に斃れたるを見るは、敢て珍奇とするに足らず。茲に天牛類、ゴミ蟲類、象鼻蟲類の死するものは、多少珍奇とするも、靜岡縣岡田忠男氏寄贈の螻蛄、特に同縣田方郡石井沘平氏(第七回全國害蟲驅除講習修業)寄贈の蜻蛉に到りては、實に珍奇と云ふべし。因に記す本年は桑蛅蟖等の黴菌の爲に斃るゝもの、特に多きを感ず(黴菌に罹りたる昆蟲の標本を、多數蒐集の上、專門家に調査を請ひ然る後詳細報導することあるべし)。

(六)豌豆象鼻蟲の產卵　京都府、兵庫縣、鳥取縣、和歌山縣等に於て、最も甚しく損害を與ふるエンドノザウムシの驅除法を、常に質問せらるゝも、未だ答ふるの言葉なかりしに、本年五月中旬岐阜市に於て、圖らずも、該蟲の頻りに豌豆の莢上に樺色の楕圓形なる卵子を產附するを見たり。尚其卵子の多少を調查したるに、人家に近くに從ひ其數を增し、遠かるに從ひ殆んど稀なりき。故に驅除の一法として四月迄に豌豆を使用し盡すにあり、然らざれば、豌豆內に於て越冬するものを、豫め死滅し置くを必要とす。

（七）外國輸入の害蟲　岐阜縣農事試驗場に於て、米國より各種植物の種子を購入せし折、其內菜豆の種子は全く害蟲の爲め食害せられしのみならず、種子の內より續々成蟲（ヒゲザウムシ）の一種の出づるありて、甚しきは一粒內實に十頭に及ぶものあるは、驚くの外なしと云ふべし。試驗場は機敏にも、悉皆燒棄せられしを以て、幸ひ蔓延の患ひなかりしも、若一誤りて飛散せば、慥に一種の有害蟲を增加したるものと云ふべし。又岩手縣某氏の質問に曰く、頃日澤山の蘭貢米を購入したるに、種々の害蟲混入し居るとて折角郵送せられしも、消印の爲め悉皆破損したるを以て、何種たるを知る能はざりしは、遺憾とする所なり。以上の如き有樣にて、續々外國より害蟲の輸入するは疑ひなければ、豫め注意し置かざれば、後日意外の損害を受くるやも圖り難し。

外國輸入の害蟲

（八）水松の蚜蟲驅除　岐阜市の或る醫師の庭內に、高さ八、九間の水松（イチイ）あり、五月初旬無數の蚜蟲發生したるを以て、强風の際には多く墜落す、此もの再び登らんと欲して所々方々步行するうち、誤りて室內に入り來るもの多く、爲に室を步する每に、二、三の蚜蟲を壓殺すると云へり。茲に於て驅除法の質問ありければ、種々の方法を話し置きたるに、其の後二十倍の石油乳劑を藁箒に附けて、一々樹枝を洗滌したるに、僅か二人手間にて見事に驅除の効を奏したりと云へり。何事も熱心に從事せば必ず効あるものなり。

（九）蟬寄生蛾に就ての書狀　米國昆蟲學者ダイアー氏より、左の書狀到着せり。

小生は貴下の圖版に示されたる、寄主蛾の幼蟲と、其寄主とにつき、非常の興味を以て注意仕候。そは明にウエストウッド氏の定められたる、エピピロップス（Epipyrops）屬に隸するもにして、未だ記載せられざるものと、愚考仕候。小生は其種名を命せられんことを、貴下に御勸め申上候。尙其一標本を合衆國ナショナル、ミウゼアムに御送り下され候はゞ、幸甚に存候云々。

尙又英國昆蟲學者キルカルヂー氏より、左の書狀到着せり。

小生は英文にて、寄生蛾の興味ある記事を有せる、最近の昆蟲世界に向つて、感佩仕候。何卒此事を單簡にエントモロジスト雜誌に、轉載せんことを希望仕候云々。

右は本年一月發行の昆蟲世界誌上に記載したる、蟬寄生蛾の實驗說に對しての書狀なり。歐米人の注意する所、實に感服の外なし。願くは本年各地に於て、充分研究の上、報知あらんことを希望す。

(十)負子の雌雄と產卵に就ての實驗

コオヒムシの件に就て種々の說あるも、未だ確定の場合に到らざるを以て、五月廿四日の日曜日に於て、當研究所員數名は、午前中專ら負子採集に出で、百數十頭を獲たるを以て、午後は專ら之が剖檢に從事して、其雌雄の區別を研究したるに、先づ尾端を驗して容易に其の區別を爲すの法を知れり、即ち鑷子を以て尾樣物を挾み、尾端を引出せば、其雌雄によりて異なる、一見明瞭なり。然して負卵者が雌雄何れなるかを驗するに、負ふものは悉く雄蟲にして、負はざるものは大抵雌蟲なるを以て之を推知すれば、負ふものは總て雄蟲あることを確認せり。然れども、雌蟲が如何にして雄蟲の背上に卵子を產むの點に就ては、未だ不明なれば、雌雄一雙宛器中に容れて、所員各自に注意したるに、五月廿九日の午前中に於て雌蟲は雄蟲の背上に登りて數十分每に一、二塊宛產卵することを認めたり。尙米國スラッター孃は、其亂暴なる目的を遂げんが爲、數時間爭ふことあるを言はれたるも、余が實見によれば、產卵當時雄蟲が交尾を遂げんが爲に、爭ふものにして、雌蟲が產附を行はんが爲めに、爭ふものにあらざるが如し。

◎博覽會出品害蟲標本解說書

岐阜縣武儀郡農會

本會は今回第五回內國勸業博覽會へ、害蟲標本として、桑樹の害蟲、シンムシの經過習性を示せる標本五箱を出品せり。今覽者の便益と、讀者の參考に資せん爲め、本誌の餘白を借りて、該解說書を紹介せんとす、幸に御掲載を乞ふ。

解說書

部類	番號	品名	出品人
一八	一	害蟲標本	岐阜縣武儀郡農會 代表者 會長 原田種澄

一、採集地　岐阜縣武儀郡

一、出品の目的　本郡重要植物たる、蠶桑に被害を與へ、生產力を減殺するを以て、害蟲の習性經過

を明かにし、完全なる驅除豫防を行ひ、其撲滅を圖らんとするにあり。

一、害蟲シンムシ發生分布　岐阜縣下の內、美濃國は武儀郡を始め、郡上、加茂、可兒、土岐、惠那の六郡及び飛驒國壹圓に亘り、就中武儀郡は金山町を根源として、坂ノ東村、上麻生村、菅田町、神淵村、上之保村、下之保村、中之保村、富之保村、及び上有知町の一部に流布せり。飛驒川沿岸の地は、久しき以前より發生を認めしが、既往五ヶ年間に漸次蔓延して、現今の狀態となれり。

一、被害反別並に減損高統計表　(明治三十五年調查)

町村名	上有知町	下之保村	中之保村	富之保村	上之保村	神淵村	菅田町	金山町	坂ノ東村	上麻生村	計
被害反別	一〇町	二五	三五	四三	六五	五八	五〇	三八	三〇	二九	三八三
平年收穫高	二五〇〇〇貫	六二五〇〇	八七五〇〇	一〇七五〇〇	一六二五〇〇	一四五〇〇〇	一二五〇〇〇	九五〇〇〇	七五〇〇〇	七二五〇〇	九五七五〇〇
被害減損高	一二五〇貫	六二五〇	二一八七五	二六八七五	四〇六二五	四三五〇〇	四三七五〇	三三二五〇	二六二五〇	一八一二五	二六一七〇〇
被害步合	〇割五分	一割	二割五分	同上	同上	三割	三割五分	同上	同上	二割五分	二割七分

備考、明治卅二年より驅除を續行したる爲め、本年に於ては被害を減少し、卅二年に比し、概畧三と一の比例なり。然れとも現今平均二割七分以上の被害は免れず、本年シンムシの爲めに減損したる桑葉を、假りに百貫目金拾貳圓五拾錢の相場と見倣し、積算するときは、參萬貳千七百拾貳圓五拾錢の巨額となれり。

一、桑樹被害の狀況　春季嫩芽の萠生せんとするとき、芽の心を食害するを以て、枯死したる芽ハ恰も霜害を受けたるが如し。秋季則ち幼蟲の孵化したる當時は、葉裏に班点を現はせり。

一、習性經過　發生地たる武儀郡神淵村に於て、飼育場を建設し、調查したる結果左の如し。

成蟲は六月下旬より七月中旬迄飛行し、桑葉の裏面に一粒宛產卵し、大畧八月上旬孵化して幼蟲となる其幼蟲は葉裏の主脈或は枝脈間に棲息して、葉を薄く咀嚼し、糸を張りて晝間ハ蟄伏せり。十月に入れば、其幼蟲は葉を下りて、芽元又は幹の凹所等に入り、糸を張りて其中にて蟄伏越冬し、翌春五月新芽の萠へ出つるを待ち、直に心に蝕入し、老熟せば出てヽ他の靑き葉の先に移り、葉面より二本の指を以てつまみ上げたるが如く、葉を表面に凸出せしめ、其凹所に入り、繭を作りて蛹化し、六月下旬に至り化して成蟲となるなり。幼蟲の卵より孵化したる當時は、葉裏に薄き班点を顯はし、其部分の薄き糸を搔き起せば、棲息するを搔き起すときは、棲息するを見る。越冬の幼蟲は芽元、又は幹の凹所等の糸を搔き起せば、棲息するを

見る。被害當時の幼蟲は、被害芽を摘み取るときは、心を食害しつゝあるを見る。幼蟲は一頭にて一芽を食害し、他の芽に移ると見ざりし。幼蟲及蛹に寄生する蜂數種ありて、蕃殖を妨ぐること多大なり。

一、驅除の方法　春季は被害芽を摘み取り、燒殺、又は湯殺すべし。秋季は九月末日迄に葉を摘み去り、殺蟲法を行ふべし。蠶糞は其儘田畑に捨てず、一度醱酵して肥料とすべし。成蟲は捕蟲器を以て、掬ひ殺すべし。驅除したる被害芽は湯殺を行ひ、肥料の用に供するを便とす。

一、驅除施行の經歷、及び將來の施設　往年被害激甚なりしと雖、該蟲の習性經過を知らず、又因襲の久しき害蟲は、天然に發生するものにして、人爲を以て撲滅すべきものにあらずと唱道し、驅除に手を下すことなかりしも、明治卅一年名和昆蟲研究所長來郡し、各地に於て、當業者に就き、親しく講話せられし結果、始めて驅除に着手の念を惹起せり。爾來、講話會を開く事數回、又一面には志想養成の爲め同地、及び本會役員中より人物を選定し、岐阜縣害蟲驅除講習會、及び名和昆蟲研究所開催の全國害蟲驅除講習會に入學せしめ、指導啓發の途を開き、農藝委員を派し、標本を示して講話をなさしむる等畧ぼ準備を整へ、明治卅二年春季始めて菅田町、金山町、坂ノ東村を區域として、驅除に着手せり。明治卅三年よりは、郡內發生地を悉く區域に加へ、本年に至る繼續して、驅除を勵行したり。而して驅除に着手せんとするや、機關として各町村に五名、乃至拾名委員を置き、又害蟲驅除講習生を監督として一町村に一名宛配置し、而して始め桑園主に各自に驅除を行はしめ、最終に至り一回乃至二回共同驅除を爲さしめたり。又町村農會に令し、被害桑芽の買上げを實行せしが、是又獎勵方法として效果を收めたり。驅除の成績大に見るべくして、被害尠少となりしと雖、此地方は概して夏蠶を飼育するもの多くして、春蠶地に桑葉を輸出する事多く、爲に分布區域現今の如く廣大となり、且又、從來驅除したる地と雖、發生區々、殆ど一ヶ月の長期に亘るを以て、桑の繁茂に伴ひ驅除困難のみならず、被害芽を取り殘すを以て、未だ全滅と云ふに至らず、依て明治卅六年度は、神淵村に於ける飼育塲の調査を參酌し、從來の方法により、春季驅除勵行の外に、秋季落葉前に於て、更に驅除を行ひ、以て全滅を圖らんとするにあり。而して秋季驅除に就き、當業者の參考に資せんが爲め、發生地各町村に三ヶ所、乃至五ヶ所の地を卜し、一ヶ所一反步（桑の占有面積）以上の摸範驅除塲を置き、九月末日迄に桑葉を除去せしむるの手段として、秋蠶の飼育を奬勵し、不知不識の間に、驅除の目的を達せんとす。

一、審査請求の主眼　害蟲の驅除、豫防を全からしめんと欲せば、其習性經過を知悉するにあらざれ

ば難し、故に本出品を以て、發生經過を一目瞭然ならしめ、且敵蟲をも出陳し、其有益蟲は保護すべき必要を知らしむると共に、本會が從來驅除を施行したる成蹟と、飼育場に於ける調査に徵し、之が全滅を期せんとする方針なり、仍て審査あらんことを請ふ。

標本の説明　第一函、シンムシ七月下旬より翌年四月下旬迄の經過。第二函、四月下旬より六月下旬迄の經過。第三函、完全經過第四函、飼育場被害の實況、共同驅除の實況。第五函、岐阜縣幷に武儀郡分布圖及被害反別損害高統計表。

◎靜岡縣昆蟲事項

靜岡縣　岡田忠男

左は、余が記憶に係る、靜岡縣昆蟲事項の大体なり、即ち御要望に任せ、茲に記載して參考に供せんとす。

開會年月日	開期	名稱	人員	開催主名
明治三十二年八月二十三日	七日間	昆蟲學講習會	八一	靜岡縣濱名郡農會
同　十二月二十五日	五日間	同	三〇	同
同　三十三年一月四日	五日間	同	六八	同
同　八月三十日	九日間	害蟲驅除講習會	一〇三	同縣引佐郡農會
同　三十四年二月二十一日	九日間	同	八六	同縣濱名郡農會
同　十月六日	五日間	同	三六	同縣安部郡大谷村農會
同　十月十二日	三日間	同	八八	同縣磐田郡農會
同　十月十五日	三日間	同	一〇八	同
同　十月十八日	三日間	同	一二三	同
同　十月二十一日	三日間	同	一二〇	同
同　十月二十四日	三日間	同	二五〇	同
同　十月二十七日	三日間	同	五〇	同
同　三十五年三月七日	七日間	昆蟲學講習會	八六	同縣田方郡農會
同　三月十六日	七日間	同	六八	同
同　七月二十五日	五日間	害蟲驅除講習會	一六	同縣庵原郡農會
同　八月二十五日	七日間	同	七六	同縣志太郡農會

同　三十六年一月十五日	七日間	昆蟲學講習會	六一	同　縣田方郡農會
同　三月二十日	五日間	同	八一	同　縣富士郡農會

右は、余が講師の鞭を執りしものにして、回數十八、會員數一千五百二十九名あり。最も磐田郡の如きは、極めて短期なるものにして、各地巡回講習に止まれり。而して會員は、主もに實業者にして、或る町村の如きは、小學校敎員、學校生徒をも加入せしめたることありき。

右に記載したる外、各郡に於ける、昆蟲事項の既往と將來に付て、記すること左の如し。

周智郡は、左の講習會及び昆蟲展覽會を開會せり。

開會年月日	開期	名稱	人員	主催者名
明治三十四年七月一日	五日間	昆蟲學講習會	七一	周智郡農會
同　三十五年九月二十日	五日間	同	一〇五	同

右は、名和先生が親しく敎鞭を執られし處なり。尙ほ、同郡農會は、明治三十五年九月十九日より二日間、昆蟲展覽會を、森町に於て開會せり。

磐田郡は、昨三十五年八月二日、同郡敎育會に於て、名和昆蟲研究所助手名和梅吉氏を聘して、昆蟲學講習會を、中泉尋常高等小學校に開會せしが、開期は七日間にして、會員は五十六名なりき。尙、明治三十五年十一月、同郡下阿多古村に於て、昆蟲學講習會を開會し、同縣濱名郡鈴木伊平氏、講師の任に當れり。開期は五日間にして、會員六十余名なりと云ふ。

志太郡は、同郡靜濱村に於て明治三十二年八月十五日より五日間、昆蟲學講習會を開會せり。會員六十八名。同郡燒津町に於て、明治三十四年四月十八日より五日間、昆蟲學講習會を開けり會員六十二名。尙ほ、昨三十五年八月十五日より五日間、同郡豊田村に於て、昆蟲學講習會を開會せり。會員五十八名にして、講師は凡て、多々良理吉氏是れに當れり。

榛原郡は、同郡農事巡回敎師丸山方作氏、同郡各所に於て、農事講習會開會の際、特に農用昆蟲學を、敎授せられしこと數十回なりき。

濱名郡は、昆蟲學講習會の外、郡費を以て、郡下各小學校に、昆蟲標本一箱づゝを配付せり（明治三十三年度）。

賀茂郡は、同郡農事巡回敎師上遠野秀松氏により、各町村農會及び區農會に、害蟲圖の備付を見るに至

れり。又同郡三濱村に、農事講習會を開會せし際、特に昆蟲の一科を加へりと云ふ。尙ほ、靜岡縣農會の事業として、明治三十四年度に於て、縣下各高等小學校へ、昆蟲標本一箱づゝを配付せり。又昨年縣農會開催の農事講習會には、特に農作物害蟲論を講習したるが如き事項は、其大体なり。前巳に述ぶるは、既往の事にして、將來としては、縣下駿東、富士、田方の三郡農會は、三十六年度に於て、昆蟲學講習會開會の運びに至り、又榛原郡は有志により、昆蟲展覽會を開會せんとの議ありと聞く。補拾、富士郡農會は、三十三、三十四年度に於て、二名づゝ撰拔して、全國害蟲驅除講習會へ入會せしめたること、二回ありたり。因に記す、本縣人にして、全國害蟲驅除講習會を修了したるもの二十九名なりと云ふ。

◎愛知縣寶飯郡小學校冬季昆蟲展覽會彙報

愛知縣　田中周平

去る五月三日より一週間開會の、寶飯郡小學校冬季昆蟲展覽會は、非常の盛況にて、會期中の觀覽人は總計七千七百十八人に達し、內團体即ち學校敎員及生徒等の觀覽者は五千四百十三人、普通人員二千二百九十七人の多數にて、一日平均千百餘人に及びたり。會場ハ寶飯郡會議事堂を以て之に當て、六室に分ち、第一室には敎授用掛圖に作りたる、昆蟲の放大圖等を以て充たされたり。此は悉皆小學校敎員の製作に係るもの、第二室にも亦敎授用掛圖ありと雖も、多くは器械類に屬するものにして、卽ち益蟲捕獲器、螟蟲驅除器、蜜蜂飼育箱、誘蛾燈、船形塵浮子捕殺器、浮塵子捕殺器、半圓形捕蟲器、大形捕蟲器噴霧器、水棲昆蟲飼育器(飼育中)、其他昆蟲に關する書籍類、名和昆蟲研究所出品の參考品等なり。第三室に陳列せしものは、卽ち本會の主眼あるものにして、總ての昆蟲標本、小學校生徒の手に成れる實物寫生圖、昆蟲刺繡、及裝飾用標本の美麗ある扁額等にして、此等の部類別を示せば、分類標本四十三點百六十二個蟲數一万百三十頭、害蟲標本廿九點五十六個蟲數三千百六十四頭、益蟲標本廿三點廿九個蟲數一千四百三十四頭、敎育用標本二十點五十八個蟲數二千五百頭、裝飾用標本十七點二十五個、生徒圖畫二百五十九點、參考品二十二點百四十二個なり。第四室は役員事務室、第五室は來賓休憩所、第六室は審査室に充てたり。審査長には、名和先生を戴き、審査員十名にして、一同拮据黽勉、公平に終りを告け、七日褒賞授與式を擧行したり。抑も今回の展覽會は、單に標本の精粗を判別し、圖書の優劣を比較するのみに非ずして、實に斯學思想を養成し、將來の郡敎育の發展に於て、大に益する所尠少なか

らざりき、今其受賞の校名を擧ぐれば左の如し。

一等賞　○分類標本　赤坂高等小學校、○害蟲標本　神ノ郷尋常小學校、○益蟲標蟲標本　千兩尋常小學校、

二等賞　○分類標本　萩尋常小學校、赤坂尋常小學校、長澤尋常高等小學校、豊川尋常小學校、國府高等小學校、○害蟲標本　赤坂高等小學校、赤坂尋常小學校、○益蟲標本　桑富第一尋常小學校、赤坂高等小學校、牛久保高等小學校、御油尋常高等小學校、○教育用標本　江島尋常小學校、一ノ宮高等小學校、○裝飾用標本　御津尋常高等小學校

三等賞　○分類標本　桑富第一尋常小學校、伊奈高等小學校、御津尋常高等小學校、千兩尋常小學校、一ノ宮高等小學校、國府第二尋常小學校、鹿菅尋常高等小學校、塩津尋常高等小學校、佐脇尋常高等小學校、○害蟲標本　牛久保高等小學校、御津尋常高等小學校御油尋常高等小學校、○益蟲標本　市田尋常小學校、萩尋常小學校、御油尋常高等小學校、三藏子尋常小學校、○教育用標本　豊秋第二尋常小學校、御油尋常高等小學校、塩津尋常高等小學校、三谷尋常高等小學校、○裝飾用標本　御油尋常高等小學校、桑富第一尋常小學校、佐脇尋常高等小學校、

四等賞　○分類標本　前芝尋常小學校、市田尋常小學校、國府第一尋常小學校、桑富第三尋常小學校、八幡尋常小學校、麻生田尋常小學校、白鳥尋常小學校、神ノ郷尋常小學校、○害蟲標本　一ノ宮高等小學校、國府高等小學校、三藏子尋常小學校、桑富第一尋常小學校、千兩尋常小學校、市田尋常小學校、鹿菅尋常高等小學校、○益蟲標本　一ノ宮高等小學校、鹿菅尋常高等小學校、赤坂尋常小學校、○教育用標本　國府第一尋常小學校、蒲郡高等小學校、蒲郡尋常小學校、西蒲尋常高等小學校、○裝飾用標本　形原尋常高等小學校、白鳥尋常小學校、蒲郡尋常小學校、伊奈高等小學校、

右の外賞與に與らざりし十八校、並に參考品を出品せし十七校に紀念狀を與へたり。

◎三重縣阿山郡新居村の蝶報

第八回全國害蟲驅除講習修業生　三重縣　西岡嘉十郎

三重縣阿山郡新居村に於て、昨年迄でに予が採收せし、蝶類を世に紹介せんとす。尙採收を重ぬれば、多種類を獲らるゝ事と信ずれば、本年採收の上、更らに報ずる事あるべし。

挵蝶科　一文字セセリ、ハナセセリ、キマダラセセリ、チヤマダラセセリ、
小灰蝶科　ベニシジミ、シジミテフ、ミドリシジミ、ウラナミシジミ、
天狗蝶科　テングテフ、
蛇目蝶科　ジヤノメテフ、オホジヤノメテフ、ウスイロコジヤノメ、ヒメジヤノメテフ、ヒカゲテフ、キマダラテフ、
蛺蝶科　ヒオドシテフ、コムラサキ、イチモジテフ、メスグロヘウモンテフ、ウラギンヘウモンテフ、アカタテハ、ヒメアカタ

テハ、キタテハ、ルリタテハ、コミスヂテフ、ゴマダラテフ、

粉蝶科　モンシロテフ、モンキテフ、キテフ、ツマキテフ、スヂグロテフ、

鳳蝶科　アゲハノテフ、キアゲハ、カラスバアゲハ、クロアゲハ、ジヤカウアゲハ、ヤマジョロウ、アヲスヂアゲハ、

◎明治三十六年度兵庫縣揖保郡農會懸賞螟卵採集方法

兵庫縣　岩田熊三郎

揖保郡農會に於て、昨三十五年懸賞螟卵採集を行ひし結果は、曾て昆蟲世界に記載されしが、本年は昨年と方法を少しく變更し、左の規程により施行することとなせり。

懸賞螟卵採集方法　本會は左の方法により、懸賞螟卵採集をなす。

一、採集したる螟卵は、第一回六月十五日、第二回六月二十五日、第三回七月十日迄に左の方法により、其村害蟲驅除豫防委員に差出すべし。

(イ)卵塊附着の苗葉は、卵塊を中央になし、葉長一寸位に切斷し、十葉を一括となし、更に十括を一束となすべし。

(ロ)卵塊は狀袋等の如きものに入れ、其數及住所氏名を明瞭に記載すべし。但用紙は成るべく反古及色紙を避け鉛筆使用はなさざること

二、害蟲驅除豫防委員、前項の螟卵を受理したるときは、員數を點檢し、其翌日町村農會長に送附し、町村農會長は更に是れを點檢し、左記樣式(書式畧す)に從ひ、二日以內に本會事務所に送附すべし。

三、本會は各町村農會長より送附したる螟卵を統計し、其多寡により、左の賞與をなす。

(イ)一般採集者に對しては、豫算額を採集總卵塊に割當て、金員を賞與す。

(ロ)一般採集者中、其數尤も多きものより百名を撰出し、左記の賞品を授與す。

一等賞　鍬二挺(一名)、二等賞　鍬一挺(五名)、三等賞　丁能鍬一挺(十四名)、四等賞　鎌一挺(八十名)

四、町村農會員にあらざるものは、賞與を受くることを得ず。

◎昆蟲に關する葉書通信　（第三十二報）

(一七七)栗毛蟲の繭(岩手縣、晴山立郎)　別に送附せし、三陸新聞第三面記事（栗毛蟲の繭百匁十錢より十五錢）、甚だ舊聞に屬すれども、我東北凶荒地には、本年非常の影響を及ぼし、昨年の害蟲は、本

年の益蟲たるの考を抱き、利害得失を顧みず、却て蕃殖を希ふものさへあるに至れり(五月八日附)。

(一七八)ギフテフの採集(山形縣、南波克治)　昨春本縣北村山郡楯岡町字湯澤及大倉村に於て、ギフテフ二頭採集せしが、本年は未だ採集せず(五月九日附)。

編者云ふ、南波氏は時期を逸したるには非らずや、尚昨年の採集に係るものは或は姫種にはあらざるか、望むらくは一頭贈られん事を

(一七九)竹節蟲科の分布通信二件(三重縣、白木金一郎)　昆蟲世界第六十七號に於て、竹節蟲科に就ての記事中産地云々、小生は去る明治三十四年八月四日、三重縣桑名郡大山田村大字汰上通行の際、路傍叢間に於て、第一に屬するもの即ちナヽフシムシを採集せり(五月十日附)。

(山口縣、中井猛之進)四月十五日發行の昆蟲世界に於て、竹節蟲科に就ての記事中、第四のトビナヽフシムシは、一昨年八月小生が山口町上宇野令村字糸米兄弟山麓雜木林中にて採集せしが、其果して何を食し居るかはもとより未知にして、採集當時之が性質を知らざりし爲、觸角、足部等皆脫せし故(最も充分發達せしものにはあらざりき)、止むなく放棄せしが、全体綠色なりし所等より察するに、全く第四のものに符合する樣考へらる。兎に角同科のものが、當地に產する丈は確なり(五月十一日ロ便)。

(一八〇)ミカドアゲハテフの採集(於採集旅行先、福岡縣、高千穗宣麿)　余は今より一時間前に、豐前國田川郡彥山村字長谷に於て、ミカドアゲハテフ(Papilio mikado)の雄一頭採集せり。貴方の分布表に記入さるゝの榮を喜ぶ(五月廿一日ロ便)。

(一八一)昆蟲雜信(鳥取縣、蓮佛万吉)　五月十七日螟蟲羽化せるもの四頭、蛹化せるもの二十一、幼蟲四十二頭、浮塵子は四齡、乃至成蟲等、數種採集せり。今二十一日より矢崎、橋本兩技師は、縣下各警察署へ出張、巡査を招集して、害蟲驅除豫防に關する講習を開始せり。本年より農事試驗塲に、害蟲の發生經過、及驅除豫防、幷に驅除濟等に係る試驗施行につき、漸く此頃諸器械諸準備整頓せるが、此等試驗方法は、何れ貴所の指揮を仰がざるを得ず。本春、試驗圃地の蔬菜は、夜盜蟲及蚜蟲等の爲、殆んど不結果に了れり(五月廿一日附)。

(一八二)桑のシンムシ及シンクヒムシ(於飛驒國古川町出張先、松尾國松)　シンムシ被害は、昨年督勵の結果、益田郡は昨年に比し、約三分の一、大野郡、吉城郡も、大に少なく、好成績につき、此機に乘じ、各部とも大に驅除督勵中なり。尚、古川町小字藤代の桑園二十餘町步に、シンクヒムシ發生し、

被害少からざるより、是亦切採り驅除施行中なり（五月廿五日附）。

（一八三）博覽會の陳列に就て（千葉縣、大竹義道） 博覽會陳列にありて、殊に貴所始め、貴縣下出品の昆蟲標本が、陳列室の甚だ狹隘なるより、而も光線の不明なる邊に高く揭げあるが故、小生等は親しく就て目擊するを得ざるは、實に遺憾の至りなりき。其他の府縣にありても又然り、折角研究と、丹精を凝して製作せられし標本が、單に博覽會場の裝飾に要せしまでに過ぎずして、余輩の如き、斯學上參考にもと、勇み喜んで、遙々會場に臨みしも、斯の如き陳列方には、實以て失望せり（五月廿六日附）

（一八四）稻螽の採卵（岐阜縣揖斐郡鶯學校） 本校下に於ける稻螽は、放校後、兒童をして年々數斗の卵塊を採集せしめたる結果、大に減少し、殆んど全滅に歸したるを以て、農家一般は非常に喜び、是等の事實を見ても、驅除の必要を感し居れり。尙本年も之を採集せしめつゝあるに、足健なる兒童は、鷹の如き眼を以て、他部内に迄侵入して之を拾集し、今や五、六升に達せり。螟蟲の採卵に於ては、時期尙二、三日早きも、各兒童は、發生せばやと待ち居れり（六月三日附）。

◎螻蛄に就て質問

愛知縣丹羽郡 味勝正義

螻蛄は害蟲にして、甚だ惡むべきものと存じ候、右に付佐々木忠次郎君著に係る、日本農作物害蟲篇第四百七十八頁に、第十五有用植物の害蟲とし、直翅目蟋蟀族にして、其豫防驅除法に至るまで、詳細明記しありしにも關はらず、昆蟲世界第六十一號學說欄内に於て、同氏の說に害蟲類を食とする昆蟲類の重なるものに、第一螻蛄と之れ有り、右を益蟲とす、とあるを以て、淺學なる小生の如きは、大に迷を生じ、螻蛄の害蟲と信じ居りしもの、一變して益蟲となるは、研究上如此なりしもの哉、又は或る場合に於ては、益蟲となるものと承知して可然哉、且螻蛄は、如何なる場合、何々の害蟲を捕食するものなり哉、御敎示相成度候。

右に對する答

理學博士　佐々木忠次郎

頃日、味勝君の、名和昆蟲研究所に寄せられたる、質問書に對し、同所は、余に其答辨を望まれたり、依て左に卑見を陳べんとす。扨て螻蛄れ、拙著の農作物害蟲篇には、害蟲として論し、昆蟲世界第六十一號には、益蟲の一種として辨明せり。貴說の如く螻蛄は其棲息する位置に依り害蟲ともなり益蟲ともなるものなり、特に農作物其他苗床等にては常に有害なるも森林其他の場所にては、幼蟲類を食する益蟲あり、故に單に益蟲なりとするは穩當ならず、故に昆蟲世界第六十一號の記事には、益蟲の一種となしたるも場合に依りては患害尠なからざるものと見做されんことを乞ふ。

雜報

◉岐阜縣農會の諮問答申案

岐阜縣害蟲驅除豫防規則第一條の害蟲種類は、改正を要せざるや否やに就き、岐阜縣知事よりの諮問に對する、縣農會の答申左の如し。

○害蟲驅除豫防規則第一條に、追加を要する害蟲種類。

一、トビイロ　ウンカ　(浮塵子の一種)
一、ドロ　ハムシ　(葉蟲の一種)
一、トゲ　シヤクトリ　ムシ(尺蠖の一種)
一、クハ　ジラミ　(木虱の一種)
一、マメ　コガ子　ムシ　(金龜子の一種)
一、ウメ　ケムシ　(蛅蟖の一種)
一、ホシ　ハマキ　ムシ　(葉捲蟲の一種)
一、イ子　ノ　ガメムシ　(椿象の一種)
一、イナゴ　(稻螽の一種)
一、キン　ケムシ　(蛅蟖の一種)
一、サル　ハムシ　(葉蟲の一種)
一、ヒメ　コガ子　ムシ　(金龜子の一種)
一、イラムシ　(蛓蟲の一種)
一、イ子　ノ　ザウムシ　(象鼻蟲の一種)
一、トラフ　カミキリ　ムシ(天牛の一種)
一、クハ　ケムシ　(蛅蟖の一種)
一、ウリ　ハムシ　(葉蟲の一種)
一、アブラ　ムシ　(蚜蟲の一種)
一、ナシ　ザウムシ　(象鼻蟲の一種)

以上の害蟲は、規則第一條に追加すべきものと認む。而して其驅除法に就き、本會の調査したるもの左の如し。

一、トビイロ　ウンカ(稻)ツマグロ　ヨコバヒに同じ。
一、イ子　ノ　ガメムシ(稻)咽喉付圓形捕蟲器、又は廣口の器に掃ひ落して捕殺すべし。
一、イ子　ノ　ザウムシ(稻)圓形捕蟲器等の中に掃ひ落して捕殺すべし。筍等の廢物を利用して、稻株間に散在し置き、其集まるを俟

て捕殺すべし。

一、ドロハムシ（稲）捕蟲器を以て成蟲を捕殺すべし、又田面に成るべく水を張り、小量の石油を注ぎて拂ひ落し、之を集めて殺すべし。幼蟲は朝露の消へざる前に、該蟲の群棲せる苗を、藁箒を以て拂へば、附着するを以て之を殺すべし。

一、イナゴ（稲）五、六月頃、田面に灌水の時を以て、卵塊を採集し、肥料瓶に投入すべし。捕蟲器を以て幼蟲並に成蟲を捕殺すべし。

一、トラフカミキリムシ（桑）クハカミキリムシに同じ。

一、トゲシヤクトリムシ（桑）卵塊を捜索して摘採すべし。幼蟲並に成蟲を捕殺すべし。冬期根部の土を堀りて、其蛹を殺すべし。

一、キンケムシ（桑）葉裏に産附せる卵塊、及び樹間等にある繭を摘採すべし。幼蟲を枝葉と共に摘採して、肥料瓶に投入すべし。

一、クハケムシ（桑）葉裏にある卵塊を摘採すべし。秋季群集せる幼蟲を枝葉と共に摘採し、肥料瓶に投入すべし。翌春幼蟲並に成蟲を捕殺すべし。

一、クハジラミ（桑）幼蟲の時代に於て、枝葉と共に摘採し、肥料瓶に投入すべし。

一、サルハムシ（蔬菜類）捕蟲器を以て成蟲を捕殺すべし。

一、ウリハムシ（瓜類）捕蟲器を以て、成蟲を捕殺すべし。冬期被害地に接近せる山林原野若くは堤防等の雜草、及び石下に潜伏せる成蟲を捕殺すべし。

一、マメコガ子ムシ（大豆）。一、ヒメコガ子ムシ（同）共に捕蟲器又は廣口の器中に、成蟲を掃ひ落し、捕殺すべし。

一、アブラムシ（紫雲英、蔬菜類、果樹類）稀薄なる石油乳劑を撒布すべし。發生の初期未だ蔓延せざる際、注意して其植物と共に摘採して、肥料瓶に投入すべし。

一、ウメケムシ（果樹）冬期卵塊を摘採すべし。卵子孵化の際、未だ蔓延せざる時に於て、幼蟲を燒殺するか、又は掃ひ落して捕殺すべし。繭を捜索して潰殺すべし。

一、イラムシ（果樹）冬期繭を摘採して、其中の幼蟲を潰殺すべし。

一、ナシザウムシ（果樹）被害果は直に取り去り、肥料瓶に投入すべし。

一、ホシハマキムシ（果樹）幼蟲を葉と共に取り去り、肥料瓶に投入すべし。

◉稲作害蟲驅除心得　岐阜縣揖斐郡に於ける、本年度の害蟲驅除は、例の如く小學兒童を利用して之を行ふ由なるが、尙左に掲ぐる如き、稲作害蟲驅除心得を數千枚印刷し、郡下一般農家に配附したりといふ、注意周到といふべし。

本郡に發生すべき重なる稲作害蟲は、イネノズキムシ、ウンカ、イチモジハナセセリ、イネノアヲムシ

イナゴ、イネノガメヤシ、イネノザウムシ、キリウジカガンボ等なりとす、故に是等の害蟲に就き驅除の方法を左に示す。

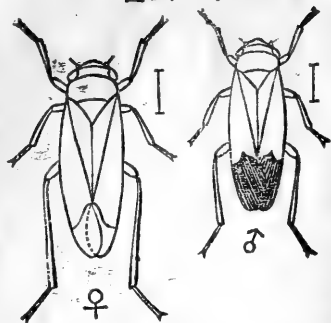
イネノズヰムシ、苗の二、三寸伸びたる頃より、七月中旬頃に亘りて、卵を稻葉に産附す。此卵は初め淡黃色なれども、漸次黑色に變ず、而して産卵後約一週間にて孵化するものあれば、苗代田にては三日、本田にては五日每に必ず採卵すべし。尚苗代田に於て捕蟲網を以て其蛾を掬ひ採るべし。

螟蟲卵塊の圖

前記の方法によりて見遁したるイネノズヰムシは、二番除草の頃、蝕入したる稻莖を、極めて下部より、圖の如き器具を以て切り取り、適宜把束し、槌にて莖中の幼蟲を打ち殺すべし。

新發明莖切器の圖

尚前期の方法により、見殘りたるイネノズヰムシは、羽化して蛾となり、卵を稻葉に産附す。此卵の孵化して蝕入したる時は、其稻は白穗となるなり。而して其の初は一莖中に二三十頭乃至七八十頭ありと雖ども、漸次他の莖に移るものあれば、此時直に切り取り、前記の方法によりて潰殺すべし。

ウンカの圖

ウンカ、此蟲の種類は數多あり、一年四五回發生するを以て、其繁殖力極めて強し、幼蟲、成蟲共に稻の液汁を吸收するを以て、稻は漸次黃色に變ぜ、特に甚しき時は收穫皆無なる事往々あり。之を驅除するには、苗代田に於て、捕蟲網を以て、日々掬ひ採るを最もよしとす。本田に於ては捕蟲器を施用して驅除すべしと雖ども、又石油を一段步約壹升五合の割合に注油して、驅除することを得。但し此の場合には、特に注意を要す。

イチモジハナセセリ、幼蟲をハマクリムシと云ひ、又俗にカジムシと稱す常に稻葉を綴りて其中に潛み、時々出でゝ食害す。之を驅除するには、竹管を貫きたるもの二個を造り、稻圖に示すが如く、細き棒に、を挾みて扱き上げて潰殺すべし。尚ほ發生の初期共同驅除を行ふ時は、最も効ありとす。又其の蝶即ち

カジムシ潰殺器

イチモジハナセヽリを捕殺すべし。

イネノアヲムシ、幼蟲は常に稻葉を食害す。一年三回の發生にして、苗代田時期の害最も甚し。之を驅除するには、苗代田に於て、捕蟲網を以て、幼蟲並に其蛾を掬ひ採るべし。又苗を採りたる後、水面に浮びたる、圖の如き繭を集めて肥料瓶に投入すべし。

イチノアチムシの繭

イナゴ、人の能く知る所の害蟲にして、特に稻苗の嫩葉を食害す。之を驅除するには、五、六月頃田面に灌水の時を以て、水に浮び、風の爲に畦畔の周圍に集まりたる卵塊を採集するを最も効ありとす。又秋期其成蟲を採集し、肥料又は家禽、養魚の飼料、其他儀助糞等になす時は、大に利益あり。

イナゴの圖

イネノガメムシ、此蟲は出穂の際最も加害し、其汁液を吸收して粃米となす。之を驅除するには、咽喉付圓形捕蟲器、又は石油少許を入れたる廣口の器中に掃ひ落すべし。

イネノザウムシ、此蟲は象鼻蟲の一種にして、常に稻の汁液を吸收する害蟲なり。之を驅除するには、圓形捕蟲器等に掃ひ落して捕殺すべし。又畜等の廢物を利用して稻株間に散在し置き、其集まるを俟ちて之を捕殺すべし。

キリウジカガンボ、此幼蟲は最も多く苗代田に發生して、大害を與ふることあり。之を驅除するには羽化の際成蟲即ちキリウジカガンボを捕殺すべし。又水を湛へて、幼蟲の畦畔に集まるを俟ち、田面の周圍に小溝を作り置く時は、其浸害を免れ得べし。

◉三十六年度の害蟲驅除豫防費　農商務省の調に據れば、明治三十六年度地方税勸業費豫算決定額中、害蟲驅除豫防等に關する費額は左の如し、

府縣	費目	金額
京都府	害蟲驅除補助	一〇〇
大阪府	害蟲驅除豫防補助	一二、五一六
石川縣	害蟲驅除豫防補助	一〇〇
富山縣	害蟲驅除豫防	一六〇

縣	事業	金額
茨城縣	害蟲驅除豫防	二、五二〇
栃木縣	害蟲驅除	一〇
三重縣	害蟲驅除豫防	六〇〇
山梨縣	害蟲驅除豫防	一、〇〇〇
滋賀縣	害蟲驅除豫防	一〇〇
岐阜縣	害蟲調査	一、九二一
	同豫防補助	五〇〇
福島縣	害蟲驅除	五〇
岡山縣	害蟲驅除豫防奬勵	三、〇〇〇
香川縣	害蟲驅除豫防	一
愛媛縣	害蟲驅除豫防	二、八一九
大分縣	害蟲驅除豫防	二、二七四
佐賀縣	害蟲驅除	四、四一〇
熊本縣	害蟲驅除	四、三四〇
宮崎縣	害蟲驅除豫防	五二五
計	二府十六縣	三六、九四六

◉**害蟲標本出品受賞者**　去四月十五日褒賞授與式を擧行されたる大阪府農會主催病蟲害展覽會の、第二部蟲害に關する出品點數は二百四十一點、其人員五十八人の由なりしが、今受賞者の氏名を掲ぐれば左の如し。

一等賞金牌　螟蟲驅除成蹟　南河內郡農會、同　北河內郡農會

二等賞銀牌　貝殼蟲標本　服部松之丞、昆蟲標本　藤戸作治郎、害蟲標本　由比昌太郎、

三等賞銅牌　昆蟲標本　青柳才次郎、同　島津製作所、同　井上藤太郎、同　揖斐郡昆蟲學會、同　高知縣農學校、捕蟲網　市村鹿三、昆蟲正圖　東成郡農會、

四等賞々狀　害蟲數へ歌　門脇嘉治馬、莖切鎌　吉野寅之助、除草兼注油器　堀內市松、誘蛾燈　堀江專治、輕便注油器　松浪定吉

注油器　川崎爲吉、莖切鎌　千賀鐵吉、昆蟲標本　福井克雄、改頁苗代成蹟　吹田村農會、昆蟲標本　豊福正、同　泉北郡農會。

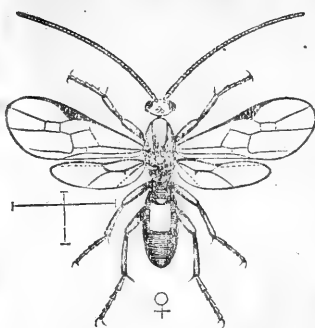
◉**姫蜂科に於ける一新屬**　先年當昆蟲研究所より、膜翅目の專門家、アスミード氏に送りたる寄生蜂中に、新屬のありしとて、今回同氏より通信ありたり。それは櫟の蛅蟖に寄生するものにして、圖に示す如き小蜂なり、氏は之にナワイア、ヤポニカと命名せりと云ふ。尙氏の著に係る印刷物を贈られたるが、恐く蜂に關するものゝみよして、之を積み上ぐれば高さ五六寸あり、實に感服の外なし、今同氏の書狀を譯載すれば左の如し。

久しく昆蟲世界を御送附下され候御厚意を謝し奉り候、一部分さは申せ、透逸なる圖につきて感佩仕り候、エコノミック、アッソセーション（經濟會）の最近の會の節、小生は貴下を其會員に推薦仕り候處、正しく公認せられ申候、米國にて小生共は、日本にて貴下

が昆蟲學の爲に盡され候、有益なる事業を承認仕り候、而して永久繼續せられん事を希望仕候、又我々の關係が、理學上又は人性の上に、有益の結果を生ずべき事を希望仕候、今日小生は、貴下に別刷の一部を郵送仕り候、重に分類的のものに候へども、貴下の研究所に御用立下され度候、小生は只今日本の膜翅類の、完全なる記錄を、準備致せる事を御喜び下され度候、そは重に貴下の採集品及千八百九十三年シカゴ博覽會後、ナショナル、ミウゼアムに送られたる、箕作博士の寄贈品又ケーベル、ルーミス氏の日本に於ける貴重なる採集品に基つき申候、此著述は最も完全にして、日本にて知られたる總ての膜翅類の記載を含有仕候、其種は四乃至五百

新屬寄生蜂の一種

♀

種の間に御座候、新種は重に小膜翅類にして、卵蜂科、フシ蜂科、小バチ科、及びヒメバチ科の中に御座候、ヒメバチ科中のバウキニ亞科(Tribe Bauchini)中に最も面白き新屬を發見仕り候、それにつき、小生は貴下の名譽の爲めに、ナワイア(Nawaia)屬と命じ候、尙其全き名を擧ぐればナワイア、ジヤポニカ、アスミード(Nawaia japonica, Ashmead)に御座候、それは四十七のレツテルあるものに御座候、昨年ハーワード氏に送られたる、標本の名稱目錄は、近日貴下に送附せらるべく候、貴下若し他の膜翅類にして、未だ名稱を附せざるもの御所持に候はゞ、番號を附して御送附下され度候、近日結果を告ぐべき、日本膜翅類に於ける小生の事業として、直に名稱を報ずべく候、小生は此夏出版すべく希望仕候、若し御望も候はゞ、交換として名稱を附せられたる標本を御送り仕るべく候。

アスミード拜

◉**蟲賣**　讀賣新聞に、渡世のいろ〳〵を詳記せらるゝ內、左の蟲賣の一項あれば茲に載す。但し河鹿の記載ありしも、是は昆蟲にあらざれば省き置きぬ。

△問屋　蟲賣の問屋は、淺草區上平右衛門町の須山、下谷區徒町一丁目山崎の二軒にて、問屋は諸蟲を何處より仕入するかと云ふに其多くは四谷信濃町十一番地川澄武吉が製養の鈴蟲松蟲を仕入するなり。又自然發生の物も採集して之を賣れど、自然物の出づる頃には蟲屋の販路が末となるより、多くは人造物を賣るを例とす。自然物の鈴蟲松蟲等は、東京附近なれば、八王子附近の山々より採收すと云ふ。

△取引　凡て現金にして、取引の繁忙なるは六月下旬より盆前後なり。利益は蟲に依りて異なれど、胡瓜南瓜等の餌に金を費すを以て、大約五六分位に止まり、蟲の死する時は損失と知るべく、又た鳴聲の善惡により卸直に高下を生すれば、豫め鳴聲を聞き分け上中下と別ち置き、さて小賣へ卸すなり。籠も上等物より下等物まで一切備へありて小賣へ卸す例なるが、鈴蟲松蟲等の籠は上等八九圓以下二三錢まであり、螢籠も一錢以上四五十錢までありて、問屋の利益は平均約一割餘あり。併して營業期間は僅か三ヶ月位なれ

ば其餘は例の片商賣する事と知るべし。

△小賣商　と云へば行商する者が大部分を占め、店賣するは僅少にて、地方より入來る行商と市中の流し賣とを合せば人員五六百人あり、房總邊の漁師も夏季は此行商となるもの尠からずと。其荷拵には二種ありて、一を高荷と云ひ一を五呂荷と云ふ。高荷となれば諸附屬品を合して三四十圓を要せど、五呂荷なれば十四五圓以下二三圓にても出來、高荷は仕入金も蟲と籠とを合せて五十圓より百圓以上も要す、五呂荷は四五圓にて仕入らるゝなり。利益は籠三割餘、蟲も亦同じ位となり、毎年行商に出る者には得意ありて、紳士等の宅へ賣れば流賣よりは高價にて、利益も五割餘ありと云ふ。但其仕入は皆現金なる事論なく、賣口よきは松蟲、鈴蟲、螢、蟋蟀、轡蟲(俗にガチャ〳〵)等。さて能く捌く行商なれば日に五、六圓の賣揚あれど、雨天と風の吹く時は商賣に出られず、結局一ケ月間にて行商に出るは半ケ月と見ば大差なく、平均三圓も賣る者は上等の部なり。

◉キリウジの發生　本年は、各縣何處も該蟲の發生せざるなく、其損害も亦尠少からざりしが如し。而して去五月中官報に於て發生報告の見えたりしは、左の各所なりき。

埼玉縣南埼玉郡　北葛飾郡、北埼玉郡　熊本縣飽詫郡　宇土郡　愛知縣愛知郡　丹羽郡　海東郡、三重縣桑名郡、靜岡縣濱名郡　磐田郡等

◉第十六回全國害蟲驅除講習會の開期　豫て前號に豫報し置きし同會は、愈々來る八月一日より十四日迄、二週間と決定せり、就ては今回は夏期休暇中にもあれば、既に諸方より續々申込あるにより、假令申込期限は七月二十日なりと雖も、會場の設備等なき爲、定員に滿つる時は、謝絶さるゝ事あるべければ、志望者は此際至急申込まるべし。尚詳細は廣告欄にあれば就て見られよ。

◉ボワース氏の來所　米人スポッツウード、デー、ボワース氏外二名は、去一日當昆蟲研究所に來り、名和所長に面談の後、昆蟲陳列館を一覽せられたり。同氏は、嚮に北米シカゴ、並に佛國巴里の萬國博覽會に於ける、當所出品の昆蟲標本を親しく熟覽せられたる由なるが、今回の渡航につき、是非一度訪はんものをと、立寄られたりといふ。

◉日本產泡吹蟲科出版　札幌農學校紀要第二卷第一號に於て、松村松年氏は、邦產泡吹蟲科八屬二十四種を、獨文にて記載せられたるが、其中十四種は新種に屬し、尚靜岡縣岡田忠男氏より寄贈の一種は新屬なりといふ。

◉松村氏の旅行　松村松年氏は、浮塵子調査の爲、本月八日頃北海道を出發、琉球地方へ旅行さるゝ由、通信に見えたり。

◉害蟲視察員の派遣　昨今、各地より續々農商務省へ宛て、害蟲發生の報告到るを以て、不日本省及び農事試驗場の技師を派遣し、實況を視察せしむる筈なりと。

◉岐阜縣昆蟲學會記事　同會第五十四回例會は、本月六日午後一時より、當昆蟲研究所内に於て開會せり。當日は農事繁忙の時期なれば、郡部よりの出席者は殆ど無かりし爲、僅十六七名の小數なれども、皆熱心家のみにして、中々有益なる談話もありたり。即ち例に據り、名和副會頭の開會の辭に次て第一席小森省作氏の春日谷地方昆蟲採集旅行談、第二席大橋由太郎氏の糸引葉捲蟲の調査に就て、第三席中井藤助氏の鳳蝶に就ての實驗談、第四席渡邊樵四平氏の螟蟲調査に就て、第五席大垣中學校教諭森字多司氏の蟲媒花植物に就ての實驗談、第六席名和靖氏の實飯郡昆蟲展覽會に就ての講話等ありしが、皆多くは實物を以て說明し、熱心に研究の後、午后五時閉會を告げたり。

◉水曜昆蟲會　當研究所員の催しに係る水曜昆蟲會は、前號報告後、例により、毎水曜日午後七時より、當昆蟲研究所内に開會せしが、其講演者と談話の重なるものを擧ぐれば左の如し。

小森省作氏の小灰蝶科の分類、春日谷昆蟲採集談、弄蝶科の分類に就て、高橋喜男氏の紋白蝶の飼育談、柳橋昇氏のアカコカモドキに就て、蚊の話、螢の幼蟲及蛹の標本製作法等、大橋由太郎氏の螢の誤認、ヒラタアブの食蟲數、中井藤助氏の岐阜蝶の分布、飛驒地方の昆蟲方言、飛驒地方の迷信及螢歌、鳳蝶幼蟲の蛹化準備に就て、渡邊樵四平氏の甲蟲標本製作法、杉の害蟲に就て、螟蟲調査談、可兒郡地方昆蟲採集談、名和愛吉氏の螢に就て、江州地方採集談、ホシハマキムシ採集談、ジヤコウアゲハ蝶の飼育談、森宗太郎氏の蚜蟲に就て、貝殼蟲と氣候との關係、エンドノザウムシに就て、蚜蟲の繁殖力等、石田和三郎氏の蚜蟲驅除試驗成績談、夜中採集談、晝間稍密採集談等なりしが、何れも皆實驗談にて、質問應答の間に、知らず〳〵興味と利益とを得普通の昆蟲談とは大に趣を異にし、時としては時鐘十二を耳にして閉會することもありたりき。

◉昆蟲標本陳列館の參觀人　昨五月中に、當昆蟲研究所常設の昆蟲標本陳列館を參觀せし人員は、總計三千五百十九人にして、其内最も多かりしは、二十四日に於ける二百五十五人にして、最も少なかりしは、三十日に於ける二十三人にて、毎日平均百三十八人弱に當り。其重なる人々は、千葉縣伯爵堀田正倫氏は家令及び同家の農事試驗場主任を從へ、其他米人スミス氏を始め、各府縣の實業家、勸業當局者、敎育家等ありき。（雜報、六月十二日脫稿）

◎新案教育用昆蟲標本　壹組拾貳箱

一、分類標本　壹箱

一、自然淘汰標本　五箱

○保護色○擬態○警戒色及誘惑色○自己防禦○生存競爭

一、雌雄淘汰標本　貳箱

一、益蟲標本　壹箱

一、解体標本　壹箱

一、俗説と迷信に就ての昆蟲標本　壹箱

該標本は、高等小學校、高等女學校、農學校、尋常中學校等の理科と參酌して製作せしものなり。從て害蟲標本の如きも、普通農作物害蟲標本とは大に其趣きを異にせり。而して一品毎に説明を附しあれば、假令初學者と雖も、一目して昆蟲界に於ける自然の妙理を會得するを得ん。

右標本は、壹組十二箱を以て完成せりと雖も、其中、一箱ヅヽ御望の節は、新案教育用昆蟲標本中の何々と明記ありたし。

◎箱挿式昆蟲標本

甲號　價一組ニ付き金四圓
乙號　同　金參圓
丙號　同　金貳圓
一組二十枚　但遞送費は別

右は實物寫生用の昆蟲標本にして、初等教育、中等教育何れにも適用すべき好標本なり。製法堅牢なるを以て、又幼稚園或は家庭に於ける玩具ともすれば、不知不識の間に、理科思想を養成することを得るなり。

●農作物害蟲標本　壹組（桐箱入解説附）（金四圓五拾錢）

●農作物益蟲標本　壹組（桐箱入解説附）（金參圓五拾錢）

●教育用昆蟲標本　壹組（桐箱入解説附）（金四圓五拾錢）

●自然淘汰標本　壹組（桐箱入解説附）（金五圓五拾錢）

●雌雄淘汰標本　壹組（桐箱入解説附）（金五圓五拾錢）

●氣候變形標本　壹組（金四圓）

（壹組の荷造費金貳拾錢小包料は參拾錢）

●昆蟲發育標本　各種

●山林園藝害蟲標本　各種

●昆蟲學研究用書籍及び器具一式

明治三十六年六月

名和昆蟲研究所會計部

◎害蟲圖解の刊行に就き

此害蟲圖解は、本邦産有害蟲種の大要を、何人にも理解し易からしめんがため當昆蟲研究所の一事業として、數年續刊し來れるものにて、既に府縣の各級農會より諸學校、警察署、郡衙等に備附られしもの甚だ多く、或地方の如きは之を小學校の教授用に充てしも有之候、然るに近來これと類似のものを出版して當昆蟲研究所の名を騙り、若くは同一の名稱を附して、是は害蟲圖解を更に放大圖に製せしものなりなど言觸らし、其僞版同樣乃ものを販賣する者有之哉にも相聞へ候間、愛讀者は此際十分御注意相成度候。

◎害蟲圖解既刊の分廣告

●第一。桑樹害蟲エダシャクトリ(枝尺蠖)(三版)
●第三。稻の害蟲イネノズヰムシ(二化生螟蟲)
●第五。稻の害蟲イチモジセセリ(苞蟲又葉捲蟲)
●第七。桑樹害蟲シンムシ(心蟲)
●第九。茶樹及果樹害蟲ミノムシ(避債蟲)
●第十一。桑樹害蟲クハカミキリ(桑天牛)
●第十三。桑樹害蟲イトヒキハマキムシ(糸引葉捲蟲)
●第十五。馬鈴薯及茄子の害蟲テントウムシダマシ(擬瓢蟲)
●第十七。桑樹害蟲キンケムシ(金條毛蟲)
●第十九。桑樹害蟲クハケムシ(桑蛄蟖)

●第二。桑樹害蟲トゲシャクトリ(刺尺蠖)(再版)
●第四。煙草害蟲タバコノアヲムシ(煙草螟蛉)
●第六。桑樹害蟲ヒメゾウムシ(姫象鼻蟲)
●第八。稻の害蟲イネノアヲムシ(稻螟蟲)
●第十。豌豆害蟲ヱンドノキリムシ(夜盜蟲又地蠶)
●第十二。稻の害蟲ツマグロヨコバヒ(褄黒横蚊又浮塵子)
●第十四。茶樹害蟲チャケムシ(茶蛄蟖)
●第十六。稻と麥の害蟲キリウジガガンボ(切蛆蚊姥)
●第十八。桑樹害蟲アヲハマキムシ(青色葉捲蟲)
●第二十。稻の害蟲フタホシズヰムシ(三化生螟蟲)

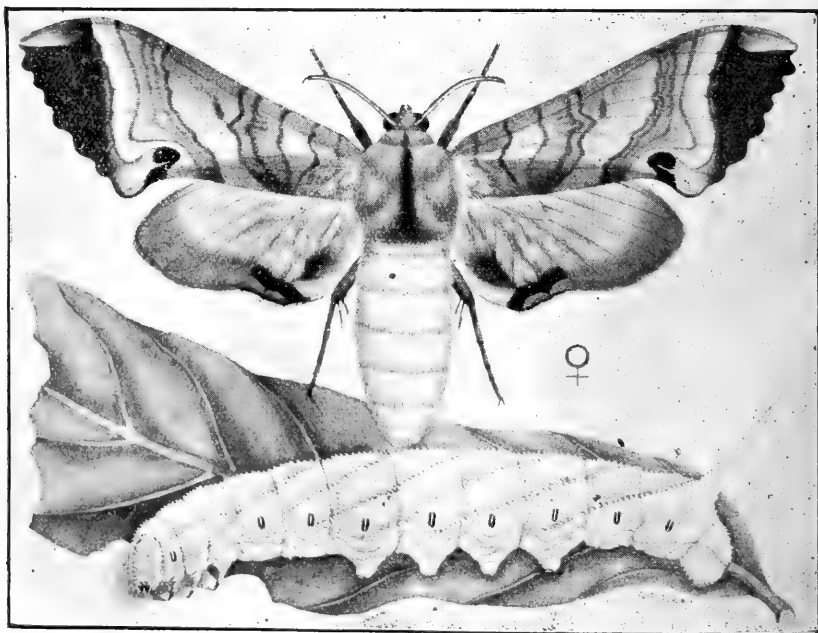
定價壹枚金拾五錢　郵税貳錢　百枚以上一纏壹枚拾錢の割郵税百枚に付貳拾錢

●第十九。桑樹の害蟲クハケムシ(桑蛄蟖)(昨年八月新刊)
●第二十。稻の害蟲フタホシズヰムシ(三化生螟蟲)(同十一月新刊)

Marumba Complacens Walker. (Momo-suzume)

By. K, Nagano.

Forewings brownish ochreous; dorsal and marginal parts dark purplish; three brownish curved fasciae; a dark lunate discal spot; a black spot near anal angle. Hindwings rose-colour, brownish posteriorly; two black spots at anal angle, sometimes connected altogether. Expanse 87–100mm. Head and thorax brownish lilacine, with indistinct dark central stripe; abdomen brownish lilacine.

Kiusiu, Shikoku, Honsiu, Yezo; 5. 6. 7. Larva pale green or yellowish, white dotted; on 1–3 seg. a yellow or brownish longitudinal lateral stripe; on 3–11 seg. a series of yellow or brownish oblique lateral stripes: on Prunus percica, P. pseudo-cerasus, etc.; 7. 8. 9.

（明治三十年九月十日内務省許可）
（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

◎昆蟲世界愛讀諸君に敬白す

雜誌「昆蟲世界」の義は、假ひ御注文有之候とも、前金にあらざれば、發送致さざる規定に有之候處從來の厚誼上、前金相切れ候時は、其旨を朱書の上、特別に御扱ひ致し候ひしに、往々却つて意外の御取扱ひに相成る向も有之候故、以後は不得止發送を見合はせ可申候、依て封書に前金切れのしるし相附し發送致候場合には御不用なれば其趣き御一報願上度、若し御通知無きに於ては、舊の如く御購讀相成るものと見做し可申候間、豫め御承知置願上候

六月十日　　名和昆蟲研究所會計部

◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條に依り晴雨に關はらず、毎月第一土曜日午後一時より、岐阜市京町名和昆蟲研究所内に於て開く、本會員は不及申、何人も毎會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所内　岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會本年中の日並は左の如し

第五十五回月次會（七月四日）
第五十六回月次會（八月一日）
第五十七回月次會（九月五日）
第五十八回月次會（十月三日）
第五十九回月次會（十一月七日）
第六十回月次會（十二月五日）

◉名和昆蟲研究所案内

：市境界
‖案内道
｜市道
イ研究所
ロ陳列舘
ハ縣廳
ニ中學校
ホ病院
ヘ郵便局
ト西別院
チ公園
リ長良川
ヌ金華山
ル停車場

當昆蟲研究所の位置は上圖の如くにて停車場よりは僅に十餘町養蟲室あり又新築の岐阜縣物産館構内には常設の昆蟲標本陳列館（五間に十八間）ありて標本器具數千点を陳列す有志諸君の來訪を俟つ

岐阜縣岐阜市京町　名和昆蟲研究所

◉本誌定價並廣告料

壹部郵税共金拾錢（見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す）
壹年分拾貳部郵税共金壹圓八錢

（注意）本誌は總て前金に非れば發送せず◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす◉爲替拂渡局は岐阜郵便局

廣告料五號活字二十二字詰一行に付金拾貳錢三十行以上一行に付き金拾錢とす

明治三十六年六月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二
（岐阜縣岐阜市京町）

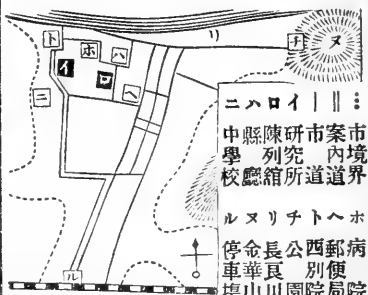
發行所　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二
發行者　名和梅吉

同縣揖斐郡鶯村大字公鄕三番戶
編輯者　小森省作

同縣安八郡大垣町字郭百五十三番戶
印刷者　河田貞城

（大垣　西濃印刷株式會社印刷）

Vol.VII. JULY. 15TH, 1903. No.7.

（七月十五日發行）

THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE.

EDITED BY Y. NAWA.
GIFU, JAPAN.

（毎月一回十五日發行）

昆蟲世界

（第七卷第七册）　第七拾一號

（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

目次　（禁[illegible]）

（明治三十六年七月十五日發行）

PUBLISHED BY THE NAWA'S ENTOMOLOGICAL LABORATORY IN GIFU, JAPAN.

◉寄贈物件受領公告

一金拾五圓也　岐阜縣揖斐郡昆蟲學會

一金參圓也　在横濱　ルーミス君

一昆蟲標本アマノジヤク・ハマダラカ等數十頭　在大阪　田中芳男君

一蜚蠊四頭　京都府　山崎久藏君

一昆蟲標本數十種　岐阜縣　鹽田健藏君

一天蛾類其他廿余頭　靜岡縣　神村直三郎君

一紅斑天牛一頭　愛知縣寶飯郡國府高等小學校

一紅斑天牛并に天牛一種　同縣同郡御油尋常高等小學校

一蝶模様付夏帽子。蟬形竹製花生。大分新聞。蚊針。蝶形襟止。　大分縣　岩田秀太郎君

一昆蟲標本數十種　千葉縣　大竹義道君

一誘蛾燈火口ブリキ製一個　岐阜縣　森宇多司君

一蟲入人造琥珀二個

一實用昆蟲學

一農用昆蟲學教科書

一第五回內國勸業博覽會出品物說明書

一本邦產浮塵子第一集

一肉叉蚊第二回報告　}　東京市　小貫信太郎君

一第五回內國勸業博覽會堺水族館圖解　在臺灣　木下嘉七郎君

一除蟲御札(南都興福寺)說明付(水捿昆蟲記事掲載)　在堺市　藤田政勝君

一淡路新聞(三化生螟蟲記事)　三重縣　西岡喜十郎君

一酒田新聞(昆蟲記事)　兵庫縣　廣田孫爹君

　　秋田縣　寫樫明治郎君

一人物にバッタ繪畫印刷　山形縣　齋藤作兵衛君

一實物寫生(昆蟲)十枚　愛知縣寶飯郡一ノ宮高等小學校

一實物寫生(昆蟲)四枚　同　國府高等小學校

一實物寫生(昆蟲)二枚　同　國府第一尋常小學校

一實物寫生(昆蟲)三枚　同　赤坂高等小學校

右寄贈相成候に付茲に芳名を掲げて其厚意を謝す

明治三十六年七月十日

名和昆蟲研究所

◉昆蟲世界購讀紹介者芳名

兵庫縣　三枝角太郎君　(貳名)

大分縣　小野覺太郎君　(貳名)

靜岡縣　神村直三郎君　(壹名)

愛媛縣　顯浦次男君　(壹名)

岐阜縣　小森省作君　(壹名)

第十六回全國害蟲驅除講習會員募集

開期(自八月一日 至同月十四日)二週間　定員(四十名)

全國害蟲驅除講習會は、回は一回と同志の歡迎を受け、既に前回迄に、三府四十一縣の出身者約八百名の有爲なる修業生を出せり依りて此際益々斯學の奮興を期せんことを欲し、又應募者の便を圖り、來る八月一日を以て第十六回の開講式を擧げんとす。斯學に志あるの士は、速に其手續を經由せられよ、倘今回の講習には左記條々の利益あるべしと信ず。

一、開會の季節は、諸學校、官衙の夏季休業中なるを以て、公務に從事せらるゝ士は好都合なる事。

一、今回は教授科目に改正を加へ、更に有用にして實行に適切なる方法に賴る事。

一、時恰も害蟲發生の季節なれは、實地に臨み研究の利あること

一、當昆蟲研究所々藏の昆蟲標本を觀覽に供するを以て、見學に多大の益あること。

倘申込期限を**七月二十日以前**と定むと雖も、當所の都合により、隨時入會を謝絶することあるべし。規則書入用の向は郵券二錢添へ至急照會あれ、直に同送すべし。

明治三十六年六月

岐阜市京町　名和昆蟲研究所

◉昆蟲分布調査材料募集

○鞘翅目。瓢蟲の部。

○鱗翅目。蝶の部、天蛾の部。

○脈翅目。擬蜻蛚、薄翅蜻蛉、長角蜻蛉の部。

○有吻目。水棲の部、蟬の部。

○直翅目。蟷螂の部、竹節蟲の部、蜚蠊の部。

○擬脈翅目。蜻蛉の部。

右今回寫生圖出來分布調査用紙に納めたれば最早何時にても調査の上記入に差支なければ各地同志の諸君續々標本御寄贈あらんとを望む

○アブラ　ムシ(蜚蠊又は滑蟲)の標本

右特別分布調査材料として同志の寄贈を望む

岐阜市京町　名和昆蟲研究所

有吻目水棲類各種

◎水棲有吻目十一種に就て（第七版圖參着）

名和昆蟲研究所長　名和靖

目下當所所藏の、有吻目異翅亞目水棲類に屬するものは、僅々十一種に過ぎざるも、悉く食肉性なれば養魚家の大害蟲として排斥せらる。然れども、水田中にありて、他の害蟲類を捕食するを以て、有益蟲と稱することあり。本年三月、當所より內國勸業博覽會附屬水族館に對し、ガムシ、ゲンゴラウムシを始め、コオヒムシ、トンバウの幼蟲などの水棲昆蟲二十餘種數百頭を送付せしが、同館在勤の藤田政勝氏より、屢々水棲昆蟲の動靜に就き報導ありしを以て、其概要を本誌に掲載し、讀者に眞相を照會せしが、今後大に研究するの必要あるを信じ、有吻目に屬する水棲類に就て記述することゝなしぬ。

（一）ユリメハナスヒ(Laccotrephes Japonensis, Scott.) は紅娘華科に屬するものにして、雄は体長一寸內外、翅の開張一寸八分、雌は体長一寸三分內外、翅の開張二寸一分を算す。共に腹部の末端に二個の長き革質針狀の附屬物あり。頭小にして、頭頂部隆起し、前胸背は山形をなす。前翅細長くして硬化し、翅端は稍軟く、後方に屈曲す。後翅は前翅に比すれば短濶にして、膜質透明に、見様によりては淡き藤色を呈す。前肢は發達して太く、腿節の基部に近く、一の太き棘狀突起あり。跗節は一の太き爪に化し

他蟲を捕獲するに便なり。中、後肢は細く跗節は一節にして長く、其端に二箇の爪を有す。腹部は扁平にして、背面は中央暗褐色に、其兩側は樺色を呈す。腹面は中央腹端に至るまで、三角形に隆起し、雄は其隆起第四關節に於て狹まり、末端三角形をなす。雌は末端俄に細くなり、針狀をなす。此蟲の水底に靜止するや、竹木の切片に似たるを以て、容易に其所在を知る能はず。他蟲若し之れに近けば、直ちに捕食す。擬態の好標本なり。（第七版圖第一）

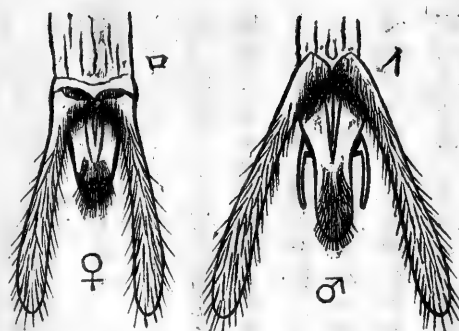
（二）コミヅカマキリ(Ranatra chinensis, Mayr.)は前種と同科に屬し、体長八分乃至九分、翅の開張一寸二三分、躰細長く、腹部の末端には、二個の革質針狀の附屬物あり、複眼圓く、外方に突出し、前翅細長くして、稍硬化し、翅端は半透明をなし、後方に曲る。後翅濶く、膜質透明に、見樣によりて淡き空色を呈す。前肢はカマキリのそれに似て捕獲肢に變じ、雌は腹端に尖りたる產卵器を有す。（第七版第二）

（三）ミヅカマキリ(Ranatra brachyura, Horvath.)は前種と同科に配するものにして、躰軀亦酷似して大なり。雄は体長一寸三分、翅の開張一寸八分、雌は体長一寸五分、翅の開張二寸一分内外を算す。頭小にして、複眼は圓く、外方に突出す。前胸長く延びて、恰も鳥の頸の如し。前翅稍硬化し、先端半透明にして、後方に屈曲す。後翅は膜質透明にして、淡き藤色を帶び短濶なり。腹部五節より成りて細長く、背面の中央縱に黑褐色を帶び、其兩側樺色を呈す。腹面は三角形に隆起し、雌は其末端に針狀の產卵器を有す。前肢は基節長く延び、腿節の中央に棘狀突起あり、蟷螂のそれに似て、水棲なるを以てミヅカマキリの名あり。コミヅカマキリと共に、水中に靜止するや、恰も樹枝の水中にあるが如く、昆蟲眼を以てせざれば、到底其蟲類なるを辨明し難し。擬態の標本として最も適切なるものあり。（第七版圖第三）

（四）タガメムシ（Belostoma deyrollii, Vuillef.）水爬科に屬するものにして、雄は体長一寸八分、雌は二寸三分を算す。躰軀扁平にして、水棲類中最大なるものなり。頭小さく複眼は殆んど三角形をなして外方に突出す。前胸は梯形をなして自由に動き、中、後胸は癒着す。前翅は扇狀をなして硬化し、翅端に半透明の部分あり。後翅は短くして甚だ濶く、乳白色を帶びて膜質なり。三對の脚は太く、中、後肢の內方には、各節共に軟毛を密生す。前肢は其腿節甚しく肥大に、跗節は二節より成り、其先端に太き鈎狀の爪を有し、他蟲を捕獲するに便なり。尾端には二個の薄き板狀の尾樣物あり。上圖は此蟲の卵塊にして、六、七月頃稻莖、其他適宜の草木に產付す。俗にイナゴの卵と稱し、炙りて醬油に浸し喜びて食する地方あり。（第七版圖第四）

タガメムシ卵塊の圖

（五）コオヒムシ（Appasus Japonicus, Vuillef.）は前種と同科に配するものにして、躰長六分乃至七分、頭小さく、複眼殆んど三角形をなす。前翅は稍硬化し、翅端は半透明なり。後翅は膜質にして濶く見樣により淡き空色を呈す。三對の肢は、タガメムシのそれに似たり。躰扁平にして、雄の背上には或る時期に於て卵子を負ふことあり。該蟲に就き、負卵者が雄なるか將た雌なるかは、古來學者間に異說ありて、雌蟲論者ヂムモック氏の如きは、屈撓し易き產卵管を以て、自巳の背上に產附云々の異說をさへ唱へたりしが、ザイタ屬のものは米國スレーター孃の實見によりて、解決を與へられたることは、長野菊次郎氏が本誌前々號學說欄內に記述せられたるが如し。本邦產の負子に就ては、明治七年田中芳男先生の實驗によりて、略ぼ雌雄を區別するの要點を示されしも、尙彼此說を爲し、甲者は負卵者を雄と云へは、乙者は雌なりと主張し、互に讓らざりしが、必竟該蟲の雌雄形態を等しくし、容易に鑑別し難

きを以てなり。若し雌雄鑑別容易ならば、何んぞ爭ふの必要あらんや。故に前號學說欄内に編者が附記せし如く、當所は一見雌雄を鑑別するの方法を知らばやと、之れが剖撿を試みたるに、負卵者が皆雄なることは明あり。今外部より容易く雌雄を區別するの方法を示さんに、鑷子を以て尾端にある尾樣物を引き出せば、雄は(イ)圖に示す如く、中央副器の兩側に革質の突起あれども、雌には(ロ)圖の如く之れを有せず。(第七版圖第五)

コオヒムシ雄雌生殖器の圖
(イ)雄(ロ)雌

イ ♂　ロ ♀

(十八)マツモ ムシ(Notonecta triguttata, Mots.) は松藻蟲科に屬するものにして軀長四分五厘内外、体の背面は船底形に隆起し、水中を倒歩するに適す頭部は灰黄色にして、左右に大なる複眼を有し、前胸灰黄色を帶び、中、后胸部及腹部は黑色を呈す。前翅は扇狀をなし、翅底に沿ふて黄色部あり、後翅は殆んど三角形をなし、膜質にして見樣により淡き藤色を呈す。前肢短く、後肢は長くして、其脛節及跗節の内方には軟毛を密生す。水中にあるや常に腹面を上にして游泳す。其狀バッテラを漕ぐに似たるを以て、バッテラムシの稱あり。(第七版圖第六「イ」は其卵)

(十九)コ マツモ ムシ(Anisops seutllaris, Bittbg.) は前種と同科に屬し、軀形亦前種に酷似して小さく軀長二分二三厘を算す、複眼は大にして殆んど頭の大部を占む。前胸背は黄色にして、中胸背は暗褐色に、菱狀部の周圍黄褐色を帶ぶ。后胸は長くして、腹部と共に暗褐色を呈す。二双の翅は透明にして、前翅は稍硬化し、後翅は見樣によりて淡き空色を呈す。后肢の脛節、跗節の内方に軟毛を密生し、水中

にあるや、常に腹面を上に、背面を下方にして游泳するは、前種に異ならず。（第七版圖第七）

（八）ミヅムシ（Corisus sp?）は水蟲科に屬し、躰軀長楕圓形にして、躰長三分六七厘あり、頭部弓形に、三角形の複眼を有す。前翅は稍硬化し、黒色素地に黄色の微小なる紋を一面に散布す。後翅は濶く透明にして、見樣により淡き空色を呈す。中肢は細くして、最も長く、後肢は扁平に、游泳浮沈に適す（第七版圖第八）

（九）コミヅムシ（Corisus substriata, Uhler,）は前種と同科に隷するものにして、体形前種に似て小さく、二分内外を算す。頭は横に長く、弓形をなし、前胸背には多くの黒色横線あり。前翅は黒色素地に黄色の小紋を一面に散布せるは前種に等しく、一見濃灰色をなす。後翅は濶く、淡き藤色を呈す。此の蟲は水中に在るや、中肢を以て枝葉等に附着して靜止す。若し其物体の大小、蟲の數により、比重水より輕くなるときは、忽ち物体と共に上昇し、水面に浮ぶ。此時蟲は驚き、物体を放ち、後肢を動かして水底に達し、又中肢を以て物体に附着す。今或る器中に水を盛り、一定の枝葉を入れ、此の蟲を放ては、常に前の運動を繼續す。其狀恰も風船の上昇するに似たるを以て、風船蟲の名あり。夜中燈火を慕ひ、誘蛾燈に集ることあり、形の浮塵子に似たるを以て、往々浮塵子と誤ふることあり。風船蟲に就ては、本誌第二卷第九號口繪に其實況を描出し、同論説欄内に詳細ある記事を掲げたれば、茲に詳述せず。（第七版圖第九）

（十）ヒメミヅムシ（Gn? sp?）は躰長八、九厘、形態前種に似たれども、稍圓く、同科に屬す。頭横に長く、前翅は灰黄素地に黒條を有し、翅底に近く黄色部あり、后翅は淡き藤色をなす。（第七版圖第十）

（十一）ナベブタムシ（Gn? sp?）は水棲類に屬すれども、未だ何科に隷するものあるや明かならず。

雄は体長三分幅二分二厘、雌は躰長三分三厘、幅二分五厘、扁平にして殆んど鍋蓋狀をなすを以て、ナベブタムシの俗稱あり。頭は形龜のそれに似たれども黄褐色を呈し、長き口吻を有し他蟲を刺殺す。雌は其体黄褐色素地に黒褐色の斑紋を散在し、雄は殆んど黒褐色にして稍黄褐色の斑點を有す。体の邊縁各關節毎に尖りて鋸齒狀をなし、三對の肢は黄褐色にして後肢最も長く、前翅は退化したる圓形の小さき翅を存ずれども、飛翔の用をなさず。後翅は之れを欠く、余は明治二十九年十二月三日、之れを當市の小川に採集したれども、餘り多くを見ず。該蟲に就きては、本誌第五十五號雜錄欄内に於て、長野縣小山海太郎氏のものせられたるものあれば就て見らるべし。(第七版圖第十一)

◎第一回岐阜縣昆蟲分布調査 (一)

名和昆蟲研究所助手 分布調査主任 小森省作

昆蟲分布調査の必要なることは、學者既に定論ありて、玆に喋々を要せずと雖も、乃も之をなさゞるは何の理由の存するなるか。斯學に於ける如何に之を窮明せんと欲すと雖も、之が分布の明瞭せざる限りは、其根源を尋ぬること能はず。特に應用昆蟲學に於て、其必要の多大なるを認む。即ち農作上より謂へば、何れの蟲種は、何地に於て蠶食を恣にし、何種の蟲種は、何地に於て天然驅除者たるやも、詳知すること能はざるは、實に遺憾の至りにして、分布調査を忽諸に附せし結果に外ならずと雖も、又之を調査せんとするものゝなきは、畢竟斯種の調査は事頗る多難の業にして、到底個人の企て及ぶ所に非ざるに歸因せずんばあらず。

當昆蟲研究所に於ては、常に意を之に注ぎ、以て此の大業を成さんと劃策する既に數年、又た岐阜縣昆蟲學會は、事を永遠に期し、縣下に於ける調査を遂げんと、昨三十五年より着手し、今や第一回の調査

を終りたれば、同會は、其の一部を割きて第五回内國勸業博覽會に出品せり。余は、今是等調査の方法と、其結果を報し、尙漸次本邦全般に及ぼさんとす。されど素より斯種の調査は、前陳の如く容易の業に非ずして、多數の翼賛と、幾數年の勞苦を積まざれば、成効を期し難き次第なれば、此際、特に斯學の爲、當所及岐阜縣昆蟲學會の事業を援けて、以て數多の標品を採集寄贈せられんことを、切望して止まざるなり。

調査の方法、　調査の方法は、各地より送附し來るものある毎に、一々封入したる三角紙より、之を蟲針に移し、各目各科に配して大別を加へ、後種屬を小分し、而して標本に缺くべからざる諸要素たる、採集上の記號より員數等に至るまで、之を原簿に登載し、假令一種一品と雖も、必ず精確明細を記せり又調査表には、一郡の獲たる所、一種十頭以下なるものに、其員數を記し、其以上の採集品には、多と記入して多少の概況をも明にし、別表には、各學校毎に、其採品の最も完全にして、且明瞭なるもの一名を擇びて、略說を附し、以て異日の考證に備へり。斯くして編製を終へたる時は、蟲種に隨ひて、之を分布調査用縣地圖に設色し、一見直ちに蟲種の分布を知り得、併せて植物の分布を想定し得せしむるの順序を立てたり。而して岐阜縣昆蟲學會が、他日の考證に備へん爲、如何に苦心せるかは、既に述べたる所によりて明なりと雖も、茲にアゲハノテフに就き、分布調査原簿に記入の例を示して、斯種の事業を興さんと欲するもの丶參考に供せんとす。

アゲハノテフ (Papilio xuthus, L.)

郡市名	採集地名	同場所	同年月日	校名	兒童學年別	採集人名
岐阜	岐阜市	蜜柑樹	三五、八、三〇	岐阜高女	—	中島ひろ
稻葉	—	—	—	鏡島尋	—	—

同	鏡島村	畑	同	八、一五	精華尋高	不一	小野末吉
同	長良村	寺	同	八、一八	長良尋高	高三	安藤隆一
羽島	福壽村	畑	同	九、二〇	竹ヶ鼻尋高	不三	淺野謙司
同	足近村	花	同	九、一一	足近尋	尋二	水谷秀雄
同	松枝村	宅地	同	九、〇八	松枝尋	尋三	高橋まつゐ
同	福壽村	蜜柑畑	同	九、〇八	福壽尋	尋四	安田愛之助
同	｜	｜		｜	笠松尋高	｜	｜
海津	今尾町	宅地	同	九、二一	今尾尋高	不三	谷英吾
養老	ヒロハタ村	畑	同	九、二四	高田尋高	高四	西脇貫一
同	時村	宅地	同	九、〇三	時尋高	尋四	服部貞吉
同	小畑	畑	同	九、二七	小畑尋	尋四	日比勝二
同	上多度村	畑	同	九、〇二	上多度尋	尋四	田中謙
同	下多度村	宅地	同	八、三〇	下多度尋高	高二	安部三知
同	池邊村	宅地	同	九、一一	池邊尋	尋二	片山善次郎
不破	垂井町	宅地	同	九、〇四	垂井尋高	尋三	古山捨吉
同	青墓村	田	同	九、一二	青墓尋高	高二	北野金造
同	關ヶ原村	畑	同	九、一三	關ヶ原尋高	尋四	高木兼太郎
安八	〇	〇	〇		〇	〇	〇
揖斐	大和村	｜	同	九、一〇	大和尋	尋四	林きん
同	小島村	原野	同	九、一二	小島尋高	高一	内田鍵太郎
本巣	網代村	畑	同	八、二六	網代尋	尋三	早川ちよの
同	網代村	畑	同	八、〇四	一色尋高	高四	溝口桐之
山縣	梅原村	山椒ノ木	同	八、一五	大森高	高一	若井繁二
武儀	上麻生村	豆畑	同	九、〇二	本郷尋	尋一	柴山泰吾
同	板取村	畑	同	九、一二	保杏尋	尋一	野村喜三郎

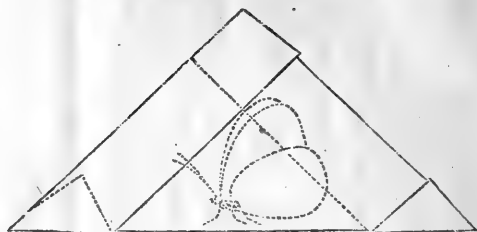
同	乙狩村	畑	同	九、一一	上牧尋高	不三	兒山長作
郡上	上保村	道	同	九、一	上保尋高	高二	曾我八十八
加茂	黑川村	田	同	九、一五	黑川中尋高	尋四	藤井磯一郎
同	久田見村	原野	同	九、一九	櫃野尋	尋二	中島利一
同	太田町	畑	同	九、一五	太田尋高	尋二	渡邊しず
可兒	姫治村	畑	同	九、二〇	下切尋	尋三	高田れい
土岐	鶴里村	庭	同	九、六	柿野尋	尋四	水野桂次
同	多治見町	山	同	九、二一	多治見尋高	高一	小川三郎
惠那	坂本村	山	同	九、五	千旦林尋	尋一	林新六
同	本郷村	山	同	九、一三	阿木尋高	高一	西尾汎資
同	—	—	—	—	川上尋	—	—
同	三郷村	畑	同	八、二〇	佐々良木尋高	尋三	度會喜藏
同	三郷村	畑	同	九、二〇	野井尋	尋四	不川しな
同	吉田村	山	同	九、一五	吉田尋高	尋四	和田さら
同	本郷村	野	同	九、九	巖邑尋高	高一	伊藤福三郎
同	坂本村	山	同	八、二九	茄子川尋高	尋二	西尾友吉
同	大井町	學校	同	九、一	大井尋高	尋二	梅澤役
大野	—	—	—	—	—	—	—
益田	—	—	—	—	—	—	—
吉城	—	—	—	—	—	—	—

調査材料　昆蟲の分布は、植物の分布に伴ひ、植物の分布は、其土地の温度に伴ふものなれば、本邦に於ける、北地と南地とは、大に蟲種を異にせるのみならず、山地と低地、海濱と平野に於ける、又大に差異を生せり。随て、岐阜縣に於ても、飛騨國を始め、惠那、武儀、郡上の如き山地に屬する地方と

羽島、海津の如き平坦部とは、自ら其趣を異にせり。特に飛驒國に於ける地方は、奧羽及北海道地方のそれに類似し、クジャクテフの如き、ヒメシロテフの如き、ヒメシヾミテフの如き、エゾゼミの如き其他天牛、金龜子、葛上亭長、椿象等の或種の如き、是等は山地に產するものなりと雖も、又斯る奇品に富めるは、分布調査の艱難を、聊か慰撫すべきものにして、斯種調査の必要を益々感せしむるに至る。而して、山林原野より、田畝海濱の間に涉り、斯く廣く是等が蟲種を網羅せんとせば、勢ひ區域を擴大ならしめ、隨て又頗る多難に屬す。故に、當所に於ては、從來諸氏が分布調査材料として、或は質問の故を以て贈られし品種等は、假令一蟲一翅と雖も、皆鄭重に分布調査用保存箱底に收藏しあり、然りと雖も、是等は廣き斯界に向て、九牛の一毛だに當らざる程のものなれば、愈々是より諸氏の力を藉らざるべからざる所以なり。

岐阜縣昆蟲學會に於ては、前陳の如く採集をして洽く廣からしめんが爲、籍を會員に置くものは勿論、更に縣下各小學校に依賴し、昨年第一回の採集を行はしめしに、之に應諾して採品を送附せし校數は二百十六に達し、蟲種約一千、總數二萬餘頭を算せり。是れ偶然の結果の如きも、理科思想發展の一策として、各校競ふて學童を勸奬せしに依るならんと信ず。今參考の爲、各小學校に發送の依賴狀に添へ、當時頒布せし小學兒童昆蟲採集注意の要項を揭載すれば左の如し。

小學校兒童昆蟲採集注意の要項　一、採集月日は採集したる當日を記入する事。一、採集地名は採集したる町村名及字名を記入する事。一、採集すべき區域は其校の學區內に限る事。一、採集場所の項には山川田畑林野池沼等を區別して記入する事。一、幼蟲類は今回の調査に不必要に付添加せざること。一、學校名は校名を記入し若し尋常小學校なれば高等の二字を消し高第小學校なれば尋常の二字を消す事。一、尋(高)第年の欄は一學年より四學年迄を區別して記入する事、但尋(高)は前項に仍り加除する事。一、郡とある欄には郡名を、氏名の欄には採集したる兒童の氏名を記するこさ。一、記入方は總て明瞭なるを要するは勿論なれども可成兒童をして手記せしむる事。但他人に於て代書するも妨なし。一、採收の昆蟲は九月末日を以て到着期限とし其以前に必ず送附せらるべき事。一、採

集せし標本は長方形に切りたる紙片を三角形に折りて一々第一圖に示すが如くに包み其内へ第二圖大の小札を一包、に一枚づゝ容るゝ事。一、標本郵送の場合は成べく堅固なる容器を用ゐ表面に博物標本の四字及び第四種郵便物の六字を朱書して開き封さするときは重量三十匁毎に郵税貳錢を要するのみなれば成るべく其体裁とせられたき事。一、紙箱の容器を用ゆる時は途中にて破損し種類を鑑別し能はざることも往々之あれば深く注意ありたき事。

第一圖

第二圖

尋常 高等 小學校
尋(高)第　學年
氏名
郡

明治卅五年　月　日
採集地名　町 村字
採集場所

尙、玆に調査の結果を發表するに先ち、其材料を贈與せられし岐阜縣下二百十六校の校名を掲げ、岐阜縣昆蟲學會に代りて、其勞を謝せんとす。但し、送付せられし標本中には、校名に尋常高等の區別明記なかりし者もありたれば、或は高等小學の尋常小學となりしもの、或は尋常小學校なるに尋常高等併置となり居るも保し難し。尙又、第一回調査結了後に到着せし分は、今回の調査に入らざるものあらん、或は又數校一纏に混同せしめて送附せられし所もありたれば、是等の中には、記載漏れとなり居るも計り難し、然しながら調査原簿には、一品毎に精細なる調査を加へしものあれば、確に登錄せる事を斷言す。讀者之を諒せよ。尙特に玆に遺憾とする一事は、安八郡に於ける、唯一品の送附もなかりし事にして、是等は止むを得ざる事情の存せしによるならんも、實に惜むべき事にこそ。(尋は尋常小學校、高は高等小學校、尋高は尋常高等併置と知るべし)

(岐阜市)岐阜高等女學校、(稻葉郡)三里尋、更木同、則武同、厚見同、且格尋高、鏡島尋、岩田同、芥見尋高、精華同、長良同、佐波尋、前宮同、(羽島郡)上羽栗尋、竹ヶ鼻尋高、足近尋、博文尋高、松枝尋、福壽同、柳津同、笠松尋高、上中島同、敬格同、笠田同、江吉良

尋、八神同、（海津郡）西江尋、今尾尋高、（養老郡）下多度尋高、上多度尋、池邊同、小畑同、時尋高、牧田同、日吉尋高、高田同（不破郡）垂井尋高、宮代同、青墓同、今須同、關ヶ原同、府中同、關ヶ原野上分校、（揖斐郡）大和尋、小島尋高、養基尋、霧同、一大野尋高、豊木尋、西郡同、（本巣郡）本田尋高、綱代尋、横屋同、呂久同、一色尋高、彈正尋、牛牧同、席田尋高、土貴野尋、西郷同、（山縣郡）大森尋、保戸島同、山縣尋高、葛原尋、（武儀郡）神洞尋、神淵尋高、富野同、片知尋、岩佐同、本郷同、池尻同、一上牧尋高、保杏尋、下有知尋高、長瀬尋、岩本同、上有知尋高、立花尋、下ノ保尋高、蕨生尋、中有知同、（郡上郡）山田尋高、和良尋、上保尋高、八幡同、（加茂郡）黒川中尋高、黒川東尋、蜂屋尋高、来眞尋、櫃野同、西田原尋高、酒倉同、迫間尋、上川邊同下佐見尋高、上米田同、福地同、飯地尋、八百津尋高、越原南尋、川邊尋高、中盛同、平尋、大平同、上佐見尋高、黒川西尋、富田同、古井尋高、鹿塩尋、太田尋高、大平賀尋、甘屋同、（可兒郡）帷子尋高、伊香尋、春里同、大森同、中華高、錦織尋、上之郷尋高、下切尋、（土岐郡）下石尋高、柿野尋、妻木尋高、濃南高、細野尋、益見同、白倉同、萩原尋高、曽木尋、多治見尋高、餘戸高、小里尋高、（惠那郡）吉田尋高、巖邑同、明知同、杉野尋、鶴岡同、椋實同、淺野同、上村尋高、河合尋、瀬戸同、猿爪同、佐々良木尋高、下野尋、串原尋高、水川尋、東方尋高、藤同、久棲同、川上尋、落合尋高、毛呂窪尋、阿木尋高、千旦林同、本郷同茄子川同、中津同、福岡同、大井同、下原田同、野井尋、（大野郡）山田尋、丹生川尋高、大名田尋、大原同、折敷地同、牧ヶ洞尋高、楢谷尋、白井同、大西同、三福寺同、山口同、槻崎同、三之瀬同、巣俣同、高山尋高、竹折尋補、灘尋高、久々野同、（益田郡）東上田尋、夏焼同、久野川同、尾崎尋高、竹原第一尋、竹原第二同、竹原高、宮田尋高、萩原同、中山尋、中切同、西同、川西尋高、朝日尋、下呂尋高、秋神同、小坂同、和佐尋、（吉城郡）荒城尋、金桶同、宇津江同、上寶尋高、長倉尋、漆山同、宮原同、双六同、國府高、稻越尋、林同、三日町同、種藏同、船津尋高、古川同、太江尋、上廣瀬同、蕨柱尋高、

昆蟲分布調査の多難にして、到底數年間に於て、能く結了すべきものに非ざる事は、既に前陳の如し。故に、爰に揭くべきものは、唯第一回蒐集の結果報告とも稱すべきものにして、固より僅々兩三月間の採集に、加ふるに偶然の採品なきを保せざれば、決して之を以て、岐阜全縣下に於ける、昆蟲の分布を想定すべきものにあらざるは、既に讀者も了せらるゝ事と信ず。而して、今茲に報ずべき順序は、昆蟲分類上既に定められたる位置に據らずして、便宜上蝶類の如き大形種より始め、漸次微細のものに及ぼさんとす。

鱗翅目鳳蝶科に屬すべきものにして、目下當昆蟲研究所に所藏せる邦產種は、四屬十七種ありと雖も、今回の採品に加はりしものは九種なりとす。今、之が略說を左に試みん。

（一）キ アゲハ テフ（Papilio machaon, L.） 本種は、鳳蝶科中最も廣き分布を有し、成蟲は三月より十月に亘りて現はる。而して春季に於て發生するものは、形矮小にして色澤淡く、夏季に於て現はる、ものは、形大に、色澤亦濃かなり。是れ所謂氣候變形なるものなり。今回の採集は、昨三十五年八、九の兩月中に於て行はしめしものなれば、採集月日亦多くは此兩月中にありき。之れ第二期發生即ち夏生のもの丶みにして、山林原野より、田圃第宅の間に於て採集せられ、縣下一市十七郡中（安八郡を除く）九郡に及べり。

（二）アゲハ ノ テフ（Papilio xuthus, L.） 本種も、亦最も普通種にして、本邦到る處に產せざるなし。成蟲は前種に等しく、發生の季節により、形狀、色澤を異にせり。即ち春生種は、矮小にして黃色部多く、夏生種は、肥大にして黑色部を增せり。今回全縣下に於て（安八郡を除く）採集せられたり。

（三）カラスバ アゲハ テフ（Papilio bianor, Cramer.） 本種も亦た、氣候變形により、大小と色澤に於て數種の差異あり、本邦各地に產すと雖も、特に山地に多くして、平坦部には稀なり、養老、土岐、惠那、益田、吉城の五郡に於て獲らる。

（四）クロ アゲハ テフ（Papilio demetrius, Cramer.） 本邦普通の種にして、氣候變形により、又大小の差あり、雄蟲は後翅の前緣に、淡黃白色の帶紋あり、雌蟲の後翅裏面に於ける半月形赤紋には、多少の差ありて、往々初學者をして、別種ならんとの感を起さしむることあり、海津、大野、益田、吉城、及び、安八の五郡を除き一市十三郡に於て獲られたり。

（五）ヲナガ アゲハ テフ（Papilio macilentus, Janson.）　此種は、前種に酷似せりと雖も、前後兩翅の共に狹長なると、特に尾の長さを以て、容易に區別し得べし。夏季山間に多く飛翔するも、平坦部には稀なり。今回、養老、惠那の二郡に獲らる。

（六）ジャカウ アゲハ テフ（Papilio alcinous, Klug.）　此種は、氣候變形により、大小を異にせりと雖も又雌雄により、大に色彩を異にせり。而して雄蟲の生活する間は、一種麝香樣の佳香を發するを以て、此の名あり、是れ雌雄淘汰の然らしむる所なりとす。幼蟲は馬兜鈴を食するを以て、堤防等に多し。養老、不破、揖斐、山縣、可兒、惠那の六郡に於て獲らる。

（七）アヲスヂ アゲハ テフ（Papilio sarpedon, L.）　幼蟲は樟科植物を食するを以て、樟樹のある處、何地にても飛翔するを見れども、岐阜縣に於ては、特に山邊に屬する部に多くして、飛翔活潑なり。養老揖斐、本巣、武儀に於て獲らる。

（八）ギフ テフ（Luehdorfia japonica, Leech.）　此種の分布は、始め頗る狹小なりしが、漸次擴張して西は山口縣より、東北は岩手縣に到る殆ど本州の全部に蔓延し、尙各地より、續々分布の報に接するは是れ採集者の周到なる撿索に依るものにして、之より推さば、何種の蟲類と雖も亦撿索の周密を得ば、發生を認めざるの地なきが如し。今回の採品中には二頭ありて一頭は揖斐郡鶯尋常小學校職員が、同郡谷汲村山路に於て三月廿九日に採集せしもの、一頭は惠那郡川上尋常小學校尋常二學年生小縣文吾なるもの、同郡坂下村畑に於て八月二十二日採集せり。是れ大に疑ひを存する處。元來、該蝶は一年一回の發生にして、三月下旬より四月に亘りて現はるゝものなるに、惠那郡に於て採集せしものは八月廿二日なり。是れ即ち疑問の点にして、余は之を川上小學校に照會せしに、左の如き回答ありたり。

本月二十四日附を以て御照會之趣拜承、右につき篤と相調べ申候處、小縣文吾と申す者は尋常二學年に有之候間、何分確乎たる答辯を得る能はず候へども、八月中に採集せしものには相違無之、此段は確乎御答申上候。

之を以て之を見れば、兎も角八月中には採集せしものにして、或は梅、桃等に於ける回咲の如く、氣候の變化により、俄に羽化せしものにはあらざるか、啻に本種のみならず、次に記する日光白蝶の九月十五日に於ける、又粉蝶科に屬するツマキテフの九月二十日の採集に於ける亦同樣の有様を呈せり。

（九）ニツクワウシロテフ（Parnassius citriuarins, Mots.）邦産鳳蝶科中最小なるものにして、後翅の外縁は圓形をなし、外形、色彩、共に粉蝶科に類似す。本種は五月頃羽化するものあるに、武儀郡保杳尋常小學校尋常一學年長屋すさは、板取村畑に於て、九月十五日に採集せりと、是等は大に研究すべき價値あるものにして、或は氣候及食草の如何により、一年二回の發生をなすに至るやも計り難し、大に注意すべきことにこそ。

以上述べたる處の採集數を表出すれば、即ち左の如し。（表中△印は十頭以上のものに限る）

番號	種名	岐阜市	稲葉郡	羽島郡	海津郡	養老郡	不破郡	安八郡	揖斐郡	本巣郡	山縣郡	武儀郡	郡上郡	加茂郡	可兒郡	土岐郡	惠那郡	大野郡	益田郡	吉城郡
一、	キアゲハテフ	—	—	一	—	三	一	○	—	—	—	—	二	—	—	一	八	△	六	七
二、	アゲハノテフ	四	四	△	一	△	六	○	五	八	三	三	一	五	二	△	△	—	—	—
三、	カラスバアゲハテフ	—	—	—	—	一	—	○	—	—	—	—	—	—	—	一	一	—	二	一
四、	クロアゲハテフ	五	二	八	—	△	二	○	二	四	二	九	一	四	二	二	七	—	—	—
五、	チナガアゲハテフ	—	—	—	—	三	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	三	—	—	—
六、	シヤカウアゲハテフ	—	—	—	—	一	一	○	一	—	一	—	—	—	一	—	一	—	—	—
七、	アチスヂアゲハテフ	—	—	—	—	二	—	○	二	二	—	一	—	—	—	—	—	—	—	—
八、	ギフテフ	—	—	—	—	—	—	○	一	—	—	—	—	—	—	—	一	—	—	—

右表によれば、飛驒三郡に於て、キアゲハテフの多數と、カラスバアゲハテフを獲たるのみにして、他に於て多數を獲たるアゲハノテフ、クロアゲハテフ等を獲ざりしは怪しむべく、又他郡に於ても棲息せざるべからざる蟲種にして、玆に確證し得ざるは、採集期の秋季にありしもの多きと、僅一回なりしによれるものならんと信ずれども、是等は、尙今後調査すべき点にして、濫りに加減すべきものに非らざるなり。

九、ニツクワウシロテフ　｜｜｜｜｜｜｜｜○｜｜｜｜一｜｜｜｜｜｜

◎無翅の螢種に就て附臺灣產の螢種　在臺灣臺北僑居　永澤小兵衛

博士渡瀨庄三郎氏の說に依れば、樺太島產の螢は、恰かも英國產のそれの如くに、雌は全く蛆形をなしたゞ雄にのみ翅翼を有せり、我が長崎縣對島國に產するものと、朝鮮種とは、また雌の翅翼を缺けるに似たるも未だ分明ならず、而して沖繩縣產は黃茶色にして、呂宋、南淸等の產は、皆茶褐色を帶べりと余はこの記事を腦底に刻し、渡臺以來、數回採集を行ひしに、端なくも氏が記載以外の事實に遭遇せり臺灣は旣に螢火の旺盛期を過ぎたるも、內地はなほ螢狩の淸興多かるべしを信じ、次に其概要を報道す但、參考に資すべき書册と、文辭推敲の餘暇に乏しくて、頗ぶる不備を免れず、且觀察上、誤脫無きことを保せざれば、それ一に讀者の是正に竢つ所あらんとす。

（一）**無翅の螢の邦稱**　本邦には無翅の螢種無し、隨ひて未だ邦稱無しと雖ども、古來國俗は、その未だ翅翼を備へざる幼蟲を目するに、ウジボタル又はクサボタル等の名を以てしき、而して螢種中、雌に無翅のものありとの說は、近年渡瀨氏等が皷吹の力によりて普知せらるゝに至りたるも、西洋學說の傳播以前は、斯る想像だもなす者無く、早くより支那の博物家及び本草家の唱道せる無翅螢別種說の

如きも、本邦のウジ ボタル即はち幼蟲期のものと同一視せられき。是を以て松岡恕庵、中村惕齋、寺島良安、小野蘭山の諸氏の如きすら、蠲即はち蛆螢を對譯するにツチ ボタル(土螢)の名を以てし、貝原益軒氏は、此蟲の特性に適當せるクサ ボタルの訓を以てせしかども、惜ひかな其意義に於ては明晰を缺けり。次で坂元愼、谷川士清の諸氏また同じくクサ ボタルの稱を用ゐられしが、一は詩經の東山篇の宵行に適て、一は幼蟲の義たる草螢の俗字を以て解釋を與へられき。其他學者間には、種々の説を立てしもありしかど、結局一定するに至らざりしかば、其解釋頗ぶる區々に岐れて、殆んど拾收すべからざるに至れり。貝原氏、坂氏等が蛆螢には、またミズ ボタル(水螢)の訓をも施し、水谷豐文氏が其説に左袒せしに徴するも、其一斑を伺ひ知るべきなり。而して此等の衆説を括摠して、當時を代表すべきものを求むれば、唯それ小野氏の説にあるべきか、其略にいはく。

螢蛆はツチ ボタル。ミヅ ボタル(筑前) ムシ ボタル(筑後) ミミヅ ボタル(雲州) 水中に生じ形細長く、翼無くして尾に光あり。三才圖會に、有二一種一、如レ蛆、尾亦帶レ火、但無レ翼不レ飛、名爲二蛆螢一、一名は馬蠲。宵行はクサ ボタル(筑前) これも亦ムシ ボタルと云ふ、形蠶の如く、長さ一寸許、秋夜竹木葉にあり、喉に光あり、三才圖會に又一種如レ蠶、喉下有レ光、如レ螢、謂二之宵行一。

それ斯く支那人の蛆螢を目して、邦俗のウジ ボタル即はち螢の幼蟲となしゝが故に、彼此の記載には互ひに合はぬ節多かりしも敢て怪しむに足らず。例へば、李東璧氏の『螢有二三種一、其小而宵飛、腹下光明、乃茅根所レ化也、呂氏月令、所レ謂腐草化爲レ螢者、是也。長如二蛆蠋一、尾後有レ光、無レ翼不レ飛、乃竹根所レ化也、一名蠲、明堂月令、所謂腐草化爲レ蠲者、是也。水螢、居二水中一、皆感二濕熱氣一、遂變化成レ形』に對して、寺島氏が『蠲はツチ ボタル、俗に云土螢也、田圃溝邊に之あり、翅無くして飛ぶこと能はざ

して光あり』となせるが如し。假ひ支那の舊說には迷誤多かりしとは云へ、本邦の學者が、其種類の異同を辯別せずして、往々附會の說を立てしは、また惜むべき事ならずや。

(二)無翅の螢の記載　邦産の無翅螢種に關しては、渡瀨氏のもの丶他、未だ其說あるを知らず。松村松年氏は、螢科には百二十餘の邦産ありて、ホタル、ヒメボタル、ヲバボタル等之に屬する由を記述せられしかど、簡約觀るに足らざるのみか、猶ほ無翅螢の存在をば認められざりしが如し。而して渡瀨氏は、疑ひを朝鮮種及び對馬産種に置き、遠からず判明すべしと豫斷し、對馬の人平田駒太郎氏また書を名和昆蟲研究所に寄せて、同國には無翅の雌螢を産するも、只纔かに數頭を捕獲せしに止まる、其性貌等は之を渡瀨氏公表の後に讓らんとの趣むきを通告せしやに聞けば、蓋し渡瀨氏の對馬産種に於ける研究は、專ら平田氏の採集に竢つ所あるが如く、平田氏は渡瀨氏に對する德義を守りて、少焉之れを緘默に附するに似たり、是れ本邦に未だ無翅螢に關する記事乏しき所以なるか、去れば對馬産種の習性形貌經過を擧げて之を知るに由無しと雖ども、是れ將た郝懿行氏の記載せられし種類とは、左まで遠ざかれる異品なりとも思はれず。郝氏は李氏と同じく、其雄と雌とを全然別種となせしかど、此類の缺点は、今なほ有がちの事にて、深く咎むるに足らざるのみならず、其有翅と無翅との相違を確認し、又體色、發光等の觀察に非難すべき点無きは、實に敬嘆に堪へざる所なり。氏は曰く『燐、光明也(中略)今驗螢火有二種、一種飛者、形小頭赤、一種無レ翼、形似ニ大蛆一、灰黑色、而腹下火光、大ニ於飛者一』と、即ち朝鮮より我が對馬にかけて分布の種類は、また此一種たるべしと信ぜるあり、而して余が渡臺以來、採集且つ研究の成蹟より云へば、臺灣産種また雄は有翅なるに違はざるも、雌は無翅にして蛆形をなすに似たり。然らば則はち我が版圖內には、少くも二國內には此奇異の種類を産することを知るべし、惜

むらくは、未だ琉球産種を調査するの機會を得ざることを、抑も、螢は爾雅、毛詩の本文に記載せられしのみか、本邦に於ては、紀記の太古史にも擧げられしものあれば、其東洋國民に知られしは、蓋し三千年に下らざるべし、然れば、詩歌にも最とも多く詠まれし中に就て、支那に於ては、約千五百年前に當れる晉代に郭璞の詩あり、本邦には萬葉集にこそ收めざるやう覺ゆれ、千年內外を經たる各種の物語本に、多々之を載せ置ける程あれば、その文士騷人の雅賞に入りしは、必ずしも車胤の故事あるが爲めとも限らぬあるべし、併し乍ら、之を以て化生蟲類の一となしゝは明白の事實にして、今より二百年前までは、誰しも卵生蟲類とは思はざりき、既に之を卵生蟲に加へず、その雄雌に交殖の道を缺けりと信じたるや明らけし、是れ古人が、其の雌雄の區別を粗漫に附し、肯て同種を目するに別種たりとの觀察を加へたる所以なる歟。郭氏が四言の古には、出レ自ニ腐草一、煙若ニ散漂一とあり、堀川百首の大江匡房卿の詠には『五月雨に草の庵は朽れども螢と成ぞ嬉しかりける』などあるは、以て古代に於ける和漢の理科思想を測るべき好資料とこそ言ふべけれ。

（未完）

◎螟卵採收と卵蜂保護に就て

第一回全國害蟲驅除講習修業生　在奈良縣　中野末喜

名和昆蟲翁が、岡田螟蟲採卵法を賞揚し、之を各地に指導せらるるや、螟蟲驅除法は翕然として採卵法に傾き來り、彼の點火誘殺の如き、今や幽幻殆んど見るべからざるに至れり。隨て往時に在ては、諸報告紙上、點火の數を報し、誘殺の額を報するに止まりしもの、今や一變して、採卵數の多きを誇るもののみとなれり。學術の應用が、如何に實業上に大變化を及ぼすかは、實に之を見て知る事を得べし、然るに、余は獨り怪む、各地共採卵の成績は報告せらるゝも、其採卵の結果として幾干の好影響を與へた

るやを詳にせざるを、適々採卵數ょ依り、稻の被害高を算出し、何萬何千圓の利益を收めたる割合なりと稱するものあれども這は果して正當なる計數なるや否や、頗る疑の節なきを得ず、余は數年來、採卵の結果ょ就き觀察を下すを怠たらざるものなるが、山間の部落にして、螟蟲の移轉い比較的容易ならざる地に於て、採卵せる地方と、否ざる地方とを比較するに、兩者被害の輕重なきのみならず、或い却て激甚なるもの往々之れ無きにあらず、奈良縣生駒郡北倭村の如き、實に一村百萬に近きの採卵をなし、一人にして多きは二三万、又一反步より千五百餘の採卵をなせるものありと雖も、其被害は隣村の採卵せざるものと輕重なく、亦長崎縣北高來郡眞津山村の如き、年々數百圓の螟卵買收費を支出すと雖も、今ょ於て尙螟蟲の最大被害地たり、其他各府縣に就き、詳かに採卵の結果を調査すれば、判然其好果を收め得たるを聞くこと少なし、只幾分か少なし、若し採卵せざれば一層甚しかりしならんと云ふに過ぎず、是れ豈に驅除上の一大遺憾にあらずや。

而かも、其源因は深く研究するを要せざるが如し、余は實ょ之を卵蜂保護の至らざるに歸するものありと信ず、名和氏は到る處の講演に、昆蟲相互の關係を詳說し、害蟲の驅除すべきが如く、益蟲の保護せざるべからざるを唱導せらるれども、世間は未だ斯く進步すること能はざるなり、彼等は螟卵ょ益蟲ありと雖も、其益蟲の數や、害蟲の數より少なきを以て、併せて之を殺すも何の不可あらん、無智の百姓何ぞ害益を別つの暇あらんと自認するなり、去れば益蟲保護器ありと雖も、一村二三個乃至五六個を有するに過ぎず、甚しきは全然之を有せずして、直ちょ燒殺するものも亦少からざるが如し、若し果して斯の如くんば、螟卵採收は却て螟害を甚しくするの愚に陷らざるか、余の計算に從へは、螟蟲の產卵は二化螟蟲の第一期にあつて大凡そ五十日に亘る、而して卵蜂の螟蟲に寄生せる割合は、大凡そ五六

割に達し、卵蜂は亦大凡十二三日にして卵より成蟲に化するを以て、螟蟲の一產卵季節中、三回乃至四回化生するを得べし、若し果して四回化生するを得るものとすれば、五割の寄生卵は二十割の寄生卵となるべく、初期の採卵は、却て害蟲に數倍するの益蟲を殺すことゝなるべし、飜つて採卵の實況を見るゝ本田に於て、採卵を行ふものは、極めて少數に屬し、其多數は單ゝ苗代田ゝ於てのみ之を行ふが如し果して然らば、一代の螟蟲に三代四代すべき卵蜂を有するを以て、前記の如く卵蜂寄生の割合は、十五割乃至二十割となり、益蟲保護器なくして採卵せらるゝのは却て採卵せざるものに劣るの現象を映出すべし。螟蟲採卵費に幾千の金額と、多大の勞力とを投じて、未だ其効果を認めざるもの、夫れ之に依るにあらざるか、余は實に益蟲保護器の數は、一村五六個の少數にては、絕對的ゝ不可なりとし、往時の點火器の如く、少くとも一村百以上、一町歩ゝ一個內外の設備を見るに至らずんば、採卵の効果を顯著ならしむる能はざるを信ずるものあり。記して以て大方の敎を仰ぐ。

講話

◎蚜蟲の話

名和昆蟲研究所助手　森　宗太郎

編者云ふ、本篇は當昆蟲研究所員の催しに係る、水曜昆蟲會席上に於て、森助手が講演せられたる談話の大要なり。

蚜蟲は有吻目同翅亞目蚜蟲科に屬し、漢名を蚜蟲、和名をアブラムシと申しまして、アリマキ、アリコ、アブロ、コゴメ、ウンカ抔の方言があります。其種類極めて多く、從て被害の範圍も廣く、殆んど全躰の植物に發生し、其繁殖の旺盛なる爲め、往々作物を枯死せしむることのあるは、既ゝ世人の認むる所であります。斯様に繁殖加害の甚しきより、之が驅除法の質問書を當研究所に寄せらるゝ方が非常に多

く、一々應答の暇なき程であります。故に私は不充分ながら蚜蟲に就て概略を申上げ樣と思ひますが、御參考の一助にも成りますれば幸と存じます。扨蚜蟲は、種類の異なるに從て習性經過の異なるは無論

（イ）は蚜蟲が紫雲英を加害するの狀
（ロ）は無翅の成蟲の放大圖（ハ）は有翅の成蟲の放大圖

のことで、或は若葉を害するもあれば、根を害するもあり、幹に付くものもあれば、蟲癭を造るものもあります。而して蟻の爲めに諸方に輸送さるゝもあり、或る時期に於て翅を生じ飛散するありて、非常に複雜であるから、之れが經過を詳しく調査するは容易の事ではありませぬが、先づ大体の經過は、春夏の頃は無性生殖で胎生をなし、其生れた仔蟲は悉く雌で、大概一週間内外を經れば成蟲となり、又胎生を始めます。漸次斯くの如くして、一年に十乃至三十世代を重ぬるのであります。而して一母蟲の産する數は、少くも五六十頭多きは五六百頭でありますが、今假に一雌蟲が三十頭産むとしても、十世代に至れば、五百三十五兆四千二百七十九億三千万余頭の勘定となるが、實際に於ては、中々是れ位なものでない。或る學者は、一頭の蚜蟲の一ヶ年間に繁殖することは、世界總人員の重量に等しと云はれたが、實にさもあらうと思はれます、乍然、幸に氣候の制裁やら、天敵の爲めに征伐せられて、右の如き繁殖は見ないけれども、素と繁殖の甚しきものであるから、折角驅除し盡したりと思ふも、數日を經ば又以前に異ならず繁殖し居るから、天より降りしか、地より湧きしかの疑ひを起すのは無理ならぬ事であります。然し繁殖力より考ふれば、何も不思議な事はないので、寧當然の事であります。岐阜縣本巣郡地方は、農家の重要肥料として大切なる紫雲英の産地でありますが、此紫雲英が蚜蟲の爲め著しく害を受け、年によりては半作にも充たんことがあります。上圖の（イ）は蚜蟲が紫雲英を加害するの狀、（ロ）は無翅の成蟲、

（ハ）は有翅の成蟲を畫いたのであります。斯く若芽の處に居て養液を吸收致しますから、紫雲英は大に發育を妨げられ、時としては萎縮するのでありますが、本年は餘程害が少なかつた樣であります。私は本年五月十三日紫雲英の蚜蟲を採集して、一頭を別に飼育致しましたが、其產仔數は表の如く、

月日	仔蟲數	溫度	天候	月日	仔蟲數	溫度	天候
五、一四	八	六三	晴	五、一九	一二	六七	曇
五、一五	八	六二	晴	五、二〇	八	六五	曇
五、一六	九	六七	晴	五、二一	一二	六七	晴
五、一七	一〇	六六	曇	五、二二	一三	六七	晴
五、一八	一一	六五	曇	五、二三	一四	六八	曇

合計十間日に、一母蟲が（毎日一母蟲を殘し、產仔蟲は悉く他に移せしを以て、百〇五頭の數は全く一母蟲の產みしものなり）百〇五頭を產みました。又別に一雌蟲を飼育箱に入れ、五月十四日より三十一日迄十八日間、其儘にして置きましたに、無翅蟲六百四十二頭とありました。此他有翅蟲が無翅蟲よりも多い樣にありましたが、これは或る用務の爲めに、調査漏となりましたのは殘念でありました。此の結果によれば、僅か十日間に、一母蟲の產仔數百四頭でありまして、一世代の內には少くも二三百頭產むのであります。先に計算した五百三十五兆億萬の頭數は、僅か其一割程の小數として計算したのであるが、實際に於ては、實に算盤の持てる樣なものではありませぬ。故に驅除の困難なるは、大低想像が出來ませう、況や田圃一面に繁殖して、作物も萎縮する樣に成つてから周章る方が多いですが、斯くなりし上の驅除は、容易な事ではありませぬから、最初發生の未だ少ない中ちに驅除するのが肝要であります。これは蚜蟲に限らず、如何なる害蟲を驅除するにも、此の心掛が無くてはなりませぬ。さすれば驅除が容易で、奏効確實、加ふるに作物の生育上莫大の利益がある、所謂一擧三德とも申しませう。藥劑驅除としては、石油乳劑の三十倍位の稀薄液を、噴霧器を以て一面に注射すれば最も効があります。

◎螟蟲驅除の一方法

岐阜縣稻葉郡　森島勘次郎

編者云ふ、去六月六日第五十四回岐阜縣昆蟲學會月次會の節、森島氏は差支ありて出席出來ざりて、斷り狀に添へ朗讀文を贈られたり。そは即ち本篇にして、中には參考に資すべき節あれば茲に掲載する事となしぬ。

追々螟蟲蛾の發生時季に近きましたが、何卒して本年は害蟲を充分に驅除豫防して、十二分の收穫秋を

迎へんとを希望致ます。私は螟蟲驅除に就ては一錢の費用を要せず、又少しの勞力をも要せずして、螟蟲を驅除し得る方法を發見しました。夫れは何かと云ふと、お互が毎夜用ふる處の洋燈の直下三寸乃至五寸の處よ、饂飩鉢位の器に水を盛り、其中に少量の石油を入れ置くのであります。而すれば農家の二階には、昨年收穫した藁が堆積しある、其莖中に越冬したる螟蟲の、羽化して田圃の稻葉に産卵せんとて飛出づるものは、洋燈の火光を慕ひて、其近邊を飛廻り、終に水中に陷り死すること妙であります。而も此の方法は別に誘蛾燈を用ふるに非らずして、常よ毎夜用ふる洋燈の下に、一器を置く手數のみよて、其傍に讀書をなし、又は夜業を成し乍ら、多くの害蟲を採集し得られます。私が昨年此方法にて七月九日、十日の兩夜よ於て採集しました結果は、螟蟲蛾六百二十二頭、螟蛉蛾七頭、浮塵子六頭、金龜子一頭、ハムシ二頭、ゴミムシ一頭でありましたが、僅か二日間の實驗なれども、螟蟲蛾實に六百廿二頭を獲ることが出來ました。若し之れを六月下旬より、七月中旬頃まで毎夜斯樣に爲したならば、實に大變の螟蟲蛾を獲ることが出來ませう。又之れを一村一郡共同して此方法を用ひ、尙採卵法よ注意したならば、恐らく螟蟲は一年よして取り盡すことが出來ようと思ひます。然しながら、名和先生の言よよれば、屋外の誘蛾燈に集まる處の螟蛾は殆んど雄にして、雌蛾は一小部分よ過ぎない、而も產卵後の蛾が多いとの事でありましたから、私は疑ひを存し、去る卅四年七月試驗しましたよ、果して其言に違はぞ、家内にて燈下に陷るもの雌雄相半ばするよも係はらず、屋外にては甚だ少くありました。其試驗の結果は、其當時の昆蟲世界よ掲載してありますから、御覽よなれば能く分りますが。諸君に於ても御實驗あらんことを希望致します。

◎螟蟲驅防奬勵展覽會準備記事（第一）

蟲の家主人

（一）螟蟲驅防奬勵展覽會準備記事を設るの理由　本誌前號に於て昆蟲翁の隨感隨筆中に、螟蟲に關す

る博覽會と題し、本邦の一大害蟲に對しては、大に調査するの必要あるより、少くとも展覽會を開きて、各地方の長所を集め以て此强敵を驅防せばやとの說あるより、各地方の讀者よりは、實際に展覽會を開設するは第二とし、先づ第一に其準備として、螟蟲に關する件は新舊を問はず、あらゆる記事を本誌に掲載せんことを、續々希望せらるゝの向あるを以て、直に其意を了し、螟蟲驅防奬勵展覽會準備記事と題して、每號多少に拘らず記載することに確定せしかば、大方の諸君、願くば續々御出品、否御報告あらんことを望む。

(二)農事月報中の螟蟲記事　內務省勸農局に於て出版せられたる、農事月報第一號(明治十一年二月)を見るに、鳴門義民稻螟蟲驅除實驗說と題して、靑森縣津輕郡に於ける稻田蟲害の慘狀より、螟蟲の卵幼蟲、蛹、成蟲の着色圖を挿入して說明し、其他驅除の方法等に至る迄詳記せられたり紙數廿一頁。同報第七號(十二年九月)には、東京、大阪、靑森、秋田、岩手、茨城、和歌山、三重、靜岡、島根、兵庫廣島、福岡、熊本、長崎、鹿兒島、滋賀の二府十五縣下に於ける、螟蟲被害の情況より、驅除の方法を記し、尙該蟲被害の分布圖をも加へらる紙數五十頁。尙又同報第十三號(十四年十二月)には、靑森、岐阜、福島、長崎、熊本、島根、開拓(今の北海道)の六縣一使に於ける、螟蟲被害の情況より、驅除の方法を記せり。又ダマ油注入の實況を、挿圖を以て明示し、尙明治十二年幷に十三年に於ける、螟蟲被害地名一覽表あり紙數廿二頁。

(三)螟蟲圖解　此ものは農商務省農務局藏版(明治十六年十二月刊行)にして、練木喜三氏の撰述なり。掛軸躰の一枚ものにて、中央に着色被害稻を畫き、卵塊の附着したる所より、幼蟲及び蛹の莖中に潜伏する狀態、幷に成蟲即ち螟蛾の飛揚の有樣を示せり。尙放大圖を以て、四形躰(卵塊、幼蟲、蛹、成蟲)を現はし、驅除器械をも示したるに依り、一目して螟蟲の何ものたることを知るに足り、且つ簡單なる說明をも加へたれば、一讀直に驅除の方法を了解し得べし、而して茲に可笑しきは、幼蟲幷に成蟲を見るに、二化生螟蟲に屬するも、卵塊を見れば三化生螟蟲のそれにた似り、恐らく誤りならんと信ず。

(四)福岡縣の螟蟲驅除豫防法　河島福岡知事には、本年五月十日幷に十四日、縣令第三十、卅一號、及び訓令第廿六、七號を以て、螟蟲驅除豫防の方法を示せり、之を左に記さん。

(縣令第三十號)三潴、山門、三池、八女四郡、久留米市、三井郡の內上津荒村、國分村。稻田畑に螟蟲蔓延の兆あるを以て、明治廿九年法律第十七號害蟲驅除豫防法第四條、及明治卅一年本縣令第廿號第一條に依り、來る五月廿日より七月廿日迄、苗代田畑及本田畑

に於て、市町村費を以て螟卵螟蛾採集を行ふべきことを命ず。市町村に於ける施行の方法及日割は、郡市長の定むる所に依るべし。

（訓令第廿六號）三潴、八女、山門、三池、三井郡役所、久留米市役所。本年、本縣令第卅號を以て、螟卵螟蛾採集を行ふべきことを、市町村に命じたるに就ては、左の各項に準據して之を行ひ、又は行はしむべし。（一）螟卵螟蛾の採捕は、早稻苗代田畑に於ては二回以上、中稻、晩稻苗代田畑及籾播本田畑の初期（他の苗代田畑ある期間を云ふ）に於ては五回以上、雇人を使用して之を行はしめ且各自をして之を採捕せしめ、移植田及籾播本田畑の後期（移植田とし期間を云ふ）に於ては、各自にのみ採捕せしむべし。其各自をして採捕せしめたる卵又蛾は、市町村費を以て之を買收すべし。但採卵捕蛾に要する雇人の賃銀は、一人毎に、其部は一定の金額を支給し、殘部は採卵捕蛾の數に應じて支給するも妨げなし。（二）卵及蛾の買上價格は、苗代田畑及籾播本田畑の初期に於ては一卵若は一蛾に付金壹厘以上、移植田及籾播本田畑の後期に於ては、五毛以上にて之を定むべし。（三）本令施行に要する市町村害蟲驅除豫防費の豫算は、其市町村内稻田畑反別一町歩に付、金五拾錢以上に當るべき金額を標準とし之を設くべし。

（縣令第卅一號）筑紫、糟屋、宗像、遠賀、鞍手、嘉穗、朝倉、早良、糸島、企救、京都、田川、築上、浮羽、三井郡上津荒木村國分村を除く、門司市、小倉市。稻田畑に螟蟲發生せるを以て、明治廿九年法律第十七號害蟲驅除豫防法第三條、及明治卅一年本縣令第廿號第一條に依り、來る五月廿日より七月廿日迄、左の通り之が驅除豫防を行ふべきことを、稻田畑作人に命ず。但稻田畑作人本令の通り行はざる時は、市町村長は市町村費を以て之を行ひ、其費用を該作人より徴收すべし。（一）苗代田畑及籾播本田畑並移植田に於て螟卵螟蛾驅除を行ふべし。（二）螟卵螟蛾驅除の方法及日割は郡市長の定むる所に依るべし。

（訓令第廿七號）筑紫、糟屋、宗像、遠賀、鞍手、嘉穗、朝倉、早良、糸島、浮羽、三井、企救、京都、田川、築上郡役所、門司、小倉市役所。本年本縣令第卅一號を以て、螟卵螟蛾驅除を行ふべきことを、稻田畑作人に命じたるに就ては、該施行の方法及日割は左の各項に準據し之を定むべし。但其定めたる方法及日割は、郡市長より當廳へ屆出づべし。（一）螟蛾の驅除は点火誘殺又は捕殺の方法に依るべし。点火誘殺法を用ふる時は、其点火數の割合は、苗代田畑壹反步に付三個（百坪未滿は總て壹個）、籾播本田畑及螟蛾產卵前に移植せる本田壹町步に付三個（千坪未滿は總て壹個）以上とすべし。捕殺法を用ふる時は、其施行の度數は、苗代田、籾播本田及移植田共、通じて五回以上の割合にて、其日割を定むべし。（二）螟卵の驅除は、苗代田畑、籾播本田及移植田通じて五回以上の割合にて、其日割を定むへし。（三）螟蛾の捕殺と、螟卵の採集とは、同時に之を行ふも妨げなし。

（五）福岡縣糟屋郡螟蟲驅除費　福岡縣糟屋郡農會に於ける、明治卅六年度經費豫算中、特に螟蟲に關係したる費目を調査したるに、（一）稻螟蟲驅除豫防補助費一千圓とあり、其說明に、町村に於ける螟卵買收及殺蟲燈、雇夫、点火の事業に對し、內五百圓を田畑租金に依り、五百圓を螟卵螟蛾の採集數に依りて、補助額を定む。但螟卵千塊と、螟蛾一合とを以て、補助額算出の單位とす。（二）害蟲驅除法試驗

費十八圓、其説明に、三化生螟卵を一塊に付五厘以內にて買收し、大字佐谷障子岳に於ける、秋季螟蟲の驅除を試驗す。

(六)新農報記載の螟蟲驅除法　大阪市新農報社發行の新農報第五十三號を見るに、螟蟲驅除に關する有益の記事あり、且つ編者の附言をも添へられたれば、今左に是を轉載す。

○螟蟲驅除に關する懸賞　大阪府東成郡農會にては、螟蟲驅除奬勵の爲、卵塊及び被害莖採集者に賞金を付與する事とせり。其方法は、(一)螟蟲卵塊廿塊又は螟蟲の蝕入せる莖二百本に、抽籤券一枚を付與す。(二)抽籤券十枚以上を得たるものには、十枚每に一枚を加付す。(三)抽籤券を有するものには、抽籤法により、左の金額を賞與す。右賞與金額三百卅圓にて、一等拾圓(一箇)、二等五圓(三箇)、三等壹圓(百箇)、四等五拾錢(二百箇)、五等卅錢(三百箇)、等外壹圓(十五箇)あり、此等外と云ふは、最も多數に抽籤券を得たる者、十五名を限り賞與するものゝ由、抽籤券引替期限は、十月十日限りなりと。

○螟蟲卵塊買上の告示(佐賀縣假名文字報)　佐賀縣杵島郡長は、此程管內各町村へ、左の規程に從ひ、螟蟲卵塊を買上ぐべしと布達せり。(一)本年、郡內に於ける、苗代田より採取したる、螟蟲の卵塊は、千個に付金卅錢の割合を以て、金四百五拾圓の額に充つる迄、之が買上を爲す。(二)卵塊買上高、豫算額を超過せんとする時は、郡役所へ卵塊到着の前後に依り、買上をなす。(三)卵塊買上を受けんとするものは、卵塊百個每に一括し、千個を一束とし、其數及び自己の住所氏名を記したる付箋を爲し、左記書式(畧)の請求書と共に、之を摘採地の町村役場に差出すべし。但し小學校生徒にして、敎員引卒の下に採卵したるものは、其學校に於て取纏め、其數及び校名を記し、凡て本條の手續に依り送附すべし。(四)前條に依り括束なさゞるものは、之を受理せず、但し百個未滿の端數は此限りにあらず。

編者(新農報)曰大阪府東成郡と云ひ、佐賀縣杵島郡と云ひ、其方法は異なれりと雖も、其主眼は、螟蟲を驅除せんが爲めに、卵塊の採集に重きを置けるものなり。誘蛾点燈の如き、徒らに金錢と手數を要するに過ぎざる螟蟲驅除法の、年々減少するは喜ぶべきの現象なりとす。

(七)一螟蟲蛾の有する卵數と卵塊數　螟蟲蛾を解剖して、其卵巣を調査するに、蠶蛾と同樣八個の卵囊を有す。又一卵囊中には、凡そ七十乃至八十の卵粒を保てり。故に今一囊七十粒と假定して、八囊に乘する時は五百六十粒と成る、是れ即ち一螟蛾の卵粒を計算するの便法なりとす。又他に於て、稻葉に產附したる卵塊を見るに、一塊少きは三、四十粒より、最も多きは四、五百粒許に達するものあり、故に大抵一蛾の一塊に產卵せしを證し得らるゝも、其多くは、一蛾能く數塊に別ちて產卵し得るものと信ぜらるゝなり。

（八）屋内より飛び出づる螟蟲蛾　農家の屋内には、常に多少の稻藁を貯藏し置くものなれば、自然螟蟲も、屋内に於て越冬す。此もの時期を得ば、蛹化に、次で羽化して田圃に飛び去るなり。然るに此頃水曜昆蟲談話會の席上に於て、助手名和愛吉の話を聞くに、「螟蛾の屋内より飛び出づるは、大概午後七時頃にして、先づ戶口とか壁とかに止り、暫く休止して、後田圃に向ひ飛び去るなり。之れを捕獲するには、戶口等に止まりし時（容易に逃げざるを以て）を以て宜しとす。次に又室内に燈火を点じ置くときは之を慕ひ來る故、此時適當の方法を設けて捕殺するを良しとす」と云へり。尙本誌講話欄内。森島氏の螟蟲驅除の一方法と題する一項を、參照せられんことを希望す。

（九）螟蟲羽化の時期　年々の調査に依れば、第一回の羽化に於て、早きものは四月中旬より、遲きものは七月下旬に到る、實に三月に渡り羽化するを以て、恰も第一回の遲きものと、第二回の早く羽化するものとは、相連絡して、殆んど區別し難きことあれば、是等は驅防上、大に注意を要すべきことなり。現に本年七月上旬の調査に依れば、飼育中の螟蟲、十の二、三は未だ蛹化せざるものあり。

（一〇）小學兒童と螟蟲採卵　螟蟲採卵には、到底老人壯年の不適當にして、寧ろ婦人小兒の適當なることは、最初より幾多の經驗に依りて、明白とする所なり。然るに年は一年と、採卵法の行はるゝと同時に、小學兒童が如何に好成蹟を現はしつゝあるかは、次に示す所の各地新聞紙上の記事に於て證し得ふるゝなり。

（一）小學生徒と害蟲　昨年害蟲發生の砌り、各小學生徒をして、螟蛾及び螟卵の捕集を行はしめ、頗る好成績を得たるを以て、本年も目下害蟲發生の摸樣あれば、便宜上右生徒をして、害蟲捕集方取計はれ度由、昨日下毛郡長は、各學校長へ通牒を發したり。（大分縣中津新報六月十二日）

（二）螟蟲蛾捕獲數　五月廿九日より六月七日までに、大原郡各小學校に於て、螟蛾を捕獲せし數は、二万五千九百五十一にして其卵數は三千三百廿一なりしと。（島根縣松陽新聞六月十二日）

（三）懸賞害蟲驅除　府下豊能郡にては、目下苗代の害蟲驅除法勵行中なるが、頗る好成績を呈し、現に同郡細河村尋常小學校生徒は、螟蟲の卵塊六千餘を採集し、爲に懸賞抽籤券に缺乏を告げ居る由にて、此際尙懸賞券を續出すべしとなり。（大阪每日新聞六月九日）

（四）螟蟲採卵狀況　蒲生郡各町村小學校兒童の螟蟲採卵狀況、其後の分左の如し。

▲櫻川小學校兒童八十人、採卵數六千二百七個、五月卅日より四日間從事▲馬淵小學校、採卵數二千餘個、五月廿一日より六月

三日迄、職員及び三學年以上生徒總て從事▲平田小學校兒童六十二人、採卵數三千百四十五個、五月廿二日より六月三日迄▲南比都佐小學校兒童六十人、採卵數七百廿一個、六月一日三日四日の三日間に於て從事▲老蘇小學校兒童三十九人、採卵數九十個螟蟲蛾數百一匹、五月廿一日より六月四日迄▲岡山小學校、採卵數百八十一個、五月十九日より廿二日迄、尋常四學年及高等生引卒從事▲鏡山小學校兒童百人、採卵數九十七個、六月一日及同三日兩日間▲鎌掛小學校、採卵數百廿個、六月八日迄の採卵數▲苗小學校兒童八十四人、採卵數二千四百八十七個、螟蛾數五百個、五月廿九日及六月四日兩度▲市原小學校兒童三百三十三人採卵數九千九百廿個、外に隨意二千百十一個、五月廿八日より六月五日迄▲金田小學校兒童百八十二人、採卵數二千四百九十三個、五月廿七日より七日間▲上田小學校兒章四十人、採卵數三百六十三個、同上▲淺小井小學校兒童十五人、採卵數六十七個、同上▲玉緒小學校兒童三百十六人、採卵數百四十八個、六月三日より三日間(近江新報六月十七日)

(五)小學生徒の害蟲驅除　一昨十二日、西山梨郡役所に於て開會したる、同郡小學校長會議に於て、小學校生徒をして害蟲驅除を行はしむることを、原案の通り可決したるが、右は明十五日より、毎日授業前後の餘暇を利用して之を實行することゝなし、郡長より各村長へ通達の上、農會長等を同行せしめ、郡役所より河西技手を出張せしむるよし。又右に付き若干の費用を投じて、生徒奬勵法等も行ふことになせしといふ(山梨日日新聞六月十四日)

(六)小學生徒の害蟲採取　宮城郡根白石村にては、本月十日より三日間、小學校生徒五百名をして、苗代田害蟲を採取せしめたる由にて、其結果は、高等科四年六千六百卅九塊、同三年一万三百二塊、同二年一万五千百塊、同一年一万七千九百三十塊、尋常四年六千四百三十六塊、同三年二千四百六十三塊、同二年千六百六十塊、合計六万五百三十塊にして、此奬勵金三拾六圓余は、役場より夫れ〲教員をして、生徒に配與せしめたりき(宮城縣河北新報六月十九日)

◎六足蟲彙纂（午の巻）

在東京　長野菊次郎

(十六)水棲の鱗翅類(其二)　髓蟲科(Pyralidae)に隷するアケンツロップス屬(Acentropus)の幼蟲は鱗翅類中、全く水棲の性を有するものなり。斯る奇性を有すると、又翅鱗の甚だ劣等なるとによりて、此屬は從來久しく毛翅目(Trichoptera)に編入せられたることありき。抑此屬の雄は、往々淺瀬の上に、無數飛翔することを認むることあり、然れど雌は人の目に觸るゝこと甚だ少くして、往々使用に堪へざる位の微小なる翅を有し、殆んど無翅の狀態を呈することあり、斯る雌は交尾の爲めに、水の表面に浮び出で、水中にて交尾す。幼蟲の脚は、普通の鱗翅類と同數にして、尙他の鱗翅類が空中にて、其食を取る

が如く、此類は水中にて植物の葉を食ふものあり。此類は鰓の痕跡だに有せざるに、如何にして水中に呼吸し得るかの方法に至りては、未だ不明に屬すと云へり(ケンブリッヂ博物誌)。

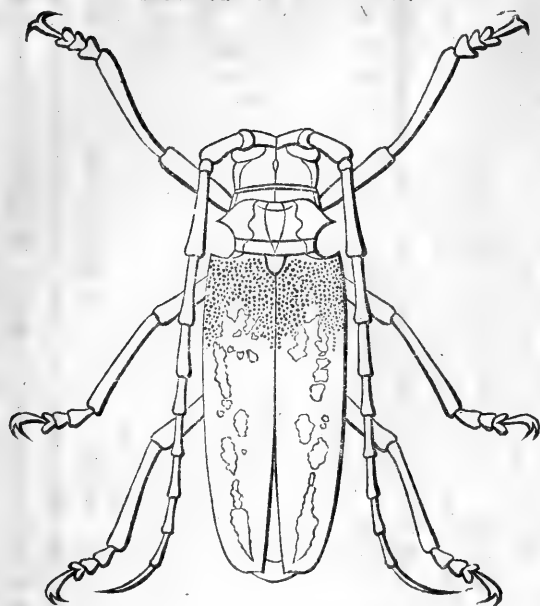
(十七)水棲の鱗翅類(其二)　梅毛蟲蛾科(Lasiocampidae)より、近來分離せられたる、ユープテロチデー科(Eupterotidae)に隷するパルスッラ屬(Palustra)の者にて、南亞米利加に產するものは、其幼蟲、水棲の性を有せり。此幼蟲は總狀の毛を背部に密生し、兩側には長毛を粗生し、躰を捲縮伸長して、水中に游泳するものなり。稀に水面に浮び出づる時は、背毛は全く乾きて側部の毛のみ濡れ、氣孔は甚だ小なるが、其呼吸の方法は未詳なりと云へり。今此蟲を水の外に出すときは、空氣中にても移動することを得、然れども、久しく此狀態を繼續すること能はず。又此幼蟲は奇異なる方法により、水中にて蛹化す即ち最初一疋の蟲が繭を形成するときは、他の蟲は順次來りて是に附加し、終に群繭の塊を生するに至る。此屬の一種は、長き絨毛の間に混じたる空氣を呼吸するならんと信ぜらる。此幼蟲が時々水面に浮び出づることあるは、蓋し新鮮なる空氣と交換せんが爲ならんか、又其短き刷毛狀の毛の先端は、皆膨脹せりとなり。然れども孰れが呼吸に關係あるかは、未だ分明ならずと云へり(ケンブリッヂ博物誌)。

(十八)負子に對するカムストック氏の意見　前々號の學說欄に、カムストック氏の著書を引用して、同氏の負子の負卵に對する意見は、雌蟲論者なりとしたり。然れどもスレーター孃(前號にスラッターと有るはスレーターと訂すべし)の實驗以來、同氏も雄蟲論に首肯せられ、新版のインセクトライフ(昆蟲生活)中には、多分訂正せられたるならんとなり。且又同氏はスレーター孃の記事中、亂暴なる目的を遂げんが爲め、數時間爭ふ云々の語を見て、斯る現象は、交尾の際、昆蟲界に行はるゝ通常の事にして、決して負子にのみ限りたるに非ざれば、餘り文を弄したるものなりとて、大に非難せられたりといへり。尤も米國產のザイタ屬のものは、雌雄の形態殆んど同一なるを以て、外形にては殆んど之を區別することは能はずとなり。以上述ぶる所は、親しくカムストック先生の許にて、斯學を研鑽せられたる、河內忠次郎氏の直接の談話を記したるものなるが、負子に對する余の疑問、否多數の人の疑惑も、內外研究の結果、同一轍に出でたる今日にては、久しく立籠めたりし雲霧を一掃して、光明万丈の天日を覩る思あり。斯學の進步上豈慶賀せざる可けんや。

◎昆蟲に關する隨感隨筆（第二回）

昆蟲翁

（十一）岐阜蝶の新產地　岐阜縣飛驒國益田郡下原村字三原に於て、本年四月二日中井藤助氏採集、又同國吉城郡小鷹利村寺地觀音堂に於て、本年四月十八日後藤幹氏採集、昨年同國大野郡に於て、千原治作氏採集（昆蟲世界第六卷四百六十八頁通信欄參看）されしを以て、飛驒三郡共ょ發生し居ることを確認したり。

（十二）伊吹山採集の昆蟲　本年六月十三、四の兩日間、助手森宗太郎、名和愛吉の兩人、伊吹山に於て昆蟲採集をなせしに、相當の獲物ありたり。今玆に全く標本と成りしものを調査せしょ、膜翅類には、鋸蜂科廿四種七十七頭、姬蜂科三種六頭、胡蜂科二種二頭、蟻科一種二頭。鱗翅類ょは、蛇目蝶科一種一頭、粉蝶科一種一頭、蛺蝶科一種一頭、挵蝶科一種一頭。糖蛾科二種二頭、尺蠖蛾科二種二頭、蠶蛾科一種一頭、葉捲蛾科二種四頭。雙翅類には、喰蚜虻科一種三頭、家蠅科二種二頭、寄生蠅科二種二頭、鼈甲蠅科三種六頭、扮蜂蠅科三種十九頭、食蟲虻科二種六頭。甲翅類ょは、螢科十五種六十五頭、斑蝥科一種九頭、步行蟲科四種七頭、隱翅蟲科三種十頭、瓢蟲科四種十頭、叩頭蟲科三種廿頭、象鼻蟲科八種十一頭、青象鼻蟲科六種八十九頭、金龜子科十一種五十五頭、葉捲象鼻蟲科六種十五頭、葉蟲科廿三種百八十一頭、地膽科一種一頭、天牛科八種十頭。半翅類には、角蟬科一種三頭、浮塵子科九種十三頭、泡吹蟲科四種六頭、食蟲椿象科二種二頭、椿象科五種九頭。羅翅類にれ擧尾蟲科三種十五頭。合計卅七科百八十一種六百九十一頭にして、此內尤も珍種と稱すべきは、天牛科に屬する姬天牛あり。

天牛（カミキリムシ）の圖（眞形）

（十三）普通天牛と姬天牛との比較　昆蟲類中重

量の尤も多ものは、恐らくカブトムシならん夫ニ次ぐものは、天牛（カミキリムシ）即ち天牛科中の代表者たる、普通天牛なり。此ものは誰人も能く知る所なれば、天牛の總名代とありて、單ニカミキリムシと稱すれば、直に該種のことを意味せり又姫天牛（ヒメカミキリムシ）は、カミキリムシに反して、百數十種の天牛中、尤も小形なるものにして、体長漸く三分に達するニ過ぎず、該種は伊吹山に於て稀ニ採集し得る所の珍種と云ふべきなり。

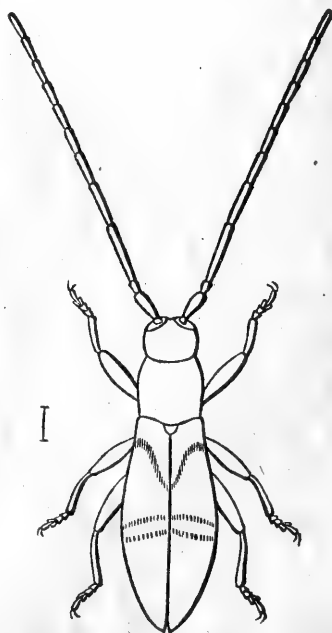
I

姫天牛（ヒメカミキリムシ）の圖（放大）

（十四）美濃國氣象俚諺と昆蟲　　岐阜縣岐阜測候所發行の、美濃國氣象廿年報を見るに、其内に美濃國氣象俚諺と題して、百數十ヶ條を記せり。今昆蟲ニ關するものゝみを左に示さん。

●晴の部　蜻蛉屋内ニ入れば晴天なりと云。赤蜻蛉一處に群集するときは日和なりと云。蟻畠畔の低き所に集合するは晴れと云。●雨の部　蟻穴巣より土を搬出せば將に雨ふらんとするも雨ふらず。蚊の刺し方酷しきは雨の兆なりと云。夜中蠅出るときは雨近し。●風の部　諸蜂巣を土中ニ作る年は風災ありと云。●雜の部　蜂の巣の高ふかけるは風吹かず、ひくふかけるを大風と知れ。冬温暖なるときは翌年蟲類多しと云。

（十五）鼠毒蟲を食せず　　昨卅五年一月始め、岐阜縣本巣郡船木村の高等小學校生徒に依賴して、冬季休業中に於て鵙の刺餌を蒐集せり。其集まりし數實に數百、其内イナゴあり、ガメムシあり、カマキリあり、ケムシあり ツチハンメウ等あり、然るニ是を箱中ニ分類の上保存し置きたるに、豈ニ計らん鼠害に出合ひ、殆んど見るに堪へざるニ到り、如何に悔むも最早致方なし。然しながら玆ニ、不幸中の幸福とも云ふべき面白き事實は、ツチハンメウのみ一も鼠害ニ罹り居らざることを見出したり。是れ元來ツチハンメウには一種劇毒の成分（潑泡劑に使用す）を有するを以て、鼠の食害を免れたるを知れり。

通信

◎博覽會出品害蟲標本解說書

岐阜縣　稻葉郡農會

編者云ふ、岐阜縣稻葉郡農會は、今回第五回內國勸業博覽會に害蟲標本を出品して三等賞牌を受領せしが、今該標本解說書並に沿革史を得たれば茲に掲載して讀者の參考に供す。但し該標本は桑樹の害蟲ヒメザウムシに重きを置けるものなり。

部類	番號	品名	出品人
一八	一	害蟲標本	岐阜縣稻葉郡農會 會長 小幡忠臧

一、製造地　岐阜縣美濃國岐阜市西野町稻葉郡役所內

一、原料　岐阜縣稻葉郡是として調査すべき、農作物害蟲を採集し、之を飼育し以て之に充てたり。

一、製造用品　飼育箱、毒瓶(青酸里加)、アルコール等、其他整理に要する展翅板、名刺用紙、針、ダラカンドゴム、アラビヤゴム、綿、紙及び顯蟲鏡、鋏、ピンセット、吹管等なり保存としてナフタリンを用ふ。

一、製造方法　明治三十四年五月十日、本郡內各岐阜縣害蟲驅除講習修業生に養蟲箱を分與し、各分擔を定め、郡是たる農作物害蟲を採集し、名和昆蟲研究所の養蟲法に倣ひて飼育し、發生經過に番號を附し、其時々標本用に製せり。其方法は、卵は蒸熱し、幼蟲は毒瓶(青酸加里)に投入し、全く死歿したる後、腐敗を防ぐ爲め臟腑を拔き出し、乾燥の上綿或は紙等を以て原形を存するに務めたり。蛹は卵同樣熱殺し、成蟲は展翅板に掛けて適法に調製し、小形の物は、名刺用紙に直接に帖り附け置き、標本製作の際溫湯に浸し、再び之を整理したるものなり。亦植物は、被害當時のもの、或は被害植物を採集し、標本に充てたり。全く整理の末、腐敗及び黴菌豫防の爲め、ナフタリンを適當に挿入したり

一、沿革　創立は、明治三十三年九月五日、稻葉郡農會中に昆蟲研究會を置き、明治三十四年四月第一回全國昆蟲展覽會を岐阜縣に於て開設に際し、裝飾用及び分類並に害蟲標本を出品し賞を受く、明治三十五年二月、岐阜縣冬期昆蟲展覽會に、分類標本並に害蟲各越冬の狀況標本を出品し賞を受く、又事

業としては、明治三十二年、稻葉郡島村桑樹害蟲ヒメゾームシ模範驅除を勵行せんが爲め、郡內の岐阜縣害蟲驅除講習修業生を特派し、村內各要所に模範伐りを爲し驅除に便ならしめ、又同村驅除執行中は監督として巡回説明の勞を取らしめ、大に効を奏せり。而て本郡の模範をして、縣下の模範たらしめんことに務め、漸く完成し、其養蠶期に至り、桑樹生長を助け、且つ桑葉繁茂し、加ふるに伐採に際し、以外に手數を省きたると、伐採跡發芽充分なりし爲め、本縣下一般の模範と爲り、其翌年明治三十三年及三十五年には、本郡を初め、七郡三十有餘町村の驅除實行を見るに至りしは、全く本郡の模範に出しものなり。其詳細は別に添附せる沿革史にあり。

一、効用　壹號はイネノアヲムシ、稻苗代田竝に本田の害蟲にして、發生經過を示し、學理及實地研究材料にして、驅除の適期を悟らしむるに便にして、加ふるに益蟲及間接の害蟲をも添、植物も添附し以て一目瞭然ならしめたり。貳號はイナゴ、苗代田及本田の害蟲にして、表示の如く、發生經過等を明白に解悟せしむるに便せり。參號はイチモジセヽリ、本田の害蟲にして、之に伴ふ寄生蜂、及び寄生蠅即ち益蟲類竝に被害植物も挿入しあれば、見學に極めて利便なり。四號、五號はイネノズイムシ、第一回及第二回の發生經過を示したるものなり。而して該蟲は一年二回の發生を爲し、且つ其繁殖力極めて夥しく、之が驅除の方法に至ては、難易頗る大差あるを以て、其經過中該蟲の弱點、即ち驅除の爲し易き時季を撰ばざるべからず。該標本は卵塊部、被害部及寄生類等をも添へたれば其經過を認むるに適せり。六號は桑樹の害蟲金鮎蟖にして、被害植物、及其經過、竝に現況を表示し、如之ならず、益蟲類二種を添へ、學理研究の應用に便にせり。七號は桑樹の害蟲枝尺蠖、發生經過を表示せしものにして、加ふるに寄生蜂、及寄生蠅を添付しあれば、學理研究上にも大に便あり。八號は桑樹害蟲、鐵砲蟲にして其發生經過、被害の狀を顯し、極めて驅蟲の當を悟り易からしめ、加ふるに寄生類を添へあるを以て、學理研究材料にも、大に効あるは明かなり。九號は桑園の害蟲ヒメゾームシ、發生經過を示し、其被害の狀況を顯し、加ふるに寄生蜂も添付しあれば、研究上最も必要あり。拾號は桑樹の害蟲ヒメゾームシの冬季即ち蟄伏越年の現象を顯し、且つ驅除の實狀を示し、加ふるに器械を挿入し、及其方法を顯しあれば、驅除實行に際し、其奬勵材料として最も効力を有す。

一、褒賞　明治三十四年五月十二日、第一回全國昆蟲展覽會に於て、分類標本は貳等賞、裝飾用標本

は參等賞、害蟲標本は參等賞を受く。明治三十五年二月十一日、岐阜縣冬季昆蟲展覽會に出品し、害蟲標本に對し貳等賞を受く。其他益蟲標本、及分類標本等何れも賞與を受けたり。

一、審査請求の主眼　本會出品物は、本郡中、農產物を損害する最大の害蟲にして、之が驅除の爲すに當り、其害蟲の發生經過を知得するは最も必要なり。故に其發生經過をして、一目瞭然ならしめ、加ふるに敵蟲を添付し、其有益蟲は保護すべき必要を示し、且つ研究上最も必要なる点、幷に標本製作は堅牢にして永く標本たるに適する点等なり。

◎ギフテフ遠江に產す

靜岡縣　神村直三郎

昆蟲の總てに於ては、其食草と氣候の一致ありて、且地續きよかりければ、大概、同種のものを產すると云へることは、學者の是認する所なり。然して我遠江は岐阜と共に同じく本州中央部に位すれば、即ち地續きにして、其氣候、亦大差なければ、岐阜に產するギフテフの遠江に居らざるは、獨り其食草の如何によるものなることは、明ならん。其唯一の食草たる、ウスバサイシンをば、未だ當地に所產を認めずと雖も、其同科のカンアフヒなるものに至ては、所々にこれを見ること珍らしからず、又同蝶の稀に食する(動物學雜誌に其說あり)馬兜鈴の如きも、中遠地方には頗る豐かに產する植物あり。因て吾人を初め、同好の士の、遠江地方に於てギフテフ所產を疑ふや茲に年あり、友人岡田忠男氏は、其鄉里即濱名湖以西に於て、曾つて一頭を採集せられたりしことありとか語られしことありき。去れど、目下同君の所有せらるゝにあらざれば、或は何かの誤にはあらずやと、吾人は半信半疑のうちに、彷徨しつゝありしに、圖らずも本年四月上旬に於て、我中遠の地、然も隣校の生徒のこれを得たりとの報は傳えられたり、隣校とは見付高等小學校にして、同校生徒某通學の途次、磐田原の一部に於て捕獲せられたるなり直に馳せて一見せしに、正しくギフテフなりき。磐田原は見付町より北方秋葉光明の諸山に連れるの高阜にして、カンアフヒに富み馬兜鈴亦少なからず。因て、該蝶は磐田原の產にして、他より移り來りしにはあらざるものなりとの推測を下したり。而して該標本は現に見付高等小學校に在り。以上の事實丈にても、尙且所產の證據となすに足れるを、又一層信憑すべき大發見あり、そを何ぞといふに、同校職員久松、溝口、の兩氏、去る五月三日、附近の原野に於て採集を試みられたるに、偶カンアフヒに產附せられたる卵粒を發見し、これを採集せられ、併せて又同植物に於て幼蟲をも捕へられたり、これを見

るに、又まがひもなきギフテフの卵と幼蟲あり。此幼蟲今久松氏手元に飼育しつゝあり、食草はカンアフヒなり。試に馬兜鈴を與ふるも、好まざるの傾向ありといふ。是は發見及飼育に係る大要なり、以て同蝶が確に予が地方、即靜岡縣の一部なる、中遠地方磐田原に産するの事實を、世に告知するものなり。

◎小學兒童の害蟲驅除成績

岐阜縣揖斐郡鶯尋常小學校　弓削良彌

本校に於ては、年々螟蟲幷に稻螽の卵塊採集を兒童に奬勵して之を實行せしめつゝありしが、本年も亦放課時間、或は土曜日の午後、又は日曜日等に於て、職員自ら兒童を引率し、實地に臨みて採集方法を授け、尋常一學年の幼童に至る迄熱心に驅除せし結果、螟蟲卵塊六万五千四百六十三塊、稻螽卵塊五斗二升一合七勺を獲たり、今之が採卵數を、各學年男女別に記載すれば左表の如し。

●螟蟲卵塊採集表

採卵人員	採卵總數（塊）	一人平均採卵數（塊）	最多採卵數（塊）	最少採卵數（塊）
第一學年男十三人	一六一三	一二四	四二四	四
同　女七人	七三〇	一〇四	三九五	一六
第二學年男十九人	三八四一	二〇二	七一二	三二
同　女十七人	三八一〇	二二四	五二八	三
第三學年男廿二人	七七六六	三五三	一三二〇	三三
同　女二十人	九九六〇	四九八	一八八一	九三
第四學年男卅一人	二一〇七七	六八〇	二五九九	三九
同　女廿一人	八八七八	四二三	一〇〇八	五九
卒業生男女廿一人	七七八八	三七一	一九五七	三一
計　百七十一人	六五四六三	三八三	二五九九	三

●稻螽卵塊採集表

採卵人員	採卵量（合）	一人平均採卵量（合）	最多採卵量（合）	最少採卵量（合）
第一學年男十四人	四八、八	三、五	七、六	一、四
同　女八人	三三、一	四、一	六、七	一、一
第二學年男十人	四三、〇	四、三	一一、〇	一、二
同　女十三人	八五、八	六、六	一六、〇	一、〇
第三學年男六人	五二、四	八、七	二〇、〇	一、〇
同　女十一人	四四、六	四、一	九、〇	一、〇
第四學年男十四人	一五五、五	一一、一	二五、六	二、〇
同　女九人	三一、六	三、四	九、二	〇、六
卒業生男女七人	二七、〇	三、八	九、一	一、〇
計　九十二人	五二一、七	五、七	二五、六	〇、六

備考右螟蟲卵塊は苗代田に於て採集せしもの丶みにして、本田の分は、尙採集中なれば追て報告せんとす。而して是等の驅除は買上法等に據るに非らずして兒童が全く害蟲の恐るべきを識れると、一つは年々筆墨類の學用品を與へて、僅かの奬勵をなせる結果にして經費は僅々五、六圓に過ぎず。

編者云ふ、害除驅除の完全に行はれざるは、其蟲の經過習性を自ら極めずして、徒に巨額の費用を投じ、以て買上法或は奬勵法を行ひ、一時騒ぎ立つるも、宇宙百般の關係に暗き、遂に其効を見ずして中絕し、失敗に歸するものなり、豈歎ずべきの至りならずや。必竟是等は、昆蟲思想の幼稚なるによるとは雖も、亦驅除費を濫用するもの、其一因たらずんばあらず。當村に於ては、年々小額の驅除費を以て成蹟中々見るべきものあり、編者は寧ろ巨額の費用は使ふべし使ふべからずとし、當局者の手腕と、昆蟲思想の發達を促すものなり

◎昆蟲に關する葉書通信（第三十三報）

（一八五）長野縣北安曇郡松川村の蟲送（長野縣、帶刀喜市）　横蚑非常に發生する時は（少々位又は小部落發生ょは行はず）村内一般午后八時より、各松明を持ち、三五人宛組を作り、中には太鼓又ハ石油空鑵等をたゝき、或はヤンヤ〳〵と大聲を發して、田圃の畦畔を順次巡回の後、午后十一時頃、村内の產神に集合して神酒を飲み、以て能事了れりとなす。（六月十七日附）

（一八六）稲作害蟲報告（大分縣南海部郡上堅田村、岩田秀太郎）　本年當地に發生せる重なる稲作害蟲は、下に列記せるが如し。トビイロウンカ、イナヅマヨコバヒ、ツマグロヨコバヒ、クロクサガメムシ、トビイロガメムシ、二化生螟蟲（目下產卵最中）、イナゴ、イネノアヲムシにして、三化生螟蟲は未だ之を認めず。（六月二十三日附）

（一八七）小學兒童の螟蟲採卵二件（岐阜縣山縣郡保戸島村、篠田五郎）　本村小學校兒童は、十日程以前より日々敎員に引率せられ、苗代田の螟卵採集の爲、二時間宛各苗代田を巡採せしに、昨日迄ょ卵塊五万五千餘に達せり。而して丁度本年にて、兒童に採卵せしむる事、五ヶ年に及び、年々好成績を得たりき。（六月二十四日附）

（三重縣一志郡高岡村、喜田川要三郎）　昨年は時季を失せし爲、挿秧前僅々の採卵ょして、隨て多少の害をも被りたれば、本年は早くより之を行ひしに、當村尋常高等小學校兒童の採卵表は左の如し。但一塊に對する賃金五毛。（六月廿六日附）

採卵日數	採卵總數	賃錢	採卵兒童數	一人最多採卵數	一人最少採卵數
日	塊	圓	人	塊	塊
一五	五八七四〇	二九、四〇四	一二七	五八六〇	七

(一八八)昆蟲の分布報告(福岡縣、嶺要一郎)　本年五月廿一日、福岡縣筑後國八女郡矢部村大字北矢部字御側に於て(御前嶽の中腹)ミヤマカラスバアゲハの雌一頭を採集す。同六月二十四日、リョクショクヒャウモン雌雄數頭を、當地及同郡矢努村に於て採集せしが、該種は昨年も同地にて採集せり。當地よ分布せることを、記入せられんことを乞ふ。(六月廿五日附)

(一八九)螟卵買收と幻燈講話(兵庫縣明石郡伊川谷村、井上藤太郎)　本村農會にては、螟卵買收方法を規定し、拾卵塊に對し四厘にて買收中にして、目下買上高は一万五千八十塊に達したり。尙害蟲驅除普及の爲、東京進成社より購入の幻燈種板に、自製の種板數十枚を加へ、大字毎に農會吏員出張して巡回講話中なり。(六月廿六日附)

(一九〇)螢狩の童謡(下總安食町、後藤新左久)　當地方螢狩の童謡は、次に示すが如し。ホータロ、ホータロ、コーイコイ、ホータロムーシャ、コッチヘコウ、オーガムーシャ、アッチイケ、ホータロ、ホータロ、コーイコイ。(螢螢來い來い螢蟲は此方へ來い椿象は彼方へ往け螢螢來い來い)。(六月廿八日附)

(一九一)ナナフシムシに就て(豐前國城野にて矢野宗幹)　明治三十五年八月七日、豐前國英彦山服に於て、エダナヽフシムシ(Lonchdes slomphax)一疋を採集す。躰は赤褐色よして、脊線は美綠色、肢は綠色、躰長七〇ミリ、觸角五三ミリなり。豐前企救郡及び周防山口附近よて、初春多くの仔蟲を見たるも、其成蟲は未だ發見せず、且つ余の標本中よ存せざるが故に報知し難きも、何れ採集の後よ報告致すべし。(六月廿八日附)

(一九二)稻象鼻蟲と黴菌(岐阜縣、原攝祐)　惠那郡坂下村地方は、稻象鼻蟲の發生中々多し、余は去六月廿日一種寄生菌の爲に斃れたるもの一頭を採集し、同廿二日之を健全なる稻象鼻蟲に接種し、瓶中にて飼育せしに、七月二日に至り遂に斃れたり。

編者云、原氏は幾頭につき、如何なる方法を以て試驗せしか、報告簡にして殆んど要了を得ず、或は疑ふ飼育不完全にして、爲に斃れたるには非らずや、望むらくは今后一層の精檢と確報あらんことを。

雜報

◉岐阜縣稻作害蟲驅除監督方法

岐阜縣にては、多數の害蟲驅除監督者が命令するに於て、甲乙相齟齬する如き事あらんを慮り、今回左の如く其方法を定められたり。是等は素より、實地に臨み臨機應變の所置に出でさるべからざるも、其大躰に於て標準を定むるは、最も必要なる事なり。

稻作害蟲驅除監督方法

一、從來農業者が害蟲を驅除するは、他動的に余儀なくせらるゝの感念を持し、農業上の一の作業として行はざる可らざるのものたることを自覺せざるもの多く、隨て充分に除害の目的を達する能はざるの遺憾あり、故に害蟲驅除監督の爲め吏員出張の際は、務めて講話(晝間多忙なるときは夜間に於て)及實地指導を爲し、害蟲驅除は農家が他の耕耘除草と均しく、農事作業の一科目として行ふべきものたるの習慣を養成せんことを圖るべきこと。

二、縣費の補助は、縣下一般に害蟲驅除を施行せば、現今の豫算にては交付すべき額至極僅少なるを以て、一般に補助を出願せざることに諭示すること。

三、害蟲驅除は一町村内又は少くとも一大字内は同日時に施行せしめ、互に奬勵して驅除の完全を期すること。

四、害蟲驅除に關する農家の感念未だ充分に發達せざるを以て、一般に完全なる驅除を施行せんとせば、之れが監督機關を備へざる可らず、依て農家一團の單位には一兩名の監督員を設け、町村役場員、郡役所員等順次之を監督すること。

五、害蟲發生の場合に於て、出張員が指示する驅除豫防の方法は、概ね左記の標準に據り統一を圖ること。

(イ)螟蟲(ズイムシ)　發生の町村に於ては來る七月上旬まで、苗代及本田に於て、凡五日目毎に採卵を行はしむること。七月中旬よりは、螟蟲の蝕入せる稻莖を剪伐せしむること。十月以後は、白穗となりたるものを、稻莖の根部より拔取らしむること。螟蟲は、陸稻にも發生するに付注意のこと。

(ロ)浮塵子(ウンカ)　苗代田に於ては一反歩に一升、本田に於ては凡一升五合の石油を注ぎ、捕蟲器を以て掬殺し、落下するものは斃死せしむること、此場合に於て、落下斃死するものは重に幼蟲なり。發生多きときは、日を距てゝ數回前項の驅除を行ふこと。

(ハ)苞蟲(カジムシ、コウジウ、イチモザセヽリ、ハマクリムシ)　漬殺器等にて拔き上げ、漬殺すること。發生の初期、捕蟲器にて成蟲たるイチモザセヽリを捕殺すること。

(ニ)螟蛉(アヲムシ)　本田にては、一反歩凡二升の割を以て石油を注ぎ、幼蟲を拂下し驅殺すること。苗代にては、捕蟲器にて蛾及幼蟲を掬殺し、又苗を採たる後、水面に浮びたる、苗葉を結べる如き繭を集めて、肥料瓶に投入すること。

六、左の害蟲は、本縣の豫防規則中に規定なしと雖も、發生多き場合には其被害甚しきを以て、驅除豫防の方法を教示し、除害の策を講せしむること。

(ホ)稻蝗(イナゴ)　田面に初めて灌水したるとき、水に浮び風の爲に畦の周圍に集りたる卵塊を捕殺すること。發生夥しく、損害多しと認むるときは、苗代又は本田に於て、捕蟲器にて捕殺すること。

(ヘ)キリウジ　苗代に發生したるときは、水を湛へて幼蟲の畦畔に集まるを俟ち、周圍に小溝を作り再び苗床に侵入を防ぐこと羽化の際、成蟲たるカヽンボを捕殺すること。

(ト)ムクゲムシ　一反歩に八合位の石油を注ぎ、且捕蟲器にて掬殺す、而して其内に入りたるものは之を殺し、落下したる仔蟲は斃死す。苗の未だ短きときは、灌水を深くして苗の沈む程とし、其上に石油を注ぎ拂落すこと。被害甚しきときは、葉先の黄變部より切取ること。

(チ)泥負蟲(ドロハムシ)　捕蟲器を以て掬殺すること。

(リ)稻椿象(イチカメムシ)　早稻の抽穗に當りて群集し、養液を吸集するときは、咽喉附捕蟲器、又は石油を少し入れたる廣口の器中に拂落し驅除すること。

(ヌ)稻象蟲(イチゾウムシ)　捕蟲器にて捕殺するか、又は筍の屑又は皮等の廢物を稻株間に散布し、其集まるを俟ち捕殺すると。

七、最後に注意すべきは、益蟲保護の事なりとす。元來、現時一般の農民に、蟲の害益を區別して、之れを云爲するが如きを望むは頗る困難なりと雖も、平均害蟲の半以上が益蟲の爲に殺さるゝを思へば、漸次益蟲愛護の感念を養ふこと亦必要なるべきを以つて害蟲には之を殺すの敵蟲あり、此の敵蟲は保護すべきものなりとのことを知了せしむるは有要のことなるを以て、講話の序手には併て之を諭示すること。但、爲に害蟲驅除を等閑に付せざる樣注意を要するは勿論とす。

以上の外豌豆、蠶豆等にエンドノキリムシ(夜盜蟲又は軍隊蟲と云ふ)の發生したる時は、溝を設けて其中に落下せしめ驅除すること。

蠶病の蠅蛆發生の機に際しては、蛆を捕殺せしむるを要す。又稻の稻熱病(イモチ)の發生なきを期し難く、且夏秋蠶飼育者の爲には今暫くの後、蠶病消毒施行の必要あるを以て、機會あれば、必要なる所以と、方法を授くること。

◉博覽會出品昆蟲標本受賞者

今回の博覽會に於て、第一部八類、第二部九類、第九部五十類へ出品して、受賞ありし者は左の如し。但し受賞人名錄不備の爲め遺漏なきを保し難ければ、是等は他日更正することにすべし。

岐阜市今泉町

名和靖

昆蟲標本

多年昆蟲ノ採集調査研究ニ從事シ學術及實業上裨益スル事大ナリ特ニ昆蟲研究所ヲ設立シ講習會ヲ開キ生徒ヲ養成シ或ハ地方ニ巡回シ害蟲及益蟲ノ農事ニ及ホス關係ヲ說キ以テ農業ノ改善ヲ授ク其功績著大ナリトス

名譽銀牌

審査官 正五位勳四等理學博士佐々木忠次郎
審査官 從四位勳三等理學博士箕作佳吉
審査官 從四位勳四等理學博士村岡範爲馳
審査部長 正三位勳二等辻新次
審査總長 正三位勳一等男爵大島圭介

審査ノ成績ニ依リ前記ノ賞牌ヲ授與ス

明治三十六年七月一日

第五回內國勸業博覽會總裁大勳位功四級載仁親王

○名譽銀牌 昆蟲標本 岐阜縣、名和靖

○二等賞 害蟲標本 岐阜縣、揖斐郡昆蟲學會。昆蟲標本 岐阜縣、垂井尋常高等小學校。害蟲標本 福岡縣、嶺要一郎。

○三等賞 害蟲益蟲標本 岐阜縣、石田英諒(本巣郡農會) 害蟲標本 岐阜縣、武儀郡農會。同 岐阜縣、海津郡昆蟲研究會。同 岐阜縣、揖佐太郎(稻葉郡農會)。同 岐阜縣 伊藤祐之(大野郡農會)。昆蟲標本 岐阜縣、岐阜縣昆蟲學會。同 岐阜縣、揖斐郡昆蟲學會。同 大阪府、早川熊次郎。害蟲益蟲標本 兵庫縣、東郷隆次。害蟲標本及調査 新潟縣、新潟縣農事試驗場。同 香川縣、香川縣農事試驗場。害蟲標本 靜岡縣、神村直三郎。

○褒賞 害蟲標本 岐阜縣、楠松珍麿(山縣郡昆蟲學會)。同 岐阜縣、水谷弓夫(可兒郡農會)。重要農作及果樹害蟲標本 岐阜縣、不破郡農會。害蟲標本 岐阜縣、養老郡昆蟲學會。同松ケムシ 岐阜縣、可兒郡農會。昆蟲標本 岐阜縣、山縣郡昆蟲學會。害蟲標本 兵庫縣、有馬農林學校 蟲類實物標本 愛知縣、渥美尋常小學校。害益蟲標本 靜岡縣周智郡農會。害蟲標本 靜岡縣、鈴木伊平。教授用昆蟲標本、滋賀縣、大津尋常高等小學校。害蟲益蟲標本 岡山縣、岡山縣立農學校。昆蟲標本 岡山縣、邑久郡教育會。害蟲益蟲標本 大分縣、大分縣北海部郡農會。害蟲標本類集 大分縣、野上尋常高等小學校。蝶類蛾類 沖繩縣、國頭郡間切島組合立農學校。

○協贊賞 昆蟲標本の製作 山形縣、齋藤朝之輔。稻螟蟲驅除に關する事業 福岡縣、益田素平。殺蟲油注入器の考案、福岡縣

豐原守。

因に記す、名和昆蟲研究所の今回受領せし賞狀は、前頁に示せる如く、素地は銀色に桐に鳳凰の古代摸様を描寫せるものなり。

◉水族館と昆蟲

此頃、堺水族館在勤藤田政勝氏より、第五回内國勸業博覽會堺水族館圖解てふ小冊子を贈られたり。其中の水棲昆蟲に係る説明を掲ぐれば左の如し。

第二十九號槽　節肢類中の昆蟲類即六本足を有する蟲にして、水中に栖むもの丶みを容れたるものなり。ゲンゴロウムシ、ミヅカマキリ、イシミノムシ、タガメ、コオヒムシ、ガムシ、ミヅスマシ、マツモムシ、ダイコクムシ、タイコムシ等にしてタイコムシはトンボの幼蟲なり。ミヅスマシは小さき蟲にして、よく水の表面を廻るものなり。ガムシ、ゲンゴロウ、ミヅスマシ、ミヅカマキリ、タガメ等は、いづれも四枚の翅を有するを以て、身軀乾燥すれば、能く飛ぶことを得るなり。以上水產昆蟲は岐阜市なる昆蟲研究所よりの寄贈に係るものなり。

是等の水棲昆蟲が水族館に於て如何に活動しつ丶あるかは、既に屢々藤田氏の報告によりて明なりと雖も、今、近頃の消息を同氏より得たれば左に之を掲載す。

當舘に收容の水棲昆蟲につき、其後の様子を報ぜんに、ゲンゴラウムシは相變らず活潑に游泳して盛んに魚族を食害し廻り、又此幼蟲も、日々脫皮して成長し、金魚などの尾鰭など切斷し、誠に憎まれものなり。ミヅカマカリは、斧を振り翳して魚類を窺ひ、タガメムシも同様、逞しき狀態を現はし、形勢甚だ穩かならず、中にもガムシは、先づ温厚の君子らしく見ゆ、ギンヤンマの幼蟲は、杭に倒立して眼を瞋らし、時に或は水中に突進し、又は脫皮して成蟲と化し、盛んに飛翔する有様實に面白し。此他の昆蟲は大抵死し去り、到底以上の勇敢なるもの丶競爭場裏に立ち行き難く、何程操り込みても皆多くは戰死し、死屍累々たる有様なり。要するに、當舘の廿九槽たる、水棲昆蟲の生存競爭の有様は、非常に觀覽者の注意をひき、從來思はざる興味を與へつ丶あり。竊かに考ふれば、是等は將來經營せらるべき水族舘の收容水族として、定めて歡迎さる丶ことならんと信ず。換言すれば、水棲昆蟲の種類は、確に水族舘用水族の一に適せりとす。隨て之と同時に、是等が放養の行はれ來らば、自から水棲昆蟲の經過などは、意外に早く發見さるべきことならん。而して當舘庭園内には、既に知らる丶如く、連夜イルミネーションを行ひ居ることゝて、四方より飛び集まる昆蟲夥しく、殊にアークライトの下は、昆蟲採集に最も適する有様なり。此内水棲類の重なるものは、矢張ガムシ、タガメムシ、ミヅカマキリ等にて、又、こは水棲には非らざるも、カナブンブン（コガネムシの一種）の來集は非常にして、折角美麗なる草花も、爲に之が害に遇ひ、大に閉口せり、又金魚池の四面に於ける、電燈の水に映ずる爲、水棲昆蟲が來集して、圖らずも多少の蟲害を金魚に及すなどは意外の珍事にして、之より見れば、燈火集蟲の事は、今後大に講究すべき事なりと自信せり云々

◉新著紹介

（一）實用昆蟲學、近來昆蟲書の續々發行さるゝは、斯學の爲慶すべき現象なり。農學士小貫信太郎氏は、今回一書を著はし、名けて實用昆蟲學と云ふ。本書は紙數二百九十四頁よりなり、章を分つ二、一を總論とし、一を各論とし、總論に於ては、解剖生理より分類に亘り昆蟲學の大意を述べ、各論に於て、目、亞目、科及種屬に細別し、更に之を害益に分ちて、農作物より一般の害益蟲に至る迄、圖版を挿入して習性經過及驅除豫防法を詳說し、且各目の終りに科名索引表を附して初學者に便せり。東京成美堂發行定價壹圓六拾錢。（二）農用昆蟲學教科書、本書も亦小貫農學士の著にして、紙數百六十六頁、十章より成り、昆蟲學大意より害蟲各論に亘り、尙昆蟲の生理、蕃殖、驅除豫防法及び標本採集製作法を說かれたり。蓋し教科書として、又初學者を益する鮮少ならざるべし。成美堂發行定價七拾五錢。（三）愛知縣農事試驗場特別報告第一報、愛知縣農事試驗場は陸稻の大害蟲たる根蚜蟲に關する調査幷に研究を公にせられ、一書を當所に寄せらる、就て見るに、紙數八十一頁より成り、鮮明なる着色石版圖十一葉を挿入し、根蚜蟲の沿革より、土質氣候等の關係、侵害の情況、蟻との關係等に說き及ぼし、最後に驅除豫防法の研究事項を記載したる必讀すべき良書なり。（四）肉叉蚊第二回報告、臺灣地方病及傳染病調査委員會より發表せらる、見るに六十六頁より成りて、寫眞版二葉二十九圖を挿入し肉叉蚊七種に亘り詳細なる研究事項を記載せられたる良書にして、刀圭社會を利する僅少ならざるべし。

◉稻象鼻蟲の發生

岐阜縣長期害蟲驅除講習生大橋由太郎氏は、本月十一日、安八、養老郡地方へ害蟲調査の爲出張したりしが、同地方は、今尙螟蟲の屋內に貯藏せる藁より、羽化して飛去るもの多き由なるが、又稻象鼻蟲の發生甚しく、現に同氏が通行の際、安八郡川並村にて、僅か、四、五坪の所にて六百二十四頭の多きを捕獲せりと、該蟲は一般に發生するものなりと雖も、往々局部に非常に多く發生加害することあれば、注意すべきことなり。

◉可眞村昆蟲調査所

岡山縣赤磐郡可眞村にては農會の事業として、昆蟲調査所を設置し、元當所助手たりし福井克雄氏主任となり、農作物及果樹の害蟲を調査する事となり居れるが、本年の害蟲驅除の如き、縣下の模範とも稱すべき、好成蹟を得たりといふ。

●害蟲驅除豫防監督官の出張

近來各地に於ける害蟲の發生漸次夥しきを以て、不日主務省及農事試驗場より技師の派遣を見るべき旨を本誌前號に於て報し置きしが、愈々左の如く、驅防監督の爲出張を命ぜられたり。

鳥取、島根、岡山、廣島、山口　農事試驗場技師　岡田鴻三郎
三重、愛知、靜岡、岐阜、　同　牛村一氏
福井、富山、石川、新潟、　同　大塚由成
岩手、秋田、　同　小貫信太郎
大分、福岡、長崎、佐賀、宮崎、　同　堀正太郎
大阪、滋賀、和歌山、　同　莊島熊六
德島、香川、愛媛、高知、　同　大工原銀太郎
茨城、福島、　同　中川庄司
京都、奈良、　同　上田榮次郎
熊本、鹿兒島、沖繩　農商務省技師　加藤末郎

●岐阜縣昆蟲學會第五十五回月次會記事

同會は本月四日午後一時より當昆蟲研究所内に於て開會せしに、當日は雨天なりしにも係らず、郡部よりの來會者も多く、又愛知縣農事試驗場技師美濃部鏘次郎氏、も特に來會せられ、中々有益なる談話ありたり、今其概況を報ずれば、左の如し。

例により名和靖氏の開會の辭に次で、第一席中井藤助氏は、害蟲驅除の實況より昆蟲思想普及の必要を實物を以て証明し、第二席渡邊樵四平氏は、此頃一意螟蟲に就き研究しつゝありて、前會に引續き其調査せし事項を報告し、第三席小森省作氏は、邦產鍬形蟲科十一種の標本につき、其各種の特性及變化より雌雄の關係を説明し、及び揖斐郡鶯村害蟲驅除視察に就て、實物を以て實況を述べ、第四席松村菊太郎氏は、桑樹の一大害蟲たる心蟲驅除に就て、氏が親しく其衝に當り調査せられし結果を報告し、第五席松尾岐阜縣屬は縣下に於ける害蟲驅除の實況を述べて農民の頑迷を憤慨し、第六席森宇多司氏は、近來蟲入琥珀の非常に僞造さるゝより、之が注意を與へて其製法を述べ、實物を示されたり、第七席美濃部鏘次郎氏は、數年來陸稻の一大害蟲たる根蚜蟲に就て調査されたる事項を説明し、第八席波磨貫太郎氏は、昆蟲研究上プレパラートの必要を述べて其製法を講演し、第九席名和靖氏は、博覽會出品昆蟲標本の結果に就て説明し、尙將來の方針につき注意を與へられ、閉會せしは全く午后七時二十分なりき。

●昆蟲標本陳列舘の觀覽人

去六月中、當昆蟲研究所常設の標本陳列舘を觀覽せし人員は、總計二千百〇八人にして、其内最も多かりしは、七日及び二十一日に於ける百五十三人にして、最も少なかりしは十一日に於ける十五人にて、平均一日に八十四人餘に當り、其重なる觀覽者は司法省總務長官波多野敬直氏、同參事官齋藤十一郎氏、昆蟲學者松村松年氏、米人ボワース氏を始め、各府縣の實業當局者、敎育者、學生等なりき。

（雜報、七月十二日脫稿）

◎新案 教育用昆蟲標本　壹組拾貳箱

一、分類標本　壹　箱

一、自然淘汰標本　五　箱

○保護色　○擬態　○警戒色及誘惑色

○自己防禦　○生存競爭

一、雌雄淘汰標本　貳　箱

一、害蟲標本　壹　箱

一、益蟲標本　壹　箱

一、解体標本　壹　箱

一、俗説と迷信に就て昆蟲標本　壹　箱

該標本は、高等小學校、高等女學校、農學校、尋常中學校等の理科と參酌して製作せしものなり。從て害蟲標本の如きも、普通農作物害蟲標本とは大に其趣きを異にせり。而して一品毎に説明を附しあれば、假令初學者と雖も、一目して昆蟲界に於ける自然の妙理を會得するを得ん。

右標本は、壹組十二箱を以て完成せりと雖も、其中、一箱丈御望の節は、新案教育用昆蟲標本中の何々と明記ありたし。

◎箱裝式昆蟲標本

甲號　價一組に付き金四圓
乙號　同　金參圓
丙號　同　金貳圓
一組二十枚
但遞送費は別

右は實物寫生用の昆蟲標本にして、初等教育、中等教育何れにも適用すべき好標本なり。製法堅牢なるを以て、又幼稚園或は家庭に於ける玩具ともすれば、不知不識の間に、理科思想を養成することを得るなり。

●農作物害蟲標本　壹組（桐箱入解剖器付 金四圓五拾錢）

●農作物益蟲標本　壹組（[illegible]）

●教育用昆蟲標本　壹組（[illegible]）

●自然淘汰標本　壹組（[illegible]）

●雌雄淘汰標本　壹組（[illegible]）

（壹組の荷造費金貳拾錢小包料は參拾錢）

●氣候變形標本　壹組（[illegible]）

●昆蟲發育標本　各種

●山林園藝害蟲標本　各種

●昆蟲學研究用書籍及び器具一式

明治三十六年七月

名和昆蟲研究所會計部

雜誌昆蟲世界合本出來廣告

（第十二號以下完備）

本邦唯一の昆蟲雜誌 昆蟲世界 合本 第六卷（昨年分）出來

西洋綴金文字入美裝

● 昆蟲世界第二卷 五部（自第拾貳號至第拾八號）
右は明治三十一年發行の分 但合本にあらず

● 昆蟲世界第三卷合本壹冊（自第拾七號至第貳拾八號）
右は明治三十二年發行の分

● 昆蟲世界第四卷合本壹冊（自第貳拾九號至第四拾號）
右は明治三十三年發行の分

● 昆蟲世界第五卷合本壹冊（自第四拾壹號至第五拾貳號）
右は明治三十四年發行の分

● 昆蟲世界第六卷合本壹冊（自第五拾三號至第六拾四號）
右は明治三十五年發行の分

（合本は毎冊金壹圓貳拾錢、郵税金貳拾錢
其他は定價の通り）

右昆蟲世界の義は發刊以來、非常の高評を博し斯學研究上の寶典として又農事改良の先驅として歡迎せられしも、未だ之を合本となするに至らざりしに、今回讀者の勧告により毎一年分を装釘して閲讀索引に便にせり、請ふ愛讀を玉へ。

岐阜市京町 **名和昆蟲研究所**

名和昆蟲研究所長名和靖著

第六版 **昆蟲世界** 全

昆蟲微の棲

定價貳拾錢 郵税貳錢（郵券代用一割増）

臨時刊行第一編 **日本昆蟲分科表** 增補再版 全一冊

定價（郵税共）金貳拾八錢（同上）

臨時刊行第二編 **通俗益蟲集覽** 第一輯再版（說明書附）

定價（郵税共）金貳拾貳錢（同上）

臨時刊行第三編 **貝殼蟲圖說** 全一冊（再版）

定價（郵税共）金壹拾七錢（同上）

農家應用 **害蟲圖解** 既刊貳拾枚

定價壹枚金拾五錢 郵税貳錢 百枚以上一纏壹枚拾錢の割郵税百枚に付貳拾錢

農家應用 **害蟲圖解** 一百枚迄追次刊行

岐阜市京町 **名和昆蟲研究所**

登録商標 硫曹

硫曹肥料

●硫曹肥料を肥作に用ゆれは第一ヱ米質を宜しくし且つ頗る收穫を増すべし一反歩ヱ付五六斗より一石二三斗を増す之を舊肥料を用ひたるものヱ比すれは見掛も遥に宜しく日方も重く土用を越して蟲附稀なり舊肥料を用ひたるものは之に反したゞへ見掛は異ならざるも米質悪しく又收穫は同じくさも玄米となして一反歩三斗以上の相違あり之を舂きて白米となすに硫曹を用ひたる分は舂減少なく飯ヱ炊くに頗る炊殖すべし一例之は舊肥料の米は水一升ヱ米一升なるに硫曹の分は米一升ヱ水一升二合ならでは飯に適せず即ち二割以上炊殖の相違あり)●硫曹肥料を用ゆる農家は能々以上の事柄に注意し之を實驗して其效用の偉大なるヱ驚くべし●輸出米は硫曹肥料を用ひたるものならざるべからず然らざれば南洋熱帯地方通過の際多く腐敗すべし●第一(過燐酸)を肥作に用ゆるヱは一反歩に三貫目より五貫目迄を [illegible] 肥料(大豆粕 [illegible]) [illegible] 堆肥 [illegible] は第八號を最も適當とす一反歩に十貫目乃至 [illegible] すべし(堆肥は何れヱも施すを宜しとす)●硫 [illegible] 麻、藺其他陸稲、粟、砂糖黍、桑科野菜物、菓物 [illegible] て其效實ヱ驚くべきものあり●第五回勸業博覽會ヱ硫曹肥料を用ひたる農産物を出品し名譽金賞牌を得たるものには金參百圓づゝ銀賞牌には金百圓づゝ一等賞牌ヱは金五拾圓づゝ二等賞牌には金貳拾圓づゝ三等賞牌には金拾圓づゝを贈呈すべし●第八回關西府縣聯合共進會に出品せる農産物の内第一等賞を得たる香川縣の裸麦及徳島縣の葉藍は何れも硫曹肥料を使用したるものなれば會社は香川縣の近藤太郎氏へ金百圓を徳島縣仁井輝藏氏へ銀盃(三ッ重)壹組を贈呈せり●硫曹肥料の明細幷に見本等は御申越次第贈呈すべし

大阪西區西野下之町
大阪硫曹株式會社
特電話西四一九番

Smerinthus planus Walker. (Uchi-suzume)

By K. Nagano.

This species seems to be same to S. ocellatus L. Forewings pale rosy-brownish, clouded with darker in median and marginal areae; inner line light brown; darker angulated central stripe broken in middle; median band brown; subterminal waved lines brownish or darker; a whitish lunate discal spot. Hindwings rosy, posteriorly light ocherous brownish; a large round black blotch near anal angle, enclosing a dark grey spot encircled with pale blue. Expands 72 – 100 mm. Body grey or brownish, thorax with a broad dark brown central band.

Kiusiu, Shikoku, Honsiu, Yezo; 6, 7, 8. Larva green white–dotted; on 1–3 a white lougitudinal lateral stripe; on 4–11 a series of white oblique lateral stripes; spiracles red–circled: on Salix, Prunus pseudo–cerasus, Pirus Malus, etc.; 6–9.

（明治三十年九月十日内務省許可　明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條に依り晴雨に關はらず、毎月第一土曜日午後一時より、岐阜市京町名和昆蟲研究所内に於て開く、本會員は不及申、何人も毎會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所内 岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會本年中の日並は左の如し

第五十六回月次會（八月一日）
第五十七回月次會（九月五日）
第五十八回月次會（十月三日）
第五十九回月次會（十一月七日）
第六十回月次會（十二月五日）

ト　ホ　ハ　イ　ロ　ニ　ヘ　リ　チ　ヌ　ル

：‖｜イロハニ　市境界　案内道　研究所　陳列館　縣廳　中學校
ホヘトチリヌル　病院　郵便局　西別院　公園　長良川　金華山　停車場

◉名和昆蟲研究所案内

當昆蟲研究所の位置は上圖の如くにて停車場よりは僅に十餘町養蟲室あり又新築の岐阜縣物産館構内には常設の昆蟲標本陳列館（五間に十八間）ありて標本器具數千点を陳列す有志諸君の來訪を俟つ

岐阜縣岐阜市京町 名和昆蟲研究所

◉本誌定價並廣告料

壹部郵税共金拾錢（見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す）
壹年分拾貳部郵税共金壹圓八錢

（注意）本誌は總て前金に非れば發送せず◉爲替拂渡局は岐阜郵便局◉郵券代用は五厘切手にて壹割増とす

廣告料 五號活字二十二字詰一行に付金拾貳錢
三十行以上一行に付き金拾錢とす

明治三十六年七月十五日印刷並發行

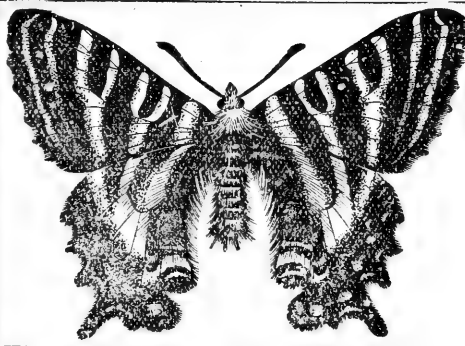
岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二（岐阜縣岐阜市京町）
發行所 名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二 發行者 名和梅吉
同縣揖斐郡鶯村大字公郷三番戸 編輯者 小森省作
同縣安八郡大垣町字郭四十五番地ノ二 印刷者 河田貞次郎

（大垣 西濃印刷株式會社印刷）

Vol.VII. AUGUST. 15TH, 1903. No.8.

(八月十五日發行)

(毎月一回十五日發行)

THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE.

EDITED BY Y. NAWA.

GIFU, JAPAN.

昆蟲世界

第七拾貳號 (第七卷第八册)

目次 (禁轉載)

(明治三十六年八月十五日發行)

(明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)

PUBLISHED BY THE NAWA'S ENTOMOLOGICAL LABORATORY IN GIFU, JAPAN.

害蟲圖解新刊廣告

○第二十一。稻の害蟲イナゴ（七月發行）

當昆蟲研究所發行の害蟲圖解は、本邦産有害蟲種の大要を何人にも理解し易からしめん爲、當所の一事業として數年來續刊し來れるものにて、今や其第二十一號を發行せり。而して府縣の各級農會より諸學校、警察署、郡衙等に備附られしもの甚だ多く、又或地方の如きは之を小學校の教授用に充てしものもあり、甚だ有益なる圖解なり。

岐阜市京町　名和昆蟲研究所

昆蟲分布調査材料募集

○鞘翅目。瓢蟲の部。
○鱗翅目。蝶の部、天蛾の部。
○脈翅目。擬蟷螂、薄翅蜻蛉、長角蜻蛉の部。
○有吻目。水棲の部、蟬の部。
○直翅目。蟷螂の部、竹節蟲の部、蜚蠊の部。
○擬脈翅目。蜻蛉の部。

右今回寫生圖出來分布調査用紙に納めたれば最早何時にても調査の上記入に差支なければ各地同志の諸君續々標本御寄贈あらんことを望む

○アブラ　ムシ（蜚蠊又は滑蟲）の標本
右特別分布調査材料として同志の寄贈を望む

岐阜市京町　名和昆蟲研究所

名和昆蟲研究所長名和靖著

第六版　薔薇の一株　**昆蟲世界**　全
定價貳拾錢　郵税貳錢（郵券代用一割增）

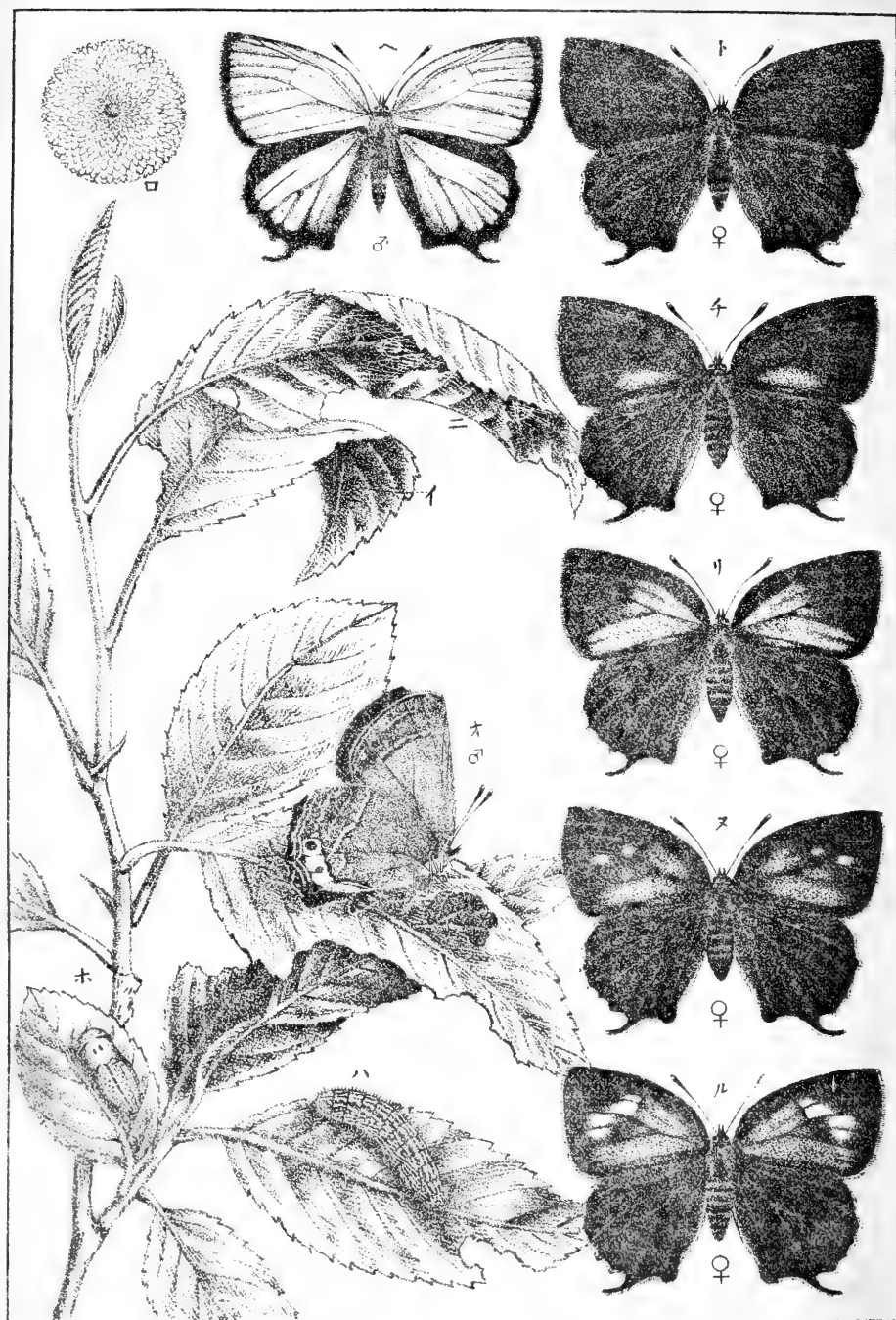
臨時刊行第一編　**日本昆蟲分科表**　增補再版　全一冊
定價（郵税共）金貳拾八錢（同上）

臨時刊行第二編　**通俗益蟲集覽**　第一輯再版（說明書附）
定價（郵税共）金貳拾貳錢（同上）

臨時刊行第三編　**貝殼蟲圖說**　全一冊（再版）
定價（郵税共）金參拾七錢（同上）

農家應用　**害蟲圖解**　既刊貳拾壹枚
定價壹枚金拾五錢　郵税貳錢　百枚以上一纏壹枚拾錢の割郵税百枚に付貳拾錢

農家應用　**害蟲圖解**　一百枚迄追次刊行

岐阜市京町　名和昆蟲研究所

縁黒青燕尾蝶 (Zephyrus taxila, Brem.) の發育

昆蟲世界　第七拾貳號
（明治三十六年第八月）

論說

◎第五回內國勸業博覽會と昆蟲標本

第五回內國勸業博覽會開設の擧あるや、其當路の有司は固より論なく、業に其衝に當るもの、酷苦經營之が成功に努めたるの結果は、能く本邦文物の精華を宇內に紹介し、退いては實業の發達に至大の利益を與へ、洋々春の海の如き五ヶ月間の開期も、今や其終を告げ、茲に本月一日を以て無事其閉會の式を擧行せられたり。

抑も今回の博覽會は規摸宏大にして、名は內國勸業博覽會なりと雖も、其實は世界博覽會なりしなり。爰を以て其出品物の精撰と、其陳列意匠の雄大なるとは、之を從來の博覽會に見るべからざる所にして彼農產物の如き過去に在りては、觀覽者の一顧をも得ざりしもの、今や則ち然らず、婦女童幼踵を接して此淡白無味の陳列場を訪ふ、蓋し時勢の進運之をして然らしむるものなりとは言へ、復た出品物の精撰、陳列意匠の雄大、自然に觀覽者の足を惹きしに非るなきを得んや。而して我昆蟲標本の出品を見るに、其出品点數の夥多なる、是亦た從來の博覽會に見ざる所にして、其製作の佳良なる、其意匠の嶄新なる、加ふるに學理を應用して克く實業上、科學上の智識を開發し世を益すること尠少ならざるを認むるに拘らず、各府縣の當局者は頗る之を冷視し、陳列棚の一隅小暗き所に排列し、或は高所に掲揚して

之を見るに由なからしめ、甚だしきは裝飾に代用して出品の趣意を沒了し、爲に折角の見學者をして大に失望せしめ、非難の聲を聞くに到りしは必竟當局者に昆蟲思想の乏しきと、又他方に於ては徒らに壯大美觀を呈するものにして婦女童幼の眼を喜ばしむるものなからんには、內容の如何を問はず好位置を與へしに由る、是等は固より當局者其人の罪に非ずして、世の未だ進步せざるに職由するものとして寧ろ憫諒せざるを得ず。

退て思ふに、陳列に於て夫れ斯の如く缺點ありしにも拘らず、今期の博覽會に於て昆蟲の何ものたるかを世人に知らしめ、實業界に、科學界に、大に利益を與へたるは爭ふべからざる事實なり。見よや、審査の結果に於て世に盲審亂査の聲の喧しきにも拘はらず、斯界に於ては比較的公明なりしなり、元より審査の機密は得て知るべからずと雖も、其結果により之を推考すれば、强ち其大体を窺ふ能はざるに非ず、即ち今回の受賞者の多數は出品其物の完全なること勿論なれども、團体出品にして然も其普及を圖り、調査の緻密なる、基礎の强固なる點に重きを置かれたるが如し。今之を例せば、二等賞を受けたる岐阜縣揖斐郡昆蟲學會は、郡是の害蟲を定めて之が被害の統計を調査し、之を分布調査用地圖上に顯はし、然る後標本を作製したるが如き、又三等賞を得たる武儀郡農會は、彼れ雜駁なる出品をなさず、唯桑樹の害蟲心蟲一種に就て調査し、其結果を標本に顯はしたるが如き、其他滋賀縣農事試驗場は浮塵子につき、岐阜縣不破郡垂井小學校は敎育の方面に於て研究せし結果を出品し、共に二等賞を得たるが如き、是等を始め總て受賞の名譽ありしものは、何れも模範たるべきものにして、世を利し、人を益し、延いて斯學に貢献するの出品物に非るはなし。吾輩嘗て、此博覽會を目して一大活學敎室なりと絕叫せしが、今回親しく此等の標本を見たるもの、如何なる感を腦裡に印象せしものぞ。

今や第五回內國勸業博覽會は世人謳呼の間に閉會を告げ、將に來らんとするの第六回は其時期未だ豫知すべからず、昆蟲學に志あるもの、此間に處して一層の奮勵なかるべからざるは、之を今期の博覽會擬賞に徵して明白なりとす。吾輩は常に自ら揣らずして斯界の木鐸を以て其職責とし、多大の注意と精細の觀察を此博覽會に拂ひしもの、其審査の結果よ鑑みて豈に多少の感慨なしとせんや、苟も昆蟲學に志あるものは、今後大に注意を要すべきなり。

◎緣黑青燕尾蝶の發育並に雌の多形に就て（第八版圖參看）

名和昆蟲研究所長　名和靖

フチグロアヲツバメテフ(Zephyrus taxila, Bremer. = Theela japonica, Murray.)は從來岐阜附近に於ては余り多くを見ざるも、約三里を距てたる本巣郡船木村地方に到れば、又容易よ採集し得べし、是れ該蟲の食草たる赤楊に富めるを以てなり。卵は白色にして上面平直をなし、菊花の如き刻紋を有す。老熟の幼蟲は八分內外ありて、淡黃色に綠色の背線と模樣とを有し、全体淡黃色の短毛を生ず。蛹は兩端圓く中央縊れて繭形をなし、長四分一二厘、頭胸部は褐色を帶び、腹部は中央に黑色の線あり、其兩側には各關節每に黑色と黃色との斑點を有す。成蟲は雄にありては翅の表面美麗なる藍青色を呈はし、翅緣黑色を帶ぶを以て緣黑青燕尾蝶の名ある所以なり。開翅一寸五分よして、后翅の外緣には稍外方に曲りたる尾あり、翅の裏面は灰褐色にして、前翅の外緣に近き處に前緣より后緣よ向て白色の一線を

走らせ第二翅脈に到りて止み、後縁角に近く褐色に橙黄色を混せる斑紋を有す。后翅には前縁より后縁に亘りW字形の白線と、外縁に沿ふて同色の細線を走らせ、其内側には稍太き二條の白帶あれども鮮明ならず、后縁角部は橙黄色にして中に黒紋あり、前后兩翅とも白色の短き縁毛を有す。雌の裏面は殆んど雄のそれに異らざれども、表面は大に彩色を異にし、加ふるに同じく雌の内にても變化多くして殆んど別種ならざるやを疑はしむ。即ち第八圖（ト）の如く全躰茶褐色にして斑紋を有せざるあり、或は（チ）の如く前翅の第一翅脈と第二翅脈との間に少しく紫色を交ふるあり、或は（リ）の如く其紫色一層増加して中室に滿つるあり、又或は（ヌ）の如く更に微かに柹色紋を加ふるあり、若くは（ル）の如く其柹色の斑紋判明なるありて實に其變化多し、昆蟲學上之を稱して多變形種と呼ぶ。凡て昆蟲にはメスグロヘウモンテフの如く雌雄甚しく翅色を異にし、カブトムシ、クハガタムシの如く雌雄によりて著しく其形態の異なる等其例多く、これを雌雄異形といふ。又アゲハノテフの春季に發生せしものと、夏季に於て羽化せしものとは大小及び色彩に差異あるが如き、モンシロテフ、キテフ等の發生時期によりて斑紋の有無を生ずる如きは最も普通にして、之を氣候上の二形若くは多變形と云ひ、又單に氣候變形といふ。前述の縁黒青燕尾蝶の雌の變形は、氣候上の變化とは稍趣きを異にし、同時季に發生せしものにして斯く多くの變化を來せしものなり。プライアー氏の日本蝶譜には左の如く記載せり。

セクラ、ジヤポニカ（Thecta japonica, Murray.）の雌は多變形種にして甚だ變化し易し、而してセクラ、ジヤポニカの多變形種は全く茶褐色にして、第二は光輝ある藍色の大なる斑點あり、第三は前翅に黄茶褐色の斑點あり、第四は藍色又は黄茶褐色の二斑點あり、而して其變化の各階級を混合せる標本を屢々發見することあり、故に雌の彩色は專ら季候の寒暖に關し、北地或は高緯度の處に於て獲たる標本は多くは藍色を呈すること制規の如し。バツトラー氏は此の理由に就て、北方形種を別種なりとせられしは、既に紛亂せる種屬に猶一層の錯雜を加ふるのみにして正當とは認め難し。

之を見るに、バットラー氏は別種なりと誤認し、プライアー氏は一に氣候の寒暖によりて變化するを說けり。然れども當所の飼育の結果によるも、或は同時に同所ゝ於て此の五形の變種を採集せしに徵するも、あながち氣候にのみ委する能はず、其雌雄の異なるは全く雌雄淘汰の現象に外ならざるも、雌蟲間に於て斯く多形の變化あるは其原因の那邊に存するか、而して最も普通に多く發生するは前翅ゝ紫色を帶ふるものなると、比較的雌蟲の多く採集し得らるゝ等より推考すれは、今后當研究を要すべきことなりと信ず。

口繪の說明、(イ)は葉上に產着の卵子(ロ)は卵子の上面を放大せしもの(ハ)は五齡の幼蟲(ニ)は幼蟲が葉を卷きて其内ゝ潜む狀(ホ)は葉上に附着せる蛹の狀(ヘ)は成蟲の雄(ト)(チ)(リ)(ヌ)(ル)は雌蟲の變化を示せるもの(ヲ)は靜止せる雄蟲

◎第一回岐阜縣昆蟲分布調查(二)

名和昆蟲研究所助手　分布調查主任　小森省作

粉蝶科(Pieridae)、今回の採品中粉蝶科ゝ屬するものは左の八種ありき。今、此等ゝつき略說すべしと雖も、唯調查上或特種の點を適載するに過ぎず。

(一〇)ヒメ シロ テフ(Leucophasia sinapis, Linn.)　邦產粉蝶科中最小なるものにして、全翅白く、翅端に黑斑ありて一見紋白蝶ゝ擬ふべきも、遙かゝ小形にして大に異れり。該蝶は北海道及奥羽地方には普通なるも、其以南ゝ於ては、本島の山間ゝ稀に見る所の、優美愛すべき種なり。今回、飛驒國大野郡に於て三頭、吉城郡に於て一頭を獲たり。

(一一)モン シロ テフ(Pieris rapae, L.)　發生の季節により、大小色彩ゝ於て差違あり、即ち春生種

は形小にして、夏生種に比すれば黒斑少なく、特に雄に於ては翅の表面殆んど無紋の有様なり。幼蟲は菘菜類の害蟲にして、往々大害を與ふることあり。今回、キテフ、モンキテフ、スヂクロテフ等と共に、多數集まりたるは、其發生の多きを知るべし。

（一二）スヂグロテフ（Pieris napi, L.）　本種は翅白く、脈黒きを以て、スヂクロシロテフとも稱す。普通の種にして、發生の季節により、又大小色彩に變化あり、一種の香氣を放つ、岐阜、羽島、海津、養老、可兒及安八の一市六郡を除き、各郡に於て獲たり。

（一三）ツマキテフ（Anthocaris scolymus, But.）　美麗なる小形種にして、前翅の翅端に橙黄色の斑紋あるを以て此名あり、然れども雌には此の斑紋なし。該蝶は四五月頃飛翔するものなれども、稻葉郡三里尋常小學校兒童長屋すきなるもの、採集品は、九月二十日なりしかば、之を三里小學校に照會せしに、採集場所より、其當時の模様に至る迄回答し來れり。之れ、本誌前號に於て記載せし日光白蝶と云ひ、岐阜蝶と云ひ、又此の褄黄蝶と云ひ、共に蛹期を以て越冬するものなれば、氣候の變異により、俄に羽化せしものならんも、而も、該蝶は二頭迄之を獲たりしは、甚だ訝しき事ならずや、尚此他に揖斐郡より一頭ありしが、こは三月二十八日の採集品なりき。

（一四）モンキテフ（Colias hyale, L.）　本種は、極めて普通の種にして、粉蝶科中最も廣き分布を有し、全國到る處其發生を認めざるの地なし。雄は皆黄色なれども、雌には黄色なるものと、帶黄白色との二形あり、今回、岐阜及び安八を除く外、各郡に於て多數を獲たり。

（一五）ヤマキテフ（Gonopteryx rhamni, L.）　常に山地に於て活潑に飛翔する處の種にして、雄蟲の翅色は濃黄色に、雌蟲は淡黄色にして、兩者共、四翅の殆んど中央に橙黄色の斑點を有す。而して此種

も亦發生の時期により、色彩を異にせり。即ち春生のものは、翅の裏面に於て一面に褐色の細點あるも夏生種は、之を缺く。今回、揖斐、加茂、益田の三郡に於て獲たり。

(一六)キ　テフ(Terias hecabe, L.)　此蝶は、發生の季節により、變化極めて多き種あり。即ち、早春に顯はるゝものは、翅の表面無紋にして、夏月に顯はるゝものは、翅端に黑紋を有し、殆んど別種の如く見ゆ。今回、縣下各郡(安八郡を除く)に於て最も多數を獲たり。

(一七)ツマグロ　キテフ(Terias laeta, Boisd.)　此蝶は、極めて前種に酷似し、又變化多き種なれば、夏生種に於て、或は殆んど前種と區別し難きものありと雖も、前翅の前緣角の尖れると、外緣の一直線にして、翅端の黑紋は、第二翅脈に到りて急に終れると、前種に於ては、翅の裏面に褐色の斑點ありと雖も、該種の後翅には一條の褐色線ある等、其特徴を撿すれば、又容易に區別することを得べし。海津、養老、郡上、大野、及安八の五郡を除き、各郡に於て獲たり。

斑蝶科(Danaidae)、此科に屬するものは、左の一種ありき。是れ本邦に於て琉球以南の地には數種ありと雖も、本島には、僅アサギマダラの一種を產するに過ぎざれば、當然の事なりとす。

(一八)アサギ　マダラ　テフ(Daneis tytia, Gray.)　優美なる大形種にして、前翅は黑褐色に、後翅は赤褐色にして、共に淡青色の斑紋あり、而して雄蟲には、後翅の後緣角に近く、灰褐色(裏面は黑色に白色鱗を混ず)の發香腺斑あるを以て、容易に雌雄を區別し得べし。養老、吉城の二郡に於て獲たり。

蛺蝶科(Nymphalidae)、此科に屬するものは、今回の採品中左の二十二種なりとす。

(一九)オホ　ハヤバテフ(Grapta c-aureum, L.)　此種は、ハヤ　タテハ　テフ(G. c-album, L.)に能く似たるも、翅緣の出入れ彼れの如く甚しからず、且、翅色稍淡くして帶赤黃色を呈し、裏面は帶褐黃色

上、惠那、益田の一市五郡に於て獲たり。

（二〇）ヒオドシ テフ（Vanessa xanthometas, Schiff.） 翅の表面は黄赤色に、黒色の斑紋を有して美麗なるも、裏面は黒褐色に、淡褐色の帶紋を有し、恰も樹皮色なるを以て、靜止のときは容易に見出し難し。該蝶は成蟲を以て越年すれば、何時にても採集し得べきも、初夏の候に發生すれば、其時期に於て最も完全なる標本を得べし。稻葉、養老、揖斐、加茂の四郡に於て獲たり。

（二一）クジャク テフ（Vanessa io, L.） 翅の表面は朱黑色にして、孔雀紋狀の斑紋あるを以て此名あり。該蝶は北海道及奥羽地方には普通なるも、其以南に於ては、本島の山間に稀に見る所のものなり。益田郡秋神小學校尋常二學年岩畑長右衛門の採品あり。

（二二）ルリ タテハ テフ（Vanessa canacede, Niceville.） 翅の表面は黑色にして、前後兩翅を通じ、一條の紺碧色の帶紋を有し、裏面はヒオドシ テフ、クジャク テフ等と殆んど同彩にして、保護色の好標本なり。今回、一市八郡に於て獲たり。

（二三）アカ タテハ テフ（Pyrameis indica, Moore.） 此の蝶も亦分布廣く、全國到る處に早春より秋末に到る間飛翔するものにして、翅面は黑褐の地色に、黄赤色の斑紋ありて美麗なる種類なり。羽島、養老、揖斐、山縣、武儀、益田、吉城の七郡に於て獲たり。

（二四）ヒメ アカ タテハテフ（Pyrameis cardui, L.） 前種に似たるも翅色の稍淡きと、黄色部の多くして斑紋の異なれるにより容易に區別し得べし。海津、不破、揖斐、本巣、武儀、吉城の六郡に於て獲たり。

(二五)ヘウモンテフ(Arginnis anadyomene, Feld.) 翅の表面は、帶赤黃色にして、一般に黑色の斑紋を有し後翅の裏面は、帶綠黃色に、微かに白色の雲狀紋を有す。而して雄蟲の特殊鱗は、第二翅脈上に在り。揖斐、加茂、惠那、益田の四郡に於て獲たり

特殊鱗(Androconia)は、一種の香氣を發する所の鱗毛にして、豹紋蝶類に於ける雄蟲の多くは、前翅の表面、翅脈上に、黑色毛狀の特殊鱗を密生し、灰褐色の保護鱗を以て掩ふ。而して蟲種により、其數と翅脈を異にすれば、豹紋蝶分類上、最も必要の点なりとす。

(二六)ウラギン ヘウモンテフ(Arginnis adippe, L.) 翅の表面は、前種と殆んど同樣にして、特殊鱗は、第二第三翅脈の二條にあり、後翅の裏面は綠黃色に、稍褐色を混じ、多數の銀紋は基部と外緣に沿ふて分れ、その中央に褐色の圓紋列あり、外緣に沿へる銀紋は半月形にして一列をなす。養老、山縣、武儀、郡上、加茂、惠那、大野、益田、吉城の九郡に於て獲たり。此等豹紋蝶類の表面に於ては、餘程標本を取扱ふ上に於て熟達せるものに非らざれば、容易に區別し能はざるべし、以て其酷似せるを知るに足らん。

(二七)オホウラギン ヘウモンテフ(Arginnis nerippe, Feld.) 前種に酷似せるものにして、稍大形なり。雌に於ては形の大なると、斑紋により容易に前種と區別し得べきも、雄に至りては殆んど同樣にして區別容易ならず、今その兩雄蟲の異なる重なる點を掲ぐれば、前種に於ては、特殊鱗叢は二條なるも此種は第二翅脈に於て、微かに存するのみ、後翅の裏面の銀紋は前種に比し比較的小にして疎なると、褐色の圓紋列は前種の如く密ならずして、その表面に顯はるゝ黑點は三個あると、外緣に沿へる銀紋は前種に於ては半月形なるも、此種はB字形をなす等は重なる點にして、尙其他に於ても多少の相違あれ

ば、標本鑑別に熟達せるものは、表裏何れよりも直ちに區別することを得、今回、稻葉、武儀の二郡に於て獲たり。

(二八)ギンスヂヘウモンテフ(Argimnis paphia, L.) 後翅の裏面は綠色にして、前緣より後緣角に向ひ銀白色の三條帶と、外緣に沿ふて同色の二列紋あり、此種は、雌雄の區別稍著しく、發香腺脈は第一第二、第三、第四の四翅脈にあり。不破、武儀、加茂、惠那、大野、益田、吉城の七郡に於て獲たり。

(二九)ウラギンスヂヘウモンテフ(Argimnis laodice, Pall.) 後翅の裏面は殆んど中央に於て、前緣より後緣に亘り、切々なる銀紋列ありて二分し、基部に向へる部は帶綠黃色にして、內に褐色の二線あり、外緣に沿へる部は褐色をなし、表面の斑紋列は微かに顯はる、惠那、益田の二郡に於て獲たり。

(三〇)オホウラギンスヂヘウモンテフ(Argimnis ruslana, Motsh.) 此種は、極めて前種に酷似せるものにして、唯、其異なる點は、前翅の前緣角の長く延びたると、特殊鱗は第一、第二、第三翅脈の三條にあるも、前種に於ては第一、第二の二脈のみなると、後翅表面の基部に向へる黑點は、相連接し、裏面の黃色部にある褐色線は、前種に比し細くして直線をなせると、前種の前翅裏面には、微なる白紋列ある等、其重なる相違の點とす。山縣、加茂、惠那、大野、益田、吉城の六郡に於て獲たり。

(三一)メスグロヘウモンテフ(Argimnis sagana, Doubl.) 凡て、豹紋蝶類の雌蟲は、雄蟲に比し大形にして黑色を增せりと雖ども、此の種の如く、色彩に於て全然相違せるものは總ての蝶類に於て多く見ざる所、雌雄陶汰の好標本として著名なり。稻葉、養老、不破、山縣、武儀、益田、吉城の七郡に於て獲たり。

(三二)ミスヂテフ(Neptis acepis, Lep.) 翅は帶褐黑色にして、前後兩翅に通して三條の白紋列ある

を以て此名あり、裏面は茶褐色にして、白條紋は鮮明なり。岐阜、稲葉、羽島、海津、土岐、及安八の一市五郡を除き、各郡に於て獲たり。

(三三)オホ　ミスヂテフ(Neptis alnerna, Brem.)前種よりも遥に大形にして、ハヤシ　ミスヂテフ(N. excellens, But.)とは、大小色彩に於て酷似し、前翅の中室内に於ける白色の帯紋は、不規則なる鋸歯状をなし常に山地に産す。今回、惠那、大野、益田に於て獲たり。

(三四)ホシ　ミスヂテフ(Neptis pryeri, But.)翅の色彩はミスヂ　テフに似たるも、稍大形にして、後翅の基部に數個の黒點あるを以て、容易に識別し得べし。該蝶は、山地に於て稀に得る處のものなり。惠那、益田の二郡に於て獲たり。

(三五)イチモジ　テフ(Limenitis sibylla, L.)翅の表面は黒褐色にして、前後両翅に通し一列の白色紋あるにより此名あり、夏季林間に普通にして、今回一市九郡に於て獲たり。

(三六)ヒメ　イチモジ　テフ(Araschnia burejana, Bremer.)美麗なる小形種にして、氣候變形により春生種と夏生種とは、恰も別種なるが如し、即ち、春生のものは、中央の帯紋は細く樺色をなし、其兩方には不規則なる同色の斑紋あるも、夏生のものは、中央の帯紋太く白色をなし、外縁に沿ふて僅に樺色の紋列を存するに過ぎず。其他、裏面に於ても亦紋様を異にせり。該蝶は山地に産するものにして、郡上、惠那、大野の三郡に於て獲たり。

(三七)コ　ムラサキ　テフ(Apatura ilia, Hübn.)雄蟲の翅の表面は、見樣により美麗なる紫色を呈はすを以て、雌雄淘汰の好標本として有名なり。常に夏季に於て柳樹の津液に集まる、今回縣下十一郡に於て獲たり。

（三八）ムラサキテフ(Euripus charonda, Hew.)　雄蟲には、前後兩翅の基部ニ美麗なる紫色を呈し、裏面は前翅の先端、及後翅一面青黄色を呈すれども、雌は然らずして、裏面は青白色をなす。邦産蛺蝶科中最大の種にして、美麗を以て顯はる。山地に於て樹上高く飛び。捕獲容易ならざるも、前種の如く好で樹液を吸收す。大野郡久々野小學校高等二學年生中西市太郎の採品なり。

（三九）ゴマダラテフ(Hestina japonica, Feld.)　翅は黑色ニ白色の斑紋ありて、發生の季節ニより變化頗る多し、稻葉、養老、不破、山縣の四郡ニ於て獲たり。

（四〇）スミナガシテフ(Dichorragia nesimachus, Boisd.)　翅の表面は帶綠黑色にして、外緣に向ひ數多の白色V字形斑紋あり、裏面は黑色に紫色を帶び、斑紋は鮮明なり。夏季山地に飛翔す。今回、岐阜、加茂、惠那、益田、吉城の一市四郡ニ於て獲たり。

以上述べたる處の採集數を表出すれば、即ち左の如し。（表中△印は十頭以上のものに限る）

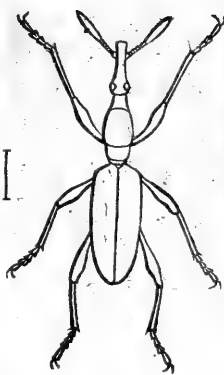
番號 種名	岐阜市	稻葉郡	羽島郡	海津郡	養老郡	不破郡	安八郡	揖斐郡	本巣郡	山縣郡	武儀郡	郡上郡	加茂郡	可兒郡	土岐郡	惠那郡	大野郡	益田郡	吉城郡
一〇、ヒメシロテフ	|	|	|	|	|	|	○	|	|	|	|	|	|	|	|	|	三	|	一
一一、モンシロテフ	|	|	九	五	△	△	○	△	△	三	△	△	△	一	△	△	△	△	六
一二、スヂクロテフ	|	一	|	|	|	一	○	三	五	二	△	△	△	|	一	△	△	△	△
一三、ツマキテフ	|	二	|	|	|	|	○	一	|	|	|	|	|	|	|	|	|	|	|
一四、モンキテフ	|	六	五	一	△	△	○	△	九	七	△	△	△	一	八	△	△	△	△
一五、ヤマキテフ	|	|	|	|	|	|	○	二	|	|	|	|	一	|	|	|	|	五	|
一六、キテフ	一	△	△	六	△	△	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
一七、ツマグロキテフ	一	一	二	|	|	八	○	一	二	四	△	|	△	八	△	六	|	二	二
一八、アサギマダラテフ	|	|	|	|	一	|	○	|	|	|	|	|	|	|	|	|	|	|	一

一九、	オホハヤバテフ	一	|	|	|	|	|	○	三	|	二	|	一	|	|	|	一	|	一	|
二〇、	ヒオドシテフ	|	一	|	|	二	|	○	一	|	|	|	|	一	|	|	|	|	|	|
二一、	クジヤクテフ	|	|	|	|	|	|	○	|	|	|	|	|	|	|	|	|	|	一	|
二二、	ルリタテハテフ	三	三	|	|	五	|	○	一	|	一	二	|	三	五	|	二	|	|	|
二三、	アカタテハテフ	|	|	一	|	二	|	○	一	|	一	一	|	|	|	|	|	|	三	一
二四、	ヒメアカタテハテフ	|	|	|	一	|	一	○	二	一	|	三	|	|	|	|	|	|	|	六
二五、	ヘウモンテフ	|	|	|	|	|	|	○	一	|	|	|	|	二	|	|	二	|	一	|
二六、	ウラギンヘウモンテフ	|	|	|	|	一	|	○	|	|	一	一	一	二	|	|	三	四	五	九
二七、	オホウラギンヘウモンテフ	|	一	|	|	|	|	○	|	|	|	一	|	|	|	|	|	|	|	|
二八、	ギンスヂヘウモンテフ	|	|	|	|	|	一	○	|	|	|	一	|	一	|	|	三	二	七	四
二九、	ウラギンスヂヘウモンテフ	|	|	|	|	|	|	○	|	|	|	|	|	|	|	|	一	|	二	|
三〇、	オホウラギンスヂヘウモンテフ	|	|	|	|	|	|	○	|	|	一	|	|	二	|	|	五	一	四	二
三一、	メスグロヘウモンテフ	|	一	|	|	四	一	○	|	|	一	一	|	|	|	|	|	|	四	一
三二、	ミスヂテフ	|	|	|	|	一	一	○	六	二	四	三	四	四	二	|	△	七	五	三
三三、	オホミスヂテフ	|	|	|	|	|	|	○	|	|	|	|	|	|	|	|	三	二	一	|
三四、	ホシミスヂテフ	|	|	|	|	|	|	○	|	|	|	|	|	|	|	|	一	|	一	|
三五、	イチモジテフ	一	|	|	|	一	|	○	三	|	一	二	一	六	|	|	△	二	|	二
三六、	ヒメイチモジテフ	|	|	|	|	|	|	○	|	|	|	|	一	|	|	|	一	一	|	|
三七、	コムラサキテフ	|	一	二	|	五	一	○	三	二	一	|	一	一	|	|	△	|	|	一
三八、	ムラサキテフ	|	|	|	|	|	|	○	|	|	|	|	|	|	|	|	|	一	|	|
三九、	ゴマダラテフ	|	三	|	|	二	一	○	|	|	一	|	|	|	|	|	|	|	|	|
四〇、	スミナガシテフ	一	|	|	|	|	|	○	|	|	|	|	|	一	|	|	一	|	一	一

◎蟻形象鼻蟲に就て

在桑港　名和梅吉

蟻形象鼻蟲なる名稱は、其形狀恰も蟻の或種に酷似するに依り附名せしものにして、常に甘藷根を加害

するを以て、又甘藷の象鼻蟲とも謂へり。元來、此種は本州にて其發生を認知せずと雖も、沖繩縣に於ては、年々發生して甘藷作に加害すること多く、爲めに同地方の栽培家は之が驅除豫防の方法に苦慮されつゝありと聞けり。余は先年同縣より研究所へ加害の甘藷根を添附して其驅除豫防法及習性等に就き照會ありし時、其現品を見て、栽培家の苦慮の容易ならぬ事を知得したりき。即ち其送附されし甘藷は二十餘個にて、何れも外觀は餘り變化なきも、内部は全く穿食を蒙り、殆んど蟲糞を以て造られたるやの觀ありき。而して、此種に就ては未だ一の經驗もなく、又記述されたるものを本邦にて見し事あらざりしが、今米國農務省の發刊に係る千八百七十九年の年報を見るに、甘藷根の穿孔者と題し、ゼー、スウ井ート、ポテトールート、ボーレアー、シラス、フォルミカリウスオリブィーア（Cylas formicarius, Olivier.）として恰も此蟻形象鼻蟲と同一種とも思ふべきものが甘藷作を加害することにつき、そが發生の模樣より習性等に到る實驗の結果を記錄しあれば、該蟲研究の材料ともならんかと信じ、左に之を記載して讀者の參考に供せんとす。

蟻形象鼻蟲の圖

此種は千八百七十八年の七月八日、米國フロリダ洲のマナテーと稱する所のジエー、ダブリユー、カーリー氏より其成蟲を得たりしが、同氏は同地方の甘藷作は全く該蟲の爲めに收穫を絶滅に歸せしめん由を報告せられぬ。而して、氏は又同地より少しく離れたる所の甘藷栽培家なるギルレット氏の質問に對し、其習性を明答し能はざりきと云へり。余は、千八百八十年の二月二十日に、該蟲の件に就き充分調査を試みんとて其被害地に出張せり。然るに、不幸にもギルレット氏が該蟲の加害猛烈なるより、所有の甘藷を悉く採堀せられたる后に邂逅したりき。されど此種の爲に受くる所の損害は莫

大にして、所によりては殆んど甘藷作の全部を勦滅に歸せしめし由を聞けり。

此蟲は其形狀恰も蟻の如く、翅鞘、頭部及び口吻は藍色を帶びたる黑色にして、胸部は帶赤褐色を呈せり。卵子は帶黃白色にして、管狀なる根部の一端、莖部に接近せし所に小孔を穿ち、其内に產附せられ、乳白色を呈せる幼蟲は根部の各方向に穿食し、所謂トンネルを造る爲めに甘藷の蔓は枯死するに到れり。而して此トンネル中を驗すれば、全く幼蟲の後方部は其糞を以て充塞し、蛹化せんとする時は卵形の孔を造り、其中にて化するを常とす。

二月に於て、余のマナテーへ出張せし時は成蟲のみありしが、五月の十七日にはカートリー氏より僅かの蛹と共に卵子及び成蟲の存在する所の甘藷を得たりき。而して飼養瓶中にて、此等のものが三十一日間を費して、卵子より成蟲に到る迄の變態を完ふせしことを知得したりしが、其内蛹にて八日間を費せり。之より之を考ふれば、該種は此時期に到る迄には既に三回の變化を終へたるものならん。然し、今後尚幾回の變化を爲すものなるやは明言し難し。

該蟲の驅除法としては、尚、詳細に此種の習性經過等に就き、研究を爲すにあらざれば考按を發見し難し。故に、目下の處、該蟲の加害を見出すに當り、直ちに堀り採りて家禽に食せしむるの外致方なからん。此種の分布は廣くして、レコント氏はコーシンチャイナ、インディア、マダカスカル、キユバ及びルイジアナ等に產すと云へり。余は、今フロリダの一產地を加へんとす。

右の記事に次で、卵子、幼蟲及び蛹の形狀色澤等につき、尚左の說明あり。

卵子は帶黃白色にして卵形をなし、附着部は稍細まりたり。其最も廣き部分にて〇、六五ミメを算し、表面は光澤を有せずして僅かの粒狀面を示せるも、此は肉眼にては明かならず。幼蟲の充分成育せし

ものは六ミメの長さを有し、肥大にして、側縁は稍乳頭狀を爲す。色は純白にして、頭部は淡褐色を呈し、口部は暗褐色なり、躰に有する細毛は肉眼にて見得べからざるも、鏡檢すれば容易に認知し得べし。胸關節の腹面、脚部の處には各一の大ある結節を備へ、腹部は滑大なりとす。蛹は最初幼蟲と同色なれども、漸次暗色に變ず、其形狀成蟲に似たり。脚の膝節は胸部外に達し、第一對のものは特に凸出し居るを見るべし。翅部と翅鞘は狹く、且つ短かくして躰の腹側に達し、口吻は胸上に下方に折れたり。而して腹部の末節には后方と、外方に二個の曲りたる角狀突起を具有す。頭部の末端には數個の小結節ありて、之より細毛を生せり。

以上の記事に依りて察するに、殆んど、我沖繩縣に發生して加害を逞ふする種類と同一種なるやの觀あり。若し果して同一種ありせば、該蟲の原產地は其何れの部分に屬するや、我邦にて、只沖繩縣地方のみとすれば、或は支那、印度地方より來りたるものにはあふざるか、兎に角記して以て后來研究の資料と爲す。

◎天牛の小實驗

靜岡縣　神村直三郎

明治三十六年三月九日、遠江國磐田郡岩田村一寺院の竹林を開墾するあり、予の好事、何か獲ものもがなと見に行きて蟲は出ずやと問ふに、何も出ませぬと人夫の一同は答へぬ。さるにてもとあちこちと、或は堀起したる處、未ぶ鍬のとゞかぬ處、そこかしこ尋ね居たるに、一人大聲に妙な蟲が居ましたといひ喜色滿面差出すを見れば、三四年も前に切りたるかと覺しき竹の切株の半ば腐れたる一塊にして、中に一幼蟲棲息せり。

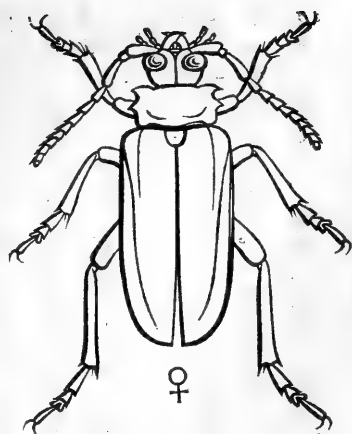
●●幼蟲　白色にして、長さ二寸五分、徑四分あり、天牛の幼蟲かと見れば、微かあがふも正に三對の胸脚あ

り、其顎強鋭にして、天牛の幼蟲に普通見るが如き腹背兩面の隆起物及粗面部なし、兎に角稀有なる幼蟲かな、いで飼育して其正体を見屆けくれんものと、即ち、考一考の後左の方案によりて飼育することゝはなしぬ。

●飼育、器は其竹の根株より少しく太き硝子瓶を撰べり。是れ其幼蟲をして尚根株の中に在るの思ひあらしめんがためなり。而して其器は深さ四寸五分、徑二寸五分あり、此中には其根株の周圍の有機物を含有する土を滿し、尚其從前の住所、且食餌たりし竹根の一片を加へて幼蟲をば其中に放ち、濕氣を土に與ふるがためには細管を以て瓶の側壁より腐りたる水を注入せり。

かくて、日々其幼蟲の擧動を透見せしに、中にトンネルを造りて安棲する樣子にしてあちこち運動してありけり。一ヶ月の後、即ち四月七日之を見るに、尚初めの如し。同月下旬に至りて中より瓶の四壁を土にてぬり、内部を透見することを得ざらしめたり。五月五日試に瓶内の土を少しづゝ去りしに、中には一の大空洞を造り、其中にて化蛹し居たり。而して幼蟲の舊皮は其傍らに在りぬ。

ノコギリカミキリムシの圖

●蛹、白色にして長一寸二分、幅五分五厘、六脚四翅の狀態腹面に備はり、鞭狀の觸角全体の半に達し、時々腹端を回轉す。即ち、再び是を瓶内に收るに當り瓶の一壁を透し、外より蛹体を見得る樣になし、木葉を以て洞の蓋となし、其上には例の土を置く、越て六月七日、白色蛹の透見せざるにより、再、瓶を開きしに、一成蟲ありて活潑に運動し居たるが、蛹皮のなかりしは蓋し食盡したるものなるべきか

●成蟲、成蟲は雌にして、岩川氏のノコギリカミキリ（動物學雜誌第十二卷百四十一號日本天牛科第一版第一圖）なり、体長一寸三分、幅五分、觸角七分、前胸の左右に二個の鋭突起ありて、翅鞘は光澤ある黒褐色なり。其の觸角岩川氏の記事と合はざるは、雌蟲なればあるべし。又同氏の云はるゝ如く、幼蟲はブナの老木をも食するかは知らざれど、腐りたる竹根を食するは明なり。友人某の言よも、竹林を切開きて小學校を建築せしに、其庭園より該成蟲の多數出たりとあり、彌々以て竹根を食ふの說堅固なるに似たり。

予の寡聞なる、天牛科の幼蟲は皆無脚なるが如く記臆し居たりしものが、以上の實驗によれば微々ながらも六脚を有す。即、其幼蟲の說明よ、此の一項を加ふるの價値あるものとなれり。不完全ながら日誌より拔萃して、貴誌に寄することゝなしたり。

◎除蟲液の性質を述べて害蟲驅除に及ぶ

靜岡縣　岡田忠男

編者云、本篇は去四月開會の第六回岐阜縣害蟲驅除講習會開期中、靜岡縣農事試驗場技手岡田忠男氏が一場の講話を試みられし際、筆記の大要なり。注油驅除に就ては時節柄參考に資すべき節あれば茲に揭ぐる事となしぬ。

私は只今名和先生から御照會下された、靜岡縣の岡田と申すものであります。這回大阪博覽會見物の爲めよ參りました歸路、一寸此處へ立寄り、名和先生に御目に懸りました處、幸ひ此會が開けて居るから何か話せと先生から御注文がありましたが、何分突然の事で宜い考へもありませぬ故、私は先づ除蟲液よ就て、少しく御話し致さうと思ひます。然しながら無學無識なる私の取調べましたのであるから、不

行居で分らない事もありませうが、其段は御許しを願ひます。
扨て私の縣では、害蟲驅除の事が充分行屆きませぬから、年々少しは苗代田の驅除を致しましても、本田ニ植付をしてから後に於て、必ず螟蟲や浮塵子にやられます。先づ螟蟲の事は差し置きまして、浮塵子の本田ニ發生の際は、最も初期を見計ひて、注油驅除を行ふのが肝要の事と考へます。其れニ付て、私は一般農家に對し、浮塵子發生の際は、可成初期を見計ひ、是非油を注ぎて驅除する樣ニと申して居ります。而して其油は何油であるかと申しますと、油の種類も種々樣々でありまして、到る所異つて居りますが、先づ燈油として何處にでもある石油で、是は何處でも浮塵子驅除ニ用ひます、又近年頻りに除蟲液と申すものが、我縣下などへは、諸處より輸入して參りまして、何處にでも此油を賣て居ります。然し一般の農民等は、此除蟲液は如何なるものであるか之を知るものは少ないのみならず、其使用を危むものが多くあります、依つて私は、是非此除蟲液の性質を調べて見たいと思ひまして、我縣下の輸入先を調べますと、先づ東京、名古屋、越後等から輸入されます。而して我縣下でも、或る所で製造して居りますが、其原料を調べて見ると、一は黃楝樹の煎汁に、他ニ何か二三品を配合したものかと聞きて居りますが、他の一ッは普通除蟲液と申して、浮塵子除驅の際用ゆる所のものは、石油製造の際に出づる所の滓の如きものであります。故に此除蟲液は濃厚にして惡臭ある暗綠褐色の液であります。而して此者は如何にして製造さるゝかと申すと、先づ順序として石油の製造に付て少しく御話し申さねば分りませぬが、石油の原料は、原油と申して石油の湧出する地方ニは、山の中腹に井戸が掘つてありまして、是れから汲み取りたる液で、これは、其の色が綠色を帶びて一種の臭氣があります。今此の原油を汲み取りて、暗き所ニ貯藏し置き、釜即ち、蒸溜器に入れて熱度を與へますると、一方の管の先へ白色にして透明なる液が第一番に出ます、是れを揮發油と申して、時計の器械等を磨く油であります。故に價も高價でありまして、一斗の代金が大抵七、八圓以上致します。其次ぎニ出ますのが即ち石油で、普通燈油と致すものであります。其次は輕油と申す油で、黃色ニ少しく赤みを帶びた色でありまして、是れは何も使ひ途がないと聞て居ります。其次ぎに出るのは重油と申すもので、其色が暗紫赤色と云ふ樣な色かと思つて居りまを、而して、釜の内には、油滓が一石に對して一、二斗殘ります。此者は黑褐色にして、極めて濃厚であります。扨て除蟲液は此の内如何なるものから製造されるかと申すと、以上述べました、石油製造後の殆んど不用物を調合致すのであります。其調合の方法は、先づ大きある器に輕油を

何分、重油を何分、油滓を何分と混合したるのみで、斯様ゝ製作法は至極簡易なものであります而して其重油や油滓ゝは、臘即パラピンとか申すものがありますから直に水に散ります。然し全体のものが水に溶解することは見えませぬ。私は是れが全体水に溶けるや否やを試驗致しましたが、全く水に溶けぬ樣ゝ思はれます。其試驗は、大なる漏斗に木栓をなし、其栓の中央に長き玻璃管を通し、此漏斗に水を滿たし、其內に石油又は除蟲液を注ぎ、能く攪拌したる後徐々に玻璃管を拔き、下部なる水のみを取りて、多くの人に其臭の有無を訂したるに、一人も石油及除蟲液の臭氣を感ずるものなく皆油は水面ゝ浮びて居りました。然し私は下なる水に、油分が溶けて居るや否やを化學的に調査して貰はなかつたのが遺憾でありましたが。前申上げた通り、先づ水に臭氣も付かず、且油は水面に浮で居りますれば、水に溶解せないものと考へても差支はありませぬ、故ゝ水田に油を注いでも、其れを排除さへすれば、油分は流れ去りますから、稻に害はあるまいと考へます。又除蟲液と石油の價を比較すれば、其價は除蟲液が一升十錢なれば、石油は十五錢致します。農家の經濟より申せば、成るべく價が安くて効能が澤山あり得らるゝ程結構なることはありませぬ、されば、除蟲液でも宜いが、然し石油が却て安く、除蟲液が少ない所で、價が高かつたり、又は得られない處であつたら、無理に求むる必要はないと考へます、今迄で御話致しました通り、除蟲液と申すものは、別なものでもありませぬが、然し除蟲液にも其調合の分量によりて、種々善惡がありまして、之を鑑別致すことは、農家として余程六ヶ敷と思ひます。

斯樣なことを長く申ましても御縣の如く、最早數回の害蟲驅除講習會を御開きに成り、害蟲驅除も充分行屆いて居る處に來て、斯樣な除蟲液などの話は、或は不必要かと考へますが何も差當り御話することがありませぬから、唯、責塞ぎに申上たので何も御參考ともならないのは實に愧じ入る次第であります。尙諸君には將來益々御研究の上、是非共昆蟲學の深味を會得せられ農業上我れ〳〵が期する所の、應用昆蟲學の價値を發揮あらんことを偏に希望する所以であります。

◎アゲハノテフの經過に就ての實驗

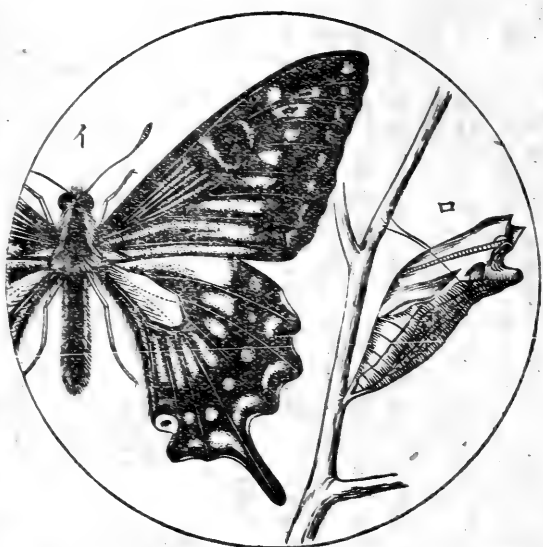
岐阜縣長期害蟲驅除講習生　中井藤助

編者云ふ、本篇亦水曜昆蟲會席上に於ける同氏の談話にして、此實驗は本誌前々號所載の續きなれば、參照せられんことを要す。

先會に於て、アゲハノテフ蛹化の準備として、幼蟲が糸を樹枝に纏ひ、次に環狀の糸を以て自己の躰を

支ふることゝ付き申し上げましたが、只今は其後の經過即ち脫皮して蛹となり、成蟲となる迄の經過を御話し申し上げ樣と存じます。

（イ）はアゲハテフの成蟲
（ロ）は其蛹

五月廿九日午前十一時廿分ゝ到り、第二關節の背面及側面稍々隆起して、全躰舊皮と新皮との間に水波を生ド、十五分間程經て、第二關節の背面の皮膚開裂し、頭部の先端少し出ました。其れと共に躰を伸縮しますれば第三關節より、漸次第四第五關節開裂して外皮を順次下方に脫き下げ、漸次縮みて腹端に到るや、舊皮を脫して直ちに以前ゝ掛け置きし糸ゝ、腹部の先端を附着しました。此腹部を舊皮より脫して糸に纏附する間は、僅かに舊皮が腹部に附着し居る時にして、若しも風其他のものゝ激動を與へられたれば墜落を免ぬかれざらん有樣で、實に危機一髮の間ゝて、其巧妙なるヿ又本能とは云へ感すべきの至りであります。而して尙舊皮の全く落ちざるを以て、幾回となく躰を廻動し、二三分間にして其皮落ち、茲ゝ全く脫皮し終つて蛹となりましたが、糸を懸けましてから之まで卅時間を經ました。以後數日間は、別に變化致しませんでしたが、六月十日頃、今まで靑色の蛹が稍々薄白色を帶び、翌十一日に到たれば、旣でに成蟲の有する躰の班紋は、畧ぼ蛹皮外より認めらるゝ樣ゝなり、又頭部にある一双の突起物と、胸背上に有る一の突起物とは半透明となりました。

十二日午前第八時頃、羽化の前兆と覺しく全躰微動し、凡そ十五分を經ちますると、頭部にある一双の突起物と、胸背上の一つの突起物との間が開裂して、頭部現はれ直ちゝ胸部の腹面の角に向つて、其先端僅かを殘し、左右觸角を藏する邊に沿ふて斜に裂け、同時に觸角、胸部、腹部等漸次出で、遂に全く出殼し終て、附近の樹ゝ移る時は八時三十分でありまして此間十五分を要しました、而して此者は觸角胸部、腹部及脚部等は、老成の成蟲と差異を認めませんでしたが、二双の翅は甚ご小さく、僅か三四分

より過ぎないのであります。さりながら暫時口吻及翅を動かせば、翅は漸次延大となり、凡そ廿五分間よりして飛翔に堪ふる充分な翅になりました。以上述べましたのは、蛹化より成蟲に至る迄の經過の大畧で御座り升。今迄私は數頭を飼育して來ましたが、要するに皆殆んど其經過の時日等にも大差なきようで御座いました。之を取り摘まんで申せば、即ち始め黒褐の幼蟲は、四回脱皮して青色となり、そのもの二週間内外にして糸を引きて己の躰を縊り、三十時間内外よりして五回脱皮して蛹となり、後二週間内外よりして成蟲となつたので御座います。

◎六足蟲彙纂（未の卷）

在東京　長野菊次郎

（十九）亞米利加野蠶の食量と生長　鱗翅類の幼蟲が多量の食物を食ひて速に生長することは、人の能く知れる所ろあり。今、ツルーブロ氏（Trouvelot）は亞米利加野蠶の（Telea polyphemus）の幼蟲の嗜食力につき、次の如く言へり。曰く、此幼蟲の生長の速かなることは實に驚くべき程にして、其食料を要することの莫大なるは、到底實驗せざる人の殆んど信ずる能はざる程なりと、今、同氏の試驗によれば、此幼蟲の始めて卵より孵化したる際は、僅に一グレーン（邦量一厘七毛强）の二十分の一に過ぎず。然るよ十日を經れば一グレーン二分の一となるを以て、即ち最初の重さの十倍とあり、二十日を經れば三グレーンとなりて最初の六十倍となり、三十日には三十一グレーンとなりて六百二十倍、四十日には九十グレーンとなりて千八百倍、五十六日即ち十分生長したるときは二百〇七グレーンとなりて四千一百四十倍となるあり。又幼蟲の三十日間に要する食量は殆んと九十グレーンなれども、五十六日間乃ち十分の生長を遂ぐるまでに要する全量は、槲葉の百二十葉に當り、其重さ一磅の四分の三に當る、此他半オンスの水をも要すと言へり。然れば、唯一疋の野蠶が要する食物の全量は、幼蟲の最初の重さの八萬六千倍に相當せり。豈驚くべきの至りならずや。（パッカード氏昆蟲研究指針）。

(二十)沒食子蜂科の世代の交番　今より五十余年以前、ハルチッヒ氏(Hartig)は沒食子蜂の蟲癭より、或種の多數を脫化せしめしに、二萬八千個の蟲癭より殆んど一千のヂスチカ沒食子蜂(Cynips disticha)を得、又ホリ沒食子蜂(C. folii)の蟲癭より其種の三千或は四千を得たり。然るに、此等の蜂は皆雌のみなりき。而して此觀察は其後他の博物學者によりて一層確信せられたり。そが中にフレデリッキ、スミス氏(Frederich Smith)は如何にもして此蜂の雄を得んと欲し、或時エングランド(England)の南方に於て、コラリ沒食子蜂(C. Kollari)の蟲癭四千四百十個を採集し、此等より千五百六十二疋の蜂を得たり。然るに、此等も亦雌のみにして、雄は一頭だもあらざりき。かく第二の實驗も亦同一の結果を奏すると且ハルチッヒ氏の多年實驗の結果とは、遂に同氏をして、沒食子蜂屬の二十八種は一も雄を見る能はさることを發布せしむるに至りぬ。是蓋し千八百四十三年なり。然るに其後此等の事實には多少の誤謬ありて、多分雄蟲は異りたる蟲癭に棲むならんとの意見表はれたり。是に於てアッドラー氏(Adler)は此等の疑問を解決せんと欲し、蟲癭より脫化したる雌蜂を取りて、鉢に植ゑたる小さき槲に移し、單爲生殖によりて蟲癭を作らしめんことを勉めたり。然るに、此企圖は實に好果を奏して非常の發見をなしたりける。即ち此等の雌は單爲生殖によりて、鉢植の槲に新なる蟲癭を生じけるが、此蟲癭は母雌の出でたるものとは全く形を異にするものにして、從來、全く別種と認められたる蜂の出づる蟲癭と同一なりき。かくて此形の蟲癭より始めて雌雄の兩性を生ずるに至りぬ。アッドラー氏の觀察は他の博物學者の實驗によりて愈確實となり、遂に沒食子蜂科(Cynipidae)に屬するものは、世代の交番を行ひて、其一世代は單爲生殖をなすものなることを確定するに至りぬ(ケンブリッヂ博物誌)。

◎螟蟲驅防奬勵展覽會準備記事（第二）

蟲の家主人

(一一)滋賀縣栗太郡大寶村農會螟蟲驅除奬勵規程　栗太郡大寶村農會にては螟蟲驅除豫防奬勵の爲め左の規定を設け、已に本年五月廿日より實施の由。害蟲驅除豫防奬勵上有益なる事業なれば、茲に掲載することゝなしぬ。

(第一條)螟蟲驅除を奬勵せん目的を以て懸賞抽籤券を發行す。(第二條)抽籤券は螟蟲卵塊二百個、又は螟蛾五十頭毎に各一枚を交付す。(第三條)懸賞抽籤券等級金額及個數は左の如し。「壹等」金一圓五十錢五個通計金七圓五十錢、「貳等」金一圓八個通計金八圓「參等」金五十錢十五個通計金七圓五十錢、「四等」金三十錢二十個通計金六圓、「五等」金十錢三十個通計金三圓。(第四條)卵塊は二百個を一

束とし、蛹は五十頭を紙袋に入れ各字所屬幹事に差出すべし。但二百個又は五十頭に滿たざるものは一個と見做さず。（第五條）各字幹事は前條の數を精査し、之を取纏め、三日毎に採取者の氏名と共に現品を村農會長に差出し、抽籤券の交付を受くべし。（第六條）村農會長は字幹事より受けたる現品及氏名を對照し、登錄の上相當の籤抽券を交付すべし。（第七條）驅除期日は五月廿日より六月十日迄三週間とす。（第八條）抽籤執行は八月中に於て村農會長之を定め、字幹事二名以上の立會を以て之を行ふものとす。但し、執行期日は執行前少くも五日前に各字幹事に其旨を通知するものとす。（第九條）立會人は村農會長之を指定す。（第十條）被指定者は正當の理由なくして是を拒辭するを得ず。（第十一條）抽籤券は紙片に一二の數字を記入し、村農會長印及取扱者の認印を押捺するものとす。（第十二條）螟蟲驅除抽籤記簿を調製し、當籤者の記號、金額、氏名を記載し、保存するものとす。（第十三條）螟蟲驅除統計簿を調製し、第六條の登錄をなし、成績の結果を明にすべし。

尙、同會にては左の通り實施督勵しつゝある由。（一）捕蟲網を調製し捕蟲監督として村農會員巡視すると、（二）螟蟲卵塊は五個に付壹厘の價格を以て買入るゝと、（三）苗代の誘蛾燈は六月一日より十四日迄二週間点火すること（滋賀縣農會報第十六號）。

（一二）岡山縣の奬勵金下付規程

岡山縣知事檜垣直右氏は、三十六年五月十九日、岡山縣令第四十五號を以て、害蟲驅除豫防奬勵金下付規程を左の如く定めらる。

害蟲驅除豫防奬勵金下付規程、（第一條）本規程の奬勵金は明治三十六年に於て、稻螟蟲の卵塊を採集したるものに下付す。（第二條）奬勵金を受くべきものは、明治三十六年七月二十日迄に卵塊を添へ、市役所又は町村役場に屆出たるものに限る。前項の卵塊は二百個毎に一纒となし、端數は別に纒め封皮に其數を記し置くべし。（第三條）前條の屆出を受けたる市長又は町村長は、左記書式により卵塊を添付し、明治三十六年七月三十一日迄に、市長は縣知事、町村長は郡長に屆出づべし。郡長は八月十日迄に、採集者住所氏名及卵數を縣知事に報告すべし。（第四條）本規程の奬勵金額は參千圓を限りとす。（第五條）前條の金額は採集せる卵塊の數に應じ下付するものとす。但卵塊一千個に付金壹圓を超過するを得ず。一人に付採取せる卵塊二百個未滿のものにては奬勵金を下付せず。（書式）螟蟲卵塊採取屆。採取者住所氏名。卵塊數。合計。右採取せる卵塊を添へ及御屆候也。年月日市（町村）長氏名。知事（郡長）宛。

（一三）岡山縣の螟蟲驅除豫防法

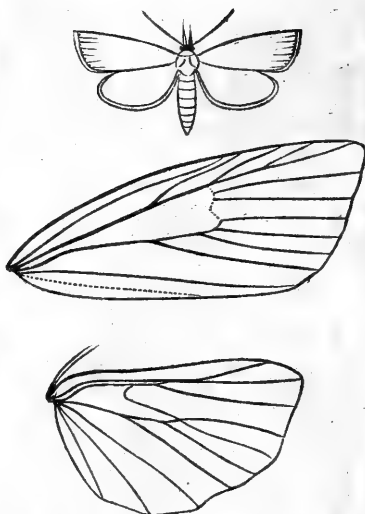
檜垣岡山縣知事は本年五月廿四日、縣令第四十八、九の兩號を以て螟蟲、浮塵子の驅除豫防法を命ぜられたり、今其螟蟲に關する所のみを掲載すれば即ち左の如し。

（縣令第四十八號）、縣下各郡の稻苗代地、直播田及陸稻畑に螟蟲發生せしに依り、明治二十九年法律第十七號害蟲驅除豫防法第三條に據り、左の期間及方法に依り、郡令の定むる期限に從ひ驅除豫防を行ふべきとを命ず。主務官吏又は警察官吏に於て、施行の方法不完全にして其効充分ならずと認むる時は、該官吏をして直に臨時驅除豫防を命ぜしむ。

（第一）苗代地に於て螟蟲驅除豫防の期間及方法　（一）六月三日より同廿五日迄の間に於て四回以上採卵を行ふべし。（二）六月十一日より同廿五日迄の間に於て點火し能はざる風雨の時を除き、毎夜點燈誘殺を行ふべし。

（縣令第四十九號）岡山市の稻苗代地に螟蟲發生せし云々（以下四十八號と同文）

（第一）螟蟲驅除豫防の期限及方法　（一）六月八日迄に第一回採卵を行ふへし。（二）同十四日迄に第二回採卵を行ふべし。（三）同廿日迄に第三回採卵を行ふべし。（四）同廿五日迄に第四回採卵を行ふべし。（五）六月十一日より同廿五日迄の間、點火し能はざる風雨の時を除き毎夜點火誘殺を行ふべし。

二化生螟蟲の雌蛾と其翅脈の圖

（一四）二化生螟蟲の翅脈　蝶蛾類の調査には專ら翅脈研究の必要あるを以て、邦產蛾類に於ても亦漸次研究せらるゝに到れり。所友長野菊次郎氏には目下專ら此の方面に向て進行せられ既に數百種の翅脈を調査せられたるが、其內二化生螟蟲の翅脈の原圖を同氏に請ひ、特に玆に示して參考に供す。

（一五）誘蛾燈に對する螟蟲會議　古來、飛で火に入る夏の蟲と稱し、昆蟲の或種の燈火を慕ふて集まるの性あるを利用し、誘蛾燈又は殺蟲燈と稱して夜間點火を爲し、其下に水を盛れる盥の如きものを受け、之に石油少許を注ぎ置かば、螟蟲蛾を初め種々なる小形昆蟲の來りて投入死滅するものなり。故に目下誘蛾燈は螟蟲驅除の良法として中々廣く採用せられ居れり。而して漸次減少する傾向あるも、尙未だ容易に中止するの時期は來らざるべし。玆に於て螟蟲會議あり之を傍聽するに、甲の曰く、誘蛾燈の採用せらるゝ間は、吾等種族の絕滅は勿論繁殖にも余り大なる妨碍あらざれば、先づ安心し居るべしと云へば、乙曰く、然し甲の云へる如く中々安心は出來ざるべし。何となれば、誘蛾燈に入らざる時には自然無効と稱し、又如何なる方法を以て吾等を苦むるやも計り難し、幸ひ吾等に類似せる小蛾類を誤魔化して投入せしむれば可なりと。丙曰く、成程乙の云ふ通りなれども、此頃は漸次吾々仲間の性質、形狀等を研究するもの出で來りたれば全く雜蛾を誤魔化し置くのみにては十分ならず。故に繁殖の義務を果せる雄蟲をして、吾等社會の犧牲に供せしむれば如何。丁曰く、如何にも丙の云ふ如くなれども、雄蛾のみにては、或は疑ひの

起る心配もあれば、是非産卵後の雌蛾も投死せば安心ならん、戌曰く、諸君の考ふる如く雌雄共投死せば差支なき樣なれども、若一研究の末、腹部に卵子の無きことを發見せられざる内に、病疾等に罹り、最早産卵の力なきものは勉めて早く投死せしむるを得策とすと。以上の會議に依れば、誘蛾燈を用ひて容易に驅除の効を奏するの如何は、一目否一讀瞭然たるべしし

◎藥用に供する昆蟲

千葉縣　林　壽　祐

藥用に供する昆蟲と題すといへども、こゝには普く民間に行はるゝものを蒐めたれば、悉く確實なりといふに非ず、唯一々其出所を示したれば、これが信否は宜しく讀者自身に定むべし。但し本文中○は民間に行はるゝもの、◎は昔の書物に載せられしもの、●は現に藥舖に販賣せらるゝもの、◉は動物學上及び醫學上に出づるものと知るべし。

(一)直翅類　○蝗は黑燒と爲し、小兒の疳の藥に用ふ◎蟲螽もまた黑燒とし、これに朱を混和し、水にて練りシモヤケの患部に塗れば効あり。●赤蜻蛉の黑燒も藥用となる。○蟷螂は、棘をつきたる創口に塗れば、速に治するを得べし。又腫物にも効あり。

(二)有吻類　○蟬の脫殼は粉末と爲し、耳の藥に用ふ。○五倍子蟲は、酢と混合し、瘰癧の藥に供す。◉臙脂蟲(Coccus)は、赤き色料となるを以て著はる。其一種は下劑藥となる。◉呀囒蟲(Cochinillifera)も、コクシダの一種にして、多くカルミン酸を含有す。齒牙用の丁幾に製し、又神經、腎臟、利尿等の諸藥に供せり。此蟲は墨西哥國の原産にして、今は各地に傳殖せり。

(三)雙翅類　●虻の一種は內科用に供す。

(四)鱗翅類　●蠶は藥舖にては白姜虱と稱す。俗間其糞を煎じ癇病の藥と爲せり。○黑鳳蝶の翅にある細粉は腫物に効あり。

(五)鞘翅類　◉芫菁(Lytta)は、一に靑斑猫と稱し、羯答利素を含有す。普通發泡膏に製し、効能頗る多し。或は誘道藥となし、又芫菁丁幾に製して毛髮病に用ふ、露西亞より多く産出す。◉葛上亭長(Epicauta)は、豆類に棲めり。之を捕え、熱湯にて殺し、乾燥して潑泡劑に製す。本邦にては上總産を以て良質となせり。普通豆畑に居れども、一旦藥舖に出づれば、劇藥なりとて容易に販賣せざるなり。◉地膽(Meloe)は、一にアリノオヤヂと稱し、醫藥に供せり。●螢は、藥舖にて熱取藥と爲し、民間にては細粉として指痛症に用ふ。

（十八）膜翅類　◉沒食子蟲（Cynips）は、よく櫟に生じ、其沒食子は多く單寧酸を含有す。醫療にては、煎藥、收斂劑、或は丁幾に製し、中毒病、下痢病等に用ひ、又外科用として効多し。◉蟻は、腹部に蟻酸を含有するを以て、丁幾、或は蟻精に製し、神經、僂痲質斯等に用ふ。昔西洋の民間にては、蟻を囊に充たし、僂痲質斯の患部に當て、又以て治療に供したりといふ。○蜂の幼蟲は、燒きて小兒の疳の藥と爲し、又蜂の巢と甘草とを混じ、煎じて飲用する時は、耳の聞えざるを治すと云ふ。◉蜜蜂（Apis）の巢は有用なるものにして、蜜と臘とを得べし。蜜は調味等の諸藥となるべく、臘は膏藥、丸藥となし、或は血止めとなし、或は洞齒の充塞物と爲す等、其効能多しとす。

▲附記　◎耳の中に蟻の匐ひ入りたる時は、煎胡麻を囊に充て、マクリとなせば効あり。○毛虱生じたる時は、唐辛或は煙草の粉末を塗れば効あり。○蜂に刺れし時は、創口に青芋の葉柄の汁液を注ぎ、或は齒糞、又は釣瓶の水垢を塗り附くれば其痛を去るべし。◉毒蟲に刺されし時は、アンモニアを用ゐて効あり。◉毒蟲及び毒蛇の毒を受けし時には、荳科植物の一種ハブサウの葉液を附け、以て療するを得といふ。

◎昆蟲界の興業者

東濃諏訪尋常小學校　長瀬清五郎

予、此頃右足の膝關節に腫物を生じ、好める野外の運動も出來ざるより、昆蟲界の興業者を一つ二つ記しつけぬ。固より參考書もなく、只思ひ出せる儘なれば、杜撰遺漏も多かるべけれど、唯、人にして蟲にだも如かざる、怠惰者流の頑眠を覺さんと欲する微意のみ。

（一）建築者　○ミノムシ、枯葉小枝を集め、糸を吐て人間界の、繩からげ的居家を巧に作る。頭のみを出して、草木の葉を食ひ盡れば、家と共に他に移る。敵に逢ひ、又は食に飽けば、其中に隱れて眠る避債者の世を忍ぶに似たり。○アリ、土木建築者にはアリこそ殊勝なれ。殊に共同一致、力を協せて働く樣は、彼の支離滅裂、黨爭ならずんば我利つくものと、同日の論にあらず。普通は大地に隧道を穿て其家を作れど、一種木皮の裂縁等に沿ふて營むもあり、又アフリカなどには人をも上らしむる程の蟻塚を作るものありと。○ケラ、土工を以て世に許さるゝだけありて、常に土中に穴居す。されど時ありて空中に飛翔し、溝河を越て居を移す。斯の如く、所謂水草を逐ふ的性行なるゑ、其建築構造甚だ粗雜なり。○ハチ、全躰を蠟細工にて築くミツバチあり、泥細工を以てするジガバチあり、樹皮を咀嚼粉碎し、粘

液にて涅り固むるアカバチ、ヤマバチ、ヂバチ、アシナガバチ等あり、兎に角、其精巧なるは、人工の及ばざるものあり。○テッパウムシ（天牛の幼蟲）樹幹等の中に穴居す、通風採光は殆んど皆無にして、構造巧ならずと雖も、木屑を以て通路を塞ぎ、又其隧道を屈曲して敵を防ぐの用意なか〳〵周到なり。○アリヂゴク（ウスバカゲロフの幼蟲）、軒下岩下等雨のあたらざる所の膨軟せる土中に居を構ふ、建造簡單なれども、敵を防ぎ、獲物を捕殺するの用意を觀るべし。

（二）紡績者　○カヒコ、近頃西洋人中人工絹絲を發明したりなど吹立るものあれども、カヒコのそれに較ぶれば、其巧拙又論なし。○ヤママユ、一時柞蠶とて、或る山師の爲に、傳來の家產まで失ひしもの東濃にはありき、然れども、其はヤママユの罪にはあらず。○クリケムシ、漁者の一要具として、釣糸には欲くべからざるテグスを人に供す。然れども人智未だ進まずして、彼が成工せざるに、理不盡に壓殺して腸を抉出し、直に酢に投ぞるは慘の極。其他ケムシ、ナムシ等昆蟲界には、尙多少紡績するものあれども、以て國家に貢獻するは、右等に止るか

（三）釀造者　○ミツバチ、一王の下に同心戮力春より秋まで、夏の暑き日は日中僅に休息するのみにて營々花より花に飛び廻り、蜜を集め、之を釀し、蠟細工のタンクに貯へて、不時の用に供ふるは、彼の僅かの不作に飢を訴ふる或地方の農民と撰を異にす。○オホマルバチ、地を深く穿ち、一子に一個つゝ粘土を以てタンクを作り、蜜を滿てゝ乳汁に代て之を與ふ。則ち子を育つるは、親の務なることを知るものと謂ふべし。○アブラムシ、草木の同化液を吸ふて蜜を釀す。故に農家には最も嫌はる。昔漢土にては之を甘露なりとて、臺を作りなど祭禮的噪ぎをなせしことありと云ふ。

（四）牧畜者　○アリ、好める甘汁を得んが爲に、蚜蟲を諸方に運びて繁殖せしめ、或は蚜蟲の爲に、害敵と戰ふて、互に殺傷することありと云ふ。

（五）航業及潛水者　○カハグモ、形蜘蛛の如くして、長き四脚と短き二脚を働して、自由に水上を航す○マツモムシ、背を下になしたるは、小さき裝甲艇とも見るべく、短き六脚にて漕廻る樣の可笑しさ、未だ曾て坐礁等せしことなしと云ふ。其他タガメムシ、ユリノハナスヒ、ミヅカマキリ、ゲンゴロフムシ等は共に潛水術に長ぜるものなり。是より水底の新事實を、陸上同類に知らしむるものは、蓋し彼等ならんか。

（六）冒險者　○アリ、銳利ある一對の鋏を口角に含み、全身甲冑にも似たらん如き剛き皮を被り、滿

身是膽的の勇氣當り難し。或時は隊を組み或時は單獨に險を冒して遺利を探撿し、一旦獲物に遇ふや、奮進身を以て之に當り、命を輕んずること鴻毛の如し。日本國民古來勇を以て稱せらる、彼れ是に傚ふか、此れ彼に傚ふか。○ハチ、人間には輕氣球の發明ありたれど、未だハチの如く自由ならず。彼は一對の膜翅を開き、單身山を越え、川を越え、縱横に探撿して、獲物あれば、例の毒液を塗れる利劍を振ひて一撃に之を倒し、餘り重量あるものは、數回に運ぶ。此際其場所を記臆するの識力、なか〳〵感ずべきものあり。

(七)彫刻者　○コクゾウムシ、世に微妙彫とて、持囃さるゝものあれども、恐くは、未だ曾て米麥粒乃至粟黍粒をくりぬきて、其内面に細工する穀象蟲程のものはなからん。其他麥蛾、穀蛾、シンクヒムシの類は、同業組合員中の優者なりと。

(八)樂器業者　○直翅類、此仲間は昔より、風雅者流に名を知らるゝもの多し。先づスズムシはリーン〳〵、マツムシはチロリン〳〵と鳴る樂器を造り、カチタタキは小く活潑にスエン〳〵と鳴らし、エンマコホロギはクチエ〳〵、コホロギはコロコロジー〳〵と鳴らす。ガチヤ〳〵〳〵と續けさまに騷々しきはクツワムシにして、ギースチョン〳〵と涼しさうなるはキリギリスなり。又シー〳〵と馬を追ふやうに鳴らすはウマオヒムシにしてバタ〳〵〳〵と千兵一時に馳出せるが如き羽音を立るはバッタあり、平家の御曹子ならば夜逃にや仕給ふらん。扨其樂器は如何なるものかと云へば、脊に負へる前翅にして翅面には龜甲形、鞘形等の脈條あり、それを擦合して音を出すなり。キリギリス、クツワムシ等は二枚の前翅を上と下とに重て、右の表と左の裏とを擦る。而して前右翅には、太鼓の如く圓き膜ありて響かする故に、其音高し。又キリギリス腿等のシユー〳〵と云へる音は、後足の內腿に細刻せる紋ありて、之を翅の脈條に擦合はすなり。畢竟人間が是等の音樂を聞てナクと云ふも、既述の如く、口にて啼くにあらずして、翅即ち彼等の作れる樂器の鳴れるなり、○有吻類、此連中には、僅かセミのみにて、ヒグラシゼミ、ツクツクホウシゼミは稍聞くに足れど、喧しさばかりにて、更に面白味なし。其樂器ハ呼吸口に張れる膜にして、強く空氣の觸るゝに依て鳴るなり。其他双翅類にはハヘ、カ、アブ、ブイ等あり、鞘翅類にカミキリムシ、タマムシ、コガネムシ、ハンメウ等あり、膜翅類にはハチ等あれど、大槪翅にてブン〳〵、或はビン〳〵等單調の音を發するのみ、餘り人間界に賞せられざるものなれば玆に略しぬ。

編者云ふ、記者は蟲界の興業者として、兩棲類より、蜘蛛類に至る迄記されたるも、昆蟲以外のものは、餘り關係淺ければ昆蟲界の興業者として、それ等を省きたり。

◎稻の根喰葉蟲に就て

在姫路市　川越誠吉

稻の根喰葉蟲に就ては、本誌第十四號に名和靖氏、同第十五號に鳥羽源藏氏の所説あり。且つ、其他の昆蟲書に諸學者の所説を見ると雖も、未だ其發生の經過に至つては充分の記述あるを見ず。然るに余は本年此根喰葉蟲に就て大に研究するの必要に迫られたる結果、余が本年經驗せし事實を陳述すると共に世の該蟲に就き研究せられたたる事實殊に根喰葉蟲の冬期に於ける情態に就き、世の實驗家の高説を聞かんと欲するものなり。余は本年七月二十日、始めて兵庫縣飾磨郡津田村の內今在家村字津田前新田に四五町歩、英賀保村の內英賀村字粕谷新田に約一町歩、同字十八新田に約五六反歩、同字五郎太新田に約二三反歩、合計約七八町歩根喰葉蟲の被害あるを發見せり。而して以上の塲所は凡て相近接したる土地にして、海岸の一毛作田あり。土壤は泥土にして地下水高く、蛭藻（方言バルムシロ）多く發育し、而して多きは一株に四五十、少なきは五六の根喰葉蟲の附着するを見受けたり。余が發見したる當時即ち七月二十日には、幼蟲六分、蛹三分、成蟲一分の發生を認めり。聞く處に據れば同地方は四五年以前より、作人の該蟲被害を認むる處にして、既に昨年、一昨年の如きは収穫皆無なりしと云ふ。而して同地方の作人は該蟲を稱して小麥と稱せり。蓋し、此繭の能く小麥粒に相似たるを以てなるべし。且つ、該蟲驅除に就ては從來素人的に種々の方法を實行せしと雖も、未だ充分の効果を奏したるものあらず。茲を以て余は其方法の果して當たれるや否やは難計と雖も、差當り目下の驅除法として次に述ぶる處の方法を指示し、作人をして此方法を實行せしめたり。即ち、其方法は水を入れたる桶を持廻はらしめ、稻株を拔き取り、其根に附着せる根喰葉蟲を、其桶の中にて一々洗ひ落し、再び其株を移植せしめ、蛭藻は之れを一々取集めて除去せしむる方法を取らしめたり、是れ元より余が所謂一時の窮策に出てたるものにして、果して其當を得たるものなるや明かならざる處なるが故に、此の塲合に於ける驅除法に就き余が世の實驗家の明説を聞かんと欲する一なりとす。然り而して、以上の方法は、元より前述の如く發見當時に差し當り余が指示せし方法にして、余は冬期に於ける充分の豫防法を講究せんと欲するものなり。而して根喰葉蟲と、鴨との關係に就ては、曾て鳥羽氏の所説の如く、當地方に於ても津田鴨と稱し有名なるものにして、此被害田に集まり、頻りに稻株を起し、其根に附着せる該蟲を食するを見る。故に從來作人は、或は案山子に、或は篝火に之れが襲來を防止せり。而して聞く處に據れば、冬期は此被害田に頻りに鴨の集まるを見ると云ふ。茲を以て推察する時は、根喰葉蟲の幼蟲若くは蛹を食せんが爲め

に鴨の襲來するに非らざるかを疑ふを得べし。即ち、冬期に於ては、根喰葉蟲は如何なる狀態にあるや之れ余が世の識者に問はんとするの第一義なりとす。然り果して冬期該蟲は幼蟲若くは蛹の形態なりとすれば、冬期間其田面に鶩を放飼する時は、大に根喰葉蟲を喰滅せしめ、一擧兩得の策たるべきを信ずるなり。尙、該蟲發生豫防の一として、田面に砂土を加入し、客土法を行ふ時は大に該蟲の發生を減少する事たるは、從來同地方の實驗に據つて明かなりとす。是れ一は蛭藻の發生を減少する一手段なるが故なるべし。要するに冬期該蟲の經過狀態を詳かにするは、該蟲豫防上最も必要なる事件なりと信ぞるが故に、茲に余が管見を陳述して、敢へて識者に問ふ所以なり。

◎昆蟲發句集

(三)蚊

(歲事記) 蚊柱、(事文類聚後集)秦には之を蚋といひ、楚には之を蚊と云、蚊は文なり、人の肌膚に文するの義なり。○時珍曰、木の葉及び爛灰の中に生じ、子を水中に產み孑孑虫となる、仍て變じて蚊となる。(和漢三才圖會)俗に云ふ、棒ふりむし、溝泥の中溫熱相感じて小蟲を生ず、長さ二三分、灰黑色微し科斗の形に似て常に一曲一直して棒を振る狀の如し。

我庵は蚊の小さきを馳走かな　芭蕉
血を分けし物と思はず蚊の憎さ　丈草
山里の蚊は晝中に喰にけり　去來
蚊のひとつ來りめる宵の曇り哉　猿雖
晝の蚊や机の下のかくし酒　梅室
庵の閑ほめて晝蚊に喰れけり　同
紛るゝや今さゝれたる蚊の行方　流芝
雨の暮傘のくるりに鳴蚊かな　二水
薄緣のへり傳ひ來るひる蚊かな　史千
逃た蚊の又來て頓て打たれけり　蘆丸
一ッ追へば四ッも五ッも啼蚊かな　可布

三重縣一志郡　喜田川要三郎

蚊の聲におされて低き草家哉　平波
蚊に起きて嬉しき母の寢顏哉　茶靜
螫されぬ事は知りつゝ打つ蚊かな　若非
蚊柱に夢の浮橋かゝるなり　其角
蚊柱や關を隣の草の庵　千本
蚊柱の暫らく退かぬ爐さき哉　鳥谷
蚊はしらや番禰宜衆のむた步行　九ま岐
蚊柱やぬけ出て見れば元の儘　湛石
孑孑も降りたか雨のたまり水　梅室
孑孑のわくや浮世のうつせ貝　重厚
孑孑や木にも石にも苔のつく　得蕪
孑孑や流るゝ水のいつこまで　水花
孑孑や蚊になるまでの浮沈み　三津人
さした蚊の憎うも高く飛にけり　緣田
晝の蚊や伐おろす木にまとひ啼　洞天
蚊は逃て打損にある天窓のあ　小柯
　虎山

◎博覽會出品害益蟲標本解說書（褒狀）

兵庫縣有馬郡立有馬農林學校

編者云。今回の博覽會に於ける昆蟲標本の多くは、陳列其當を得ず、或は其内容の如何を窺ひ知る能はざるものありしを遺憾とし爰に受賞の名譽ありし諸氏に請ふて其出品解說を得之を讀者に紹介して大に斯學界を利せしめんと欲し、既に幾多の投稿を得たれば漸次本欄に收むることゝなしぬ。

一、調製の目的　昆蟲の各種につき分類的に配列せるにあらず、單に害益蟲を區分せるにも非らず、植物殊に農用作物に對する害蟲及び其敵蟲即ち益蟲とを變態の形式及生存關係を一函內に配列したるものにして、容易に其各時の形態と、名稱と、經過と、幷に之に對する驅除豫防の方法を知らしめ、敎授上標本として至便至利を目的とし調製したるものなり。

右目的に副はしめんが爲に、其函の裝置は、中央部に一區劃を設け、其內部を內界と稱し、其外部を外界と稱す。而して其內界を必要に應じて二區、三區若くば四區に分ち、其劃を外界に延長して內界の區分數に從ひ外界を區分す、而して其各部は自由に取り外づしの出來得る樣にす、是れ標本指示の際、其他必要に應じて取り出すに便せんが爲なり。其函內の色に注意し可成蟲體の鮮明ならんことを期す。

蟲躰の配列は、中央の區劃內に害蟲を變態の順序例へば卵、幼蟲、成蟲との如く配列し、外界には其卵時代に於ける敵蟲を卵の外界區分內に、成蟲時代に於ける敵蟲は其外界區分內にとの如く配列す。而して敵蟲も變躰の明かなるものは之を示す。又形態の小にして見難きものは傍らに膨大圖を添付し且各名稱を明記す。各區分函の裏面には、其蟲類につき經過、產卵期、孵化期、驅除法、豫防法等の事項につき、特に注意すべき點を記載して參考に資す。

一、出品昆蟲の種類　一、螟蟲（二化生）　卵時代に於ける敵蟲（寄生蜂）、成蟲時代に於ける敵蟲（寄生蜂）成蟲時代に於ける敵蟲（蜻蜓、カマキリ、ムシヒキアブ）。一、蚜蟲　諸蚜蟲に對する敵蟲（クサ

カゲロフ、テントウムシ、大ヒラタアブ、ヒラタアブ）。

一、審査請求の主眼　教授上の參考に資する所ありや否や。

其内容、一、變態の狀況を知らしむるに容易なる點。一、害蟲に對する各種敵蟲及び變態の各時代に於ける敵蟲を一目の下に知り易き點。一、形態の小にして見分け難きものは膨大圖を添付せる點。一、函内の色取りに注意し蟲體の鮮明を期する點。一、函の裏面に注意事項を記載し參考に資せる點。一、必要に應じて各部分を任意に抽出し得ると、即ち取扱上極めて便利なる點。以上

◎博覽會出品理學科教授用昆蟲標本解説書（褒狀）

滋賀縣　大津尋常高等小學校

一、材料及製作法

鱗翅目　挵蝶科　イチモジセヽリ
鳳蝶科　アゲハ
粉蝶科　キテフ
小灰蝶科　ウラギンシジミ
蛺蝶科　コムラサキ
天蛾科　アキツバメ
阿檀蝶科　アサギテフ

有吻目　椿象科　ナガメ
盲椿象科　アヲメクラガメ
蟬科　ヒグラシ
虱科　シラミ
植蝨科　アブラムシ

擬脈翅目　蜻蛉科　オハグロトンボ

脈翅目　蛟蜻蛉科　オバトンボ

膜翅目　胡蜂科　ノバチ
姫蜂科　フシヲナガバチ
蟻科　オヽアリ
蜜蜂科　ミツバチ

鞘翅目　龍蝨科　シマゲンゴロ
吉丁蟲科　タマムシ
金龜子科　ヒメコガチ、サイカチムシ
螢科　ホタル
鍬形蟲科　クワガタムシ
天牛科　コマカミキリ
斑猫科　ハンメウ

双翅目　家蠅科　イヘバヘ
蚊科　カ

毛翅目　石蠶科　トビケラ

微翅目　蚤科　ノミ

彈尾目　衣魚科　シミ

昆蟲は、本校所在地附近の山野に於て生徒の採集したるものにつき調製し、昆蟲各目を代表するに足るべきものを擇びて、其常習生活の狀態によりて排列したり。

一、考慮發明せし要点　昆蟲の數は萬を以て數ふべく、悉く之れを採集し、排列することの困難なるは言ふ迄もなし、こゝに見る所あり、昆蟲一般の重なる各科を代表するに足るべきもの一二種つゝを取り、之れを理學的に排列せずして自然の情態に應じて排置し不知不識の間に昆蟲界の一班を知らしめんとするにあり。

一、審査要求主眼　特に小學校博物敎授に於て直觀的に昆蟲の情態を知らしむる方法としての適否。

◎山口縣大島郡通信

山口縣大島郡蒲野村　財滿宇市

●害蟲　苗代は明治二十九年以來短冊形に仕立居れども。害蟲の驅除豫防てふものは至りて幼稚なる姿あり、然れども近年農事改良發達上に於ては、漸く其の進渉をなし、之が驅除豫防も又た伴ふて步調を同くせり。本年發生の種類は二化生螟蟲、浮塵子、蝗等にして、螟蟲の第一期は六月七日羽化現出、稻田に產卵すれども其の被害至て少なし、之れ前年來當局業兩者の熱心と精勵とに由らずんばあらず、今後益々之が全滅を期すること肝要なり。

●蟲送り　當村は昔時より稻苗の插秧を了るや、半夏生後二三日以内に於て、蟲送りとて害蟲の發生を未發に防がん爲め、藁にて騎乘せる人形（齋藤實盛）を造り、禪僧侶の祈禱をなし、多勢行列をなし、旗を立て、鐘を打鳴し、太鼓を叩き、法螺貝を吹き、唐團扇を振り使ひて踊り「シカシカ」とて蟲送りの祈禱文を朗讀し、棒を仕ひなどして昔時より定めの塲所々々を踊り巡り、海濱に於て最終の踊を了へ、遂に人形を海中に投入するを古例とせり。然れども、近年之が改定をなし、唯藁人形を造り、旗を立て禪僧の祈禱を了ふれば二人にて肩にし、確定の塲所を巡りて海中に放流するに止れり。

因に記す、當日は村内の農家は休業して、各家酒宴を開催し、騎馬せる實盛に稻苗を送る（蟲送捨との意にて通行の際持行くなり）。又蟲送り費として村費に約五圓以内の費目ありしが、近年踊を歇め、從ひて之に要する人員の減少せし爲め、今は僅かに壹貳圓に減せり。「シカシカ」の朗讀せる文章は中々意味あることなれば、他日之が調査をなし、更に報告せんとす。

◎長野縣北安曇郡の昆蟲方言

第十五回全國害蟲驅除講習會修業生　長野縣　帶刀喜市

當地方の昆蟲方言は、追々見聞に任せ報導すべけれど、先づ余が是迄聞知りたる分を、二三かい摘みて報せんに○黒臭椿象をヘッピリムシと云ふ、臭氣を發ずるが故なるべし○蚜蟲をアリゴと云へるは、蟻の群集するためなるべし○金龜子の幼蟲をノケサと云ひ、蟬の幼蟲と誤解し居れり○カガンボをカハドンボと云へるは、水邊に多きを以てなるべしか○トンボをドンボ○イトトンボをメクラドンボと云ひ○マツモムシをサカサムシと云へるは仰向に游泳する故ならん○ミヅカマキリをタイコウチ○カハグモをトヲチッコ○キリギリスをギーチョ○エンマコホロギをキリギリスと云ひ○地蠶の幼蟲をキロウジと云へるは、キリムシの傳訛ならんか○ヤママユをウスッタビ○アリジゴクをハコサマ○僞瓢蟲をコウヤムスメ又はコウヤノオカタ○キバネツノトンボをボホマハシ○イラムシの幼蟲をシワムシ○其繭をサコケと云ひ○栗毛蟲の繭をモジ○キマルバチ、オホマルバチ、クマバチ等をベボ○ヤマバチをクマンバチと稱し○其他蛆をゴウジ○蛾をテフ○天蛾をビンス等と稱す。

◎昆蟲に關する葉書通信（第三十四報）

●（一九三）二十四鳥羽蛾と蜚蠊（丹後國與謝郡四辻、山崎久藏）　昆蟲世界第七卷六十六號に揭載せられたる邦產二十四鳥羽蛾は當地方にも生息せるにや、六月四日室內障子に靜止せるを發見したり。直ちに捕へて之を撿するに、全躰は黃白色にして体長二分餘、翅を開展せるときは三分餘ありて、前后翅共羽毛狀に分裂し、靜止のときは翅を水平に開く、尙後日研究すべく爲、收藏し置きたるに、鼠害に罹りて不明に屬せり。何れ後日採集次第送附すべし。又蜚蠊は當地方に數種ありて厨房に害を及ぼすこと甚し世人此蟲の發生するときは富むとて採らざるより、斯く蕃殖せるなるべしか、方言アブラムシと云ひ、茶色のものを火蟲と云ふ。（六月十七日附）

●（一九四）二十四鳥羽蛾（新潟縣農事試驗場、星野信）　昆蟲世界第六十六號に於て長野氏記載の二十四鳥羽蛾を、昨年八月中、本場試驗田畦畔の雜草中に於て一頭採集し、其の儘貯へ置き、此頃漸く思ひ出して調査したるに、全く二十四鳥羽蛾なりき。但し、Orneodes hexadactyla. なる學名のものなるや否や目下研究中なり。（七月十八日附）

●（一九五）コツノトンバウの分布報告（長野縣下伊那郡下久堅村、平岩鶴吉）　昆蟲世界第五十九號に記

載せらるゝツノトンバウの内第四のコッノトンバウを、昨二十一日長野縣下伊那郡下久堅村大字知久平村社境内雜草中に於て捕獲せり。体長一寸五分、翅の開張二寸八分、觸角の長さ八分五厘にて昆蟲世界記載のものより体長は稍短く、翅の開張に於て四分許り長し。又躰の形狀に於ても稍異なる點あれど、全くコッノトンバウなり。而して同號には其產地伊吹山とあれど、當縣下にも慥に分布せることを報告す。(七月廿二日附)

編者云、昆蟲の分布調查報告に於て現品を添へざるものは唯茲に參考として掲載するも、當所の分布調查原簿には登錄せざるべし是れ昆蟲の種類鑑別に於ける困難は、到底少數の標本を比較して以て斷定を下すべきものに非らざれば、後日に誤謬を遺さゝらしめんが爲なり。幸に是より以後分布を報告せらるゝの士は、成るべく現品を添へられんことを望む。

●(一九六)蟲歌(大分縣、岩田秀太郎) 共益商社編纂の唱歌教科書より昆蟲に係るものを抜萃して次に之を記載せん。「蟲。(一)月冴えわたる秋の野に、よすがら誰をまつむしや、ふりだす鈴蟲聞きつけて、乘りくる駒のくつわむし、チヽロャチヽロ、リンく。(二)秋風さむく身にしめば、はたをりむしも忙はし、つゞれを刺せときりぐす、蟋蟀さへも鳴きしきる、チヽロャチヽロ、リンく」

●(一九七)山口縣大島郡に於る螢狩の童謠(山口縣大島郡蒲野村、財滿宇市) 當地に於て夕方子供の螢狩をなす際稱呼する歌は次の如し「ホタルコーイ、コーイヨ、アッチノ水ハ苦イヨ、コッチノ水ハ甘イヨ、柳ノ下カラボロキテコイ」(七月十日稿)

●(一九八)岐阜縣不破郡に於ける螢狩の童謠(岐阜縣不破郡、杉江初治) ホッタロ來ヒ ジョーロムシ、天川ノ水ノマショ、アッチノ水ハ苦イニ、コチノ水ハ甘イニ。(七月十五日)

●(一九九)京都府與謝郡に於ける螢狩の童謠(京都府與謝郡四辻、山崎久藏) 夕刻になれば、長さ五六尺の竹に柒種稈を縛し、螢籠片手に兒童等は三々伍々相伴ひ「螢コーイ太郎吉來イ、行燈ノ下カラ笠着テ來イ。螢コーイ太郎吉來イ、其地ノ水ハ苦イド、此地ノブヾハ甘イド」と稱へつゝ集へり。(七月廿八日附)

●(二〇〇)柑橘の貝殼蟲一種(靜岡縣、岡田忠男) 去月十七日柑橘の貝殼蟲(Dactylopius sp.)一種採集せり。本種は昨年末本邦にて初て發見せられたるものなりと桑名氏より通知あり、又昆蟲世界に於て同氏柑橘の貝殼蟲中、此科は本邦にて加害せしことなしと記載ありしも、縣下志太郡岡部町子持坂に於て紀州蜜柑(數百年を經たる)樹にて三頭採集せり。幼蟲は餘程面白き形態を有し、胎生の如く見受たり。(八月四日附)

雜報

●名和昆蟲研究所出品の昆蟲標本解說書

當昆蟲研究所より今回の博覽會に昆蟲標本を出品して名譽銀牌を得たるは、既に讀者の知了せらるゝ所なるが、今茲に其解說書を掲載して參考に供す

解說書

部	類	番號	品名	出品人
九	五〇	一	昆蟲標本	岐阜縣美濃國本巣郡船木村大字重里七番戸 當時岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ一寄留 名和昆蟲研究所長　名和靖

一、產地並に採集年月

岐阜縣美濃國岐阜市を指定し、山野の兩區に於て冬季嚴寒の際に採集せしものゝ一半にして、時は明治三十五年一月上旬より中旬の間に屬せり

一、添出品

第一號	薔薇の壹株昆蟲世界	全壹冊
第二號	昆蟲世界	從第一卷至第六卷
第三號	害蟲圖解	從第一號至第廿號
第四號	貝殼蟲圖說	全壹冊
第五號	通俗益蟲集覽	全壹葉說明書附
第六號	日本昆蟲分科表	全壹冊
第七號	第一回全國昆蟲展覽會出品目錄	全壹冊
第八號	鞘翅目瓢蟲屬分布圖	貳拾葉
第九號	鱗翅目鳳蝶科分布圖	拾三葉
第十號	寫生用昆蟲標本	拾三個

一、履歷

明治二十八年第四回內國勸業博覽會に出品したる後の履歷を摘記せんに、時勢の推移に伴はれ、學術實業兩界共に追漸昆蟲學の必要を感ずるに至りたれば、到底能く餘暇を以て之に應じ難きを自覺し、全く他の繫累を絕ちて專心之に從事せんことを欲し、明治廿九年四月本職岐阜縣師範學校教諭を辭任し、岐阜市京町に、新に名和昆蟲研究所を設立せしに、岐阜縣廳より特に岐阜縣害蟲調査を囑託せらる、當時研究所は數名の助手（現今は拾數名に至り調査、編輯、圖畵、採集、養蟲、製作等を分擔從事す）に過ぎざりしが、相

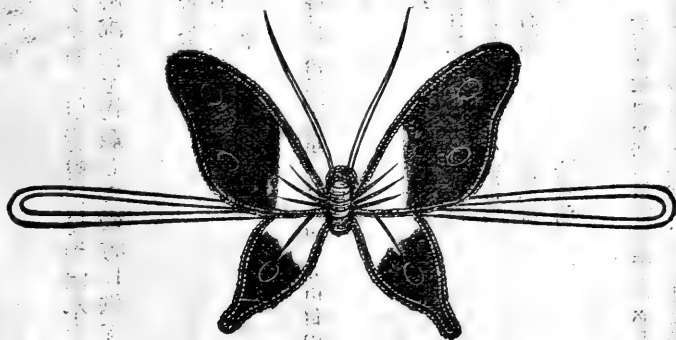
率て夙夜昆蟲學の研究を事とせり。其翌三十年には浮塵子の大發生あるを機とし親しく、之が驅防策を究明せんことを欲し、先づ岐阜縣下より京都、大阪、兵庫、岡山、廣島、山口、愛知等比較上溫暖に、且つ災異の劇甚なる各府縣を巡視して、其化育加害に關する調査を遂げ、翌三十一年三月更に山梨、茨城、福島、宮城、福井等の各寒地に歷巡して、浮塵子越冬の狀況を積雪の裏に調査し、始めて同蟲越冬の報告を世に公にせり。爾來各府縣の請求に依り、浮塵子驅除等の巡回講話をなすこと貳百回以上に達し、又各種の講習に講師たりしこと六十四回、其雜誌昆蟲世界及び害蟲圖解等を發刊し、私費を以て第一回全國昆蟲展覽會を開催し、又各地に昆蟲學會を設立せしむる等、斯學の啓發普及を目的として下層界の拓開に微力を致せり。越えて三十三年には愛知縣渥美、八名、南設樂、寶飯、四郡農產物共進會附屬昆蟲標本展覽會より、三十四年には岡山縣邑久郡昆蟲展覽會、三十五年には岐阜縣冬季昆蟲展覽會、岐阜縣海津郡昆蟲展覽會及び靜岡縣周智郡昆蟲展覽會より何れも審查員長を囑託せらる。而して今や舊來の規模を擴張し、事業の進行を期し、將に明年を以て研究所を新築し、且長期の昆蟲學講習會を開設せんと欲し、已に其設計を終へ昨秋を以て助手一名を北米合衆國に派遣して、專ら斯學界の狀況を視察する所あらしむ。此他の事項に至りては、便宜上以下の各項に分載せしを以て茲に省く。

一、事業

當所の經營せる重なる事業を擧ぐれば次の如し。

第一、冬季昆蟲の採集

昆蟲は春季に發生して夏季に盛んに、秋季に衰へて冬季に絕ゆる生物なりとは、舊來世人の一般に信ずる所にして、偶々其說の非を唱道する者あるも未だ耳を傾くるに到らず。此を以て所謂害蟲なるものも、天地の陽氣を得れば自生を遂ぐるとなし敢て驅防に勉めて除害興利の手段に出づる者少なし。是れ蟲類偶生說の未だ容易に農家の腦底より脫却せざる所以にして、又、到る處神佛の加護を祈るに熾なる所以なり。而して世人の冬蟲に耳を傾けざるは、未だ之れを眼に解せざるの致す所なるを以て、此迷謬を洗掃し、昆蟲學の發達を期し及び國害を滌らげんと欲せば勢ひ自から冬蟲の狀態を示すを以て最捷徑となす。冬季の狀態を示すの方法一にして足らざる

工業應用昆蟲畵帑の十八（根掛）

も、先づ之を無邪意なる學齢兒女に採取せしめ、之れを頑迷なる父兄に知らしむるに如くは莫きを知り、或は懸賞を以て、或は勸奬を加へて、去る三十三年十二月より三十四年一月に亘り、試みに岐阜縣安八郡大藪小學校、揖斐郡本郷小學校、羽島郡竹ヶ鼻小學校、加茂郡八百津小學校等の兒童に採集せしめたるに、其成蹟意外に佳良を呈し、現に全國昆蟲展覽會に出品したるもの悉く受賞の列に加はり、就中、大藪小學校の出品物の如きは、農商務省より買收の榮を擔へり。此より之を内にしては當所の各助手を督して專意冬蟲の採蟲に精勤せしめ、之を外にしては岐阜縣昆蟲學會の事業として、三十五年二月岐阜縣冬季昆蟲展覽會を開設せしむるに執掌せり。而して同會の成蹟に依りて之が判定を下したるに、全出品の約七八分は學齢兒女の冬期休業若くは放課時間を利用して採集せしものに係り、面あたり之を觀覽せし者、亦爲めに冬蟲の輕視すべからざることを悟れるに似たり。當時參考品として當所よりも岐阜市に於て、冬季に採集せる昆蟲標本若干函を出陳せしが、是は今回の出品と同時の蒐收に係り、明治三十五年一月即ち寒氣酷烈にして、百蟲皆蟄伏潛藏の好期を擇び、當研究所所在地たる岐阜市を以て其採集地域を限り、更に市を山野の兩區に別ち、適當の技倆ある助手五名を撰拔して五種の採集法（篩網採集法、木皮採集法、雜草採集法、石起採集法、叩網採集法）を各十回行はしめて、都合五十回採集の後に獲たる五百二十七種九千九百四十七頭の昆蟲の一部たり。但し、冬季採集の利益は、遠く明治十四五年頃より之を認めたりきと雖も、固より個人採集に過ぎざりしを以て其効果また甚だ大ならざりしに、此に至りて始めて二十年來の宿望を達し、且其利益の豫想外に多きことを實地に證明することを得たり。乃はち、其採集品に對する統計、蟲種別等に至りては、出品添附の雜誌昆蟲世界第五十五第五十六號に記載せしを以て此に掲げざるべし。而して岐阜縣昆蟲展覽會の際、全出品に就て特に有益蟲類蟲屬の比較調査を加へたるに、概れ成蟲の形態を以て越冬する事實を發見し、又脈翅目草蜻蛉の如き盛夏の候に蕃殖するものと雖も多少冬季にも採獲し得ることを確めたり、恐くは是れ本邦に於ける從來の學說に一變動を與へたるものならん歟（添出品第八號）

第二、全國昆蟲展覽會の開設

輓近昆蟲學思想の發達に伴れ、之が研究と其應用の上に於て長足の進歩を爲したるが如き觀あるも、其成蹟に至りては區々として深く世に知られざるもの多し、洵に昭代の恨事にして、斯の如きは復た昆蟲學の發達を計る所以にあらざることを悟了し明治三十三年三月三日を以て全國昆蟲展覽會開設の旨意書を世に發表し、尋で男爵花房義質氏を總裁に、貴族院議員田中芳男氏を會長に農學士小貫信太郎氏を審查員長に推し、翌三十四年四月十六日より五月十五日に至る三十日間之を當所内に開設して、無事に閉場を告げたり。當時參同加盟の有志意外に多く、其出品區域は全國の半に過ぎたり。而して之が計劃、規摸、出品より調査等に至るの顚末は擧て第一回全國昆蟲展覽會出品目錄（添出品第七號）に詳記せしを以て玆に畧す。

第三、昆蟲標本陳列舘の擴張

從來十坪に滿たざる小昆蟲標本陳列室を研究所内に有するに過ぎざりしも、去る三十四年に、當所主催の第一回全國昆蟲展覽會開設の結果として、遽に陳列品の增加を來たし、爲に岐阜縣物產舘構内に面積八十坪（五間に十六間）を有する獨立の縣建築物を借用し、新に昆蟲標本陳列舘を開設して、同年八月十五日より公衆一般の觀覽に利し、併せて斯學者の見學に便せり。即ち、同年五ヶ月間の入舘人員は都て四萬四千八百六十一人、昨三十五年の入舘者は七萬四千〇三十八人を算せしに徵するも蓋し冥々裏に人智拓開の効無きにあらざるべし。而して其陳列品數は數千点より成り、昆蟲標本としては諸方面より研究し得べき樣各種の分類的標本を裝成し、これに次ぎて内外の害蟲標本、（稻、桑、茶、其他重要植物幷に果樹、樹木、家畜、水產、衞生等の害蟲標本）若干を加へたるが、斯種のものには概ね被害植物及び幾多の敵蟲をも示せる、所謂發育標本を採して一に觀覽者の理解を促がせり。更に又有効蟲、有用蟲、愛玩昆蟲、驅除器械、驅防藥品、教育用幷に裝飾用標本、自然陶汰、雌雄陶汰、有益蟲、有益鳥等の標本を整列し、更になほ各種昆蟲の放大圖、各種の採集圖、統計表等を交錯布置せしめ、他にまた數百點の昆蟲應用の美術工藝品（陶器漆器、銅器、竹器等）を分種陳列し、以て婦女小兒に至るまで一見昆蟲の何物たるかを知り易からしむ。當舘には日々所員を派出して監督をなさしめ、若し覽者の請あれば輙はち巨細の説明を加ふるは勿論、見學者の爲めには別に一區の研究室を設けて隨意講明の道を得せしむるに勉めり。（未完）

◉第十六回全國害蟲驅除講習實況

同會は、豫期の如く本月一日午前九時を以て簡單に其開講式を擧行せり。今回の講習會は其定員四十名なりしが各府縣よりの申込者非常に多く、三重縣、岐阜縣、兵庫縣、德島縣の如きハ一縣よく十名以上に達し、到底各府縣應募者の滿足なる希望を得せしむること能はざる場合に到りしかば、四十名以外のものは皆准會員として之を許諾したりき。而して總會員は一府二十二縣九十八名にして、開期中は殊に此の炎暑の候にも拘らず始終靜肅ゟ聽講し、又八日には養老山麓まで旅行採集を試むる等、其熱心なる事は從來の講習會に於て稀に見る處ゟして、特に一名の女子の加はりたるは、各府縣ゟ於ける出張講習に於ては其例多しと雖も、全國害蟲驅除講習會に於ては今回を以て嚆矢とす。尙詳細は次號に掲載すべし。

◉害蟲驅除の方針

當昆蟲研究所は左の如き害蟲驅除の方針を印刷ゟし、今回の全國害蟲驅除講習員に配付せり。尙此の方針に就ては、他日大に論及する所あるべし。

一、害蟲驅除を都合能く行ふには、第一昆蟲とは如何なるものなりや、其大体を知ること最も緊要なり

二、害蟲と益蟲の區別を明にし、害蟲を惡むと同時に益蟲を愛護すべし。

三、害蟲の習性經過を委しく了知するに隨ひ、愈々都合よく驅除を實行し得らるべし

四、單獨驅除は比較的其効少く、共同驅除は比較的効多し。

五、害蟲驅除は一人前ある男子の務にあらず、宜しく婦人小兒の務とすべし。

六、害蟲驅除には簡單有効なる器械と、確實廉價なる藥品を撰むべし。

七、誘蛾燈用ふべし用ふべからず、注油法行ふべし行ふべからず。

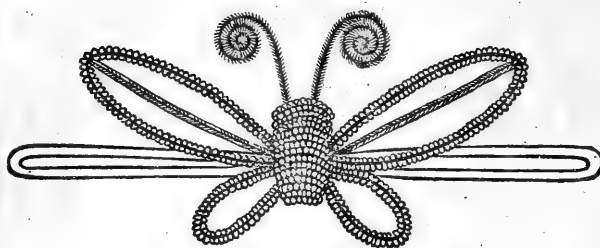
八、天然驅除を貴び、可成的人爲驅除を避くべし。

九、害蟲驅除は抑も末にして、平素豫防に注意するは最も必要の事柄とす。

十、豫防の一匁は、驅除の一貫匁に優ることを心得べし

●昆蟲叢書第二編の出版　昆蟲叢書は、既に全部の出版を終へべき筈なりしが、種々なる事情の爲大に延引せし處、此頃漸く其第二編の印刷を終へたれば、本月末には發行するあとゝなれり。茲に四方愛讀者諸氏に遲延の罪謝す。

工業應用昆蟲書報の十九（根掛）

●工業應用昆蟲書報（第六報）　本號に掲載の應用昆蟲書報の（十八）は鐵線に銀モゴルの如く銀線を纏へる骨子にヌメを張りたる鳳蝶形の根掛にして觸角は鳥毛を以て作り羽毛狀あれば、強て之が蟲名を求むればアカイロアゲハテフモドキとも稱すべきか。（十九）は銅線を骨子とし之に絹糸及銀線を巧みに纏結せるものなるも、形狀に於ては所謂古流的にして餘り感心は出來ず、二者共に岐阜市に於ける商店にて購入せしものなり。（二十）は麥稈眞田製の蜂形根掛にして、岐阜縣小坂專重氏の寄贈に係るものなり。同氏は第三回全國害蟲驅除講習修業生にして、又嘗て麥稈眞田製造を傳習せしことありと云ふ。此他尚蝶、蜻蛉等種々なる形を多數編みて贈られたるが、實に巧みなるものと云ふべし

●北米に於ける角蟬科

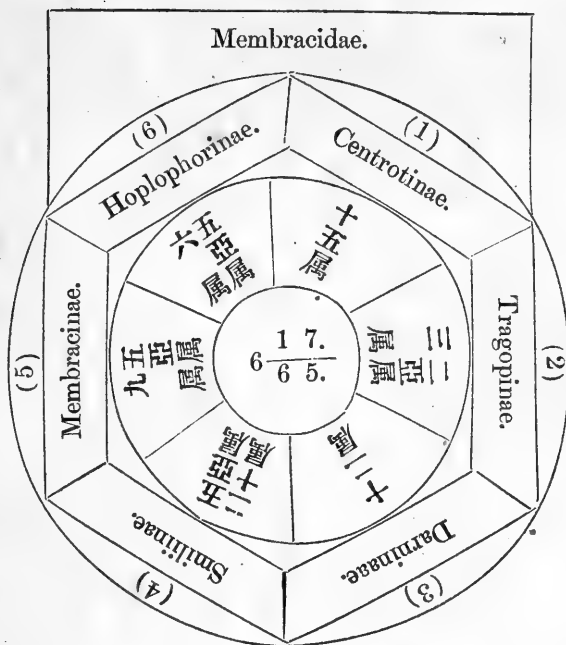
在米國桑港の名和梅吉氏より、此頃當昆蟲研究所助手の催に係る、水曜昆蟲談話會へ送られたる朗讀文中、北米に於ける角蟬科（Membracidae）に就て一言せられたり。之を見るに、元來、此種は本邦に於て知られたるもの僅三、四種なりと雖も、彼地に於ては其種類非常に多くエフ、ダブリユー、ゴッディング氏（F. W. Goding）は之を六亞科に分ち更に六十五屬十七亞屬に分たれしとて、名和氏は之を明瞭ならしめんが為表に製して報告せられたり、實に其種の多きは想像し得られぬ。

名和梅吉氏の送られたる表

Membracidae.
(1) Centrotinae. 十五屬
(2) Tragopinae. 三屬二亞屬
(3) Darninae. 十二屬
(4) Smiliinae. 二十屬五亞屬
(5) Membracinae. 九屬五亞屬
(6) Hoplophorinae. 六屬五亞屬
6 17. / 65.

●蟬寄生蛾の發生

去八日第十六回全國害蟲驅除講習生の養老山下へ長途採集せし際、蟬寄生蛾の多數を採集し來りければ、當所は之を合衆國ナショナル、ミウゼアムに送附せり。今や發生の時期なれば各地の諸氏の充分研究せられんことを望む。該蛾に就ては本誌第六十五號に詳説あり、又同七十號昆蟲翁の隨感隨筆中に記載の如く、米國昆蟲學者ダイアー氏はエピピロップス屬（Epipyrops）に隷するものなることを明言せられたるが、近頃在米名和梅吉氏は之にシカデボラ（Cicadivora）と云ふ種名を附したい考であるが如何との書面到着せり。

●博覽會出品昆蟲標本受賞者追報

本誌前號に於て受賞者報告中、受賞人名錄不備の為、或は遺漏なきを保し難ければ、是等は他日訂正すべきことを報じ置きしが果せるかな左の二名を脱漏したりき。尚或は漏あらば、願くば御一報あらんことを乞ふ。

二等賞　害蟲標本及調査　滋賀縣農事試驗場。　三等賞　害蟲標本　愛知縣渥美郡昆蟲研究會。

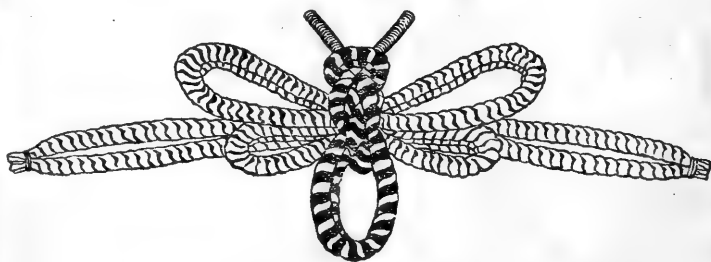
◉理學界の發刊　理學界と題せる雜誌此回東京市神田區裏神保町六番地理學界社より發行せられたり此雜誌は博物學と理化學とを總括せるものにして論說、實驗、學術彙報、理學の應用、發明歷史、問題解釋、質疑應答、雜錄等の各項ありて寫眞版及び木版等數葉を挿み其体裁科學雜誌中稀に見る所なり此の中昆蟲に關するものは第一號に蚤の話蝶蟻の激戰第二號に蚊の話等あり。

◉養老郡害蟲驅除講習會　岐阜縣養老郡は昨年當昆蟲研究所長名和靖氏を聘し害蟲驅除講習會を開きしが、本年も亦去月十五日より五日間、同郡高田町に於て其第二回を開きたり。講習員は同郡各小學校敎員全躰及び實業者等にして每日午前八時より午后四時迄八時間つゝ聽講し、其熱心なる事は未だ曾て從來の講習會に見ざる所なりしと云ふ、而して修業證書を受領したるものは九十一名にして內五名の女敎員を含めりと、又岐阜縣害蟲驅除講習及び昨年の同郡害蟲驅除講習を受けたるもの廿二名は、今回の講習會には助手として大に斡旋の勞を執りたりと

◉農業昆蟲講習會　京都府下丹後國加佐郡舞鶴町敎育會にては理學博士佐々木忠次郎氏を聘し、八月二日より十日間農業に關する昆蟲の講習會を開設せし由なり。

◉岐阜縣昆蟲學會第五十六回月次會記事　同會は本月一日午后二時より、岐阜縣會舊議事堂內に於て開會せり。當日は第十六回全國害蟲驅除講習會開講日にて、同會員も加はりたれば以外の盛況にて來會者百數十名に達せり。今其模樣を槪記すれば、例により名和副會長の開會の辭に次で、第一席渡邊樵四平氏は伊吹山へ一日間の長途採集談を述べ、第二席小森省作氏は豹紋蝶の分類上特殊鱗の必要と其構造を說明し、第四席茨城縣森市太郎氏は害蟲驅除の効果に就き數字を以て現はし、第五席泉繁太郎氏は害蟲驅除と小學兒童に就き岐阜縣下に於ける實況を述べて害蟲驅除の根本的施設を計ると共に、敎員昆蟲講習

工業應用昆蟲畫報の二十（根掛）

（岐阜縣　小坂重專氏寄贈）

會の必要に說き及ぼされ、第六席長野菊次郎氏は我國の昆蟲學に於ける現今の趨勢と題し、本邦に於ける昆蟲界の有樣に就き歐米諸國より其例を採りてあらゆる方面より論及し、實に我國昆蟲學の暗黑時代にして其紛亂せる殆んど極點に達せるを憤慨せられ五時二十分閉會を告げたり。

◉水曜昆蟲會記事　當研究所員の催しに係る水曜昆蟲會は、前々號報告後、毎水曜日午后七時より當所內に開會せしが、其重なる演題と講演者を擧ぐれば左の如し。

小竹浩氏の蚜蟲の分類、ムクゲムシの形態に就て、浮塵子の分類、双翅類の分類、石田和三郎氏の螟蟲驅除の一方法及害蟲驅除簡單器械、尾三遠地方の昆蟲採集旅行談、愛知縣額田郡に於ける害蟲驅除視察談、蟲嚢と採集、小森省作氏の豹紋蝶の分類、鞘翅目の分類法、クワガタムシの分類、象鼻蟲の分類、セラフヒデー(Pselaphidae)の一種に就て、キクスヰモドキとキクスヰダマシに就て、森宗太郎氏の伊吹山昆蟲採集談、山縣郡害蟲視察談、蚊の話、シンムシの產卵に就て、棚橋昇氏のツヾリムシ及びフクラスヾメ飼育談、蜜柑の蚜蟲驅除成蹟報告、ヒメカメノコテンタウムシの經過の實驗、紋白蝶の蛹化の準備に就ての實驗、アヲスヂアゲハテフ蛹化の準備に就ての實驗、高橋喜男氏の紋黃蝶飼育談、螟蟲の產卵に就て、稻螽の卵塊より孵化する狀態、萩のツヾリムシの寄生蜂に就ての疑問、名和愛吉氏のミチヲシヘ飼育法、伊吹山昆蟲採集談、キマユヤドリ蜂、及びマダラザウムシの話、アヲクサガメムシの飼育談、黑鳳蝶の飼育談、鄉保吉氏の昆蟲採集談、渡邊樵四平氏の蚜蟲驅除試驗報告、螟蟲に就ての調查研究談、中井藤助氏の本巢郡害蟲調查談、鳳蝶飼育談、飛驒國に於て行はるゝ苞蟲驅除方法、イチモジセヽリの形狀に就て、イチモジセヽリテフとハナセヽリテフの比較、大橋由太郎氏の山縣郡に於ける害蟲視察談、螟蟲とスヂキリムシの翅脉に就て、安八郡に於ける害蟲視察談、甘藷の葉卷蟲の卷葉方法の實驗、土岐五郎氏の紋白蝶の產卵及發育に就ての實驗談等にして、其他客員として長野菊次郎氏、岐阜縣屬松尾、井深の兩氏、農事試驗場員山田與十郎氏等の有益なる談話ありたり。

◉昆蟲標本陳列館の參觀人　昨七月中に當昆蟲研究所常設の昆蟲標本陳列館を參觀せし人員は總計千八百二十七人にして、其內最も多かりしは十二日に於ける百三十七人、最も少なかりしは八日に於ける十三人にて、平均每日六十七人弱に當り、其の內重なる人々は海軍々醫小監立花保太郎氏は帝國大學海軍々醫學生十名を從へ、農商務省害蟲驅除豫防監督員牛村一氏氏、德島縣書記官告森良氏を始め各府縣の農會幹事、農事巡回敎師、實業家、敎育家等ありき。

(雜報、八月十二日脫稿)

◎新案教育用昆蟲標本　壹組拾貳箱

一、分類標本　壹箱
一、自然淘汰標本　五箱
　○保護色　○擬態　○警戒色及誘惑色
　○自己防禦　○生存競爭
一、雌雄淘汰標本　貳箱
一、害蟲標本　壹箱
一、益蟲標本　壹箱
一、解体標本　壹箱
一、俗説と迷信に就ての昆蟲標本　壹箱

該標本は、高等小學校、高等女學校、農學校、尋常中學校等の理科と參酌して製作せしものなり。從て害蟲標本の如きも、普通農作物害蟲標本とは大に其趣きを異にせり。而して一品毎に説明を附しあれば、假令初學者と雖も、一目して昆蟲界に於ける自然の妙理を會得するを得ん。

右標本は、壹組十二箱を以て完成せりと雖も、其中、一箱ツヽ御望の節は、新案教育用昆蟲標本中の何々と明記ありたし。

◎箝装式昆蟲標本

甲號　價一組ニ付キ金四圓
乙號　同　金參圓
丙號　同　金貳圓
（一組二十枚　但遞送費は別）

右は實物寫生用の昆蟲標本にして、初等教育、中等教育何れにも適用すべき好標本なり。製法堅牢なるを以て、又幼稚園或は家庭に於ける玩具ともすれば、不知不識の間に、理科思想を養成することを得るなり。

●農作物害蟲標本　壹組（桐箱入解説附　金四圓五拾錢）
●農作物益蟲標本　壹組（桐箱入解説附　金參圓五拾錢）
●教育用昆蟲標本　壹組（桐箱入解説附　金四圓五拾錢）
●自然淘汰標本　壹組（桐箱入解説附　金五圓五拾錢）
●雌雄淘汰標本　壹組（桐箱入解説附　金五圓五拾錢）
●氣候變形標本　壹組（桐箱入解説附　金四圓）
（壹組の荷造費金貳拾錢小包料は參拾錢）
●昆蟲發育標本　各種
●山林園藝害蟲標本　各種
●昆蟲學研究用書籍及び器具一式

明治三十六年八月　名和昆蟲研究所會計部

雑誌 昆蟲世界 合本出來 廣告
○第十二號以下完備
本邦唯一の昆蟲雜誌
昆蟲世界 合本
第六巻（昨年分）出來
西洋綴 金文字 入美装
●昆蟲世界第二巻 五部（自第拾貳號 至第拾六號）
右は明治三十一年發行の分（但合本にあらず）
●昆蟲世界第三巻合本壹册（自第拾七號 至第貳拾八號）
右は明治三十二年發行の分
●昆蟲世界第四巻合本壹册（自第貳拾九號 至第四拾號）
右は明治三十三年發行の分
●昆蟲世界第五巻合本壹册（自第四拾壹號 至第五拾貳號）
右は明治三十四年發行の分
●昆蟲世界第六巻合本壹册（自第五拾三號 至第六拾四號）
右は明治三十五年發行の分
（合本は毎册金壹圓貳拾錢、郵税金貳拾錢 其他は定價の通り）
右昆蟲世界の義は發刊以來、非常の高評を博し斯學研究上の寶典として又農事改良の先驅として歡迎せられしも、未だ之を合本とするに至らざりしに、今回讀者の勸告により毎一年分を裝釘して閲讀索引に便にせり、請ふ愛讀を玉へ。
岐阜市京町
名和昆蟲研究所
謹告
●最優經濟的窒素肥料トシテ弊部ノ取扱ニ關ル
●晩生大紫雲英種ニ對シ
●第五回內國勸業博覽會 參等賞銅牌受領
●美濃物産品評會 貳等賞銀牌受領
●御試作用種子御希望ノ諸君ヘハ無代價進呈ス
明治三十六年七月
岐阜縣産晩種 本場褒賞最高 利己主義之商人會社勿同視
岐阜縣本巣郡本田村
關谷俊治
紫雲英種子部
●第四回內國勸業博覽會ニ於テ褒狀受領
●東海實業區五縣聯合五二會品評會ニ於テ壹等褒狀受領

新農報
每月一回

第五回勸業博覽會褒狀受領

合成殺蟲液ハ各府縣農事試驗場及ビ郡村農會ニテ優効證明ヲ受領セリ★

★其特色タル擴散力ハ優ニ一滴ノ油液ヲシテ全水面油膜ヲ普及シ得ベキ奇効ヲ有セリ

害蟲驅除上ノ最大要務

浮塵子ノ驅除ヲ計ルニハ油類ニシクモノナキハ專門學士ハ勿論世上一般ニ認識セラルヽ所ニシテ方今凡ク應用セラレツヽアル油類ニシテ就中經濟的殺蟲力ニ富メル石油輕油或ハ之レガ殘滓重油ハ最モ需用多シトス然ルニ是等石油屬ニシテ往々適不適或ハ有害無害ノ疑問ヲ生セラレツヽアリ之レ他ナシ

元來浮塵子ハ水面上ニ於ケル油膜ニ逢着セバ直チニ斃死スルハ勿論ナリト雖モ又巧ニ水面ヲ飛翔スルノ性質ヲ有ス故ニ幾回葉莖ノ振搖ヲ行ヒ墜落ヲ促スモ其油膜ヲシテ普及シ能ハザル限リハ再ビ稲葉或ハ畦畔ノ雜草中ヘ飛翔シ去リ遂ニ勞シテ功ヲ空シクスルニアリ且又有害ノ點ニ至リテハ石油輕油重油類ハ概シテ擴散力ニ乏シク水面ニ滴下スルモ殆ド球狀ヲ保チ是等物質ノ綜合稲株ニ附着シ發育上不測ノ被害ヲ釀スニ因セリ

要スルニ如上二大欠点ハ以テ最モ偉大ノ擴散力ヲ有スル油類ノ撰擇ニ歸スヘシ之レ害蟲驅除ニ就キテノ最大要務トス

稲丸印合成殺蟲液

●**性質** 本液ハ石油ヲ原料トシ之レニ加フルニ一種ノ殺蟲的藥劑ヲ以テシタル合成液ニシテ品質ノ均一ナルハ勿論一滴ノ油液モ優ニ全水面ニ其油膜ヲシテ普及シ得ベキ非常ナル擴散力ヲ含有シ且ツ殺蟲力ニ富ミ更ニ厭フベキ惡臭ナキ等浮塵子驅除用トシテ最モ適切ス

●**特色** 苗代田ニテ未ダ稲苗ノ幼稚ナル時季可成的少量ノ注意ヲ以テ豫防且ツ驅除ヲ要スル際ニハ本油液ノ如キハ偉大ナル擴散力ヲ有スルヲ以テ其成育程度ニ準ジ少量ノ注油則チ隨時稀薄ナル油膜ヲ全水面ニ普及セシメ全滅シ得ルハ本液ノ最モ特色ナリ本田挿苗後モ苗代時季ニ均シク成育程度及ビ害蟲發生ノ狀態ニ應ジ其水面上ニ於ケル油膜ノ厚薄適度自在ニ注油驅除ノ目的ヲシテ充分ニ透徹シ得ベシ

●**國家的最大經濟** 驅除上仮リニ上松石油及ビ除蟲液ニシテ一反歩二三升ノ注油ヲ施スモ其油膜斑点ニ區分シ目的ヲ達ザルニ反シ本油液ハ其半量以内ナル一升ニテ全滅ヲ期シ得ベク以テ其効果ト經濟ハ國家ノ富源ニ莫大ナル稗益ヲ與フルヤ必然ナリ

▲弊店ハ弘ク各位ニ御實驗ヲ得度希望ヲ有スルト且ハ便利上一函以上ハ直接御注文ニ應ジ速時出荷可仕候

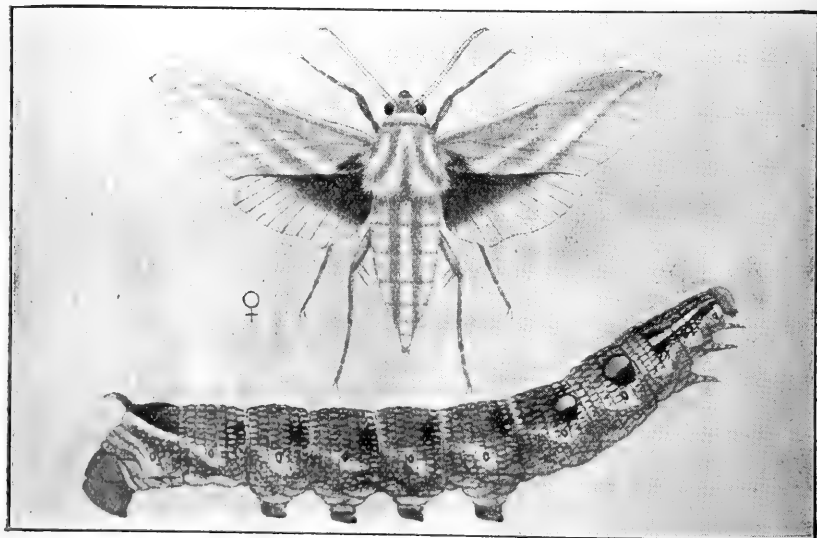
合成殺蟲液製造

發賣元 大阪北區船津橋北詰西入 特電話西九百十八番 堀口商店

Chaerocampa Lucasii Walker. (Beni-suzume)

By K, Nagano.

Closely allied to C. elpenor L. Forewings olive-green; costa rosy; marginal area purplish-rosy; near base black; a white discal dot; median band purplish-rosy; a purplish-rosy streak from beyond of middle of dorsum to apex. Hindwings rosy, basal half black; cilia white. Expanse 64-72m. m. Head and thorax olive-green with rosy stripes; abdomen rosy with two olive-green stripes.; a black spot on each side of base.

Formosa, Kiusiu, Shikoku. Honshiu; 6, 7, 8. Larva green or brown, finely streaked with darker; on **1-3** a pale longitudinal lateral strips; on 4, 5 blackish lateral blotches enclosing reniform pale yellow spots; on 4-11 **a** series of darker oblique lateral stripes; horn short, black, tip white: on Lythrum salicaria, Impatiens balsamina, Oenothera odorata, Galium verum, etc.; 6, 7, 8.

昆蟲世界

(明治三十六年八月十五日發行) 第七卷第七拾貳號 (每月一回十五日發行)

◉謹告

名和先生御考案

◉本邦六大島蝶圖 一葉 (定價金拾五錢 郵稅金貳錢)

◉昆蟲繪葉書 三葉一組 (定價金五錢 郵稅金貳錢)

◉昆蟲採集用小札 五百枚 (定價金拾五錢 郵稅金貳錢)

◉昆蟲名稱小札 五百枚 (定價金拾錢 郵稅金貳錢)

右者今般斯學研鑽家諸君の御便利を圖り名和昆蟲研究所の御撿閲を受け多數印刷仕り特別廉價を以て廣く同好の士に頒たんとす企くは陸續御注文あらんことを祈り奉り候

八月

美濃大垣

西濃印刷株式會社 石版部

◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條ニ依り晴雨に關はらず、毎月第一土曜日午後一時より、岐阜市京町名和昆蟲研究所內に於て開く、本會員は不及申、何人も毎會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所內 岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會本年中の日並は左の如し

第五十七回月次會(九月五日) 第五十九回月次會(十一月七日)

第五十八回月次會(十月三日) 第六十回月次會(十二月五日)

◉名和昆蟲研究所案內

當昆蟲研究所の位置は上圖の如くにて停車場よりは僅に十餘町養蟲室あり又新築の岐阜縣物產館構內には常設の昆蟲標本陳列館(五間に十六間)ありて標本器具數千点を陳列す有志諸君の來訪を俟つ

岐阜縣岐阜市京町 名和昆蟲研究所

◉本誌定價並廣告料

壹部 郵稅共 金拾錢 (見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す)

壹年分拾貳部郵稅共 金壹圓八錢

(注意)本誌は總て前金ニ非れば發送せず◉爲替拂渡局は岐阜郵便局◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす

廣告料 五號活字二十二字詰一行ニ付金拾貳錢

三十行以上一行ニ付き金拾錢とす

明治三十六年八月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二 (岐阜縣岐阜市京町)

發行所 名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二 發行者 名和梅吉

同縣揖斐郡鶯村大字公鄉三番戶 編輯者 小森省作

同縣安八郡大垣町字郭四十五番地ノ二 印刷者 河田貞次郎

(明治三十年九月十日內務省許可)

(大垣 西濃印刷株式會社印刷)

Vol.VII. SEPTEMBER. 15TH, 1903. No.9.

(九月十五日發行)

(毎月一回十五日發行)

THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE.

EDITED BY Y. NAWA.

GIFU, JAPAN.

昆蟲世界

第七拾參號 (第七卷第九册)

目次 (禁轉載)

(明治三十六年九月十五日發行)

(明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)

PUBLISHED BY THE NAWA'S ENTOMOLOGICAL LABORATORY IN GIFU, JAPAN.

◉寄贈物件受領公告

一金貳圓也　愛媛縣　矢野廣太郎君
一金壹圓五拾錢　兵庫縣　安井瀧藏君
一金五拾錢　岐阜縣　正田太良右衛門君
一金五拾錢　岐阜縣　鹽田健藏君
一寫眞（害蟲驅除景況）二葉　岐阜縣　鶯尋常小學校
一昆蟲標本　數十種　在大阪　田中芳男君
一昆蟲標本　數百頭　在北海道　小川七治郎君
一昆蟲標本　十三種　在元山津　村主隆左右君
一美術的調製蝿叩　一本　岐阜市　坂井雅太郎君
一中京新報
一東海日日新聞　名古屋市　甫守謹吾君
一稻莖切鎌　十挺　岐阜縣　後藤善兵衛君
一小笠原小灰蝶　二頭
一獨逸產山黃蝶　一頭　横濱市　高野鷹藏君
一陶器桃形菓子器（蝶模樣付）　在岐阜市　保井此子君
一絹張蝶繡團扇　一本　大垣町　河田貞次郎君
一大形霜降天蛾幼蟲　一頭　京都府　今川槌太郎君
一同蛹　一頭　京都府　芦田安兵衛君

右寄贈相成候に付芳名を掲げて其厚意を謝す

明治三十六年九月十一日　名和昆蟲研究所

◉昆蟲世界購讀紹介者芳名

靜岡縣　岡田忠男君（貳名）
佐賀縣　飯田儀太郎君（壹名）
岐阜縣　河田貞次郎君（壹名）
福井縣　敦賀郡松原村役場（壹名）

◉購讀者諸君へ謹告

本誌代金の儀は總て前金の規定に有之候へども往々遲延相成候諸君も尠からず會計上非常に迷惑を來すのみならず爲めに本誌の改良上にも大影響を及ぼす次第に付き此際滯納の諸君は何卒速に御送金有之度此段願上候也

岐阜市京町
名和昆蟲研究所
昆蟲世界會計部

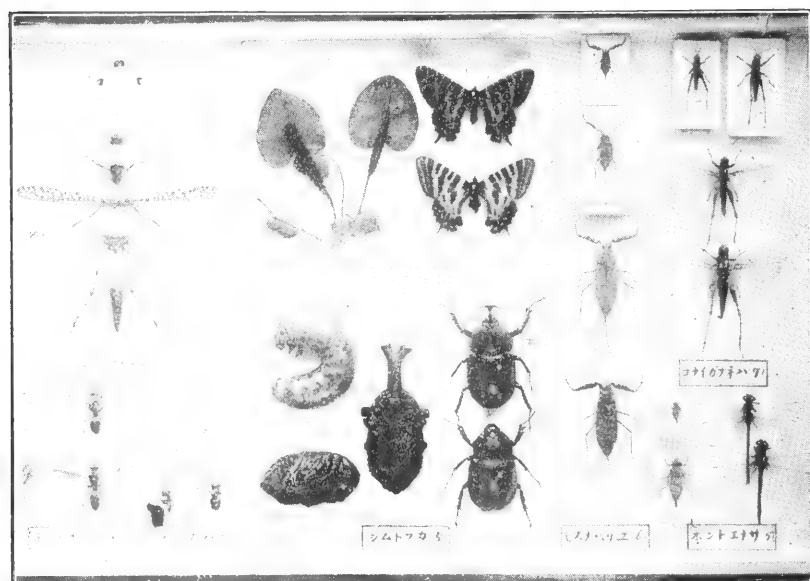
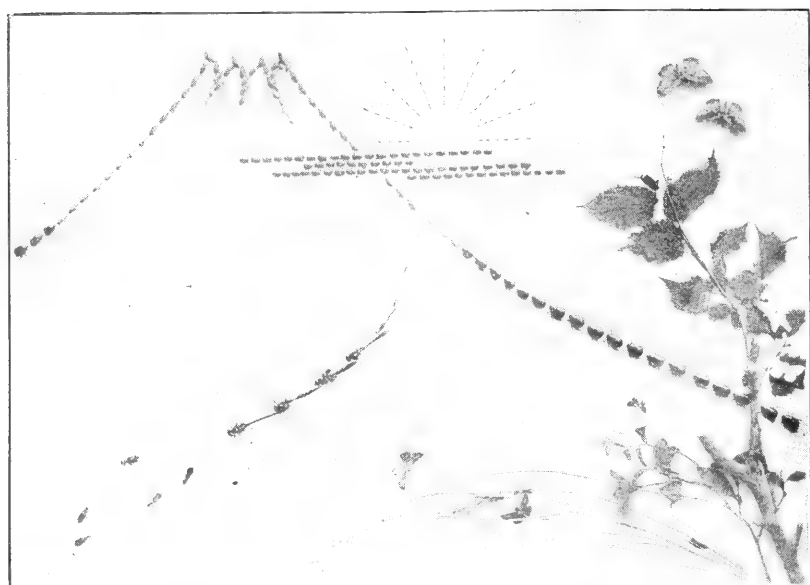
◉昆蟲分布調査材料募集

○鞘翅目。瓢蟲の部。
○鱗翅目。蝶の部、天蛾の部。
○脈翅目。擬蟷螂、薄翅蜻蛉、長角蜻蛉の部。
○有吻目。水棲の部、蟬の部。
○直翅目。蟷螂の部、竹節蟲の部、蜚蠊の部。
○擬脈翅目。蜻蛉の部。

右今回寫生圖出來分布調査用紙に納めたれば最早何時にても調査の上記入に差支なければ各地同志の諸君續々標本御寄贈あらんことを望む

○アブラ　ムシ（蜚蠊又は滑蟲）の標本
右特別分布調査材料として同志の寄贈を望む

岐阜市京町　名和昆蟲研究所

中等教育昆蟲標本寫眞（一）

◎本邦將來の害蟲

農學士　松村松年

有名ある害蟲の分布は普通昆蟲の分布論によりて之れを論ずる事難し、通商貿易の盛ならざる昔日にありては其傳播の機關甚少なく、或は浮木に攀じ、或は鳥の足に縋り、或は風に乘り、或は龍巻に持ち揚げられて其居所を異にせし位にして、之れとても今日の如く數千里を離れたる地に移轉するが如き事あらざりき。尤も昔時撒拉利亞地方の熱帶なりし際共に捿息せし動物は水河に追はれ、或はウラル山を越へて歐洲に出で、或はビーリング海峽を渡りて北亞米利加に轉じ、或はヒマラヤ山を越へて印度に到りしものもあるべしと雖も、此等は皆普通の動物分布論によりて其説明を與ふるとを得べし。夫昆蟲の分布は甚だ食物に關係を有するものにして、單に一種の食物に依るものは其分布極めて狹く、其食物の數種に渉れるものは大に之れに相反するもののあるを見るなり。而して有名なる害蟲の食物は多く數種に渉るを以て、從て食物の缺乏を告ぐるの期少なく、加ふるに其性强靭にして甚だ蕃殖力に富み、容易に死滅する事なし。試に粟の夜盜蟲を見よ、大凡禾本科植物として彼れの食餌ならざるものなく、其分布の廣き推して知るべきなり。又其食草の一種に限られたるものを見よ、假令風によりて其所を異にし水によりて其地を變するも、若し其食草にしてなくんば何ぞ蕃殖する事を得ん。彼の麥類に大害を加ふ

る螻蛄の如きは其分布極めて廣く、初めて其亞弗利加にて發見せられたるは今を去る大凡百年前にしてパリソー (Palisot) 氏は之れに Gryllotalpa africana の學名を附し、ブルマイステル氏は東印度より之れを得て G. orientalis の名稱を與へたり。此者全亞弗利加は云ふに及ばず、亞細亞、濠洲地方にも廣がり其加害の大なる能く人の知る所なり。普通夜盜蟲（エンドノキリムシ）は殆んど世界共有にして、唯だ南米及び濠洲に於て其發見せられしを聞かず。粟の夜盜蟲 (Leucania unipuncta Haw) は其分布前者よりも遙に廣く、之れこそ純然たる世界共有と稱しても可ならんか、余は之れを印度洋の船中にも發見したり又彼の三化螟蟲 (Schönobius bipunctifer Wk.) は其初め印度に發見せられ、次で支那、臺灣にも看出せられ後亦本邦にも産するあるを知るに至れり。彼の有名なる稻の害蟲褐色浮塵子 Delphax furcifera は其初め本邦に發見せられたりと雖も、其分布甚だ廣く、東印度は勿論、余之れを亞弗利加及び伊太利のシシリー島に於ても捕獲したりき。其他ツマグロヨコバヒと云ひ、或はフタテンヨコバヒと云ひ、何れも其分布の廣きとを見るなり。要するに著名なる害蟲の分布は甚だ廣きものにして、皆世界共有の傾あり。況や普通貿易の盛なる、其交通機關の具備せる今日に至りては、東西所を撰ばず其傳播するものあるを見る故に歐米に於ける今日の害蟲は將來に於ける日本の害蟲ともなり、今日に於ける日本の害蟲は又將來に於ける歐米の害蟲ともなるなり。既にブランコケムシ (Lymantria dispar) は今を去る大凡四十年前歐洲より北米に輸入せられ、年々巨萬の損害を加へ居れり。苹樹の芽蟲 (Temetocera ocellana) は百年以來歐洲に於ける害蟲なるが、大凡六十五年前北米に渡り、本邦同樣に大害を加へ居れり。其他苹樹の綿蟲の如き、或は貝殼蟲の如き、或は又蚜蟲の如き、歐洲を原産地として今や世界に廣がり此内殊に本邦に於ける貝殼蟲の如き、其猖獗既に極度に達し、今日之れが爲めに農業家の其果樹を放擲するもの少なからず

彼の有名なる葡萄の害蟲ヒロクセラは未だ本邦に襲來せずと雖も早晩其招致を見るの時あるべし。若し一朝にして其害蟲の蕃殖するに至りては、葡萄の栽培も亦望なきに至るべし。故に外國種を輸入するものあらば、當局者は活目以て大に其害蟲の有無を撿査せざるべからず。若し貝殼蟲の如く、其既に傳播するに至りては、千百の藥劑も亦如何ともする能はざるなり。

今通商貿易の爲め、既に本邦に傳播せるもの、及び將來傳播の憂ある重要の害蟲を擧ぐれば即ち左の如し

Coleoptera

Dermestes lardarius L.	ホシカツヲムシ
〃 elongatus Lec.	ナガカツヲムシ
Attagenus piceus Oliv.	ヒメカツヲムシ
〃 pellio L.	
Anthrenus scrophulariae L.	シロハラハナムグリ
〃 verbasci L.	ヒメマルカツヲムシ
〃 museorum L.	マルヘウホンムシ
Gibbium scotias F.	ケナガヘウホンムシ
Sitodrepa panicea L.	ジンサンムシ
Ptynus fur L.	ヘウホンムシ
Lyctus brunneus Steph.	タケシンクヒ
〃 unipunctatus Hbst.	ヒメホシタケシンクヒ
Corynetes violaceus L.	ルリホ子ムシ
〃 rufipes Deg.	アカアシホシカムシ
Corynetes ruficollis F.	アカクビホシカムシ
Bruchus obtectus Say.	ダイヅゾウムシ
〃 rufimanus Boh.	アカアシマメゾウ
〃 pisi L.	エンドゾウムシ
〃 chinensis L.	マメゾウムシ
〃 4-maculatus F.	ヨツボシマメゾウ
Calandra oryzae L.	コクゾウムシ
〃 granaria L.	コムギゾウムシ
Tribolium ferrugineum F.	コクヌスットムドキ
Silvanus surinamensis L.	コクヌスット
Tenebrioides mauritanica L.	オホコクヌスット
Tenebris molitor L.	オホコナムシ
Scolytus rugulosus Raty.	サクラギヒメシンクヒ
Xyleborus dispar.	カシユノヒメシンクヒ
Agrilus sinuatus Oliv.	ナシノヒメタマムシ

Otiorhynchus picipes Hbst.	ブドウ チクロ ゾウムシ

Lepidoptera

Aporia crataegi L.	エゾ シロテフ
Aegeria tipuliformis L.	スグリ スカシバ
Galleria mellonella L.	ハチミツ ガ
Schoenobius bipunctifer Wk.	サンカメイチユウ ガ
Acrobasis nidigenella Zell.	ツヽ ハマキムシ ガ
Aglossa dimidiata Haw.	コメ ノ クロムシ ガ
Ephestia kuehniella Zell.	コナムシ ガ
Pyralis manihotalis Guén.	カシ ガ
Dichocrolis punctiferalis Guén.	モモ ノ シンクヒ ガ
Cacaecia rosaceana Harr.	リンゴ ハマキ ガ
Tmetocera ocellana F.	リンゴ ヌムシ ガ
Carpocapsa pomonella L.	リンゴ オホシンクヒ ガ
Tinea granella L.	コク ガ
Trichophaga tapezella L.	モウセン ガ
Tineola pellionella L.	イ ガ
〃 bisselliella Hum.	コ イガ
Hyponomeuta malinella Zell.	リンゴ スムシ
Argyresthia conjugella Zell.	リンゴ ヒメシンクヒ ガ
Sitotroga cerealella Oliv.	バク ガ
Coleophora nigricella Steph.	ツヽ ミノムシ ガ
〃 malivorella Riley.	ピストル ミノムシ ガ

Hymenoptera

Nematus ribesii Scop.	スグリ ノコバチ
〃 erichsonii Hart.	ラクヨウショ ノコバチ
Cephus pygmaeus L.	コムギ ノコバチ
Cladius pectinicornis Fonr.	バラメゲ ノコバチ
Emphytus cinctus L.	バラ マキ ノコバチ

Diptera

Cecidomyia destructor Say.	フシ カンバヘ
Diplosis tritici Kirby.	コムギ バヘ
〃 pyrivora Riley.	ナシ バヘ
Haematobia serrata R. D.	ウシ ノ ツノバヘ
Pollenia rulis F.	オホ イヘバヘ
Musca domestica L.	イヘ バヘ
〃 corvina F.	クロ イエバヘ
Lucilia caesar L.	キン バヘ
Calliphora vomitoria L.	クロ バヘ
Anthomyia ceparum L.	ネギ バヘ
Phorbia brassicae Bouch.	ダイコン バヘ
Piophila casei L.	チース バヘ

Rhynchota

Acanthis lectularis L. ナンキンムシ
Psylla pyricola Först. ナシジラミ
Aphis mali F. リンゴアブラムシ
" pruni Koch. スモモアブラムシ
" cerasi F. サクラアブラムシ
" ribis L. スグリアブラムシ
" brassicae L. ダイコンアブラムシ
Nectarophora cerealis Koch. ムギアブラムシ
Phorodon humili Sch.
Schyzoneura lanigera Haus. ワタムシ
Mytilaspis conchiformis Gmel. (M. pomorum, Bouch.) モモノカイガラムシ
Lecanium Persicae F.
Icerya Rosae R. et H. バラカイガラムシ

Orthoptera

Phyllodromia germanica L. チヤバネアブラムシ
Periplaneta americana L. アメリカアブラムシ
" australasiae F. オスタラリヤアブラムシ
" polita Wk. ダイワンアブラムシ
" semicincta Wk. オビアブラムシ
Stylopyga concinna Hag. アブラムシ
" orientalis L. コバネアブラムシ

◎皇太子殿下奉獻中等教育昆蟲標本詳解（其二）

名和昆蟲研究所内　小竹浩

明治二十九年四月岐阜縣尋常師範學校に於て中等教育昆蟲標本を調製し、皇太子殿下に奉獻せしことは尚吾人の記臆に存する所にして、其内容に至りては寫眞帖によりて窺知せらるゝの士尠なからざるべし。然れども未だ其の說明書の發表なきを以て、當所に向て之れが說明を望まるゝの士多きにも係らず一片の書信能く盡し得らるゝの類に非ざれば、遺憾にも一々應答し得ざりしが、永く之れを埋沒して諸士の希望を空ふする如きは、斯道に忠實ならざるの嫌あるを以て茲に紹介の勞を執らんとす。左に揭くるは即ち其主意書の原文なり

明治廿六年以降、岐阜縣尋常師範學校職員生徒一同　奉獻の意を以て蒐集に着手し、時の校長坪井仙次郎事を督し、教諭名和靖主任となり調製保管を司り、他の職員全体は生徒を督し、生徒は第四年級考案者となり、第三年級解説蒐錄の事を執り、第二年級專ら採集に從事し、第一年級これが補助となり、爾來年を閲する殆んど三年、其間校長の更任ありたるも、現校長多和田豐吉此の擧を繼ぎ、今茲に漸く完成するに至れり。

是れに因て之を見るに、一朝一夕に裝成せられしものに非らず、永き間　職員一同は生徒を督勵皷吹し生徒は苦辛經營能く事に從ひし結果に外ならず。抑昆蟲標本の纒まりたるものを製せんと欲せば、意外の時日と、意外の煩勞とを要することは到底昆蟲を手にせざるもの丶想像の及ばざる所なり。況や今より約十年前に於て、其箱十五を算し、種類二百に垂なんとし、之れに一々説明を加へたるに於てをや。本號の口繪は即其一部の撮影にして、今之れが説明書を繙き、相對照玩味せば得るところ蓋し尠少にあらざるべきを信じ、以下號を追ひ順次口繪に挿入すると共に説明書に改訂を加へ、以て本欄に收錄し讀者に紹介せんとす、讀者　豫め之れを諒せよ。聞く當所長名和先生は其當時職を岐阜縣尋常師範學校に奉じ動物學科を擔當せられし折なりしが、意已に職を辭し、昆蟲研究所を設立して專ら應用昆蟲學の發達を圖らんとの意ありしかば、紀念の爲めにもと率先指導せられ、特に口繪の上圖　即　裝飾用標本は全く同先生の考案に成り附屬として奉獻せられしものなりといふ。

第一裝飾用標本説明（本號口繪上圖參看）　該標本は縱二尺三寸横三尺大の額面に製したるものにして奉獻の當時　皇太子殿下には沼津の御用邸に在らせられ、特に其の年、寄山祝てふ御題なりしかば、是れ等に因み裝成したるものなり。富岳の山顛は青象鼻蟲を配して雲上高く聳え、四時白雪を戴くの狀を象り

漸次下りて山腹に至る迄は姫金龜子を、中腹以下は金龜子の小形のものより順次大形のものを以てし、茶色金龜子を列ねて雲に擬し、青腰蟲を配して太陽に象り、蜻蛉の各種を以て下り龍に擬す。時恰も日清戰役の後なりしかば、蜻蛉を暗に日本軍隊に、ミチヲシへを支那兵に擬したるなり。之れミチヲシへは學名をシシンデラ、チエネンセスと云ひ、支那の原產なるを以てなり。日本軍隊の正々堂々隊伍を整へ進擊すれば、逃走に巧みなる支那兵は抵抗の勇なく忽ち四分五裂先を爭ふて逃走し、僅に彈丸の達せざる後方の一部隊は殊勝にも反抗せんとするの狀にして、戰役當時の眞想を穿ちたるものなり。右方には三保の松原を畫くべき處あるも、事の茲に出でずして稻、茶、桑に各種の害蟲を入れたるは、少しく意の存するありてなり。即ち本邦に稻作の重要なる、茶桑の直接に、間接に輸出品として貴重なるは贅辯を要せず。之れ等の重要作物に對する害蟲の全滅を圖りて後、茲に初めて富峯の巍然東海に聳ねて萬世變りなきが如く、我國家も亦益發達して東洋の一方に嶄然頭角を表はし、以て天地と共に無窮に動きなきことを意味したるなり。

◎稻の貝殼蟲

米國理學士　桑名伊之吉

貝殼蟲は多く叢樹及び果樹に寄生するを以て、我產業上夥しく害を被むることは世人の夙に知る處あるが、貝殼蟲は單に樹木を害するのみならずして禾本科植物を害するもの叉尠なしとせず。然れども是迄嘗て稻に貝殼蟲の寄生するあるを聞かざりしが、本年（西曆一千八百九十三年明治三十六年）の印度博物館報（第五卷三冊）を閱するに、同國昆蟲學者グリーン氏は新種なる、稻の貝殼蟲てふ一文を掲げたり。本邦に於ては、未だ之を發見せざりと雖ども、我が最重要農作物とする稻に寄生するものなれば、

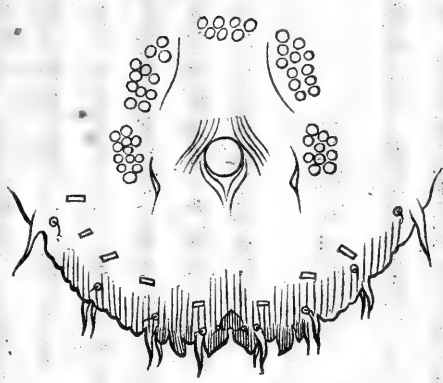
左に其説明を譯して以て愛讀者に照會せんと云爾。

稻の貝殼蟲、(Chionaspis decurvata Green)　托生植物　稻、發生地　印度

●●●●雌蟲の貝殼、貝殼は白色にして、蛻皮は藁黄色を呈し、楕圓形にして少しく凸起す。第二蛻皮より小しく尾端に依りたる部分の幅最も廣く、尾端に向ひて狹小なり。裏面の貝殼は能く發達せり。長さ一、五〇M乃至一、七〇M、幅〇、七五Mあり。

稻の貝殼蟲の雌蟲臀板の圖

●●●●雄蟲の貝殼、白色半透明にして縦に三個の凸隆線あり、長さ一、一〇M、幅〇、四〇Mあり。

●●雌蟲、体は黄色にして略ぼ楕圓形をなし、中胸部より腹部にかけて幅最も廣し。退化せる一環節よりなれる觸角は一個の稍や曲りたる粗毛を生じ、臀板の游離縁は圓形なり。中央にある一對の扁長板は大きく、末端に至るに從ひて相離あれ、其内縁は凸出し後縁は凹入す。第二扁長板は稍や小にして二個に分裂し、其内部にあるものは大なり。第三扁長板は甚だ小なり。五群の圓形分泌孔あり、中央の一群は七個乃至八個前側の一對は十一個乃至十四個、后側の一對は十個乃至十二個よりなれり。中央と第二扁長板との間及び第二と第三扁長板との間に各二個の棘あり、又第三扁長板の上位に二個の棘を有す。

◎無翅の螢種に就て附臺灣産の螢種（續）

在臺灣打狗港　永澤小兵衛

(三)臺灣産の無翅螢　余が臺灣産に無翅螢あることを認めしは、近く今月二日の事にて、之が研究用に供せしは、都合二種三頭の所謂ウジボタルなりき。是より先、六月十一日の夜、臺北の郊外に於て二種二十餘頭を獲たりしが、皆悉く雄蟲たるに疑がひを懐き、茲に始めて研究の端緒を啓きたれど、生憎や、豪雨連日、屢次其機會を失したりしを以て、同月二十日轉じて城南の村落古亭庄に採集せり、去れど此際は早や四邊に螢影だも無く、歸途道傍の草間より、一の蛆螢を捕へしのみなりき。越えて廿二日の夜、臺北と頂内埔庄間を捜索せしが、只遙に一螢の飛行するものあるを目撃せしのみにして、是また不成功に歸したりき。斯く絶望に瀕し乍らも、尚ほ多少賴む所ありしを以て、南門外街、劒潭、古亭庄等の土人に買收を約せしが、時期既に遲れたりとて、一頭ども捕へたる者無く、益々失望を重ねしめぬ。折しもあれ六月廿九日の夜は、高温無風にして月さへ見えぬ曇天なりしかば、獨り自から城外を距る十數町の地に採集せしに、幸ひにも二頭の飛螢と十餘の蛆螢とを獲たれば、欣然歸りて之を燈下に檢せしに、飛螢の一は黄褐色のもの(乙)にて、他は別種(甲)に屬せり。而してその蛆螢に至りては、大小肥瘦一様ならざりしも、自づからまた此二種のものたることを知らしむべき特徴を有しき。翌日再檢を加へたる結果、深く信ずる所ありしを以て、試みに其一頭を剖解して、腹部の構成を檢せしに、果然老熟の雌蟲たることを確め得たり。然れども、自信の餘り或ひは誤視することもやあらんかと、其翌七月一日を以て、臺灣總督府國語學校理科室に、敎授永澤定一氏を訪ひて、鏡檢の勞を煩はし、割愛また他の二頭をも解體細檢せしに、何れも發育その極に達したる成蟲たること判明し、此時を以て始めて臺灣種の雌蟲は、世に所謂ウジボタルなることを確認しぬ。但その幼蟲と成蟲との分界、及び甲種と乙種との區別に至りては、今なほ斷言するに憚かるものあり。是れ研究上に於ける難事の一たるに違はざるも

眞の幼蟲と蛆形の成蟲との間には、其擧動に稍異なれる所あるを以て、今後數回の研究を積まんには、必ずしも辨別し難きにあらざる可しと信ず。

(四)臺灣產の螢種　臺灣島に於ける蟲種の調査は、今なほ不明に屬し、會々その分布を知らしむる材料ありと雖ども、採集區域の狹小なるは、未だ十が一にだも及ばざるが如し。故に螢種に就ても、亦頗ぶる之を知るに難んずるものあり。而して余が臆想に依れば、全島には、次の三種を以て普通種と謂ふことを得べきに似たり。即はち(甲種)全體扁平、胸背黃褐、翅色灰黑にして、黃褐の邊緣を前翅の周邊に彩どれる大形種。(乙種)全身黃褐色を呈し、前者よりは小形なれども、其性活潑に、飛行輕捷にして且つ强烈の發光をなすもの。(丙種)其大さは甲乙兩者の中間に居り、翅色黑くして、腹部に赤色を帶ぶる所のもの是なり。今これを次に概說せん。

い(甲種の雄)　體軀は扁平橫濶にして、全長四分七八厘、濶二分を普通とす。前中の兩胸は密着し後胸は大にして著るしく隆起せり。胸背は長半圓形をなして俗に所謂飴色を帶び、中央膨起の處は赤褐を呈し、長一分三厘濶一分八厘許り、其上端には八字形の透明鏡を點す、常に全たく其頭部を蓋ふを以て、內面より見る時は、なほ黃笠を被ふれるがごとし。眼は純黑にして小に、双々近く相隣接す觸角は長一分八厘許り、鋸齒狀をなせる十一節互ひに相連結す。前翅の實質は飴色にて、これに灰黑の色彩を添へたるものなるも、後翅の全部の灰黑色なるより、宛から黑翅に黃褐の邊緣を施せるが如くに見ゆ。其長約三分八厘、濶一分一厘あり。邊緣は左右兩緣と翅端とに於て稍太く、中央接合部に於て細直なること葛上亭長のそれにも似たり。腹部は上半の四節、微褐黑色を呈し、其濶二分に垂んたり、これに續て蒼白色を帶べる發光器二節、幷びに尾節等あり、共に長三厘、濶一分內外を算す。

ろ（無翅の雌）　是はいの雌蟲にして外貌は全く蛆形をなし、體軀肥大よ、地質は灰黑なり。故よ之を背後より見れば宛然十二節片を聯繫せる一種可厭の幼蟲あるが如し。其背部の中央には、一條の白縱線、若くは縱溝を貫通し、毎節美麗なる刻點紋を有せり。頭部は不正長方形をなし、尖端ゎ稍狹けれども、下方は次第に其濶を增し、且つ三條の白縱線を具ふ。其構成は最とも奇にして、龜鼈の頭部の如く、頸首の出入自在なるより、物に驚怖する時は、收縮して圓筒中に藏め、適意の時にのみ之を伸長す。圓筒の内面は、色稍白く、口徑約七厘あり。體長は常に九分五六厘に止まるも、蚑行に際りては、增して一寸許りとなる。胸部は雄蟲と反對に前中兩者最とも發達し、後胸は極めて短かく、縱横に交錯せる帶紅白細線を描けり。腹長約五分五厘、其左右に二縱線を走らするの他、なほ各節の兩端には、帶白微紅の異彩を有するものあり。發光器は其第七節よありて、表裏の兩端よは各々八字形の白紋を點ず。發光器に次げる末節は、魚尾狀をなし、これを以て能く物よ吸着するの性あり。脚は六足よして黑く、各節上には、顯著なる白斑と、褐色の小爪とを有し、脛節及び跗節の内側よは、一列に微毛を生せり。今試みよ、之を十二節よ分つ時は、第一節の頭部は、長一分六厘を算するも、胸部に屬する第二第三兩節は共に一分一厘、第四節は五厘あり。而して腹部に屬する第五節は七厘、第六第七第八第九の四節は何れも八厘、第十節は六厘、第十一節の發光器は五厘、第十二節の尾端に於ける中央部は僅かに四厘よして、其左右は略ぼ之に倍するを見る。而して頭部の最廣部は、その濶一分五六厘よ達することありて、胸腹部に稍これよりも濶し。但し稀には腹部の彩色の微黃色なるものあり。

は（乙種の雄）　身長三分前後あり。眼は藍黑にして巨大に、且つ前方よ凸出するが故に、背後よりも之を見ることを得、前翅は原と黃褐なるも、後翅の灰黑色透徹して、暗褐色に見ゆ。胸背は赤褐色

よして、其長七八厘、濶九厘より一分の間にあり。翅長は二分五厘、その濶二分五厘許り、長く腹端の外に出づるを以て、體軀自づから細長なるやの觀あり。觸角は纖細にして、甲種の如く分明ならざるも、之を鏡下に照せば、此科特有の形狀を具備するを見る。脚部は、股節のみ、體色と同一色にして脛節蹠節は共に黒く、其爪は褐色にして鋭どし。腹部また體色と等しく、後半には淡青白色の發光器二節を有せり。而して第一光節は、恰かも細帶を纒ひたるが如くにて、長三四厘、濶一分なれども、第二光節は矢鏃狀をなして、周縁には黄褐の細邊緣あり。腹部の各節中、特に注目を惹くは、第一光節に接する第一節若くは第二節の、必らず黒色を帶ぶる一事にて、其長三厘、濶一分四五厘あり。尾端は甲種のそれの如くに圓からで、何れも尖鋭の角度を有す。

に（有翅の雌）　是ははの雌蟲にして、雄よりも體軀稍小に、且つ少しく扁たし。翅翼また短かく、尖端の腹端と並行するもの多し。眼は純黒にして小に、加ふるに觸角も前者よりは纖細なるを以て、胸背より頭部を見ること難し。其他は略ぼ雄蟲に髣髴たるも、發光器の唯一節に止まると、其以外の諸節の一樣に淡黒を帶ぶると、翅面の暗黒なるもの多き等は、主なる相違點とすべし。然は云へ、明かに此第二第三の區別を設け難きものあるのみか、また稀には、全翅灰黒をなせるもの無きにあらず腹部は概むね豊肥にして、末端は雄の如く尖鋭ならざるも、尾上には微細の刺を有せり。

ほ（丙種）　余は未だ此種を採收し得ず。臺灣總督府國語學校に於て、昨年之を八芝蘭の草山に獲たりきと。惜ひかな、只纔に一頭に止まるを以て、之を記述するに苦む。隨ひてまた其習性等を報道し難し。

想ふに、此三種中（甲種）と稱するものは、普通の早種と覺しくて、六月十一日に採集の際には、殆んど其全數を占めたりしが、其後六月廿九日、七月三日、七月四日、七月六日、七月廿一日、七月廿二日の

數回、各地に於て採集の結果によれば、次第に其數を減じ、遂に(乙種)の之に代れるを見る。則はち之を内地產に譬ふれば(甲種)は、五六月頃に全盛なるオホボタルの如く(乙種)は、六七月頃に群飛のヒメボタルに類せり。特にその性質の上より言ふも、彼此酷肖する所多く(甲種)は、温柔にして悠揚、飛行の際に一種特有の奇癖あるも(乙種)は、常に反對の擧動をなし(甲種)は淸澄の河邊、又は山腹の草間に棲息するも、(乙種)は田畔、池水の上に輕飛するもの多き等、數へ來れば内地產の兩種に比ぶべき點少からず。但外界の刺戟によれる發光には、如何なる異同ありやの一事に至りては、未だ精細の研究を加へず(未完)

◎第一回岐阜縣昆蟲分布調査(三)

名和昆蟲研究所助手　分布調査主任　小森省作

環紋蝶科　此科に屬するものは、今回の採品中には凡て十一種ありて、其中ウスイロコジヤノメテフ、ヒメジヤノメテフ、ヒカゲテフ、ジヤノメテフ、キマダラテフは多數に、ジヤノメモドキテフ、ヒメキマダラテフ、カスリヒカゲテフは極めて少數なりしは、前者は最も普通種にして採集亦其時期なりしと、後者は常に山地に產するものにして、又稀なるに因れるなるべし。今左に略說を試みんとす。

(四一)コジヤノメテフ(Mycalesis perdiccas, Hew.)　多く山地に飛翔するものにして、翅の表面は一躰に黑褐色を呈し、外緣に近く前翅に大小二個と、後翅に微かなる環紋を有す。裏面は表面に比し色稍淡く、外緣に沿ふて前翅に二乃至三個、後翅に七個の環紋一列をなす。(但此環紋は變化多し)而して前後兩翅を通し一帶紫白色の帶紋あり。雄蟲には前翅の第一翅脉上に特殊鱗と、後翅の基部前翅の下面に屬する處に總狀の鱗毛(特殊鱗の一種?)を有す。今回養老、山縣、郡上、加茂、可兒、土岐、大野の七郡

其前種に極めて酷似せるものよして、其色稍淡し。只異なる處は前種に比し淡色なると、裏面よ於ける前後兩翅よ通せる帶紋あるが如し。即ち前種の帶紋は帶紫白色にして多少屈曲せるも、此種は帶黃白色にして直線をなす。又雄蟲の特殊鱗に差異あり。夏期日蔭よ普通にして、幼蟲は稻等禾本科植物を食す。安八を除き縣下各市郡に於て多數獲られたり。

(四三)ヒカゲテフ (Lethe sicelis, Hew.) 常に日蔭に居るを以て此名あり、翅の表面は一樣に暗褐色を呈し、僅か後翅よ微かなる環紋の現はるゝのみ。裏面は其色表面に比し淡く、前翅の翅端に一乃至二個、後翅の外緣に沿ふて六乃至七個の大小環紋と、兩翅共帶褐白色の帶紋を有す。又此蝶は變化非常に多し。今回海津、安八の二郡を除き各市郡に於て多數獲られたり。

(四四)クロ ヒカゲテフ (Lethe diana, But.) 此蝶は表裏何れも前種に酷似せるものよして、只其異なる處は前種に比し、一般に小形にして、前翅は比較的廣く、裏面の白帶は前緣に近づくに從ひ廣く且つ鮮明なり。後翅は黑褐色の線條のみにして、環紋は比較的大なり、然れども雄蟲よ於ては一般に濃色よして、前翅の裏面後緣の中央部に黑色の長き特殊鱗を有するの特徵あれば、容易に區列し得べし。常に山地に產す。今回武儀、土岐、惠那、大野、益田、吉城の六郡よ於て獲られたり。

(四五)ヒメ キマダラ テフ (Lethe calipteris, But.) 翅の表面は淡褐色にして、翅端は濃く暗褐色をなす。前翅には數多の淡き黃褐色の斑紋あり。後翅には外緣に沿ふて淡黃褐色の斑紋列ありて其中に黑色の圓紋を有す。裏面は黃褐色よして褐色と白色の斑紋ありて、後翅の外緣に沿へる部には環紋列あり、山地よ產す。惠那、大野、益田の三郡に於て各一頭つゝ獲られたり。

(四六)キマダラモドキテフ(Lethe? epimenides, Men.)　中形の蝶にして、翅の表面は前種の如く淡褐色にして翅端は稍濃く、淡黃色の斑紋ありて前翅の前縁角に近く一個、後翅の外縁に近く沿ふて數個の黑色の圓紋を有す。裏面は暗褐色の曲折せる線斑數條と、前翅に一個、後翅に六個の環紋を有し、後翅の外半は白色を帶ぶ。稻葉、揖斐、山縣、武儀、加茂、大野の六郡に於て獲られたり。

(四七)ジャノメモドキテフ(Pronophila schrenckii, Men.)　稀に山地に產する大形種にして、翅の表面は一樣に淡褐色を呈し、前翅の前縁角に近く一乃至二個、後翅の外縁に近く六個の黑褐色の圓紋あり。裏面は色稍淡く、前翅に二個、後翅に六個の環紋を有し、茶褐色の線條を走らす。吉城郡稻越尋常小學校四年生宮腰みゑの採品なり。

(四八)キマダラテフ(Neope gaschkevitschii, Men)　全翅の表面は黑褐色にして、基部には黃褐色色の鱗毛を密生す。外半には數多の帶褐黃色の斑紋ありて、其中に黑點を有す。裏面は黃褐色にして前後兩翅共不規則なる褐色の斑紋を有し、外縁に近く環紋列を有す。而して春生種は形稍小にして黃色を增し、後翅の裏面白色を帶ぶ。羽島、海津、土岐、吉城及安八を除き各市郡に於て獲られたり。

(四九)カスリヒカゲテフ(Pararge deidamia, Evers.)　常に山地に產し、翅の表面黑褐色にして白色の縁毛を有し、前翅に白色の斑紋あり。裏面は前翅に一個、後翅に六個の環紋ありて兩翅共白色の斑紋を有す。今回益田郡に於て一頭を獲たり。

(五〇)ジャノメテフ(Satyrus dryas, Scop.)　大形種にして全翅の表面一樣に黑褐色を呈し、前翅に二個後翅に一個の環紋を有す。裏面は表面に比し色稍淡く、雌蟲の後翅には灰白色の帶紋を有す。變化非常に

多く、而して雌蟲は一般に大なり。岐阜、海津、不破、本巣、郡上及安八の六郡を除き各郡に於て獲られたり

(五一)ヒメジャノメテフ (Ypthima philomela, Joh.) 邦産環紋蝶科中最小なるものにして、翅の表面は暗褐色にして前翅に一個、後翅に二乃至六個の環紋を有す。裏面は黄褐色を呈し、環紋は大きく鮮明にして、褐色の小波狀斑紋あるを以てヒメウラナミジャノメテフとも云ふ。林間に普通なり。岐阜海津、養老、大野及安八を除き各郡に於て獲られたり。以上述べたる處の採集數を表出すれば、即ち左の如し。(表中△印は十頭以上のものに限る)

番號	種名	岐阜市	稲葉郡	羽島郡	海津郡	養老郡	不破郡	安八郡	揖斐郡	本巣郡	山縣郡	武儀郡	郡上郡	加茂郡	可兒郡	土岐郡	惠那郡	大野郡	益田郡	吉城郡
四一、	コジャノメテフ	|	|	|	|	一	|	○	|	|	一	|	一	二	一	|	|	一	|	|
四二、	ウスイロコジャノメテフ	一	六	△	二	九	五	○	二	△	五	△	九	△	五	四	△	△	△	三
四三、	ヒカゲテフ	二	五	△	|	△	七	○	七	△	五	△	五	△	五	九	△	一	四	二
四四、	クロヒカゲテフ	|	|	|	|	|	|	○	|	|	|	五	|	|	|	一	一	三	六	七
四五、	ヒメキマダラテフ	|	|	|	|	|	|	○	|	|	|	|	|	|	|	|	一	一	一	|
四六、	キマダラモドキテフ	|	|	|	|	|	|	○	一	|	二	一	|	四	|	|	|	一	|	|
四七、	ジャノメモドキテフ	|	|	|	|	|	|	○	|	|	|	|	|	|	|	|	|	|	|	一
四八、	キマダラテフ	二	七	|	|	五	一	○	一	△	二	五	一	二	一	|	一	二	一	|
四九、	カスリヒカゲテフ	|	|	|	|	|	|	○	|	|	|	|	|	|	|	|	|	|	一	|
五〇、	ジャノメテフ	|	六	一	|	二	|	○	四	|	三	八	|	六	二	五	七	五	八	二
五一、	ヒメジャノメテフ	|	二	|	|	五	一	○	一	六	五	△	六	四	三	二	七	|	二	一

正誤、前號(一五)に於てヤマキテフ (Gonopteryx rhamni, L.) とせしはスジホソヤマキテフ (Gonopteryx aspasia, Menet.) の誤につき茲に訂正す。

◎第十六回全國害蟲驅除講習會員の五分時演説

編者云、左に掲ぐるは去る八月一日より二週間、當昆蟲研究所の開催せる第十六回全國害蟲驅除講習會々期中、當市鶴飼ホテルに於て其會員のなしたる五分時演説の一班なり。固より今回の會員は其數殆んど一百に達し、到底全員の演述し盡し能ふべくもあらざれば各府縣より一名つゝ代表者を出し講演せしめたれば都合二十三名の演説筆記を得たれど、これさへ紙面の都合により悉く收録し能はざれば、只演説筆記稿の順により左の四名を掲載することゝなしぬ。

(一)害蟲驅除の要件に付卑見を述ぶ

德島縣　鎌田愛藏

私は只今先生ヨリ紹介せられました德島縣人十一名の代表者として聊卑見を述ぶる考であります。我地方にては、此頃余輩の生命財産を侵害する害蟲軍が蜂起して其勢非常に猖獗を極め實に底止する所を知らざるの有樣です、故に之を驅除するは目下焦眉の急にして一日も忽諸に附すべからざる事でありますが、此事を實行するには或一の技術を學び、以て其正鵠を誤らざらんことを要します。今余等の此處に來り此の講習を受くる事を軍事に例して申せば、此技を學ばんが爲め千里を遠しとせずして害蟲驅除鎮守府たる當地に參り、名和指令官の下に在て其技術を練習する茲に十日、今や其大半を研究し數日を出でずして各幹部適任証書を享受し、各歸縣して以て其實務に從事せざるべからざる時機となりました。されど諸君よ、活眼を放つて我國の害蟲軍の棲息する昆蟲海の現象を見給へ、實に茫々漠々、廣大無邊而已ならず前述の如く害蟲軍の現状は眞に痛嘆に堪へざる次第ではありませんか。余等幹部たるものは此大海を横航し、敵と戰ふて死を顧みざるの覺悟を以て事に當らねばなりませぬ。而して此昆蟲海中には、種々の暗礁があり激浪がありまして、玄海灘も只ならぬことゝ考へます。今此暗礁の主なるものを申せば、其名稱は僅に天保岩、念佛岩、御守岩、神水岩、護摩灰岩、天理岩等ありと思ひます。其他數ふるに堪へざる位あります。而して此暗礁の歷史を調べて見ますれば、實に數百年來成長して容易に破碎する事は出來ませぬ。今之を文明の利器たるダイナマイトを以て一撃の下に破らんか之れ却て得策にあ

ますと信ずれば、余輩は腦力と勞力とを以て此暗礁中に完全なる航路を探見して以て進行せねばなりませぬ。然らば暗礁も、年と共に波浪の爲に碎滅するの時もあらんかと信じます。之れ私の第一要訣とする所以である。次には此航路を見出せば、其攻擊方法は決して一人討ち或はぬけがけの功名、彼の往昔の佐々木高綱的功名は既に前世紀の事に屬し、今世紀は是非聯合軍を編成し、擧國一致之れが驅除に從事せねばならぬと信します。之れ第二の要訣である。次には如上の航路、軍隊編成出來上りし上は、之を決行して目的を果すには第一經費を要すは自然の道理でありませう。此に注意すべきは、之れに要する船艦其他攻擊要具は悉く内國產のものたるを要することで、其他諸事萬端一に經濟を脫して決行するは收支相償はざるの結果を生じ、噬臍の悔を生ずる樣になりませう。此れ要訣の第三であります。今、前申述べました事を概括すれば害蟲驅除の要訣は即ち左の通りでありませう。

第一　迷信打破、　第二　協同一致、　第三　經濟的の策を講ずること

終りに臨み一言申添て置きますことは、前述の航路にして若し航路困難進行する能はざる場合に到れば岐阜縣名和燈明臺の光を的にし、名和式探海燈を備付けなば危險を免かれ、目的の彼岸に達することと信じます。聊卑見を述べて余の責任を免ぬがるゝ次第であります。何卒諸君の御叱正あらんことを願ひます。

（二）害蟲驅除の普及を計る方法　　富山縣　室子次郎

私は富山縣の室子次郎で御座います、今度五分間演說の抽籤に當り、不肖を顧みず暫時諸君の清聽を煩します次第であります。古語に言ふは安く行ふは難しと申すことがありますが、實に害蟲の驅除豫防に於て斯の言の適切なることを認めました。凡そ害蟲驅防の完全を望むには、一般の農民に昆蟲思想を與ふる事が必要と存ます。今日の農民は尙ほ蟲は氣候の爲に自然に湧くものゝ如く心得居るもの殆んど一般でありまして、適々害蟲發生の結果驅除法を行ふと雖も多く他動的換言せば干涉命令の結果に外ないと存じます。故に自動的豫防驅除を望むと言ふ樣の事は容易に行ると思はれませぬ、實に慨然の次第ではありませんか。時維れ第二十世紀生存競爭の烈しき恰も狂波怒濤の渦中に沈淪しつゝあるの今日、轉た痛惜の情に堪へません、之れ私しの講習會出席の希望の起りたる所以であります。今後に於ては、愈よ我等は國家の爲め、害蟲驅除、益蟲保護の任を執る決心に御座ります。併しながら不肖の如き一二の者共の力にて決して功を奏する事は出來ない、故に私の考へは一般農民間には精神教育を盛にし、國家的觀念を振起すると共に昆蟲思想の發達を謀るの方法を講ずることが目下の急務だろーと考へます、之れ

より其二三の方法を申上ませう。

(一)各町村に於ける大地主をして害蟲驅除豫防奬勵委員となし、彼等をして先づ自ら進んで害蟲驅防のことを研究せしむること、我郡の如きは本年郡農會評議員會に於て、毎町村の大地主中三名以上五名迄を必ず害蟲驅除奬勵委員にする事に決定し、之が實行の結果頗る好成績を見る事が御座りました。固より大地主に於て、害蟲驅除其他農業一般の事に力を致すは、明かに彼等に命ぜある天職であろうと考へます。

(二)小學兒童には害蟲の恐るべき觀念を與へ、驅除豫防の簡易なる方法及之が實地應用等の手段を實行せしめ、以て生徒をして常に害蟲驅除の手傳人たらしむるは、經濟上現時及將來に於て大に効果あることゝ信じます。

(三)宗教家を利用して婦人教會の如きものを組織せしめ、學校教育なきものに害蟲驅除と宗教との關係より害蟲の驅除せざるべからざることを說くは、宗教の盛なる地方に於ては最も効あることゝ信じます

(四)昆蟲講話、昆蟲幻燈を實行して昆蟲思想の發達を助くること、凡そ害蟲驅除を完全に行ふには先づ昆蟲思想を養成せねばなりませぬ、此の昆蟲思想を養成するには從て是等に關する智識を授けねばなりますまい。此に於て昆蟲講話幷に幻燈の必要なる所以であります。

(五)實物標本圖解等を示し、其發生經過習性等を知らしむるは目下の急務なりと信じます、之れ今日の農民中其最も重なる害蟲が如何なる形態をなし居るやすら知る者の少なくして、例へ幻燈により說明するも其實物によるの効果に勝れたるはありませぬ。猶申上度き事も多々ありますれど、丁度時間に至りましたから是れで御免を蒙ります。

(三)害蟲發生の基因幷に豫防驅除法

京都府　村上義一

抑も害蟲の發生するに就て其基因を調べて見ますると、大凡左の四つの要件を具備して居ると考へます

第一、害蟲の卵子の存在して居ること。

第二、氣候が其害蟲の性質に適當なるか、又は絕對的不適當ならざること。

第三、其害蟲の嗜好せる作物を栽培したる時。

第四、總ての農業者が害蟲に對する觀念に乏しき結果自然注意を怠りたる時。

即ち右の四條項で害蟲發生の基因は大抵云ひ盡せたゞろーと思ひます。

害蟲の發生する基因を知る事を得れば、驅除豫防法は自然と判つて來ます。そこで驅除豫防を致しますに

は、前の四條項を完全ょ備へざらしむる事が必要である、之を換言しますれば、前の四條項の內一或は二以上の條項を避けることが必要であると云ふのです。斯く申せば既に諸君も御了解にあつたことでありませうが私だけの卑見を一通り申述べて此五分間演說の責を塞ふと存じます。

第一の卵子の存在を除くには卽ち採卵法を行へば夫れで宜しい、此採卵法を完全に施せば、氣候が如何に害蟲の發生に適當であつても、如何に農業家が害蟲なる觀念に乏しくして注意を怠りても、如何に害蟲の嗜好せる作物を栽培しても、總ての蟲が涌くものでない以上は決して發生しない、此の害蟲の卵の存在を除くのは蟲害豫防として唯一の良策と考へます。

第二の基因を除くのは到底人工を以て爲すべからざる事である、之れに就き將來氣候を人工で以て左右することが出來るとして之れは容易に濫用すべからざる事であるのです。故に第二の基因を除きて害蟲を驅除すると云ふのは余輩の理想以外の方法にして、唯注意を以て當るより致方はありませぬ。

第三の基因を除くと云ふことは、所によりては容易に行ふことが出來ますが、所によりては實行が大に困難であるのみならず、不利益も亦之れに伴ふことがあります。故に容易に行ふことが出來る所は可成此の方針を執るのが利益でありませう。現今農業の利益を增進する爲め、輪作法を奨勵しつゝあるのは此の趣意に外ならぬのであります。此方法は豫防上最も必要であると考へます。

第四の場合に際しては一般農業家に必要なる智識を注入して後初めて好果を奏すべきものである、卽ち自已の業務に付き不親切、不注意なる我が農業家に對しては、現今最も困難なる一條件であるのです。而して之に對して飽くまで注意を怠らざらしめんとするのは甚だ容易ならざる事でありますが、一時に斯く怠りなきの注意と云ふことは、思慮に乏しき農家に於ては到底行はるべき事でありませぬから、相當當局者に於て干涉的に注意を與へんければなりませぬ。又之れと同時に適當なる施設を將來の爲めに計るが必要であるのです。其施設の方法等は諸君の御思案に委す事に致します。抑も農民をして愈々注意を周到ならしめば、害蟲を未發に防ぐとが容易に出來るのみならず、總てに於て農業家の福利を大に增進せしむることが出來ます。故に私は前申述べました四條件の內、此農民の注意を惹起せしむることが目下最大の急務と考へます。

（四）婦人と昆蟲

埼玉縣　桑田庄治郎

私は本年五月黃花盛なるの頃、某友人を訪ひまして互に談笑しつゝありし時、其友人の令孃然かも本年

四才の愛らしき孃も此座に參りまして、私と友人との談話を聞いて居りました如く、庭前に黄色なる蝶と白色の蝶と翔り來りたるを見て、立上りて下婢を呼び、彼の蝶を捕てよと焦りましたから、下婢は竹箒を以て之を捕へんとしましたに蝶は忽ち飛び去りました。孃は不平顔に下婢の顔を熟視して在りければ下婢は又次に飛び來りし蜻蛉を捕へんとしたるに、孃は蜻蛉は捕ていけませぬと申しました。私は之を見て、僅か四才の少女が蝶と蜻蛉に對して、益蟲と害蟲との區別を識れるを嘆賞し、之れを質しましたに、孃の母君は某高等女學校の卒業生にして博物學の趣味を有せるものなりと、之を以て之を考へまするに、女子に昆蟲學の思想を有せしむる樣に誘導懇話したならば、害蟲驅除は容易に行はるゝのみならず、又幼童を導き不知不識の裡に理科思想を養ひ、又害益蟲の區別を明にし、害蟲は驅り益蟲は保護する樣に到ることゝ信じます。又婦人は迷信の強きものなれども、昆蟲學の思想確實になるときは、之を信するもの少きに到り、從て社會の改良進歩上益すると少からざるべしと深く信じます。仍て私は婦人に昆蟲學の思想を有せしむることを望む次第であります。

◎昆蟲界之花檀

在米國　名和梅吉

（一）邦產と米產の蜻蛉種屬に就て　本邦に產する蜻蛉類は曾て本誌上に記載せし如く、既に世に知られたるもの六十余種を算す。右之内學名を有するものは三分の二余、即ち四十余種にして、殘餘の二十餘種は未ざ不明の裡にあり。故に此不明種の中には、或は新屬に屬するものもあらんと信ぞれども、知るに由なきを以てそは後來の研究を俟つ事となし、既知の種類に就て屬種の幾何を有するやを調査せしに、二十八屬四十二種を算し、之を二科に配分する時は、豆娘科には六屬九種と成り、蜻蛉科には二十二屬三十三種と成れり。然るに今米國昆蟲學者ハワード氏の著なる昆蟲書に記載されたる種屬を見るに、全く米國產種を含有するとは謂ふ可からざるも、記載しある所の種類七十余種を算し、殆んど米國產の蜻蛉類に就ての大要を知得するに足れりと信ずれば、今此七十余種のものを、邦產種の如く配分せ

ば、前科に屬するもの十一屬三十三種、後科に屬するもの二十三屬四十三種と成れり。素より邦產種の內には學名未知のものあるとは云へ、米國に產するものは種屬に於て邦產のものより多きを知るに足れり。然り而して此兩者の內、同種屬に屬するもの、如何を驗するに、同種と認知すべきものは只ウスバキトンボの一種あるのみ。屬に到りては八屬ありて、前科に屬するものにはハグロトンボ屬、アオイトトンボ屬にて、後科にはオニヤンマ屬、ギンヤンマ屬、トラフトンボ屬、ウスバキトンボ屬、ベツコウトンボ屬及サナヘトンボウ屬の六屬となす。右の如く、屬に於ては多少同一のものありと雖も、そが種に到りては前掲の如くなれば、此蜻蛉類が如何に邦產と米產種との間に差異あるかは、明かに察知するを得ん。幸ひ當時研究所にては、之が邦產種の分布を調査せんとて讀者諸彥に標本の寄贈を請ひ、併せて種類の調査を爲さん爲めに募集中なれば、定めて新種屬の發見もありて、更に其種屬の增加する事ならん。余は斯學界の爲め、有志諸君の助力あらん事を希望して止まざるなり。

（二）米國の糖蛾類種屬　　糖蛾類には、農作物に大害を加ふる處の彼の夜盜蟲の總てを包含するものにて、獨り農業家のみならず、園藝なり、果樹なり、森林植物などにも發生して、往々非常なる慘害を來すものなれば、此糖蛾類中の種類に就きては、大ひに注意すべきものとす。本邦に於ては未だ確たる調査を經しものなければ、此有害種屬に付き報じ難きも、當時研究所所藏の標本は數百種に達し居るより察すれば、亦其種屬の余り少數にもあらざる事を豫想し得べし。嘗て聞く米國の博物館に所藏さるゝ、此類に屬する種類は二千三百六十余を算すと、然れども此二千余種のものが全く米產のものなるや否やは知るに由なきも、米國昆蟲學者ジョン、ビー、スミス氏の調査に係る、北米國の糖蛾類目錄に依れば、總千六百四十三種と成り居れり。氏は此糖蛾類を三科に別ちて記述されたり。即ち第一にはスイアチリーデエー科（Thya Tiridae）を置き五屬十四種、第二はノクツイーデー科（Noctuidae）にして三百二十七屬千六百二十四種を包有し、第三はブレフキーデエー科（Brephidae）と稱し二屬五種を擧げられ、屬の總數は三百三十四屬となれり。此類の中には多少害蟲を食殺する所の有益種を存すと雖も、そは實に微々たるものにて、其大部分は全く有害種に屬するを以て見れば、此糖蛾類のものゝみにても、米大洲に於て加害するの結果、生ずる所の損害額は實に莫大なるものならん。

（三）床蝨　　床蝨（Aeanthia lectularis. L.）は亦ナンキンムシ、チンダイムシなど稱して、吾人の血液を吸收して苦腦せしむる所の有名なる害蟲なり。我國にては普通に見る事難く、鎮臺等に於て往々發見す

るのみあり。然るに米國、特に余の目下滯在し居る加利福尼亞洲に於ける發生の狀態を調査し見れば、其發生の區域は、殆んど全洲に渉りて蔓延し居るの有樣なり。去れば加洲中、西に、東に、將又南に、北に旅行されし人々の談話に依れば、何れも旅宿にて之が侵害を蒙り、苦腦せしむる事ありと謂へり。現に去る七月下旬の事なりき、加洲の內南方にて、有名なるロース、エンジェルス市地方へ旅行されし余が知人の言に依れば、該市に一夜の宿泊をなし、寢床に就くや、間もなく頭部なり、足部なりを何にかムヅ／＼なと如く感ずる間に、一二ヶ所を刺擊されたれば、早速之を驗せしに、豈に圖らんや彼の恐るべきトコジラミにてありければ、こはたまらじと、寢臺なり其周圍の板張りなる壁を見れば、無數の彼れ惡むべき害蟲は、板間の間隙より自身の寢臺に來り攻擊せん有樣なりしかば、旅中の疲勞を癒せんとて宿りしに、若し此儘にせんか、到底安眠をなし疲勞を癒し難しと思ひ、宿主に告げて他宿に轉せしに、亦該蟲の棲息し居りて侵害を蒙りたり。然れども最初の如く其數多からざりしかば辛棒をなしたりしも、其一夜は全く該蟲の爲めに安眠を爲す能はず、非常に苦みたりと。之を以て之を見れば、加洲中所に依り如何に該蟲の繁殖が旺んにて、吾人人類に害を加へ居るかを察するに足らん。而して桑港に於ては如何と云ふに、是亦該蟲發生各所にありて、病院を始め、下等の旅宿などには常に發見され、我同胞の內にも之れが侵襲を受け、苦しまるゝもの少なからざる有樣なり。右の如くにて該蟲の刺擊する所は、人躰中頭頸部、手部及び足部等は重なる部分にて、胸腹部に到りては余り侵害せず。多くは前掲の三部にして、何れも刺擊を受けし個所は脹れを生じ、甚しきは一種の腫物樣を呈するに到れり。尤も此三部に刺害多きは、該蟲の潜伏場所より匍ひ出でゝ刺擊するに適し、追はれば又直ちに潜伏に便利なるに因由するものゝ如し。故に察するに、此種の人身を侵害する狀態は、恰かも苗代時代に稻苗を害するキリウジカガンボの幼蟲キリウジが加害の狀態に類似するやの感あり。

◎六足蟲彙纂（申の卷）

在東京　長野菊次郎

(二十一)氣管の大さ　昆蟲躰の側部に開ける氣孔は氣管の門口にして、氣管は躰內各所に於て網の如く分枝し、其先端に至りては其直徑一ミリメートル(三厘三毛)の三十分の一乃至六十分の一に至ると云へり(ケンブリッヂ博物誌)。

(二十二)蝶と蛾との產卵の差異　蛾類は卵を產するに、通例一所に群集せしむる傾きあり、是に反し

蝶類は通例一個づゝ産卵するものなり。特に蛾は羽化の後直に交尾して産卵を始むるを以て、之を捕獲して産卵せしむること容易なり。然れども蝶類は比較的長時間に渉りて産卵するを以て、之を捕獲して産卵せしむること甚だ困難なりとす(チッケルソン氏蝶蛾書)。

(二十三)昆蟲に對する花の進化　地質學者の説をして信ならしめば、地球の歴史上、一度植物が昆蟲の食物とならざりし時あるべく、又花より花に花粉を傳搬するに、昆蟲の力を借らずして風の媒介によるか、又は自家受粉を營みたる時期ありしなるべし。蓋し顯花植物の出現は昆蟲の出現よりも早ければなり。抑風は花粉媒助の役目を果すには、甚だ浪費的の使者にして、僅か一粒の花粉を適當の場處にるだに、數千粒の花粉を散せざる可からざるあり。扨地質時代の經過に從ひ、最初出現したる昆蟲は下等のものあるが、此等の或る者は、食物に適せる或花の花粉を見出して之を舐食したること、恰も今日の風媒花が往々昆蟲の訪問を受くるが如きこと有りしならん。かくて此等の花の或者が、柳の如く漸次昆蟲媒花となり、或は最初微小なりしものや、綠色を帶びたるものや、又は自家受粉ありしものが、時々昆蟲の訪問を受くるに從ひ、遂に他家受粉を營むに至りしなるべし。然るに他花受紛花の子孫は、自家受粉花の子孫よりも強壯に生育して、生存競爭に勝を占めたりとすれば、植物は漸次に變化の傾向を周圍よりも一層顯著となることに及ぼし、以て昆蟲の訪問を受くるに恰適して他花の花粉を俟つに至るべし。大勢此の如くなれば、植物の變化は己の生存上專ら顯著となることに傾きて永續し、遂に雄蕊變じて蕚となり苞となりて華美の色彩を現はすに至り、以て生存競爭に適應するの目的を達したるなるべし(ウヰード氏ニユー、エングランドの十花、ウヰード氏昆蟲世界より)。

◎昆蟲に關する隨感隨筆（第三回）

昆蟲翁

(十六)蟷螂驅除法　梅原寛重翁の著書、續田圃驅蟲實驗錄中に、蟷螂驅除方と題して『蟷螂は植物の大害をなさゞる者の如しと雖又柞蠶を害すると甚し、此蟲蠶の發生より結繭までを害する者なれば捕殺を怠るべからず。但該卵子は小さき燒麩のやうなる者の中にあり、之を除くに冬春の頃其卵巣を採りて燒殺すを尤良法とす』とあり。元來害蟲益蟲とは、何か一つの目的物ありて、是に對して害を與ふるの蟲類を害蟲と稱へ、其害蟲を斃す所の蟲類を益蟲と稱ふるなり。蟷螂も普通に於ては益蟲なれども、柞蠶、野蠶等の飼育者に對しては如何にも害蟲と稱すべきなれども、今蟷螂驅除法として卵塊迄燒殺する

は實に遺憾と云ふべし。此際蒐集したる卵塊を燒殺することなく、他の方面へ移轉して孵化せしめば、如何に利益なるや知るべからざるなり。聊か感ずる所あれば特に茲に記す。

(十七)天田郡の天蛾類　京都府天田郡内に於て、採集せられし昆蟲標本數百種中にありし天蛾類を調査せしに、ベニスヾメ、スヾメガ、メンガタスヾメ、エビガラスヾメ、モモスヾメ、シモフリスヾメ、コスヾメ、セスヂスヾメ、オオシモフリスヾメ、クルマスヾメ、ウチスヾメ、クチバスヾメ、ビロウドスヾメ、クロスヾメ、オオスカシバ、スケバハウジャク、ヒメハウジャク、ヒメクロハウジャクの十八種なり。然るにオオシモフリスヾメの幼蟲は、梅樹の害蟲たることをも知れり。是迄所々に於て桃、李等にて大形の蠋を捕へたりと云へるより考ふれば、全く薔薇科植物に生ずることを確知せり。又其幼蟲は一種の鳴聲を發すと云へり。

(甲)は蜚蠊(乙)は胸廣蜚蠊(ハ)(ニ)は其卵塊

(十八)蜚蠊(ゴキブリ)の分布に就て　ゴキブリ(又アブラムシとも云ふ)には種々ありて一種ならざるも、茲には只二種に就て其分布を示さんとす。甲種(ゴキブリ)に屬する者は、岐阜縣(全部)石川縣(鹿島郡鳥屋村西川豐次郎氏)、京都府(丹波國天田郡曾我井村菅沼岩藏氏)、(丹後國與謝郡山崎久藏氏)鳥取縣(東伯郡岡野庫八郎氏)又乙種(ムネビロゴキブリ)に屬するものは、愛知縣(三河國寶飯郡本茂村松倉まさ子氏)、(渥美郡牟呂村小柳津廣三郎氏)、靜岡縣(志太郡豐田村增井林太郎氏)、千葉縣(長生郡鶴枝村林壽祐氏)、鳥取縣(西伯郡米子町三好徹次郎氏)、島根縣(那賀郡增田齡造氏)、德島縣(勝浦郡多家良村本生良三氏)、大分縣(南海部郡上堅田村岩田秀太郎氏)宮崎縣(農事試驗場竹井繁滿氏)にして目下の所甲種よりも乙種の分布を廣しとす。願くば續々標本惠送あらんことを請ふ。倘茲に甲乙兩種の區別を示さんに、乙は甲より大形にして、特に著しきは胸部第一關節の圓大なるにあり、是れムネビロゴキブリ(胸廣蜚蠊)の名の起る所以なり。

(十九)筍切蟲の寄生蜂　[illegible]村林大家師井伊助氏の談(十月廿八日)に

竹林の大害蟲たる筍切蟲を斃す所の寄生蜂は、本年特別多く發生して、殆んど害蟲を斃し盡したるの感あり。而して切蟲一頭に寄生したる蜂の最多數は百八十二頭、最少數は五十五頭なりと云へり。

（二十）布哇の蚊の驅除法　布哇の衞生局では、蚊の現存に依て起さるゝ、健康上の危險と苦惱とを認め、これを驅除撲滅するために市民大會をホノルヽ市に開いた。驅除の方法は溜水に石油を灌ぐ事や、或る一種の金魚を池中に放つて其幼蟲たる孑孑を食はしむるとや、蜻蛉を放つ事位であつた樣だが、蚊群退治のために市民大會を開く位ゞから如何に多數の蚊が居るかは想像されると、近頃の大阪每日新聞に見へたるが、嘗て昆蟲學者グーベル氏の本邦へ來りし際、澤山の蝙蝠を持ち皈りしは、全く此の目的を達せんが爲めなりしと。

◎自然的害蟲驅除豫防趣意書

千葉縣　高橋徽一

害蟲被害の激甚なるは今こゝに贅言せず、其驅除方法として、既に本年實施したる、螟卵採取は頗る好果を奏し、殆んど遺憾なきが如し。然りと雖も彼の益蟲をして害蟲を捕食せしむる、所謂自然的驅除を利用して之れが豫防方法を講ずるの手段に至りては、未だ嘗て試むる所あらざ。是れ恰も天與の賜ものを空しうするに等し。蓋し益蟲の絕へず害蟲を捕食し、直接間接吾人に益する偉功を考ふる時は、益蟲を保護するは即ち害蟲驅除方法の一端にして、仍ほ進んで、益蟲をして害蟲を捕ふるに便なる方法を設くることそ、即ち其保護の主意を全ふする所以なり。既往を案ずるに、吾醫王山安樂寺に於て、昔より村民に配付する蟲除札は、水田の四隅に篠竹を立て、之に札を結びたりと傳ふ。抑此篠竹は、彼鳥類及び益蟲の害蟲を捕ふに際し頗る恰當の休息所といふべし。これ即ち佛陀の遺德にして自然の妙法を利用する主意に冥合し、以て民衆の福利を計れるなり、古人の深意豈欽仰せざるを得んや。今や不幸にして其良法既に絕へ、驅除札は依然配付せらるゝも之れを利用するものなく、空しく筐底の紙片に畢る、是れ啻に古人の遺德を空ふするのみあらず、所謂天與に辜負するの懼れあり。今茲に蟲除札を配付せらるゝに際し吾等祖先の嘗て利益を受けたりしと傳ふ舊慣を復古し、之れを水田に建て以て人爲的害蟲驅除法と、兩兩相待つて行はゞ其結果の更に著しきものあるや疑なからん。是れ吾人の本分として祖先の慣行を尊重するのみならず、又以て天與の福祉を享くる所以の道なり。村民幸に此意を體し、直ちに之を實施し、害蟲の殲滅を計らん事切望の至りに堪ざるなり。

因に記す、右は目下實行しつヽある事柄にして、本年四月村農會惣集會席上に於て、其悉信に陥らざる様懇篤口演すると共に、萬一を慮り此書を分布することヽなせり。

◎十一星瓢蟲の食餌に付て

静岡縣　岡田忠男

昆蟲の食餌に付て一定ならざるは、既に識者の認むる所なり。而して食餌に付ては、動物を食とするものと、植物を食とするものと有るハ勿論にして、植物中單植物を食するもの、複植物を食するもの等ありて、世の進歩と共に開拓の事業進むに從ひ、從來原野なりし所も今は田畑と變じ、野生植物を以て食餌とせし處の昆蟲は、自然農作物に移轉して害を加ふるものなることは明かなる事實なり。殊に余が縣下に於て採集したる、浮塵子百九十余種中、山野に於ては野生植物に寄生するも、一朝開墾の時期に遇ひ田畑と變じ、稻桑の栽培を見るの土地に於ては、是等の作物に加害しあることは屢々見る所なり。

今茲に讀者に紹介せんと欲するは十一星瓢蟲にして、此の蟲に付いては已に昆蟲世界紙上に、植物を食する所の一害蟲なることを記載せられたるも食草に付ては不明の文字を以て滿たされたり。此頃、縣下伊豆地方旅行の際、同國田方郡伊東村柏峠に於て、去る九日路傍のカラスウリなる蔓草を見るに、瓢蟲の蠢動するを認めたり。依而直ちに採集の上調査したるに、豈計らんや從來食草不明なりし此瓢蟲は盛んにカラスウリの新芽を貪食しつヽありたるなり。故に此瓢蟲はカラスウリを食害するも、若し人家近く此害蟲の棲息することあれば、或は農家の栽培する處の瓜類を害するやも計るべからず、然れども余の採集せしは、人家を去る一里余の山腹にして僅かに三頭の少數なりき、聊か報導して以て十一星瓢蟲の食草を明かす所以なり。（明治三十六年七月二十日旅宿南窓の下に記す）

編者云、名和先生の談に依れば、名和梅吉氏は此種の食草不明の由を記載されたるも、同先生は既に日光に於て、茄子科植物のヒヨドリジヨウゴを齧食しつヽあるを採集せられたりと。然らば即ち該種は他の擬瓢蟲の如く、茄子科植物、葫蘆科植物等を食するものなるべし。

◎博覽會出品害蟲標本並に調査解説書（三等賞）

新潟縣農事試驗塲

一、稻の害蟲二化生螟蟲寫生圖　稻の害蟲二化生螟蟲及び寄生蜂の形態を圖解したるものにして、殊に寄生蜂の如きは新たに發見したるもの多ければ、昆蟲學上利益する所あらんと信ず。

二、稻の害蟲二化生螟蟲標本　飼育したるものを標本に製作し、學術上の便覽に供す。

三、明治三十三年三十四年三十五年三ヶ年間稻の害蟲二化生螟蟲經過發育式　稻の害蟲二化生螟蟲に付三十三年より三十五年まで三個年間、野外に於て研究したる、其發育の經過を見易からしめんが爲めに表に示したるものなり。

四、三十三年三十四年三十五年三ヶ年間二化生螟蟲蛾誘殺數調査表　二化生螟蟲時期發生の多寡及び雌雄割合を知らんが爲に、三十三年より三十五年まで三ヶ年間誘蛾燈を以て調査したるものを表に示したるものなり。

五、三十三年三十四年三十五年三ヶ年間二化生螟蟲蛾誘殺數對照表　其方法は第四と同じく、只發生の時期及び發生の多寡を比較するに便ならしむるのみ。

六、二化生螟蟲研究成蹟　新潟縣下に於て、稻の害蟲として最も其播布の區域廣く、從て被害甚だしきものは二化生螟蟲なり。故に此蟲の形態、經過、習性及び豫防驅除の方法に就て研究したるものを編纂す。

七、蔬菜の害蟲サンショウ蟲寫生圖　蔬菜の害蟲サンショウ蟲の形態を圖解したるものなり。

八、蔬菜の害蟲サンショウ蟲標本　飼育したるものを標本に製作し、學術上の便覽に供す。

九、三十四年卅五年蔬菜害蟲サンショウ蟲經過發育式　蔬菜害蟲サンショウ蟲に就て、卅四年、卅五年の二ヶ年間、室內及び野外に於て飼育研究したる、其發育、經過を見易からしめんが爲めに表に示したるものなり。

一〇、蔬菜害蟲サンショウ蟲研究成蹟　新潟縣下に於て、蔬菜の害蟲として其被害甚だしく、又之が豫防驅除に困難なるものはサンショウ蟲なり。今此蟲の形態、經過、習性及び豫防、驅除の方法に就き研究したる成蹟を編纂す。

沿革　明治卅二年四月本塲に植物病蟲研究室を設け主任一名、助手一名を置き專ら縣下重要農作物の病蟲類を研究し、之れが豫防、驅除の方法を講ず。設立以來、玆に凡そ四年、其間研究したる昆蟲類、害蟲驅除豫防に關する調査研究等尠なからず、或は報告に、講話に、或は標本調製に務め、爾來益々之が研究に怠らざらんとす。

審査請求主眼　稻の害蟲は專ら二化生螟蟲に就て研究せり。其豫防驅除法に就ては、之を實行するに當て、數理上未だ正確なるものなきに由て、卵數、莖內生存蟲數、被害の程度等調査に重きを置き、又天然力の効果を明にせんが爲めに、寄生蜂の研究に力を盡し、遂に六種を發見するに至れり。蔬菜の害蟲は專らサンショウ蟲に就て研究せり。從來其經過は不明に屬し、豫防驅除の良法なかりしが、本塲に於ては其飼育方法に就き種々苦心の結果、今や其經過稍明かなるに至れり。驅除法に於ても亦良法を得着々實地に應用し、其効果を奏したり。猶は今後果樹の害蟲に就て十分研究せんと欲す。其他標本、寫生圖、統計表は昆蟲學上の思想を起さしむるに最も必要なり。其意匠配合等審査あらんことを請求す。

◎博覽會出品害蟲標本解說書（三等賞）

靜岡縣　神村直三郎

予は第五回內國勸業博覽會第一部第八類に害蟲標本拾箱を出品せり。これに添付したる解說書は當局者より簡單に記載すべき樣の注意ありしを以て節略して大要のみを差出したれど、讀者の參考に其原稿を揭載せんと名和昆蟲研究所長の請求に應じ、予が手扣を玆に淨書して本誌に載することとはなしぬ。

解說書

部	類	番號	品名	出品人
一	八	一	害蟲標本	靜岡縣磐田郡岩田村 神村直三郎

一、出品の種類及員數　種類は害蟲標本にして、害蟲合計一百二十四種、其敵蟲二十一種あり、これが細別左の如し。

害蟲	種數	成蟲	卵	幼蟲	蛹	繭
鱗翅目	五〇	五〇	五	一八	一七	一三
鞘翅目	三七	三七	|	四	|	|
有吻目	二五	二五	二	|	|	|
直翅目	七	七	|	|	|	|
雙翅目	二	二	|	|	|	|
膜翅目	三	三	|	一	|	|
合計	一二四	一二四	七	二三	一七	一三
敵蟲	種類	成蟲	卵	幼蟲	蛹	繭
寄生蜂	一六	一六	|	|	|	四
寄生蠅	六	六	|	|	二	|
合計	二二	二二	|	|	二	四

更にこれが個數を細別すれば

害蟲	成蟲	卵	幼蟲	蛹	繭
鱗翅目	一〇二	五	一九	一七	一四
鞘翅目	七四	|	四	|	|
有吻目	五〇	二	|	|	|
直翅目	一四	|	|	|	|
雙翅目	四	|	|	|	|
膜翅目	五	|	一	|	|
合計	二四九	七	二四	一七	一四
敵蟲	成蟲	卵	幼蟲	蛹	繭
寄生蜂	二四	|	|	|	五
寄生蠅	九	|	|	五	|
合計	三三	|	|	五	五

一、採集地　本村の害蟲を世間に紹介して、傍ら斯學者の參考に資せんが爲め、專ら予が居村即ち靜岡縣磐田郡岩田村に於て採集し、他の採品をば一も加ふることなし。本村所在は東海道の官道を北に距る一里半、天龍川の東岸に位して田圃あり、山林あり、堤塘あり、砂磧あり、沼池あり以て諸種の昆蟲を採集するに便あり。

一、採集法及器具　予が採集法としては掬網法、篩網法、叩網法、石起法、皮剝法、草分法、燈誘法糖誘法、探操法、陷落法の十法を用ふ。

其一、掬網法に要する器具は圓形捕蟲器なり、これは寒冷紗の袋に鉞力の柄を附したるものにて、花上葉間に在りて跳躍飛翔に巧なる昆蟲即鱗翅類、ウンカ類、膜翅類、蟬類等を捕ふるの法なり。

其二、篩網法は塵芥中の小甲蟲及ガメムシ等を捕ふるに用ふ。其用具としては、普通の篩の如きものに麻袋を附したる篩網を用ふ。

其三、叩網法に於ては、方形捕蟲器を下に受け、杖を以て草木の枝葉を打ち、金龜子類、ハムシ類、ゾームシ類の葉上に居るものを捕ふ。

其四、石起法は重に冬期に行ふの法にして。甲蟲、ガメムシ等の石下に潜伏するを捕ふ。

其五、皮剝法は枯木若しくは立木の皮を剝ぎて、其中に潜伏せる甲蟲類の幼蟲、成蟲及ガメムシなど

を捕ふ、この法も冬期に於て利あり。
其六、草分法は畦畔堤塘等の枯草の根部を仔細に尋ね、甲蟲及ガメムシなどを捕ふ。
其七、燈誘法は夜間に蝶蛾を誘ふため林間に於て点燈し、燈火を慕ひ來て其近邊を飛翔するものを掬ひ捕ふるの法なり、これに用ふる燈は反射装置のものを可となす。
其八、糖誘法にて捕ふるものは、甲蟲及蝶、蛾、蜂類なり。此等が樹木の液汁を吸收する性を利用したるものにて、砂糖を揮發性の液体アルコールの如きものにて溶し、殼斗科植物の樹の腹に塗抹し置く時は、其香氣に誘はれて集まり來る、其際巡り見て捕獲するなり。夜間は灯を携へて其箇所を訪ふも亦獲もの少なからず。
其九、探藻法にて捕ふるものは水生昆蟲なり。其法は先づ麻布又は寒冷紗にて圓形捕蟲網より稍淺き袋を製し、之を長き柄の先端に付し、小流れの川若くは池沼の藻中を探るなり。又此袋に代ふるに極めて細き銅線を以て編みたるカナアミを用ふるも可なり。
其十、陷落法は夜間出歩くケラ、コーロギ其他夜盗蟲の幼蟲、ゴミムシ類を捕ふるため、畑の畦間若しくは路傍等適宜の處に廣口の瓶を埋め置きて陷落するを捕ふ。其瓶中に動物の死体、若しくはカボチャの内容等にても入れ置けば尤も妙なり。
右の諸法にて捕へたる昆蟲を殺さんには、一ポンド入若しくは半ポンド入の廣口瓶の底部に、靑酸加里を紙包になしたるものを固定して口に密栓を施したる殺蟲瓶を要す。此中に投じて殺したるものは、携帶箱に収めて持歸るなり。携帶箱は輕からしむるため桐を以て蝶番ひの箱を製し、其双方の底部に疊表二枚を合せたるものを敷き固着せしめたるものにて、死したる蟲をこれに針を以て刺し置くなり。幼蟲類を持ち歸るにはブリキ筒或は竹の筒を以て一器を作り、この中へ一頭づゝを入れ食草を入れて持ち歸るなり。又甲蟲の如きは、小形種は數多一の麻袋に入れて持ち歸ることあれど、大形種は手輕きグラス管若くは竹筒へ一頭づゝ入れ、密栓を施して持歸るあり。カゲンボの捕獲は其肢を損するの恐れあるが故に、以上の諸法にては捕へがたし。これは薄暮靜止するものを赤手にて捕へ、螢かごの如きものに入れて生かし置くなり。殺すときは製作に困難なればなり。

（未完）

◎三重縣阿山郡昆蟲通信

第八回全國害蟲驅除講習修業生 三重縣 西岡嘉十郎

(一)昆蟲研究擔當人の囑託 我が三重縣阿山郡にては、去る十二日附を以て、郡役所より左の諸氏に昆蟲研究擔當人を囑託したり。

山田村 岡島 文六 玉瀧村 中林 保藏 丸柱村 竹澤 善藏 東柘植村 橋本 豐松 壬生野村 居附粂三郎 新居村 西岡嘉十郎 布引村 廣田 仙吉

(二)昆蟲研究擔當人規程 一 郡內に於ける昆蟲の性質、形狀、經過等を研究し、以て益蟲の繁殖、保護、及害蟲の驅除豫防等に關し普及を圖ること。一 本擔當人は、其目的を達する爲め、左の事項を行ふものとす。(一) 郡內に於ける昆蟲の分布、經過等を調査すること。(二) 常に害蟲の經過に注意し、苟も發生を認めたる時は直に左の各項を郡役所及町村役場に通報のこと。(イ)害蟲の種類。(ロ)害蟲發生の狀況。(ハ)害蟲發生の町村大字。(三) 害蟲の被害を認めたる時は之に對する驅除の方法を講究すること。(四) 常に便宜の場所に於て昆蟲に關する講話をなすこと。(五) 實業者の質問に應じ、又は官廳の諮問に對ふること。(六) 前各項の外斯業研究に關し必要と認むる事項。

(三)昆蟲研究擔當人會協議事項 昆蟲研究擔當人會を去る十四日午前八時より郡役所內にて開會せしが、其協議事項は左の如し。

第二回螟蟲に就て 一 點火は本日より八月末日迄施行のこと、但、狀況により九月上旬に亘ることあり。一 點火中は記錄を製し、天候、蛾數、胎卵蛾數の步合等を日々記入し、最終に至り報告のこと。一 點火の裝置に付一般の狀況を調査すること。一 枯莖切り取りの期節を誤らず實行の模範を示すこと。一 幼蟲の經過に注意すること。一 寄生蜂及病菌蕃殖の狀態を察すること。一 其他必要なる所見を記錄し置くこと。

浮塵子の發生に就て 一 始終發育經過の狀態を察すること。一 發生を認めたる時は、時期を逸せず、局部に於て驅除をなさしむるの方法を講ずること。一 齡期の別、發生の多少、及稻の發育期等に關し被害の異なる點。一 驅除の方法又は施行の時刻に依る成蹟の良否並に作物に及ぼす影響。

(四)農事試驗場擔當人會の協議事項 去十三日開會の同會協議事項中、害蟲に關するものは左の如し

一 螟蟲誘殺點火期の豫察を誤らざること、並に設備の完全を模範的に示すこと (本期の螟蟲は初期

に於ける發蛾の狀態に反し或は多からんも計り難し。一、螟蟲被害の枯莖は初期（蔓延せざる內）に切り取ること。一、浮塵子發生の調査に留意すること。（本月二十四五日頃より九月中旬に至る期間にあらん。

（五）浮塵子の發生　當郡下上野町、府中村、三田村にては、昨今に至り浮塵子（種類鬚丸）三化期二三齡のもの夥しく發生したれば、直ちに之れが驅除を行ひたり。尙又新居村にては（種類褄黑、電光）發生し、直ちに驅除を行ひたり。

（六）害蟲驅除講習會　當阿山郡役所の事業として、今回害蟲驅除講習會を各町村に於て開設し（壹週間）、講習生には修業証書を授與する筈にて、晩くも本月中には二三ヶ村に開會する都合なり。而して右講師は、郡農事巡回教師橋本逸次郎氏其任に當らるゝ由なり。

◎長野縣北安曇郡の昆蟲方言續報

長野縣　帶刀喜市

本誌前號に於て當地方の昆蟲方言を報告し置きしが、其後尙聞知したるものを報せんに○衣魚をキラムシ○トビムシをアマムシ○穀象をコメムシ○一文字セヽリの幼蟲をツトムシ又はタハラムシと云ひ○ツチスガリをスガレと云ひて幼蟲を食す○黃足長蜂をメバチと云ひ○蜜蜂をクマノヘボと云ふ○鍬形蟲の雄をヨシツネ、同雌をダルマと云ひ○ヤママユの繭をアヲ○柞蠶の繭をアカと云ふは其色による故ならん○ハルセミをマツムシ○ミヅスマシをシシマハシと云ふ○水黽蟲も龍蝨も區別なくゲンゴラウと云ひ○タガメムシをカッパ○コオヒムシをヤモメムシ○ブトをブユ又はブヨ○シホヤアブをハチアブ○ヒメアブ及びメクラアブをウルリ○蛹をゾホ又はドケフ○シラミを觀世音樣○茶柱蟲を障子蟲又はハタオリと云ふ○馬追蟲をスイーチヨと云ふはやはり鳴聲より起りたるものにして○橫蛺をウンカと云へるは何處も稱ふることにして余り異りたるにはあらざらめ。

正誤、前號に於てヤママユとせしはヤマカマスの誤なりしにつき茲に訂正す

編者云、ツチスガリをスガレと云ひ幼蟲を食す、とあるはヂバチのことにはあらざるか、此蜂の幼蟲を食することは地方により中々盛なるものなり。

◉名和昆蟲研究所出品の昆蟲標本解說書（前號の續き）

第四、出版物

一、薔薇之壹株昆蟲世界　明治三十年一月開版以來、每版二千部乃至五千部を印行し、遂に第六版を重れり。是は當研究所の主眼とせる、斯學普及の目的を貫徹せんが爲に編述せしものに係る。即はち各種講習用の教科書に充て、又講話の材料を得せしめんが爲なるを以て、全篇簡潔の通俗體を用ゐたり。而して其結果頗る需用の多きのみならず、近年又之を幻燈種板に製作せし者あるに至れりと云ふ。（添出品第一號）

二、昆蟲世界　斯學界の機關として、明治三十年九月第壹號を發刊し、爾後每月發行を重れ、昨三十五年十二月を以て第六十四號に達せり。而して其目的及び其効果の如何に至りては、特に說明するの要なかるべきを以て之を省く。（添出品第二號）

三、害蟲圖解　一般農家及び學生等の昆蟲思想を養成せんが爲に、明治三十年始めて其第一號を發行し目下正に第二十號に達せり。是は岐阜縣に於て管內の各級農會、小學校、警察署等に頒布せしのみならず、其他の府縣に於ても廣く之を採用して教育農事の參考に供せしが如し。將來第百號を發行するの日を以て之が終期となさんとす。（添出品第三號）

四、貝殼蟲圖說　明治三十四年の出版に係り現に再版を重れり。是は昆蟲學上の調査を記述し、更に進んで海外輸出品に對する損害を救濟せんが爲めに公行せるなり。即はら卷首に其大意を明記せしを以て詳說を缺く。（添出品第四號）

五、通俗益蟲集覽　諸害蟲の國家に對する害毒は之を知る者多きも、未だ益蟲の保護を知らざる者多きを認め、其急に應するの手段として先つ此書を公にせしなり。將に第二輯第三輯をも續出せんとす。（添出品第五號）

六、日本昆蟲分科表　邦產昆蟲名稱を一定するの初階として之を刷行し、中に蟲名四百有餘を網羅せり、蓋しまた未だ斯種の出版なく初學者の不便少なからざりしに依る、是亦既に第二版を發行せり。（添出品第六號）

七、第一回全國昆蟲展覽會出品目錄　斯書は全國昆蟲展覽會の成蹟報告書に兼れ、昆蟲叢書第一編として發行せしものに係る。而して其目的は蟲稱一定、分布調査の先驅たるにあり、蓋し斯種の出版は本邦に於ける嚆矢となすべき歟。但し其內容に至りては事頗ぶる冗漫に涉るの嫌あるを以て玆に細說を缺く。（添出品第七號）

第五、昆蟲分布幷に種屬調査の開始

昆蟲の地理的分布幷に其種屬調査の必要なるは恰も人類に於ける戶口調査のそれと同じく、其明晰ならざらん間は得て斯學の促

進を期すべからず。當研究所夙に其緊急事業たるを認め、創立以前より勉めて力を此方面に傾注し、先つ機關雜誌を以て歴次各地に於ける通信報告の途を開き、又退きては之を所員の實行に求め、今や蒐收の種屬都て六七千種に達せりと雖、之を完成するは實に容易の業にあらざるを信じ、更に去る三十二年よりは此を以て所務の首脳に置き、邦産蟲種の分布及び種屬調査を以て調査部唯一の任務となし、事業開始の第一着として三十三年より全國昆蟲展覽會開催の計劃を立て、之を三十四年の春季に開き又三十五年二月には岐阜縣昆蟲學會へ援護を與へて岐阜縣冬季昆蟲展覽會を開かしめ、此際蟲類原簿を調製し併せて原圖の整理を圖り、漸次錙銖積累の功を收め、既に略ぼ蝶類、天蛾類、蜻蛉類を集成し、目今他屬に於ける調査を繼續するを以て向後十年を經なば邦産蟲種の約半數は之を登記し得べき豫定なり。而して其方法の一斑を記せば、當所に所藏せる約二十万頭の昆蟲標本に就きて、形狀、色彩の中庸を得たるものを擇び、之に採集地、採集年月日、採集人名等を記入し、後更に之を科屬別に保存函に移し、總て其品種を原簿に載せ又原圖をも作らしむるにあり、即はち一頭の昆蟲と雖も前後五七日を費すにあらざれば完了するに至らざるもの往々之あり、其煩勞蓋し意料の外に出づ。而して材料蒐集の方法は、全國各地に四千五百餘名の講習修業生を有し尚且つ幾多の所友を有するが故に、或は其地特産種の寄贈を乞ひ、或は彼我採集品の交換を望み、斯くして漸次其區域を擴むるに怠らず、又兼て各地小學兒童の採集品を有力の一材料となせり。他なし方今未だ良好の蒐收方法無きに依る、即はち今回出品の分布圖（添出品第九號）は既成の局部にして鱗翅目鳳蝶科に屬する十三種を擧ぐるものとす。是れ固より一端に過ぎざるも、他年一たび本調査の成功するに至らば斯學の進步は拭目視るに足るものあるべきを信ず。今之が一例を桑樹の害蟲糸引葉卷蟲に求むれば、該蟲は其始め岐阜縣飛驒國大野、吉城の兩郡に發生の報あり、後滋賀縣近江國高島、阪田、東淺井等の各郡にも發生し、特に阪田郡伊吹山麓の桑樹に於て常に棲息するを目擊せしを以て、或は岐阜縣美濃國に屬する不破郡亦該蟲の加害を見るに非ずやと思惟し、去つて細かに之が調査を加へしに、果して其發生を確認しき、而して該蟲は尙美濃國揖斐郡坂内村にも發生するより其山西に當れる近江國東淺井郡に於て明かに移殖の理を示し、又福井縣若狹國三方郡十村に發生の種は近く近江國高島郡と系統を同うせるを證し、富山縣婦負郡に發生のものは其隣地飛驒國吉城郡のものと分布の本源を一にするを知らしむ。夫れ斯く岐阜、富山、滋賀、福井の四縣下に發生するに關らず、唯久しく石川縣下に於てのみ之が加害を聞かざりしを怪みしに昨三十五年一月同縣能美郡小松町へ出張講習の際、詳密の見聞を遂げたる結果、前擧四縣の發生地に隣接せる白山脈の山麓一帶の地には多く之あることを確證せり。則ち此結果を以て弘く他に及ぼす時は分布より來る所の利益は實に多大にして其効や彼の軍用地圖と同じく、居ながらに研究及び驅除の方策を計畫するに足るべきものあるを知るなり。現に近年京都府天田郡地方に於ける桑樹大被害の同じく此蟲の發生に外ならざるを確め得しが如きは、抑も分布調査より來れる推測の賜ものとも謂ふべき哉

第六、巡回講話並に講習

從來各府縣の請託に依り當研究所の關係せる巡回講話には其性質數樣を含み、一府縣又は一郡下の數ヶ處に開會せるあり、又は

一ヶ處を限れるあり尙年々之を繼續せしものすらある等、其施設格別なりしも明治二十八年來過去八年間に招聘せられしは岐阜縣を始とし愛知、靜岡、長野、千葉、茨城、宮城、富山、福井、京都、奈良、大坂、和歌山、岡山、廣島、山口、鳥取、大分等の十八府縣にして、其回數は約そ貳百に餘れり。

昆蟲に關する講習も亦其會期の長短、科程の高低自から二三種に區別し得べし、就中當研究所の主催に係れる全國害蟲驅除講習會は旣に十四回繼續の末、三府四十三縣より七百二十一名の修業生を出し、其他岐阜、愛知、靜岡、長野、千葉、福井、島取、島根、岡山、山口、大分、香川の諸縣に於て縣事業又は郡事業として縣農會、郡農會、縣敎育會、郡敎育會等の名義を以て開設せしもの、即ち其會期の五日間乃至二十一日以內の講習に關係せしは實に五十回に及び、其修業生約三千八百名を算するを以て目今全國に四千五百十八名の修業生を有せり。而して其細別の如きは、參考として提出せる雜誌昆蟲世界第四十二號並に第五十三號に統計表を掲出せしを以て玆に略す。

一、褒　賞

一、明治二十三年第三回內國勸業博覽會に昆蟲標本を出品して有功一等賞を授與せらる。
二、明治二十六年コロンボス世界博覽會に有害蟲類標本三拾函を出品して優等賞を贈與せらる。
三、明治二十八年第四回內國勸業博覽會に模範六足蟲標本を出品して進步一等賞を授與せらる。
四、明治二十九年大日本農會より綠白綬有功章を贈與せらる。
五、明治三十一年農商務大臣より應用昆蟲學に於ける功績を賞し褒詞並に金員を授與せらる。
六、明治三十三年佛國巴里に開設したる千九百年萬國博覽會に昆蟲分類標本二十四函六百十六種を出品して銀賞牌を贈與せらる
七、明治三十四年全國敎育品共進會に敎育に關する寫生用昆蟲標本（添出品第十號）其他一點を出品して賞狀二通を得たり。
八、明治三十四年五月十四日昆蟲學の普及發達に盡瘁の故を以て　勅定の藍綬褒章を下賜せらる。

一、審査請求の主眼

一、名和昆蟲研究所設立以前の研究經營に係る事蹟及び其成果。
二、今回出品の昆蟲標本は冬季採集蟲類の局部に止まるも、明治十四五年以來屢次其利益を唱道し、途に昨年に至りて之を一縣下全躰に實行せしめ、昆蟲越冬の狀態を公示して解惑啓蒙に勉め、又之が爲に鞘翅目、脈翅目等には從來固信せる學說と相違の點あることを證示し得たる事蹟。
三、名和昆蟲研究所設立後、全國三府四十餘縣に涉り四千五百餘名の講習修業生を出したるを以て、多少學術の研鑽に裨補し及び國家經濟上に貢獻したる事蹟。

四、定期臨時に出版物を刊行し特に世に未だ多からざる蟲類原圖を調製發表して斯學思想の普及伸暢に資せしめたる事蹟

五、數年前より主として邦產昆蟲の地理的分布及び種屬調査の須要なるを首唱して、獨力全國昆蟲展覽會を開設し、尋て又其調査事業を實行して今や其一部を成功し得たる事蹟。

六、當昆蟲研究所抱持の意見にして已に着々世に採用せらるゝもの多く、特に小學兒童利用說の如きは殆んど全國に普及し、又害蟲の驅防は培根固抵にありとの意見の現に當路者に納れられて各府縣へ訓示せらるゝに至りし等の事蹟。

七、古來錯雜の蟲稱を一定するの段梯を作爲し、及び邦產蟲種の約四分一は之を蒐收して弘く學者研究の便に資し、又一般世人の爲に陳列舘を常設して見學の用に充てしめたる事蹟。

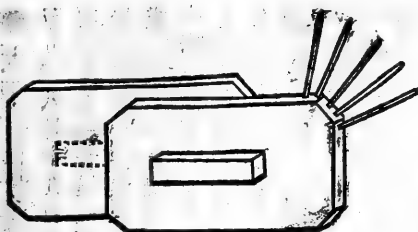
八、使用者の程度に相當の昆蟲標本各種を頒ちて學校敎授用及び農事說明用に供したるもの多きを以て、今や實物敎授の實を擧げ併せて害益蟲の發育を知れる者を增加せしめたるの事蹟。

九、害蟲驅除、益蟲保護に關する器械を創製し、標本製作法の新式を案出し、及び各種の寄生蟲種を發見して除害攻學の便益を與へたる應用昆蟲學上の事蹟。

（完）

●苞蟲の發生と其驅除器

苞蟲驅除器の圖(甲)

苞蟲は成蟲をイチモジセヽリと云ひ幼蟲をバマクリムシ、ツトムシ、カジムシ、コウジウ等と稱し又豊年蟲とも云ひ「カジかまふな、驅除するよりも俵あめ」など稱し此蟲の發生するを却て喜ぶ地方あり、これ該蟲は本年の如き溫度高く、稻の生育宜しき時は其發生多きが故なり。然しながら斯る事に迷はず進みて驅除せば一層の豊年を來すべし。飛驒國地方にては其發生非常に多く從て其害も甚しければ誰一人として驅除せざるものなきに至れり。即ち其方法は(甲)圖に示せる如き長六寸、幅三寸許の四分板樣のものゝ中央に長方形の手を附けたるもの二個を造り、又一方の隅に數本の竹串を打ち附けたるものにて、之を打ち合せて潰殺し櫛樣の處にて稻葉を梳り綴りを解くなり。而して該蟲の發生せし時は之を打ち鳴して驅除するは非常に盛んなるものなりと云ふ。此地方にては該蟲をコウジウと稱し、此器をコウジウバンバと稱すと又(乙)圖は細き棒にて竹管を貫きたる者にて、稻を挾み扱き上げて潰殺するものなり。こは岐阜縣の農政家大畑市太郎氏の考案なれば大畑潰殺器とも云ふ。

苞蟲驅除器の圖(乙)

◉天田郡昆蟲學講習會景況　京都府丹波國天田郡福知山町高等小學校に於て同郡農會主催となり、八月十九日より十日間、當名和昆蟲研究所長を聘し昆蟲學講習會を開設せり。今其模樣を少しく記さんに講習員は郡內小學校教員並に實業家等百數十名にして午前八時より十二時迄は昆蟲學大意、害蟲驅除並に益蟲保護法、昆蟲採集、製作、保存法等專ら講話に屬し、午後は一時より四時迄野外實習、或は已に各學校にて集めたる二百餘箱の昆蟲標本に對し種屬を分類し或は名稱を附し、又は時として夜中糖蜜採集をなす等專ら實地練習に從事せり。修業證書授與式は十八日に擧行せられ、其證書を得たるものは一百三名にして內二名の女子ありたりと云ふ。而して從來の出張講習は普通五日若くば七日間にして、一個所十日間の講習は未だ曾てあらざりしと云へば定めて好結果を得たりしならんと信ず。

◉氷上郡の同窓者會合　兵庫縣氷上郡內には全國害蟲驅除講習修業生は十八名の多數あるを以て、去る八月廿九日同窓者の打合會を催されたるに付當名和所長は福知山町よりの歸途、同郡柏原驛に下車して同會に臨まれたるが、當日は尙此他に町村長、小學校長、農會長其他有志者等凡そ二百餘名の集合ありしかば、名和所長は二時間餘に亘り害蟲驅除に關する談話を試みられ、非常に盛會なりしと云

◉第十六回全國害蟲驅除講習生氏名　同會の概況につきては、講習員實に百名に達し甚だ盛會なりしと其會員の熱心なることとは、既に前號に於て略ぼ報じ置きしが、尙開期中には害蟲驅除管督員牛村技師及第十四回全國害蟲驅除講習修業生西川豐治郎氏の講話等あり、特に所友長野菊次郎氏は科外講話として花と昆蟲の關係につき數回の講話を試みられたれば、從て各自の得し處は多かりしと信ず。其修業證書の授與式は十四日午後より擧行せられ、來賓には吉田岐阜縣參事官を始め縣屬、縣農會理事等にして、席定まるや名和所長の證書授與及訓諭、來賓の祝詞及び修業生總代の答辭にて式を終り、後研究所より茶菓及び紀念品の贈與ありて全く閉會を告げたりしが、修業證書を受領せしものは左表の如く一百名中九十八名ありき。（表中○印は中途退會△印は欠席）

組別	府縣別	郡市名	町村名	族籍	役名	氏名	生年月	履歷摘要
第一組	岐阜縣	土岐郡	餘戸村	平民		小川鈴一	明治十六年一月	岐阜縣師範學校四年生
	靜岡縣	庵原郡	由比町	平民		○由比習治	慶應元年十一月	大日本柑橘會幹事由比町農會長
	滋賀縣	蒲生郡	馬淵村	平民		小川千代	明治元年十一月	郡教育講習會修業、小學校教員勤務中
	德島縣	名東郡	上八万村	士族	組長	多田茂	明治九年二月	陸軍步兵少尉、小學校教員勤務中

第二組	德島縣	德島市	富田浦町	士族	組長	大津木孝太郎	慶應三年八月	尋常校小學校長兼訓導
	兵庫縣	氷上郡	新井村	平民		谷口増次	明治十三年七月	新井村役場書記勤務中
	岐阜縣	惠那郡	東野村	平民		平山喜代治	明治十四年十一月	小學校教員勤務中
	茨城縣	眞壁郡	古里村	平民		宮田精一	明治二十年十一月	農事講習所卒業、郡農會書記勤務中
第三組	茨城縣	眞壁郡	下館町	平民	級長	森市太郎	文久三年九月	眞壁郡書記農商主任
	德島縣	名東郡	佐那河内村	士族	組長	東條兵二	明治九年二月	尋常師範學校卒業、尋常高等小學校長
	岐阜縣	海津郡	海西村	平民		寺倉龍次	明治十六年七月	農事講習會修業、尋常小學校代用教員
	鳥取縣	鳥取市	立川町	士族		山崎毅之助	明治十七年八月	害蟲驅除講習會修業、高等小學校教員勤務
第四組	德島縣	名東郡	加茂名村	平民	副級長	森井與平	慶應二年十二月	師範學校卒業、尋常高等小學校訓導
	島根縣	仁多郡	横田村	士族		中村瀬平	明治十三年八月	中學校四ヶ年修業、小學校代用教員
	滋賀縣	高島郡	本庄村	平民		駒井巳太	明治十六年一月	本庄村役場書記
	兵庫縣	養父郡	關宮村	士族	組長	片岡恒市郎	明治十三年六月	師範學校卒業、小學校訓導
第五組	德島縣	德島市	前川村	士族	組長	高田新二	安政二年三月	尋常小學校本科正教員、尋常小學校長
	大分縣	大分郡	判田村	平民		牧定男	明治八年一月	大分郡農會技手、兼郡農會書記
	兵庫縣	氷上郡	拍泉村	平民		安井隆太郎	明治十二年八月	陸軍豫備歩兵伍長、氷上郡農會書記
	愛媛縣	溫泉郡	栗井村	平民		大森道	明治十四年二月	中學校三ヶ年修業、農學校ニ在學中
第六組	三重縣	員辨郡	神田村	平民	組長	牧野濱四郎	明治八年一月	元小學校教員、村農會雇書記
	德島縣	德島市	富田浦町	士族		露木清治	明治十八年八月	師範學校卒業、本科正教員勤務中
	兵庫縣	氷上郡	國領村	平民		足立武市郎	明治十二年二月	農業學校卒業、小學校教員勤務中
	滋賀縣	蒲生郡	武佐村	平民		辻田豐太郎	明治十二年三月	高等小學校訓導、教員勤務中
第七組	兵庫縣	出石郡	高橋村	平民		中島熊二郎	明治二年十一月	小學校教員農業科免許狀ヲ受ク農業ニ從事
	滋賀縣	蒲生郡	岡山村	平民		塩田磯吉	明治十五年五月	農事講習會卒業、郡農會雇書記
	三重縣	員辨郡	三里村	平民		小林貞一	明治十四年四月	小學校准訓導勤務中
	德島縣	德島市	常三島村	士族	組長	稲塚逸次	明治四年四月	師範學校卒業、尋常高等小學校長兼訓導
第八組	三重縣	員辨郡	東藤原村	平民		森精一	明治五年十月	農事講習會修業、農業ニ從事ス
	德島縣	德島市	住吉島村	士族	組長	堤定次郎	明治十年十二月	師範學校卒業、尋常高等小學校長兼訓導
	愛知縣	西春井郡	上拾個村	平民		井上謙二	明治十四年十一月	農事講習會修業、農業ニ從事ス
	兵庫縣	津名郡	都志村	平民		西野平吉	明治十六年七月	中學校四ヶ年修業、農業ニ從事ス
第九組	兵庫縣	氷上郡	黒井村	平民		野村常次郎	明治二年十一月	小學校本科正教員免許狀拜受實業ニ從事ス
	三重縣	員辨郡	大泉村	平民	組長	兒玉鶴松	明治五年七月	農業及蠶業講習會修業、農蠶業ニ從事ス
	德島縣	名東郡	八万村	士族		岸本瀧次郎	明治十二年一月	師範學校卒業、小學校訓導勤務
	岐阜縣	揖斐郡	宮地村	平民		小川謙司	明治十四年八月	岐阜縣農學校卒業

第十組	德島縣	名東郡	南井ノ上村	平民	組長	謙田愛藏	明治六年四月	師範學校卒業、小學校訓導兼校長
	兵庫縣	三原郡	北阿萬村	平民		多田哲郎	明治十二年十二月	高等小學校卒業、村役場收入役
	愛媛縣	溫泉郡	興居島村	平民		吉村長瑛	明治十五年七月	中學校四ヶ年修業、實業ニ從事ス
	德島縣	那賀郡	立江村	平民		江本純二	明治十六年一月	師範學校簡易科卒業、小學校訓導勤務
第十一組	高知縣	土佐郡	江ノ口町	士族	副級長	溝淵守	慶應三年十二月	師範學校卒業、土佐郡視學勤務中
	岐阜縣	稻葉郡	佐波村	平民	組長	近藤伊祐	明治十五年七月	岐阜縣農學校卒業
	兵庫縣	氷上郡	葛野村	平民		谷川平左衛門	明治十四年五月	高等小學校卒業、村役場書記勤務中
	宮城縣	田郡	篦嶽村	平民		小野寺愼	明治十七年十一月	宮城縣甲種農學校卒業、實業ニ從事ス
第十二組	三重縣	名賀郡	瀧川村	平民	組長	福本辦之助	明治二年九月	農事昆蟲講習會修業、郡害蟲驅除豫防委員
	兵庫縣	氷上郡	船城村	平民		佐々木部	明治十年五月	高等小學校卒業、郡書記勤務中
	高知縣	香美郡	岸本村	士族		河村信國	明治十五年十一月	高知縣農學校卒業
	鳥取縣	岩美郡	中鄕村	平民		宮脇英篤	明治十八年八月	鳥取縣中學校卒業
第十三組	三重縣	員辨郡	稻部村	平民	組長	藤田平太郎	慶應二年七月	農業科專科正教員、村役場書記勤務中
	山梨縣	北巨摩郡	上手村	平民		武藤辰五郎	明治元年三月	尋常高等小學校代用教員勤務
	香川縣	三豐郡	財田大野村	平民		山川犀像	明治十七年三月	農事講習所卒業、農事試驗場書記
	岐阜縣	揖斐郡	北方村	平民		香田豐三郎	明治十七年九月	岐阜縣農學校卒業
第十四組	鳥取縣	東伯郡	以西村	平民	組長	村上啓吉	慶應三年十二月	以西村農會長兼水稻競作會審查員
	香川縣	木田郡	田中村	平民		横山筆助	明治三年十二月	師範學校卒業、小學校訓導勤務中
	三重縣	河藝郡	一ノ宮村	平民		田中嘉右衛門	明治十一年五月	農事講習所卒業、縣農會ヨリ影功狀拜受
	岐阜縣	揖斐郡	豐木村	平民		所嘉吉	明治十八年二月	大垣中學校三年級修業、農業ニ從事ス
第十五組	愛知縣	名古屋市	江川横町	士族	副級長	岡田孝次郎	安政五年六月	遠州濱松神道中教院修業高等小學校長勤務
	三重縣	三重郡	朝上村	平民	組長	內田長吉	明治七年四月	農業蠶業講習所卒業、朝上村書記勤務中
	京都府	何鹿郡	志賀村	平民		大槻乙吉	明治十四年六月	城舟蠶業講習所卒業、蠶業巡回教師
	滋賀縣	高島郡	鄕庭村	平民		辻辨次郎	明治十四年六月	農事講習所修業、郡農會書記勤務中
第十六組	兵庫縣	美囊郡	三木町	平民	組長	和田伴次郎	慶應三年九月	村役場助役勤務中
	三重縣	度會郡	瀧原村	平民		神田仁左衛門	明治三年六月	村農會評議員、農業ニ從事ス
	岐阜縣	揖斐郡	池田村	平民		川本伊六	明治十一年一月	師範學校乙種講習科卒業、小學校尋常科訓導
	長野縣	上高井郡	高井村	平民		梨木丈作	明治十六年八月	師範學校在學中
第十七組	三重縣	員辨郡	大泉原村	平民	組長	米富太郎	文久三年四月	小學校尋常科訓導勤務
	埼玉縣	北足立郡	指扇村	平民		桑田庄治郎	明治四年三月	師範學校卒業、高等小學校訓導兼校長
	兵庫縣	三原郡	松帆村	平民		安富榮一	明治十六年二月	農事講習會修業、農事ニ從事ス
	岐阜縣	土岐郡	肥田村	平民		鈴木彥治	明治十五年八月	農事講習會修業、尋常科准教員勤務中

第十八組	愛知縣	西春日井郡	豐場村	平民	組長	寺町讓	文久元年二月	元郡會議員、西春日井郡書記勤務
	三重縣	員辨郡	山郷村	平民		中津原三郎	明治十九年九月	中學三ヶ年修業、農桑業ニ從事ス
	福井縣	敦賀郡	松原村	平民		龍頭嘉之助	明治五年三月	農業補習學校長兼訓導
	香川縣	三豐郡	大見村	平民		長尾利入	明治十六年六月	師範學校卒業、高等小學校訓導勤務
第十九組	京都府	南桑田郡	千代川村	平民	組長	保野延次郎	明治十一年八月	陸軍步兵少尉、南桑田郡農會技手
	香川縣	三豐郡	紀伊村	平民		石川榮藏	明治十一年七月	師範學校卒業、高等小學校訓導勤務
	岐阜縣	武儀郡	上有知町	平民		杉山吉三郎	明治十一年一月	數理專修學校卒業、郡吏員勤務中
	鳥取縣	日野郡	渡村	平民		川上榮治	明治十三年十二月	簡易農學校卒業、農業ニ從事
第二十組	三重縣	員辨郡	梅戸井村	平民		遠藤晉	元治元年十二月	高山社養蠶傳習所卒業、村長勤務中
	愛知縣	額田郡	坂崎村	平民		鈴木雄助	明治十三年十一月	農事教育講習會修業、郡農會書記勤務中
	富山縣	下新川郡	石田村	平民		宮崎吉之助	明治十四月十一月	富山縣農學校卒業、村役場書記勤務中
	岐阜縣	武藝郡	神淵村	平民	組長	平田桐三郎	明治十四年十一月	師範學校卒業、小學校訓導勤務中
第廿一組	三重縣	名賀郡	藏持村	平民	組長	河村甚七郎	明治五年十月	尋常小學校訓導兼校長
	香川縣	木田郡	奧鹿村	平民		國宗繁太郎	明治十二年三月	農事講習所修業、奧鹿村農會長
	青森縣	上北郡	七方町	平民		米内山一郎	明治十六年十一月	青森縣畜產學校卒業同校助手勤務中
	京都府	乙訓郡	新神足村	平民		岡本亦三郎	万延元年三月	京都府農學校書記
第廿二組	靜岡縣	濱名郡	河輪村	平民	組長	大塚安太郎	明治五年三月	師範學校第一類講習修業尋常小學校訓導
	岐阜縣	惠那郡	武並村	平民		樋田玉治	元治元年九月	尋常小學校訓導勤務中
	香川縣	木田郡	牟禮村	平民		小西一夫	明治十四年五月	大川郡養蠶傳習所敎師、實業ニ從事ス
	三重縣	員辨郡	丹生川村	平民		富田覺之輔	明治十六年九月	高等小學校卒業、農業ニ從事ス
第廿三組	富山縣	下新川郡	入善町	平民	組長	室子次郎	明治元年九月	害蟲驅除講習會修業、農業ニ從事ス
	鳥取縣	日野郡	印賀村	平民		西村善藏	明治十九年二月	甲種農學校卒業、小學校代用敎員勤務
	群馬縣	勢多郡	富士見村	平民		羽鳥太平	明治十一年八月	農蠶講習所修業
	京都府	南桑田郡	保津村	平民		村上義一	明治十四年四月	農學校修業、農業ニ從事ス
第廿四組	香川縣	木田郡	三ツ谷村	平民	組長	眞柴與太郎	明治元年十二月	陸軍豫備上等兵、村役場書記勤務中
	群馬縣	勢多郡	富士見村	平民		關口喜重	明治十年七月	蠶業學校別科卒業、小學校代用敎員勤務中
	滋賀縣	蒲生郡	武佐村	平民		岩越彌市郎	明治十四年三月	農事講習會修業、農業ニ從事ス
	京都府	南桑田郡	千歳村	平民		小川初太郎	明治十六年一月	府立農學校卒業、農業ニ從事ス
第廿五組	香川縣	木田郡	林村	平民	組長	能野吉次郎	明治三年十一月	陸軍步兵伍長、村役場書記勤務中
	福島縣	伊達郡	長岡村	平民		△韮澤孝四郎	明治十五年八月	高木小學校卒業、農業ニ從事ス
	兵庫縣	多紀郡	雲部村	平民		△安井瀧藏	明治四年五月	高等師範學校、動植物專習科卒業中學校敎員
	京都府	京都市	上京區	平民		松田フサ	明治元年一月	師範學校卒業、小學校訓導勤務中

◉講習會と五分間演說　當所に於て開催する害蟲驅除講習會は器具の貸與、研究上の便利を謀り四人を以て組を編成することゝなれるが又其一組は成るべく相遠ざかる縣人を以て組織せり。こは他縣れ事情を談合せしめ互に智識の交換をなさしむるに止まらず、會員間の親睦を謀り、害蟲の驅防上に於ける一國の輿論を喚起せしむる上に於て大に利益あるを認むればなり。而して又講習閉會前に於て會員の五分間演說を行はしむるも其意の茲に存するによれり。第十六回全國害蟲驅除講習會員の五分間演說會は八月十日午後二時より當市鶉飼ホテルに於て之を開き、引續き懇親の宴を催せり。其演說は講話欄に一班を示したれば又茲に言はず。當日の來賓には吉田岐阜縣參事官を始め第四課員、岐阜、濃飛兩新聞記者、堀口岐阜市長、農事試驗場員、縣農會理事等十數名にして、席は例により蟲名を以て定め、宴中には名和昆蟲研究所より寄贈の福引あり、會員の蟲に緣める演說あり手踊あり、弦歌盛んに起りて十二分の歡を盡し散會せり。

◉凸眼椿象の發生　岐阜縣揖斐郡の所喜久氏より大豆の害蟲として送附せられしものは、全くメダカガメムシにして、是を驅除するには咽喉付圓形捕蟲器等に掃ひ落すを以て最も便利の方法とす。

凸眼椿象の圖

◉浮塵子の發生　本年は連日の晴天にて溫度高きを以て、稻作の生育には極めて宜しきも、從ひて浮塵子の發生は甚しく、各地方何れも今更の如く狼狽せるも、既に手後れにして又如何ともなすべからずとは云へ、及ぶ丈け咽喉付圓形捕蟲器等にて驅除せざれば意外なる大損害を受くることあるべし。

◉北海道と朝鮮の昆蟲　此頃北海道後志國志根津川小學校に奉職せらるゝ本縣人小川七治郎氏は、多數の昆蟲を採集して送附し越されたるが、其內にはミヤマカラスアゲハテフ、ヒメヒオドシテフクジャクテフ等彼地には敢て珍しからざるも、是等の多數や蠶蛾類の或種の如き、或は天牛、金龜子、葉蟲、埋葬蟲、步行蟲の或種の如き、又は毛翅目石蠶、有吻目椿象の或種の如き、奇品の多數ありたるは、彼我氣候の相異によりてなるべし。然るに朝鮮元山津の村主隆左右氏の送られたる昆蟲はアゲハノテフ、モンシロテフ、モンキテフ、オホハヤバテフ、ルリタテハテフ、クマアリ、アシベニイナゴ、エンマコホロギ、ウスバキトンバウ、シホヤトンバウ、ノシメトンバウ、ナツアカネトンバウ、トビイロイトトンバウの十三種にて、我岐阜地方に產するものとは皆少しも異ならざりけり。

●昆蟲畫の好評　大垣西濃印刷株式會社は本邦六大島蝶圖、昆蟲繪葉書其他二三を印刷して販賣せらるゝが、頗る好評にて各地よりの申込者非常に多しと云ふ。其中此の蝶圖は本島を代表せるギフテフ北海道を代表せるエゾシヾミテフ、九州を代表せるミカドアゲハテフ、四國を代表せるイシガキテフ、琉球を代表せるツマベニシロテフ、臺灣を代表せるキシタバアゲハテフの六種の蝶類を十六度刷着色石版に附したるものにて、其畫の眞に迫りたると意匠の優美なるは、同好者の是非室内裝飾とすべき價値あるものなり。

●稻の莖切鎌　農家に害蟲驅除を勸むる上に於て、高價なる器械を買はしむることは到底實行し能はざる處なり。此頃鍛冶を以て有名なる美濃國關町の後藤喜兵衛氏は、圖の如き稻の莖切鎌十餘挺を贈られたるが、價は貳錢、貳錢五厘、參錢六厘の三品にて何れも實用には適當なるものなるが、尙其鎌の先端を少しく圓めて他莖を傷はしめざる樣になさば一層完全するなるべし。

稻の莖切鎌の圖

●名古屋松操會の總集會　同會は本月一日午前九時より名古屋高等女學校内に於て第十回總集會を開かれ、出席者百餘名にして頗る盛會なりし由なるが、當所長名和氏は之に臨み、昆蟲に關する女子の心得につき一場の談話を試みられたりと云ふ。

●本誌の改良　當所發行の昆蟲世界は、發行以來本月を以て滿六週年を迎ふることゝなれり。而して其間多少の變遷ありたるも漸次改善の實を擧げたるは既に讀者の知了せらるゝ處なるが、向後益々改良に意を注ぎ、成るべく多くの圖書を插入して記事を補足し、以て愛讀諸氏に酬ゆる處あらんとす、されば尙舊に依り續々玉稿を投せられんことを冀ふ。(編者白す)

●聖路易萬國博覽會昆蟲標本出品　聖路易萬國博覽會へ當昆蟲研究所より、有害有益の昆蟲標本凡そ三拾箱を出品せんとて、目下所員一同は材料蒐集に從事しつゝあり。

●中田谷藏氏の訃音　第十一回全國害蟲驅除講習修業生岩手縣中田谷藏氏は同縣農事試驗場昆蟲部在勤中、此程病魔の犯す處となり遂に永眠せられたりと、斯界の爲此の前途有望なる氏を失ふは實に惜むべきことにこそ。

●昆蟲標本陳列舘の陳列品增加　第五回內國勸業博覽會農業館岐阜縣陳列區の門に、昆蟲標本を以て設計せしより人皆昆蟲門と稱して大に賞讃を受けたりしが、今回紀念の爲其儘當所常設の昆蟲陳列舘內に陳列して公衆に示すことになし。又當所出品の添出品たる昆蟲分布圖（鳳蝶科十三種）等をも陳列したりき。

●岐阜縣昆蟲學會第五十七回月次會記事　同會は本月五日午後一時より當昆蟲研究所內に於て開かれたり、出席者は二十餘名にして第一席小森省作氏は環紋蝶科の分類につき標本を以て說明し第二席中井藤助氏は飛驒土產として、氏が先月十七日より十八日間害蟲視察として飛驒國地方旅行をせし情況を述べられ、第三席森宗太郎氏は害蟲驅除と氣候との關係につき各地の例を擧げて演述し、害蟲驅除に於て時期を觀察するの最も必要なるを說き、第四席篠田房治郎氏は桑樹の害蟲黑金龜子に就き加害の狀況より驅除法を、第五席所嘉吉氏はルリタテハテフの飼育談を述べ、第六席長野菊次郎氏は蜻蛉に就き多方面より講演せられたるが、何は他日本誌に發表せらるゝ都合なれば茲に贅言を用ひず。

●水曜昆蟲會記事　當研究所員の催しに係る水曜昆蟲會は、前號報告後、毎水曜日午后七時より當所內に開會せしが、其重なる演題と講演者を擧ぐれば左の如し。

高橋喜男氏　コムラサキテフの習性に就て、ベニシヾミテフの話、ルリタテハテフの話、昆蟲採集談、アカシヤ樹の一幼蟲に就て。森宗太郎氏の鄕里の土產、聖路易博覽會出品に就て。渡邊楳四平氏の優曇華に就て、桑の心蟲の調査談。石田和三郎氏のハマキムシの話、靜岡縣濱名郡地方の昆蟲方言、念佛と昆蟲。所嘉吉氏の幾何學と昆蟲、ルリタテハテフ飼育談。名和愛吉氏のシモフリスヾメの飼育談、クロアゲハテフ飼育談。棚橋昇氏の穴蜂の擧動に就て、アヲハダイトトンボの產卵、マキノハマキムシに就て。中井藤助氏の飛驒地方害蟲視察談。大橋由太郎氏の葉卷蟲各種の研究談、本巢郡地方の害蟲視察。小森省作氏の特殊鱗の研究談、採集と飼育等にして、其他客員として、長野菊次郎氏のトンボの話、昆蟲の戶外觀察、及在米國名和梅吉氏の蟲界報告文の朗讀等なりき。

●昆蟲標本陳列舘の觀覽人　去八月中に當昆蟲研究所常設の標本陳列舘を觀覽せし人員は、總計千九百七十一人にして、其內最も多かりしは二日に於ける百九十六人にして最も少なかりしは十五日に於ける四十六人にて平均一日に七十五人余に當れり。而して此月は官衙、學校等は夏季休暇中なれば從て各府縣の勸業當局者、敎育者及學生等多かりき。

●寄稿家に告ぐ　本誌本月分は記事輻湊の爲、盡く投寄の玉稿を收錄すること能はざるにより次號へ廻はしたるもの尠からず、此旨謹告す。

Cephonodes hylas Linne. (O-sukashiba)

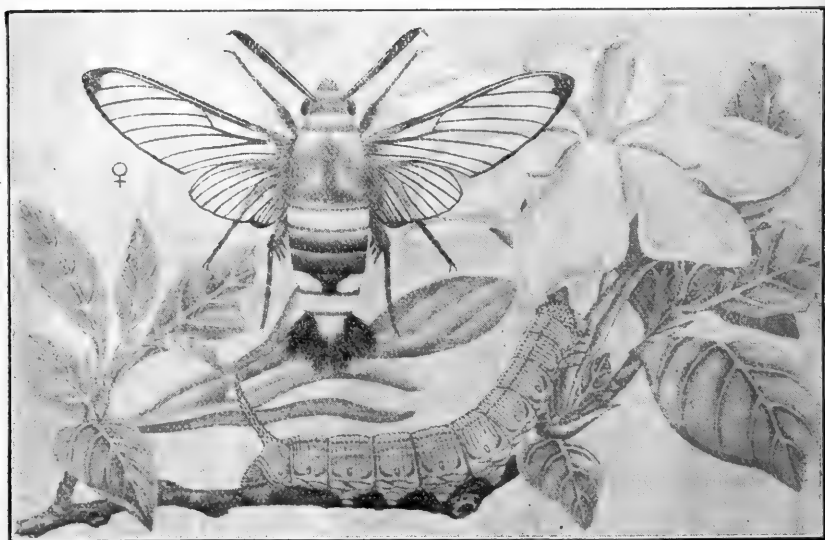
By K, Nagano.

Wings transparent (but on emerging from the pupa, they covered with white scales, which are lost almost immediately); veins blackish; costa and base of forewings yellowish-olive, and apex blackish; hind margin and base of hindwings yellowish-olive. Expanse 62-68mm. Body yellowish-olive with reddish belt on abdomen; anal tuft black.

Formosa, Kiusiu, Shikoku, Honsiu; 6, 7, 8, 9. Larva green with pale dorsal; dorsal line sometimes pale blue; subdorsal lines white; one or two sèries of black dots on lateral sides; 1, 11, 12 seg. yellow dotted; spiracles reddish; horn yellowish, black dotted, tip black: on Gardenia florida; 7, 8, 9, 10.

昆蟲世界

明治三十六年九月十五日發行　第七卷第七拾參號　（毎月一回十五日發行）

（明治三十年九月十日內務省許可）（明治三十年九月十四日第三種郵便物認可）

新刊廣告

昆蟲叢書第貳編

◉昆蟲標本製作全書　全壹冊

題字及寫眞銅版、木版圖數十種挿入◉定價壹部金八拾五錢（郵稅四錢）

記載目次

第一章　昆蟲標本の價値◉第二章　昆蟲標本製作法の沿革◉第三章　昆蟲標本製作書の出版◉第四章　昆蟲採集用の器具◉第五章　昆蟲採集の方法◉第六章　幼蟲及蛹の採集と飼育方法◉第七章　昆蟲採集地の撰擇◉第八章　標本製作用の器具◉第九章　昆蟲標本の製作方法◉第十章　昆蟲の排列と保存方法

本書出版の義につき種々事情の爲遲延致し何とも申譯無之候處漸く製本出來致し候ゝ付豫約御申込の順序を以て御送附可致候間此段御承知置願上候

明治三十六年九月

岐阜市京町　名和昆蟲研究所

◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條ゝ依り晴雨に關はらず、毎月第一土曜日午後一時より、岐阜市京町名和昆蟲研究所內に於て開く、本會員は不及申、何人も毎會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所內　岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會本年中の日並は左の如し

第五十八回月次會（十月三日）
第五十九回月次會（十一月七日）
第六十回月次會（十二月五日）

◉名和昆蟲研究所案內

：市境界
‖ 案內道
｜ 市道
イ 研究所
ロ 陳列館
ハ 縣廳
ニ 中學校
ホ 病院
ヘ 郵便局
ト 西別院
チ 公園
リ 長良川
ヌ 金華山
ル 停車場

當昆蟲研究所の位置は上圖の如くにて停車場よりは僅に十餘町養蟲室あり又新築の岐阜縣物產館構內には常設の昆蟲標本陳列館（五間に十六間）ありて標本器具數千点を陳列す有志諸君の來訪を俟つ

岐阜縣岐阜市京町　名和昆蟲研究所

◉本誌定價並廣告料

壹部郵稅共　金拾錢　（見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す）

壹年分拾貳部郵稅共　金壹圓八錢

（注意）本誌は總て前金ゝ非れば發送せず◉爲替拂渡局は岐阜郵便局◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす

廣告料　五號活字二十二字詰一行ゝ付金拾錢とす　三十行以上一行ゝ付金拾貳錢

明治三十六年九月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二（岐阜縣岐阜市京町）

發行所　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戶ノ二　發行者　名和梅吉

同縣揖斐郡鶯村大字公鄉三番戶　編輯者　小森省作

同縣安八郡大垣町字郭四十五番地ノ二　印刷者　河田貞次郎

（大垣　西濃印刷株式會社印刷）

Vol.VII. OCTOBER. 15TH, 1903. No.10.

(十月十五日發行)

(毎月一回十五日發

THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE.

EDITED BY Y. NAWA.

GIFU, JAPAN.

昆蟲世界

第七拾四號

(第七卷第拾册)

目次

(禁轉載)

(明治三十六年十月十五日發行)

(明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)

PUBLISHED BY THE NAWA'S ENTOMOLOGICAL LABORATORY IN GIFU, JAPAN.

◉寄贈物件受領公告

一白山産昆蟲標本　各種　岐阜縣　鹽田健藏君
一一本脊筋天蛾　二頭　鹿兒島縣　生熊與一郎君
一昆蟲標本　各種　東京市　田中芳男君
一雲南産冬蟲夏草　二把　名古屋市　寺島昇君
一珍種蜻蛉　十頭　長野縣　百瀬茂君
一戸隱神社耕作安全蟲除之御札○戸隱神社養蠶倍盛之御札
戸隱神社五穀豊熟養蠶倍盛御祈禱之璽
右三種　東京市　桑名伊之吉君
一除蟲御札　一葉　長野縣　藤森清君
一稻莖切鎌　一挺　愛媛縣　木村岩吉君
一稻莖切鎌　三種　十三挺　岐阜縣　渡邊喜兵衛君
一稻莖切鎌　二挺　岐阜縣　後藤善兵衛君
一注油散布器　一個　靜岡縣　松下源四郎君
一塗盆（菜花に昆蟲摸樣）一個　大阪市　坪内貞家君
一七寶塗硯箱（牡丹に蝶摸樣）一個外に一点　名古屋市　松操會
一塗盆（蝶摸樣）　一個　在岐阜市　中井藤助君
一獨逸製甲蟲玩具　一個　大阪市　由比昌太郎君
一茶卓（蜻蛉摸樣）　五枚　岐阜市　豊田宇三郎君
一淡路燒煎茶碗（群蟲摸樣）一組　外に一点　兵庫縣　中野壽郎君
一天田郡昆蟲講習員一同寫眞　一葉　京都府　辻川清玉軒
一半身肖像寫眞一葉（第十六回全國害蟲驅除修業生）　茨城縣　森市太郎君
一半身肖像寫眞一葉　德島縣　森井與平君
一半身肖像寫眞一葉　岐阜縣　河本伊六君
一中京新報○新愛知○扶桑新聞○東海日日新聞（昆蟲記事掲載）　各一葉　名古屋市　甫守謹吾君
一繭草栽培書　一册　東京市　裳華房

右寄贈相成候に付芳名を掲げて其厚意を謝す

明治三十六年十月十二日　名和昆蟲研究所

◉購讀者諸君へ謹告

本誌代金の儀は總て前金の規定に有之候へども往々遲延相成候諸君も尠からず會計上非常ゝ迷惑を來すのみならず爲めゝ本誌の改良上にも大影響を及ぼす次第に付き此際滯納の諸君は何卒速に御送金有之度此段願上候也

岐阜市京町
名和昆蟲研究所
昆蟲世界會計部

◉昆蟲分布調査材料募集

○鞘翅目。瓢蟲の部。
○鱗翅目。蝶の部、天蛾の部。
○脈翅目。擬蜻蛉、薄翅蜻蛉、長角蜻蛉の部。
○有吻目。水棲の部、蟬の部。
○直翅目。蟷螂の部、竹節蟲の部、蜚蠊の部。
○擬脈翅目。蜻蛉の部。

右今回寫生圖出來分布調査用紙に納めたれば最早何時にても調査の上記入に差支なければ各地同志の諸君續々標本御寄贈あらんことを望む

○アブラ　ムシ（蜚蠊又は滑蟲）の標本
右特別分布調査材料として同志の寄贈を望む

岐阜市京町　名和昆蟲研究所

蝶灰小和大こ竹石

昆蟲世界第七拾四號

（明治三十六年第十月）

論說

◎本年の蟲害と浮塵子

害蟲の發生は氣候と密接の關係を有し、氣候は又其年の豊凶に關係を及ぼすべきを以て、本年の如く氣候高温なる時は稲の成育極めて良好なるにつれ害蟲の發生は又免るべからざるなり。本年螟蟲の發生非常に多かりし爲、全力を之に傾注して以て漸く其効果を收めんとするに當り、浮塵子は彼の三十年に次くの大發生にして收穫皆無若くば半作なりとの慘報は續々各地より來り、隨て是等の驅除に要する油液は非常に莫大なるものにして多きは一村既に數十石を使用したる所あり、而して又我政府は第二豫備金より七萬餘圓を支出して之が驅防に勗めりと。全國に於ける其損害と費用は幾干なるや未だ知るべからずと雖も、三十年には七千五百餘萬圓を算せり。本年は之より超過することはあらざるべきも、之が精査を加ふれば又決して少なからざるべし。世人は最近年間に於て二回迄も浮塵子の爲に大損害を蒙りたれば、浮塵子なる語は最早忘れざるべし、否浮塵子なる語を忘れざると共に尚之より恐るべき螟蟲なる語をも永く忘れざるのみならず現時は勿論將來に於て大に警戒を加へざるべからざることを吾人は望むものなり。假令本年浮塵子の爲收穫皆無なりし所も若し驅防の方法其宜しきを得ば、平年作は勿論多少の增收ある事は信じて疑はざるなり。見よや三十年に於て凶作の聲四方に喧しかりしにも係らず、愛知

縣渥美郡野田村の如きは平年に二割の增收を來したるは其當時河合同村長の報告に依りて明かにして、必竟驅防其當を得たるに由れり。

抑も害蟲の發生は前述の如く氣候と密接の關係を有するものなりと雖も、又其寄生蜂類との均衡を失するも其一因なれば、本年非常に發生したりとて翌年必しも大發生するものに非らず、翌年少かりしとて又其翌年發生せざるにも非らざれば決して油斷すべきにあらざるなり。故に我農民は常に害蟲の驅防を念頭に置き、除草耕耘と等しく之を農家行事の一に數へんことを切望せざるを得ず、豫防の一匁は驅除の一貫匁に優るとは吾人が平素唱導する所なり。當業者は宜しく之を今日の被害に鑑みて、將に來らんとするの明年を警省すべし。

◎皇太子殿下奉獻中等教育昆蟲標本詳解（其二）

名和昆蟲研究所内　小竹浩

（一）昆蟲の分類

パッカード氏の調査に據れば動物界には大約廿五万の種類を有し、就中昆蟲類は其五分の四を占むると爾來斯學の進步に伴ひ、漸次增加し、現時昆蟲の種類既に三十万と稱せらる。尙微細に調査を遂ぐれば殆んど其止まる所を知らざる有樣なり。されば其分類にも學者の所信によりて一定せず、パッカード氏は七目に、フイギユア氏は九目に、ニコルソン氏は十二目に、クラウス氏は十三目に、カムストック氏

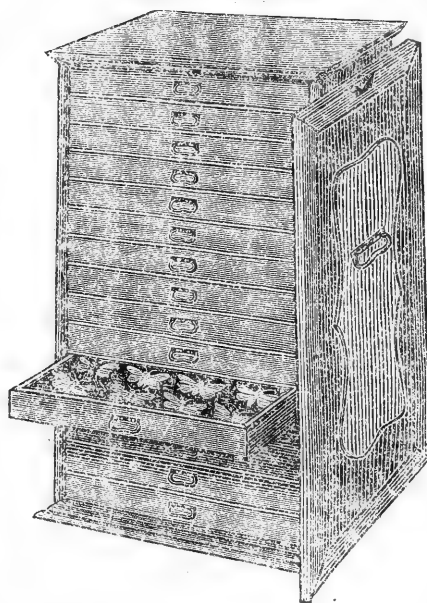
は之れを十九目に分類せられたり。而してカムストック氏の分類の嶄新にして精確なるにも拘らず、今此の標本をパッガード氏の分類によりて製したるは、是れ唯其分類法の從來世上に多く用ゐられたると且最も簡單なるを以て觀覽に便ならんことを欲してなり。今カムストック、パッカード兩氏の分類を對照して參考に供す。

	パッカード氏	カムストック氏
第一	膜翅類	膜翅目
第二	鱗翅類	甲翅目
第三	双翅類	微翅目
第四	甲翅類	双翅目
第五	半翅類	鱗翅目
第六	直翅類	毛翅目
第七	羅翅類	蝎蟲目
第八		脈翅目
第九		半翅目
第十		胞脚目
第十一		直翅目
第十二		疊翅目
第十三		食毛目
第十四		嚙蟲目
第十五		白蟻目
第十六		積翅目
第十七		蜻蛉目
第十八		蜉蝣目
第十九		彈尾目

右の表は種類の高等下等をも次第して示せるものにして、兩氏の意見多少相異あり、而して前表に於て第一類乃至第四類及羅翅類の一部、后表に於ては第一目乃至第八目は完全變態をなし其他は不完全變態をなすものなり。完全變態とは卵期、幼蟲期、蛹期、成蟲期の明なる四期を經過し、蛹期には停食不動殆ど死したる如き有樣をなせり。不完全變態とは其經過前者の如く明かならず、概して蛹期に於ても貪食し、且活潑に運動するを常とす。

本誌前號第九版下圖は幅一尺四寸六分、長九寸九分、深一寸六分大の箱に藏せる一函の撮影にして、各類變態の模樣及模範昆蟲の解体を示せるものなり。是等都て拾五箱の昆蟲標本は左圖の如き高二尺八寸八分、幅一尺五寸八分、奥行一尺一寸二分の保存箱に收容して奉献せしものなりと。

（二）模範昆蟲

(二)トノサマバツタ (Pachytylus determinatus, Thunb.) 此の解体標本は昆蟲の著しき外部の區別を示す模範となすに足れり。此蟲は直翅類稻蝗科に屬するトノサマバツタの雌蟲にして、躰軀は頭、胸及腹の三部より成り、其區分判明なり。頭部は癒着せる數個の環節より成りて一對の觸角と、二個の複眼並に三箇の單眼と、口に附屬せる數器即ち上唇、下唇、上顎一對、下顎一對等を具ふ。胸部は三個の環節より成り、前の一節を前胸といひ、中の一節を中胸、後の一節を後胸といふ。是等三個の環節には各一對つゝの脚を具へ、都て六足あり、これ昆蟲に六足蟲の別名ある所以なり。又中胸、後胸には各一双の翅を具へ、其中胸にあるを前翅又は上翅と稱へ、後胸にあるを後翅又は下翅と稱す。前翅は細長にして稍厚く、后翅は膜質にして翅脉と稱する數多の空洞管に支へられて擴張し、縦に疊むことを得。而して翅は他の種類にありては双翅類の虻の如く后翅退化して一双なるあり、蚤の如く二双共に退化したるあり、半翅類の虱の如く全く之を缺くあり、又二双を完備するも甲翅類の如く上翅の堅厚なるありて一樣ならず。腹部は九個の環節より成り、其各側面に呼吸を營む所の氣門を具へ、其第一節に聽器を、腹端には産卵管を有す。其体軀は脊索動物の如き骨骼なきを以て、体形を保持し内臓機關を掩護するには皮膚其代用をなし頗る堅硬なり。

昆蟲標本保存箱の圖

(三)昆蟲變態の模樣

(二)アシナガ バチ (Polistes chinensis, Fab.) 此蟲は家屋の簷下、草木の葉裏等に巣を營み、其内に仔を養ふ、其仔を養ふや螟蛉、尺蠖等の害蟲を捕へ來り、能く嚙み適度に幼蟲に與ふ。幼蟲は無脚にして蛆狀をなし、蛹は裸蛹にして巣の中に在り、後羽化して成蟲となる。該蟲を以て膜翅類變態の模樣を示す。

(三)ギフ テフ (Luehdorfia japonica, Leech.) は卵子をウスバサイシンの葉裏に產付し、孵化の幼蟲は該葉を食して成育し、老熟すれば自体を縊りて蛹化す。羽化の成蟲は美麗なる彩色を有せり。該蟲を以て鱗翅類變態の模樣を示す。

(四)ハナ アブ (Eristalis tenax, Linn.) 此の蟲の幼蟲は無脚の蛆にして尾長さを以て尾長蛆と稱す。常に不潔物の混ぜる水中にありて肥料分を食して成育し、后陸上に出で鼠狀の蛹となる。羽化の成蟲は花間に普通なり。該蟲を以て双翅類變態の模樣を示す。

(五)カブト ムシ (Xylotrupes dichotomus, L.) 此の蟲の幼蟲は塵芥中にありて有機物を食して成長し后蛹となる。羽化の成蟲は、其雄には額片より一の長突起を生じ、身体甚だ壯嚴なり。夏期柳、栗、皂莢等の樹幹より出づる甘液を舐食す。此蟲を以て甲翅類變態の模樣を示す。

(六)ユリ ノ ハナスヒ (Laccotrephes japonensis, Scott.) 幼蟲は水中にありて小蟲を捕食して漸次成育し、蛹期判明ならずして遂に成蟲となる。前肢は蟷螂のそれに似て、体は扁平に、腹端に二個の硬き長角を有す。該蟲を以て半翅類變態の模樣を示す。

(七)ハ子ナガ イナゴ (Oxya sp?) 此蟲は秋季土中に產卵し、翌年六月頃孵化す。好んで稻葉を食し漸次成育すれば蛹期判然ならずして遂に成蟲に化す。常にイナゴと共棲し大害をなすことあり、該蟲を

以て直翅類變態の模様を示す。

（八）サナヘトンバウ（Gomphus melampus, Selys.）幼蟲は水中に棲息して小蟲を捕食し、漸次成長して羽化せんとするときは陸上に匐ひ出で成蟲となる。苗代田に多く、頻りに諸害蟲を捕食する有益蟲なり。該蟲を以て羅翅類變態の模様を示す。

◎無翅の螢種に就て　附臺灣產の螢種（續）

在臺灣打狗港　永澤小兵衛

（五）臺灣螢の分布交殖　臺灣土人の螢火に對する觀念は、原來殆んど絶無にして、偶々之を捕獲する者ありと雖ども、そは只春夏の交、翫弄に供するに過ぎず。土語にては之をホイキムコオ（火金姑）と稱え、南部地方にては專らホイキムシムと呼べり。而して其分布を尋ぬるに、全島到處に之を產すと云ふも敢て不可なし。唯澎湖列島には、稀に瑪宮城附近にて目擊するのみなれば、漁翁島等の土人には、終生之を知らざる者すゞ多しとか。南部に於ては恒春、海口、枋山、枋寮等多少產するやに聞きしかど、余が採集の際には、時期少しく遲れ、且つ强風その他の事故に妨げられて、毎宵一頭だも獲ざりき。幸ひに鳳山、打狗等には今なほ多く、以て比較研究の資に供すべし。中部の臺南、苗栗に到れば、發生また少なからずと聞けりど、未だ實地を踏破せざれば、之を確言するに由なし。兎に角に、既往の事實に徵すれば、全島內に甲乙兩種の分布の廣濶なるは確實なるも、その丙種に至りては、尙疑問の間に置かざるを得ず。而して七月廿二日採集の結果に依れば、前數回の成蹟と稍異れる現象を呈したるのみか、從來未だ嘗て見聞せざる奇品の棲息をも示しき。憾むらくは、今之を讀者に敬告するの機會に達せざることを。

飜へつて其交殖方法の一班を述べんに、黄色翅の乙種は、内地産と同一の作用によりて蕃殖を遂ぐるも他の無翅の甲種に至りては、蜻蛉の異例なるが如くに、前者とは其趣むきを異にするに似たり。即はち雌蟲は屈伸自在なる魚尾狀の尾節を以て、緊く他物に吸着し乍ら、自體を伸べて天を仰げば、雄蟲は俯して其上に重なり、互ひに其頭部を對等とするや、軈て雄蟲は其尾端を雌蟲の腹部の第二節に接合し、約十分時以上は、共に熠火を滅して動かず。而して此間、雌蟲は爪端を雄蟲の前翅緣に鉤懸し、雄蟲は時々觸角を膨らして左右に動すを見き。此かる觀察は、容易に遂げ難きものなるのみか、余は只纔かに一回目擊せしに止まれば、或ひは雌雄間に於ける一時の動作を斯く誤認せしやも測られず。然かも、脱離後この雌蟲に配するに、乙種の雄蟲を以てせしに、雌蟲の之を厭避して、絶えず近づけざるの狀あるに反し、甲種の雄蟲の傍らを離れざる等に想ひ及ばゞ、此擧動には、必ずや特殊の事由の存することを疑はず。

(六)**臺灣螢種の位置**　それ斯く、臺灣には諸種の螢火ありて、其中甲種は最大形を有するも、雌蟲には翅翼を缺き、乙種は南清、琉球種の如くに其翅色黄褐にして、雌雄ともに飛行し、丙種は今猶ほ不分明なるも、是また乙種の如かるべきか。他に一種奇異の狀態をなせるものを發見せりと雖ども、是は分布、性態、全たく未詳に屬せり。而して古來最とも人に知られたるは、有翅種なるを以て、隋の煬帝が數斛を捕へしめて、之を山谷に放ち、夜出て之を賞觀せしなどの舊話は、蓋し甲種の雄蟲か、若くは乙種たりしなるべし。然るに、外國種にありては、無翅の雌蟲のみ光輝強くして、雄蟲には全たく放光せざるもありとの事なるが、臺灣産に於ては、雄蟲に光力は却つて雌蟲のものよりも強大なり。然らば則ち、臺灣種に於ける蟲學上の位置を、今何處に定むべきか、故人マッケー氏は、臺灣螢を以てLampyris

noctiluca となせりとか聞けりど、是は的當の學名とも思はれず、特に一種に冠する稱なるをや。去ればとて、彼の Phengodes 種に屬する道理なければ、已むことを得ずして、茲には甲乙の稱號を用ゐて紹介せしなり、學者の究明こそ望まほし。なほ讀者の參考として、採集上の注意をも述置かんに、甲種の雄蟲の飛行するや、青燐熠々として、其火光には極微の振動を感じ、直進また直退、決して內地產と同一にあらず、故に遠くより之を望むも、他種と區別するに難からず。其雌蟲は主に水濕の草叢に棲息し、初更までは幼蟲と同じく根邊に蟄伏するも、次第に莖幹を傳ふて梢頭に蚑行し、時々尾端を擧て煌火を熾し、以て其友を喚ぶの標識となすなり。若し物に驚けば、其瞬間に明光を藏して所在を晦すも、幼蟲期のものにありては、概むね草根に潛居するのみにて、莖幹に攀登することなく、且つ其光力さへ一樣にして、肯て雌蟲の如くに明滅の差違多からず。一たび此區別だに會得せば、一夜に數頭の採集は、左まで困難ならざるに、何故か對馬に於ける平田氏は、多く之を搜索し得ざりきと、余はその採集上の成蹟に就て、心に疑惑なきこと能はざるなり。乙種に至りては、殆んど內地產のものゝ如く、又甚だしく高處を飛翔せざれば、寧ろ捕獲の容易なるを覺ゆ。共に出遊の時刻は午後九時十時頃を最多とし、八時十一時之に亞げり。其卵粒の色澤、形狀また內地產に彷彿たりと雖ども、成蟲を捕ふるに毫も惡臭を聞かざるの一事は、少さか彼此その種屬を異にすることを證するに足れり。

(七)螢火に關する雜說 ●●●●●●●　臺灣產の螢火につきては、唯臺灣府志卷十八、蟲魚の部に、螢の名を留むるのみにて、其種別、經過より、色彩等を記載せしものとては、他に未だ之あるを見ず。是れ無翅螢の今日まで、絕ゑて世人に知られざりし所以か。然は云へ、祕傳花鏡に「初生は蛹の如く、蚊に似て脚短く翼なし、腹下に亮光あり、日には暗く、夜に明にして、天半に群飛すること猶ほ小星の若し、池塘の邊

に生ずるものを水螢と曰ふ、喜んで蛟蟲を食ふ、好事者毎に一二十を捉り之を小紗囊內に置く、夜火に代ふべし、一種の水螢多く水中に居る、故に唐の李卿に水螢の賦あり」などの說も見えたれば、前章に引證せる陶郝二氏の說と相竢て臺灣の母國に於ては、早くより無翅螢の半面を知りし的證と見ることを得べし。而して本邦の坂氏等は、宵行にクサボタルの訓を施こし置けるも、クサボタルを以て、無翅の雌螢、若くは幼蟲たる蛆螢なりとなさば、宵に行くとの字義に合はざるのみか、また郭氏の詩意にも反きぬべし。薛嘉穎氏が、熠燿を解して「夜間黯寂之時、惟螢火之光乎。熠燿、螢火也。孔疏、螢火夜飛、故曰宵行」と言はれしこそ正しけれ。又漢詩に蛆螢を詠ぜしものとては莫けれど、螢火の習性には、細緻精確の觀察を加へて、中には未だ邦人の言及ばぬ所を曲盡せしやう覺ゆるも多かり。例へば、梁の簡文帝の「騰レ空類二星隕一、拂レ樹若二花生一、屏疑二神火照一、簾似二夜珠明一」と、元帝の「著レ人疑レ不レ熱、集レ草訝レ無レ煙。到來燈下暗、翻往二雨中一然」とは、五言古の双璧とも稱すべく、唐の李嘉祐が「夜風吹不レ滅、秋露洗還明、向レ燭仍藏レ焰、投レ書更有レ情」と、周繇が「亂飛同曳レ火、成聚却無レ煙、微雨灑不レ滅、輕風吹欲レ燃」の五律とは、同工異曲の對聯とや言はまし。李百藥が「窓裏憐二燈暗一、階前畏二月明一、不レ辭二逢レ露濕一、祗爲レ重二宵行一」の絕句は、筆を螢火に藉りて、戀愛の情緒を述べしに過ぎざれども、宋の吳孳が「閒撲二流螢一銜二暗樹一、危梢點々墮二寒星一」の七絕の如くに、夏夕採螢の實境を寫出せし佳作や、孔武仲が「魚游鳥宿自不レ驚、我知此火初無情」などの、高雅淸逸の趣むきを存するものも少しとせず、特に元の謝宗可が、螢燈といへる題にて「銀粟無レ烟棲二碧蘚一、玉蟲留レ影綴二青紗一、秋空雨歇寒光墮、晩徑風閒冷燼多」と詠ぜしは、形容の妙、實に感服に堪へざるなり。而して和歌にも、唐宋の詩味に讓らざるものあるが中に、最とも余が意を得たるは、藤原定家卿の詠物歌と、頓阿法師の遺草との二者な

るが如し。今や暑熱漸やく加はり、塵界身を處するに懶しゝ、讀者もし榻を綠陰水の如き處に移して、靜かに此等の名什佳篇を繙かば、其研學に裨益する所、蓋し鮮少にあらざるべし、豈啻り銷夏の一方のみといはんや。

（完）

◎第壹回岐阜縣昆蟲分布調查（四）

名和昆蟲研究所助手　分布調査主任　小森省作

天狗蝶科（Lemonidae）、此科に屬するものは本邦に於て僅一種を產するのみ、而して此テングテフは成蟲を以て越冬すれば何れの時季に於ても採集し得ざるにあらざるべきも、我岐阜縣に於て最も多く現出するは三四月の候にして、他の季月に於ては餘り多く見ざる所にして、隨て今回採品の少なかりしは其時期に非ぶざりしによれるなり。

（五二）テングテフ（Lybithea lepita, Moore.）　翅の表面は黑褐色にして黃赤色の斑紋を有し、前翅の前緣角に近き二點は白色なるを常とす。前翅の外緣は前緣角の部に於て甚しく突出して鉤狀をなす。裏面は前翅に於ては紋樣表面の如く判然せずと雖も略ぼ同一にして、後翅は枯葉狀を呈するも多少變化あり、下唇鬚は非常に發達して長く前方に突出し、雄蟲の前肢は退化して脛節より先方鱗毛を叢生す。稻葉郡三里尋常小學校尋常一年生鹽谷啓作は九月二十日學校附近にて、揖斐郡鶯尋常小學校職員は三月十九日、加茂郡越原南尋常小學校尋常三年生安江幸次郎は五月十日山地に於て採集せり。

小灰蝶科（Lycaenidae）、此科に屬するものは皆小形種にして、今回の採品は凡て十二種なりき。

（五三）ゴイシ　ウラバ　シジミテフ（Taraka hamada, Druce.）　形小にして翅の表面は一樣に黑褐色なり

裏面ハ白色ニ黒點の散在せる狀恰かも碁石を駢べたるが如くなるを以て此名あり、幼蟲は竹類に附着す
る白色蚜蟲を食す、邦産蝶類中食肉性のものは此の一種のみ。惠那、益田の二郡に於て獲られたり。

(五四)シジミテフ (Cyaniris argiolus, L.) 普通種にして六七月頃最も多く現はる、雄蟲の翅の表面は一様に美麗なる鳩羽色を呈し、外緣に僅か黒色を呈するも、雌蟲は前後兩翅共前緣より外緣に沿ひて幅廣く黒色を呈し、前翅の中室の先端ニ於て黒點あり。裏面は雌雄共に同彩にして、帶青灰白色ニ數多の黒點を有す。變化多し。羽島、揖斐、加茂の三郡に於て獲られたり。

(五五)ヒメシジミテフ (Lycaena argus, L.) 雄蟲の翅の表面は藤紫色を呈し、脈黒く、前翅の外緣及后翅の前、外緣は廣く帶褐黒色なり。裏面は白色にして基部は青色をなす、外緣ハ黒く、外緣ニ沿ふて二列の黒紋列間は橙黄色を呈はし、其内部にも數多の黒點ありて多少列をなす。雌蟲は表面一様ニ黒褐色をなし、後翅の外緣に沿ふて赤色斑紋の現はるゝあり。裏面は灰褐色を呈し、紋様は略雄蟲に等しく橙黄色に接せる二黒紋列の兩側は白色を呈す。大さシジミテフより稍小にして、山地ニ産す。益田、吉城の二郡ニ於て獲られたり。

(五六)ウラボシシジミテフ (Lycaena euphemus, Hübn.) 小灰蝶科中大形種にして、雄蟲の翅の表面中央部ハ淡き藍色を呈し、前後兩翅の中央に黒褐色の微かなる斑紋列と中室の先端に各一個の斑點を有し外部ハ黒褐色なり。裏面は灰色にして黒色と黒褐色の斑紋列あり。雌蟲は表面一様に黒褐色にして、此種は變化多く、山地ニ産す。惠那、大野、益田の三郡に於て獲られたり。

(五七)ヤマトシジミテフ (Zizera maha, Kollar.) 小灰蝶科中小形種ニして春秋の間到る處に飛翔せざるなし。故に今回其採品の多きを見るべし。雄蟲の翅の表面は一様に藤紫色にして外緣は帶褐黒色を

以て緣とり、雌蟲は一樣に帶褐黑色なるを常とすれども、雌雄共變化多し。裏面は灰色にして數多の黑點を有す。岐阜、安八を除き最も多數獲られたり。

(五八)ベニ　シジミテフ(Chrysophanus phlaeas, L.)　此蝶の翅の表面は前翅に於ては、帶黃赤色に數個の黑色斑紋ありて邊緣は黑褐色なり。后翅は黑褐色にして外緣に沿ふて一條の帶黃赤色の斑紋あり、然れども此種は變化頗る多く、而して雄蟲は一般に黑色部多くして前翅は殆んど全く黑褐色を呈するものあり、又發生の季節によりて變化あり即ち春生種は形稍小にして赤色鮮明に、夏生種は黑色を增せり。裏面は皆殆んど一樣にして、前翅は黃赤色に黑色の斑點を有し、外緣は灰色なり。後翅は灰色に黑色の細點を有し、外緣に沿ふて帶黃赤色の斑紋を有す。岐阜、稻葉、羽島、可兒及安八を除き各郡に於て多數獲られたり。

(五九)ツバメ　シジミテフ(Everes argiades, Pall.)　此蝶はヤマト　シジミテフと同大にして、翅の表面亦彼れに等しく雄蟲は美麗なる藤紫色にして、雌は帶褐色なりと雖も、此種は後翅の後緣角[illegible]近くさ尾樣物のあると、裏面に於ける黑點と黃赤色の斑紋が表面に微かに現はるゝあり。裏面は白色[illegible]しての多の黑褐色の細點と、後翅の外緣に近く稍大なる二個の黑點と黃赤色の斑紋を有す。而して此種も亦變化頗る多し。岐阜、羽島、海津、山縣、土岐及安八を除き各郡に於て多數獲られたり。

(六〇)ウラ　ナミ　シジミテフ(Polyommatus boetiens, L.)　雄蟲は翅の表面淡紫色にして、后翅の後緣角に二個の黑紋を有す。雌蟲は暗褐色にして、翅の中央より基部に於て光輝ある瑠璃色を呈す。裏面は一樣に灰褐色にして白色の細線を以て波狀をなし、後緣角には樺色の斑紋ありて其内に帶青銀色の半環

を有せる黑點二個あり、秋季に於て多く現出す。今回加茂郡に於て僅一頭獲られたり。

(六一)ルリ シジミテフ(Arhopala japonica, Murr.) 翅の表面中央部は美麗なる瑠璃色を呈し、外部は帶褐黑色なり。裏面は褐色にして光輝ある暗褐色の斑紋あり、前翅の前緣角は非常に尖る。揖斐、山縣武儀の三郡に於て獲られたり。

(六二)コツバメ テフ(Satsuma ferrea, Butl.) 春季山地に多く飛翔する處の小形の小灰蝶にして、翅の表面は銀鼠色にして前緣及外緣は暗褐色なり。裏面は褐色にして基部及後翅の外緣部は黑褐色を呈し白色の粉鱗を散布す。后翅の后緣角は尖りて內方に向ひ長き緣毛を生じて切片狀をなす。揖斐郡に於て獲たるは三月十九日の採品なり。

(六三)アカ シジミテフ(Curetis acuta, Moore.) 大形の小灰蝶にして、翅の表面は帶褐黑色に中央部は雄蟲は帶黃赤色、雌蟲は蒼白色を呈し、前翅の前緣角及び後翅の後緣角は著しく尖る。裏面は一樣に銀白色を呈するが故にウラ ギン シジミテフとも云ふ。郡上、加茂、惠那の三郡に於て獲られたり。

(六四)フチグロ アヲツバメ テフ(Zephyrus taxila, Brem.) 本種は小灰蝶科中大形の種にして、雌雄により色彩を異にし、而して其雌蟲に於て又多變形なる等本誌前々號に於て名和所長の詳說あり。今回揖斐郡に於て一頭獲られたり。

(六五)ツバメ テフ(Zephyrus attitia, Brem.) 翅の表面は暗褐色にして后翅の外緣に沿ふて蒼白色の斑紋を有するものあり、尾樣物は長し。裏面は白色にして前翅の中央にリ字形、后翅の中央に鍵形の黑褐色の斑紋ありて其外部に同色の斑紋列あり、而して后翅の後緣角に二個の橙黃色の斑紋ありて其中に黑點を有す。大野郡に於て一頭獲られたり。

以上の採集數を表出すれば左の如し（表中△印は十頭以上のものゝ限る）

番號　種　名	岐阜市	稲葉郡	羽島郡	海津郡	養老郡	不破郡	安八郡	揖斐郡	本巣郡	山縣郡	武儀郡	郡上郡	加茂郡	可兒郡	土岐郡	惠那郡	大野郡	益田郡	吉城郡
五二、テングテフ	｜	一	｜	｜	｜	｜	○	二	｜	｜	｜	｜	一	｜	｜	｜	｜	｜	｜
五三、ゴイシウラバシジミテフ	｜	｜	｜	｜	｜	｜	○	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	二	｜	一	｜
五四、シジミテフ	｜	｜	一	｜	｜	｜	○	一	｜	｜	｜	｜	一	｜	｜	｜	｜	｜	｜
五五、ヒメシジミテフ	｜	｜	｜	｜	｜	｜	○	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	二	四
五六、ウラボシシジミテフ	｜	｜	｜	｜	｜	｜	○	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	四	一	二	｜
五七、ヤマトシジミテフ	｜	△	△	二	△	△	○	三	△	一	△	六	△	△	△	△	四	八	一
五八、ベニシジミテフ	｜	｜	｜	二	七	四	○	二	六	一	五	三	四	｜	二	△	五	三	四
五九、ツバメシジミテフ	｜	三	｜	｜	一	三	○	三	四	｜	△	二	△	四	｜	△	二	一	二
六〇、ウラナミシジミテフ	｜	｜	｜	｜	｜	｜	○	｜	｜	｜	｜	｜	一	｜	｜	｜	｜	｜	｜
六一、ルリシジミテフ	｜	｜	｜	｜	｜	｜	○	一	｜	一	三	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
六二、コツバメテフ	｜	｜	｜	｜	｜	｜	○	五	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
六三、アカシジミテフ	｜	｜	｜	｜	｜	｜	○	｜	｜	｜	｜	一	二	｜	｜	五	｜	｜	｜
六四、フチグロアチツバメテフ	｜	｜	｜	｜	｜	｜	○	一	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
六五、ツバメテフ	｜	｜	｜	｜	｜	｜	○	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	一	｜	｜

講話

編者云、左の二篇は水曜昆蟲談話會に於て森助手及特別研究生所嘉吉氏が講演せし談話筆記の大要なり。こは繼續的十分の飼育研究にあらざれば杜撰の譏りは免れざるも、玆に掲載して以て讀者の參考に供す。

◎マユミガメムシの飼育に就て

名和昆蟲研究所助手　森　宗太郎

マユミガメムシは御覧の通り頭、胸部の背面及前翅は帶褐黑色を呈はし、后翅は透明にして紫色を帶び兩翅共前縁脉は黄色をなして居ります。腹部の背面中央は黄色に、周圍は黄色と黑色と交互に蛇腹紋にあり、頭、胸、腹の腹面は黄色で側面に黑色の微細なる點列がありまして、複眼は小さく圓形で、單眼は頭頂部に二個あり、觸角は四節より成り黑色に末節は褐色をなし、肢は又黑色にして腿節の中央部は白色をなし、基節は帶紫赤色をなして居ります。

私は八月上旬より縣下揖斐郡本郷村なる郷里へ病氣療養に參て居りました節、或日散歩に參りまして不意に一頭のマユミガメムシを發見致しましたから、更に多數を得んと思ひまして先づ食樹たる衛矛の樹を搜索しました處、意外にも其近邊に大なる衛矛の樹があつたから、其樹を熟視しましたが樹の大なる爲に容易に見當りませんから試に此衛矛を動搖したれば、例の彼の特有なる惡臭氣が致しました、爲に玆に此蟲の棲息して居ることが分つて、澤山の成蟲を採集することを得ました。これは彼等が防禦の爲に惡臭氣を放ちしならんも、我等採集者には却て好都合でありましよ。是等は採集者の注意を要べきことであらうと考へます。該蟲の習性經過は未だ克く分つて居りませんが、私の豫想では此蟲の習性經過は容易に知ることが出來るであろうと思ひます。是は凡ての飼育に於て食草の得安き者と、飼育箱中にて食草が容易に凋ぬ所のものならば好結果を得ます故に、岐阜地方にて最も普通なる此衛矛は兩者を兼備して居ります爲に、此蟲を飼育する念が増して、此卵子を得んと致て毎日産卵するや否やを見に參まして八月二十二日に漸く産卵したのを發見しました。處が私は病氣も最早や全癒致ましたから明日にも歸岐致さうと思て居る前日に於て、此卵子を發見したのは私の幸福であると云はねばなりません。依て翌日即ち二十三日の朝澤山の卵子を得て岐阜へ戻りまして、先づ飼育せんとする前に卵子を能々調て見ましたが、此卵子の色は光澤ある茶褐色で、形は丸く、澤山並列して樹枝或は葉裏に産附してありました。而して其附着部は平扁であつて容易に取れない樣に成て居ります。之を飼育箱中に入て置きましたに、其中の多くは寄生蜂の爲に斃されましたが其内の小部分は斃され無かつた爲、漸くにして飼育することを得ました。之が孵化したのは二十六日であつて、産卵してより五日目でありました。此時の幼

マユミガメムシの圖

蟲は黄色であつて、觸角及肢は淡黑色で、躰には黑色に瑠璃色を帶びたる斑點が側部に各四個さゝ背面中央に同色の二個の突起した點があります。第一回脫皮は八月三十一日で、其より四五日を隔てゝ一回づゝ脫皮し都合六回の後成蟲となりました。而して四回脫皮の後は觸角黑色に、肢は腿節の中央部は白色に、此れより前後共黑色となりました、第五回脫皮後即ち蛹時代は觸角及肢は略前と同樣でありましたが胸部は大分異て參りました、これは不完全なる翅の顯れたる爲であろうと考へます。即ち頭部は黑色に光澤を有し、前胸部は黄色に、中胸部は兩側に突起を有し(是は特にツノガメムシ類に發達す)、後胸部は不完全なる翅を備へ、腹部の第一、第二關節は之を以て掩はれたるが、此翅は濃き瑠璃色でありました。腹部は別に異狀はありませぬが、唯少しく色の濃くなりし位でありました。而して九月二十二日に成蟲となりましたが、成蟲及幼蟲は其彩色に於て多少の變化があります。尙今後之を繼續飼育して經過習性を調査し、他日御話を致さん考へであります、先づ今晩は之で御免を蒙ります。

◎ルリタテハテフの飼育談

名和昆蟲研究所特別研究生　所　嘉　吉

私は先達而中ルリタテハテフを飼育して居りましたから、其れを諸君に御話し致して今晩の責を塞ぐ次第であります。

八月二十八日の事でありました、私は稻葉山附近へ昆蟲採集に參りますと、偶然山復にサンキライの有る所にルリタテハテフの一頭が翩々と去て嬉遊し、或は止まり或は飛び、其去就定まらざるの狀態をなしつゝるを發見しました、怪しみて之を熟視すれば、即ち彼は産卵するのであつたのです。其有樣は食草即ちサンキライの葉の一端に止まり表面に一粒づゝ産下しました、依て私は其卵を採り來り飼育を試みる事に致しました。卵は楕圓形をなし、光澤ある淡綠色にして縱に白色の少しく突起せる細線が十一筋ありました。卵期は五日にて九月一日に至り孵化しました。孵化の當時は躰長八厘許りにて、全體黑色にして一面に同色の毛あり、頭部は比較的大にして眞黑であります。孵化するや食葉の中央より網の如く葉綠を食し、九月六日に第一回の脫皮をなした、此時は全躰黄色に黑き斑紋ありて各關節に數本の黑き棘毛あり、九月八日第二回の脫皮す、其當時は躰長三分餘、黄褐色にして始めと殆ど同樣でありましたが、九月十三日第三回の脫皮をなし、体長七分五厘となり、棘毛は次第に發達して基部黄色にして太く、先端は黑く數本に分岐して銳く尖れり。九月十七日第四回の脫皮をなし、体長一寸許りまして

全体茶褐色に黒色の斑紋ありて第一關節に黒色の毛あり、第二三關節に四本、第四關節乃至第十一關節に七本、第十二關節に四本の先端分岐せる棘毛ありて、老熟期に至りて躰長一寸四分に達し、九月二十一日に蛹化しました。蛹は垂蛹にて、長さ約一寸ありて頭の方へ二突起をなし、先端尖りて居ります。胸部は側面に二個、背面に一個の突起ありて角をなし、背面突起の兩側には小突起があります。腹部は側面第三關節の邊少しく突起し、背面には數個の突起がありまして、胸部と腹部と接する邊の凹めるは常に蛺蝶科の蛹に見る所であります。全躰赤褐色をなし、背面の中央部は金色を帶び、凹處には四個の銀紋があります。而して此蛹は十月三日に羽化して成蟲となりました。

◎六足蟲彙纂（酉の巻）

在東京　長野菊次郎

（二十四）飛蝗の大數　移住的蝗(Migratory locust)は地方的Endemic種よりも一層の慘害を逞しくするものなり。然れば一度此蟲群の侵掠を受けたる地方は、瞬間に滿野の菜穀を損害せられて、人類及び他の動物に向ひ寸青の食物だに殘さゞる酸鼻の極に陷らしむる事は、到底蝗軍の來襲の實況を目擊せざる者の夢にも思ひがけざる所なりと云へり。或る博物學者の言によれば、千八百八十九年の十一月に紅海(Red sea)を通過したる蝗軍は二千方哩の面積に擴がりたるが、今一疋の重さを一オンスの十六分の一(邦量の四分七厘許)と假定すれば、全量實に四百二十八億五千萬噸に當れりと、かくて翌日も亦一層多數と認むべき蝗軍の亂雲が同一の方位に向ひて通過するを見たりきとは、實に驚愕の至ならずや。又サイプラス嶋(Cyprus. 地中海に在り)にては、一千八百八十一年の十月末に至るまでに蝗の卵鞘（各卵鞘には更に多數の卵を含めり）十六億個を採集して之を撲滅したるが、其季末に至るまでの重さは千三百噸以上に上りけり。かく多數の卵鞘を撲滅したるに關せず、一千八百八十三年に其嶋に置かれたる卵鞘の數は實に五十億七千六百萬個より少からざりきとなり（ケンブリッヂ博物誌）。

(二十五)蝶蛾の蛹を越冬せしむること　飼育したる幼蟲より生じたる繭蛹及び裸蛹、或は野外より採集したる繭蛹或は裸蛹をして、無難に冬を經過せしむる事は甚だ困難あることあり。折角飼育又は採集したる幼蟲が滿足に繭を紡ぎて蛹とあり、或は直に蛹と化したりとも、所置宜しきを得ざれば、翌年成蟲の羽化を見ることを能はずして前年の苦心水泡に歸することと少からず。今之を無難に經過せしめんには次の三個條に注意することを肝要なり。即ち第一氣候の劇變を防ぐこと、第二濕氣を適度にすること、但し濕氣多きに過ぐれば却て黴を生ずる恐れあり、第三乾燥に過ぎざる樣注意すること是なり（ヂッケルソン氏蝶蛾書）。

(二十六)翅の振動數　エム、マーレー氏(M.Marey)の説によれば、普通の蠅を捕へて之を保つときに、其翅を振動する數は一秒時間に三百卅回にして、蜜蜂は百九十回、而してモンシロ蝶は僅かに九回なりとなり。尚ランドア氏が翅によりて發する音の高低によりて其振動數を測定せることは、前年の本誌、昆蟲の發音の條に略記したれば之を省くことゝせり（パッカード氏昆蟲研究指針）。

◎昆蟲に關する隨感隨筆（第四回）

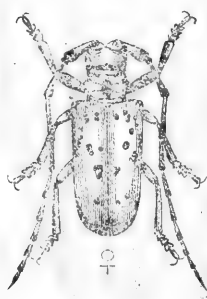
昆蟲翁

(廿一)ルリシジミテフの幼蟲　ルリシジミテフは成蟲にて越冬し、常に樫の在る處に飛揚し、又は樫の葉に棲止するを以て、何等關係のあるを知るも、未だ確證を得ざりしが、本年八月丹波國福知山町公園城山の樫の軟葉に於て、楕圓形の幼蟲數頭を捕へ來り、之を飼育したれば、蛹化し續きて羽化したるに、果してルリシジミテフ(Arhopala japonica, Murr.)の出でたるを以て、愈々其幼蟲の食物は樫なることを知れり。又茲に最も面白き事實を發見したるは、其幼蟲を捕へし際、數頭の蟻の其背上に登り居ること、恰も貝殼蟲を見るが如し。其數時間乃至數日の後に於けるも背上を去ることなく、特に其幼蟲を保護するが如し。幼蟲も亦少しも其蟻を嫌ふ模樣あければ、或は幼蟲の躰より一種の甘味を分泌する爲め蟻の來るものならんか、是れ恐らく蟻と蚜蟲の如き共同棲息を爲し居るやも知れずと信ず。後日の研究を俟ちて更に詳報することあるべし。

(廿二)ゲジ〳〵とクモの昆蟲捕食の有樣　曾て某所に於て、洋燈の許に一頭のゲジ〳〵來り居るを以て、親しく注視したるに、圖らずも一頭の二化生螟蟲蛾の飛揚し來りて其近傍に棲止したるに、ゲジ〳〵は一躍して其蛾に飛び乘り、澤山の足にて少しも動くとの出來ざる樣に抱き、然る後蛾の頭部より食し

始めたるを見たり。又此頃ハイトリグモの頻りにグラス障子に於て、小形寄生蜂を捕食せんとせしも、一度も捕へしを見ず、如何なることなるやと親しく接近して見たるに、蜂はグラスの反對面を歩行するものなればなり。是れ恰も猿の水面に影たる月を捉ふるに異ならず。實に面白しと云ふべし。

(廿三)蜻蛉の群飛　宮林桂次郎氏の談話に依れば、本年八月十二日のことありき、愛知縣三河國渥美半島に於て、同日午後二時より三時迄の間、渥美郡小塩津村より和地村に至る内に於て、蜻蛉の西に向ひて群飛すること實に無數なり。其高さ六七間、群飛の始めは未詳なれども、和地村にて全く終れり。此時常に西風吹き居れり。而して蜻蛉の種は不明なれども、大形黄蜻蛉ならんかと云へり。

(廿四)ホシベニカミキリムシ(斑點紅色天牛)の分布に就て　第一回全國昆蟲展覽會出品目錄中、分類標本百六十八に出せるホシベニカミキリムシの學名は不明ありしも、其後の調査にて Scotinauges diplysis, Pasc. なることを知れり。又同目錄の内にある産地は、三重縣志摩郡大矢圓三郎氏並に愛知縣渥美郡宮林桂次郎氏によりて、兩縣下に産することを知れり。其後知り得たる所を列記せば、長崎縣對馬國嚴原久田道町平田駒太郎氏卅五年中に十數頭、山口縣美禰郡伊佐尋常高等小學校安永源吉氏三十五年七月、鳥取縣西伯郡成實村生田英雄氏三十五年九月、又同縣岩美郡桂木村山田豊藏氏同年同月、愛知縣渥美郡堀切高等小學校卅五年六月二十日、同縣同郡高松村福井信太郎氏同年七月廿日、同縣同郡野田高等小學校同年六月九日各一頭を寄贈せらる。其の後本年五月愛知縣寶飯郡小學校冬季昆蟲展覽會の節出品中にあるものを見たるは西浦村一月廿日、大塚村三月四日樹間鈴木勢次郎氏、同二月四日樹間稻石佐市氏、同三月十三日樹間大須賀繁彌氏、同三月五日樹間上村豊藏氏、靜里村二月十四日芝の中、形原村二月十八日樹中、國府高等小學校三月卅日山、三谷町十月十日草、同三月二十日木、其後國府、御津の分各一頭宛寄贈せられたり。以上の分布を見るに西は長崎、山口、鳥取を始め三重、愛知の五縣下に於て目下分布せることを知れり。然るに茲に奇なるは、何れも海岸に接する所に於てのみ發生するは、或は海岸に生ずる樹木と關係し居る哉疑ひなし。目下夫々調査中なれば、近き内に如何ある樹木を食害するかを知るに至るべし。又獨逸にて出版したる日本産甲蟲目錄中には、對馬に産することを記せり。今其大さを測定せしに、十八頭中最大のものは八分五厘にして、最小は六分五厘、其平均大は七分六厘なることを知れり。色は其名の如く紅赤色にして、不

ホシベニカミキリムシの圖

♀

規則なる黑點を現せり。該蟲は成蟲にて越冬することは明かなれども、又七、八、九、十月に於ても採集し得ることは、特に注意すべきことあり。願くば海岸接近の諸君は大ひに研究の上續々報告あらんことを希望し、終りに望み標本寄贈の諸君に對し深く其厚意を謝す。因に記す、其後三河國寶飯郡の田中周平氏よりの報告に依れば、多分ダマグスの樹に發生するものゝ如しと。

（廿五）ムチビロゴキブリの分布　前號の本欄（十八）の所に、ムチビロゴキブリの分布に就き記し置きたるに、其後知りたるは神奈川縣中郡西川豊次郎氏、幷に尾張國名古屋市谷てい子、同平野はな子、同鈴木まさ子、同中島にい子の諸氏より寄贈せられたるを以て、普通ゴキブリに對して愈々分布區域の廣きを知るに至れり。

（廿六）豌豆象鼻蟲の羽化　本誌第七十號の本欄（六）の所に、豌豆象鼻蟲の産卵と題して、豌豆内に於て越冬する趣を記載し置きたるに、九月下旬に至りて羽化し豌豆内を出でたるも、全く成蟲にて越冬することは明白なる所なり。

（廿七）イナゴのフライ　此頃市立名古屋高等女學校卒業生の組織したる松操會主催となりて、昆蟲學講習會を開かるゝに際し、圖らずも昆蟲翁は同會の依賴にて講師の任に當りしが、同會は萬事少數の委員諸子の奔走に依りて、恰も痒き處へ手の届く迄に獨立自治の發達し居り、常に委員の手に成れる西洋料理の晝食を與へらるゝに依り、試みに委員に向ひ、願くば次回にはイナゴのフライの御馳走に預りたしと言へるに、速に承諾を得たり。故に次回の至るを俟ちたるに、果して委員の手にて採集し、且つ調理せられしものを供せられたれば、二三の方々と共に試食したるに、實に美味なることを互に稱賛せり。尙澤山の品をも貰ひ來りて、當研究所員一同に分與したるに、皆々大ひに喜び合へり。

（廿八）コウカバへの寄生蜂　助手森宗太郎の本年九月中に於て調査したる所のコウカバへの寄生蜂は百頭の蛹中より九十七頭迄出でたるを以て、漸く三頭丈成蟲即ちコウカバへに羽化したる割合なり。又一頭の蛹より寄生蜂の出づる數は廿二、三頭を以て普通となす。

（廿九）稜黑横這の腹中卵數調査　長期講習生渡邊樵四平氏は、本年九月廿三日ツマグロヨコバイの腹中にある卵數を調査したるに、十五頭の内卵子なきもの二頭あり、他の十三頭中卵子の尤も多きものは三十四個、尤も少きは七個、一頭平均十六個强なりとす。

（三十）イチモジハナセセリテフに就て　本年九月八日午前六時、當研究所内の朝顏、雞頭等の花に、

澤山のイチモヂハナセセリテフの來りて頻りに花蜜を吸收するものを見たり。普通の蝶よりは比較的早朝より飛び來ることを知れり。又ヒラタアブの一種も同時に來りて花蜜を吸收せり。

◎昆蟲小感（一）

岡山縣　福井克雄

螟蟲に對する敵蟲　害蟲に對する天然驅除の有力あることは屢々本誌に記載せらるゝ所あるが、如何に人爲の驅除を遺憾なく實行するとも天然の驅除者を等閑に付せば、折角の驅除も徒勞に歸する事あるのみならず、驅除すれば反て害蟲增加の奇態を顯出するの不幸に遭遇することなきにしも有らず。斯の如き場合は、多く天然驅除を等閑に伏したる罪多けれ、されば害蟲驅除を爲すと同時に天然の驅除者を充分探究し、以て之が保護の方法を講ぜざる可からず。余は去月廿二日稻の螟蟲被害如何を調査せしに、敵蟲たる寄生蜂多きに驚きし。今一端を左に記さん。

（一）被害稻莖總數　七一。內、被害莖にて螟蟲の居らざるもの　四六。寄生蜂の寄生を受けたるもの　二〇。完全なる螟蟲蛹化せるもの　五。

（二）被害稻莖總數　五〇。內、被害莖にて螟蟲の居らざるもの　一五。寄生蜂の寄生を受けたるもの　二一。完全なる螟蟲蛹化せるもの　一一。螟蟲にて未だ蛹化せざるもの　一。甲蟲の仔蟲に咬殺されしもの　二。

以上成績中第一の試驗に於ては螟蛾となる可き蛹僅に五頭、第二に於ては十一頭。幼蟲一頭、由之觀之、現在螟蟲六十頭に對し、敵蟲に斃されしもの三十九頭、生存せるもの僅かに二十一頭、敵蟲の効質に偉大なるを知る可し。右の試驗は單に一部の事なれば廣く一班を推究し難しと雖ども、又有益蟲の力大なるを証するに足るかと信ずるなり。然れども讀者に對し、此調查杜撰の譏りを免れずと雖ども、唯繁忙の際一部を報導したるものなれば、幸に諒とし以て讀者諸氏に深く硏究を冀ふ所なり。

前記寄生蜂は當時結繭して蛹化せるもの、及び宿主たる螟蟲の軀肉を辭し去て莖中に出で結繭中のものもあり、又螟蟲一頭に對し寄生蜂一頭のものもあれば、數頭寄生せるものもあり（勿論種類は異なれり）、繭の淡黑色のものあれば白色或は淡褐色のものもあり、孰も之を飼育せしに數日の後羽化小蜂を得たり、其種類は五種にして、一々記するは無用にあらざるも、そは他日に讓り茲に大要を記し讀者に報ず。

◎讀者諸君に望む

蟲廼家蟲奴

我國に於ける昆蟲界を通觀すれば漸次變遷し來り、目下の狀態を以て察すれば、慥かに其度を增したる事は獨り余のみならず一般世人も之を認知する所なり。之れ斯學界の爲め、又國家の爲め誠に慶すべき事とす。然り而して此變遷の結果は、昆蟲學なるもの、種々なる科學に應用され着々其効を見るものあり近時害蟲の驅除豫防より益蟲保護の事に亘り、之が奏効を完からしめん爲めに、國を通じて昆蟲の躰制より發生經過の狀態を研究する人々其數を增加し來り、其良法を發見せんには是非此力を藉らざる可からざる事を認識するに到りたるなり。從て今一面に於て、古來より施行し來りし害蟲驅除の方法として各所に行はれし御札なり蟲送りなりの所謂舊式的驅除豫防あるもの丶狀態を見れば、其の變遷に伴ふて全く迷信的驅除豫防法なりと呼唱され、一般に排斥するに到り之が脫破を爲さんとの聲各所に起り、既に某所に於ては全く之を廢止せし所あるは本誌上にて了知せり。今余は此所謂迷信より起りたりと呼唱する舊式的驅除豫防方法に就て研究するは、強ち無益の業にあらざるを信じ、此所に讀者諸君に向て其が材料の蒐集を大に屬望せんとするものあり。そも此研究を試みんとする要旨を簡單に言へば、果して一般に是認する如く、所謂舊式的驅除豫防の方法が、害蟲驅除豫防上全く無効として排斥すべきものなるや、或は其方法中取るべきもの丶存在如何を究むるにありとす。而して今時斯の如き言を兎角するは甚だ愚笑すべき至りなりと雖も、余は慥に是等に就き研究し置くは後來害蟲驅除豫防の一大方針を定むべき上に於て大に參考とすべき事柄あるを信ずればなり。されば讀者諸君の地方に於て、御札を以て驅除豫防を爲すの方法、或は蟲送り施行方法及び其起原、變遷等に就て調査し、續々報告せられん事を望む。尙終りに望み昆蟲翁が本誌第七卷第七十一號雜錄欄中、昆蟲に關する隨感隨筆（十四）中に記述されし如き、昆蟲に關する俚諺をも共に希望に堪へざるなり。

◎螟蟲驅防奬勵展覽會準備記事（第三）

蟲の家主人

（一六）稻白穗中の螟蟲數　本年九月廿日、稻白穗百莖中の螟蟲を詳細に調査したる所、一莖中平均十五頭强を得たり。其後同月廿六日の調査に依れば、一莖平均十頭强、尙其後十月三日調査の結果は、實に一莖平均漸く七頭許に減ぜり。是に依りて考ふれば、日は一日と他莖に移轉蝕入するの實證なれば、白穗切取は出來得る限り速に實施するを以て利益あることを知るべし。

(一七)切取白穗の槌擊　切取りたる白穗の所分に依り、殆んど無効に期することあり、即ち切取りたる白穗を澤山堆積せば、螟蟲は醱酵熱の爲に外部に這出するを常とす。故に土を堀りて稻莖を埋沒するも、亦螟蟲の這出する患ひありと云へり。茲に於て石炭油を散布して漸く稻莖を燒棄するものあるも、是等の方法は實に農家經濟に戻るを以て、決して奬勵すべき方法にあらず。故に其切取りたる白穗百莖位を一束とし、兼て携へ行きたる槌を以て、地上又は厚き板の上にて百位づゝ打てば、悉く螟蟲を死滅せしむるは容易なりとす。然る其眞藁を堆積肥料等に用ふれば、尤も經濟に叶ひたる簡便なる良法と云ふべし。

(一八)螟蟲の稻莖中に潜伏の數　中野壽郎氏の談話に依れば、淡路國三原郡に於ては、三化生螟蟲は殆んど刈採中に潜伏し居るも、二化生螟蟲に至りては、普通に於て、平均藁中に五頭、株中に四頭、刈取の際に於て一頭は死滅する割合なりと云へり。是等の試驗は各地方に於て、詳細に施行の上續々報導あらんことを希望す。

(一九)螟蟲蛾の燈火に飛集する力を測る理想的試驗法　誘蛾燈に對して、螟蟲蛾が如何なる距離に至る迄飛集するものなるやの問に明答することは、實に容易の業にあらざるなり。先づ光力の種類(普通洋燈、アセチリンガス等)幷に其強弱、螟蟲發生の多寡幷に其遲速、發生地の廣狹、溫度の高低、風の有無幷に其方向、天氣の晴曇幷に月の有無明暗等に關し、決して一樣に論ずることは能はざるべきも、今假に是等の事情は別として、其燈火に集り來る所の力を測るには、海岸又は湖水近傍に於ける、螟蟲發生地を見出したる後、水面に船を泛べ、或は岸を離るゝこと十間、或は五十間、或は百間と適宜に位置を定め、点燈して蛾の來るを俟つも宜しからん。尙別法として廣き田面の中心に、点燈すべき位置を定め、然る後夫を中心点として十間、五十間、又は百間等適宜の距離に圓形を劃し、然る後豫て數百頭の螟蟲蛾を捕へ來り、勉て健康なる雌雄五十頭宛、即ち百頭宛甲乙丙の三組を作り、甲の百頭には翅の左に色素を附着して十間の所に、乙の百頭には右の翅に附して五十間の所に、丙の百頭には軀上に附して百間の所に適宜放置し置き、時期の來るを俟て点燈し、其蛾の來るものを調査せば意外に面白き結果を得るやも計り難し望むらくは是等理想的の試驗法を屢々實施したきものなり。従來螟蟲蛾の飛揚力は意外に小なるが如く想像し得らるゝが、實際に於ては果して如何、大方の諸君是等實驗の成績續々報導あらんことを希望す。

(二〇)被害甚しき筑後地方の螟蟲豫防に就て　福岡縣の老農益田素平氏は、近頃福岡日々新聞に左の一編を寄書せられたるを以て、參考の爲め茲に轉載す。

例年多少の螟害を受けつゝありし我筑後地方の早稲は最早成熟し、中稲も殆んど半熟晩稲も亦出穂し、目下の景況に依れば、早稲には浮塵子の被害多少ありしも、過る卅一年の豊作に比し増收あるも劣る事はあるまじき見込にて、麥等凶作の爲め農家の愁眉は今や笑眉を以て變じたり。加之本年の如き螟害の僅少なる事は、余輩の記臆せし四十餘年間迚もあるまじと思ふ、畢竟昨秋來螟蟲豫防法稲株切斷等に就ては其筋の監督非常に届きしと、一旦縣令の發布ありし稲株掘採を切斷に變更されてより、施行者たる町村長諸氏も競て奬勵せし結果と、昨冬來季候の關係とによるからであると思ふ。一體三化性螟蟲は濕氣を好みて乾燥を嫌ふ性質なるも、昨冬來當春化蛹の頃まで非常に降雨多く、冷氣も加りて濕氣過度の爲め螟蟲生育を害せられ、次で第一回第二回の發蛾期も亦風雨冷氣の爲め發育不良、故に第一回第二回の發蛾期は例年に比し殆んど三周間をも後れ、其後温度非常に高くなり發育十分なりしも、詰り最終第三回の發蛾も亦例年より二周間内外を後れたるにより、從來被害の本場とも言ふ八女郡の西部及三潴郡、山門郡の北部に於ける早稲に就ても容易に穂枯を見ず、是れ第二回と第三回との發蛾の中間に早稲は出穂し、知らず／＼逃げ作法に適したるによるべし。大概早稲の出穂の砌は該蟲は眠期に屬するものなるにより、全く早稲の莖中には喰入するの螟蟲はなきかと言ふに、間にはなしとも限られず、該早稲の白穂とならざるは三化性螟蟲の第一回の後れしものが點々中節以下に喰入せしにより、矢張穂には顯れざるものあらん。是等の事は本年の實況によれば、或は地方によりては簡便有益の螟蟲豫防法たる、稲株切斷を不必要と唱ふる者もあるとのことを聞く。我國農民の短所として、兎角今の世に於て格別必要ならざる舊慣を墨守し、嶄新有益の事を實行するに躊躇するの風あり況してや螟蟲豫防の如き公共的事業に於ては、尙能はざると多し。稲株切斷は實に公共的事業にして、其効果の著しきことは、余が數十年來の實驗に徵し疑なきは、一般農家も亦認めて、今や漸く一の良習慣と爲さんとする曉において、本年害の薄きを口實として萬一該切斷を中止する事共あれば、國家の不幸此上なき次第にして大嘆、隨分込み入たる事なれば、普通の農家にては解せざるもの多からん。又三化性とても必らず三化するに限らず、二化して後其年は其儘越年して翌年に害を殘すものもある、是は過る三十三年余か佐賀縣へ奉職中發見し、幸ひ當時同縣巡回の大塚九州支場長へも實地及實物を一覧に供したり。前陳の如く三化性の二化の儘越年せしもの、本年とても間々之あるべし、目下第三回の害を受けるものは中稲（二百十日頃より二百廿日頃にて出穂の分）にして、點々白穂又は半熟の穂となる。第一本年輕き害の内にても割合に多かるべきは三潴郡及八女郡の西部、其他山門郡の幾部、三井郡の南部の地にして、晩稲に白穂又は莖穂を生ずるなるべしとおもわるゝも、當年だけは損害と言ふ程の事には至らず、大概二十分の一乃至三十分の一位のもの多からん。然るに息を爲さゞるを得ざる次第である、廢止するは易し、眞實に再行するは難し、若し良習慣となるにあらざれば必らず將來に於て穂先のみを拔きとる等の形式に流るゝ悪弊を生ぜん。先覺の確言に、驅除の百分は豫防の十分に如かず、又油斷大敵とは此等の事を言ふならむ。該蟲を豫防するは、恰も國家が其の國の安全獨立を保護する爲常に、陸海軍を備ふると同じ道理にて、該蟲の蕃殖を防ぎ得べきだけの常備を成し置くは、稲作保全の上に欠くへからざることである。

◎稻の害蟲クロクサガメムシの驅除法

第八回全國害蟲驅除講習修業生　和歌山縣　大野宗一

昆蟲世界第五卷第五十號の口繪に其圖を載せ、次號に於て名和梅吉先生が「多く九州、四國、紀伊地方の稻田に發生して痛く作物を加害するものにて、農作上特に注意をべき害蟲の一とす云々」と說かれたるクロクサガメムシは當地方言クロマナゴと稱し、年々其影を見ざるなく、本年も亦夥しく、目下孵化時代なり。

該蟲の驅除法に就て未だ完全良好なる方法を發見せられざるもの丶如し。驅除劑、捕蟲器を用ひ得べくと雖も、寧ろ手を以て一々驅除するの經濟的にして、安全に且周到なるに及ばざるは予の確く信ずる所なり。殊に幼童婦女子の作業として尤も適當にして、枯莖切取の如きよりも尚易々たればなり。

稻稍成長して尺に至る頃、日暮風に乘じて山林より群をなして飛來るや、加害中は毫も飛散するなく、重に日中は稻株の下部水に接せる邊に潜み、大陽西に傾く頃葉先に出づ、擧動活潑なれども抵觸すれば死を眞似て水上に落つ。

之を驅除するには、靜かに葉上のものを捕殺して後株中を探索すべし。該蟲は少時間水中に潜む力ある故、根部には特に注意を拂ふべし。採卵は尤も必要にして其効多大なれば是非行はざるべからず。產附の場所は一定せず、葉の表にあるあり、裏にあるあり、上部にあり、下部にありて甚だ不規律なれども卵子は二列併行にして其數大抵十四なるもの丶如く、又は二乃至三塊同所に產附しある事もあり。之が驅除は指先にて捻殺するが第一早けれども、多く捻る時は指先樺色となり痛みを生ずる者なれば、摘採して麥酒瓶の如き器に投下するをよしとす。

該蟲驅除上鶩を使用するは當地方に於ける近來の流行にして、實際効驗あるものなり。されども親鳥は田螺、鰌の如きものを餌りて椿象には餘り目を着けざれども、雛はよく捕食するものなれば、之れを以てするを可とす。又假令捕食少量なるとも水田に浮遊さすれば、株の下部に潜める該蟲は、自然上部に出で來るものにて、驅除するに甚だ便利を感ずるものあり。然れども彼にのみ放任せずして、己が助手として共に〳〵勉めざるべからず。然して彼は鷄と等しく農家の副業として利あるものなれば、一家各數羽を飼育して一擧兩得の益を得られたきものなり。尚一步進んで一區內共同飼養し、驅除上に使用するの法を設けなば又妙ならんか。

尙一言すべきは、捻殺の際液汁の眼に入らざるやうにする事なり。若し誤つて入る時は痛み甚だしく、嚴しきは一週間以上も癒へざる事あり、呉々も注意すべき事にこそ。（八月一日稿）

編者云、該蟲に就ては本誌第二卷第十六號に於て中川久知氏の詳說あり、特に其卵子寄生蜂の如きは最注意を要すべき事なりと信ず。而して大野氏の驚使用云々は却て稻作に害あらざるなきやを疑ふ。尙其他に於ても該蟲發生地方の諸氏は十分なる試驗と觀察を以て研究せられんことを望む。

◎薄荷の一大害蟲なる青蟲の幼蟲に就て

備後國福山東町　山田惠喜太

我が三備地方は、奧羽地方と共に貿易作物なる薄荷の本場とも稱すべき地方なるが、三番草に青蟲發生し、本年は殊に猖獗を極め、一坪內に數百疋と云ふ有樣にて、青葉を食害し甚しきは中肋のみとなし、其の損害鮮少ならざるを以て、至急標品を具し、東京西ヶ原農事試驗場宛種々問合せしに、小貫學士の調査により名稱、科名、驅除法等直に應答を得たれば、斯學研究者の參考の爲め左に附記す。尙本害蟲の經過につきては、試驗場に於ても經驗なきを以て詳報するを得ずとの事なりしが、將來薄荷の害蟲として研究すべき價値あるものと信ずるを以て、予は目下飼育實驗中なり、何れ詳報すべき時あらん。幸に斯學研究の爲め、本蟲御入用の諸君へ御通知次第直に送附すべし。

科名及名稱　本蟲は鱗翅類夜盜蟲科擬尺蠖亞科に屬するものにして、稻大青蟲に頗類似せるものなり。和名は薄荷の青蟲とも稱すべきか（小貫學士調査）。

發生　早は九月上旬、晩きは下旬頃孵化す。生育盛なる薄荷に多く、殊に人家の周圍等陰濕の地に多し。

形態　孵化當時は綠色を呈すれども、漸次黃變し、蛹化前には半透明の帶綠淡黃色となる。蛹化前は一寸二三分の長さとなり、直徑二三分の太さとなる。十二個の關節より成り、背面に六條の白色線あり。氣門線は帶黃白色を呈し太くして明亮なり。九對の氣門を有す。脚は鉤狀の胸脚三對、吸盤狀の腹脚二對、尾脚一對合せて六對を有す。口は咀嚼に適し、口邊に一對の觸鬚あり、全身處々に微毛を存す。

驅除　幼蟲、蛹を採取し、又朝露の有る時除蟲菊粉一、石灰四（容積）の混合粉を散布せば有効ならん（小貫學士の說）。

編者云、該蟲はPlusiidaeに屬するものにして、常に胡羅蔔に發生して其葉を甚しく食害すれば、同植物に就ても注意せられよ。特に奇態なるは此螟蛉一頭に寄生する微細なる蜂は常に數千頭なるにあり、こは一頭の母蜂の產附するものなりや、又數頭の產附せるものなりやは疑問なり。當所に於ても是等試育研究中なれば追て報告する時あるべし。

◎博覽會出品害蟲標本及調査解說書（三等賞）

香川縣農事試驗場

解說書

部類	番號	品名	出品人
一八	一	害蟲標本	香川縣農事試驗場

材料　此標本は明治三十三年四月より同三十四年七月に至る製作にして、何れも農家に慘害を與へつゝあるは論を俟たず。而して其害蟲は概ね本場の耕作地、其他附近の田畑、或は草間に於て採集したるものにして、之が飼育の結果によるものあり。

審査請求の主眼　近來害蟲の多く發生するに伴ひ、世人其恐るべきを漸く覺知するに至れりと雖も、今尚頑迷固陋の輩は、往々害蟲の多くは自然地中より湧出するものゝ如く、飽く迄之を墨守し、敢て疑惑を解するの意なく、徒らに魔術的に發生する者と誤解し、遂に其繁殖蔓延を看過し、一朝其猖獗を極むるに至りて、狼狽唯に其驅除を神佛に依賴するの愚を演ずるものあるを見るは、怪訝に堪へざる所なり。故に此標本を世に紹介し、以て斯る人智未熟の輩に、一般の害蟲は必ず親ありてこそ初めて生じ、斯る經過習性の基に發生繁殖出顯するものあることを確信せしめ、強て之が害蟲の志想を惹起せしめんとするものにして、且一方に於ては本縣下に於ける害蟲發生の一端を知らしめ、農用昆蟲學攻究の資に供せんとするにあるものにして、即審査請求の主眼とする所なり。

解說書

部類	番號	品名	出品人
一八	二	二化性螟蟲調査表	香川縣農事試驗場

材料　二化性螟蟲調査表は、本場稻田に於て發生したる二化性螟蟲に付て之が調査を爲したるもの也。

圖解　一、螟蛾点火誘殺數調査表は、專ら本種害蟲驅除の爲め、其一法として苗代及本田に於て誘蛾燈を点じて成蟲（蛾）を誘殺し、併せて該蟲の發生時期をも精査し、以て驅除法を施行すべき時期を確定せんとするにありて、稻田中に一個の誘蛾燈を裝置し、之に毎夜燈火し翌朝捕蛾の數を調査したるものにして、明治三十三年より同三十五年に至る三ヶ年間經續調査の結果なり。一、螟卵一塊の卵數調査表は、專ら本種害蟲の雌蛾が苗代に於て產卵したる卵塊を採集し、之が各個の卵數を鏡下に調査したるものにして、其多寡により害の增殖程度を知り、以て之が豫防の一として益確信せしめんとするにあるものにして、即明治三十四年より同三十五年迄二ヶ年間經續調査の結果を示すものなり。一、螟蛾の誘蛾燈に飛來時刻調査表は、專ら本種害蟲の成蟲（蛾）が夜間何時頃最も多く誘蛾燈に飛來するかを知らんが爲め午後七時半より点火し、其れより十二時迄は一時間每に（但し七時半より三十分間は八時に調査したり）又十二時後は翌朝に於て其誘殺蛾數を調査したるものにして、即明治三十四年より同三十五年に亘りて調査したる結果なり。

審査請求の主眼　二化性螟蟲の本縣下に於ける第一回及第二回の發生期、並に其採卵、點火誘殺すべき時期、及夜間何時頃尤も多く誘蛾燈に飛來するかを知らしめ、点火すべき時刻を明かにし、且螟蟲一塊の卵數は凡そ幾何あるやを示さ、其尤も恐るべきを知らしめ、以て該蟲の驅除豫防をして充分其効を奏せしめんとするにあり、之れ審査請求の主眼とする所なり。

解　說　書

部類	番號	品名	出品人
一八	三	三化性螟蟲分布圖	香川縣農事試驗場

沿革　本場に於ては明治三十三年九月、在勤技手縣下各郡を巡視の際、綾歌郡畑田村に於て三化性螟蟲を確認したるものにして、實に本縣下に於ける發見の嚆矢とし、其發生の由來系統は得て知るべからず。而して該蟲發見以來、續て技術員を出張せしめて之が各所を調査せしめたる結果、大川、小豆の二郡を除くの外何れも其發生を認め、就中被害の著しかりしは香川郡池西、大野、佛生山、木田郡三谷、綾歌郡畑田、千疋、三豊郡財田の町村にして、其他の發生の村落に於ては其被害の程度概ね相伯中せり。

本場に於ては爾後年々繼續し、其發生の狀態及分布等を調査しつゝあるものにして、即ち三十四年は前年に比し稍發生の少なかりしやの感ありしと雖も、殆ど相彷彿たり。三十五年は單に三豐郡を除くの外一般極めて發生少く、殆ど被害を認ざる程にして、其發見の當時より今に至る迄元より其發生の多少はあると雖も、新たに發生侵蝕の町村を認めず。是即其以來蔓延の增加を認めざるものにして、此の分布圖は既往三ヶ年間調査の結果によるものとす。

審査請求の主眼　本縣下に於ける三化生螟蟲は今や幸に其發生全部に亘らざるを以て、著しき慘害を見るに至らずと雖も、此時に際し等閑に附すれば他日甚しき蔓延を來たし、大に慘害を極むる非境に陷るべし、依て農家は其未ざ事の小なるに臨んで、其現在分布の狀態を明りにし、今現に發生地は之が益驅防に努め、其發生地の附近及其他に於ては飽く迄其害蟲の侵入を未發に防遏するの覺悟あらしめんと欲するにあり。これ審査請求の主眼とする所なり。

◎博覽會出品害益蟲標本解說書（三等賞）

兵庫縣　東鄕隆次

部類	番號	品名	出品人
一八	一	害益蟲標本	兵庫縣神崎郡船津村　東鄕隆次

製造地　兵庫縣神崎郡船津村。

採集地　兵庫縣下。

製造用品　器具には捕蟲網、採集用携帶箱、毒瓶、展翅板、仔蟲箱、ピン其他雜具、藥品には那布答林、青酸加里、ホルマリン液、酒精、アラビヤ護謨、タラカント護謨其他雜品。

製造方法　先捕蟲網を以て採集せし昆蟲を毒瓶中に投じ、或は酒精を蟲体中に注入して殺す。之を標本に仕上ぐるには卵及蛹は熱殺し、幼蟲は毒瓶（青酸加里）中に投入し、全く死殁したる後腐敗を防ぐ爲め臟腑を拔き去り、防腐劑を施せし綿若しくは之に代用すべきものを塡充して原形の觀を呈せしむ。成蟲は展翅板に掛けて觸角翅脚を整理し、乾燥するを待ち保存箱に移す。小形の昆蟲にして臟腑を除却するの要なきものは、タラカント護謨にて厚き臺紙に粘附す。

沿革　明治三十年害蟲稻田に發生し、非常の慘害を來し、上下之が驅除豫防に狂奔すと雖も、昆蟲に

關する知識未だ一般に幼稚なるを以て充分に其効を奏すること能はざりき。爰に於て余は昆蟲研究の志を起し、我郷里及郡內に於ける諸種の蟲類を採集し、昆蟲に關する書籍に對照して日夜研究したりと雖も未だ其目的を達すること能はざりき。偶、岐阜縣に名和昆蟲研究所起り、雜誌昆蟲世界を發行せらるゝに及び該誌を購讀し、該所發行の圖書について研究を重ね、三十四年同所開設の講習會に出席し大に得る所あり、其後昆蟲採集の範圍を縣下に及ぼし、名和氏について質疑研究を重ね、以て今日に及べり。

効用　昆蟲の農作物に及ぼす利害の重大なる事は今更喋々を要せず、近時漸く此思想の一般農民に普及せんとするは大に喜ぶべき現象なりと雖、益蟲と害蟲とを區別し、或は是等を驅除保護するの法に至りては未だ幼稚なるを免れず。此時に當り之が指導をなすもの、徒に言辭のみに依る時は聽者に感動を與ふること容易の業にあらず、若し之を補ふに害益蟲の標本を以てし、且つ實物に依て其の變遷を示す時は聽者の頭腦に印象を刻すること深く、從て驅防の方法を勵行するに躊躇せざるべきは信じて疑はざる所なり。然らば即ち昆蟲標本の農業界に大効ある事は敢て多言を要せざるなり。

審査請求主眼　害蟲の驅除豫防を全からしめんと欲せば其の發生經過を知らざるべからず、故に余は重要なる害蟲に付ては各時期の狀態を炳然たらしむる爲め其順序を駢置し、其の有益蟲は保護すべきことを知らしむる爲め重要なる種類を集め、且つ自家の飼育研究したる寄生蜂をも示したり。而して標本は凡て昆蟲學上の規準を守り必ず雌雄の別を示し且つ其配列製作保存等に大に注意を加へたり

◎博覽會出品害蟲標本解說書（三等賞）（續）

靜岡縣　神村直三郎

一、飼育方法及器具　完全の標本を得んにも、亦變体經過を知らんにも飼育をなすの必要あるを以て余は左の方法に於て飼育を試みたり。第一は箱內飼育あり、これは多く鱗翅類に用ふ。先づ方一尺、高さ二尺位の行燈形の箱を製し、前面にグラスを嵌めて開き戶となし、後面は堅固をはかるため板を以て圍ひ左右をば寒冷紗を以て張り、下に抽出しを付け置くあり。此中へ一個の小瓶を据へ、これに水を湛へ、食草を挿し、幼蟲を放つ。水盡くれば加へ、草枯るれば代へ、其抽出しに積る糞粒は時々之を排除するなり。小形の幼蟲に至ては此箱に代ふるにグラス蓋の小箱を以てするも亦ランプホヤの兩端を寒冷紗にて覆ひたるものにても可なれども、斯くては食草を日々取り代ふるの煩あれば余はこれを取らず、尤も繭を作り、蛹と化したるものゝ羽化を待たんには至極簡便なれば、專ら此法を用いたり。斯くて箱

内にて幼蟲の老熟したる時は繭を營むものあり、又天蛾類等は其色彩に變化を現はすべければ、此際濕砂を盛りたる化蛹器に移し化蛹せしむ。此器は幅四寸、長六寸、深さ三寸位の木製にして、不絶濕氣を與ふるを要す。此器の蓋はグラスを可となす。一器一種を限り、其品名を記し置くべし。一定の時日を經過すれば羽化し出づ。次には瓶内飼育あり、甲蟲類、有吻類の幼蟲にして地中にあるものは、これを瓶中に養ふなり。其法は濕砂を瓶に盛り、幼蟲を放ち、食物の知られたるものは之を與へ常に平等の濕氣を保たしむるを要す。かくすれば化蛹し、次で羽化するものなり。其瓶内に入るゝ砂は、可成其幼蟲生息の地より取り來る土を可とす。又テッパウムシの如きは其幹部を切り取り、根部を淺水に浸し置く時は化蛹して成蟲に化せ。此外貯穀の害蟲の如きは、少しく空氣を通ずるの裝置をなし置く時は、グラス瓶中にても充分の經過を見るを得るものなれば、予は此法を用ふ。

一、製作法及藥品器具　（一）展翅式、鱗翅類の成蟲及蜂などの如く、開翅の必要あるものを展翅板よ上せて製作するの法なり。此展翅板は桐の板の中央に溝を設けたるものなれど、普通のものは一木を以て中に溝を穿ちたるものあるを以て、其溝中よ針を植つること數々なれば遂には破損するの恐れあり、因て予はこれを改造して、底部をば横板をうちつけて製したり。其板及溝の廣さは、蟲体よ應じ數種異なるものを要すれども、溝の深さは五分と定む、これは保存箱中に藏むるの便を計りて定めたるなり。其方法を簡單よ云へば、先づ開翅せんとする蟲体に一本の針を背面より胸部に刺し、次よ腹面に一枚の厚紙を添ふ。これは其腹部の下垂を防ぐがためにして、其紙の巾は溝の巾を斟酌して適宜よ定むべし。次に蟲体を溝中に藏め、兩翅を水平に兩堤に擴張せしめ、紙片を以て之を壓しつけ、脚は腹下の紙上に整へ、觸角は翅と水平よ之を整ふ。兩翅を開くの度合は前翅の後緣、左右一直線をなすを度とす。後翅は殆ど全部を見得る程となす。されど此法よして美的形態を欠くの觀ある時は、上下に斟酌をなす。かくてこれを乾燥箱に收むるにあたり、其採集年月日、及飼育に係るものは羽化の年月日を蟲の傍に記し置き、充分乾燥の後、又これを復面に添へたる厚紙の裏面に轉記するなり。此時採集地名を記入して置けば、大に後の參考となる。此年月日及地名を記入することは、以下の製作法よ於ても皆同樣なれば一一記さず。

（二）貫針式：大形の甲蟲類及バッタ類には此式を用ふ、甲蟲は右の鞘翅の前胸よ近き處に針を貫き、直翅類は甲蟲の如くなすもよく、又前胸部中央に貫くもよし。此式に於て最も重きを置くは脚の整理

なるを以て、予は展翅板の如き桐の板を用ふ。此板に二分若しくは三分の深さに極めて細き溝を穿つ此溝中に針尖を收めて板上に蟲体を安置し、留針を以て其脚を整ふるの意の如くならざるはなく、角を整ふるにも此の不便なし。天牛科の觸角は後方へ背面を走らする時は、固く縮りて位置を保つの便なり。直翅類は此際貫針の前に當りて其腹部を切開し、汚物を排出するを要す。然らざれば變色腐敗の恐れあれば、予はつとめて之を出せり。

（三）貼附式、小形の種類を厚紙の臺紙上に糊付となすの式なり。紙は名刺の用ふるものにて足り、糊はダラカンドゴムを用ふ。これは塊狀のものと粉末のものとの兩様ありて、予は粉末のものを用ふ、其の溶解速にして曇りも少し。これが腐敗を防ぐには昇汞水若しくはナフタリンを用ふ。後者の場合はナフタリンを粉末となしゴムの粉中の加ふ。かくて水を注入して溶かすの數十日の後尚些しも變色を見ず。さて蟲体を貼附せんとするには、先づ毛筆を以て前記の糊を紙上に塗り、其上にかねて觸角及脚を整へたる蟲体を据へ、柄付針を以て姿勢を整へ、開翅の必要あるものは此際翅を開張す。乾燥後は臺紙の形狀を正し、蟲体の後部に針を貫き、尚裏面よりアラビヤゴムを以て固定す、年月日等を記すは裏面なり。

（四）吹脹式、幼蟲の製作に用ふ、先づ内臟を肛門より出すに腸の一部脱肛せるを少しく殘して切り、徐々に汚物を採み出す。次に吹脹器の一端に附しあるグラスの細管を肛門より挿入し、其殘し置きたりし腸の一部を絹糸にて括るなり。次に酒精燈上の翳して徐々に空氣を送り乾燥す。後管を抜き取り臺紙上に固定す。其固定法種々あれども、皆効を奏せず。因て予は仔蟲の脚を眞綿の如き纖維にて纏ひ、其纖維の端を長くし、紙上に貼附して試みしの大の効あり、動搖するも轉落の憂なし、今回出品の固定法は全く此式によれり。

一、乾燥及撰擇　以上製作したる標本を乾燥するには、余は乾燥箱なるものを用ふ。そは普通の保存箱より稍深き箱を備へ、底部全面の多量のナフタリンを散布し置き、展翅したるもの、其他の標本を此箱中に收めて乾燥するなり。此法によれば、比較的迅速に乾燥し、又肥大の体を有するものにても腐敗等の恐れ更になし。多數の標本中其種類を代表するに恰當なるものを撰擇するの必要を感じ、大小種々あるものは其中間大のものを採用し、又氣候によりて變形の著しきキアゲハテフの如きは、其春生、夏の兩種を採りたり。其他凡ての種類、雌雄によりて大小の差あるものはこれを現すにつとめ、斑紋、光

澤等あるものは其全部をしかも鮮明に、完全に、且美術的に觀者をして滿足せしむることに努めたり。（未完）

◎昆蟲に關する葉書通信（第三十四報）

（二〇一）昆蟲小實驗（丹後國宮津町大黑山別莊にて、田中五一、同健太郎）　余等二人廿三日の朝、枳殼の木より鳳蝶の幼蟲を採集し來りて之を羽化せしめんと、蚊帳の中に入れ置きしに、一頭のクヒキリバッタ入り來りて幼蟲の尻に喰ひつきたれば、幼蟲は臭き角を出したるも、遂に次第に喰はれたり。それより其以前キリギリスの飼料に、死したる蛾又は小さきネギバッタを與へけるに、皆喜びて喰ひけり（八月廿六日附）

（二〇二）稻の枯莖切取數（羽前國北村山郡、村山榮太郎）　本郡に於ては、今夏第一回螟蟲驅除として被害稻莖を拔除せしめたるに、二十四ケ町村の內、最も多きは五十四萬莖以上に達し、總數二百七十餘萬莖に及びたり。而して本月一日より三十日迄、第二回の驅除を施行することとなり居れり（九月四日附）

（二〇三）岩手蟲信第一回（岩手縣農事試驗場內、好園坊）　本縣の昆蟲學者鳥羽源藏君は、頃日早池峯山に採集を試み、兼て花と蟲との關係を調査せりと。定めて珍しき報導に接するを得ん○苹果は綿蟲少く、結果宜し、人は春來高温の致すところなりと唱ふ。須く研究すべき問題なり○縣下上閉伊、紫波の兩郡に、粟夜盜蟲發生し目下技術員出張驅除督勵中。（九月五日附）

（二〇四）穀倉に於ける蟲害豫防法（愛知縣、田中周平）　愛知縣寶飯郡萩村長白井德右衛門氏の實驗せし良法ありと云ふを聞くに、同氏は數年前に考案をめぐらして穀倉を二つ設け置き、隔年に之を使用す例へば初年收穫の米をば甲倉に貯藏し、次年收穫の米をば乙倉に貯藏し、此次年の米の貯藏の頃には、初年の米をば殘りなく賣り盡して甲倉の貯藏なからしむれば、第三年目に收穫したる米を甲倉に藏する迄、一ケ年間に害蟲餓死す。故に同氏の貯穀は穀象蟲、穀蛾等の被害これなしとぞ。麥其他の穀類をも右甲乙二倉の內へ、右の順序によりて貯藏し居るといふ。（九月十六日附）

（二〇五）日光白蝶の一產地（東京、岸田松若）　昨年九月十日、東京府南多摩郡高尾山裏山におゐて、ニックワウシロテフ一頭採集せり。遲蒔ながら本年は友人採集に行きたれど見當らずと。（九月十七日附）

岩田君、君が友人は何月採集に行かれしや、該蝶は土地の氣候により多少の差異はあれど、五月中旬頃最も多く發生すれば其頃採集に行かれよ、必ず獲る處あらん。尚一言望むらくは、今後書信に於て宿所を明記されんとを、これ調査上非常に困難なればなり。（分布調査主任白す）

（二〇六）兵庫縣明石郡伊川谷村の蟲報（兵庫縣、井上藤太郎）　挿秧後一時甚しかりし螟蟲も、驅除勵行の結果、其害稀少にして好都合なり。之に反して浮塵子は、初發以來相當の驅除を施行せしも、目今に至り晩稻は被害最も甚しく、二三割の減收を見るに至るべき個所多々あり。（九月十六日附）

（二〇七）京都府與謝郡市塲村の蟲報（京都府、山崎久藏）　一般稻作は良好にて豐年の聲高く、農家は之等に甘じて、除草後一向に本田の巡視を怠り勝にて等閑に付し、九月上旬即ち出穗當時に至り害蟲の飛行するに驚き、周章狼狽して其れ〳〵驅除をなすの有様、一向効力も顯はれず、又今年も半作とて喞つの農家多し、誠に嘆ずべきことたり。當地方にて蕃殖盛なる蟲種はイナヅマヨコバヒ、ツマグロヨコバヒ等にして、目今ヒメトビウンカ、トビイロウンカ等發生せり。（九月二十三日附）

（二〇八）北勢地方の蟲報（三重縣員辨郡丹生川村、富田覺之助）　我三重縣南勢地方は浮塵子多少發生せるも、北勢地方は殆んど發生なき姿にて、少々の發生も先日の風雨にて撲滅せるが如し。昨今稻の害蟲としては、唯少數の二化生螟蟲あるのみ。（九月三十日附）

（二〇九）大風と昆蟲採集（在東京、長野菊次郎）　前略、大風と昆蟲採集てふ問題を解せり。即ち其前日は非常の大風雨にてありければ、樹木の梢に居りて、到底樹下よりは如何ともなし難き幼蟲も、大低地に拂ひ落され、思はず幼蟲の採集をなすことを得たり。其節トネリコを食する烏蠋の一種も手に入れり。此等は皆大風の御蔭なりとや云はん。（九月二十七日附）

（二一〇）八町蜻蛉の分布と黄紋鳳蝶（鳥取縣東伯郡瑞穗村、竹信虎藏）　予は昨年九月、昆蟲世界第六十一號口繪を見て以來、八町蜻蛉が吾が鳥取縣には分布し居らずやと、常に注意せしに、友人東伯郡服部村石亀一郎氏が、本年（月日不詳）居村田畔に於て雄一頭を捕獲せりとて予に示されたり。之を右口繪のそれと對照せしに、一の違ふ所なく全く其のものにてありき。依て同蜻蛉が本縣に分布し居ることを確めたり。」黄紋鳳蝶の發生は本郡に甚だ多く、昨今に至るも尚飛翔するを見たり。本郡にては之を新種として貴重することとなるが、直に新種なるか將た昆蟲眼發達の結果近來之を見ることを得るに至れるか

疑はし。該蝶に就てプライアー氏は雌は中々稀である（本誌第六十二號）如く書かれたる由なれども、予が本年採集せる拾數頭の中、雄は僅に一頭あるのみにて他は悉く雌なりき。（九月二十八日附）

編者云、君の新種なる語は、新來種と云へる意なるが如し。果して然らば、恐らく貴說の如く昆蟲眼の發達せし結果なるべし。雌雄云々に就ては、凡て蝶類を始め、昆蟲の多くは皆雄蟲の多くして雌蟲の稀なるは、昆蟲學者のみならず一般の認むる所なり。さは云へ發生の時期により非常の差異あれば一樣には斷言すべからざれば、常に採集して其平均を採らざるべからず。望むらくば其雌蟲二三頭贈られんことを。

雜報

◉本號の口繪に就て

第十版圖は瓢蟲女史の筆になれるものなり。同女史は從來圖書係補助として、屢々本誌挿圖の原圖其他の揮毫に餘念なかりしが、本誌第六十四號の殘菊の蜂語中にも一寸それとはなく記されしが、女史は本年二月、未來のエントモロギストを此世に紹介し、女史が社會に對する義務を盡されたのは誠に目出度い、之が爲久しく執筆されなかつた、されど此頃當所は博覧會の出品物やら、又出版物の事で、圖書係主任が非常に多忙の爲、其勞を助けんとて揮毫を試みられた謂所女史が本年の試筆とでも謂ふべきものであるから、茲に口繪として掲げた次第で、別に意味のあることでない。

◉山梨縣下に於ける昆蟲學講習會景況

山梨教育會は當昆蟲研究所助手小竹浩氏を聘し、八月二十三日より縣下五箇所に於て昆蟲學講習會を開設せり。今其概況を記さんに、甲府市を始め北巨摩郡韮崎町、西八代郡市川大門町、東山梨郡日川町、南都留郡谷村の五箇所に開會し、講習員は教育者を始め實業家其他有志者にして、一個所會期五日間とし、午前八時より正午十二時迄は昆蟲學大意、害蟲驅除並益蟲保護法昆蟲採集幷に標本製作法等の講話をなし、午后一時より三時迄は野外實習を試み、各自採集の蟲類若くは已に採集しありし標本に付質問應答し、皆熱心に研究せられたり。而して甲府市に於ては講習員八十七名中証明書を授與せしもの七十五名内女十二名、韮崎町に於ては講習員百十八名

中証明書を授與せしもの百七名、市川大門町に於ては講習員百二十六名中証明書を授與せしもの百十三名内女二名、日川町にては講習員七十七名中証明書を授與せしもの五十九名内女二名、谷村に於ては講習員六十八名中証書を授與せしもの三十名なりき。而して尚同縣東山梨郡七里村實業青年會は、山梨教育會の昆蟲學講習會を機とし、九月廿一日より五日間昆蟲學講習會を開きしが、會員は主に實業家にして、會場の都合により毎日午後一時より五時迄昆蟲學大意、害蟲驅除法並益蟲保護法等を講習し、小竹氏又講師の任に當れり。而して講習員六十二名中証書を授與せしもの五十五名なりしと云ふ。

◉硫曹館昆蟲標本出品に對する賞狀

第五回内國勸業博覽會に於て、大阪硫曹株式會社は、其場内に特別陳列館を建設し、硫曹肥料の原料、藥品、製品等は云ふに及ばす、同肥を施用して栽培せし農產物を始め、苟も農事に關係あるものは悉く陳列せられたるが、當昆蟲研究所よりは農作物害益蟲標本を始め分類標本、昆蟲標本製作順序標本、鞘裝式標本、蚕の發生經過模形、昆蟲廻轉器、害蟲圖解、日本昆蟲分科表、害蟲驅除器等を出品せしが、先月廿四日、岐阜縣舊縣會議事堂に於て、岐阜縣出品者に對し賞狀授與式を行ひ當所へは上部に示せる如き賞狀に銀盃を添へ贈られたり。

賞狀

一昆蟲標本各種

名譽賞銀盃　三ツ重　壹組

右ハ第五回内國勸業博覽會場内弊社陳列館御出品ニ對シ特定審查委員ノ審查成績及觀覽人ヨリ募集シタル投票得点ニ依リ其精良ナルヲ確認シ前記ノ賞品ヲ贈呈シテ貴下ノ御譽ヲ表彰致候也

明治三十六年七月

大阪硫曹株式會社

名和昆蟲研究所長名和靖殿

◉女子に對する昆蟲講習の嚆矢

當所が是迄昆蟲に關する講習に與りしは、實に七拾餘回五千餘名に修業証書を授與したることあるも、悉く男子を以て主とし女子を主としたることなし唯一度六十餘名の多數なる女子の加はりし事ある

も、是又女子を主としたるに非らず、其他ハ稀ょ數名乃至十數名の少數に止まれり。彼の實業に熱心なる代議士井上甚太郎氏より、當所の主催にて、女子を目的として講習を開けとの忠告を受けしことあるも、目下の如き不充分なる、當所の到底出來得べからざることを信じて、未だ其運ひに到らざるあり。然るに常に是等の点に注意せらるゝ市立名古屋高等女學校長甫守謹吾氏は、今回同校卒業生の組織ょ成れる松操會の主催にて、昆蟲學講習會を開設せられしに、會員一百八十三名の多きに達し意外の盛況ありしと云ふ。是れ全く今回を以て、女子に對する昆蟲學講習の嚆矢とせり。今其詳細を別項ょ記さん。

◉**女子昆蟲學講習會の景況**　前項ょ記せし名古屋松操會の主催に係る昆蟲學講習會は、從來の講習會と稍其趣を異にし、毎日曜日に開會せり。即ち九月一日其端緒を開き、同月廿七日及十月四日の兩日に於て、昆蟲學大意より昆蟲採集法、標本製作法等を話し、兼て家庭教育幷に家事と昆蟲の關係を說き、尚螟蟲及浮塵子等の恐るべきを說明すると同時に白穗莖中ょ潛伏せる螟蟲の多少、大小等を各自に調査せしむる等、專ら實地に就て講習し、終て修業証書授與式を擧行せり。証を受くるもの百八十三名、斯くも多數の女子にして熱心に、各自競て研究せられしは、斯學の爲、否國家の爲賀すべきことあり。何れ十數年の後には、大に見るべき好果を得るならん。今會員總代十時なつ子の朗讀せられし答辭を左に掲ぐ。

答辭

我等がため茲におごそかなる式場を設けられ名譽ある來賓臨ませたまふ御前にて會員傍聽生合せて百八十三名にめで度第六回女子講習會修了證書授與せさせ給ひあまつさへ會長の君講師の君よりはいとも懇なる御諭しをさへ蒙りぬ我等が幸何かはこれに過ぎんそも此度の講習はとかくに我國女子の理科思想に乏しく且つ自然に遠ざかるを以て其一端を補ひ此第廿世紀における完全なる日本女子たらしめむとの深き會長の君の御心つくしによりて開かれ其科目も材料豐富にして研究に便なる昆蟲學科を選ばれ斯道もて世に聞ゆ高き名和先生を講師に仰ぎまつりしたしく御講話承る事となり講師の君には公私御多忙の御なかをも御身をさへ常ならずおはしますなるをつとめて本會の爲臨ませられいとも懇に教授の勞をとらせ給ひし深き御なさけいつの日にか忘れ參らすべき。

あはれ本會も今を限りにとざるゝかと思へばいとゞ名殘の惜まれて答へまつるべき言の葉も知られど定めの時に限りあるを如何にせんたゞ此上は今日の御さとし言を深く心にしるし受け得にし御教へを基とし自然としたしみいよいよ斯道の研究をつみ圓滿なる人物となり世に立ち家を治め子女を導びくなどよろづの上にこれを應用し此限りもなく極みもなき御惠みの萬が一にも報ひたてまつらん事をひたすら誓ひまつるにこそ。」會長の君講師の君には國家のため御身いたはらせ給ひていやが上にも榮えさせたまへや嬉しさ忝じ

けなさのあまり拙き言の葉をもかへりみず講習員一同に代り謹みてあつき御惠みを謝したてまつるあなかしこや

明治三十六年十月四日　　第六回女子講習員總代　十時なつ

因に記す、式後一同撮影し、講師より寄附の昆蟲に緣みある物品貳百餘点を各會員に分配せられしと。

◉蟲入琥珀に就て　古代に於ける昆蟲の標本を、當所常設の昆蟲陳列館に陳列せんと苦心せる折柄、漸く米國理學士桑名伊之吉氏の寄贈に依りて平蜻蛉の化石を陳列するの幸運に到りし顛末は、本誌第六十號の講話欄に記せり。其後千葉縣の高橋徹一氏は本誌第六十二號雜錄欄昆蟲雜錄拾遺の内に蟲入琥珀と題して、天賞堂に小蟻並に甲蟲入の琥珀を所持せらるゝの記事ありければ、直ちに購入方照會したるに、種々なる相違を來したる爲購入を見合するの不幸となれり。其後頻りに人造蟲入琥珀の說出でゝ購入の際注意を要すべしとのことありしより、大垣中學校敎諭森宇多司氏は兎も角一度試驗せんとてカナダバルサムの溶解中へ種々の昆蟲を挿入して硬固ならしめられしに、一見蟲入琥珀にて、相當に琥珀を知れる人にても直ちに人造なることを發見し能はざる程の結果を得られしかバ該標本二個を當所へ寄贈されしのみならず、其製作法の詳細を本年七月四日の岐阜縣昆蟲學會月次會の席に於て講演ありしかば、ろい聽者の已に知らるゝ所なり。然るに此頃京都の玉石商より印度產なりとて象鼻蟲、蠅、蟻、蜂等の蟲入琥珀十數個を送り來りしが、中には實に美麗なるものありて決して僞造とは見えざるも他日之が專門家の鑑定を請ふと同時に、在中の昆蟲を詳細に調査せば其眞僞を知るに到るべし。兎も角是等の標本を蒐集して陳列し置き公衆の縱覽に供せんとす。今茲に示す所のものは、薔薇に生ずる青鼻蟲に最も類似せるものにて、光輝ありて實に美麗なり。此品は是迄多分時計等に附屬して携帶せしものならん。讀者諸君願くば蟲入琥珀に就ての高說並に所持者等を報導あらんことを希望す。

蟲入琥珀の圖

◉螟蟲驅防に關する岐阜縣告諭　螟蟲の驅防上枯穗莖切りの必要なることは、吾人の常に唱導するところなり。これ枯穗莖切法たる、本年の驅除に非らずして明年の豫防に屬すればなり。而して之を施行する上に於て、一日早ければ幾倍の効力を有するや知るべからざるも、若し時期を誤らば全く徒勞に屬するのみならず却て後日に害毒を流すは何れの方法と雖も皆然らざるはなし。茲に岐阜縣知事は害蟲驅除豫防に關する告諭を發せられたれば、左に之を掲載することゝなしつ。

○岐阜縣告諭第三號

農作物の害蟲驅除豫防に就ては再三訓諭する所あり、漸次普及の緒に就きたりと雖も、未だ耕耘と均しく、農事作業の一科として一般に行はるゝの域に至らず。抑害蟲の發生を視又は其の發生を豫知したるときは、未だ其の害を被らざるに前ち、之を豫防するの必要にして且利益あるは言を俟たざる所なり。然るに從來多くの農業者が、害蟲の加害を見て始めて愴惶驅除に着手するものあるが如きは、驅除の時期を謬れるの甚しきものと言はざる可らず。今や稻作の一大害蟲たる螟蟲は、稻莖中に蝕入して越年の準備を爲し居れり。故に此の際之を驅除して來年の加害を豫防するは目下緊要の事なりとす。依て當業者は左の方法に準じ普く驅除豫防を行ふべし。

明治三十六年十月三日　　　　岐阜縣知事　川路利恭

記

一、枯穗莖切り　稻の枯穗となりたる者は根際より切取り、莖中に潜伏せる螟蟲を槌にて打殺すべし。

注意　切取の際、他の稻莖を害せざる樣注意し、左圖の如き小鎌を用ゆるを可とす。

(圖を略す、但し此圖の甲は廣告欄にある吉野寅之助氏の製造に係るもの、乙は別項枯穗莖切鎌の圖)

甲は代價拾錢以内、乙は代價參錢内外、乙は武儀郡關町に於て製造販賣す。

二、切取り期　前項の切取りは成るへく速に傾穗に前ちて之を行ひ、爾後枯穗の生じたるときは隨時切取るべし。

三、稻株低刈　幼蟲は稻株内に止まりて越冬することあるを以て、成るべく低刈すべし。

四、被害地藁の處理　螟蟲の發生多き土地の藁は幼蟲の蝕入せるもの多きを以て、翌年五月までに燃料とし、又は堆積肥料(外面を土にて塗るか莚の類を以て包圍すること)と爲し、俵其の他に使用せんとするときは、槌にて打つ等、壓殺したる後使用すべし。

五、施行上の注意　稻熱病等に因り枯穗となりたるものと、螟蟲の爲に枯穗となりたるものを一々鑑別して切取るは却て煩雜に渉るを以て、病害に因れる枯莖をも併せて之を刈取り、病害菌の驅除を行ふべし。

螟蟲は冬期稻の刈株中に殘留することあるを以て、片毛作の場所に於ては之を堀起し燒棄するを可とす。害蟲の驅除は平素農業者に於て之を行ふべきは當然なりと雖も、尚市役所、町村役場に於て一定の期

日を指定し、一樣に之を行はしむべし。

前項の期日は前以て郡役所（市は縣廳）に報告すべし。

◉長吉村川邊區の害蟲驅除成蹟

大阪府中河內郡長吉村地方は、本年浮塵子發生甚しく從て其害も鮮少ならざりし由なるが、同村大字川邊區は第十一回全國害蟲驅除講習修業生辻岡彥治郎氏の熱心に驅防に盡力せられし結果、浮塵子の被害は殆んど皆無にして、螟害も亦尠少なりし由は中河內郡役所の証言せし處なり。今辻岡氏の施行せし驅除の方法を聞くに左の如し。

苗代時代に小學兒童をして二化生螟蟲の採卵法を執行し、且つ浮塵子其他害蟲驅除の爲二回少量の石油を注入し、苗の二寸位成長の頃より本田へ移植迄、一週間に一回捕蟲網を使用せしめたり。本田にては八月九日第一回の石油驅除を行ひ、一反歩に付五合づゝ滴下せしめたり。孵化後兩三日より經過せざるを以て全滅の傾あり農民より大に歡迎せられき。其際二化生螟蟲の心枯莖を拔かしめたり。九月三日第二回石油驅除を行ひ、一反歩に付一升づゝ滴下せしめたり。爾來白穗の切取を勸誘し、傍浮塵子の成蟲驅除の爲咽喉付捕蟲器を使用せり。

◉水族館出品に對する謝狀

第五回內國勸業博覽會附屬水族館へ、當所より水棲昆蟲を出品したる模樣は、其當時屢々報導せし處なるが之に對し平田副總裁より上部に示す如き謝狀を受領せり。

> 水產昆蟲　　名和　靖
>
> 第五回內國勸業博覽會附屬水族館ノ前記出品ハ特ニ有益ナルコトヲ認ム依テ茲ニ謝意ヲ表ス
>
> 明治三十六年七月一日
>
> 第五回內國勸業博覽會副總裁從三位勳二等男爵　平田東助

◉新刊紹介

頃日德島縣農會技師押方克己、同技手林寅藏（第十一回全國害蟲驅除講習修業生）の兩氏は昆蟲書を共編せられ、名づけて稻作害蟲篇 附益蟲略解といふ。紙數六十一頁より成り、圖版六葉を挿入し、稻作害蟲の主要なるもの十數種につき、經過習性より驅除の方法及最も普通なる有益蟲數種を記載せらる。〇滋賀縣農事試驗場より害蟲試驗成蹟報告第四報を發表せらる、紙數七十一頁、着色石版圖八葉、寫眞版四葉を挿入し主要農作物害蟲八種の經過試驗及浮塵子の被害試驗十件幷に二化生螟蟲に關する種々なる實驗の結果を記載せるものにして、蓋し當業者を利する尠少ならざるべし。余輩は此種の報告の續々發表あらんことを望むものなり。

◉九月分の官報紙上に現はれたる害蟲發生

本年は初め氣候適順なりしかば、諸害蟲の發

生甚しかりしが、其後不順の爲大に減退せしも、再び氣候適順に從り、連日の快晴を以て高温を來せしかば、漸次害蟲の發育盛んとなれり。今九月分の官報紙上に現はれたる害蟲發生の實況を蒐載して參考に供す。

○害蟲發生　（九月二日官報）

奈良縣　吉野郡國樔村大字南大野全部に渉り楮畑面積約一町歩に蛞蝓に類する害蟲發生甚しきは一株約二百餘頭附着殆ど楮葉を蝕害し盡したり同村は國樔紙の製産地にして之が原料たる楮の栽培最多く其被害少からざるを以て各作人を召集し驅除勵行の結果撲滅したる旨同縣知事より報告あり（去月二十五日付）

○害蟲發生　神奈川縣外七縣より害蟲發生に關する報告の概要左の如し（九月三日官報）

神奈川縣　津久井郡日連村及名倉村に於て害蟲（夜盜蟲）發生し益々蔓延の兆あり（去月二十四日附）●兵庫縣　加西郡各町村の稻田に浮塵子螟蟲發生せり（去月二十四日附）●愛知縣　中島郡開明村及幡豆郡寺津村、富田村に葉卷蟲發生せり（去月二十六日附）●福島縣　岩瀨郡濱田村の稻田に苞蟲發生せり（去月二十六日附）●青森縣　北津輕郡中里村大字宮川地内に於て浮塵子發生せり（去月二十四日附）●島根縣　仁多郡布勢村周知郡原田村外五村の稻作へ浮塵子發生せり（去月二十四日附）●廣島縣　豐田郡各町村稻田浮塵子發生せり（去月二十四日附）●佐賀縣　杵島郡龍玉村外六村及滕津郡北鹿島村南鹿島村の稻田に葉枯病發生蔓延の兆あり（去月二十二日附）藤津郡杵島郡神島郡一同に浮塵子發生せり（同二十五日附）

○害蟲發生　茨城縣外二縣より害蟲發生に關する報告の概要左の如し（九月四日官報）

茨城縣　北相馬郡六郷村高須村及相馬町等の稻田に害蟲（地蠶の種類）發生し稻葉及穗（早稻）を蝕害し其被害四十町歩以上に及び又縣下各地稻田に第二回螟蟲蛾發生せり（去月二十八日附）●山梨縣　各郡市稻田に害蟲發生せり（去月二十八日附）●石川縣　河北郡東英西英金津村の稻田に苞蟲發生し蔓延の虞あり（去月二十七日附）

○害蟲發生　都外一府八縣より害蟲發生に關する報告の要領左の如し（九月七日官報）

京都府　竹野郡濱詰村外七箇村に浮塵子發生せり（去月二十九日附）●大阪府　昨今管内處々に浮塵子發生稍蔓延の兆あり（去月二十九日附）●三重縣　志摩郡一圓水稻田に浮塵子發生せり（去月二十八日附）●愛知縣　海東郡大治村に葉卷蟲發生せり（去月三十一日附）●靜岡縣　富士郡加島村に浮塵子發生せり（去月三十一日附）●山梨縣　南巨摩郡都川村の粟作に夜盜蟲發生せり（去月二十九日附）●宮城縣　登米郡上沼村に浮塵子發生せり（去月二十九日附）●福島縣　石城郡小名濱町外二村安達郡針道村及信夫郡笹谷村の稻田に苞蟲孰も發生せり（去月二十八日附）●島根縣　邑智郡都賀村の粟作に地蠶發生せり（去月二十六日附）●鹿兒島縣　出水郡阿久根村の水稻に葉卷蟲發生せり（去月二十八日附）

○害蟲發生　北海道廳外七縣より害蟲發生に關し報告の概要左の如し（九月十一日官報）

北海道　留志郡蛾蟲村外六村の馬鈴薯に二十八星瓢蟲莢蠹蟲地蠶及土川郡神樂村の稻作に浮塵子、又中川郡豐頃村の馬鈴薯疫病孰も發せり（去月三十一日附）●群馬縣　吾妻郡大字松谷村の一部粟畑に地蠶發生益々蔓延の兆あり（本月日附）●宮城縣　亘理郡各町村の稻作に葉捲蟲發生せり（本月一日附）●福島縣　石川郡川東村外一村一町西白河郡大沼村外三村信夫郡杉妻村外四村の稻田に苞蟲發生せり（本月一日附）●石川縣　羽咋郡稗造村稻田に浮塵子再發し蔓延の虞あり（本月二日附）●廣島縣　高田郡粟屋村字迫外四字に粟地蠶發生蔓延の虞あり（去月三十一日附）●德島縣　海部郡牟岐村及川東村の稻作に葉捲蟲發生せり（本月二日附）●佐賀縣　佐賀郡一圓稻田に浮塵子發生せり（本月一日附）

○害蟲發生　（九月十二日官報）

熊本縣　知事より縣下玖摩郡藍田外三箇村地方粟作に地蠶發生蔓延の徴あり目下驅除施行中なりとの電報あり（本月十八日附）

○害蟲發生　京都府外六縣より害蟲發生に關する報告の概要左の如し（九月十四日）

京都府　乙訓郡羽來師村の稻田に浮塵子發生せり（本月四日附）●茨城縣　鹿島郡大同村大字志崎地內稻田へ浮塵子及ハマクリ蟲發生せり（本月五日附）●靜岡縣　富士、庵原二郡に浮塵子發生せり（本月五日附）●宮城縣　玉造郡溫泉、眞山二村及牡鹿郡蛇田村に浮塵子發生せり（本月五日附）●山形縣　東田川郡に浮塵子發生（本月三日附）東置賜郡一圓の田面に葉卷蟲發生せり（本月四日附）●山口縣　佐波郡牟禮村の一區域に螟蟲發生せり（本月三日附）●大分縣大分郡に七島藺に浮塵子發生せり（本月二日附）

○害蟲發生　（九月十五日官報）

大分縣　大野郡土師村一圓及野津市村大字都原の粟畑に夜盜蟲發生せる旨、同縣知事より報告あり（本月七日附）

○害蟲發生　北海道廳外一府三縣より害蟲發生に關する報告の概要左の如し（九月十七日官報）

北海道　歌棄郡熱郛村の小豆に豆象蟲發生せり（本月七日附）●京都府　綴喜郡草內村外三村船井郡高原村及南桑田郡本梅村の稻作に浮塵子發生（本月八日附）宇治郡醍醐、山科兩村稻田に浮塵子發生せり（同十日附）●神奈川縣　三浦郡衣笠村久里濱村の稻作に浮塵子發生せり（本月十一日附）●群馬縣　北甘樂郡高瀨村外二村一町の水田に苞蟲發生せり（本月十日附）●三重縣　安濃郡八段餘步津市下部田五町步上濱町四段步に浮塵子孰も發生せり（本月十日附）

（未完）

●浮塵子の寄生線蟲　浮塵子に寄生する處の線蟲に就き、此頃佐賀縣農學校より照會ありしが該線蟲は中々有力なるものにて、去三十年の大發生の節にも之が大に驅防を援けし事ありき。而して該線蟲はトビイロヨコバヒ、セジロヨコバヒ、コバネヨコバヒ等ウスバヨコバヒ科に屬するものに寄生せるが如し。是等に就ては大に研究すべき價値ありと信ず。

●根木東枝氏の洋行　第八回全國害蟲驅除講習修業生岡山縣根木東枝氏は、北米合衆國サクラメントへ向ふ三ヶ年間の豫定を以て、九月九日歸里出發留學せられたる由。

●苗代田品評會の賞品　兵庫縣淡路國にては、淡路燒と稱して盛んに陶磁器を製出することは世人の洽く知る處なるが、第七回全國害蟲驅除講習修業生中野壽郎氏の談によれば、同國三原郡にては苗代田品評會に、其賞與品として皿、猪口、湯呑等の日用品を與へ、其磁器は必ず苗代田に於ける害益蟲の摸樣を畵けるものなりといふ。是等の賞與品に害蟲驅除器等を與ふも良きが、こは中々面白き考へなり。

●枯穗莖切鎌　螟蟲の驅除豫防上枯穗莖切法の奬勵せらるゝに至り、各地に於て續々此種の鎌を製造さるゝ事になりたるは誠に喜ばしき次第なり。美濃國關町の鍛冶渡邊喜兵衛氏は、此程圖の如き莖切鎌外數種を製造して當所に寄贈されたるが、實用上適當なるものなり、價は一挺參錢なりと云ふ。

枯穗莖切鎌の圖

●貝殼蟲の調査　東京西ヶ原農事試驗場在勤米國理學士桑名伊之吉氏は、本邦に於ける貝殼蟲調査の爲、中山道を經て先月十日來所せられ、近地採集の上當所の名和正氏と共に岡山、松江、鳥取地方に採集を試み、再び當所に立寄られしが、皈場の後又直ちに東北地方に向はれたる由、本月六日岩手縣網張温泉より消息ありたり。

●岐阜縣昆蟲學會第五十八回月次會記事　同會は本月三日午後一時より當所内に於て開會せしが、出席者二十四名にして孰れも各地方の熱心家のみなりき。今其概況を報ずれば、例により名和副會頭の開會の辭に次で、第一席岐阜縣長期害蟲驅除講習生惣代として渡邊樵四平氏は螟蟲白穗拔取及其處分法に關する講習生一同の調査せし結果を報告し、第二席名和靖氏は螟蟲調査の結果より、引て驅除豫防上に於ける注意に說き及ぼされ、第三席岐阜中學校敎諭波磨實太郎氏はParnidaeに屬するPsephenesの一種に就て、剖檢的研究と内外の書籍に徵して調査せられし結果を報告し、次で第五十五回の月次會に續けるプレパラート製法を實地に就て熱心に講演せられ、第四席第七回全國害蟲驅除講習修業生兵庫縣三原郡農會技手中野壽郎氏は淡路國と三化螟蟲てふ演題の下に、初めて淡路國に三化螟蟲の發見せられし顚末より、其原産地は德島縣那賀郡地方にして炭俵、石灰俵等によりて輸入傳播せしなりと說き、

之につき驅除豫防せし方法より其結果を詳細に演述せられたるが、時既に午後六時なりしかば茲に閉會を告げ、頗る盛會なりき。

◉水曜昆蟲會記事

當研究所員の催しに係る水曜昆蟲會は前號報告後毎水曜日午後七時より當所內に開會せしが、其重なる談話の概略を一括すれば左の如し。

小森省作氏は特殊鱗に就て、小灰蝶の種類と採集、天狗蝶の發生經過談等なりしが、其中特殊鱗に就ては種類、形狀、位置等を各蟲種に區別して之に說明を與へ、組織の剖撿的研究にあらざれば斷言し難きも、特殊鱗なるものは雄蟲の特有物とのみ考へ居りしに、調査の結果雌蟲にも該鱗の具備し居る樣に認めり云々と實物を示して之を說き○石田和三郎氏は夜中の昆蟲採集に就て、昨年より今日迄の成績を報告して糖蛾類成蟲時期の略ぼ判明したる十數種を擧げて其經過表を示され○小竹浩氏は山梨縣下に於ける昆蟲採集及害蟲驅除視察談として、同縣敎育會主催に係る昆蟲學講習會へ出張中に野外昆蟲採集を成せし狀況より山梨縣令にて發布せられし害蟲の種類及び害蟲驅除の方法等に就て視察せられし結果を報告し○名和愛吉氏は澤庵漬等に發生するシヤウジヤウバへの發生經過につき、其蠅は其卵を桶の緣に產み、孵化せる幼蟲は澤庵漬の中に入りて蛹化し而して數日の後成蟲となるも、其幾分は寄生蜂の爲めに繁殖を妨げらるゝ旨を、順序標本を以て最も親切に說明を與へ○森宗太郎氏はマユミガメムシ、ヒゲザウムシ、ハラアカシロガ等の習性經過を又標本に依り說明せらる○渡邊樵四平氏は螟蟲驅除と枯穗莖切、浮塵子の產卵數調査談等なりしが二化生螟蟲驅防の一大良法は枯穗莖切なるも頑固なる農民は之れが實行を等閑に附するは實に遺憾の次第なり、目下の塲合、如何にせば頑農等は之が實行勉むるや否やを研究せざるべからずと、少しく憤慨の口調を以て述べ、枯穗莖切後の處分は其藁を槌にて打潰すより良法なし云々と說かれ○中井藤助氏は浮塵子に就てと題し、其實驗の結果によれば發生の多少は第一氣候、第二稻の種類、第三乾濕の如何、第四施　の方法、肥料成分の如何等にありとて一々其項目に亘り說明を與へられたり。其他大橋由太郎氏の害蟲驅除監督に就て、所嘉吉氏の僞　蟲と發生地、小川謙司氏の害蟲驅除の困難なる理由、近藤伊佑氏の稻熱病と浮塵子との關係、土岐五郎氏の昆蟲採集談（實物供覽）高橋喜男氏の浮塵子卵塊孵化の狀況（實物證明）棚橋昇氏の卵蜂の種類に就て（實物供覽）等なりき。

因に　す每水曜會には名和所長も出席せられて會員各自の講演に就き一々批評を加へて大に會員を督勵せられ、且每會內外各地より送付し來れる昆蟲標本及書籍を示して時事談を試みらるゝを例とせり。

◉昆蟲標本陳列舘の參觀人

去九月中當昆蟲研究所常設の昆蟲標本陳列舘を參觀せし人員は總計五千五百十三人にして、其中最も多かりしは二十四日に於ける二千六百八十二人、最も少なかりしは九日に於ける四十五人にして一日平均二百十二人弱に當り、此內實業家最も多く、之に次ぐは各府縣の勸業當局者、敎育者、學生等なりき。

（雜報、十月十三日脫稿）

Hyloicus caligineus, Butler. (Kuro-suzume)

By K. Nagano.

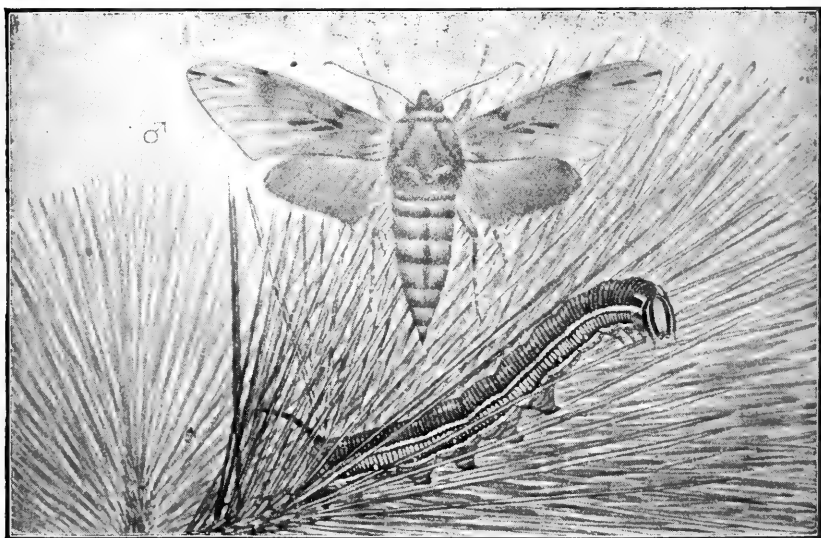
Forewings dark grey, closely irrorated with white; two strongly curved blackish brown bands running from costa, inner turning inwards to base and outer running to dorsum; sometimes a white discal dot; three or four longitudinal black dashes in disc; an oblique black apical line; cilia white and dark grey. Hindwings dark grey, deeper in terminer. Expanse 60-74mm. Body dark grey, whitish-sprinkled; thorax with arch shaped blackish-brown band; abdomen banded with blackish-brown and with longitudinal blackish-brown stripe.

Kiusiu, Shikoku, Honsiu. 5, 6, 7. Larva green; dorsal line dark-brown, edged by pale yellow lines; lateral lines white; spiracles pale orange; subspiracular lines yellowish; 1 seg. with four black blotches; 11 and 12 seg. black dotted; horn purplish-brown with black short bristles: on Pinus Tunbergii, P. densiflora; 6-9.

昆蟲世界

（明治三十六年十月十五日發行）　第七卷第七拾四號　（毎月一回十五日發行）

出版廣告

◉昆蟲叢書第壹編
全國昆蟲展覽會**出品目錄**（明治卅五年七月出版）全壹冊

題字及び寫眞銅版四葉挿入●木版寫眞銅版畫七十餘圖●紙數二百餘頁●定價金八拾五錢（郵税金六錢）

記載目次

第一章 昆蟲展覽會出品目錄の必要●第二章 分類標本に於ける蟲種別●第三章 害蟲標本に於ける蟲種別●第四章 益蟲標本に於ける蟲種別●第五章 教育用標本其他の出品●第六章 出品物と其出品者（附錄）開設の計劃●役員の撰定●開會設備●開會式●審査方法●褒賞授與式●閉會式●雜件彙報●蟲種の調査●殘務所理●昆蟲名稱の意見●展覽會の効果 以上

昆蟲叢書第貳編（明治卅六年八月出版）
◉**昆蟲標本製作全書** 全壹冊

題字及寫眞銅版、木版圖數十種挿入●定價壹部金八拾五錢（郵税六錢）

記載目次

第一章 昆蟲標本の價値●第二章 昆蟲標本製作法の沿革●第三章 昆蟲標本製作書の出版●第四章 昆蟲採集用の器具●第五章 昆蟲採集の方法●第六章 幼蟲及蛹の採集と飼育方法●第七章 昆蟲採集地の撰擇●第八章 標本製作用の器具●第九章 昆蟲標本の製作方法●第十章 昆蟲の排列と保存方法

右出版仕候に付御愛讀あらんことを請ふ

明治卅六年十月　岐阜市京町　名和昆蟲研究所

◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條ニ依り晴雨に關はらず、毎月第一土曜日午後一時より、岐阜市京町名和昆蟲研究所内に於て開く、本會員は不及申、何人も毎會御出席相成度候也

名和昆蟲研究所内　岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會本年中の日並は左の如し
第五十九回月次會（十一月七日）　第六十回月次會（十二月五日）

◉名和昆蟲研究所案内

市境界……イ
案内道……ロ
市道……ハ
研究所……ニ
陳列館……ホ
縣廳……ヘ
中學校……ト
病院……チ
郵便局……リ
西別院……ヌ
公園……ル
長良川
金華山
停車場

當昆蟲研究所の位置は上圖の如くにて停車場よりは僅に十餘町養蟲室あり又新築の岐阜縣物產館構内には常設の昆蟲標本陳列館（五間に十六間）ありて標本器具數千点を陳列す有志諸君の來訪を俟つ

岐阜縣岐阜市京町　名和昆蟲研究所

◉本誌定價並廣告料

壹部郵税共金拾錢〔見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す〕
壹年分拾貳部郵税共金壹圓八錢

（注意）本誌は總て前金ニ非れば發送せず◉爲替拂渡局は岐阜郵便局◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす

廣告料　五號活字二十二字詰一行ニ付金拾貳錢三十行以上一行ニ付き金拾錢とす

明治三十六年十月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二（岐阜縣岐阜市京町）
發行所　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二
發行者　名和梅吉

同縣揖斐郡鶯村大字公郷三番戸
編輯者　小森省作

同縣安八郡大垣町字郭四十五番地ノ二
印刷者　河田貞次郎

（明治三十年九月十日内務省許可）
（明治三十[illegible]第三種郵便物認可）
（大垣　西濃印刷株式會社印刷）

Vol.VII. NOVEMBER. 15TH, 1903. No.11.

(十一月十五日發行)

(每月一回十五日發行)

THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE

EDITED BY Y. NAWA.

GIFU, JAPAN.

昆蟲世界

(第七卷第拾壹册)　第七拾五號

目次

禁轉載

(明治三十六年十一月十五日發行)

(明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)

PUBLISHED BY THE NAWA'S ENTOMOLOGICAL LABORATORY IN GIFU, JAPAN.

◉寄贈物件受領公告

一ム子ピロゴキブリ(二頭)、チヤバ子ゴキブリ(四頭)、ショウリヨウバツタ(黴菌斃死一頭)　東京市　岸田松若君
一チヤバ子ゴキブリ(七頭)　尾張國　服部通範君
一ム子ピロゴキブリ(二頭)、チヤバ子ゴキブリ(一頭)、ドゲナナフシムシ(一頭)　高知縣　武内讓文君
一北海道產昆蟲標本(多數)　後志國　小川七治郎君
一昆蟲學講習會員紀念寫眞(一葉)　名古屋市　松操會
一昆蟲學講習會員紀念寫眞(一葉)　岐阜縣　養老郡昆蟲學會
一半身肖像寫眞(一葉)　鳥取縣　岡野庫八郎君
一半身肖像寫眞(一葉)　鳥取縣　石龜一郎君
一昆蟲模樣外國畫葉書(八葉)　在京都　武田五一君
一中京新報、齋藤新聞、東海日日新聞、新愛知、(四種四葉)　各古屋市　甫守謹吾君
一害蟲驅除要覽(一冊)　滋賀縣農事試驗場
一桑葉、繭形菓子(一箱)　丹波國　菅沼岩藏君
一一貫張菓子敷牡丹に蝶模樣付(一)、一貫張卷煙草入蝶模樣付(一)　名古屋市　谷　てい子君
一寺尾保十氏製作稻莖切鎌(一丁)　靜岡縣　岡田忠男君

右寄贈相成候に付芳名を掲げて其厚意を謝す

明治卅六年十一月十日　名和昆蟲研究所

◉昆蟲學特別研究生募集

今回數名の特別研究生を募集するに付規則書入用の向は郵劵相添へ至急照會あれ直ちに送致すべし

明治卅六年十一月十日　名和昆蟲研究所

◉昆蟲叢書第貳篇　昆蟲標本製作全書

右に對し各新聞紙批評の二三を左に掲ぐ。

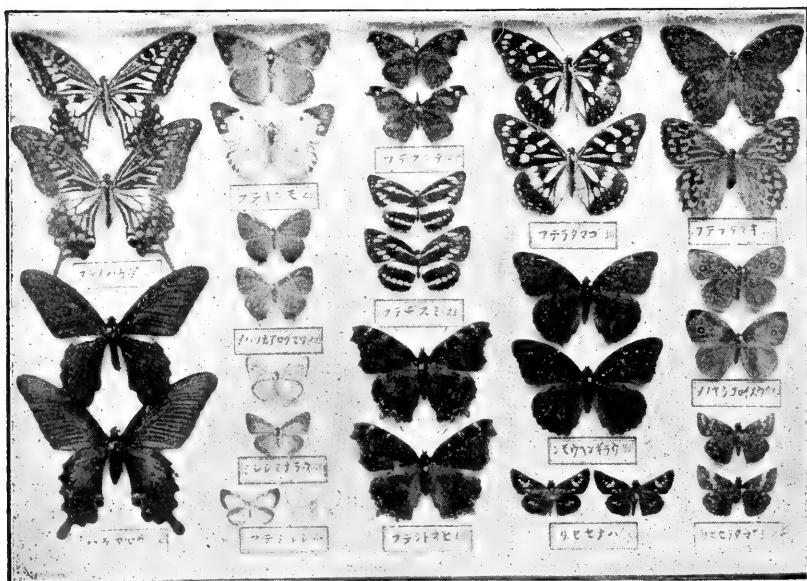
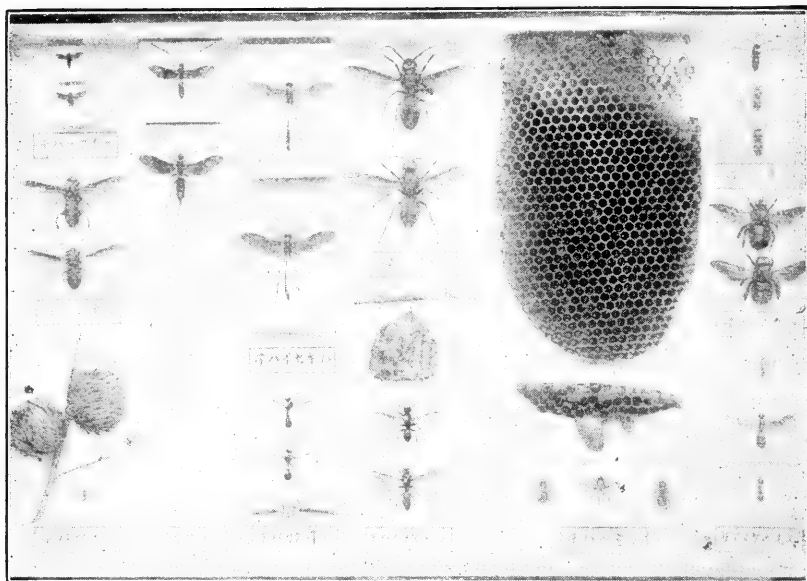
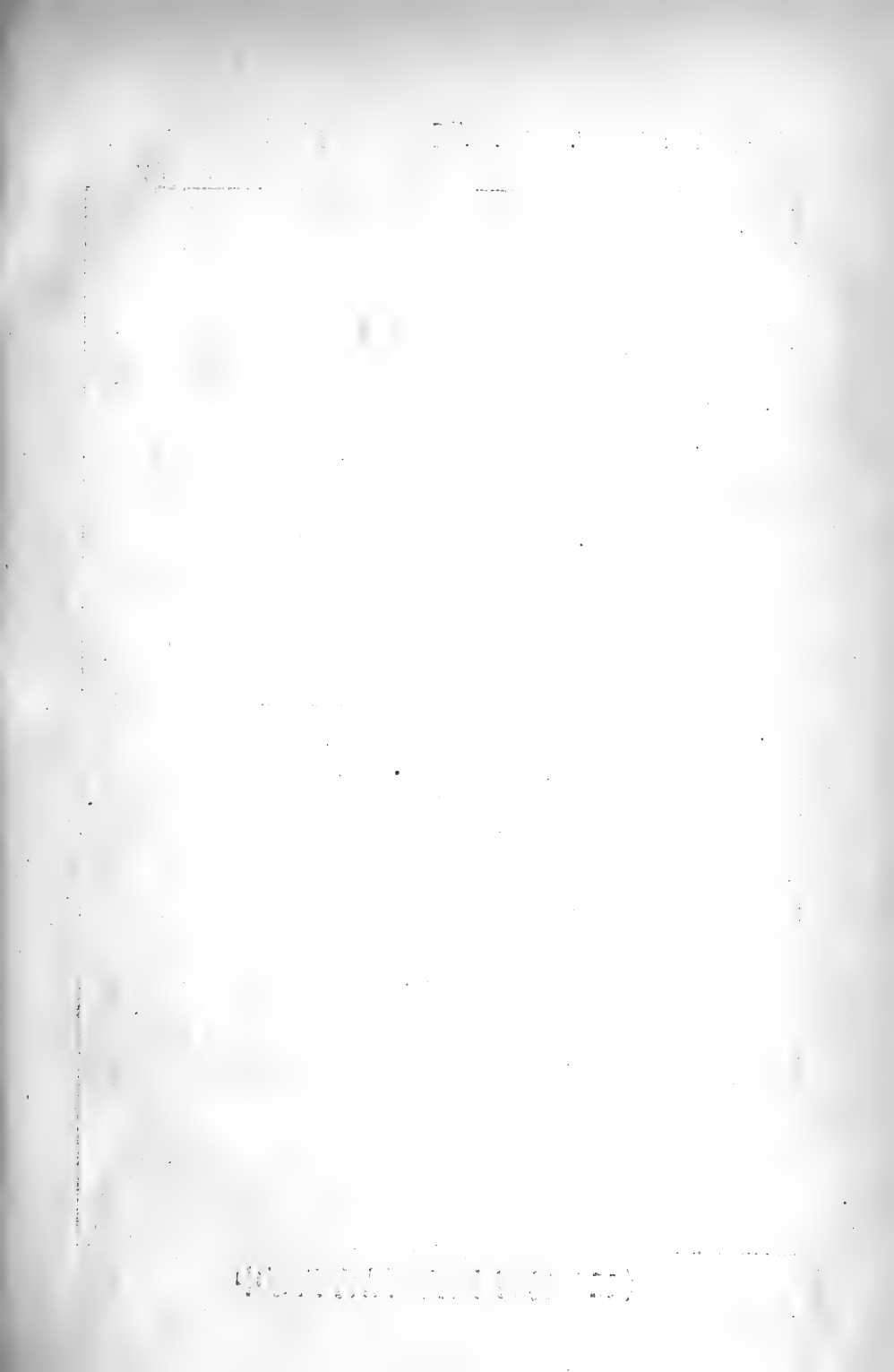
大阪毎日新聞　本書は有名なる名和昆蟲研究所編輯部の編に係り、昆蟲採集の方法、器具、採集地の撰擇、標本の製作方法等最も簡明に叙述したりしに、實地の應用に資せんことを欲したるが故に初學の士に取つては趣味、實益二つながら併せ得べし（九月廿九日の分記載）

日本新聞　昆蟲の標本ほど容易に出來て、動物學上有益なもので有つて、しかも趣味が有り且つ樂みになるものは無い、然れども其道を得ざれば、其最も容易なる者亦決して容易にあらざるなり。此書は之に關して採集、製作、保存等を噬みて含めるが如く敎へたる者にして、蟲の種類に就て其方法を異にするを、反覆丁寧に說明し、詳密を極めたり。（六月四日記載）

大阪朝日新聞　昆蟲叢書の第二編にして、主として實地研究の結果に成りたるものにて、說明の方法皆適切、單に書中に得たるものと選を異にす。故に專門ならざるものに在りても昆蟲研究の趣味を催さしむ。昆蟲標本製作法の沿革、其書の出版の二章はまた我が科學的書籍史上に參考さすべきもの、要するに吾人は多くの興味を以て此の書を讀み、更に昆蟲研究の趣味を催進せしめたり（十月九日記載）

二六新報　著者が昆蟲研究に熱心なる岐阜市に名和昆蟲研究所を設置せるを觀て知るべし、此書は製作の方法を記述して周到明白遺憾なきに近し。（十月廿一日記載）

中等教育昆蟲標本寫眞（二）

論説

◎冬季の採蟲を務めよ

冬季昆蟲採集の斯學を利するの多大なる、敢て他季の採集に讓らざるは、吾人の常に唱導する所なり。蓋し百蟲蟄伏の狀態を詳にし、兼て其種類を蒐集するを得ればなり。方今昆蟲學の進歩遲々にして、害蟲驅除の普及せざるは、之れ畢竟昆蟲の習性經過の明ならざるより、世人の過半は、夏季に於て繁殖加害甚しき蟲屬も、嚴寒氷結の候に入れば悉く死滅して片影を止めず、春陽來復草木萌芽の候に至れば、忽然地より湧くものなりとの迷信を抱き、人工の左右し能はざるものと誤認せるの罪にして、之れ冬季に於ける採蟲を忽にするの致す所なり。一たび冬季に於て其巣穴を突き、蟄所を發きて其狀態を目擊せば、如何に頑迷の徒も首肯せざるものあらざるべし。然れば此の季に及んで之が採蟲を試み、各蟲種に於ける冬季の狀態を探り、一は以て科學的研究の材料となし、一は以て農民の啓蒙解疑の資料となし、實業上に科學上に、遺利を收むるは目下の急務なりと信ず。然り而して岐阜縣昆蟲學會が昨春岐阜縣冬季昆蟲展覽會を開き、愛知縣寶飯郡が今春寶飯郡小學校冬季昆蟲展覽會を開きしも、全く爰に觀る所ありてなり。之が爲兩者共、直接に將た間接に利益を得たるは決して尠少ならざりしなり。而して之が採蟲の最好適期は一、二兩月の間にありと雖も、而も比較研究の必要上、其前後十二、三の兩月にも

亦必ず之を行はざるべからざることを忘るべからず。然るに世人の多くは、此好時期を以て採蟲、研究爾つながら爲すべきものあらざるが如く思惟するは、不識の爲とは云へ、實に慨嘆の至りならずや。今將に此期に到らんとするに臨み、茲に一言注意を促して、以て此好時期を逸せざらしめんことを希ふのみ。

◎蜻蛉に就きて（一）

在東京 長野菊次郎

此篇は、重にホワード氏の昆蟲書に因り、傍らウード氏の家庭昆蟲、ケンブリッヂ博物誌、其他二三の書を參酌して記述したるものなれば、或は本邦蜻蛉類の全躰には通せざる所もあらん、讀者之を諒せよ。

昆蟲類中、最も美麗にして、最も人の注意を惹くものは、蝶類を第一とし、次には蜻蛉類を推すべし。抑此類は、各地普通に産するを以て、其名稱にも種々あり、本邦にてはアキツムシ、アキツハなどとて古歌に詠せられ、又トンボウ、トンボ等の普通名あり。然れども其方言に至りては、殆んど數ふるに遑あらず、或はアケブ、エンマ、エンバ、ヤンマ、エンブウ、ヘンボウ、ヘンボ、タンボ、タンブリ、ダアブリ、グンザ等の名稱は、既に本草啓蒙に載せたる所あり。又歐米に於ても種々の方言を有し、往々迷信の伴へることさへあり、例へばエングランド(England)にては最も普通に龍蠅(Dragon fly)と稱し、或る地方にては鬼の縫針(Devil's darning needles)と云ひ、其他飼蛇者、或は蛇醫、又は捕蚊鷹ともいへり。スコットランド(Scotland)にては飛蝮蛇(Flying adders)と云ひエングランドの或地方にては刺馬者と呼ぶ。元

來、蜻蛉は全く無害の昆蟲なるに關せず、此の如き名を有するは、俗人の迷信に基けるものにして、或る人は蜻蛉が惡童の耳を縫ふならん、或は馬を刺すならんと信じ甚しきに至りては蛇類特に水蛇を飼育し、或は之を醫するならんとの忘信をさへ抱けるあり。

成蟲、蜻蛉類は甚だ大なる頭を有して柔なる頸に接し、容易に之を動かし得べし。左右の複眼は凸出して最も大に、且つ美麗の光澤を有し、三個の單眼は通常頭部の前面に三角形に配列し、或は一行に並列せり。觸角は甚だ短く、且小にして基部の二節は少しく强大なれども、先端は柔軟にして尖り、決して八關節を超ゆることなし。口部は甚だ異樣に構成せられ、大顎及び小顎は大にして、扁平なる上下兩唇の間に隱れたり。蓋し此兩唇は、蜻蛉が食ふ際に上下に動くものにして、一見蜻蛉の口は上下に働くも横には働かざるものなるの看あり。胴幹は常に長くして圓筒狀をなし、稀に廣くして扁平なることあり。翅は細長にして前後殆んど其大さを同じふし、縱横の細脈によりて翅面を無數の小室に分割せり。脚は柔軟にして胸部の前方より生じ、毛狀刺の美麗なる列を有して前方に曲り、食餌を拉ふるに用ゐるものにして、歩行の用をなすものにあらず。例令靜止せるとき枝梗等を把持することはいへ、歩行には不適當なることを知るべし。

蜻蛉は貪食なるものにして、昆蟲類中之が食餌となるは蚊及び蠅なるべし。抑も蜻蛉は成蟲の時代より幼蟲の時代に於て食を要することなく、且晝間飛翔するものなれども、曇天の折又は黄昏に際しては、之が爲めに殺さるゝ蚊の數實に少からざるあり。ドクトル、メーンス (E. A. Mearns) 氏の言によれば、北米メーン洲のフォート、スチルリング (Fort Snelling) に於て、蚊が廣き沼澤に發育すれば、直に蜻蛉の大群出現して、爲めに著しく蚊の數を減ずと、以て蜻蛉の効果をトすべし。然れば前年ドクトル、ラム

ボーン氏(Lamborn)は蠅及び蚊の驅除に對して、人工的に蜻蛉を繁殖せしむべき方法を懸賞によりて募集したるに、數名の學者の是に應じたることあり。蚊蠅の外、蜻蛉は往々ヨコバヒの類、小蝶及び蛾類を捕ふることあり、昆蟲採集の際、蜻蛉を追ふて思はぬ蝶蛾類を得ることあるは、蓋し之が爲なり。或る蜻蛉は水草或は雜草に止まれる蛾を攫み去ることあり、稀には鳳蝶、甚しきは大なる丸蜂さへも捕ふることありとなり。又其貪食の度に至りては驚くべきものにて、之を捕へて其翅を背上に保ちながら是に家蠅を與ふるに、平氣にて之を貪食するを見るべし。又其暴食の量も過大なるが、ビューテンミューレル(Beutenmüller)氏の試驗によれば、大形種の一は二時間に家蠅四十疋を食ひ、小形のものは二十疋を食ひしと。又特に驚くべきは、若し其軀の一部を口邊に齎らすときは、自身をさへ食ふことありとなり。又之を魔醉せしめて帽針に貫き置くに當り、例令蘇生するあるも、之に給するに家蠅を以てすれば、少しも逃れんとせずして之を噛み、其食慾を充たすに當りては全く大針を以て胸部を貫かれたる不快と苦痛とを忘却するもの丶如し、然れども蜻蛉も亦鳥類の爲めに貪食せらるゝこと少からざるなり。

蜻蛉は沼澤池塘多き地方に多きこと通例なるが、往々非常の大群をなすことあり、獨逸昆蟲學者コッペン氏(koppen)は、千四百九十四年より千八百六十四年に至る間に起れる蜻蛉群の移動につき報告をなせり。かゝる群集は屢歐洲に於て見る所にして、北米に於ても往々注目せられたり。マンド氏(A. H. Mundt)の言によれば、千八百八十一年八月十三日午後五時より七時の間に渉り、數哩の空中蜻蛉群飛して、地上一尺位の所を彷徨し、皆な南西の方向に移動しつゝ眼の及ばざる程に擴張したりきと、此移動は多分晴天打續きて池沼の乾燥したるによりて起りしなるべく、其の他の移動も多く此れ等の理由ならんとなり。

(未完)

◎皇太子殿下奉献中等教育昆蟲標本詳解（其三）第十一版圖參看

名和昆蟲研究所内　小竹浩

膜翅類

膜翅類とは蜂蟻の如き蟲類の總稱にして、普通複眼の外に三個の單眼を有す。口具は能く咬嚙舐吸に適し、翅は膜質にして脈條少なく、前翅は後翅より大きく、概ね四翅を有すれども、稀には之れを缺くものあり、雌は腹端に螫針若くは劍狀の產卵管を有し、其長きものは五六寸に達するあり、幼蟲は多くは無脚なるも、中には十八脚乃至二十二脚を有するもあり、此の類に屬するものは多くは有益蟲にして、僅かに有害蟲を含有す。本號口繪の上圖は、皆此の膜翅類に隷するものなり。

（九）カブラ　バチ（Athalia spinarum, Fab.）　此種は食葉類鋸蜂科に屬し、体長二分五厘、翅の開張六分内外を算し、躰赤黄色にして肥大に、頭部及後胸背は黑色を帶ぶ。複眼は卵形をなし、頭頂に三個の單眼を有して淡黄色を呈し、翅は淡き暗黄色を帶び、前緣及び緣紋は黑褐色なり。雌は腹端に鋸狀の產卵管ありて、葉柄又は葉脈等を切り、其中に產卵す。幼蟲は帶綠黑色にして、橫皺多く、十一對の脚を有し、物に恐るゝときは体を環狀に捲きて墜落するの性あり、年二回の發生をなし、常に蕪菁、大根等の十字科植物の葉を食害して、大害を與ふることあり、老熟すれば地中に入り、繭を營み、蛹化し、其儘越冬す。

（一〇）ナシ　バチ（Cimbex nomurae, Marlatt.）　前種と同科に屬し、体長七分、翅の開張一寸五分乃至一寸七分、体赤黄色にして各關節の基部稍黑色を帶び、腹部背面の中央、縱に黑色を呈す。複眼は卵形にして、頭頂に三個の單眼を有して黄色を帶び、觸角は六節より成りて棍棒狀をなす。常に山林に多く

往々梨樹に産卵し、孵化の幼蟲は、梨の葉を食し、大害を與ふることあり、老熟すれば、赤褐色の繭を營み、蛹化す、鋸蜂中大形の種なり。

（一一）イガ バチ（Cynips sp.）　寄生類沒食子蜂科に屬し、体長一分七厘、翅の開張三分五厘内外を算す。頭胸部黒色にして、腹部茶色を帶び、縦に扁大なり。翅は透明にして廣く、觸角糸狀にして關節一定せず。常に櫟樹の嫩芽に産卵するを以て、嫩芽は變じて一種の毛球狀をなし、恰も栗のるれに似たり、幼蟲は其内に成育し、翌年五月頃羽化す。

（一二）ヲナガ バチ（Bracon penetrens, Smith.）　寄生類小繭蜂科に屬し、体長五分五厘、翅の開張一寸乃至一寸二分、複眼は楕圓形にして、單眼と共に黒し。觸角長く、黒色にして先端膨太す。翅は鼈甲色にして黒斑を有し、前緣角より外緣に沿ふて稍淡黒色を呈す。頭胸部及前中二對の肢は、翅と同色にして、後肢は黒色を帶び、腹部は稍暗色を呈す。雌蟲は五六寸に達する長き産卵管を有し、樹幹中に潛伏せる諸蟲に寄生するの有益蟲なり。常に山林中特に樹木の繁茂せる處に多し。

（一三）キセイ バチ（Ophion sp.）　寄生類姫蜂科に屬する大形の種類にして、体長一寸二分、翅の開張一寸九分内外、翅色淡黄褐色を帶び、腹部長く、胸部に接する處細く、先端に至るに從ひて太く、縦に扁大なり。前中二對の肢は黄色なれども、後肢には黒色部多し。常にヤママユ、クリケムシ等の幼蟲に寄生す。

（一四）トックリ バチ（Eumenes pomiformis, Fab.）　兩性類蜾蠃科に屬する有柄種にして、体長五分翅の開翅一寸内外、複眼は腎臟形をなし、單眼は黄色を帶ぶ。体黒色にして、頭胸相接せる所黄色をなし、腹部に赤黄色の帶條あり、四五月頃より出で、土にて德利形の巣を營み、尺蠖、螟蛉等を捕へ來り

て其內に貯へ、側に產卵す、卵子孵化すれば、幼蟲は該蟲を食して成育し、遂に蛹變羽化して成蟲となる。世人が、蜂は他の仔蟲を養ひて已が子となすと云ふは、此の狀態を誤認したるものならん。

(一五)ヤマ バチ(Vespa mandarina, Smith.)　兩性類胡蜂科に屬し、躰長九分乃至一寸三分、翅の開張一寸六分乃至二寸五分、頭部樺茶色に、胸部稍暗色を呈し、腹部樺茶色に黑褐の横帶あり、複眼は腎臓形をなし、三個の單眼は黑色に、觸角は赤黃色にして、先端に至るに從ひ黑色を帶び、雄は十三節、雌れ十二節より成る。蜂類中大形の種にして、土中に大形の巢を營み、螟蛉、尺蠖等を捕へ來りて仔蟲を養ふ、若し之れに刺さるゝときは、甚しく痛傷を覺ゆ。

(一六)アシ ナガ バチ(Polistes chinensis, Fab.)　此種は前種と同科に屬し、体長七分、翅の開張一寸四分內外、複眼は腎臓形にして、單眼れ黑し。体黑褐色にして、中胸背に赤褐條を有し、腹部の後半は黃褐色を帶ぶ。常に樹枝又は檐下等に巢を營み、螟蛉等を捕へ來りて仔蟲を養ふの益あり。

(一七)ミツ バチ(Apis japonica, Rad.)　集英類蜜蜂科に屬し、人の能く知る所の、有益なる小形の種にして、雄蜂、女王蜂の外に、職蜂を有して、一社會を組織す、王蜂尤も大さく、雄蜂は腹端圓く、職蜂は腹端尖り、且灰黃色の横條あり、常に花粉を以て蜂房を造成す。蜂房は六角の小室より成りて、室內には卵子を置き、或は蜂蜜を蓄藏して食料となす、而して其蜂蠟は、蜂房より蜜を取り出したる後、此蜂房を水に溶かして得るものにして、之れを華氏九十度內外の溫度にて軟質の物体となし、摸型に入れて種々の摸形品を製し、或は蠟燭を造る、又其白蠟は軟膏を製すべし。蜂蜜は動物類及植物類を其中に入れ置けば、久しく蓄藏するを得べく、又之れを食用として砂糖と同一の効を奏す。

(一八)チ バチ(Vespa cingrilata.)　兩性類胡蜂科に屬し、体長四分五厘乃至六分、開張八分乃至一寸內

外、雄は体細長く、觸角長し。雌は腹部太く、觸角短し。職蜂は体小なり。体灰黑色にして、腹部には灰黄色の横帶あり、複眼腎臓形にして、單眼黑し、地中に數層の大なる巣を作りて群居す。春夏の候巣を採り來りて之を飼養し、其幼蟲を美味として食用に供するあり。

（一九）クマバチ（Xyrocopa circumvolans, Smith.） 集英類蜜蜂科に屬し、体長八分、開張一寸七分内外、体軀肥太にして天鵞絨樣の黑色軟毛を密生し、胸背は黄色を帶ぶ。肢は三對共に長き黑毛を密生し複眼大に、單眼黑し。檐下の椽等に穴を穿ちて巣を營み、空中を飛揚して小蟲を捕食し、或は花間に來りて花蜜を吸收す。

（二〇）オホクマアリ（Formica sp.） 大形の種にして、雌雄並に職蟻を有し、雌は体黑く、腹部肥大にして、体長六分五厘、雄蟻の腹部は胸部より小にして、体長三分五厘内外にして、共に時期により翅を生ず。職蟻は大さ其中間にありて、全く翅を有せず。胸背茶褐色、腹部黑くして圓し。地中に穴を穿ち巣を營みて群居し、職蟻は巣を造り、食物を捜索して仔蟲を養育す。凡て蟻は蚜蟲の分泌液を好むを以て、常に蚜蟲の居る處に集り、中には之れを已が巣に移し又は特に巣を營みて飼養すること、恰も人類が牝牛を飼養するに異ならず。

◎第一回岐阜縣昆蟲分布調査（五）

名和昆蟲研究所助手　分布調査主任　小森省作

弄花蝶科（Hesperidae）、此科に屬するものにして今回の採品に加はりしものは十種なり。其内イチモジハナセセリテフ最も多く、ハナセセリテフ之に次ぎ、其他は概ね一二頭乃至三四頭に過ぎざりき。

(六六)チャマダラ ハナセセリ テフ(Thanaos montanus, Brem.)　此蝶は弄花蝶科中大形種に屬するものにして、前翅は黑褐色に灰色の微かなる斑紋あり、後翅は黑褐色に、多少列をなせる數多の帶褐黃色の斑紋ありて、緣毛は灰色なり。裏面は表面に比し色稍濃く、前後兩翅共帶褐黃色の斑紋あれども、表裏共多少の變化あるを免れず。特に雌蟲は前翅の中央に灰白色の斑紋ありて、其裏面は黃色部多きが如し揖斐郡に於て一頭獲られたり。

(六七)クロスヂ ハナセセリ テフ(Adopaea leonina, But.)　此蝶は常に山地に產する種にして翅の表面は橙黃色に、邊緣は黑褐色に、翅脉は黑く判然せり。雄蟲は前翅の第一肢脉と第三翅脉との間に斜に特殊鱗を有し、黑條を呈はす。雌蟲は表面黑色部多きも、裏面は殆んど相等しく、一樣に橙黃色にして、翅脉は黑し。益田郡に於て二頭を獲られたり。

(六八)キマダラ ハナセセリ テフ(Padraona dara, Kollar.)　翅の表面は帶褐黑色にして、前後兩翅共不規則なる黃色の帶紋を有す。裏面は黃色部多く、而して黑斑點在し、前翅の後緣部は黑色を呈す。稻葉、養老、揖斐、本巢、可兒の五郡に於て獲られたり。

(六九)ヒメ キマダラ ハナセセリ テフ(Augiades ochracea, Brem.)　此種は雌雄により色彩を異にせり即ち雄蟲は前後兩翅共黑褐色に中央部は橙黃色にして、翅脉は黑色を呈はし、前翅の第一翅脉と第三翅脉との間に特殊鱗を有し、黑斑をなす。裏面は殆んど一樣に橙黃色を呈し、翅脉は判然せり。雌蟲は翅の表面黑褐色にして、中央に翅脉を以て區劃せらるゝ淡き橙黃色の斑紋列あり。裏面は雄蟲と殆んど同樣にして、表面の斑紋微かに顯はる。今回加茂郡に於て一頭獲られたり。

(七〇)コ ハナセセリ テフ(Parnara mathias, Fab.)　翅の表面は暗褐色に鶯色の鱗毛を有し、前翅には

帶黄白色の微細なる斑紋あれど、後翅にはなし。裏面は表面に比し黄色を帶び、兩翅共微細なる斑紋を有す。雄蟲には前翅の表面第一翅脉と、第二翅脉との間に特殊鱗ありて、斜に一直線をなす。今回武儀加茂の二郡に於て獲られたり。

（七一）ハナセセリテフ（Parnara pellucida, Murray）　翅は前種と殆んど同色にして少しく黒く、前翅の中央に帶黄白色の斑紋列ありて不規則なる半環狀をなし、尚其後方に一紋あるを常とす。後翅の中央にある同色の斑紋は一直線をなさずして、多少出入せり。裏面は帶褐黄色にして、前翅の後翅に重なれる部は暗褐色をなし、後翅の斑紋は銀白色を呈す。稻葉、養老、不破、武儀、郡上、加茂、惠那、益田吉城の九郡に於て獲られたり。

（七二）イチモジハナセセリテフ（Parnara guttata, Brem. & Grey）　此種は前種に頗る酷似すれども翅の幅は狹くして長く、後翅の斑紋は一直線をなすを以て、容易に區別し得べし。幼蟲は稻の大害蟲なるを以て有名なり。安八郡を除き縣下各市郡に於て非常に多數を獲たり。

（七三）ウラボシハナセセリテフ（Parnara jansonis, Butl.）　常に山地に産するものにして、翅の地色はコハナセセリテフに類似し、前翅には八個の帶黄白色の斑紋相列りて不規則なる半環狀をなし、後翅には二乃至三箇の細點を有す。裏面は表面に比し著しく黄色を帶び、前翅は表面に等しく、後翅には數箇の銀白色の斑紋を有す。今回吉城郡に於て二頭獲られたり。

（七四）オホチヤバ子ハナセセリテフ（Isnene aquilina, Speyer.）　弄花蝶科中大形種に屬する者にして、茶褐色に帶褐黄色の鱗毛を有し、普通無紋なれども、前翅の中央に數個の淡黄色の斑紋を有するものあり。裏面は表面より色稍淡く、前翅に多少淡黄色の斑紋を有す。今回益田郡に於て一頭獲られたり。

（七五）クロハナセセリテフ（Daimio tetys Men.）前後兩翅共一樣に黑色にして、切々なる白色の緣毛を有し、前翅に大小數個の白色斑紋あり、裏面は殆んど表面と同一なれども色稍淡く、後翅の中央稍基部に近く、微かなる白斑を有し、胴軀及後翅の基部に帶紫白色の鱗毛を有す。此蝶は夏季山部に多くして、靜止の時は翅を水平に橫たふ。今回武儀、郡上、惠那、大野、益田の五郡に於て獲られたり。

以上述べたる處のもの丶採集數を表出すれば、即ち左の如し。（表中△印は十頭以上のものに限る）

番號	種名	岐阜市	稻葉郡	羽島郡	海津郡	養老郡	不破郡	安八郡	揖斐郡	本巣郡	山縣郡	武儀郡	郡上郡	加茂郡	可兒郡	土岐郡	惠那郡	大野郡	益田郡	吉城郡
六六、	チヤマダラハナセセリテフ	｜	｜	｜	｜	｜	｜	○	一	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜
六七、	クロスヂハナセセリテフ	｜	｜	｜	｜	｜	｜	○	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	二	｜
六八、	キマダラハナセセリテフ	｜	一	｜	｜	二	｜	○	一	一	｜	｜	｜	｜	一	｜	｜	｜	｜	｜
六九、	ヒメキマダラハナセセリテフ	｜	｜	｜	｜	｜	｜	○	｜	｜	｜	｜	｜	一	｜	｜	｜	｜	｜	｜
七〇、	コハナセセリテフ	｜	｜	｜	｜	｜	｜	○	｜	｜	｜	一	｜	三	｜	｜	｜	｜	｜	｜
七一、	ハナセセリテフ	｜	一	｜	｜	二	二	○	｜	｜	｜	三	二	四	｜	｜	一		四	一
七二、	イチモジハナセセリテフ	二	△	△	二	△	△	○	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
七三、	ウラボシハナセセリテフ	｜	｜	｜	｜	｜	｜	○	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	二
七四、	オホチヤバ子ハナセセリテフ	｜	｜	｜	｜	｜	｜	○	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	｜	一	｜
七五、	クロハナセセリテフ	｜	｜	｜	｜	｜	｜	○	｜	｜	｜	一	三	｜	｜	｜	一	二	二	｜

◎桑のシンムシ調査に就て

名和昆蟲研究所飼育主任　森　宗太郎

桑の心蟲は桑樹の一大害蟲にして、本年五月三縣聯合して一大驅除を勵行せんとの議ありき。當局者の苦心思ふべきなり。然りと雖も、尙は驅除其の效を奏せず、益傳播の患あるは、實に寒心に堪へざるあり。而して本縣下に於ける被害地を擧ぐれば可兒、土岐、加茂、惠那、武儀、郡上の諸郡及飛驒一圓な

り。該地方は蠶業盛んにして、家計の半ばは之れが收利に仰ぐもの多し。特に飛驒地方に於ては、殆んど專業とするもの多く、蠶業の豐凶は、直ちに家計上に影響を及ぼすや大なり。然るに近年に至り、害蟲夥しく、特にクワノシンムシの如き、加害激甚にして、其慘狀實に憐むべきものあり。今其被害反別を擧ぐれば左の如し。

可兒郡	五十三町九反步	土岐郡	三十一町三反步	加茂郡	三百五十六町七反步
惠那郡	九十八町九反步	武儀郡	三百八十三町步	郡上郡	九百七十七町五反步
吉城郡	二百九十一町四反步	大野郡	二百三十二町一反步	益田郡	千百七十七町二反步

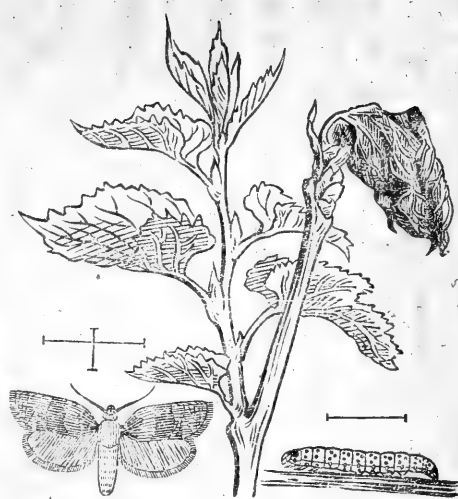
右の表は、郡別被害反別を示したるものなり今武儀郡に於ける被害を町村別に示せば次の如し。

上之保村	六十五町步	坂東村	三十町步	菅田町	五十町步
中之保村	三十四町步	神淵村	五十八町步	上麻生村	二十八町步
金山町	三十八町步	下之保村	二十五町步	富之保村	四十四町步
上有知町	十町步				

右の表により推せば、益田郡に接する地は被害多く、漸次西南下するに從て減少するの感あり、是れ益田郡は該蟲の原產地とも目指する處にして、被害最も多く、漸次武儀郡地方に傳播せしものなるや明なり。而して年々之れが驅除を勵行するも、效果意の如くならざるは、當局者の大に怪む處となれり。是れ該蟲の習性經過を究めず、啻に驅除に力を盡し、研究を對岸火視し、調査に重きを置かざるの罪ならんと信ず。余茲に着目し、一昨年是れが調査に着手せしより、經過習性の大要を知り得たるも、唯研究所に於て飼育研究を遂げしのみにて未だ被害地との比較研究の途を得ざりしが、本年又幸に之れが調査の道を得たれば、武儀郡に出張して、調査に着手し、略ぼ其概要を知り得んとするの中途に於て、不幸にも病魔に犯され、研究意の如くならざりしが、十月に至り全快と共に、之れが研究を繼續せしに、

豫想に大差なきを喜ぶと雖も、研究尚淺きを以て、茲に明言するを憚るなり。然れども今研究の大要を記して參考に供するは、敢て無用に非らざるを信じ、聊か記する所あらんとす。

抑之れが驅除を行ふも好果を收る能はざるは、必ず敵蟲を共に殺戮するの罪に非ざるなきかを疑ひ、先づ經過を知ると共に、敵蟲の歩合を知らんと欲し次の如く之れを試みたり。「一、數樹の被害芽を自ら摘

シンムシ發育の圖

採して、詳細に其數を調べ、一ツの箱に入れ置けり。二、農家の驅除せし芽の同數を他の箱に入れ置けり」。然るに第一は四割五分、第二は八割强の寄生蜂發生せり。之れを以て見るに、寄生蜂の意外に多くして、同時に農家は此の優勢の味方を殺戮せるものなり。而して第一は寄生蜂割合に尠なく、第二の割合に多きは、之れ他なし、第一即自ら摘採せしものは被害芽の枯黄せしと否らざるとを問はず、苟も該蟲の蝕入せりと認むるものは悉く摘採せしものにして、第二の農民の摘採に係るものは、枯黄せしもの即ち只目に付き易きもののみを摘採して、蟲の小さき爲め被害芽の未だ枯れざるものは其儘に殘しあるを以て、同じく被害芽を摘採するも、茲に大に其差異を生じたる故ならん。該蟲は發生時期の不同なるにより、越冬せし幼蟲に大小の差甚しく、其大なるものは翌春桑樹の發芽に際し加害多く、直に桑芽を枯死せしむる者も、蟲体の小なるものは芽に蝕入するも、食量の少なき爲芽の枯黄すると遲し寄生蜂は、蟲体の大なるものに多く寄生し、蟲体の小なるものには甚少なし。然るに農家の驅除せし被

害芽は蟲体大にして、芽は枯黄し、蜂に寄生せられしもの甚だ多きものあれば、折角の驅除も効果を收むる能はず、却て寄生蜂を減少せしむるを以て、益々該蟲の播殖する所以ならん。然れども一般農民に向て、未だ枯黄せざるものと雖も被害芽は悉く摘採せしめんとするは、到底行はれざるの業なり。然らば如何なる方法を採らんか、余は秋期に於て桑葉を摘採するに利ありと信ずるものなり。然るに武儀郡に於て、昨年秋期に驅除したる結果（當時は被害葉を見出すは困難なるを以て悉く摘採せり）を見るに桑樹は先端（中刈桑）半ば枯死し、蟲は尚減少せしむる能はざりしと、余亦昨年之れを試みしに、同結果に出でたり。之れ余が研究の尚淺きに基因するものにて、深く習性を究めざるの罪あるを發見したれば余は尚秋期驅除を行はんとするものなり。先づ之れが經過を示せば、余が武儀郡に於ての調査によれば七月中旬頃、盛んに羽化して葉裏に產卵す。卵は葉の主脈と支脈との交叉附近に一個つゝ產付し、約一週日にして孵化し、葉裏の葉綠素を食し、常に糸を吐きて蜘蛛の巣の如くなし、其中に棲居す。故に表面よりは容易に見る能はず、且其產卵當時、春刈桑は大概三四寸に成長し、夏刈は最早切取しもの多ければ、勢ひ春切に產卵せざるを得ず。是れ春刈は夏刈に比し、害多き所以なり（若し之れを立て通し桑に仕立つれば其害實に夥しく殆んど收葉する能はざるに至る）。漸次成長して、九月中旬頃より葉を辭し枝の基部即株基に來り、其樹皮又は芽の附近に於て粗薄の白き繭様物を造り、茲に越冬を遂げ、翌春出でゝ芽を害し、六月頃蛹化、七月中旬最も盛んに羽化す、之れ經過の大要なり。而して幼蟲の寄生蜂に斃さるゝものは、秋期に甚少なく、春期に多く、又產卵當時、桑枝の三四寸成長したるも、彼の性質として、產卵は必ず判然たる葉主脈、支脈間に產卵し、芽には產卵せず。而して芽は漸次成長するを以て實際產卵されあるは枝の中央以下なり。然るに是は充分成長したる枝に就ての意なるも、株中には短か

き春切の殘にありては、殊に甚しく産卵するを以て、是れ余が秋期驅除に利ありと信ずる所以なり。昨年の不結果に終りしは、摘採時期の遲れたるものにして、八月下旬より九月中旬の間に行ひたらんには必ず好果を得るならんと信ず。其頃は尙ほ木の成長盛んにして、悉く葉を摘採せば桑樹の發育に至大の關係を及ぼし、昨年の如き半ば枯死するの恐なきにあらず、然れども玆に最も面白き一事あり、即ち枝の二三尺に成長せしものは、該蟲の棲息場所枝の半ば以下にありて、半ば以上には殆んど稀なるの事實是れなり。故に該蟲の驅除としては、半以下の葉を摘採すれば足れりとす。然れば樹の成育を妨ぐること尠なく、且秋蠶の期節なれば、寧ろ秋蠶を奬勵し、枝の半ば以下の葉を悉く蠶兒に與ふる策を講せば、所謂一擧兩得にして、其利益大なるを信ず。而して玆に注意を要するは、蠶下は必ず肥料壺に投じ腐熟せしむるにあり、若し然らずして其儘桑畑等に入るゝときは、其効果の顯はれざる明かなれば、豫め注意すべきことなり。

講話

◎エンドノキリムシ糖蜜驅除試驗

名和昆蟲研究所助手　石田和三郎

編者云、本篇は先月の水曜昆蟲談話會席上に於て報告せられたるものなり。エンドノキリムシ糖蜜驅除法に就ては、石田助手主任となり、昨年より專ら調査研究中にして、玆には唯其一部なれど、本欄に收めて讀者の參考に供せんとす。

糖蛾類地蠶蛾科に屬して、豌豆、蕎麥其他有ゆる蔬菜類等を蝕害して、農家を苦ましむる所ろの大害蟲エンドノキリムシは、其成蟲が非常に糖蜜を嗜むの性質あるを以て、此特性を利用して、其驅除豫防の

方法を研究せんが爲、昨年十月該蟲第二期發生の當時、其被害地たる則武村の地を撰みて、之れが試驗を行ひたる結果の概畧は、其當時既に報告し置しが、本年も亦此試驗を繼續し、第一期發生の成蟲につき、糖蜜誘導驅除を試みたるを以て、其成蹟を不完全ながらも、聊か玆に報告することゝせり。

第一期エンドノキリムシ糖蜜誘殺驅除成蹟表

採集月日	雌數	雄數	合計
四月八日	〇	一	一
同九日	〇	三	三
同十一日	一	六	七
同十二日	五	二二	二七
同廿一日	九	一四	二三
同廿五日	一	六	七
同廿六日	一七	九	二六
同廿九日	六	一五	二一
同卅日	〇	三	三
五月一日	一	二	三
同二日	一	〇	一
同四日	三	一	四
同八日	一	五	六
同九日	二	二	四
同十日	一	〇	一
同十一日	四	五	九
同十四日	四	三	七
同十五日	二	三	五
同十六日	〇	一	一
同十七日	〇	〇	〇
同十八日	一	〇	一
同十九日	〇	〇	〇
計廿二日間	五九	一〇一	一六〇

右試驗によれば、成蟲は四月八日より出で始め、五月十八月に終り、採集日數二十二日間に總計百六十頭を得たるが、其中雄蟲は雌蟲よりも五割强の多きを占め一夜雌雄平均七頭の割合に當れり。之を昨年十月第二期發生に於ける採集試驗に比するに、非常に減少したるは、一は昨年第二期に於て後れたる幼蟲は晩秋の寒氣に襲はれ、越冬中の蛹は又幾分か凍死せし等の理由あらんも、一は昨年來同所にて多數の成蟲を誘殺したるも、又其一原因ある事は信じて疑はざる所なり。

今前期採集の雌蛾十六頭を採りて、腹部を解剖し、卵巢内にある卵粒數を撿せしに、左の如き結果を浸はせり。

エンドノキリムシ雌蛾腹中の卵粒數調査表

調査番號	成熟卵數	不成熟卵數	合計
一	五四二	一二四	六六六
二	四二九	二四〇	六六九
三	三二五	一一三	四三八
四	四一三	一七〇	五八三
五	四二八	三一二	七四〇
六	四六九	二四五	七一四
七	三二七	一一二	四三九
八	五一六	一〇三	六一九
九	五二七	一二〇	六四七
一〇	三八四	一〇六	四九〇
一一	五二六	一一四	六四〇
一二	四三二	一四六	五七八
一三	三五九	一一九	四七八
一四	三八六	一一〇	四九六
一五	一七五	九七	二七二
一六	二一六	六一	二七七
合計	六六五四	二二三二	八八八六

右調査の結果によれば、卵數の最も多きは五號に於ける七百四十粒、最も少なきは十五號に於ける二百七十二粒にして、一頭平均五百五十四粒を有す。而して卵巢内にある卵粒の成熟不成熟の割合は、藏卵の多寡に依り、成熟粒數は不成熟粒數よりも殆ど三倍の多きを認め、畧ぼ一定の割合を保ち居るものゝ如し。

右の如く糖蜜を慕ひて集り來る雌蛾は、多數の卵粒を有し居るものなれば、多少産卵せしものあるや將叉産卵前の者多きやを試みんが爲め、其産付せし卵塊十八個を採て、其粒數を調査せしに、左の如し、

エンドノキリムシ卵粒數調査表

調査番號	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	合計
一塊卵數	六九一	四八八	二二六	一七〇	一八八	一〇六	一四五	二二二	一八五	一三三	一四六	三五八	三八	三五	四二六	七三	九一	一四六	三八三六

右表に據れば、一卵塊の最多數は一號に於ける六百九十一粒にして、最少數は十四號に於ける三十五粒平均二百〇一粒なり。尙所員棚橋氏の調査せし結果をも、參考の爲め掲載すれば左の如し。

調査番號	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九	二〇	二一
一塊卵粒數	二〇	五八	九一	一七五	二九七	二三九	二三三	五五	二一六	二五〇	一三八	二二	一七六	一九六	二六六	三九一	二七五	六六	五八	三二八	三七一

調査番號	二二	二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九	三〇	三一	三二	三三	合計	最多	最少	平均
一塊卵粒數	三四四	四三八	三九五	三六六	二八六	三五	八三	六七	一六五	一三六	四一	一三三	六五六五	四三八	二〇	一九九

右棚橋氏の表に據るも、余が調査の結果によるも殆んど同一にして、以上の調査の結果により之を推考すれば、一雌蛾の産卵は大抵二、三乃至三、四箇處なるが如し、果して然らば、其糖蜜により集來する處の者は、産卵前若くば一、二塊の産卵を終りたる者に多きを知るに足るべし。隨て其効果の多大なるべきを信ず。故に從來試驗し來りたる夜中糖蜜採集の方法と、他に於て行ひ居る諸種の夜中糖蜜採集の方法とを比較して、其優れる處の方法を採らんとて、下の如き試驗を行ひたり。

第一試驗　此試驗は、甲乙二區に區別し、當所にて從來行ひ居る方法を甲區とし、厚紙を以て漏斗狀に造り、木又竹の端に挾みて、其中に糖蜜を塗入したる者を、甲區の近傍一間を距てたる所に立て置きたる者を乙區となし、孰れの糖蜜に多く集り來るやを比較したるものなり。但其採集場所は各八ヶ所宛とす。其成蹟は左の如し。

採集月日	四月十一日	同十二日	同十三日	同廿一日	同廿五日	同廿六日	同三十日	五月一日	同二日	同五日	合計
甲區採集數	四	七	一三	一〇	九	四	〇	四	三	一	五五
乙區採集數	〇	〇	〇	一	一	〇	〇	〇	〇	〇	二
合計	四	七	一三	一一	一〇	四	〇	四	三	一	五七

備考、本試驗は甲區五十四頭に對する、乙區は僅かに二頭なりしが、而も其二頭は共に雄蛾なりき。

第二試驗　此試驗は第一試驗と同樣なるも、甲區と乙區の距離を遠くして、甲區は從前の場所を用ひ、乙區は被害地の畑中に於てす、但甲乙共に八ヶ所とし、其結果左の如し。

採集月日	四月九日	同十一日	同十二日	同廿五日	同廿六日	五月一日	同二日	同五日	同八日	同十一日	同十四日	合計十一回
甲區採集數	三	一四	一〇	一	四	七	三	二	四	三	二	五三
乙區採集數	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
合計	三	一四	一〇	一	四	七	三	二	四	三	二	五三

第三試驗　此試驗は當所にて普通行ふ處の夜中糖蜜誘殺法を甲區とし、甲區の方法に依りたるものゝ近傍に点火し置きたるものを乙區として、害蟲なるエンドノキリムシ蛾來集の多寡を比較したるものなり。

採集月日	四月十一日	同廿日	同廿九日	同三十日	五月二日	同四日	同八日	同九日	同十一日	同十四日	合計
甲區採集數	二	七	七	六	一〇	五	七	二	四	二	五二
乙區採集	〇	三	二	二	三	二	一	〇	〇	一	一四
合計	二	一〇	九	八	一三	七	八	二	四	三	六六

備考、甲區に集り來る所の蛾は糖蜜に溺れ、擧動不活潑なるも、乙區に集り來る者は活潑にして、採集困難なるが如し。而して甲區採集數五十二頭に對する、乙區は採集數僅に十四頭の不結果を來したるも試驗外なる尺蠖蛾類は、比較的多く集り來る樣見受たり。

以上の試驗に據り第一第二の試驗に於ける漏斗形糖蜜採集は、驅除豫防の方法としては全然不結果にして、被害地近傍に、殼斗科植物等の如き外皮粗にして脂の出でざる樹木あるに於ては、其樹幹に糖蜜を塗抹して驅除するの方法尤も効あるを認めたり。茲に又該蟲は糖蜜の外燈火を親しむの性あるを以て、糖蜜誘殺に加ふるに点火せば一層の効を奏すべきならんとの想像より、第三試驗を成したるも、之れ又却て蛾の性質を活潑ならしむるの傾きありて、意外の不成蹟を見るに至ると同時に、次の如き試驗は大に勞力を省くべきならんとて、其試驗をも合せて實行せる事となれり。

第四試驗　此の試驗の方法は常に尤も多く集り來る樹幹十二本を撰みて、一本の樹幹の兩面の同し高所に、同し分量の糖蜜を甲と乙或は甲と丙に區別して比較し、其効力を試みたり。但甲は當所に於て普通行ふ所の夜中糖蜜採集法、乙は甲の如き方法なるも、糖蜜中には百分の一の毒藥亞砒酸を混合したるもの、丙は甲の如き方法なるも、糖蜜中には百分の二の亞砒酸を混合したるものなり。

倘念の爲め、乙區及丙區に集り來る蟲は、毒の爲麼死或は魔醉して、叢中に落ち不明に歸せん事を慮りて、其下に一面に布を敷くと同時に甲區にも之を敷きたり。其成蹟表は左の如し。

糖蜜驅除毒藥混和試驗成蹟表

採集月日		四月廿一日	同廿二日	同廿四日	同廿五日	五月一日	同二日	同四日	合計	五月八日	同九日	同十四日	同十五日	同十八日	合計	總計
甲區採集數	エンドノキリムシ	一	四	二	二	一	一	一	一二	四	二	四	五	四	一九	三一
	雑蟲	四	六	七	四	二	五	四	四一	三	四	四	二	二	二四	六五
乙區採集數	エンドノキリムシ	〇	〇	〇	一	〇	〇	〇	一							一
	雑蟲	〇	二	〇	一	二	〇	〇	五							五
丙區採集數	エンドノキリムシ									〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	雑蟲									一	二	二	〇	〇	五	五
合計	エンドノキリムシ	一	四	二	三	一	一	一	一三	四	二	四	五	四	一九	三二
	雑蟲	四	八	七	五	三	五	四	四六	三	六	六	二	二	二九	七五

備考、四月二十二日より五月四日迄の七回間に、甲區には十二頭のエンドノキリムシと、四十一頭の雑蟲來りたるも、乙區にはエンドノキリムシ蛾一頭と、雑蟲五頭のみなりしが、甲區より採集せし蟲と、乙區より採集せしものとを同時に、空氣の流通自在なる壜に、各別に收め置きて、其擧動を試驗またるに、乙區(毒藥百分の一を混合したる者)より採りたる者は一旦衰弱の狀を呈したるも、三十五分間乃至三時間の后に於て、大抵は元氣恢復して甲區の者と同しく、更に効なきものと見做して、其れより丙區(毒藥百分二を混合したる者)に取替へて試驗したりしに、是又甲區に於てはエンドノキリムシの蛾十九頭、雑蟲二十四頭なるも、之に對せる丙區にありては雑蟲五頭のみなりしが、又前の如く壜に收めて擧動を熟視したるに、前同樣れ狀を呈し、暫くにして元氣恢復したり。然るに甲蟲サビ

キコリムシのみは少許の異狀だも呈せざりき。

右に依りて考ふる時は、毒藥の分量を今少しく增加するに於ては、之が糖蜜を吸收する昆蟲は或は死するならんも、彼等の觸角は非常に發達したるものと見へ、無臭同樣にして、神經過敏なる鼠さへ之が爲に倒さるゝ程の亞砒酸百分二の分量なる糖蜜にさへ集り來らざる程なるを以て、多量の毒藥には殆んど無効なるべく、從て人類其他の者に對しても危險の恐あるを以て、到底實行する能はざるものなりと信す。以上諸種の試驗は、研究の時季甚だ短かく且つ不備の點も多ければ、今後尙出來得る限りは回を重ねて試驗を繼續するの目的なるも、第二期發生に於けるエンドノキリムシの成蟲は、八月十二日に始めて一頭を見附けてより、漸次其數を增加して、目下は一夜に數十頭を捕殺する事を得る程なるを以て、こは他日報告すべきも、兎に角、不完全ながらも玆に記述して、一は參考に供し、一は諸君の叱正を乞て、一臂の助力を願はんとする次第なり。

◎六足蟲彙纂（戊の卷）

在東京　長野菊次郎

（二十七）小さき昆蟲の大害　自然は往々吾人に敎ふるに、物の大小は其の關係の大小を示す標準にあらざることを以てせり。即ち昆蟲類中に於て最も慘害を逞ふするものは、大形のものよりも寧ろ小形のものにして、小なるものほど却て大なる損害を及ぼすことは、一見不條理に似て不條理にあらざるなり。彼の葡萄蝨(Phylloxera)の如きは、千八百五十四年に米國ニユーヨークに於て初めて發見せられたるものなるが、千八百六十三年には佛國に移轉せられ、漸次蔓延して、葡萄の栽培に大打擊を與へたり。即ち千八百七十九年に之が害を被りたる地面は、殆んど三百萬エーカーに達し、全く葡萄の栽培を廢して他の用に供せざる可からざるに至りぬ。然れば之が研究精査の爲めに、佛國政府が支出したる金額は、年々殆んど貳拾萬弗に及び、之が適當なる救助法の發見につきては、六萬圓の懸賞をさへ辭せざりけり（ウ

キード氏の昆蟲世界）

（二十八）昆蟲と鳥と　合衆國及び加奈太に於て、年々害蟲の爲めに受くる損害は、殆んど四億弗の巨額に達すと云へり。此の如く、昆蟲は實に植物の自然の大敵なるが、鳥類は又昆蟲の自然の敵とも云ふべきなり。今一羽の鳥が、一日平均二十五疋の昆蟲を捕獲するものとし、假に一エーカーの地に僅か一羽半の鳥が棲息するものとすれば、ネブラスカ（Nebraska）には七千五百萬の鳥の存すべき理にして、之が爲めに驅除せらるゝ昆蟲は、毎日實に十八億七千五百萬疋なる譯なり。今昆蟲の數十二萬を以て一ブッセル（殆んど我國の二斗許）を充すとすれば、一日に鳥の食量となるべき昆蟲は一萬五千六百二十五ブッセルに當り、六十日間には九十三萬七千五百ブッセル、百五十日間には二百三十四萬三千七百五十ブッセルに當る譯なり。抑も此計算たるや、鳥が一日に要すべき昆蟲數の最低額を批準とせるに關はらず、尙此大數あり、然れば其實に至りて一層の多きを加ふるや知るべきなり。今其一二例を擧げんに、ヤマガラの一種（Chickadee）の四羽の胃中にはカンカー、ウヲーム（Kanker worm. 尺蠖類にして雌の成蟲は翅を有せざるもの）の卵千〇二十八個を含み、他の四羽には同蟲の蛾の雌百五疋と、六百の卵とを含みたることありと云ひ、又一羽の郭公の胃中に、百〇一疋の馬鈴薯甲蟲（Potato beetles）及び五百疋のカメムシ類（Chinch bug）を含み、又朝の六時に射撃せられたる黄嘴郭公（Yellow-billed cuckoo）が、既に四十三疋のテンマクケムシを取り、又コマドリがケバイ（Bibio）の幼蟲百七十五疋を食ひたりき等の事實ありしことを知らば、實に思ひ半ばに過ぎん（ウキード氏の昆蟲世界）

◎昆蟲に關する隨感隨筆（第五回）

昆蟲翁

（卅一）蚊帳使用の遲速　大阪府天下茶屋に於ては、三月彼岸の頃より最早蚊帳を用ひらるゝ由を聞知せり。然るに翁は五月初旬、三河國御油町に泊したることありしに、同地にては已に四月末より蚊帳を用ひ居ると云へり。當岐阜市に於ては、六月始め、漸く蚊帳の準備を爲す位なり。僅五里を隔る大垣町は、岐阜市に比して、約一ヶ月遲く用ひて早く收むるの傾きあり、又飛驒國に到れば、多く蚊帳を用ひざる所あり、故に強て蚊帳の效用を問はゞ、恐く晝間蠅を防ぐものならんと答ふることを信ず。因に記す本年岐阜市京町に於ては、十月始めより全く蚊帳を廢せり。

（卅二）現蟲調査の必要を感ず　曾て某氏は廿四鳥羽蛾を採集したりとの報知あるを以て、一度現蟲を

親しく視たき故送附方を依頼したるに、遺憾ながら鼠害に罹りたれば、再び採集の上送るべしとの返信を得たり。然るに其後一頭を得たりとて、態々郵送せられしを以て、直に開封親しく視るに、豈に圖らんや、廿四鳥羽蛾にあらずして十鳥羽蛾即ち普通の鳥羽蛾なることを始めて知れり、依て考ふるに、最初鼠害に罹りて失ひしものは、果して廿四鳥羽蛾なりしや否や、疑を生ずるに至れり。故に分布調査には必ず現蟲を以て摸範標本と比較して誤りなきを認めたるにあらざれば、決して記入することを能はざるを確信せり。

(卅三)光線の焼点に昆蟲の群集　　昨卅五年八月、全國害蟲驅除講習會を例の如く開き、夜の自習の際敎室に於て上圖の如く十一個の洋燈を位置正しく点火せしに、某夜天井の紙面に無數の小形昆蟲（雙翅類に屬するもの尤も多し）の(甲)点に群集することを發見したれば、試みにイ、ロ、ハ、ニ、ホ、の五燈火を消滅せしに、昆蟲は直に變動を起して漸次移轉を始め、遂に(乙)点に到りて全く位置を定めたり。再び点火すれば、又始の如く(甲)点に複す、幾回試むるも規則整然たれば、實に愉絶快絶なりと、會員一同叫びたり。依て考ふるに、昆蟲は光線の焼点に群集するの性を有するもの丶如し茲に記して後日の參考に供す。因に記す、敎室は岐阜縣農會事務室の樓上にして、三間に八間の面積を有せり。

敎室平面の圖(イ)より(ル)迄は洋燈の位置(甲)(乙)は昆蟲群集の位置黒線は壁点線は窓

西　南　北　東　入口
イ　ロ　ハ　ニ　ホ　ヘ　ト　チ　リ　ヌ　ル　甲　乙

(卅四)紋黄鳳蝶の分布　　昨卅五年十月發刊の本誌講話欄に『モンキアゲハテフの分布に就て』と題して記載したることあり、然るに茲に本年開設の第五回內國勸業博覽會へ當研究所より出品の添出品として、鳳蝶科に屬する十三種の分布圖あり、其記載を茲に示せば、即ち(京都府)卅四年全國昆蟲展覽會出品、丹後、岩見勇藏。(兵庫縣)卅四年七月一日、神崎郡船津村、クサギ、雄、東郷隆次。(長崎縣)エッチ、プライアー。(三重縣)卅四年全國昆蟲展覽會出品、伊勢、三重郡、後藤幸吉。(愛知縣)卅五年、三河國渥美郡老津村幷に泉村、宮林桂次郎。(靜岡縣)卅二年八月十日、濱名郡蒲村神立、雄一、岡田忠男。(鳥取縣)卅五年八月十八日、氣高郡、山中、クサギ花、雄一、竹信虎藏。(岡山縣)卅四年二月、邑久郡昆蟲展覽會出品、名和梅吉實見。(高知縣)廿二年四月、高知、黒岩恒。(福岡縣)卅年八月、筑紫郡、長野菊次郎。(鹿兒

島縣）廿八年八月、大島郡名瀨、沖繩師範學校生。（沖繩縣）琉球、黑岩恒。以上は分布圖中より、採集年月日、採集場所、採集人名の部へ一府縣一ヶ所宛府縣順を以て記載せり。故に一府縣一ヶ所以上知られたる際には、欄外備考の部に記載するを例とす。今備考中記載のものを擧ぐれば、卅五年八月廿九日鳥取縣氣高郡山中クサギ花上に於て見る、又同縣師範學校教諭高橋直義氏は同縣下に於て常に見且採集せしと云へり（名和靖記す）。沖繩縣八重山、五六月、黑岩恒。同縣同山五六月、三木原廣介。日本蝶譜中ブライアーは暖地即長崎、高知に產と云へり。卅五年五月、靜岡縣周智郡久努西村増田彌三郎採集す。三重縣後藤幸吉は卅二年紀伊にて採集の由。福岡縣企救郡彥山、矢野宗幹。以上。其後に於ける紋黃鳳蝶に關する件を記せば、本年八月廿三日附の中川純氏（姬路市下寺町）の報告に依れば『モンキアゲハ播磨にも產す。余昨廿二日自宅構內に於て、モンキアゲハ雌一頭を採集せり。播磨にては未だ該蝶を採集せし事を聞かざれば分布調査の御參考にもと報告せる次第なり。尙該蝶は六月八日馬關春帆樓庭內に於て、同月十日豐後速見郡立石村に於て、同月十一日同國大野郡西大野村山中に於て飛翔せるを見受たり』と。又本年五月初旬、三河國寶飯郡小學校冬季昆蟲展覽會の節、參考品の內に於て、同郡にて採集せしもの二、三頭を見たり。又本年八月、丹波國天田郡に於て昆蟲學講習の際、會員持參の標本中にて二、三頭を見たり。尙又福知山町公園城山に於て飛揚するものを僅に見たり。聞く所に依れば、紋黃鳳蝶は天田郡內には多數發生し居ることは確實なる所なり。其後鹿兒島縣農學校教諭生熊與一郎氏の話に依れば、同縣下に產することは勿論、柑橘類に產卵して其幼蟲をも得られしことありと云へり。茲に於て分布區域も漸く廣く、食餌の植物も初めて明瞭となれり。

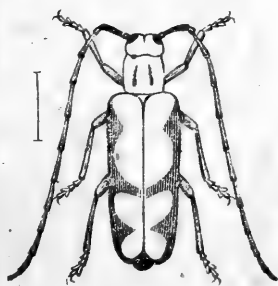
（卅五）旭天牛と壚田氏　當研究所には目下所藏の天牛科に屬する標本は凡そ二百種程に達するも、茲に壚田健藏氏は、當所の未だ有せざる所の一珍種の天牛を惠與せられしを以て、挿圖の上、略記を揭げて厚意を謝す。旭天牛の体長は三分三厘（頭より翅端までの長さを指す）、幅一分、觸角十一節より成りて体より長きこと一分、第三節迄は黑くして太く、第四節以下は細くして黃褐色を呈す。複眼は大にして腎臟形をなし、黑色を帶ぶ。額面帶黃黑色にして、前胸は殆んど方形にして頭部と共に黃色に、中央縱に隆起し、其左右に一條の黑色縱線あれども餘り判明ならず。翅を疊むときは形長方形にして、前胸より幅稍廣く、表面黃色に中央及其上下に矢筈形の黑斑あり、中央にあるものは判明なれども、上方にあるは不明にて、下方にあるは稍判明なり。側面の下方は頭胸部を通じて黑色を帶び、肢は三對共に暗黃色

にして長さに大差なく、腹面は黄白なり。此種は明治卅六年七月三日、岐阜縣郡上郡上保村壚田健藏氏が福井縣大野郡下穴馬村字旭に於て、栃の葉に居りしを採集せられしものなれば、紀念の爲め採集場所の地名を執りて旭天牛（アサヒカミキリムシ）の新稱を附せしは、全く斯學の爲は素より、特に壚田氏には爾後旭日の登るが如き勢を以て、斯學に勉められんことを希望するの餘り、茲に此の名を命せし所以なり。

（卅六）鳳蝶蛹化の際に於ける變色　本年鳳蝶（アゲハノテフ）の幼蟲を數十頭飼育して、蛹化の際に於ける變色の有樣を試驗したるに、食餌とする枳殼の綠枝に於て蛹化する時は、悉く綠色の蛹を得しも、黒褐色に枯死したる苹樹の枝に於て蛹化せしめたるものは、悉く黒褐色の蛹となれり。又白色の壁面に於て蛹化せしめしに、幾分か薄き綠色の蛹を得たり。其他種々の試驗を爲したるも、材料乏しく、準備不充分の爲め報告する程の結果を得ざるも、明年は數百の原料を得て試驗するの考へなれば、何れ相當の結果もあるならんと信ぜり。

（卅七）窃切蟲は卵にて越冬す　美濃國揖斐郡北方村森本常三郎氏には、昨卅五年に於て、窃切蟲數百頭を飼育して、四百個以上の繭を作らしめ、其羽化したる蛾の産卵は全く越冬せしことを證せられたり。

（卅八）胡蘿蔔靑蟲の寄生蜂　胡蘿蔔の靑蟲には寄生蜂數種ありて、大形種は大抵一頭の宿主より一頭の寄生蜂出づるも、小形種に至りては實に意外の最大多數を出すとあり、即ち本年十月廿三日長期害蟲驅除講習生中井藤助氏の調査したる所に依れば、一頭の宿主を解剖して貳千六百卅三頭の寄生蜂の蛹を得、又去る卅四年九月に於て、助手名和愛吉の調査したる際にも殆んど同數を得たり。恐く一頭の宿主より是程多數の寄生蜂を出すもの多からざるべしと信ず、尤も始めには多數の成蟲來りて、同時に靑蟲即ち宿主に集りて産卵せしに外ならず。

アサヒカミキリムシの圖

◎昆蟲界の花壇

在米國　名和梅吉

（四）貝殼蟲附の果實に就て　余は曾て本邦にありし時、年々梨其他柑橘類等果實の各市場に現はるゝや、貝殼蟲の附着、加害の程度如何を調査し、以て該蟲加害の多寡を豫想せし事ありき。故を以て亦當米國に於ても同一の關係を調査せばやとて、夏季以來、加洲桑港市に於て市場に現はるゝ所の苹果、梨及

桃等に付、該蟲類の附着加害の狀況に注意しつゝありしに、最初の程は殆んど貝殼蟲の附着を認知し得ず、流石は害蟲驅除に注意の到れる國丈に其効果の著しき事を感じたり。然るに其後追々に市場に現はるゝ果實の多數なるに從がひ、獨り貝殼蟲のみならず、果實內を蠶喰する所の蛾類の幼蟲が加害せるものさへ多くあるを認知するに到りたり。茲に於て余は尙其貝殼蟲の加害の程度を知らんとて、或時は某店に入りて細驗する事再三に止まらず、回を重ねる度每にその加害の度こそ測かられて、最初の感は全く反對の結果となり、增々害蟲驅除の困難なる事を思ふ樣になりたり。さはいへ特に余の讀者諸氏の注意を促さんとする一事こそ其間に存せり、即ち他にあらず、本邦に於ける果實販賣店に就て見れば、一目瞭然、果實の表面に點々貝殼蟲の附着し居るもの有りと雖も、當地にありては全く然らずして、貝殼蟲の附着を一目の下に認知し得べきものは、殆んど皆無とも云ふべき程にてありき。然らば如何になり居るかと云へば、貝殼蟲附着の者は、總てろが貝殼の剝離しある事にて、一目之を認知し難くなり居りて恰も無害の觀を爲せり。さりながら此處に覆ふ可からざる標徵のあるありて、其加害の狀態を豫想し得らるゝこそ如何ともすべからざるなり。即ち其標徵とは各果實に近接して細驗すれば、該蟲附着の證跡の殘存する事なりとす。そも此剝離の一事は該蟲の蔓延を妨止するの一方と見て可ならんか、故に余れ本邦に於ても、亦貝殼蟲驅除と共に、一方には斯の如くして豫防に注意する迄に到達せんことを望む。

(五)米國に於ける松樹害蟲數　今米國の昆蟲學者パッカード氏の十余年前に調査せられし森林植物の害蟲中、松樹に發生加害するものを見るのに總數百七十種の多きを算せり。右百七十種中各目に分別せば、膜翅目に屬するもの拾參種(內拾壹種は鋸蜂科、二種は樹蜂科)にて、鱗翅目は第二位を占め五十一種(內蝶類二種、天蛾類六種、蠶蛾類八種、尺蠖蛾類十五種、糖蛾類七種、小蛾類十三種)、雙翅目は二種にて共に蟲癭科に屬し、鞘翅目は第一位の數を占め八十一種(內金龜子科三種、吉丁蟲科十八種、天牛科二十種、象鼻蟲科十一種、小蠹蟲科十八種等は重なるものとす)の多きあり、而して有吻目に屬するものは二十三種(內貝殼蟲科及蚜蟲科は各六種宛、泡吹蟲科八種、木蝨科二種及薄翅浮塵子科のもの一種)となれり。以上の結果に依り考ふるに、各科中、本邦に於て未だ聞知せざる害蟲は蝶類に屬するものにて、他の科類に屬するものは殆んど本邦の松樹に於ても加害することを信ず。然し其種數に到りては、今此處に記述し能はずと雖も、兎に角、松樹害蟲の大要を知るに足らんか、記して參考の資となす。

(六)煙草螟蛉に就て　タバコノアヲムシと言へば、全く煙草のみを加害するものゝ如く思はるれども

實際に於ては然らず、各種の植物に發生して大害を來すことあり、本邦にては、煙草の外茄子科植物のホヽヅキ等に發生するのみにて、未だ他の栽培植物に加害せしを聞かずと雖も、當米國に於ては草綿、玉蜀黍及び赤茄子等を始めとして、荳科植物に迄加害を逞くし、非常なる損害を與ふる事ありと云ふ。現に余の實驗に依れば、玉蜀黍の如きは、市場に現はるゝもの丶内、十中八、九迄は、全く此種の加害を受け居るを以て見れば、該蟲の加害が如何に旺盛なるやは知るに足らん。

◎螟蟲驅防奬勵展覽會準備記事（第四）

蟲の家主人

（一一）切取稻莖所分の結果　昨卅五年九月廿一日のことありき、靜岡縣周智郡飯田村に於て、螟蟲の爲め稻の白穗となりたるものを切取りて一所に堆積したる所、實に山を爲せり。其莖數三十四万六千八百〇三本（今假りに一本の籾數百粒とせば、三千四百六十八万〇三百粒となり。一升を三萬八千粒とせば、九石一斗二升六合となり。是を六分摺とせば玄米五石四斗七升五合六勺となる。一俵金四圓五十錢即ち一升金十錢七厘とせば此代金實に五十八圓五十八錢九厘となる。實際に於ては尙ほ三分二の白穗殘り居ると云へり）あり、然るに暫くにして、醱酵熱の爲め螟蟲は殆んど莖中を出でたるを以て、石炭油にて稻莖と共に燒却せんとのことなれども、夫は農家の爲め不經濟なれば是非見合せられたし、願ば後日の好摸範を示したければ、此莖を悉く槌にて打ち、然る後堆積肥料として用ひられんことを深く希望し置きたるも、其後何等の報知もなければ如何なる結果を得られしものなるやを心配の餘り、今回飯田村役場へ照會したるに、左の報知を得たり『前號本欄の（一七）切取白穗の槌擊の部を參照ありたし』。

拜復、本月八日御投函の書狀、正に拜見仕候、陳は昨年九月御尋來の節、本村農會員一齊に切取たる白穗は、御教示に依り五、六ケ所に推積し、田方二毛作の元肥に施用候所、相當の効有之候趣、御陰を以て、本年は大抵各戸切取たる白穗は、矢張堆積し置き、茶又は二毛作肥料に施用候事に相成候、先は御禮旁御回報仕候也（卅六年十月十四日）。

（一二）螟蟲被害莖拔取り成蹟　愛媛縣周桑郡石根村農會に於て、螟蟲被害莖拔取を施行せられし成蹟を同縣農會報に報告せられしものを左に掲載せん。

八月廿七日より九月十日に至る十四日間、本會役員及村役場常置驅除委員出張監督の上、螟蟲被害莖懸賞抽籤拔取を執行す、其方法收集結果左の如し。執行中に被害莖三百本に對し番札一葉を與へ、抽籤當者に一本の抽籤を成さしむ。抽籤賞は、一等賞（金貳圓）一本。二等賞（金五拾錢）四本。三等賞（金貳拾錢）十本。四等賞（金拾錢）三十本。五等賞（金五錢）五十五本。六等賞（金貳錢）五百本。無賞

五百十本。收集莖數總計三十三萬三千本。人員三百二十六名。抽籤執行日九月十一日。但し當日不參者の分、無抽籤に因り、豫定金額より六拾錢を減ず、支出總計金貳拾壹圓拾五錢。

（一二三）南河內郡の螟蟲驅除　大阪府南河內郡農會三十五年度事業中、螟蟲驅除に關する件を中央農事報より左に轉載す。

苗代卵塊採取順序方法、同採取奬勵金交付規程等を定めて、小學兒童に採卵を實行せしめたり。其れが爲め、校數五十九校。採卵數百九十萬五千五百八十六塊。奬勵金額千百貳拾五圓七拾八錢五厘。交付人員四千百八十一人。平均一人交付額廿六錢九厘。卅五年末此奬勵の金が基礎となりて貯金となりしもの四千九百九拾八圓壹錢四厘、此一人宛貯金高壹圓拾九錢五厘となりて、大に貯金の美風を起せり、又其交付金は凡て切手貯金を以てせり。今螟蟲驅除に關する諸規程を左に抄錄すべし。

○南河內郡螟蟲卵塊及螟蟲蛾採取奬勵金交付規定　（第一條）本郡稻苗代若くは稻田に於て、螟蟲卵及螟蟲蛾を採取したるものには此規程に仍り奬勵金を交付す。（第二條）螟蟲卵塊は、明治卅六年七月末日迄に、小學校生徒が苗代及稻田に於て採取せしものを、小學校長を經て當廳へ送達したるものに限り、百卵塊に付五錢以內の奬勵金を交付す。但百塊未滿の端數は奬勵金を交付せず、本條の期限は時宜に仍り伸縮することあるべし。（第三條）螟蟲蛾は一部落以上の農家が、苗代內に於て、共同誘蛾燈を用ひ採取したるものに限り、百蛾に付四錢以內の奬勵金を交付す。但百蛾未滿の端數は奬勵金を交付せず。（第四條）螟蟲蛾を採取し奬勵金の交付を得むとするものは、實施の一ヶ月前に組合人名、苗代總反別及誘蛾燈數を記したる事業計劃書及經費豫算書を添へ、奬勵金交付申請書を郡長に提出すべし。（第五條）奬勵金は螟蟲蛾に就ては所屬町村農會長に、螟蟲卵に就ては小學校長に之を交付し、農會長又校長は更に之を各當事者に轉付するものとす。（第六條）小學兒童に對し交付する奬勵金は郵便切手を用ひ、校長は之れが貯金監督を爲すものとす。（第七條）本規程を施行するに方り必要なる細則は別に之を定む。

○南河內郡螟蟲卵及螟蟲蛾採取奬勵金交付規程細則　（第一條）南河內郡螟蟲卵塊及螟蟲蛾採取奬勵金交付規程に基く事務は、總て本則に仍り之を取扱ふものとす。（第二條）町村農會は誘蛾燈を點ずる計劃ある部落毎に、害蟲驅除豫防委員中豫め點燈主務者を撰任すべきものとす。（第三條）點燈主務者は日々受持區の誘蛾燈を檢し、其誘殺せし螟蛾は乾燥の上紙囊に容れ、蛾數及部落名を記し、甲號書式の目錄書を添へ、三日毎に之を町村農會へ送付すべし。（第四條）町村農會は螟蛾受付簿を調製し、收受したる蛾を點檢記入の上七日毎に取纏め、乙號書式の目錄を添へ、當廳へ送付すべきものとす。（第五條）小學生徒の採取せし卵塊は熱殺乾燥の上、百個一束とし、校長に提供し、校長は名簿を作り、之を取纏め五日毎に丙號書式の目錄を添へ、當廳へ送付すべきものとす。（第六條）小學校長は締切後一週間內に、丁號書式の報告書を作製し、當廳へ差出すべきものとす。（第七條）締切後三週間內に、校長は戊號、町村農會は己號書式の統計を作製し當廳へ報告すべきものとす。（第八條）左の各項に該當するものは、奬勵金を減殺若くは交付せず、一、

〈小學校生徒が螟蟲採卵を教員監督の下に於て行はざるもの、一、螟蟲蛾誘殺に方り、當廳より指示する方法を遵守せざるもの、一、前項の外規程又は當廳の指揮に違背せしもの。（第九條）本則の明記なき事項は、必要に應し、隨時郡長より之を指示す（書式略）。

○螟蟲卵塊採取に就ての注意（教員に對する分）　（一）監督教員一名に、兒童十名乃至十五名を以て一組とす、但高等小學校は全部尋常小學校は四年生以上に限るを可とす。（二）監督教員は兒童の卵塊を誤採せざると共に注意すべきは勿論、殊に苗代に損害を與へざる樣注意を要す。（三）村内苗代數に應じ、採取順序を定め、一般に普及するを要す、但第一回に於て綿密採取したる苗代の、第二回採取は一週日後に於てするも差支なし。（四）採取する大字の日割を定め、所屬町村長に通報するものとす（五）高等小學兒童は場合に仍り、便宜兒童居住の尋常小學教員に其監督を囑托するも差支なし。（六）實施に際しては、兒童毎に受持區域を定め、綿密注意せしめ、遺漏なきに及んで更に新區域に移らしむるものとす。（七）區域を定むるには左の圖の如くするを便とす（圖略す）。（八）各大字苗代の採卵日割を定むるに方り、必要なる苗代圖は、豫め村役場に就き寫し取り置かれたし。

（二一四）臺灣の螟蟲　日本帝國内に於て、苟も米作の土地には、二化生螟蟲の發生被害せざるはなし。臺灣は素より、近頃漸く米作の出來得るに至りし北海道に於ても、螟蟲の害は中々盛んなりと聞けり。又離れ島なる佐渡國に於けるも、螟害甚しく、隨分驅除の方法も發達し居る由。實に螟蟲の爲めには、神武以來稻に對して損害を與へ居るや明かなる所なり。是を驅除せんとせば、特に注意を要すべきなり。今茲に臺南新報の報ずる所の記事を掲載して、臺灣に於ける螟蟲發生の狀況を知らしめんとす。

○灣裡方面螟蟲發生狀況　去月廿七日灣裡方面に出張せる臺南廳總務課萱島技手の取調によれば、灣裡附近は白穗多く、稻莖を三節又は四節目より摘取りつゝあるのみにて毫も驅除の効を奏せず、仍て同技手は驅除の方法を指示し、人夫百五十名を集め、驅除に從事せしめたりと。安定里東堡内は甘蔗作を主として、米作尠なき地方にして、全体より觀察するときは、水田耕作法に似たるも、實際は畑作をなすが故に、既に收穫を終りたるもの多く、未收穫の分と雖も、數日の後收穫を終るべきもの多し、該方面は水害の結果泥沙を被むりたる爲め、牛畜の飼料たるにも適せざるべく、平年よりも高刈となしあるか、螟蟲は此殘株内に發生するもの多し、故に先づ之を刈取るの要ありと、善化里東堡は收穫濟となれるもの二百四十餘甲にして、目下尚ほ收穫中の所もあり、五六日後に收穫せんとする面積は約三百五十甲あり、此地方の被害面積は善化里東區五百四十甲、同西區六百甲、安定里東堡二百六十甲合計千四百甲なり、土人の唱ふる所によれば、溝播又は散播は被害少しと雖も、其土地は既に收穫後に屬し、今之を知るに由なしと。

通信

◎博覽會出品害蟲標本解說書（三等賞）

愛知縣　渥美郡昆蟲研究會

解說書

部類	番號	品名	出品人
一八	一	害蟲標本	渥美郡昆蟲研究會長　山田正

沿革　我が渥美郡は太平洋に面する半島地にして、氣候温暖、作物に適すると、併せて昆蟲類の繁殖も亦盛なり。古來稻作の害を受くるは浮塵子を以て其重なるものとし、之れが驅除を唱ふるもの又なきにしもあらざりしが、其被害の却て大なる二化生螟蟲に至りては、少しも注意するものなきが如く、往々秋收の際倒臥せる田面を見るときは、之れを秋浮塵子の害となし、天候の然らしむるもの亦如何ともなし難きとて放任したるもの丶如し。物變り星移り、時勢の進運は何時迄か此瞑暗を持續せしめず、茲に本郡田原町に岡田虎二郎なるものあり、幼にして農業に志し、身士族にして自ら鋤を採り耕耘に從事す。思へらく螟蟲の被害浮塵子に倍する事幾許ぞや、如何にもして一般に施行せしむべき簡單なる驅除法を發明せんと、多年刻苦研究の曉、採卵法を以て適切なる方法なりと信じ、自ら其方法を示して親友知己に實行せしめたるに、成蹟何れも顯著なりしかば益々之を普及せん事に勉め、時の郡長松井讓氏に陳述し、又一方には郡農會より奬勵の法を設けしめ、種々盡力の結果、郡內各町村に施行せしむるに至れり。而して其成蹟の良否如何を察するに、一般昆蟲志想の乏しき、往々誤解を生じ、爲めに良成蹟を示すもの少し。爰に於て岐阜縣より名和靖氏を聘し、郡內六ヶ所に害蟲驅除講話會を開設すること前後三ヶ年、稍や害蟲の何たるを辨知し、大に其効を奏せり。然れども未だ普及の策を得たるものと認め難きを以て、普通敎育時代の學校生徒に昆蟲志想を普及せしめんと欲し、郡內小學校敎員の內より三十六人を選拔し、郡費を以て岐阜市に派遣し、三週間の講習を開きたり。然して二ヶ年開設し、前後七十二

名を養成す。本講習生及び有志の團体を組織したるもの即ち渥美郡昆蟲研究會と稱す。本會は常に昆蟲志想の普及を計り、併て害蟲驅除の効果を收めん事を欲し、各會員教務の傍ら標本を製作し之れが說明をなし、兒童に昆蟲志想を起さしめ、且つ一方にありては青年者若しくば農業者夜間集合し、害蟲驅除の講話を行ふ。標本材料採集の如きも兒童によりて得、野外運動よ隊伍をなし、或は家庭にありて注意せしむる等專ら科學上に資せしめ、知らず識らず害蟲驅除、益蟲保護の觀念を生せしむる手段たり。本會の規約及現在會員住所姓名は左の如し。

渥美郡昆蟲研究會規則

第一條、本會は渥美郡昆蟲研究會と稱す、但事務所は當分の內本郡役所に設く。

第二條、本會は昆蟲講習會修業生及其他の有志を以て組織す。

第三條、本會は昆蟲の性質、形狀、經過等を研究し、斯學の普及を圖り、實地に應用せしむるを以て目的とす。

第四條、前條及昆蟲講習會規程第九條の目的を達する爲め、左の事項を行ふものとす。

一、郡內に四個の部會を設くる事。一、官衙の諮問及當業者の質問に應じ又は意見を官衙へ開陳する事。一、昆蟲標本を陳列し、衆人の縱覽に供する事。一、名和昆蟲研究所及其他昆蟲に關する諸會と聯絡する事。

第五條、本會に關する費用は各會員の負擔とす。

第六條、本會に左の役員を置き、幹事をして部長を兼務せしむ。但任期は滿一ケ年とし、總會に於て撰擧するものとす。

會長　一名　　副會長　一名　　幹事　四名　　書記　一名

第七條、總會は毎年一回（三月）之を開き、部會は隔月之を開く。但其都度實況を名和昆蟲研究所へ通知し、部會に於ては同時に會長へ報告するものとす。

第八條、本會役員は凡て無給とす。但事宜に依り報酬又は實費を支給する事あるべし。

渥美郡昆蟲研究會會員名簿

第一部

豊橋　伊東安太郎
同　山本來作
同　藤井治郎作
同　大矢重次郎
同　伊藤佐度平
同　石田和三郎
同　越川伊助
同　大林作次郎
同　宮林桂次郎
同　大竹泰市
同　本多種次郎
同　鈴木里吉
同　坂柳梅太郎
花田　平井四男太
吉田方　村田愛之助
牟呂　小柳津廣三郎
同　谷山藤平
同　古溝喜代太郎
同　小林靜次
福岡　伊藤重太郎
同　高柳丈助
豊岡　中神清太郎

計　二十二人

休會者

東京　彦坂幸太郎
同　宮林菊次
米國　岡田虎二郎
八名　平尾啓次郎
北設樂　田村政五郎

額田　杉浦吉
計　六人
合計　二十八人
第二部
大川　青木久三郎
同　野口惣吉
谷川　夏目彌太郎
同　佐原啓次郎
佃太　村田熊次
小澤　飯野市藏
同　山田嘉作
高根　長濱丈助
野依　山田文耕

同　豊田小平
同　彦坂久藏
豊南　豊田俊次郎
大崎　河合浦治
老津　中村喜助
同　彦坂利作
植田　鈴木保一
泉　兵藤京藏
計　十七人
休會者
寶飯　田中周平
同　柴田俊太郎
計　二人

合計　十九人
第三部
田原　杉原孝
童浦　鈴木額之
野田　長神廣
同　高橋譽四郎
同　河邊毎保
大久保　中神愛次郎
高松　福井信太郎
六連　大羽辨吉
同　大久保一彌
赤羽根　小林伊吉
同　鈴木里吉

同　太田清右衛門
神戸　仲井式次郎
相川　鈴木澄藏
同　河合庄藏
杉山　河邊嘉一
計　十六人
休會者
八名　井上泰次郎
名古屋　山本孝太郎
南設樂　鈴川英泉
東京　伊藤藤太郎
計　四人
合計　二十人

第四部
若戸　伊藤要藏
同　永田茂兵
和地　河合重吉
堀切　間瀬半助
中山　渡會米三郎
清田　齋藤專吉
同　鷲山善連
同　杉浦桐平
泉　丸井近藏
同　松野紋治
計　十人
休會者

堀切　山口七九郎
計　一人
總計　七十八人
役員
會長　山田正
副會長　宮林桂次郎
第一部長　小柳津廣三郎
第二部長　彦坂利作
第三部長　高橋譽四郎
第四部長　間瀬半助

本會に於て調査せし郡內螟蟲採卵數三ヶ年分左の如し。

明治三十三年　五十五萬七千〇七十二塊　明治三十四年　六十七萬八千四百九十塊　明治三十五年　五十七萬二千九百三十五塊

効用　本會は主として昆蟲志想の普及を計る爲め各小學校生徒をして材料を採集せしめ、會員之が說明の資料となす、故に賣品の如き製法完全を期し難しと雖も、一般の害蟲驅除を等閑に付すべからざる事を信せしむる材料なり。

褒賞　明治三十三年東三聯合物產共進會に於て四等賞を受け、明治卅四年全國昆蟲展覽會に於て三等賞及び四等賞を受領し、同時に會長岡田虎二郎は螟蟲採卵法發明の点に依り功勞賞銀盃を受領せり。

審査請求主眼　以上各項に述べたる如く本會の組織、昆蟲志想の普及を計り、農作物の害蟲驅除豫防を完全に行はしめんと欲するにあり。故に一般の賣品標本と同一視せられずして、普通敎育即ち義務敎育時代たる學齡兒童の採集品たると、害蟲驅除豫防方法の全郡に普及し居るや否や調査あらん事を望む。

◎昆蟲の一、二、三

山口縣　小田勢助

如や、近來何やら取り紛れ、暫く筆を執らざりしが、今や閑を得て二三を記し、余白を塗せんとす。

（一）岐阜蝶の發見　岐阜蝶の發生頃は、兎角春蠶期に會し、其の目的を達し得ざりしが、頃は本年四月七日、玖珂郡新庄村大平山頂にて其の一頭を採集せり。嘗て同郡柳井村琴石山にて、廣島縣某氏採集せりと聞き、半信半疑の內にありしが、今や愈々本郡に發生することを確めたり。

（二）蠁蛆の異種　本年九月、京都蠶業講習所蠶病消毒講習會へ出席し、何か珍しき得物がなと、同桑園を見巡りしに、野蠶の多化性を澤山認め、養蟲箱にて飼育え、結繭せるものを保存し置きたるに、豈計らんや、十か十盡く蠁蛆を出したり。其の長さ凡そ三分、幅一分、外形光澤普通の如し。後三四時間にて蛹化す。蛹は長さ凡ろ二分八厘、幅一分計りあり。是れ嘗て清國にて發見せられたる一種の蠁蛆にして、蠶体に直接に產卵寄生するを特點とす。而かも年數回なるが故に春蠶より秋蠶に及ぶと云ふ。

（三）青尺蠖　是れ又同所桑園にて採集せり。普通の尺蠖は桑の樹幹に止まりて擬体すれども、此の者は樹梢に止まり居るが故に、共に青色なるを以て發見に苦む。自然淘汰の結果、今やドビンワリやソマシラズにては人智進みて胡魔化し得ず、一つ新發明でもして博士にでも（よめや）と氣取りたるが。左りとは感心ならずや。尙同所及其附近にては、隨分面白き獲物もあるべけれど、時日無くして研究し得ざりし。宜敷同所生徒及當局者は研究して可なり。

◎宮城縣志田郡志田村に於ける本年の昆蟲狀況

宮城縣　加藤久之助

本日吾が地方大雨あるが爲め、晴耕雨讀例に依り、机邊に座し、昆蟲書を繙き、昆蟲日誌を記するに當り、聊か予が記せし所の當地方、本年の昆蟲狀況を日誌より拔萃して貴誌に報することはなしぬ。

一月三十日桑樹の幹の缺朽せし處に、螟蛉の蛹の多くあるを認め、五六個を採集して飼育箱中に入れ置きしに、四月十日紋白蝶に化せり。尙一頭の蠅をも出でにけり○二月中桑樹の幹の皮間より瓢蟲の一種一頭を捕へたり○三月廿七日ヤマキテフ及アカタテハテフの飛揚するを見受たり○四月五日モンシロテフの發生して、花間に戯れ居れるを、直に採集して數多の標本は作れり○五月初旬キリウジカヾンボ多く

發生せり○六月初旬螟蟲蛾發生せり、然れども例年に比し非常に少なく、隨て卵塊も又少なし。泥負蟲も例年に比し少なきの感あり。越て六月十三日に至り、或場所の苗代田一枚より、稲俵蜂(一名豐年俵とも云ふ)の造繭せしを認め、數十個を採りて一部は標本にし、一部は之を保護せり。「附記す、本年は前記の如く、螟蟲蛾非常少なく、又農家の尤も發生を喜び居る益蟲即ち豐年俵の(例年は稀に見る位なり)夥多なるにより、本年は必ず豐作ならんものをと思ひしに、果せる哉目下螟蟲害非常に少なく、稲作又相應の出來映なり。唯だ葉捲蟲は例年に比し割合に多きを見る」○七月ヒョーモン蝶、ミスヂ蝶、ジャノメ蝶、一文字蝶、スヂグロ蝶、黄蝶、モンキ蝶、コムラサキ蝶、ルリシジミ蝶、ベニシジミ蝶、春蟬、日暮蟬、アブラ蟬、等多く發生せり○八月に至ればキアゲハ蝶、カラスアゲハ蝶、ジャコウアゲハ蝶、イチモジセセリ、ムクゲムシ、ホシカミキリ、クワカミキリ、ノコギリムシ、カブトムシ、キイロテントウムシ、シロホシテントウムシ、マツ蟬、オホ蟬(ミンミン蟬のこと)等多く發生せり。同月六日飼育箱中にて飼育せる、桐樹の害蟲(名稱不詳)天蠶蛾科の一種造繭し始め、十日全たく化蛹せり。九日華果の害蟲たるカレハ蛾の幼蟲一頭を捕へ飼育せり。十九日桑樹の害蟲枝尺蠖一頭を桑樹より捕へて共に飼育せり。

以上は八月迄に於ける吾が地方にて發生する昆蟲の概略を記せしのみなれば、他日更に類を分ち章を立て尚之に補足して地方所産の昆蟲を世の同好諸氏に紹介せんとを期す。薄暮匆々の際聊か記して初回の報となす。

◎昆蟲に關する葉書通信 (第三十五報)

●●●

(二一)浮塵子の驅除と幻燈會(兵庫縣氷上郡葛野村谷川平左衞門) 貴所講習修業歸宅後、種々害蟲に就て注意せしに、九月二日頃より浮塵子の繁殖に心着き、其驅除を爲さんとするに、水の有る田は從來使用する所の注油驅除を勵行したれど、水の無き田の地主は只其害蟲の慘狀を見るのみなりき。自分は先生の御教示に基き、捕蟲器を利用する方法を執りたれど、稲は大抵花盛中なりければ、初め該器を用ふるは稲の穂に害の及ばざらんことを恐れたれども、先づ試驗するに若かじと自ら之を試みたるに、もには別に害のあらざりければ、さては各人に誘導し勵行したる次第なり。然るに注油驅除のそれより稲、却て費用少くして其効ありたる爲め、村民は大に喜びたり。尚八月十九日より十日間、毎日各區に

於て害蟲驅除、益蟲保護の幻燈會を催したるに、參集人員總計男三百六十八、女四百十九人に達し、非常に感動を與へたるもの丶如し。

●（二二二）岐阜蝶の分布に就て（鳥取縣東伯郡日下村、岡野庫八郎）　八月二十一日午后八時、大阪府立農學校卒業生眞壁貞一君、鳥取縣立農學校卒業生谷田虎治君、村岡虎藏君、細田隆二君の四名來訪あり農事改良上より害蟲驅除談に及び、尙昆蟲標本交換の定約をなしたり。中に村岡虎藏君は岐阜蝶雌雄二頭大根の花に飛翔しつゝあるを採集せりと、翌二十二日、東伯郡敎育品展覽會を參觀したるに、參考室に昆蟲標本の陳列ありて、其中に村岡君の岐阜蝶雌雄二頭をも認めたり。依て吾東伯郡にも岐阜蝶の分布しあることを知る。因に曰ふ、同君は東伯郡榮村大字下種の住なり。（十月七日附）

●（二二三）曾我井村昆蟲研究會（京都府天田郡曾我井村、菅沼岩藏）　曾我井村昆蟲研究會は、當夏昆蟲講習會の講習生及傍聽生十二名にて發起し、村長以下村内名譽職員の贊成ありて組織し、其會主は同村長芦田安兵衛氏、副會主は笹尾校長大槻竹次郎氏に托し、同會の事業第一着手として九月廿一日より五日間、曾我井尋常小學校、笹尾尋常小學校の二箇所に於て、毎夜昆蟲講習會を開きたるに、聽講生各五六十名ありたり。（十月十一日附）

●（二二四）京都府立農學校所在地方の蟲報（京都府立農學校にて、岡本亦三郎）　當地方本年の稻作害蟲模樣は、八月中に於ける苞蟲は例年に比し發生多く、多少の被害ありしも甚だしきに至らず、次で九月中旬頃に至り、浮塵子の發生ありて一般に驅除を勵行し、甚しき被害を見ず、同時に二化生螟蟲の發生多く驅除を行ひし。然るに方今に至り俗に云ふ坪ウンカの發生甚しきも、水利不便の處は意の如く驅除を行ふを得ず、之が爲め多少減收の見込なり。（十月十七日附）

●（二二五）八町蜻蛉外二種の分布報告（三河國寶飯郡赤坂町、田中周平）　三河國額田郡にて知られたる八町蜻蛉、ヒゲコガネ、ホシベニカミキリムシの分布を報せんに、●八町蜻蛉、男川村（本村は岡崎町を距る一里程東にして大平川の西沿岸）、山中村（本村は岡崎町を距る二里餘の東）●ヒゲコガネムシ、岡崎町に接近せる森林、和合村（大平川の東岸）、高富村大字片寄（赤坂町を距る北方三里）●ホシベニカミキリムシ、山中村、此等の町村は皆東海道の國道に沿ふ所にして、前二種は本年九月前後其地の學校にて、ホシベニカミキリムシは七月頃多く採れたる由なり。（十月二十一日附）

(二一六)浮塵子の驅除と有益鳥蟲(下總國安食町、後藤新左久)　既報の如く、當地にも亦浮塵子發生せしにつき、直ちに作人と謀り、共同驅除に從事したり。殊に九月十二日午後四時頃の驅除中には、無數の燕鳥並蜻蛉(ギンヤンマ多し)集り來り、手網を振ふ數十の人夫の肩邊を飛行しつゝ、進退を共にせしは、頗る奇觀なりき。(十月二十二日八便)

(二一七)ホシベニカミキリムシに就て(周防山口、矢野宗幹)　本年六月上旬、其交尾せるものを、周防國山口町附近の林中にて採集せり。樹種は明かならざれども、樟科一種の枝上にありし事を記憶す、此地は海岸より四里餘なり。又昨年豐前英彥山にて、福岡縣筑前國嘉穗郡某氏の該地方採品を見たる内に、同種の一頭存せし事を記憶す、採集地は明かならざれども、兎に角海岸より十餘里以上なり。記して研究の料となす、或は暖地產樹を害するにあらずや。(十月二十四日附)

(二一八)螟蛉蛾一種(靜岡縣、神村直三郎)　薄荷の害蟲として、前號に備後國山田君の記事に對し編者の附言ありしが、當地にも此蟲胡蘿蔔に多し、又車前花をも食す。予は此蟲を一昨三十四年より昨三十五年に渉りて飼育せしを以て、其結果を參考の爲め茲に報せん」。卅四年十月十三日、一頭の幼蟲を車前花にて捕へしに、折しも眠期にて、同十四日脫皮し、同十八日に營繭をなし、同廿三日化蛹して十一月十五日羽化せり。又一は三十四年十一月十五日繭を採りしに、此中にて已に少しく躰を縮少したるものあり、これを破りて中を見たる爲め大に其繭を損せしに、同日又直ちに舊の如く綴合せり。之を放置せしに、三十五年二月九日に至りて羽化せり。前者は体長四分强、開翅一寸、後者は体長五分、開翅一寸二分ありて、何れも胸部に毛簇の突起ありて左右に並べり、前翅は外緣に近き一半は弓形の大金色紋にて占め、後翅の基部灰褐、其外緣部は灰黑なり。即ち普通キンモン蛾と稱する種にして、當地には其幼蟲の多きそれ丈け成蟲を見ず、自今胡蘿蔔畑にて繭を採るも多くは寄生蜂のために斃死したるもののみなり。敢て報す、斯く申もこれ異種かも知れぬ、幸に叱正を賜はれかし。

編者云、本年當所に於て試育の結果によれば、胡蘿蔔の螟蛉には二種あるが如し、一つは神村氏のそれにてツマキンガ(Plusia chrysitina, Mar)と稱するものなり。山田氏の送られたるものは、數頭中二頭生存者ありたれば、胡羅蔔を以て之を飼育し置けるに、蛹化し次て羽化せしが、幸ひ雌雄にて、成蟲はツマキンガより稍小さく、前翅の表面は灰褐黑色の雲紋狀を呈し、中央より稍基部に近く二箇の銀紋を有し、後翅は淡墨色なり。當市近傍にて採集飼育せしものは數百頭の中殆んど寄生蜂の爲に斃され、僅數頭羽化せしが、其中一頭斯種を出せしのみなれば、十分の調査を遂ぐる能はざりしが、當所には此の兩種に屬するもの十數種あり、而して殆んど識別に困む程酷似せるもの多ければ、尚今後十分研究を要すべきものなりと信ず。

雜報

●昆蟲の種類分布調査の一欄を增加せんとす　昆蟲學の年々進步するに從ひ、益々種類分布調査の必要を感ずるを以て、明年一月發刊の第七拾七號よりは、特に調査欄を設けて、讀者諸君の寄送に係る標本を一々調査して出來得る限り詳細に說明し、然も尤も著しき種は挿圖の上掲載せんとす願くは各地方の諸君、續々斯學の爲め標本寄送あらんことを請ふ。但し標本には一々採集年月日、採集場所、採集人名、其他備考として何々草木の上とか、河邊とか等の件を記入せらるゝなれば尤も都合宜しとす。

●昆蟲陳列舘の整理と擴張　當岐阜市にある岐阜縣物產舘構内に設立せる當研究所の昆蟲陳列舘は、是迄物產舘より一名の監守を附することにて、其人撰は當所にて適當のものを擧ぐるを常とせり然るに今回は是を廢して、當所專ら監督することゝなりて、當所長監守主任となり、助手の内適任者七名を撰みて主任代理とし、日々交代監守することにせり。右の結果として、陳列舘中の陳列品を特に精撰改良し、且つ斯學研究者の爲めには是迄とても請求に應じて說明の勞を執りたるも、今後は一層滿足を與ふることゝせり。又特に小學兒童等の爲に、日曜日の某時を撰み、各自受持學科に就て實物供覽の上一々說明する樣夫々準備中なり。又陳列舘内に特別揭示場を作りて昆蟲學に關する總ての出來事を始め、珍奇なる標本等を得るに從ひ、是を示して一目瞭然たらしめ、尙又飼育場を設けて有名の害蟲は素より、普通學として必要あるものを、特に飼育して生活の有樣を縱覽者の眼前に示さんとす。爾後陳列舘の整頓したる部分より、漸次詳記して誌上に揭載し、一々是を明瞭ならしめんと欲す、讀者諸君其時の來るを俟たれよ。

●蟬寄生蛾の學名確定　本年一月發行の昆蟲世界第六拾五號の口繪に、着色圖にて蟬寄生蛾を現はし、和英兩文にて說明し置たるに、其後米國昆蟲學者ダイアー氏より、學名云々の件に就き書狀到着

の次第は、第七十號の雜錄欄に一寸記したる所、夫に對して在米の名和梅吉氏より Epipyrops cicdivora. と云ふ種名を附したいといふ考へであるが如何との報知あれば、第七十二號の雜報欄に於て、其旨を掲載し置きたるに、曾てダイアー氏に現蟲を送りしものに對し、此頃に到り Epipyrops Nawai, Dyar. と種名を附し來れり。茲に至りて蟬寄生蛾の學名は全く確定せり。

◉飽海郡昆蟲研究會の出品と協賛賞狀　山形縣飽海郡昆蟲研究會は曩に全國昆蟲展覽會へ害蟲標本を出品して一等賞を受領せしが、第五回內國勸業博覽會にも害益蟲標本を出品して三等賞を得られたり。而して其標本の製作主任者は共に第三回全國害蟲驅除講習修業者齋藤朝之助氏なりしにより、博覽會は同氏に對し茲に示せる如き協賛賞狀を授與せられたり。

山形縣　飽海郡昆蟲研究會

害益蟲標本

三等賞牌

審査官　正七位　莊島熊六
　　　　從六位　堀　正太郎
　　　　從六位　小貫信太郎
審査部長從三位勳二等田中芳男
審査總長正三位勳一等男爵大島圭介

審査ノ成績ニ依リ前記ノ賞牌ヲ授與ス

明治三十六年七月一日

第五回內國勸業博覽會總裁大勳位功四級　載仁親王

山形縣飽海郡松嶺村　齋藤朝之助

昆蟲標本ノ製作

審査官　正七位　莊島熊六
　　　　從六位　堀　正太郎
　　　　從六位　小貫信太郎
審査部長從三位勳二等田中芳男
審査總長正三位勳一等男爵大島圭介

審査ノ成績ニ依リ之ヲ授與ス

明治三十六年七月一日

第五回內國勸業博覽會總裁大勳位功四級　載仁親王

◉害蟲驅除豫防方針　害蟲の王とも稱すべき螟蟲及浮塵子の驅除豫防方法に就ては種々ありと雖も、多種なる方法を執るは、却て其方法の施行をして不完全ならしめ、虻蜂取らずの不結果に終るべきを憂ひ、吾人は常に其内の最も完全に近きものを撰み、始終一貫之を奬勵し來りしは讀者の既に知了せらるゝ處なるが、當局者に於ても亦此に見る處ありけん、先頃農商務省に於ては、害蟲驅除豫防監察の爲め各地に出張巡回せる技師其他斯道に經驗ある技師を召集し、螟蟲及浮塵子の驅除豫防方法に就き諮問せし由なるが、其の結果左記の方法を勵行するを以て最も適當なりと認め、先月十五日農務局長より參考として、地方長官へ通報せりと。今之を見るに、誘蛾燈の如き一も加へられざりしは妙と云ふべきも、螟蟲驅除に頗る必要なる本田採卵のなきは少しく物足らぬ心地せり。

一、二化性螟蟲驅除豫防方法　苗代に於て、採卵及捕蛾(捕蟲網使用)。本田に於て、枯穗取り。

一、三化性螟蟲驅除豫防方法　苗代に於て、採卵及捕蛾(捕蟲網使用)。本田に於て、株

一、浮塵子驅除豫防方法　苗代に於て、注油及捕蟲（捕蟲網使用）。本田に於て、注油及捕蟲。
掘取若くは株の切斷

◉私製葉書の意匠

京都高等工藝學校教授工學士武田五一氏は、此程外國製昆蟲繪葉書八葉を寄贈されたりしが、内には一葉三種つゝ收めたる蝶蛾類圖譜とも稱すべき着色石版の美麗なるもの、甲蟲の食草に止まれる着色寫眞版等意匠の嶄新なるものあり、又紙面を木葉狀に印刷し、其周圍を葉邊に於ける鋸齒狀に刻み、紙にて造れる蝶類模形を糊着せしめたるものあり、實に驚くの外なし。本邦に於て讀者諸君の内には、毎年新年の年始狀等に、昆蟲を以て意匠を凝らさるゝもの尠からざるが、今より少しく考へられたきものなり。

◉渡瀨博士の螢に於ける清韓視察談

地理研究に密接の關係を有する動物取調の爲、對馬より清韓地方を遊歷されたる理學博士渡瀨庄三郎氏が門司に於て訪問者に語れる中、螢に關する所を聞くに、總て蛇、蛙、螢類の如きは、支那大陸より朝鮮に至る所謂地續きと、海洋を距る本邦とは彼我種類を異にし、朝鮮より本邦に最も近接せる對馬迄には渡來せるも、内地には未だ渡來せざるがあり、或は歐洲大陸より朝鮮までには棲居すれども對馬には見ざるがあり、之に反して本邦内地のもの、對馬迄には渡り居るも、朝鮮には未だしなるがあり、是等蟲類の棲息如何に據つて其大陸的の島嶼なると、大洋島なるとを推測し得べし。先づ螢の如き本邦産のものと、清韓産のものとは大に異り、本邦にありては所謂源平兩種（源氏大、平氏小）にて夏季に産すれど、清韓に産する種類は夏季より秋季に産し、其形亦異なれり。秋季に産するものは、降霜前にありて所謂秋螢と稱するものなり。此一種對馬迄渡來し居り、本邦の一種亦朝鮮迄に至りたるものあり、而して一般螢に屬する蟲は何地にても其の種類多く、本邦にても凡十四五種の多きあり、池澤溝渠などに産するものは、其形小にして所謂糠螢と稱し、河川に生ずるものは總て大なり。尚蛆なる時のみ光を放つがあり或は光なきがありて、各特殊の性狀を有し居れり云々と、先月廿四日の讀賣新聞に見えたり。

◉シヤサン（柘蠶）の飼育

凡蠶兒は桑葉を食して結繭するものにして、他に於て何れを食するものに非ざる如く思惟せしに、本年農科大學に於て飼育せし蠶種は柘葉を食せしめて好成績を得たりと此蠶種は清國四川省の原産にして、彼地にては育蠶の初期に桑葉を給し、末期に臨みて柘葉を給與するの習慣あるも、農科大學に於て飼育の結果によれば、終始柘葉を給與せしものも其差あることなかりし

と、此蠶兒は三眠にて結繭し、繭は白色と黄色の二種あり、紡錘形にして絲質等は普通の蠶絲に劣らざるものなりと、而して其食桑たる柘も亦淸國の原産にして無花果科に屬して幹枝に刺を有し、葉は長楕圓形にして葉尖は細く延長するも鈍頭に終り、其着色は濃綠にして光澤あり、葉腋には花を生ず、成長宜しき樹にして、病蟲害に罹ること罕なり。其枝に棘を具ふるが故に枳殼の代用として生垣を造り其葉にて育蠶せば最も妙ならんといふ。

◎白山の昆蟲　　岐阜縣郡上郡上保村塩田健藏氏は去八月十一日出發加州白山へ昆蟲採集の爲登山せられたり。今同氏の語る處によれば、氏が住村より其登山口なる越前石徹白まで三里半、其れより峯傳ひにて山頂まで九里八町にして、中腹以上に到れば種々なる草花今を盛りと非常に咲き亂れ、植物標本採集家は是非一度登山の必要ありと云ふ。氏は發足の初め中途にて宿泊する考の處、種々ある事情にて、遂に頂上まで登ることゝなせし故、非常の疲勞を感じ、充分採集を試むることを得ざりし由なりしが今後登山者の便にもと、上圖の如き順路を記し且つ其昆蟲の一部を贈られたり。今之を見るに、皆珍種に屬するもの多くして、膜翅目には蜜蜂科に屬するもの一種二頭、細腰蜂科一種一頭、姬蜂科五種五頭、鋸蜂科二種四頭、鞘翅目には龍蝨科一種四頭、瓢蟲科一種一頭、叩頭蟲科二種二頭、螢科二種二頭、鍬形蟲科一種四頭、金龜子科二種五頭、天牛科十四種十九頭、鋸蟲科三種四頭、象鼻蟲科一種一頭、擬象鼻蟲科一種一頭、雙翅目には蛇科一種一頭、扁前蠅科二種二頭、鱗翅目には鳳蝶科一種一頭、粉蝶科二種二頭、蛺蝶科二種二頭環紋蝶科四種六頭、天蛾科一種一頭、赤頭蛾科一種一頭、毛翅目には石蠶科一種二頭、脈翅目には擧尾蟲科四種十二頭、有吻目には椿象科二種三頭、薄翅浮塵子科二種二頭、擬脈翅目には積翅蟲科一種二頭、直翅目には螽蟖科一種一頭、總計六十二種九十三頭なり。此中天牛の一種及び擬象鼻蟲に屬するものは確に新種にして、金龜子の一種ビロウドコガチムシに類するもの及天牛、擧尾蟲の或種の如きは珍種たる

べく、チャマダラヒカゲテフ（一名ベニヒカゲ）、ヒメキマダラテフ及アサギマダラテフの如き、彼地には普通なるが如し。

◉ジヨン、バルナーヅ、スミス氏の小傳　　昆蟲學大家フエルナルド氏は其昔米國海軍の水夫にして、コムストック氏は又商船の火夫なりしが、本誌第二十四號コムストック氏の小傳に記載されたるが、今スミス氏よつき去七月三十一日の米國桑港にて發行せる日本新聞新世界に記載されたれば少しく舊聞に屬すれども、同氏の性行を窺知するに足るべきものあれば、左に之を轉載して參考に供せんとす。

ニユーゼルシーの人は牛蝨類の昆蟲について疑問あるときは、ヲツトジヤルス大學の昆蟲學教授にして當洲隨一の昆蟲學者なるジヨン、バルナーヅ、スミス氏に質すを常とす。氏は當洲廳屬の牛蝨學者にして、昆蟲類について精細なる研究を遂げしこと實に驚くべく、昆蟲種屬の生活の狀態、發生の摸樣、解剖生理、繁殖の方法など殆んど知らざることなし、學者未發見の蠅、甲蟲、蠐螬などがポテート或はピーチの農作物を食ひ始むるときは、其害蟲を撿査して、そは如何なる種類に屬するか、其生活の狀態、繁殖の順序などを公表し、そが未知の種屬ならば、そを精細に研究して其成蹟を報告し、以て驅除法を公衆に發表するがスミス氏の任務なり。而して昆蟲類の氏が研究の法廷に偵捕招喚せらるゝものは逐一其行爲、性狀を白狀せずして遁るゝこと能はざるなり。スミス氏は偶然の事よりして昆蟲學者となりしに非ずして已むを得ずしてそが研究に一身を委ぬるに至れるなり。氏は牛蝨の研究を始めし前に、生涯の職務として辯護士ならむと欲し、制規の法律を研究したる後辯護會員となり、數ヶ月間法廷の辯護事務に執掌しけり。かくて氏は辯護を依賴せられたる事件ある每に法廷に出で、熱心辯論中、蚊或は蠅の不意に來りて氏の顏面を襲擊し、爲めに注意を奪はるゝものから、その爲めに心むしやくしやして癇癪玉の逆上せんとすること屢々ありしかど、凌ぎ〱て堪へたりき。辯論に失敗する每に惟へらく、こは蚊の爲なり蠅のしわざなりと、さまでには非ざれど彼奴等にも幾分か余が失敗の責任を負せざるべからず、憎き蟲類かな、いざ彼等の退治法を研究して吳れむものとの望みを起し、それより暇あれば判決例を參看詮索する替りに昆蟲類の習慣を研究し初めたり。研究すればする程益興に入り、昆蟲と愈親密になるに隨て法律事務はそつちのけとなり、遂に所有の法律書は古本屋へ送られ、裁判記錄はストーブの焚き附けと變じ、こゝに昆蟲學者たる新生涯の道途に上る決心をなせり、斯くて氏は多くの昆蟲學者、好事家、或學校教授連と交際を始め、斯道について大に得る所あり。米國中に最もよく組織立ちたるブルクリン昆蟲學會の會員となれり。スミス氏をして昆蟲學者として名をなさしめたるは、蚊の撲滅法に關する氏が實驗を發表せし大著述なりとす。蚊といふ奴は讀者も知らるゝ如く、其群り來りて人を襲ふときは甚だ不快の感を起さしむるものなり。氏の撲滅法たる隨分財資を要するにて氏は今より一年以前其翌夏期中ニユーゼルシー全洲の人民をして蚊の襲擊を脫れ、例年よりも一層愉快ならしめん爲め撲滅法を試驗す

關る準備資本として一千弗を洲議會に要求せり。因てそを洲議會の討議に附し其議案は通過したれど、所要の金額の財源を定むることを決せずして其内議會閉ぢられぬ。此に於て洲知事は備荒貯蓄金の内より所要一千弗の支出をなせり、因て氏は夏期中通じて蚊の研究を續け、時々其成蹟を報告し、大學の學期始まりて後も研究室にありて顯微鏡を使用し、蚊の生理作用を研究せり。斯くの如くニユーゼルシー洲は蚊の撲滅法試驗のため一千弗を費し、氏は數閲月專心其研究に從事しければ、そが全滅の法は發見する能はざりきされど氏及氏の學生は蚊は何處より生じ來るかを知り得たるが故に、其孚卵所を放乾し清潔にして其繁殖の幾分を防ぐべきやう全市民に注意を與へたり。蚊を撲滅する氏の試驗は、未だ全効果を收めざれど、氏は研究中蚊の胃中一種の寄生蟲を發見したり、而して其寄生蟲は人力を以て繁殖せしめ、それを蚊の産卵地に撒布して蚊の胃中に侵入せしめ以て撲滅する望みありといひ、其標本を七月二十九日華盛頓政府農務課に送りたりとぞ。

●**昆蟲幻燈會**　宮城縣志田郡保柳小學校に於ては、農事上刻下の急務たる害蟲驅除豫防の一策として、十月五日午後七時より昆蟲幻燈會を開きしよ、同夜は恰も明月の事とて來會せしもの頗る多く第十一回全國害蟲驅除講習會修業者加藤久之助氏の熱心なる説明よ、何れも非常の益を得て散會したる由十月九日の奥羽日報は報せり。

●**東豫昆蟲研究會**　愛媛縣周桑郡外三郡に於て、東豫昆蟲研究會なるものを組織し、本年七月七日小松町に其組織會を開きて規約を設け、引續き臨時總會を開きて役員の選擧を行ひ其他諸般の事項を協議せられたりと、同地の矢野延能氏より報知ありたれば、尚左に該規約及役員氏名をも掲載すべし。

東豫昆蟲研究會規約　第一條、本會を東豫昆蟲研究會と稱す●第二條、本會は昆蟲を研究し、斯學の發達を圖り、之を實地に應用するを以て目的とす●第三條、事務所を周桑郡小松町に置く●第四條、會員を分つて通常會員、名譽會員の二種とす●第五條　本會の主旨を賛成し、斯道に熱心なる者を以て通常會員とす。學識德望あるものを、本會の決議を以て名譽會員に推薦す●第六條、本會に左の役員を置く。會長一名、幹事一名、委員各郡二名。會長及幹事は總會に於て選擧し、委員は其郡會員の互選とし、任期は各二年とす●第七條、會長は本會を總理す。幹事は會長の命を請け、本會の庶務を掌るものとす。委員は其郡内に於ける本會の事務を執るものとす●第八條、會員は質問應答により智識の交換を爲すことを勉め、且毎年一回の總會に出席すべきものとす●第九條、入會及退會せんとするものは其郡委員を經由し、會長の認許を經べきものとす●第十條、本會の經費は會員の負擔及寄附金を以て之に充つるものとす。

役員　會長　佐多彦熊。幹事　矢野延能。委員　(越智郡)加藤徹太郎、森玄作(周桑郡)青野岩平、佐伯團作(新居郡)小野今太、山内幹衛(宇摩郡)未定。

◉愛知縣渥美郡教育品展覽會と昆蟲標本

渥美郡豊橋高等小學校内に於て、先月十六日より四日間、同郡教育品展覽會を開催せられ出品點數一萬餘點に達し頗る盛會なりしといふ。其内昆蟲に關するものは二十餘點にて、受賞者は二等賞、牟呂尋常高等小學校生徒（裝飾用昆蟲標本、雌雄陶汰標本）褒狀、同校生徒（昆蟲分類標本、水生昆蟲標本）高松尋常高等小學校生徒、（昆蟲標本）等にして又參考品として渥美郡昆蟲研究會より分類標本三百五十點、害蟲標本十二點、昆蟲研究會第一部會員より高等小學理科標本二十八點を出品し、而して日々觀覽者は一萬二三千人を超えたりと。

◉美術的蠅叩

衛生上の害蟲として世人の最も嫌へる蠅の驅除に就ては種々ありて、從て之が驅除器も多くあり、是等は本誌第一卷第四號及第六卷第五十四號に於て圖說せし處なるが、其内蠅叩に就ては、金網製のものは從來の經驗上空氣の抵抗なきを以て、蠅の驚き逃ぐることなく、至極便利なりしが、此程當市の坂井雅太郎氏の製造寄贈に係る蠅叩は圖の如き形にして棕梠等の廢物を利用して作られ、前記の金網製よりは一層輕便にして且つ高尙優美なるものなり。今此器の特徴とも云ふべき點を擧ぐれば、第一金網製と同じく空氣の抵抗なく、音のせざるを以て、其蠅の驚き逃げざるのみならず、他の蠅も一向平氣なること、第二叩かれたる蠅は一時腦震蕩等を起して氣絶せるのみなれば、潰れて汚物の出づることなく、從て各所を汚すの憂ひなき事、第三殺したる蠅は此器の先にて擦すれば其毛の間に挾まりて蠅入器に移すことを得、從て衛生上恐るべき害蟲を手にて持つの煩ひなきこと、第四此器は頗る輕きものなれば貴重なる器物等に居るものを打つも其器を損する憂なきこと、第五普通の蠅叩は直ちに汚物の附着して見苦しく之を見れば人をして嘔吐を催さしむるの感あるも、此器は然らず、且高尙風雅なる作方なれば座敷にも備付けらるゝこと、第六廢物を利用して作りたること等なり。

美術的蠅叩の圖

◉吉野郡の驅蟲事業

奈良縣吉野郡農會の事業として、卅七年度に於ける驅蟲の件は（一）螟蟲卵塊懸賞採取（二）螟蟲白穗莖拔取懸賞（三）害蟲驅除奬勵委員設置等にして悉く可決せられたりと。

◉額田郡の昆蟲展覽會

三河國額田郡に於ては、十一月廿八、九、卅の三日間、昆蟲展覽會を開設せらるゝ由にて、過月來頻りに準備し居らるゝを以て、定めて盛會ならんと信ず何れ詳細は次號に

於て報ずる所あらん。

◉特別研究生の入所を許す

時運の進歩に伴ひ昆蟲學を研究せんとするもの益々増加するに至り、各地方より當所に來りて之を研究せんと續々申込あるも、從來是等の設備なかりしかば、空しく其希望を納るゝ能はざりしが、今回規程を設けて之を許すことにせり。

◉第十七回全國害蟲驅除講習會延期

全國講習會は例年の通り本月中に開設すべき筈なるも、何分聖路易萬國博覽會へ害益昆蟲標本を出品せんとて、昆蟲採集調製の爲研究所員の大多忙を極めしに依り、折角多數の申込者あるにも拘らず、延期することに決したるも明年三月には必ず例の通り開設する筈なれば、希望者は一日も早く申込みある方好都合ならん。

◉岐阜縣昆蟲學會第五十九回月次會記事

同會は本月七日午後二時より當研究所內に於て開會せり。當日は雨天なりしにも係らず各郡部より代表者の出席あり且本縣蠶種檢査員、農學校、師範學校等の學生も來會せられ、近來稀なる盛況を呈せり。今其講演の概要を摘載すれば、名和副會頭は本會は初會以來如何なる事情に遭遇するとも未だ曾て一回も休會又は時日を變更せし事なきは、之れ本會の特色となす所ならん云々と開會の辭を述べ、續て第一席小竹浩氏は甲陽昆蟲瑣談と題し、氏が本年八月二十二日より一ケ月餘間山梨縣の昆蟲學講習會に臨み、同地に於ける昆蟲に就き各方面より調査せし事項を報告し、第二席森宇多司氏はキンケムシの寄生蜂につき、キンケムシ六十餘頭を飼育して解剖研究の結果を說明せられしが、寄生蜂がキンケムシの躰內に產卵するや、其當時は卵子が宿主の皮下にあるも、暫くにして躰內の各所に血液によりて輸送せられ、後孵化して漸次成育し、老熟に至り躰の側面各關節間より躰外に出でゝ直ちに結繭す、而して其幼蟲の躰外に出づるは一齊にして、宿主は其蜂の幼蟲が全く出で終りたる後に死するなり云々と、第三席名和靖氏は鳥類の胃中にある昆蟲に就き、此頃調査せし結果を實物により說明せられ、終て暫時休憩せり(此間に稻葉の茶菓を供し、各種の標本其他工藝美術品を供覽せしめたり)後再び開會し、第四席小川謙司氏は昆蟲の自然淘汰と題し適者生存上自然の妙理と進化の次第を講演して午後五時半散會せり。

◉水曜昆蟲會記事

當研究所員の催しに係る水曜昆蟲談話會は、前號報告後每水曜日午后七時より當所內に於て開會して、每週間に研究せし結果を報告するを例とせり、其談話の要項を一括すれば

左の如し。

小竹浩氏は山梨縣昆蟲方言、カマキリカゲロフの幼蟲、トンバウの生殖器、昆蟲の複眼、エンマコホロギの産卵狀況等に就き自已の實驗に徴して詳細に說話せられ●小川謙司氏は揖斐郡宮地村の害蟲驅除の狀況とウリハムシの解剖等にして、特にウリハムシの藏卵數は是迄何人も調査せし事を聞かざるが、一雌蟲の卵巣内に千粒乃至千五百粒の多數を藏卵し居るを以て、冬季共同して石下又は雜草中に潛伏する成蟲を捕殺するは該蟲驅除の上に莫大の効果あるならんと述べらる●六橋由太郎氏は岐阜縣加茂郡害蟲驅除視察談、天蛾類の調査等にして其中天蛾類の調査に就ては其幼蟲蛹の各種類を蒐集して悉く實物を示し、各蟲種の性質及特徴を丁寧に說明せらる●近藤伊祐氏はトンバウの複眼を顯微鏡の下に調査したる結果、複眼の側面部なる六角形の水晶体は上面部の水晶体に比して大なる事五割なるを以て、試に他の昆蟲即ちアゲハノテフを取りて前同樣の調査をなしたるに同一の結果を呈したるより考ふれば、即ち複眼の上面部は高き所の者を見るに適し、側面部のものは比較的近き所の者を見るの必要あるによりてならんか、尙唐突の調査なれば今後各種に亘りて詳しく研究し以て報ぜんと云々と述べらる●高橋喜男氏は橫這の卵塊孵化の狀況、クダマキダマシの卵塊調査等にして、其中橫這の卵塊の孵化するには其幼蟲は卵の太き部分より薄き皮膜を蒙りて脫殼し、殼外にて之を脫ぎ捨てる樣見受けたりとて、其皮膜等を持ち來りて之を証據立てたり●渡邊樵酉平氏は東濃地方の害蟲驅除の狀況及びエンマコホロギの解剖談等にして、特にエンマコホロギ雌蟲の卵巣を調査したりしに、成熟卵數のみにて多きは百四十五粒、少なきは八十二粒、平均一頭に付百十粒强に當るべき旨を述べられたり●森宗太郎氏は桑の心蟲、蚜蟲、桑葉卷蟲、桑の天牛及蚊の話等なりしが、其中桑の天牛は桑樹の害蟲中にて直接或は間接に最大害を成す者にして、其産卵期は早き者は六月上旬より晩きは十月下旬に至り産卵し居るを認め、殆んど百二十日内外の期間なるが、其内尤も多く産卵するは七月下旬より八月上旬にして早く孵化したる者は三ケ年目に、晩き者は四ケ年目に成蟲となる割合なるを以て、隨而加害の大なるを知るを得べし云々と述べられ●其他中井藤助氏は昆蟲雜話、カツムシに就ての研究談●所嘉吉氏の花と昆蟲の關係、秋の野の蟲●土岐五郎氏の山縣郡地方の方言、昆蟲採集談●名和愛吉氏のカレハガに就て芙蓉の青蟲柳の害蟲二種●石田和三郎氏のエンドノキリムシ驅除試驗●小森省作氏の天狗蝶に就て、地膽、葛上亭長の經過習性、蟷螂の産卵狀況●棚橋昇氏のエンドノキリムシの卵塊調査等なりき。

●**昆蟲標本陳列舘の參觀人**　去十月中、當昆蟲研究所常設の昆蟲標本陳列舘を參觀せし人員は、總計二千九百八十八人にして、其中最も多かりしは十五日に於ける三百四十七人、最も少なかりしは一日に於ける二十五人にして、一日平均百拾八人强に當り、此内實業家及學生最も多く、之に次ぐは各府縣の勸業視察者敎育者等なりき。

(以上、十一月十日脫稿)

Marumba piceipennis Butler. (Kuchiba-suzume)

By K. Nagano.

Forewings yellowish brown, median and marginal parts darker; a dark-brown lunate discal spot; about ten dark-brown striae, posteriorly curved; two reddish or blackish brown spots near anal angle. Hindwings purpulish brown; two reddish or blackish brown spots near anal angle. Expanse 100 - 138mm. Body arab, with a dark brown longitudinal stripe.

Kiusiu, Shikoku, Honsiu, Yezo; 6, 7, 8. Larva pale or yellowish green, white or yellow dotted; on 1-3 seg. a pale yellow longitudinal lateral stripe; on 4–11 seg. a series of pale yellow oblique lateral stripes, with red dots; horn green, white dotted: on Quercus glauca, Q. myrsinaefolia, etc.; 8, 9, 10.

(明治三十年九月十日内務省許可)
(明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)

一月より
●昆蟲種類分布調査欄
を新設す

●岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會本年中の日並は左の如し
第六十回月次會(十二月五日)

市境界 ⋮ 案内道 ‖ イ 研究所 ロ 陳列館 ハ 縣廳 ニ 中學校
ホ 病院 ヘ 郵便局 ト 西別院 チ 公園 リ 長良川 ヌ 金華山 ル 停車場

●名和昆蟲研究所案内

當昆蟲研究所の位置は上圖の如くにて停車場よりは僅に十餘町養蟲室あり又新築の岐阜縣物産館構内には常設の昆蟲標本陳列館(五間に十六間)ありて標本器具數千点を陳列す有志諸君の來訪を俟つ

岐阜縣岐阜市京町 名和昆蟲研究所

●本誌定價並廣告料

壹部郵税共金拾錢(見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す)
壹年分拾貳部郵税共金壹圓八錢

(注意)本誌は總て前金に非れば發送せず●爲替拂渡局は岐阜郵便局●郵券代用は五厘切手にて壹割增とす

廣告料 五號活字二十二字詰一行に付き金拾錢とす
三十行以上一行に付金拾貳錢

明治三十六年十一月十五日印刷並發行
岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二
(岐阜縣岐阜市京町)

發行所 名和昆蟲研究所
岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二
發行者 名和梅吉
同縣揖斐郡鶯村大字公郷三番戸
編輯者 小森省作
同縣安八郡大垣町字郭四十五番地ノ二
印刷者 河田貞次郎

(大垣 西濃印刷株式會社印刷)

Vol.VII. DCEEMBER. 15TH, 1903. No.12.

(十二月十五日發行)

(毎月一回十五日發行)

THE INSECT WORLD:

A MONTHLY MAGAZINE.

EDITED BY Y. NAWA.

GIFU, JAPAN.

昆蟲世界

第七拾六號

(第七卷第拾貳册)

目次 (禁轉載)

(明治三十六年十二月十五日發行)

(明治三十年九月十四日第三種郵便物認可)

PUBLISHED BY THE NAWA'S ENTOMOLOGICAL LABORATORY IN GIFU, JAPAN.

◉寄贈物件受領公告

一金六圓也　名古屋市　瀬木本雄君・中村千代之助君・伊藤端真君・土川隆吉君
一有鷄頭元折銃附屬品共　兵庫縣　東郷隆次君
一稻株拔取器　一個　淡路國　中野壽郎君
一鞭兼用捕蟲網　二個　愛媛縣　森玄作君
一姫象鼻蟲驅除用鋸　二丁　岐阜縣　渡邊喜兵衛君
一蝶形笄。一蜻蛉形襟止。一蝶形襟止。
一赤坂高等小學校生徒帽子蜻蛉徽章。　三河國　田中周平君・大石吉三郎君
一蟬形鉛筆削(以上金屬製)。一蟬形笛。　寶飯郡
一蝶模樣杯(以上陶器)。一蝶形菓子。　鈴木兵四郎君
一昆蟲模樣刺繍　二枚　三河國寶飯郡　伊奈高等小學校
一昆蟲寫生圖　七枚
一紙折蟬形幷に蝶形幼兒製作品　各數個　市立名古屋高等女學校附屬　幼稚園
一蟬形玩具　一個　名古屋市　山田周子君
一雲南産冬蟲夏草　十四把　在東京　寺島昇君
一對島産藤吉螢　雌二頭　雄十數頭　對島國　平田駒太郎君
一胸廣ゴキブリ　一頭　山口縣　財滿宇市君
一除蟲御札　十二種　青森縣　新渡戸稻雄君
一實驗野外教授　一册　東京市　安東伊三次郎君
一拓蠶之飼育　一册　東京市　佐々木忠二郎君
一中京新報三葉。一東海日々新聞二葉。　名古屋市　甫守謹吾君

右寄贈相成候に付芳名を掲げて其厚意を謝す

明治卅六年十二月十日　名和昆蟲研究所

◉昆蟲世界購讀者紹介者芳名

徳島縣　高羽仁三郎君　(一名)
岐阜縣　小竹浩君　(一名)

◉昆蟲叢書第貳篇 昆蟲標本製作全書

右に對し、本誌前號に於て東京、大阪諸新聞の批評を掲載せしが今動物學雜誌、新農報の批評を掲ぐれば左の如し。

◉動物學雜誌　本書は昆蟲叢書の第二編として名和昆蟲研究所より出版せられたるものにして、目次凡例等を除きて百三十三頁、二枚の口繪の外五十の木版を挿む。

第一より第三章までは昆蟲標品の價値、本邦に於ける標品製作法の沿革及今日まで本邦にて出版せられた標品製作書に付て記述し第四より第七章までは採集法（時節、時刻、場所、處置を說き幼蟲、蛹の飼養法）に及ぶ。第八より第十章までは本書標題通り製作法、製作用器具、標本排列及保存法を詳述す。

されば昆蟲研究志望者の爲には親切なる手引きの一たるべく、處置の當否技術の巧拙等に關しては斯道に明るき人の批評あるべければ其內本誌に掲ぐることゝしてこゝにはたゞ紹介まで。

◉新農報　本書は昆蟲叢書の第貳編として發行せし者にて、流石に昆蟲學者揃ひの研究所で編纂せしもの程ありて痒き所へ能く手が届き、昆蟲標本の作成に就ては聊か漏す所なければ、昆蟲學を研究せんと欲するの人は參考書として是非座右に欠く可からざる良書であると云ふ事を保証致し升。

一月より

◉昆蟲種類分布調査欄

を新設す

◉昆蟲學特別研究生募集

今回數名の特別研究生を募集するに付規則書入用の向は郵券相添へ至急照會あれ直に送致すべし

明治三十六年十二月十日　名和昆蟲研究所

枝竹節蟲其他四種

學説

◎蜻蛉に就きて（三）

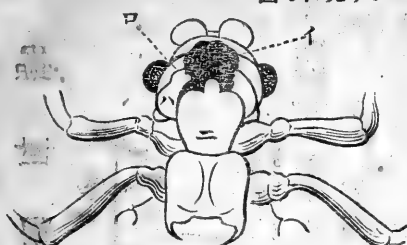
在東京　長野菊次郎

交尾、蜻蛉類の交尾の方法は實に奇異なるものなり。抑蜻蛉の腹部は十節より成り、雄の生殖孔は第九節に存して之より精液を排出す。又腹部第二節の下面に少しく屈曲せる貯精嚢を有し、第九節の生殖孔より出したる精液を此嚢中に貯ふるものなり。又其尾端には扁平の附屬器と方盤とありて、能く雌の頭部に附着すべき構造を有せり。雌の生殖孔も亦第九節に開けり。今交尾せんとするや雄は尾部の方盤を雌の頭部に緊着せしめ、雌は腹部を曲げて其第九節を雄の腹部の第二節に接し、貯精嚢より精液を受くるものなり、其關係の大要は模型圖につきて知るべし。斯くて交尾を畢るも雄の尾端は容易に雌の頭部より離れざるを以て、雌雄連續して空中を飛翔すること往々吾人の目撃する所なり。尚ほ之が詳細なる觀察は動物學雜誌第七十一號に佐々木博士のやんまの交尾に就きての記載あり。

蜻蛉交尾の關係を示す模型圖

產卵、卵は水中に、或ハ水草の莖中に產下せらる。或る種類にて水草の莖に挿入すべき装置を有せざるものは、靜に水中に產卵するか、或

は卵を圍繞せる粘着物によりて水中に沈みたる物に附着せしむ。然れども其他は躰の一端奇異に變化して尖るか、或は堅硬となりたれば、是にて植物の組織を切り開き、其切口に卵を挿入せしむ。雌蟲は卵を置かんとて漸次水草の莖を下に這ひ行くに從ひ、往々全く水中に沈むことあり。然れども雌蟲は常に空氣の層にて包まれたれば、水中に在るも若干時間呼吸することを得。卵の數は種々なれども大なるを常とす、但し此等の卵に寄生する奇異なる寄生蜂ありとなり。

幼蟲、孵化したる幼蟲は直に活潑に動作す、之を水蠆又はヤゴと云ふ。水蠆化して蜻蛉となることの古より既に知られたるは、本草綱目其實を記せるにて知るべし。曰く、水蠆化蜻蜓蜻蜓仍交于水上附物散卵復爲水蠆也云々と、蓋し蜻蛉の形の大なると、其數の多きと、飛翔區域の略定まれるとは大に其觀察に便を與へしものならんか。既に世人の知る如く蜻蛉類の幼時は盡く水棲的性質を有するものにして、幼蟲は成蟲と全く其形狀を異にすれども、蛹は靜止の狀態を取らずして殆んど幼蟲と區別することを能はざること多し、是蓋し變態不完全と稱する所以なり。幼蟲の形狀たる甚だ奇異にして驚くべきもの多し、其頭部の如き一見何等の異樣を認めざるが如しと雖も、若し之を轉覆して裏面を觀察するときは、殆んど全く頭部の下面を被へる角質の板ありて、其板の後端は殆んど第二脚の基部に達せるを見るべし。此板たるや前方に鉸鍊關節を有して二重となり、上なるもの廣くして二個の顎狀附屬物を有し、之を開閉することを得べく、又其下端には細齒を有せることあり。此奇異なる裝置は下唇の發育せるものにして假面と呼ばる、蓋し頭の下面を覆へばなり。假面の目的たる

オホヤマトンボの幼蟲の頭部を下面より見たる圖

(イ)は上唇　(ロ)は上顎
(ハ)は下顎　(ニ)は假面を開きて示す

食餌を捕獲する用をなすものにして非常に有効なる裝置と云ふべし。若し不幸なる昆蟲其近傍に來るときは、幼蟲は直に其假面を十分に伸長し、顎狀片を以て其蟲を捕へ、然る後假面を閉ぢて其顎狀片を口の適當の位置に持ち來たし、容易く其食餌を取るものなり。幼蟲の呼吸法は奇異にして、直腸は無數の氣管支を有し、無數の乳頭狀を形成しつゝ腸壁をも貫けり。水は直腸に吸はれて腸腮（Rectal gill）は水中より酸素を攝取す。此方法は又或種に向ひて運動の動作を與ふるものなり。即ち呼吸の爲めに吸收したる水を急激に射出するときは、之が反動によりて幼蟲は前方に進むことを得べし。或るものは又腹部外顋を兩側及び尾部に有せり。若し幼蟲十分に生成して水を去る時に至れば、或る隱れたる氣孔によりて呼吸することを得。併し水を去りてより空氣呼吸を始むるに至る精密なる方法は、今一層の研究を經るに非されば詳細に知ること能はざるなり。幼蟲十分に成長すれば、寧ろ柔かなる動物より廣く扁平なるものに變じ、水草の莖の上或は堤防又は岩の上等に這ひ上り、皮膚背部より裂けて蜻蛉羽化するなり。幼蟲の此脫殼は水流に於て普通に見るべし。

水蠆は其性貪食にして弱き水棲の昆蟲類は殆んと之か飼食たるを免るゝこと能はず、此性は幼蟲の全時代を通じて引續き、漸々成長するに從ひ次第に大なる昆蟲を捕へ、遂に小魚及び他の水棲動物をも捕ふるに至る。又同類相食むことも少からず、甚しきに至りては十分生長したる幼蟲が成蟲の未だ翅を展張せざるものを捕ふることあり、然れど是に反し往々水棲動物の爲めに攻擊せられ、强暴なる水棲者の犧牲となることも少からざるあり。

種數、蜻蛉類の記載せられたるものは二千種以上ありとあり。而して英國自生のものは殆んど四十六種を算すべく、米國に產するものは三百種を下らずして、其內二百二十五種は同國固有のものなりと云へ

り。ケリコット氏(Kellicott)の言によればオハイヲ洲には殆んど一百種あるべく、ウイリアムソン氏(Williamson)はインヂアナ洲にて一層多數を檢出し得べしと云へり。本邦所產の種に至りては其全數を知るに由なしと雖ども、學名を有せるもののみにても既に四十餘種ありて、之が精細なる圖は動物雜誌に載せられたり。（完）

◎皇太子殿下奉獻中等敎育昆蟲標本詳解（其四）第十一版圖參看

名和昆蟲研究所內　小竹　浩

（五）　鱗翅類

鱗翅類とは蝶蛾類の總稱にして四翅鱗狀の細紛を以て色彩を施し、口部は上唇、下唇、大腮は退化すれども下唇鬚は發達し、小腮は延長して管狀の長吻となり吸收に適す、常に螺旋狀に卷縮し、其長さものは四五寸に達せるものあり。幼蟲は皆咀嚼に適する口具を有し殆んど植物を害す。多くは八双の脚を有すれども、中には腹脚一對乃至三對を欠くものあり。前號口繪の下圖は蝶類のみを蒐集したる者なり蝶は晝間飛翔し、靜止のときは翅を背上に直立せしめ、翅の彩色概して表面美也。觸角棍棒狀をなし、下翅には翅刺を欠く。蛹化するには繭を營まず垂蛹若くは帶蛹也。稀には葉を捲き其中に蛹化するあり。

(二一)アゲハノテフ(Papilio xuthus, L.)　鳳蝶科に屬し、四翅黑色素地に黃色斑紋を有し、前翅の中室には黃色の四條線あり、發生時期によりて大小及び色彩に多少變化を來す。普通年三回の發生にして、稀には四回發生するものあり。幼蟲は柑橘類の葉を食害し、初め茶褐色に黃白色を交へ恰も鳥糞に似たれども、五齡に入りて暗綠色となり、第三節の背面兩側には眼狀紋と其間に四個の馬蹄狀紋を有す。第四節より十一節に至る迄は兩側の下方に各一個の輪紋ありて、第四節にあるは小さく、第一節よ

り三節迄は腹面に小さき同狀紋を有す。物に恐るゝときは後頭部より肉角を出し惡臭を分泌す（此科に屬するものゝ幼蟲は凡て一齡より肉角を有す）。蛹は帶蛹にして本誌七十號及七十二號に中井氏の實驗說あれば玆に畧す。

（二二）クロ　アゲハ　テフ（Papilio demetrius, Cramer.）　前種と同科に屬し、全体黑色を帶ぶ。雄は翅色濃くして後翅の前緣に黃白色の半月紋と後緣角よは赤紋を有し、雌は後翅に黃白色の半月紋を欿く。幼蟲は初め鳥糞に似たれども遂よ暗綠色に變し、第三節背面に眼狀紋を、第七節側面の下方より第九節背面の中央に向て暗茶褐色の太き斜條を有す。蛹は帶蛹にして前種よ似たり。（本誌七十一號參看）

（二三）モン　キテフ（Colias hyale, L.）　粉蝶科に屬し、發生期により大小一ならず、翅色黃色にして、前翅の先端殆んど三分の一は暗褐色を帶び、其內に黃色紋あり、中央の前緣に近き處よ一個の黑點を有す後翅は外緣よ暗褐色部と、中央に一個の黃色圓紋あり。雄は皆黃色なれども、雌よは黃色と帶黃白色との二形あり。幼蟲は靑綠色にして、氣門線太く黃白色なり、其線上各關節に一個の赤黃紋を印す。紫雲英、ミヤコグサ、スヾメノエンダウ等を食す。（本誌第七十二號參看）

（二四）ツマグロ　アカツバメ　テフ（Zephyrus lutea, Hewiton.）　小灰蝶科に屬し、四翅赤黃色を呈し、前翅の前緣角部は暗褐色に、後翅の後緣角よ二個の黑紋あり、其中間より尾樣物を出だす。裏面は前翅の外緣に沿ふて黑色點線あり、中央に始まり後方よ至りて太く明なり。中央よは長短四條の細き銀白色線あり、後翅は外緣部稍濃色にして各翅脉間に數個つゝの黑紋あり、中央には判明なる二條の銀白線を有す。六七月頃椚樹等の多き山林中に飛揚す。

（二五）ウラ　ナミ　シヾミテフ（Polyommatue boeticus, L.）　前種と同科に屬し、雄は翅の表面淡紫色を

呈し、外縁褐色を帶ぶ。後翅の後縁角には二黒点を有し。裏面は灰褐色にして、多くの白色波狀細線を有す後翅の後縁角部は橙黄色を帶び、内に二黒点あり。雌は翅の表面暗褐色にして、中央より基部に向て瑠璃色を帶ぶ。幼蟲は淡緑色にして、暗緑色の背線と灰白色の氣門線とを有し、頭小さく褐色を帶ぶ。刀豆、鵲豆等の莢中に入りて内部を食害す。（本誌第七十四號參看）

（二一六）シヾミ　テフ（Cyaniris argiolus, L.）　前種と同科に屬し、雌雄により翅色を異にし、雄は鳩羽色にして外縁黒色を帶び、雌は前縁より外縁に沿ふて巾廣く黒褐色を呈す。裏面は雌雄共に青灰色にして外縁に一條の細き黒線ありて縁毛を分界す。其内方に雄は二列に、雌は三列に小黒点を幷列すれども判明ならず。後翅は其内方に尙數個の小黒点あり。（本誌第七十四號參看）

（二一七）テング　テフ（Lybithea lepita, Moore.）　天狗蝶科に屬し、翅色黒褐色にして前翅の中央に赤黄色の大なる斑紋あり。前縁角に近き處に四紋ありて二群をなし、前縁角は鉤狀をなす。後翅の邊縁は凸凹多く、中央には赤黄色の斑紋あり。下唇鬚は長くして口吻狀をなし、頭の前方に突出す。幼蟲は暗緑色にして朴の葉を食し、成蟲にて越年す。（本誌第七十四號參看）

（二一八）ミスジ　テフ（Neptis aceris, Lep.）　蛺蝶科に屬し、翅は黒くして開展すれば前後翅を通して三條の蒼白色の横列紋ありて飛揚不活潑なり。幼蟲は褐色にして第三節には粗毛を生じたる突起あり、五節の背面隆起し、尾端に突起ありてアカシヤの葉を食す。長く靜止するには常に葉柄を少しく咬み、其葉を黄變せしめ、該葉に休止す、是れ保護の爲め葉色を自己の体色に似せしめんが爲めならん。蛹は垂蛹にして黄金色を呈す。（本誌第七十二號參看）

（二一九）ヒオドシ　テフ（Vanessa xanthomelas, Schiff.）　蛺蝶科に屬し、翅色樺色にして黒色と黄褐色とを

以て外緣部を彩り、後翅には藍色を交ゆ。內方には前翅に數個、後翅に一個の黑斑あり、裏面は枯葉色をなす。幼蟲は一寸四五分に成長し、頭には小疣を有す。黑色の背線と亞背線ありて、第二節以下各節に四個若くは六個の大小棘刺を有し、常に朴の葉を食害す。蛹は垂蛹にして成蟲にて越冬す。(本誌第十號參看)

(三一〇)ゴマダラ テフ(Hestina japonica, Feld.)　蛺蝶科に屬し、翅色黑く、上翅には大小十數個の蒼白色の斑紋あり、後翅は中室及其上方幷に臀脈部は蒼白色を帶び、外緣に沿ふて數個の小斑点と、中央の前緣より後緣角に向て一列に蒼白紋を幷列す。幼蟲は朴の葉を食害す。其初め鼠色或は灰褐色なれども成長すれば綠色に變す。頭部には二個の角狀突起ありて先端岐る。蛹は垂蛹にして淡綠色に白粉を覆ふが如し、年三回の發生にして幼蟲にて越年す。(本誌第五十六號參看)

(三一一)ウラギン ヘウモンテフ(Argynnis adippe, L.)　蛺蝶科に屬し、翅の表面は赤黃色にして、黑色の斑紋多く、前翅の第二第三翅脉上には特殊鱗を有す。翅の裏面は後翅に於ては綠黃色にして判然たる銀白紋を有し、中央より稍外緣に近き所に褐色の圓紋列ありて銀色紋を橫斷す。幼蟲はスミレを食し、赤褐色にして背に切れ切れの線ありて其下に黑色の斜條紋あり、且つ赭褐色の棘を生す。(本誌第七十二號參看)

(三一二)ハナセヽリ テフ(Parnara pellucida, Murray.)　弄花蝶類弄花蝶科に屬し極めてイチモジハナセヽリテフに似て翅色暗褐色に黃金色の鱗粉を散布す、前翅には灰白色の斑紋を耳狀に羅列し、後翅の中央には四個若くは五個の灰白色紋を橫に列ね出入をなす。幼蟲は笹を食し、稀には稻葉を食害す。飛揚活潑にして各種の花に集り花蜜を吸收す。(本誌第七十五號參看)

(三一三)キマダラ テフ(Neope gaschkevitschii, Men.)　環紋蝶科に屬し、翅の表面黑褐色にして外半は

帶褐黄色の大なる斑紋ありて、其内に黒点を有し、後翅の基部には黄褐の長き軟毛を密生す。裏面は黄褐色にして、前翅には黒褐色の斑紋あり、外縁に波狀線と其間に三個の黒褐紋とを有す。後翅の內半は種々ある彩色を以て雲狀紋をなし、外縁の波狀線は前翅に似て其間に八個の蛇目紋を有す。(本誌第七十五號參看)

(三四)ウスイロ コジャノメ テフ(Mycalesis gotama, Moore.) 環紋蝶科に屬し、翅の表面は淡き黒褐色にして、前翅には外縁に近き處に大小二個の蛇目紋あり。裏面は灰色にして外縁部に波狀紋あり、前翅の環紋は表面と等しく、時としては三個なることあり、後翅には六個ありて二簇をなし、其內方には前後兩翅を通じて灰白色の一條あり。幼蟲は淡黄綠色にして、腹端の一節は異様に突出す。常に禾本科植物の葉を食し、五月より九月に亘りて發生す。(本誌第三十八號及七第十三號參看)

(三五)チャ マダラ ハナセヽリテフ(Thanaos montanus, Brem.) 弄花蝶科に屬し、翅色黒褐色にして前翅の中央及外縁に近き處に灰白色の雲狀紋あり、後翅には黄色の斑紋多く、裏面は前後兩翅共に帶褐黄色の斑紋多し。幼蟲は綠色にして竹の葉を食し、三四月頃發生多し。(本誌第七十五號參看)

◎臺灣產螢種に關する第二報告 (拾遺)

在臺灣苗栗　永澤小兵衛

曩に、余は臺灣產に係る螢種を紹介するに當り、島內に弘く分布するは、甲種(雌の無翅なるもの)と、乙種(黄褐色の翅を有するもの)との如くなるも、他に猶は鳳山地方には別種を產する旨を附記し置けり蓋し、彼の稿の其一節より第三節までは、臺北に於て、第四節より第七節までは、打狗に於て執筆せしが故に、自づから局限の嫌ひありしのみか、當時は鳳山產を多獲せざりしを以て、異日、中部臺灣產螢

と、もに、之を併記せんと欲せしが故なりき。幸ひにして、豫想は違はず、茲に他の螢品と共に、之を列記するの機會を得たれば、前報の補足として讀者に告ぐる所あらんとす。

一、三種の螢火と其產地　前報後に採集せし種類は、都て三種あるを以て、假に丁種、戊種、己種の符號の下に其產地を記載せんに、「丁種」前報寄送後、即はち七月廿五日、還た鳳山に往て、土人と共に城門の內外を搜索せしに、是夜獲たる所のものは數十頭に上りしも、余が豫期せる或種（追て言ふ所あらんとす）は絕無にして、未だ見慣れぬ別種十餘頭の紗囊底に微光を發するものあり、驚て之を檢視せしに、內地產の最小形種に彷彿たる一種にて、回想すれば、六月中、臺北に於て其雌蟲一頭を獲たることありき。其際は乙種を多く採集したれば、或ひは變種にもやと輕信し、敢て介意せざりしに、此に至りて頗ぶる意外の感を起しぬ。其後、八月十二日より臺中にて試みし五回の採集、同月十七日の葫蘆墩十八日後に於ける后里庄、廿二日の三叉河、廿三日後の苗栗に於ける採集に徵して、是は專はら中部と南部とに產するも、多少北部にも棲息する種たることを認めり。「戊種」初め余は、南部臺灣には、必ずや螢火の蕃殖多からんとの想像を畫きて力を此方面に致し、打狗に於ては概むね隔夜に、臺南に於ては七月廿七日より八月三日の間に五回、橋仔頭庄、嘉義、雲林、彰化に於て、各一回の採集をなしゝかど毎に獲る所のものは、甲種に非れば、乙種のみにて、私かに其分布區域報道の多く謬らざりしことを悦ぶと共に、將た新種の獲難きに失望せしが、臺中に移るに及びて、八月十一日より五回の採集中に、二種の異品をば、乙種と共に捕獲することを得き。此戊種は即はち其一にして、外貌酷はだ乙種に似たるも、之を細檢すれば、明かに別種に屬する特異點を具備せるを見る。而して此種の臺中に稍多く、葫蘆墩、后里庄また其發生あり、三叉河と苗栗とには、頗ぶる蕃殖の盛んなる等より考ふれば、蓋し北部よ

り中部に渉れる普通種の一たるべし。「己種」是は戊種と同じく、始めて臺中に於て獲たる異品あるが、また葫蘆墩、三叉河等に於ても採集せり。翅色は前者と違はざるも、其躰軀の巨大なるは、一瞥の下に兩者を鑑別し得べし。余が採集せる黃褐翅螢の一類三品中、最大のものにて、最小の丁種と同じく多く獲難し。便はち此種また中部臺灣を主產地とするものたることを知れり」。從來余が採集の成績を以て云ふときは、甲種は臺北、打狗に普通にして、臺南には特に多く、乙種は到處に多しと雖も、臺中と葫蘆墩とに最とも多く、丁種は鳳山に多く、戊種は三叉河と苗栗とに多く、己種は臺中に多かり。而して不結果に終りしは、澎湖島、恒春、海口、枋山、東港、嘉義、雲林、彰化等なりしが、未だ採集を試みざるは、臺北と苗栗間の各地とす。然ども季節の早晩、夜色の明暗、時刻の遲速によりて、成績に異同を來たすものなることは、豫じめ知らざる可らず。

二、三種の螢火の形貌　由來、形貌を詳說するは、記事の乾燥に失する嫌ひあるも、右述の事實を釋證せんが爲めに、此等の新螢に就て、大要を摘記すれば、次の如し。

(イ)丁種の雄蟲　全體內地產の小形種に似て、體軀は少しく細長に、身長二分四厘、濶一分、翅長一分九厘、濶五厘あり。臺灣產螢中の最小形種にして、全翅正黑、周邊には淡黃を帶べる纖細の邊緣を彩どり、翅端は腹末よりも稍長し。即はち甲種また黑翅を有するも、其形長大扁濶に、且つ其胸背の大なる、翅の邊緣の設色の濃厚にして細太の差ある等は、此種と違ふ所なり。胸背は黃褐にして稍赤色を帶び、眼は藍黑にして大に、兩眼の間隔は纔かに一厘五毛に過ぎず。觸角は長九厘許り、短細にして上に淡褐の微毛を生ぜり。胸部は淡褐色を呈するも、腹部は純黑にして光澤あり。發光器は淡青白色にて二條の並行線をなし、上節は稍太く、下節は細く、都て長三厘强、濶八厘を算するのみ。

發光器に續て尾節あり、形極めて微小にして、其色は胸背に同じ。

（ロ）丁種の雌蟲　全體雄蟲に似たるも、其違ふ所は、稍大形にして、且つ發光器と眼球の小なる等にあり。此種の性質として、飛行の際には駛力遲緩に、光力また頗ぶる微少なるが、特に雌蟲に於て顯著なるを見る。然れば夜間水邊の雜草上に靜止せる時の如きは、其光力の薄弱なるが爲めに、彼の幼蟲期のものと誤認することあり、又飛行の際には、往々他種の光輝に消されて、網羅を脱るゝことあり。多くは初更より出でゝ低處を往返す。其棲息處は、水田の近傍なるに似たり。而して臺灣産螢中、最とも内地産のそれに類肖し、且つ最小形のものを求むれば、實に此一種の外に出です。然れども雌蟲には、稀に乙種と同大に肥滿せるもの無きにしもあらず。

（ハ）戊種の雄蟲　形貌、色彩等より云へば、最とも能く乙種に肖たりと雖ども、翅端に顯著なる黑斑を有すること、猶は褄黑横這蟲の如くなるを以て、直ちに彼此を判別し得べし。身長三分强、濶一分二厘、前翅は長二分五厘、濶七厘ありて、之を展開するときは都て五分四厘を算す。後翅は長二分七厘、濶一分二厘を有し、其尖端は腹尾よりも稍長し。胸背は其色黃褐、數點の淡黑斑を印え、且つ中央には一條の縱溝を劃し、兩側は尖銳にして、刺狀をなせり。胸腹の折界は明白にして、前胸は長六厘、濶九厘弱、後胸は稍大にして且つ厚し。頭部は長五厘許り、其濶七厘ありて、眼の間隔は二厘に餘り、其色碧黑、外方に露出して、殆んど全頭を掩へり。觸角は絲狀黑褐、長一分三厘許り、初節と第三節とは長く、第二節のみは短きも、他は概むね同長にして、密に細毛を生せり。腹部は肥滿して上四節には兩脇に濃褐斑を以て、巧みに長三角形を彩どり、長一分三厘、濶一分あり。腹背の前二節は黃褐を帶ぶるも、二中節は淡黑褐に、後三節は黑褐を呈す。發光器の全長は九厘を算し、上節は橫

帶狀をなし、下節は漸次窄小す。故に上節の最廣部に於ては、長三厘强、濶一分を算するも、下節との接着線に於ては、長六厘弱、濶八厘に減じ、下方に至るに隨ひて、遂に篦頭狀をなす。而して乙種は矢鏃狀をなして少しく凹窪の局部を存するも、此種は平滑にして潤澤を有する帶綠白色を呈するのみか、全たく尾節を缺如するが故に、其翅端の黑紋と相竢て鑒別の徵證に供し得べし。脚部は乙種に似て腿節と爪色とは黃褐に、其他には黑色を交ゆ。前脚の腿節と脛節とは、各五厘、其跗節は三厘に出でざるも、中脚は腿脛兩節ともに六厘ありて、跗節は四厘を算し、後脚は腿節六厘、脛節七厘、跗節は五厘左右あり。

（三）戊種の雌蟲　　體長三分二厘、濶一分三厘、翅色は乙種に比して稍黃綠なるを覺ゆ。翅長二分七厘、濶七厘五毛、半透明にして、末端には多少の黑彩を有するも、敢て雄蟲の如くに分明ならず。後翅は深黑微黃を帶び、長二分五厘、幅一分二厘ありて、體長よりは短かし、胸背は雄蟲よりも其色稍濃かにして、寧ろ丹褐を帶び、其幅一分二厘許り、中央縱溝の左右には數點の灰黑痕を留め、兩側は稍尖れり。觸角は長一分二厘、細毛を生じ、末端には微褐色を帶ぶ。頭部は幅六厘、眼球は帶藍黑にして小に、双眼の間隔は約三厘あり。腹部は黃褐を帶び、其兩脇に些少の黑褐紋を彩どるのみにして、發光器上の一節には通有の黑帶を缺き、背後も尾端の他は帶白黃色を呈し、唯發光器上の二節のみは淡黑褐なり。發光器の一節なることは、他種に異ならざるも、原と正一字形をなさず、不規則なる波狀をなすが故に、其放光に當りてや、兩側のみ明かにして、中央狹窄部の暗黑あるを見る、長二厘、幅一分一厘あり、其次節は短太にして、尾端また乙種等の如くに尖長にあらざるも、一枚の針樣物を有せり。脚部は他種の如くに脛節以下漆黑ならず、概むね帶黑褐色にて、美麗なり。試みに其長を測

りしに、前脚は四厘强、五厘弱、三厘强の三節より成る。中脚また殆んど同長なるも、唯蹠節は稍長く、後脚には六厘、六厘、四厘餘の三節あり。此種は、雌雄ともに光力强烈にして、常に乙種と同棲するものあるが、特に雌蟲の體軀は豐肥にして、腹部の色彩少しく淡きの別あり。而して乙種の雌蟲の尾端には縦裂の皺皮二條を有するも、此種のものは反つて膨起せり。

(ホ)己種の雄蟲　此種は、余が採集品中、最大の黃褐翅螢にして、中部に多く、南北兩部には少なし、熠光高翔の狀、頗ぶる甲種に類するを以て、採集の際には誤認することあるも、彼は青燐を發し、此は黃燐を放つが故に、容易に識別し得るなり。常に好みて駛行し、又種族の繁殖少なきが故にや、捕獲すること難し。身長は三分七厘より四分二厘に及び、濶一分五六厘あり。前翅長は三分七厘許り、幅一分を算し、後翅長は三分二厘、濶一分四厘弱、比較上短かきを以て尾端に達するに至らず。頭頂の幅は八厘ありて觸角は絲狀をなし、其長一分二厘あり。眼色は藍黑を帶び、露眼に屬すれども左まで巨大ならず。兩眼の間隔は約三厘ありて、其色淡朱褐を帶ぶ。是れ未だ他種に見ざる所の特異點たり。胸背また淡朱褐にして、直ちに間隔線に聯なり、中央の縦溝の左右には、灰黑の斑點を留め、其兩側は著るしく尖鋭に、幅一分二厘あり。腹部は稍大にして黃褐に、發光器上の一節は漆黑窄狹なり。發光器の上節は長三厘餘、幅一分三厘、下節は長八厘弱、幅八厘を算え、匙頭狀をなして、其周邊には黃褐色を彩どる。腹背は淡黃微褐にして各節は一樣に窄く、發光器以下の三節を除くときは、他は二厘强の長を算するに過ぎず。脚部は他種よりも稍長く、前脚は五厘の腿節、四厘强の脛節、四厘弱の蹠節より成り、中脚には六厘强の腿節、六厘の脛節、四厘の蹠節ありて、後脚は七厘の腿節、七厘の脛節及び六厘の蹠節を有せり。

（ヘ）己種の雌蟲　外貌は宛から雄蟲に似て、身長四分二厘、幅一分六厘あり。前翅ハ開張七分五厘強、全長三分七厘、幅十分を有し後翅は長三分六厘、幅一分五厘ありて、其末端は發光器と末節との間にあり。頭頂の幅は九厘強に及び、觸角は長一分三厘ありて、初節の長く、次節の短かきを見るの他、概むね同長を算す。胸部ハ黄褐、胸背は赤褐にして、中央には凹線を刻し最闊一分四厘あり。眼球は小にして、雄蟲の如くに露出せざるも、兩眼の間隔は四厘に及び、其色の胸背に同じきことは雄蟲の如し。腹部は豐滿にして、幅一分六厘、淡黄褐色を帶び、それに微小なる黒褐斑を印するが故に恰かも鼈甲の斑點にも比ぶべし。發光器は四厘弱、次節は約六厘、尾端は四厘内外ありて、發光器と並行せる一節には黒澤を有す。腹背は淡黄を帶び、各節の長は約四厘にして鎧袖狀をなせり、中に就きて發光器上の四節には、左右各々一小黒斑を有し、尾端は黄褐色を帶ぶ。脚部は雄蟲と大差なく、前脚の腿節脛節は共に六厘、跗節は五厘、中脚また略ぼこれに同じ、唯後脚のみは、腿節七厘強、脛節八厘、跗節六厘ありて、爪鉤は褐色なり。

三、臺灣產螢の命名　臺灣に產する各種の螢火には、特有の標識を具ふること、前に列擧せるが如し而して斯く採集を重ぬるに隨ひて、漸やく新種を增すの事實より推測を下すときは、將來、必ずや幾種かの奇品を發見するの日あるべく、特に番界開放の時に於て、未だ世人に知られざる種屬を獲ることあらんと信ず。然れば邦稱の如きも、弘く採集の後に比較研究を遂げ、各々これに恰當の命名を欲するの餘り、余は每に符號をのみ用ゐ來り、敢て擅まゝに、新稱を命ぜるに至らざりしが、飜つて顧みれば、記載上不少の煩累を免かれ得ざるのみか、また覽者の記臆に不便あらんと思はるゝ節無きにあらず。蓋し本邦に於ては本草和名、和名類聚抄、新撰字鏡、萬葉集（前報に萬葉集に螢火の名稱之れ無きやう覺

も」となせしは記憶違ひありき）等にホタルてふ名稱を存するに關はらず、國學者流の莊子に倣ふてや、夏蟲として之を歌文の材料となせしより、古今集、古今六帖、枕草子、後拾遺集等には之を夏蟲の名稱にて收載せしも多かり。隨ひて其種屬に對する名稱も頗ぶる單純にして、同じ夏蟲の一なる蟬等に比ぶれば、其異同を辨知せるに足れる俗稱をも有せざることは、大小二形種の名稱に止まれるに徵するも昭らけし。斯れば、他日有識の士の鑒定に依りて之が學名を知り、併せて邦稱を命せんとの希望をば茲に一擲して、假に其形貌、色彩に準據せる新稱を公けにするの已むことを得ざるに際會せり。而して此等の邦稱たる、固より大體に照して定むる所に係れば、名實必ずしも相合ふもの丶みにあらず。例へば、甲種の胸背と、其翅翼の周緣とは、飴色を彩どるも、俗稱に從ひて之を茶緣と命し、乙種の翅色は帶灰黃褐なるに、略して之を茶翅となしゝが如し。識者願ひに杜撰僭越を咎むること莫らんことを。

第一、甲種　チヤベリ　クロ　ボタル（茶緣黑螢）　無翅の雌蟲には命名せず、たゞ雄蟲の色彩を標準とせり。

第二、乙種　チヤバチ　ボタル（茶翅螢）　此種は弘く全島に分布するを以て、黃褐翅螢を代表せしむ

第三、丙種（名を缺く）　未だ研究を遂げざるを以て、暫らく命名を缺く。

第四、丁種　ヒメ　クロ　ボタル（姬黑螢）　內地にはヒメボタルと稱する種類あるも、敢て混同することの無かるべしと信じて、斯く名つく。

第五、戊種　ツマグロ　チヤバチ　ボタル（褄黑茶翅螢）　黃褐翅螢中、雌雄ともに翅端に黑斑あるを以て、此稱を適當ならんと思考せり。

第六、己種　オホ　チヤバネ　ボタル（大茶翅螢）　目今捕獲せる黃褐翅螢中、最大形種に屬するを以て斯く命名せり

（完）

◎柑橘の害蟲に就きて

靜岡縣　岡田忠男

近年到る處柑橘栽培の聲喧しく、其栽植日に月に多々ならんとするの傾きあり、此時に當て本縣の如きも多少其熱に感染せし結果、本年本縣農事試驗塲に於て調査したるに、其栽植反別一千〇八十餘町歩の多きに上れるのみならず尚ほ進んで栽植せんとす。然るに是等の繁殖は將來に於て喜ぶべき事なるや否や、顧みれバ是等栽植の盛んなると同時に一つの憂ふべき事實を認めつゝあるなり。其事實とは何ぞや、即ち貝殼蟲の輸入にして、或は近縣より、或は遠く米國より取り寄せたるの結果、其害蟲の棲息に好適するの地方に於ては著しく繁殖しつゝあるは余が認むる處にして、現に七八年を經過したる柑橘樹の如きは、購入の際其害蟲の有無を知らずして輸入したるの結果、遂に枯死に瀕せんとするものあり、又一方には輸入害蟲のみならず、從來野生の植物に托生したる處の昆蟲も此新植物を移植すれば是れに移轉し來りて、或は葉を害し、或は莖幹を傷ひ、或は果實を害するの種少なからず。今余が茲に照會せんとするは後者に屬するものにして、全く其地方野生植物の害蟲なるも此栽培植物たる柑橘に移轉し來りて害を加へたるの事實を、實地踏査したるまゝ左に項を別ちて述べんとす。

（一）被害の塲所　這回柑橘に蟲害を被りしは縣下田方郡西浦村と云へる村落にして、縣下柑橘栽培の有數なる個所なり。而して同村の地勢たる、一方には海を控へ、一方には山嶽を帶び、柑橘に最も好適なるの土地なるを以て、古來より栽培し來りたるも、現今畑地に、或は新に開拓して盛に温州ネーブル種等を栽植し、目下一村にして總反別六十餘町歩の多きに達せり。然るに本年は多少結果を見るに到りしも、去る九月上旬より突然少しく黄色に變じ、下旬に至りて落果するもの夥多なり。依て如何なる事によりて斯く落果するものなるやに就き調査したるに、晝間は異狀なきも夜間に到れば無數の蛾類の飛

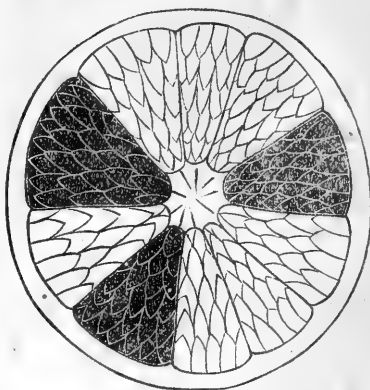
アケビノキノハガノの圖

翔し來りて皆果面に附着し居るを認め、全く此の害蟲の害なることを知るに至れり。依て同村農會は郡農會に、郡農會は縣農事試驗場に其調査方を請求せられたるを以て、余は十月十五日同地に出張して調査したるに、被害地は平坦なる土地にあらずして全く山間部にあり、而して其種類たる香柑、温州の兩種にして、或る場所の如きは香柑の如きは採るべき果實なきに至り、其被害區域たる山間の園にして反別數町歩に及び、落果するもの實に夥多なりしあり。

(二)害蟲の名稱及び性質加害の狀態

右に述べたる被害は如何なる害蟲の加害したるものなるやは知るに由なきを以て、同村に出張し同村柑橘の熱心家を訪問せしに、已に加害する所の害蟲を採收し標本となして保存せられたり。依て之れを一見するにアケビノキノハガ、コガタノキノハガは其主なるものなれども稀にはヨトウムシの一種、シヤクトリガの一種をも見受けたり。而して是等の害蟲の來襲するは何れの時刻なるかを調査するに毎日沒後にして、晝間は柑橘園に棲息するもの稀なり。即ち夜間に於て食餌を得れば又何れにか逃げ去りて跡なし。故に何れの方面より來るものなるやを調査するに、多く山間幽谷の樹陰に晝間潜伏し居るもの、夜間に到れば直ちに飛び來りて加害するもの﹅如く、若し一度捕獲を過まれば

コガタノキノハガの圖

直ちに幽谷に向ひて逃げ去るを認む。其加害せんとするや、飛翔し來りて果實の何れを論せず、少しく黄熟の氣味あるものより鋭利なる口吻を挿入して液汁を吸收するを以て、其際委しく調ぶる時は微細なる穴より液汁の流出し居るも内部は蜜房破裂せられて空隙となる、此時に當つて根部より來る養液は自由に運行する事能はざるを以て、遂に黄色を呈して落果するもの丶如し。其落果したるものを驗する時は、其口吻を挿入したる跡一個に付き七八個所より十ヶ所以上を認む。其被害高多きは一日落果するもの一反歩に付き千個以上二千個の多きに達せし事あり、其被害の甚しきを証するに足るべし。

被害の温州蜜柑の横斷面圖

右の害蟲は兩種共鱗翅目蛾類擬尺蠖蛾科に屬するものあるを以て茲に附記せ

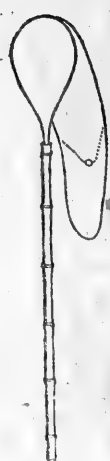
参考、此二種の害蟲は今夏縣下富士郡加島村に於て梨果に加害するものなりとて同地の知人採集して送附せらる。又田方郡韮山、函南兩村に於て葡萄に加害するものなりとて同地にて採集せしものを實見せり。尙余はコガタノキノハガに就ては名稱不明なりしを以て、名和昆蟲研究所に質問せしに去る十月二十二日同所員小森省作氏よりコガタノキノハガ(Calpe excavata, Butl)なる名稱を附し、其加害植物に就ては或者は葡萄の害蟲とも云ひ、又梨の害蟲とも申すもの有之候へども、確然相分り不申候との回答ありたり。又西浦地方にては、今年夏時、葡萄及梨を加害したるものありたれ共、其何種なるやは不明なり。或は此種ならんかと云ふものありたり。又此記事を草するの際、全國害蟲驅除講習會を修了したる增田秀雄氏に會ひたるに、同氏の前種を飼育したる所に依れば、アケビの尺蠖なることを明言せられたり。

右の事實より考ふる時は、是等二種の害蟲は柑橘のみならず梨、葡萄等をも害し、幼蟲の時代は野生植物に托生し、成蟲となれば果實の液汁を吸收する所の害蟲ならんと考ふ。

(十二)驅除及び其結果　今同村栽培被害者は如何にして驅除せられたるやに就て調査したるに、其被害

を認めしより毎夜圖の如き竹筒を以て(イ)の口より(ロ)の節を貫き、是に石油を入れて口に木綿の栓を固くなして之に點火し、圖の如き捕蟲網(咽喉付)の口の小なるものを用ひ、曩の火光を以て搜索しつゝ、其內に蜜柑に蛾の附着したるものを入れて動搖して網內に落して捕獲するにあり。斯くして採集したる

點火用竹筒及小口形捕蟲網の圖

もの、一人にて一夜に數百頭の多きに達せりといふ。

余は此被害の實況を踏查して考ふるに、前法を用ゆる時は多くの手數を要するものなるを以て、此場合に糖蜜誘殺法は簡易にして適當なる方法あらんと思考し、即夜より之が試驗を施行せしめたり。然るに此方法にては前種アケビノキノハガは一頭も集合せざりしも、コガタノキノハガは左表の如く集來せり

施行月日	誘引個所の數	集合せし處の蟲數
三十六年十月十七日	松杭の高さ四尺許の者四本を立て是れに糖蜜を塗れり	三本共各一頭宛
同　十月十八日	同	二本は三頭宛、二本は二頭宛
同　十月十九日	同	四本共各二十頭內外

右施行せし個所は被害の最も多き所に行ひしなり、其結果として益々害蟲の香氣を判然感ずるに到れば益多く集合するの傾あり、然れ共此研究は同地熱心家倚引續き實施し居るも、未だ報告を得ざるを以て後報を得て報せんとす。

以上述べたる所の記事は、單に考ふる時は唯柑橘に蛾類の害蟲集合して液汁を吸收したるものなれども亦一方より考ふる時は、現今我國に於ける果樹栽培益盛にして、其結實時季に達せしの際野生植物に托生したる處の是等の害蟲、何時か移轉して加害するに於ては計るべからざる損害を招くの恐あるを以

て、聊か顚末を記して當局者諸君の注意を促し、一方には是等の如き野生植物に托生せる害蟲の農作物に侵害する種類の調査を讀者諸君に乞ひ、本誌に掲載して廣く一般に了知せしめられん事を希望する所以なり。

◎昆蟲の肢に就て

名和昆蟲研究所助手　小森省作

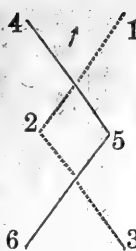
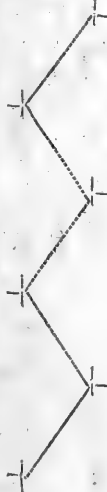
編者云、本篇は本月五日第六十回岐阜縣昆蟲學會席上に於て、小森助手の講演せられたる談話の大要なり。

月日の脚は實に迅速なるものにて、本年も已に此會は是れにて終りとなりました。余は如何にして此月日を歩み來りしかを思へば、轉た寒心に堪へない事があります。故に今日は其れに關係して昆蟲の肢と云ふ演題を出しまして越年致さうと存じます。

凡て物は必要に應じて發達するものなることは、今茲に申上げないでも御承知でありますが、昆蟲の肢に就ては實に甚しきものがあらうと存じます。而して昆蟲の肢は其翅と關係を有するものにして、翅の比較的發達せるものは肢は比較的退化し、翅の比較的退化せるものは其反對の結果となれるは、是れ自然の勢であります。先づ御覽なさい、直翅類の如き比較的翅の發達せざるものは肢の發達は非常なるものにして、蝶蛾類の如き、蜻蛉の如き翅の發達せるものは肢は比較的退化せるを見る。又其必要上より發達し或は退化することは、幼蟲と成蟲との關係を見ても自ら知ることが出來ます。即ち蜻蛉の幼蟲の肢が發達せるに係らず成蟲の肢は比較的退化せるが如き、甲蟲類の幼蟲の肢が退化せるに係らず成蟲の肢の發達せるが如き、或は鱗翅類に、双翅類に、此等の關係を觀察し來れば皆此の自然の妙理に適合せざるものはありませぬ。特に茲に奇態なるはカマキリカゲロフ、ツチハンメウ、マメハンメウ等の幼蟲であります。是等は孵化の當時見事なる肢を有するも、一度其宿主に寄生するときは、肢は其用を失ひ、又は全く之を欠くに至る、實に自然の必要より起る現象は豈に驚かざるを得ざる次第ではありませ

ぬか。是等より推せば蜂類、蠅類、天牛類、象鼻蟲類、蛾類の或種等の幼蟲が無脚なる理も、自ら明かなることでありませう。

昆蟲の脚は鱗翅類及膜翅類の或種の幼蟲には腹脚と胸脚とあれども、成蟲には前、中、後の胸部に各一對つゝ有するのみにして、基節、轉節、腿節、脛節及跗節より成り、跗節は又一乃至六節より成りて先端に爪鉤あるを常とす。而して肢も亦其必要上種々の變形があります。即ち其一例を擧ぐれば蟷螂の肢は各對とも非常に發達せるも特に前肢に於て甚しく、基節は長く發達して腿節、脛節には鋭棘を有し、脛節の先端にあるものは鎌の狀をなして物を攫むに適し、螻蛄の前肢は土を起すの必要より大に發達して、脛節の一部及跗節は變化して鼹鼠のそれに似て居る。ゲンゴロウムシの後肢は能く發達して脛節の先端に二棘と跗節には長毛を有し、其雄の前肢は交尾上の必要より跗節の第一、二、三節は變じて膨大し、吸盤を備へて楕圓形となり、蠅類の跗節には吸盤ありて平滑面に止まるを得べく、蜜蜂科に屬するものは多毛を有して跗前節を有し、其他タガメムシ、ミヅカマキリ、ユリハナスイ等の如き、又蝶蛾類の或種の爪鉤を有するあり有せざるある等、是等を數へ來らば盡くる處あらざるを以て、先づ此邊にて止め、是より歩き方につきて少しく御話致しませう。

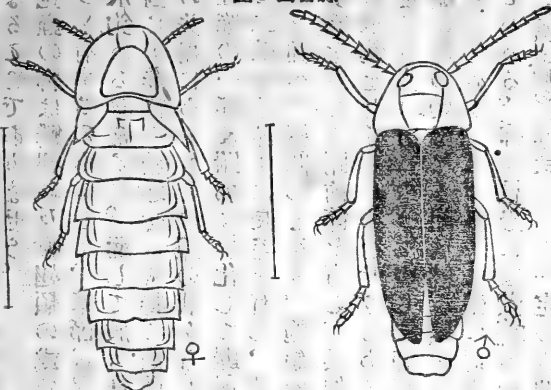
蠅類等の幼蟲なる蛆は躰を緊張して匍ひ、尺蠖は屈伸して進み、直翅類の或者、微翅類の蚤の如く跳ぶものもあり、又浮塵子は横に匍ふとあるも、そは兎も角茲には肢を前後して進むなる即ち歩むことに就てゞある。抑も昆蟲には蜚蠊の如く速く走るものあり、又竹節蟲の如く緩歩するものあるも、皆多くは一定の方則に從つて居ります。即ち其の操脚の有様を云へば、上部に示せる如く(1)なる前肢を上ぐるや(2)なる中肢、(3)なる后肢は之に引續きて前進せしめ次に(4)(5)(6)を進むるのである。而して此の場合に於て、前肢は躰を前方に引き、中肢は躰を支へ、后肢は躰を前方に押すの用をなす。又昆蟲の歩行せし痕跡を見るに、蟲種により前後肢の非常に異なるありて多少の差異は免れざれども下圖に示す如くなり居れり。是等は昆蟲の肢に色を塗りて紙上を匍はしむるか又は砂上を歩ましむれば容易に實驗し得べきとであります。尚蟲種に從ひ肢の各部分の發達退化せる關係を論ずるとは隨分興味あるとなれども其は他日に讓るとゝなしぬ。

昆蟲操脚の順序式

昆蟲脚跡の圖

◎藤吉螢の話

長崎縣對馬國　平田駒太郎

本篇は先月二十三日對馬國の昆蟲學熱心家平田氏が來所の節、所員一同より催したる茶話會席上に於て談話せられたる一節にして筆に馴れざる者の筆記なれば、文章の拙劣は勿論、誤謬の点あるも計り難し、讀者之を諒せよ（筆記者白す）

吾が對州は南北三十六里、東西四里乃至七里の一小島嶼なれども、潮流の爲めに南北に於て其の氣候を異にし、南部には亞熱帶植物を生じ、北部には寒帶植物を有するが如き實に面白き所であります。從て動物に於ても高等動物には山猫は非常に多く、黄鼬にはワタボシカブリ、鳥類にはナミエゲラ（方言キタゝキ）、ミヤマシヤウビンなる等餘程内地とは趣を異にすれば、定めて昆蟲にも面白きものがあろうと存じます。中にも藤吉螢に就ては秋季非常なる壯觀を呈しますから、私共は初め螢は全く秋出づるものにして却て春出づるのを不思議の樣に考へました。三十二年に渡瀨博士の依頼により採集して送りましたに、春採集したるものは内地に普通なる源氏螢、平家螢ありしも、秋に送りたるものは非常に異なりて、解剖の結果皆雄にして支那東海岸地方にて採集せしものと同結果なりし由。然らば其雌は如何なる場所に如何にして棲息し居るやに就ては其當時一の疑問でありましたが、或日私が植物採集の爲、當島有明山に登りました歸路、黄昏小川の流れに沿ひて、禾本科植物なるドザシバに登りて切りに光火の明滅せるものがありましたから、之れ螢の幼蟲なりと思ひて採集し、歸りて能く調査したるに、完全なる複眼を備へ、其他の点に於ても成蟲なるもの、如くありました。故に之が調査を乞はんと早速渡瀨博士の許に送りましたに、調査の結果、意外にも此の無翅螢は秋季盛に空中に於て光火を發する所のものゝ雌なることが分り、又其産卵するを認めましたは三十四年でありました。而して此雌の光火は明滅するも、雄は常に非常なる光度を有し、三四頭之を集むれば書籍位は讀むこと得まする。其分布は支那の東海岸より朝鮮地方に亘りて居るから此地方より攢まり來り、我が對馬や臺灣等にも居るのでありませう。併し朝鮮の北海岸元山津地方に棲息し居るも

藤吉螢の圖

♂　♀

のは、未だ何種なるや不明に屬して居ります。而して又此の藤吉螢の雌は躰が非常に大きく太りて、其最も小なるものにても長さ一インチ位あります。翅は退化して只痕跡を止むるのみ、擧動頗る不活潑にして、殆んど生殖の用を成さんが爲に出來て居るもの丶如くで、常に禾本科植物類の葉に止まり、頭を地面に、尾端を上に向け、尾端より異樣なる光を放ちて雄を招きますが、配合者を得れば發光力を失ひます。雌雄の割合は雄三十乃至四十に對する雌一頭位なれば、雌雄淘汰の結果、さてこそ雄は壯觀なる光火を發するに至りし次第でありませう。發生の時期は九月中旬より十一月初旬頃迄にして至て不規律である、雌蟲の藏卵は七八十粒ありて甚だ大きく、蘚苔類のある濕氣多き所に產附し、產卵後一週間を經れば其卵は黑褐色を帶びて約二週間目に孵化し、幼蟲は蝸牛を食し、大さ一分內外にて其儘越年し來春充分成長して蛹化するものでありますが、此成蟲は各地に於て往々聞き傳ふる所の螢合戰と云ふ如き事はなきものと見え、未だ一度も見聞したる事なきは、雌蟲に翅の無きが爲めでありませうか。尙是等の螢に就ては渡瀨博士より近々詳細なる發表があるでありませう。

雜錄

◎昆蟲雜信（其二）

岩手縣　鳥羽源藏

◎夜なく蟬　夜鳴く蟬のありやなしや余は深くも研究せず、又夜間蟬の聲をき丶しと云ふ人あれど何蟬なるかを確めしを聞かざりき。然るに昨年飼育箱にチッチゼミを入れ置きしに、夜間人靜かなる一室に於てチッチ〳〵〳〵と鳴き出てしは、晝と思ひしの故か將た月夜とでも思ひ違ひたるにや、想ふに月夜には稀に鳴くものならんか、此蟬は本邦所產中の小形種の一にして、吾か地方には最も多き種なりとす昨卅五年十一月十三日に猶この蟬の鳴聲をきけり、之れ恐らくは蟬類中最終まで鳴くものならん。

◎エダナヽフシムシの食餌　形態の奇狀を以て、標本箱內に在りて先つ目につき易きは竹節蟲科の昆蟲なるべし。体形何れも木枝に酷肖せるを以て、斯學者の珍とする所なり。余は曩に屢々枝竹節蟲を捕へたれど、幼蟲やら成蟲やら何時も其識別に苦めり、之れ彼は他の昆蟲の成蟲の如く羽翅を生するこ

となければなり。然してたとへ幼蟲と知るも、食草の不明なる故飼育を試みて十分老成せしむるの便を欠き居りしが、昨年彼に種々の植物を與へ、遂に苹樹の葉を嗜食するを覺りて一頭を飼育し、又同年十一月十一日更に野外に於て一頭を得しに、直ちに圖の如き卵子を産出したりき。依て共に飼育箱に養ひ十分成長せしめしに体長三寸三分五厘とあり、觸角は前肢より長きこと圖（第十二版一圖）に見るが如しこの蟲枝上に靜止するや、時々前肢を頭上に擧げて合掌するが如くにして動かざるなり。体色は初め褐色にて緑色を帶びたりしが、落葉の候に及びては黑褐色に變して、愈々木枝の如くなれるも奇なり。苹樹の葉を食するに據り考ふるに、この昆蟲は野外に在りては薔薇科植物たるズミ或はオホズミの類を食するならん。卵子は青灰色にして恰もジユズダマ Coix Lacryma Jobi, L. の色澤のそれに似たり、二頭産む所の總數九十二個なれども、一頭は若干個を野外に産遺せしものなれば、一頭の産數不明に屬すれども四十六個以上なるべし。

○クビキリバツタの越冬　昆蟲類中には嚴冬を凌ぎて安全に越年するもの丶多きは今更いふの必要なけれども、本年三月一日午後五時、庭前にて發見せるクビキリバツタ（名和氏のツユムシ？出品目錄の七五三、松村氏のツユムシは又別種なり）は觸角は二本共過半を折損し、右の後脚の腿節以下を失へるも猶よく生命を保持して靜かに歩行しありき。我が寒地に於てこの種の越冬せるは余の最も珍とする所なり。

○オホヲナガバチの産卵の方法　オナガバチや馬尾蜂の雌の産卵器の長きを見ては、一般の世人も奇蟲として珍重する所なるが、其産卵器の説明をきゝて一層奇異の感を懷く者多きも無理ならず。この類の産卵器は、生活せる際は中央針を、兩側の二針は其被鞘となりて之を抱き挾み、一本の觀を呈すれども、乾燥の標本に於ては三本に分離せるものなり。一昨卅四年の晩夏、妹等の大聲に余を呼ぶを以て走り行き見しに、オホオナガバチの松材の皮に靜止して、其小孔を切りに圖（第十二版二圖）の如き狀態にて突き探し居るありけり。余は其奇狀を目擊して眞に面白く思ひ、今猶其狀の髣髴として目前に迫まるの感想あり、彼は多くの小孔を一より二と熱心に挿し試みつゝありて、熟視するに孔内に挿入するものは中央針にして、他の兩側の二本は裂けて三本鼎足の如くなり腹部を支持する事の妙なるに驚かざるを得ざりき（大孔には三本を一束にして挿入するならんか）。餘り彼を熟視せしに、遂に飛揚せしめぬ。依て小孔部を靜かに切り取りつゝ驗せしに、内部淺くして卵粒を認めざりき。余頃日昆蟲生態學なる書の挿圖を見しにオナガバチ一種の産卵狀を示せるものあり、余の見たる狀と異なれるあるを以て玆に圖

する所以なり。想ふに彼の馬尾蜂に在りては産卵器の長さ五寸六分もあるを以て、樹上に靜止して使用困難なるべければ、飛翔しつゝ孔內に挿入するなるべし。

○キスヂカミキリの害　當地方近年葡萄を栽植するもの多し、然るに新芽伸長して葉片開展し果園新綠の美を裝ふの時に當り、處々の葉片日毎衰弱して新莖又萎凋の不幸に遇ふこと多し。就て莖部を撿せば、小形の天牛科に屬する幼蟲の內に潜み、皮間に於て莖を嚙みまはしあるを發見するなり。このものは圖の如き形狀にして頭部至て小さく、却て前胸は膨大して頭部の觀を示し暗赤色なり、翅鞘黑色にして淡黃の線條あると圖(第十二版三圖)に示せる如き成蟲となる、名稱はキスヂカミキリ(Xylotrechus pyrrhoderus, Bates.)なり。九月上旬頃產卵するものゝ如く、翌年八月中羽化す。この害蟲は他日葡萄の大害蟲の一として大に恐るゝの地方あるべしと信ぞ。冬季に於て贅枝を刈込みて燒棄し、八九月の頃成蟲の捕殺を行ふは大にこの害蟲の蕃殖を防ぐに足るべし。

○發音する小蛾　鱗翅目中の昆蟲には鳴聲を發するものは其例少なきが如し、余はシモフリスヾメを捕へたる時其腹端の剛毛を物体に摩する時に當り一種の音を發したるを聞けるのみなりしが、本年七月十四日午後六時二十分莘樹園內に於て捕へたるトラガ(Eusemia japana, Motsch.)は上下に飛揚するときは切りにセッチ、リッチ〳〵の如き音聲を發するものなりき。初め其聲をきゝし時は直翅目の或るものか、或は蟬類の或小形種の枝上に靜止して鳴き居るものと思ひ、靜かに鳴聲を發する個所を探かしゝに飛翔しつゝ鳴けるこの小蛾を獲たり。前翅淡黃色にして黑條を圖(第十二版四圖)の如く散し、外緣の半ばより後緣の方面には濃き赤色の斑線ありて頗る美なり。後翅は全面濃黃色なり。腹部の下面を見れば第一環節に當り明瞭なる發音器を有し、後脚の基部併に腿節は其上被となれり、一寸蟬類の發聲器に似たれども其構造も發音法も蟬類とは異れるものあらんと信ず、されども只一頭を獲たるのみなれば當分詳細の調查を缺けり。嘗て本誌六十五號に齋藤啓二君の記されし花布紋蛾といへるはこれにあらざるか。

○シラヤマギクの蟲癭　シラヤマギクは山野に普通なる植物なるが、昨卅五年十月一日に得たるシラヤマギクの葉片には圖(第十二版五圖)の如き蟲癭五個を生せるを見たりき其狀宛然芽の將に伸長せんとする如き觀ありき。就て剖き見るに、膜翅目に屬する小蟲の蛹の潜めるを知り得たり(其後成蟲を得るの便を缺けり)。某植物書に不定芽の例証として、シラヤマギクの葉よりも芽を生ずる旨明記せり。恐らくはこの種の蟲癭を誤認せるにはあらざるか、暫く疑を存す。

◎六足蟲彙纂（亥の巻）

在東京　長野菊次郎

（二十九）日本に於ける昆蟲採集　今こそ東京には上等のホテルも出來たれ、余が日本に遊びし頃、疊の上に寢ぬる樣の不快なることもさせで、外國人に懇切なりしは、獨り精養軒のみなりき。然れどそれさへ今は飽き果てぬ。余は五日間宿の窓より、引潮につれて築地の海に流れ入るいと穢き溜水を眺めつゝ、かゝる低地に長居したらんには、何時しかマラリア又は他の病氣に取りつかるゝは必定なりとの恐を抱きければ、山地に赴かんとの決心をぞなしたりける。山とは如何に、そは國の内部に聳ゐて緑の色に裝はれ、雲の白帽を戴きて噴烟の響の遠雷にまがふ有名なる山なりけり。さて滊車にて行かるゝ限を馳せ人力車を曳き、又は押す爲めには人夫を傭ひ、又採集者の一行をも伴ひ、やがて碓氷峠を越えぬ。十二年前までは、西より東に赴く旅人の、いと苦しみて過ぎ越えし所なりとかや。東京灣まで連續せる一帶の關東平野の上、三千フイートの位置に達せし時、日は西に沈み、烈しき雷雨は日の暮るゝと共に襲ひ來りぬ。やがて九時半の頃に及びて、雲間を漏るゝ月光に、泥濘深き路をたどりつゝ行きしに、西の方より掃ひ來る夜氣の冷なる吸呼は、我等の顏を容赦なく扇ぎ、今や我等は峠の頂上にあるなるべし。朦朧たる月の光に透し見れば、彼の有名なる淺間火山の偉大なる影は、近く我等の前に横はりぬ。そも此淺間山は、再三其附近數里の地を荒蕪に歸せしめ、殆んど彼のベスビアス(伊太利の火山)の巨大なるものと見るべし。我等は其夜日本の疊の上に寢ね、翌朝早く出發して、草葉に輝ける露の玉を踏み分けつゝ、追分さして野原を急ぎぬ。荷物は前に送りつゝ、我等は自然の艶美に圍まれて、逡巡の中に一日を暮しぬ。籬の内又は野の中に咲ける數種の百合の花や、艶麗を競ひ、嬌態を鬪はす數百の花卉は、芳香を以て空氣を薫らしめ、其所にも、此所にも、蜂蝶の飛びかふを見るべし。空に旗を飜がへすが如き黒雲は、晝夜をわかず淺間山の火口を噴出して、我等の頭上を掠め去れり。五種の豹文蝶は灌木の傍、谿川の上に銀色の翅を閃めかし、大なる黒鳳蝶は牧場を横りて飛翔せり。或は青きシジミテフ又は輝けるベニシジミ、其他ヒヲドシテフ類の十數種は、低き灌木の上に、或は草の間に戯れけり。最も熟練なる太郎と云へる採集者は、大得意にて叫びぬ。旦那さん此種は横濱にては見つかりません。旦那さん此種は東京附近にては捕まりません。かくの如く、我等は米國人にも、日本人にも、同樣に目新しき種類をか集しつゝ、太陽の西山に搗く頃まで、山の裾野をさまよひけり。かくて雲のとばりは夕日に照りさへて、眞紅の色を現はし、紫の色を生ずる頃、我等は追分の道の邊の旅人宿の前庭に歸り着きぬ。扨一週

間此所を本據として採集したる報酬には、千の蝶蛾及び二千の甲蟲を携へ歸ることを得たりけり。（ホルランド氏の蝶譜）

◎昆蟲に關する隨感隨筆（第六回）

昆蟲翁

（卅九）蟲聲に依りて結霜の有無强弱を知る　毎年十月頃迄は毎夜蟲聲（普通に於てコホロギ、エンマコホロギ、ミツカドコホロギ等）を聞けども、一度結霜せば當夜よりは殆んど蟲聲を聞かざるに至る。然れども結霜の時期遅れ且つ其度强ければ、一度に全く蟲聲を聞かざるに至る。是に反して時期早く、且其度弱ければ多少の蟲聲を減ずるも全く止むとなし。是れ蟲聲の有無、其强弱の程度に依りて結霜の强弱をも知ることを得るなり。此記事は十月末日の執筆にして、當時は全く蟲聲を聞かざるを以て、試みに岐阜測候所に問合せたる所、結霜は十月十五日、廿日、廿一日、卅日の四回ありたりと云ふ。

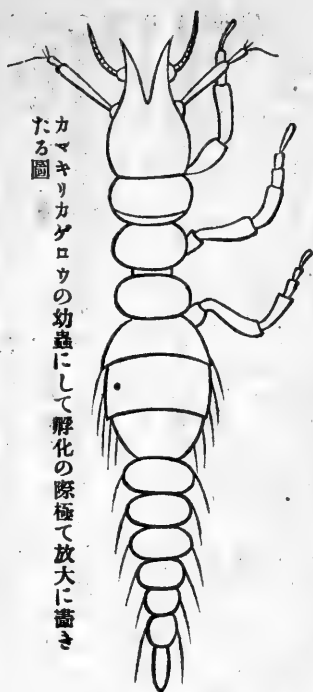
（四十）冬季昆蟲採集の利益　普通世人の想像に依れば、害蟲は自然に湧出するもの丶如き感を抱きて春季に於て始めて蟲類の現はれて漸次增殖し、夏季尤も旺盛を極め、秋季に到りて減少し、冬季に於て全く滅盡するもの丶如く思ふを常とせり。故に害蟲驅除を勵行するも偶然説を主張して熱心に從事するもの極て少く、寧ろ害蟲發生は偶然なれば打捨置くも自然に消滅するが如く思考せり。或は害蟲發生は到底人意の及ぶべきものにあらざるを以て寧ろ神佛の加護を請ふより外なしとて、除蟲の神符を田圃に建て、恬として人爲驅除を顧るものなきに到れり。是れ結極冬季昆蟲が如何にして經過するものなるやを知らざるに原因せり。是れ仮令春夏秋の採集を廢するも、寧ろ冬季の採集に勉めなば如何に昆蟲が越冬し得るやを容易に知ることを得て其効果の不尠にあらざるあるべし。現に昨年二月、岐阜縣昆蟲學會主催となりて冬季採集の昆蟲展覽會を開設し、如何に利益を得たるや、又本年五月、愛知縣寶飯郡小學校冬季採集昆蟲展覽會の結果は如何、實に意外なる害蟲の意外なる所に潜伏し居るを認めたる等一々枚擧に遑あらざるなり。目下大ひに夫々準備を爲し、一月乃至二月中に於て越冬の昆蟲を採集するは、尤も利益あることと信ずるなり。是等のことは本誌上に屢々記載したることあれば、宜しく參照ありたし。

冬　春　夏　秋

春夏秋冬に於て昆蟲の増減する有樣を示す所の圖

（四十一）鳥胃中の昆蟲　鳥胃中の昆蟲を調査せんと欲して、解剖したるに其結果次の如し。十一月二

日カケス一頭中直翅類（バッタ）一、小豆澤山。モズ一頭中直翅類の卵三十五塊、甲翅類一。同一頭中直翅類二、甲翅類二。トビ一頭中蛙八、イナゴ四十七、蠅一。烏一頭中甲蟲一、甲蟲足四本、甲蟲上顎一、籾九、麥四、瓜の實二、魚の骨二。十一月六日烏一頭中オナガウジ十七、ソバ、ヱノキの實。

（四十二）擬蟷螂蜻蛉の幼蟲　カマキリカゲロウの幼蟲は、外國の昆蟲書を見るに蜘蛛の卵塊に寄生することを記載せり。而して昆蟲世界第五十九號（卅五年七月發行）口繪第八圖に示す所のものに就て、翁が日記には次の如く記載せり。「明治十七年七月廿七日、伊吹山絶頂の雜草中にて一頭を捕へたり。而してマッチの箱に收めたるに、一兩日中に、箱中に於て五、六百粒の卵子（卵子の形狀は八圖のイ及びロに於て示せり）を產み直に死せり。卵の大さ長二厘強、幅一厘許の楕圓形にして、二厘許の柄を持つこと恰もクサカゲロウの卵に異なることなし。產みたる卵塊の狀態は、一見黴菌の如くにして密生せり、然し卵子と卵子とは接することなし、其高さ一樣なれば殆んど一平面をなし、其色は淡黃色なり、而して八月十日頃孵化したり、即ち產卵後約二週間なり。幼蟲の色は淡褐にして少く胸部に黑色を帶び、体の長さ四厘許なり」。廿年八月十三日御嶽山麓即ち飛驒國益田郡小坂村字落合小字暗に於て捕へ、其後廿五年八月某日伊吹山にて一頭捕へたるのみにて、該種は極めて僅少なりと信ず。

カマキリカゲロウの幼蟲にして孵化の際極て放大に畫きたる圖

（四十三）害蟲驅除の良法如何　往々害蟲驅除豫防の簡便方法を質問する人あり、深く尋ぬれば不便の方法をも知らざるの人なり、到底是等の人に對して如何なる良法を敎ゆるも、殆んど無効に屬せり。目下の所は良法、便法を需むるよりも、寧ろ昆蟲學の思想を普及して組織を完全にせば、驅除其法の完全を得るよりも其効を奏すると多し。故に仮令茲に良法あるも、組織不完全なれば得る所殆んどなしと云べし。

◎昆蟲小感（二）

岡山縣赤磐郡可眞村昆蟲調查所　稲井克雄

昆蟲分布と小學生徒 [illegible] 昆蟲學研究の一方法として分布調査の必要なるは、今更喋々を俟たざる所、夙に名和昆蟲研究所は、其一部として全國の昆蟲分布調査に從事し、百方研究調査に怠なし、斯學界の爲め、誠に慶賀すべき次第なり。殊に蝶類分布の如き、小森氏擔當せられつゝあるもの、如し。さらば地方同學の士は須らく細心以て精密なる採集と、緻密なる觀察を持ち、啻に其地の分布のみにても調査あらんことを希望す。勿論一地方と雖ども、よろしく其が發生時季を誤らざる樣、出來得る限り廣く採集を努め又能く其地勢と、植物分布の有樣とを考察し、依て以て充分採集に注意を要すべきなり。故に其地に同學の士なく、啻に一己の採集觀察のみにては調査すること極めて難し。茲に於て乎斯學研究者は同志の者をつくるか、或は他に方法を設けて助力を仰ぐを要す。斯くせば假令研究者は一人なりとも、比較的容易に調査し得らるればなり。余は郷里に歸省以來、日未だ淺く、凡我が地方の昆蟲界に極めて疎く、蝶類中稍々普通種たるゴマダラテフ及びコムラサキテフは、地勢上本郡にも分布せるならんと推想し、百方採集に注意したるも、昨初秋より今日まで、未だ一頭だも手中に入らざりき。余思へらく、是れ此地に産せざるか將又採集の範圍狹きが爲めかと種々考慮を回らし、後日の研究採集を積むに如かずと爲せしに、偶々今夏、本郡某高等小學校の希望により、時々昆蟲談を爲す可き依賴を受け、恰も暑中休暇たる、七月卅一日の閉校式に臨み、八月十五日復習日に出校の際、必ず蝶類の何たるを問はず、一人に付き二三種づゝ採集携帶すべき問題を與へ置きしに、其採集物中に前記二種の蝶類我地方に發生せるを知り得たり。されど其が發生地は、我が郷里を距る二里余の山隈、さは言へ郡内是れが分布を確めたるは、そも亦小學校生徒の力與て大なりと言ふ可し。昆蟲學と生徒の關係、ただに是れのみならんや。

蚊の調査を希望す　　蚊は昆蟲學上及び衛生學上研究す可き價値あるを信ず。殊に麻拉利亞病源の如きは、ハマダラカ其の張本者たり。隨て其他これに屬する種類をも調査する、又頗る必要の事に屬す。而して醫學に於ては專ら病的關係を調査研究し、主として病害の蔓延なからしめんことを努め、昆蟲學に於ては多く習性經過を探究し、驅除豫防するを要す。余淺學なれ共、名和昆蟲研究所在學中少しくこの調査に從事したる事ありと雖ども、素より韮才の余目醒しき發見もあらざりき。然れ共ヤブ蚊の如きはそが産卵の場所並に該族にして同類相食む等の事實を確め得たるは、また幾分か茲に注意したりし結果なりと自信す。されど悲哉、一度研究所を去て以來、兎角百事猬集し、又在所研究と同日の比にあらず誠に遺憾に堪へざるなり。去年十月より一の水溜めに、ヤブカの幼蟲幾百千棲息しけるが、冬期は如何

にせるやと觀察しけるに、遂に其儘今春まで生活し、幼蟲にて越冬せし事を確めたり。然れ共未だ一疑問として、昨冬は平年より温暖なりしが爲めなるや否や、宜しく本年の實見を積むの必要あり、刻下當さに草葉凋落し、蚊虻又冬眠の準備をなす、讀者請ふ是等の研究を祈る。

螟蟲驅除と地方青年　螟蟲と浮塵子二種、何れを怖る可きやと地方農家に質せば、忽ち浮塵子なりと答へんのみ。是れ曾て一大打擊を受けたる後の農家の害蟲心なり。此の語は各地同しと信ず。然れども稻作の一大害蟲は、浮塵子よりも螟蟲なりと言ひ、驅除の必要を縷々數千言陳べ立つも、農家は左まで感せざるなり。故を以てこれ等の驅除稍もすれば等閑に付し去る嫌を免がれず、枯穗苅採り容易に行はれ難し。偶々本年、本郡可眞村にては、今夏始めて地方青年會の組織成るを幸ひ、森崎同村長之れを利用し、枯穗苅採の有效を青年に談じ、席上一致を以て各部落の農家に觸示し、期日を定めて苅採りを實行したるに、農家不平なく從事することを得たり。

附記、本誌前々號雜錄欄内余の螟蟲に關する記載中、去月二十二日とせるは八月二十二日なれば茲に訂正す。

◎螟蟲驅防獎勵展覽會準備記事（第五）

蟲の家主人

（二一五）螟蟲驅防記事の増加　卅年浮塵子大發生の爲世人は始めて蟲害の恐るべきを感ずると同時に、害蟲なるものは只浮塵子あるを知るも、未だ他に害蟲あるを知らず。故に浮塵子にあらざれば害蟲にあらぞ、害蟲は即ち浮塵子なりと信せり。然れども稻に對する害蟲の大將に擬すべきものは螟蟲にして浮塵子は副將に相當す。又之を病に例ふれば螟蟲は慢性病にして、浮塵子は急性病なり。急性病は自他共に注意するも、慢性病に至りては其病症の恐るべきを知るも、自然怠り勝となりて結極一命を失ふに至るなり。故に第一此際浮塵子の急性病を所理すると同時に、久しく患ひ來りし螟蟲の慢性病をも全治するに到らしむれば、國家の命脈を無窮に傳ふるとを得べきと信ずるの餘り、微力ながらも其方針を執り來りしが、此頃に到りては漸次螟蟲に關する記事の増加したるのみならず、然も尤も有益なる成績を續々發表せらるゝに到れるは、實に幸福と言ふべし。然るに目下の所、新聞、雜誌等に掲載せらるゝ螟蟲に關する記事のみにても、能く當昆蟲世界の紙數を悉く滿して尚餘りあるとを信せり。此分にては遠からず大將たる螟蟲を斃すに至るべきか、讀者諸君以て如何となす。

（二一六）渡邊講習生螟蟲驅除視察報告　第一回岐阜縣長期害蟲驅除講習生渡邊樵四平氏は十月末日よ

り同廿二日迄岐阜縣惠那、土岐の兩郡へ螟蟲驅除監督の爲め出張し、其際視察したる所の報告は如左。

惠那郡　本郡は年々螟蟲被害甚しく、昨年の如きも之が爲め僅に二割以上の減收なりし故、農家一般に螟蟲驅除の等閑に附す可からざるを自覺したると、一は其筋よりの熱心なる督勵とにより、今年の如きは、去る五月、郡內町村長會議に於て螟蟲驅除法として、苗代田に於ては必ず五日目每に採卵を爲すと、時期を見計ひ誘蛾燈を用ふると、農家は必ず一箇以上の捕蟲器を製し苗間にある螟蛾を捕殺すると、苗代田には所有者の氏名を記したる札を立つると、螟卵及び蛾は各町村農會費を以て買上を爲すと、之等の驅除には農家は勿論小學校兒童を利用すると、植付け後と雖も採卵を爲すと、心枯及び白穗拔取を勵行すると等を決議し、各町村は非常なる熱心と決斷とを以て、町村內を數區に別ち、各區に驅除委員若干名を設け、委員長之を監督して決議事項を勵行し、中にも採卵法は一層の注意をなし、小學校兒童にも放課後又は日曜日等に共同驅除を爲さしめ、教員之を監督せり。又心枯及び白穗切取り等も熱心に之を勵行し、螟蟲驅除としては殆んど完全無欠とも云ふべき程なりしを以て、今秋に至り其効空しからず、全郡殆ど螟蟲の被害を認めざる程なりき。併し螟蟲買上げを爲したる町村內には、多少の弊害ありし箇所二三を見受けたり。之に反し阿木村の如きは買上法に換ふるに獎勵法則ち採卵及捕蛾數の多寡に依り之を一二三等に別ち、小學校兒童には硯、墨、紙、筆等、農民には拾錢より五拾錢迄を各等級に依りて之を賞與したるに、僅の費用にて却で多くの費用を以て買上を爲たる町村より遙に好成蹟を擧げたるを認めたり。之等を以て見れば、螟蟲驅除法としては採卵の最も効あると、賞勵法の買上法に比して弊害少く、僅の費用にて其効果の大なるとを認むるに難らず。本郡は此度の白穗切取の如きも、郡內を三區に別ち、郡役所よりは左の如く各區に一人づゝの監督を出し先九月中旬より之を施行し、今十月十二日迄に全部完結せり。三區の町村名及び監督者次の如し。(一)甲區村尾農事巡回教師擔當、坂本村、大井町、長島町、東野村、阿木村、本鄉村、武並村、三鄉村の十ヶ町村。(二)乙區渡邊書記擔當、落合村、中津町、苗木町、福岡村、付知町、加子母村、坂下村、蛭川村、笠置村、中之方村の八ヶ町村。(三)丙區伊藤郡書記擔當、岩村町、遠山村、鶴岡村、陶村、吉田村、明知町、三濃村、串原村、下原田村、上村の十ヶ町村。本郡陶村字猿爪の一部に一畝歩計りの田面白穗を以て滿されたる箇所ありしを以て之を取り調べたるに、多くはホタビイモチの爲なりしが、其內一割位は螟蟲被害の爲に白穗となりしものありし故、村長及び持主立會の上悉皆之を刈り取らしめ、籾は稻扱にて扱き落し、藁は之を槌にて打ち、螟蟲を壓殺せり。其藁一百本に付き取調べたるに、內三十三本は健全のものにして、五十四本はイモチの爲に枯死し、殘り十三本は螟蟲被害の爲なりき。其莖中に居る螟蟲數を取調べたるに、次の如き結果を顯せり。

明治廿六年十月十一日調白穗一本中に居りし螟蟲數

稻莖	第一	第二	第三	第四	第五	第六	第七	第八	第九	第十	第十一	第十二	第十三
最大	六、〇 分厘	五、五	六、五	六、五	五、〇	七、〇	六、〇	五、〇	四、五	六、七	五、五	六、五	六、〇
最小	三、〇	四、〇	〇	五、〇	三、〇	〇	五、五	三、五	〇	〇	五、〇	四、〇	〇
螟蟲數	一〇	三	一	八	一六	一	二	四	一	一	六	五	一

計白穗十三本、螟蟲五十九、一本中に居りし螟蟲最も多きもの十六、最も少きもの一、十三本平均一本中に四頭五分强、最も大なるもの七分、最も小なるもの三分。

土岐郡　本郡も採卵法、心枯及び白穗切取りを勵行せしにも係ず、惠那郡に比し稍被害の多き感あり。郡吏員は旅費欠乏の故を以て警察に之が監督の依賴を爲しありしが、多治見及び土岐津の警察署長は非常なる熱心を以て、次の日割にて郡內一般の白穗切取りを勵行しつゝありたり。十月十日土岐津町、泉村。十一日明世村、日吉村。十二日餘戶村、土岐村。十三日稻津村、瑞浪村。十四日肥田村、多治見町。十五日市ノ倉村、笠原村。十六日妻木村、石下村。十七日駄知村、曾木村。十八日鶴里村。本郡は一般に農事より工業の發達せし所にして、從て害蟲驅除等は一向冷淡にして、之が勵行は非常に困難なりとの評ある郡なるにも係らず、警官諸氏の終日奔走監督の結果、此度は充分なる驅除の効果を奏したり。多治見町字外ノ島は螟蟲被害の白穗割合に多かりし爲め、十四、五の兩日間共同して之を切り取らしめたり。他の町村は多少の差支ありしにも係らず、豫定日限內に悉皆驅除し終りたり。

(二七)吉野郡螟蟲卵塊懸賞方法　奈良縣吉野郡農會事業として、卅六年度に螟蟲卵塊懸賞方法を設けて好成績を得たりし由なれば、今左に之を掲載す。

一等賞玄米四斗俵(十二個)、二等賞麥四斗俵(一個)、三等賞石油二斗(三個)、四等賞石油一斗(三個)、五等賞疊座四十枚(五個)右の外抽籤洩れのものには一等上半紙(三帖宛)、二等上半紙(二帖)、三等上半紙(一帖半)、四等並半紙(三帖)、五等並半紙(二帖宛)を授與す。抽籤し得べきもの一等劵附與五百九十五枚、二等劵附與五十枚、三等劵附與百卅一枚、四等劵附與百四十八枚、五等劵附與二百卅四枚、計一千百五十八枚之を町村別に區分すれば

町村名	上市町	吉野村	大淀村	下市町	秋野村	白銀村	賀名生村	宗檜村	國栖村	小川村	上龍內村	中龍內村	龍內村
一等	一枚	六	二〇八	三〇八	五四	六	―	二	―	―	一	三	七
二等	一	六	六	一五	一三	―	―	二	―	―	一	三	三
三等	―	一二	三九	四三	二二	―	―	一	―	―	一一	四	九
四等	一	一八	一九	三九	二九	一	六	八	三	二	三	六	一三
五等	九	四三	二四	四九	四九	二	一四	二	七	一	一	一一	二二
合計	一一	八五	二八六	四五四	一六七	九	二〇	一五	一〇	三	一七	二七	五四
採卵塊數	三六六三	六三九一七	四〇三三四六	七〇六四五六	二〇五〇〇八	一二五五七	七一七七	一六八〇八	三三七〇	一〇三三	一九四一〇	二四五九	四八五九

右の外南芳野村、天川村、野迫川村、大塔村、十津川村、下北山村、上北山村、川上村、中莊村、四鄕村、高見村の十一ヶ村には稻田至つて少く採卵な[illegible]りしと云ふ。今採卵塊數を各學校別に區分せば、十四万四千七百十三塊(阿智賀尋常小學校)[illegible]二万九千百五十

四塊(下淵尋常小學校)、二万六千八百八十五塊(檜垣本尋常小學校)、十三万九千六百八十三塊(大淀高等小學校)、三千八百六十六塊(今木尋常小學校)、六百九十塊(増口尋常小學校)、四万三百四十二塊(矢走尋常小學校)、一万一千八百塊(北六田尋常小學校)、二万五千百四十塊(比曽尋常小學校)、一万五千百四十八塊(萊水尋常小學校)、一万一千百六十三塊(赤松尋常小學校)、七百二塊(津風呂尋常小學校)。因に云

抽籤券雛形

表

抽籤券　何等

裏

明治何年何月何日
採卵　　塊
何村大字何　何ノ某

ふ以上は學校にて採卵せし者を揭げたるが學校教師が少しく熱心に生徒に奨勵さるゝと否とは其地方害蟲驅除の上に於ては頗る影響すべきなり。

(二八)二化螟蟲驅除の注意　静岡縣農會にては二化螟蟲驅除の注意を、左の如く記載して印刷配布せられたる由。

(第一)各郡農會長は時日を定め螟蟲被害の稻莖を一齊に苅り取るべし。(第二)螟蟲の喰枯したる稻莖は直に必ず苅り取り、若し捨て置く時は他の善良の稻莖に喰込むに付、其前に於て苅り取りを實行すべし。(第三)被害莖は根元より苅り取り、稻莖は一處に寄せ集め螟蟲を打殺し、後乾燥の上堆積肥料の原料に成すべし。(第四)苅り取りたる稻莖を道路畦畔等に捨て置くべからず。

◎博覧會出品害蟲標本解説書(三等賞)(續)　静岡縣　神村直三郎

一、排列法　排列の順序は種類の多少によりてこれを定む、即ち鱗翅類尤も多數を占むるを以てこれを第一とし、次は鞘翅目、次は有吻目、次は直翅目、雙翅目、膜翅目とす。其主とする所は、成蟲に有るを以て、成蟲は雌雄を完備し、一も之を欠きたるの種はあらず。卵、幼蟲、蛹、繭の如きハ、得るに隨て成蟲の次に之を添ふ。且敵蟲を有するもの亦これを添ふ。從來の排列法を見るに害蟲標本として一箱一種を限りこれが加害の狀、潜伏の有様を見せたるものなきにあらず、されど此法にては、一箱一種なるが故に十箱にて十種の余を收むること能はず、斯くて數十種を調製せんか、到底經濟の許さゞる所なるを以て、失費少なくして其種類を多からしめんとの考案より、予は一箱に多數の種類を收容すると

となしたり。其内容左の如し。

第一函、柑橘の害蟲アゲハノテフ二頭、幼蟲一、蛹一、同寄生蜂アゲハヤドリバチ及外一種成蟲三頭付、柑橘の害蟲クロアゲハ二頭幼蟲一、蛹一付、胡蘿蔔の害蟲キアゲハ春生（極めて小形）二頭、同夏生二頭、幼蟲一付。

第二函、蕓薹の害蟲モンシロテフ二頭、幼蟲一、蛹一、寄生蜂ギマユヤドリバチ成蟲一、同繭一付、榎の害蟲ゴマダラテフ二頭、荳科植物害蟲モンキテフ二頭、榎及柳の害蟲ヒオドシテフ二頭、十字科植物ノ害蟲スヂグロシロテフ二頭、牛蒡の害蟲ヒメアカタテハテフ二頭、樟科植物ノ害蟲アオスヂアゲハ二頭、同幼蟲一、蛹一付、稻ノ害蟲一文字セヽリ二頭、同幼蟲一、蛹一、繭一、同ヤドリバイ成蟲一頭、蛹二、同ヤドリバチ一頭、荳科植物害蟲キテフ二頭。

第三函、薯蕷の害蟲スヾメテフ二頭、同ヤドリバイ二頭、葡萄の害蟲コスヾメテフ二頭、青芋害蟲セスジスヾメ二頭、同幼蟲一付、ヤドリバイ一頭、柳の害蟲ウチスヾメ二頭、幼蟲一、ヤドリバチ二頭、甘藷及朝顔害蟲エビガラスヾメ二頭、蛹一付、胡麻の害蟲、メンガタスヾメ二頭、山梔子害蟲大スカシバ二頭、蛹一付。

第四函、桑の害蟲キンケムシ二頭、同卵一、繭一、ヤドリバイ一、同蛹村、桑の害蟲クハケムシ二頭、同蛹一付、殼斗科植物の害蟲蝨蛾二頭、繭一付、ひさかきの害蟲ホタル蛾二頭、同繭一付、桃の害蟲モヽスヾメ二頭、櫻の害蟲シリアゲケムシ蛾二頭、同蛹一付松の害蟲マツケムシ蛾二頭、同繭一付、同ヤドリバチ二頭、同繭二付、苧麻の害蟲フクラスヾメ二頭、桐の害蟲キリノハマキムシ蛾二頭、酸漿の害蟲ホホヅキシンクヒムシの蛾二頭、同幼蟲一付、稻の害蟲コナラハマキムシ蛾二頭、同蛹一付、同ヤドリバチ二頭柳の害蟲ヒメカレハテフ二。

第五函、桃及櫻の害蟲カレハテフ二頭、卵十、幼蟲一、繭一付、茶樹の害蟲チヤケムシ蛾二頭、竹の害蟲タケケムシ蛾三頭、同幼蟲一、蛹一、繭一付、苹樹害蟲トンボテフ二頭、幼蟲一、蛹一付、樟樹及肉桂の害蟲クスノキシヤクトリ蛾二頭、幼蟲一付、茶樹害蟲一チヤノハマキムシ蛾二頭、柿の樹害蟲キノカハテフ二頭、同幼蟲一、蛹繭二付、同ヤドリバチ一頭、桑の害蟲クハシヤクトリ蛾二頭。

第六函、梅及桃の害蟲ウメケムシ蛾二頭、同卵一、蛹一、繭一、同ヤドリハチ二頭、蓼藍の害蟲アイノズイムシ蛾二頭、同ヤドリバチ二頭、同繭一付、楊梅害蟲ヤマモヽホマキムシ蛾二頭、果樹害蟲イラムシ蛾二頭、蛹一、繭一、同ヤドリバイ二頭、梅の害蟲ウメシヤクトリ蛾二頭、蛹一、繭一、桑の害蟲エダシヤクトリ蛾二頭、卵十、幼蟲二、蛹二、繭一、蓼藍害蟲アイノアチムシ蛾二頭、桑の害蟲トゲシヤクトリ蛾二頭、同幼蟲一、繭一ヤドリバチ一、同繭一、桑の害蟲クハノスキムシ蛾二頭、同ヤドリバチ二頭、稻の害蟲二化ズイムシの蛾二頭、卵一、幼蟲一、同上タマゴバチ一、同ヤドリバチ二種三頭、桃實及柑橘害蟲モヽゴマダラ蛾二頭、幼蟲一付。

第七函、柑橘害蟲ホシカミキリ二頭、はんのき害蟲ハンノキカミキリ二頭、よなの害蟲ノコギリカミキリ二頭、葡萄ノ害蟲キンサルムシ二頭、養魚害蟲ガムシ二頭、養魚害蟲ゲンゴロー二頭、松樹害蟲リバタマムシ二頭、薊の害蟲アザミゾームシ二頭、柳の害蟲ウ

スバカミキリ二頭、樝の害蟲キマダラカミキリ二頭、同幼蟲一、大小豆害蟲マメハンメウ二頭、堆肥ノ害蟲サイカチムシ二頭、同幼蟲一付。

第八函、大豆害蟲マメコガネ二頭、樝の害蟲コフキコガネ二頭、樝及椎の害蟲カミカリムシ二頭、同幼蟲一付、大豆害蟲ヒメコガ子二頭、桑の害蟲クハカミキリ二頭、幼蟲一付、杉の害蟲スギカミキリ二頭、杉の害蟲四ボシスギカミキリ二頭、菊の害蟲キクス井二頭、桑の害蟲クハハムシ二頭、蓬の害蟲ヨモギハムシ二頭、茄子、馬鈴薯、酸漿の害蟲テントームシダマシ二頭、柳の害蟲ヤナギハムシ二頭、獨活害蟲ウドノゾームシ二頭、薔薇の害蟲ヒメクロオトシブミ二頭、蓼藍害蟲アイノサルゾームシ二頭、標本害蟲ヒヨーホンムシ二頭、小麥害蟲ケシコメツキ二頭、栗の害蟲オトシブミゾームシ二頭、桃實及梨實害蟲チヨツキリムシ二頭、鰹節害蟲カツヲブシムシ二頭、桑の害蟲ヒメゾームシ二頭、大豆害蟲コフキゾームシ二頭、松の害蟲マツゾームシ二頭、瓜類害蟲ウリハムシ二頭、柳の害蟲アオゾームシ二頭。

第九函、稻の害蟲ツマグロヨコバイ二頭、稻の害蟲オホヨコバイ二頭、禾本科植物害蟲アハフキヨコバイ二頭、薄の害蟲スヽキアハフキムシ二頭、稻の害蟲グンバイムシ二頭、あかめがしは害蟲ツマグロスケバ二頭、大豆害蟲アオクサガメ二頭、小豆害蟲アヅキガメ二頭、稻の害蟲ハリガメムシ二頭、大小豆害蟲サヽゲガメムシ二頭、稻の害蟲クモガメムシ二頭、煙草害蟲ゴマガメムシ二頭、茄子科植物害蟲ホーヅキガメムシ二頭、稻の害蟲マルガメムシ二頭、桑の害蟲アオバハゴロモヨコバイ二頭、薄の害蟲トビイロガメムシ二頭、大根害蟲ナガメ二頭、くさぎ害蟲アミガサハゴロモ二頭、樹根害蟲アブラゼミ二頭、水産害蟲タガメ二頭、同卵一付、桑の害蟲ベツコーハゴロモ二頭、樹根害蟲ツクツクボーシ二頭、樹根害蟲ニーニーゼミ二頭、水産害蟲コオヒムシ二頭、卵一付、水産害蟲マツモムシ二頭。

第十函、禾本科植物害蟲クサキリ二頭、苧麻害蟲オンブバツタ二頭、衛生害蟲ゴキブリ二頭、稻の害蟲イナゴ二頭、赤楊害蟲マルイナゴ二頭、大小豆害蟲エンマコーロギ二頭、禾本科植物害蟲クルマバツタ二頭、衛牛害蟲イヘバイ二頭、稻及麥害蟲カヤンボ二頭、松の害蟲マツノキイロハバチ二頭、同幼蟲一、同ヤドリバイ二頭、蛹二付、同ヤドリバチ二頭、蟷螂の害蟲カマキリタマゴバチ二頭、野蠶害蟲ヤマヽユヤドリバチ一。

以上の名稱を實物の頭上に附記するゝ當り、其害蟲に係る百二十四種ゝつきては、一見觀者をして、其加害を悟了せしむるため、悉く被害植物名を記入したり。

一、保存法　保存法としては、第一保存箱の製造法なり。先づ桐製の外箱を造り、其底部に二枚の疊表を入る。其疊表たる表裏より生漉の紙を以て張り、能く乾かして底に收め、其上を壓するため又箱の四週を二重になすために、底無しの內箱を容れて固着し、倘其內面より底部表面へかけ一枚の白紙を以

て張る時は、其疊の織目等現はれずして、大に美術的に出來上るなり。此底部に蟲体を刺し止め、名稱を附して、四週の溝中にナフタリンを多量に入れ置き、枠付のガラス蓋を以て密封し置く、これ予の保存法にして標本蟲及黴菌の害なし。

一、履歴　明治九年以來身は普通敎育の職にあれど、常に事業にあらざれば國は富まぬとの考より、明治十九年中、二宮尊德翁の遺訓に基き、報德の社を居村に結び、又帝國農家一致協會に加盟して、現に權講師の任にあり。明治三十年度の浮塵子大發生に憤慨して、三十一年より昆蟲の飼育調査を始め、郊野山林を跋渉して、採集につとめ、明治三十三年岐阜市名和昆蟲研究所にて、害蟲驅除の講習を受け三十四年夏期又同所にて、名和所長より親しく昆蟲學上の指導を受け、爾來今日に至るまで常に通信を以て疑義を質しつゝあり。明治三十三年以來、兒童を勸奬して、螟蟲、尺蠖、鳥蠋等の害蟲を捕獲せしめて農會の事業を助け、又三十五年度には螟蟲、浮塵子驅除の唱歌を作りて兒童に唱謠せしめたり。明治三十五年十月三日靜岡縣磐田郡物產品評會參考品中に昆蟲標本貳箱を出品したるに、其參考品たるにも掲はらず、山田本縣知事より特に褒狀を賜はる、其寫し左の如し。

褒狀

靜岡縣磐田郡岩田村　神村直三郎

昆蟲標本

右ハ昆蟲ノ變体順序ヲ明暸ニシ加フルニ其製作精巧有益ナル參考品ト認メ依テ特ニ褒狀ヲ授與ス

明治三十五年十月三日

靜岡縣知事正五位勳四等　山田春三

一、效用　今回出品したる害蟲標本の效用を云へば、昆蟲は他の動物と異にして、其變体著しきものあるを以て、一般農民は申すに及ばず、斯學研究者と雖も、其幼蟲成蟲の關係の如きは、往々にして誤ることなきにあらず、因て其有樣を洽く一見の下に悟了せしむる樣つとめたり。又次には害蟲の多種にして、吾人に害を與ふることも隨て多く其割合鱗翅目、鞘翅目、有吻目には殊に多種を占むることをも悟らしむる効あり。第三には寄生蟲ありて天然驅除をなしつゝあることを示し、結局多數の產卵にて繁殖夥しきが故に、驅除豫防の忽諸に附すべからざることを眼目となす。此効あるを以て、各級農會、農事試驗場、山林局等の參考品となし、又大小各種學校の敎授用標本となすに足れり。

一、審査請求主眼　一、種類の多數を收容したること。二、昆蟲の變体を現はしたること。三、飼育によりて、多數の寄生蟲を發見したること。四、採集羽化の年月日及採集地名を蟲体の裏面に明記した

ること。五、被害植物を明にしたること。六、保存箱の製造法に注意したること。

◎揖斐郡小學校昆蟲寫生畫展覽會と紀念品贈呈

岐阜縣揖斐郡昆蟲學會

去る十一月十五日、揖斐尋常高等小學校内に於て本會秋季總會を開き、併せて郡内小學校兒童の昆蟲寫生畫展覽會を催したりしが、出品点數五百十三点に達し、又參考品には谷汲村有志者の寫生畫、西郡村名和裁縫女學校より紙折細工、毛糸細工等、鶯尋常小學校よりは兒童の採集せし稻蟲を儀助煮、茶菓子等に製して出品し、觀覽者に味はしめ、名和昆蟲研究所よりは不破郡垂井小學校兒童の昆蟲寫生畫、愛知縣寶飯郡小學校兒童の寫生せし昆蟲畫及刺繡等を貸與せられ、又本會より全國昆蟲展覽會に出品して一等賞を得たる分類標本、二等賞を得たる害蟲標本、大阪府農會主催の病蟲害展覽會に出品して三等賞を得たる害蟲標本、博覽會に出品して二等賞及三等賞を得たる害蟲標本、昆蟲標本等を陳列したれば縱覽人員數千人に達し頗る盛況なりし。又其際、博覽會出品に當り特に盡力せられし小森省作氏に對し紀念品贈呈式を擧行したりき。今其紀念品に添附せし感謝狀を示せば左の如し。

明治三十二年本會創設以來、君熱心會運の振興を圖り、周密に研究して本會の事業を奨け、以て會の面目を保持するを得せしめられたり。

曩に本會、第一回全國昆蟲展覽會及第五回内國勸業博覽會出品の計畫を立つるや、常に君を推して調製の委員となす。君拮据勵精其囑托を全ふし、本會をして受賞の名譽を荷はしむ。之れ洵に君盡瘁の賜にして、本會の多とする處なり。

茲に本會は大理石製昆蟲彫刻置物一基を贈呈して、聊感謝の意を表せんとす。物素より薄けれども、情厚し、希くは君其意を諒し、永く紀念に存せられんことを。

明治三十六年十一月十五日

岐阜縣揖斐郡昆蟲學會々長　高橋俊益

昆蟲學會々員　小森省作殿

◎昆蟲に關する葉書通信（三十六報）

(三一九)二化性螟蟲刈株中にて越冬す(山口縣大島郡蒲野村、財滿字市)　本年本郡に於ける二化性螟蟲も所々に白穗を現出し、驅除せしも全滅せず、爲に翌年苗代に發生することならん。該蟲の藁稈中に

ありて越冬せることとは、世人の能く知る所あれども、尚外界の爲めに左右せらるゝか、刈株中にて越冬することと彼の三化性螟蟲の如し。然れども彼の如く其數多からず。余は本年此等に關し調査せしに、左の如き結果を得たりき。

種類	一坪株數	刈取期	一株本數	土際より刈取せしもの丶刈株中蟄伏蟲數	土際より約一寸以下高く距て丶刈取せし莖中	土際より約一寸以上高く距て丶刈取せし莖中
中稻金時	四十九株	十月廿五日	十六本	二十頭	十頭	二十一頭

備考、土際以上の一莖中には數頭の群棲をなせども、土際以下の刈株中には必らず一莖一頭の棲息を認む。然れども只一回調査のことなれば、尚研究を重ねて以て後日確報することあるべし。（十一月九日附）

●（二二〇）三備地方に於ける薄荷の螟蛉（廣島縣芦品郡岩谷村、橘高勉三）　薄荷の大害蟲なる螟蛉に就きては、本誌前號及前々號に、山田君及神村君の報告ありしが、今我が三備地方の狀況を述べんに、當地方は近年棉の癈作及藍作の減少と共に、薄荷の栽培非常に增加し、本年の如きは芦品郡のみにても作付反別四百十一町歩以上（芦品郡農會調査）の多きに達せり。然るに年々害蟲軍の爲めに被害を受くること少からず。之が主なるものは蚜蟲、葉蟲、根切蟲、螟蛉等なるが、殊に螟蛉は年々猖獗を極め、之が良法のなきを以て農家の苦慮すること一方ならず、本年の如きは三備地方至る所葉澁病と共に猖獗を極め、最も甚しき所にては全く莖ばかりとなり居る有樣なり。最も葉澁病豫防の爲めボルドー合劑を使用せしものには被害輕きが如し。而して玆に最も奇態なるは、此蟲には數種の寄生蜂あるも、其中の微細なる一種は、一頭に寄生する平均四千五百六十二とは、實に驚かざるを得ざるなり。是れ一頭の母蜂の產卵せしものなるが將た數頭の母蜂の產卵せしものなるかに就ては、昆蟲翁は數頭によりてなりと明言せられたるが、余も亦左の事項より考ふる時は、之に同意するものなり。

一、薄荷耕作地には無數の寄生蜂存し、之に觸るれば恰も米糖を散すが如し。

二、螟蛉の盛に食害しつゝあるものが、五分間に四五回も躰の上部を左右す。其度每に數頭の寄生蜂が蟲の躰上に居れり。

◉昆蟲文學

由來科學は無味乾燥に流れ易きを弊とす。科學と文學との調和は洵に現時の急務なる可し。吾人が大に昆蟲文學を鼓吹せんと欲する以所のもの又實に之が爲なり。

寒蝶　　牧野南山

欲隨風去力難支。空托衰殘菊一枝。憐汝孤栖多少恨。夢尋春塢舊胭脂。

魯岳曰。詠物者諸家所尤難。吾兄輕輕着筆能通其情。非老手不能也。

冬蟻　　皜堂逸士

夏月分曹聚餉資。冬時鳩首免寒飢。槐安國裏熙熙樂、荒政由來蟲蟻知。

寒蝶　　雄山魯岳

芳草落花何處求。烟霞一瞥恨悠悠。風前無力霜殘翅。飄挂蛛絲不自由。

南山曰。蝶兒之末路寫出巧妙。

冬の蟲　　本居五鈴

一葉すらのこらぬ枝にみのむしのゆふかせさむく冬こもりせり

蟻麿　　むしまろ

蝶いはく
咲く花の露のひぬ間の夢の世をいそしむ君が心おろさよ
蟻こたへて
冬の日のうゑだにあくば春はただ花のうてなに眠りてましを
かくて冬になりて
もの少したまへありまろありて世ははかなきものと蝶わびて來し

冬の蟲　　建部樟園

雪まじりみぞれ降る日をれさな子がしろこ追ひつつむれあそぶ見ゆ

昆蟲十句

冬の蠅

天井の蠅初冬となりにけり　　歸麓園
煤掃かぬ一茶が庵や冬の蠅　　冷石
冬の蠅軒ゞ干柿吊るしけり　　水村
穢多村に馬の皮干す冬の蠅　　轉々
乾鮭の切口赤かしふゆの蠅　　翠園
冬の蠅座蒲團干せば飛びゞけり　　去水
小春日の障子はたくや冬の蠅　　孤月
魚屋に並べし牡蠣や冬の蠅　　明笛子
煤掃ひ天井の蠅も掃ひけり　　友逸
冬の蠅刻む藥に日のあたる　　華園

◉新刊紹介　（一）東京早稻田中學校講師安藤伊三次郎氏は、此頃自然研究實驗野外敎授てふ一書を著はされたり。此書は小學兒童をして、自然界の現象を親しく觀察せしめ、如何に理科學の多趣味なるかを覺らしめて、不知不識の間に此の智識を了得せしめんが爲に著せしものにして、全篇を別ち、路傍の生活、河及池の生活、田野の生活、山中の生活の四章となし、鳥獸蟲魚草木の類にして苟も兒童の眼に觸れんとするものは、殆んど網羅して、種々の方面より問題を與へ、又は說明して容易に觀察せしめ得る樣記載え、而して其大半は昆蟲に屬せり。蓋え敎育者の座右に必ず供ふべき良書ならん。（二）滋賀縣農事試驗場は害蟲驅除要覽なる者を發行せり。書中重用作物害蟲二十三種の經過の狀態を示せる着色石版畵二十三葉を挿入し、最も簡明に經過習性、加害の狀況、驅除豫防法を記載したるものなり。從來害蟲驅除豫防法を記載せる書籍の世に乏しからざるも、實用上却て此等の書の勝れるを信ずるもの也

◉特別研究生証明書授與と貝殼蟲調査　當所特別研究生として入所したる岐阜縣武儀郡關警察署巡查部長笹島鏸治氏は、害蟲驅除豫防の件に付研究を了したるを以て、十一月廿六日午後七時、所長より研究証明書を授與せられたるが、當所に於て研究生として証明書を渡したるは氏が嚆矢なるを以て、所員及び講習生發起となり、送別の紀念として、可成多數の貝殼蟲の附着したる蜜柑、柿、梨、柚等の果物を市中より買集めて該蟲の種類調査をなし、其終へたる果實を茶菓に代用して送別の意を表し十二分の興味を以て午後十二時退散したるが、紀念調査の貝殼蟲の種類は左の如し。

梨（大垣町地方產）、二種中サンホゼー最も多し◎蜜柑（海津郡山崎產）、九種◎同（羽島郡正木村產）、七種◎同（大阪附近產の者）、十種◎柚（岐阜附近產）、一種◎柿（本巢郡西鄕村產）、三種　◎柿（武儀郡倉地村產）、二種。

而して蜜柑には八割以上貝殼蟲の附着し居らざるものなきも、柿には該蟲の被害尤も寡少なりき。

◉香川縣幷に京都府南桑田郡昆蟲學研究會規則　科學の進步に伴ひ昆蟲學の益々研究せざるべからざることを感ずるに至り、各地に研究會なるもの丶設けらる丶は、實に斯學の爲め慶すべきの至りなり。今又香川縣及び京都府南桑田郡の研究會規則を得たれば左に掲載すること丶なしぬ。

香川縣昆蟲學研究會々則　第一條、本會を香川縣昆蟲學研究會と稱す●第二條、本會事務所を假りに香川郡栗林村字上ノ村山口茂太郎方に置く●第三條、本會は昆蟲學に關する事項を研究し、農業上の裨益を計るを以て目的とす●第四條、本會々員を左の三種とす。一、名譽會員は學識經驗あるもの、二、特別會員は本會に功勞あるもの、三、正會員は本會の目的を贊し入會するもの●第五條

本會に左の役員を置く。會長一名、幹事若干名●第六條、會長は本會を總理し、幹事は諸般の會務を處理す●第七條、役員は總會に於て推撰し其任期は二ケ年とす●第八條、本會は本會の目的を達せんが爲め左の事項を行ふものとす。（イ）標本及圖譜の製作（ロ）害蟲の驅除豫防及益蟲保護繁殖法を講ずる事（ハ）標本圖畵等展覽會を開設する事（ニ）講話會をなす事（ホ）標本交換をなす事（ヘ）目的を同くする他の會と氣脈を通ずる事（ト）質問應答を爲す事（チ）會報を發刊する事（リ）前各項の外必要事項●第九條、本會は毎年春秋二回總集會を開く、但し必要の場合により臨時會を開くことあるべし●第十條、本會の經費は會費及寄附金を以て之に充つ●第十一條正會員は會費として一ヶ月金五錢毎月末に納付するものとす●第十二條、本會に入會せんとするものは左の入會申込書に記名捺印の上之を切り取り提出すべし（書式略）●第十三條、本會には支部を置くことあるべし。（木內久松氏報）

南桑田郡昆蟲研究會規則　第一條、本會は南桑田昆蟲研究會と稱す●第二條、本會は農業上害益蟲の性狀、驅除、豫防並保護法を研究し以て昆蟲思想の普通を圖るを以て目的とす。今其事業を示せば概ね左の如し。一、昆蟲に關する參考書及雜誌等を本會備品として購入し以て普く希望者に閱讀せしむる事。一、標本を製作し常に之を陳列し置き一般の觀覽に供すること。一、郡町村農會其他農業諸團体と氣脈を聯通し相互に利益の交換を圖ること。一、斯學に學識經驗ある名士を招聘し講話會開催する事。一、時々郡內を巡廻し害蟲發生の有無を調査し之が驅除豫防法を奬勵する事●第三條、本會は府縣農學校昆蟲講習所の終了者並郡村農會技術員を以て組織す●第四條、會員を分ちて名譽會員、贊成會員及通常會員の三種とす●第五條、名譽會員は本會に功勞あるもの、贊成會員は本會の主旨を贊成したるものを推薦し其他は通常會員とす●第六條、本會を整理するため左の役員を置く。會長一名、副會長一名、幹事一名●第七條、會長は會務を總理し、副會長は會長を補佐し、幹事は本會一切の事務を司るものとす●第八條、會長は郡農會長に副會長は同副會長に囑托し、幹事は通常會員の互選とす●第九條、役員の任期は一ヶ年とし改選期は毎年一月とす。但欠員あるときは臨時補欠選擧をなすことあるべし●第十條、本會は第二條の目的を達せん爲毎日一回便宜其時日を定め通常會を開會す。但臨時會は此限りにあらず●第十一條、本會場は當分本郡農會事務所を以て之に充つ。但し便宜上變更することあるべし●第十二條、會員は會費として一ヶ年金壹圓貳拾錢を左の二期に分ち幹事に納付すべし。第一期一月、第二期七月、但し會費處分法は別に之を定む●第十三條、必要ある場合は本會協議の上臨時費を徵收する事あるべし●第十四條、會費は總て通常會員之を負擔するものとす●第十五條、經費の決算は毎翌年一月通常會に於て報告するものとす●第十六條、本會の主旨を贊成し金員物品を寄送したるものは之を本會の事業に充つ●第十七條、本會へ入退會せんとするものは其旨會長へ申出で許可を受くべし●第十八條、會員にして本會則に違反し若くは履行する見込なきものは本會協議の上退會を命ずることあるべし●第十九條、本會を退會したるものに既納の會費を返付せず●第二十條、本會則は會員協議の上加除修正することあるべし。

◉昆蟲學講義錄の發行

久しく米國に於て昆蟲學を專攻せられし米國理學博士河內忠二郎氏は

本邦昆蟲學研究者の便を謀り、今回昆蟲學講義錄なるものを發行せらるゝ由、其聞く所に依れば、同氏は可及的多方面より精細に講述し、且成るべく通俗の語を用ひて學術上の難句の如きは、一篇毎に解釋して卷末に附し、初學者をして容易に了得せしめらるゝ樣記述せらると。從來世人が昆蟲學を研究せんとするも適當の書籍なく、空しく初學者をして失望せしめ、其方向に迷はしめたるもの、今や此の良書の發行あらんとす、是れ尚暗夜に燈光を得たるの思ひあらしめ、益々斯學界をして進運に向はしむるなるべし。

◉愛知縣額田郡昆蟲展覽會　額田郡教育會の主催に係る同郡昆蟲展覽會は、去七月上旬より採集に從事し、十一月二十八日より五日間岡崎町に於て開會せられたれば、當所長は出張して親しく視察せられ、尚同教育會に臨みて一場の講話を試みられたるが、其出品の重なるものは分類標本百九十四箱、蟲數四千七百五十一頭。害蟲標本百七十八箱、蟲數四千二百三十八頭。教育用標本五十九箱、蟲數千〇十四頭。合計四百三十一箱、蟲數一万三頭、種類八百八種にして、其他參考品として採取網、採集器、噴霧器、害蟲標本蟲類の繪畫等無慮數百点に達し、縱覽人は毎日非常の多數にて世人に益する所少なからざりしと云ふ。今其受賞者を擧ぐれば左の如し。(尋は尋常、高は高等、尋高は尋常高等小學校と知るべし)

分類標本　(壹等賞)連尺尋、福岡尋高、(貳等賞)岡崎高、岡崎尋高、豐岡尋、(三等賞)男川尋高、本宿尋、相見尋高、山中尋、東海高、下山尋高、(褒狀)夏山尋、大幡尋、坂崎尋、大雨河尋、片寄尋、岡崎高兒童、三島尋高、中山尋。

害益蟲標本　(壹等賞)岡崎高、豐岡尋、(貳等賞)本宿尋、男川尋高、東海高、東部高、福岡尋高、豐岡村農會、相見村農會、(參等賞)連尺尋、大幡尋、山中尋、投尋、下山尋高、大樹寺尋高、岡崎尋高、大雨河尋、夏山尋、(褒狀)大樹寺村農會、鳥川尋、美合村農會、岩津高、宮崎尋高、男川村農會、廣幡町農會。

教育用標本　(壹等賞)東海高、岡崎高、(貳等賞)東部高、連尺尋、(參等賞)荻谷尋、相見村農會、(褒狀)福岡尋高、男川尋高、生平尋高、大樹寺村農會、相見尋高。

◉岐阜縣果實蔬菜品評會と貝殼蟲　同會は本月一日より五日間岐阜縣物產館内に於て開催せられたるが、其出品種類は柑橘類、柿、梨子、栗　菜類、葱類、午蒡、蘿蔔、蕪菁　芋類、百合、漬物及鑵詰等最も多く、苹果、胡桃、榲桲、銀杏、桃、棗、慈姑　蓮根、山葵、蕃椒、大角豆、南瓜、胡瓜、茄子、獨活、菌類、胡蘿蔔、薤、蒜、菱、甘蔗、落花生　蕨、筍、天門冬、切干等にして、當昆蟲研究所よりも參考品として果實、蔬菜の害蟲五箱及貝殼蟲被害樹幷に被害果實數点、果樹蔬菜の害蟲圖

解等を出品し頗る盛會なりき。而して吾等昆蟲研究者に關係するものは、只當所の出品物のみなりし如しと雖も、其大に然らざるなり。即ち是等出品物と害蟲との關係を調査すれば、蔬菜類に於ては只僅に夜盜蟲、螟蛉、蚜蟲等の痕跡を存するものありたるも、そは極めて微々たるものにて先づ關せざる方なりしが、果實に於ては如何、特に柑橘類の如き二百三十餘点中、香柑にて一二点を除くの外皆貝殼蟲の附着せざるものなく、溫州蜜柑の如き、形狀品質大に見るべきものありと雖も之が被害の甚しき、豈慨嘆の至りならずや、余輩は之を見て、如何にしても果實品評會とは思はれず、寧ろ貝殼蟲標本展覽會の適當なるを信ぜり。如何に當業者が害蟲には頓着せざるとは云へ、果蠹蟲類が蠹入して其蟲糞の現はれたるが如きものは、如何に愚なりとは云へ出品するものなきも、斯く多數なる貝殼蟲の附着せるを顧ざるは、當業者が貝殼蟲なるものを知らず、寧ろ貝殼蟲の如き斑点の非らざるものは正當なる果實に非らざる如く思惟せるには非らずや、實に憐むべき至りなり。此の柑橘類に次で害の大なりしは梨子にして彼の有名なるサンホゼー種中々多く、次は柿にして被害最も少なかりしとはいへ、大に警醒せざるべからざるなり。

●聖路易萬國博覽會出品昆蟲標本　當昆蟲研究所より聖路易萬國博覽會へ昆蟲標本を出品することは、讀者の己に知らるゝ處なるが、右は害蟲發生經過標本二十函、天蛾類發生經過標本四函、瓢蟲標本一函、寄生蜂標本五函計三十函にして、目下調製を了したれば、近日該地へ向け發送することとなれり。

●特別研究所生の入所　本誌前號に於て、特別研究生の入所を許す旨を報導し置きしが、該規定により入所せしものは岐阜縣四名、香川縣一名、大阪府一名なり。

●岐阜縣昆蟲學會第六十回月次會記事　同會は本月五日午后一時より名和昆蟲研究所內に於て開會せしが、出席者五十餘名ありて頗る盛會なりき。今其講話の重なるものを擧ぐれば、例により副會頭名和靖氏の開會の辭に次で第一席松野春一氏は天の敎ふる所を味へと題し、害蟲の發生、年の豐凶は天の吾人を誨むるものなれば、常に之を鑑みて怠らざる樣すべしと廣く例を擧げて論じ、第二席近藤伊佑氏は果樹栽培と貝殼蟲に就て、果樹栽培の必要より栽培方法及其大害蟲たる貝殼蟲の驅除豫防法を說き、尙岐阜縣果實蔬菜品評會に於て調査せし貝殼蟲に就て報告し、第三席愛知縣の若林高久氏は氏が明治十二三年の頃北海道に於て四年間飛蝗驅除に從事せられし狀況より該蟲の習性經過等詳しく說

明せられ、第四席波磨賓太郎氏は先會よりの續きなるプレパラート製法に就き實驗の上說明せられたり時已に四時半なりしかば、更に七時半より夜會を開く事にして散會したりき。因に記す、當日は來會者に當所より聖路易萬國博覽會に出品すべき昆蟲標本を縱覽に供したり。

◉昆蟲水曜會記事

當研究所員の催に係る水曜昆蟲談話會は、前號報告後每水曜日午後七時より當所內に於て開會して、每週間に研究せし結果を報告するを例とせり、其談話の要項を一括すれば。

名和愛吉氏はクヌギカメムシの產卵、ツヤミノムシの潛伏に就て及クダマキダマシの卵塊調查等なりしが、クダマキダマシの卵は太さ七分內外の樹枝に、平均二寸七分强の長さに五十三粒を產付け、其內寄生蟲類の爲に三分位は倒され、殘り七分は計算上より言へば孵化する割合なる旨を實物に依りて說明し◉中井藤助氏は苞蟲と浮塵子及二三の昆蟲に就て等なりしが、氏の調查に依れば紋白蝶の幼蟲に寄生するキマユヤドリバチは、宿主の第四、第五、第六の關節氣門附近に穴を明け、一つの穴より數頭宛出で、其造繭數は大抵一頭の螟蛉に十六乃至四十七の間にありて、平均廿九强に當り居れる旨を述べらる◉大橋由太郎氏は蚜蟲驅除試驗に就て、煙草石鹼及水の溶液にて製した驅蟲劑に就き試驗したる結果を報告し◉小川謙司氏は稻の刈株中に潛伏する二化生螟蟲調查の結果百株中に最も多く伏在せしものは一株中に十二頭なりしが、向一層驚きしは僅か二三寸の莖中に四頭の螟蟲の潛伏し居りたりとて、實物及圖に依りて說明し且其驅除の方法をも詳細に陳述せらる◉所嘉吉氏は地蜂に就て調查を成して、働蜂、雄蜂、雌蜂の三種に別ちて巢の構造より順序を追て丁寧に說明し◉小森省作氏は栗の夜盜蟲の習性並に驅除法及ハサミムシ、カマキリに於ける內外の迷信等を話し◉小竹浩氏は蜂の翅脈に就て說明し◉石田和三郎氏は椎の實の中にある象鼻蟲の幼蟲に就て調查せし事項を報告し◉其他近藤伊佑氏の未來の害蟲、稻葉郡昆蟲の種類に就て◉森宗太郎氏の海津郡に於ける粟夜盜蟲の調查報告◉高橋喜男氏のウチスヾメの寄生蜂に就て◉土岐五郎氏の蟲採りの失敗◉西川砂氏の蠁蛆の話◉笹島德治氏の所感◉棚橋昇氏の昆蟲雌雄の區別（實物說明）等なりしが、例に依り所長は每會各自の談話に就きて有益なる講評を加へ、或は研究問題を出して所員一同を督勵せられたり。

◉昆蟲標本陳列館の參觀人員

去十一月中、當昆蟲研究所常設の昆蟲標本陳列館を參觀せし人員は、總計二千八百九十七人にして、其中最も多かりしは十二日に於ける三百九十六人、最も少なかりしは二十七日に於ける二十六にして、一日平均百三十一人强に當り、此の內實業家、學生最も多く、之に次ぐは各府縣の敎育者勸業視察員等なりき。

◉明年度の昆蟲世界

本誌の躰載記事の內容の如き、卷は一卷と改良し、號は一號と進めるは讀者の已に知らるゝ所なるが、明年度よりは一層之が注意を加へ、以て愛讀者諸君に酬ひんと玆に豫告す。

雑誌昆蟲世界合本出來廣告

○第十二號以下完備

本邦唯一の昆蟲雑誌

昆蟲世界合本

第六卷(昨年分)出來

西洋綴 金文字 入美裝

●昆蟲世界第二卷　五部(自第拾貳號 至第拾六號)
右は明治三十一年發行の分(但合本にあらず)

●昆蟲世界第三卷合本壹册(自第拾七號 至第貳拾八號)
右は明治三十二年發行の分(總目錄付)

●昆蟲世界第四卷合本壹册(自第貳拾九號 至第四拾號)
右は明治三十三年發行の分(總目錄付)

●昆蟲世界第五卷合本壹册(自第四拾壹號 至第五拾貳號)
右は明治三十四年發行の分(總目錄付)

●昆蟲世界第六卷合本壹册(自第五拾三號 至第六拾四號)
右は明治三十五年發行の分(總目錄付)

●昆蟲世界第七卷各本壹册(自第六拾五號 至第七拾六號)
右は明治三十六年發行の分(總目錄付)

(合本は毎册金壹圓貳拾錢、郵税金貳拾錢 其他は定價の通り)

右昆蟲世界の義は發刊以來、非常の高許を博し斯學研究上の寶典として又農事改良の先驅として歡迎せられしも、未だ之を合本とするに至らざりしに、今回讀者の勸告により毎一年分を裝釘して閲讀索引に便にせり、請ふ愛讀を玉へ。

岐阜市京町　**名和昆蟲研究所**

○謹告

名和先生御考案

●本邦六大島蝶圖　一葉(定價金拾五錢 郵税筒入六錢)

●昆蟲繪葉書　三葉一組(定價金五錢 郵税金貳錢)

●昆蟲採集用小札　五百枚(定價金拾五錢 郵税金貳錢)

●昆蟲名稱小札　五百枚(定價金拾錢 郵税金貳錢)

右者今般斯學研鑽家諸君の御便利を圖り名和昆蟲研究所の御檢閲を受け多數印刷仕り特別廉價を以て廣く同好の士に頒たんとす企くは陸續御注文あらんことを祈り奉り候

十二月

美濃國大垣町　**西濃印刷株式會社**　石版部

專賣特許第四九八六號　莖切器發賣廣告

定價一挺金拾錢…農會等の共同御用は特別割引

新發明莖切器の圖

製造發賣元　靜岡縣志太郡燒津町　吉野寅之助

縣下一手販賣所　岐阜市京町　高橋喜之助

昆蟲世界第七卷 自第六拾五號至第七拾六號 總目錄

◎口絵

◎論說

◎學說

◉講　話

◉訪　問

◉雜　錄

◎通　信

◎問答

◎雜報

◎昆蟲世界新年附錄

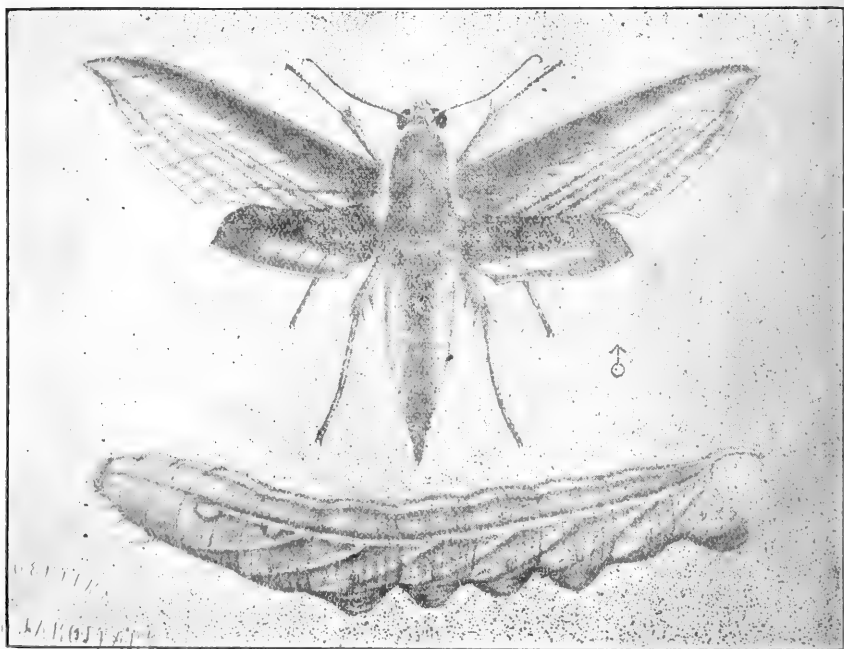
Chaerocampa nessus Drury. (Suzume-ga)

By K. Nagano.

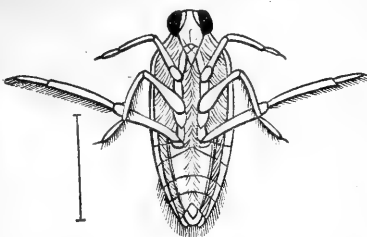
Forewings yellowish-brown; costal area dark-green; base black and whitish; a black discal dot; many purplish-brown striae from dorsum to apex; submarginal waved line purplish-brown. Hindwings black, dark-green towards outer-margin; ochreous subterminal fascia. Expanse 83-100mm. Head and thorax olive-green, suffused with ochreous-brown, with whitish grey border; abdomen orange-yellow; dorsal fascia olive-green; lateral stripes pale green.

Kiusiu, Shikoku, Honsiu. 6, 7, 8, 9. Larva whitish-green (turning brownish or reddish previous to pupation); two dorsal lines white; laterallines white; on 4-11 segments a series of oblique lateral white stripes; on 4-5 segments white spots; horn ochreous: on Dioscorea japonica, D. tokoro, etc.; 7, 8, 9, 10.

昆蟲世界

（明治三十六年十二月十五日發行）　第七卷第七拾六號　（毎月一回十五日發行）

第一回詩歌俳句懸賞募集（明治卅七年一月發行本誌掲載分）

課題▲詩歌は當季昆蟲亂題▲俳句は松藻蟲

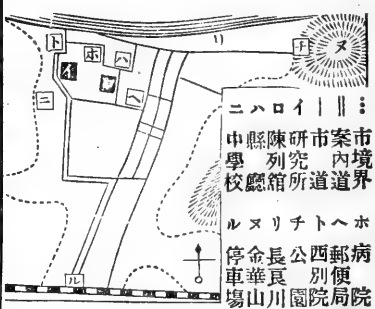
注意▲從來昆蟲を吟詠したる詩歌俳句にして之を昆蟲學上より見れば大ひに誤れる處あり而かも高調として刪々世に稱せらるゝもの是れなしとせず斯の如きは確に詩歌俳人の頭に昆蟲學の知識なきが爲めに外ならずして吾人の深く遺憾とする處なり投稿者諸君は大ひに此点に注意し昆蟲に關する詩歌俳句を作するに方り先づ一通り該昆蟲に對して眞面目なる研究を力されん事を望む▲吾人が俳句の課題として破天荒なる松藻蟲を出したるもの又實に之が爲なりみに投稿者諸君の利便を計り松藻蟲に關して聊さか説明する處あるべし

松藻蟲▲松藻蟲は松藻蟲科に屬するものにして躰長四分五厘内外体の背面は船底形に隆起し水中を倒歩するに適す頭部は灰黄色にして左右に大なる複眼を有し前胸灰黄色を帶び中後胸部及び腹部は黑色を呈す前翅は扇狀をなし翅底に沿ふて黄色部あり後翅は殆んど三角形をなし膜質にして見様により淡き藤色を呈す前翅短く後翅は長くして其脛節及跗節の内方には軟毛を密生す水中にあるや常に腹面を上にして游泳す其狀バッテラを漕ぐに似たるを以てバッテラムシの稱あり（上圖參照）

松藻蟲水面に浮びたる圖

懸賞品▲詩歌は當選掲載の分へ該詩歌掲載本誌一部を呈す▲俳句は天本誌六個月分地本誌三個月分人該句掲載本誌一部を進呈す

規定▲投稿〆切期限は明治三十七年一月三日までとす▲用紙は端書に限る▲各種何咏吟を投ずるも可なり▲住所姓名を明記せざるものは懸賞無効とす▲屆先は岐阜市京町名和昆蟲研究所宛

◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

第六十一回月次會（明治三十七年一月二日午后正一時開會）

明治三十年九月十日内務省許可

市境界 ⋮
案内道 ‖
市道 ｜
研究所 イ
陳列館 ロ
縣廳 ハ
中學校 ニ
病院 ホ
郵便局 ヘ
西別院 ト
公園 チ
長良川 リ
金華山 ヌ
停車場 ル

◉名和昆蟲研究所案内

當昆蟲研究所の位置は上圖の如くにて停車場よりは僅に十餘町養蟲室あり又新築の岐阜縣物產館構内には常設の昆蟲標本陳列館（五間に十六間）ありて標本器具數千点を陳列す有志諸君の來訪を俟つ

岐阜縣岐阜市京町
名和昆蟲研究所

◉本誌定價並廣告料

壹部　郵稅共　金拾錢
壹年分拾貳部郵稅共　金壹圓八錢
〔見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す〕

（注意）本誌は總て前金に非れば發送せず◉爲替拂渡局は岐阜郵便局◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす

廣告料　五號活字二十二字詰一行に付金拾貳錢
三十行以上一行に付き金拾錢とす

明治三十六年十二月十五日印刷並發行
岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二
（岐阜縣岐阜市京町）

發行所　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市今泉九百三番戸ノ二
發行者　名和梅吉
同縣揖斐郡鶯村大字公郷三番戸
編輯者　小森省作
同縣安八郡大垣町字郭四十五番地ノ二
印刷者　河田貞次郎

（大垣　西濃印刷株式會社）